
双子兄妹の怠惰な悪魔学園記

黒雨みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子兄妹の怠惰な悪魔学園記

【Nコード】

N5484W

【作者名】

黒雨みつき

【あらすじ】

現代っぽい架空世界の高校とその周辺を舞台に、炎を産み出す特殊能力をもった怠惰な突っ込み体質たまにボケの兄“優希”と、天然で人気者の妹“雪”が、友人たちとダラダラ登校したり遊んだり恋愛な青春をしたり、ときおり事件に巻き込まれて戦つたりもする、高校生の日常＋異能バトルな学園ファンタジーです。 個人サイトとの重複投稿になります。 12/6【悪魔養成学園】からタイトル変更しています。理由は活動報告に記載してます。

1年目4月その1

ハアッ、ハアッ。

獲物のあげるその息づかい。

逃げても無駄さ。

必死の表情。

絶望に満ちた瞳。

そして無駄だとも気付かずに懸命に逃れようとするその姿。

そのすべてが俺を高揚させる。

ハアッ、ハアッ。

呼吸が乱れるのが手に取るようにわかる。獲物はまもなく限界を迎えるだろう。

すぐに殺すようなことはしない。こうして逃がしておいて、徐々に追いつめていく。それが、俺自身の心を一番満足させられる方法なのだ。

無駄だよ、無駄。

口元が自然と歪む。

逃げることなどできるはずがないのだ。

何故なら。

そう。何故なら俺は、人間を超越した存在なのだから

ハアッ、ハアッ。

獲物の足がもつれる。掠れた声で助けを呼んだ。が、無駄だ。今は真夜中。そしてここは夜になるとまるで人気のない工業地帯。絶望に満ちた弱々しい声など誰の耳にも届きはしない。

いや、仮に届いたとしても

さらに高揚する。

獲物が増えるだけのこと。

さて、そろそろ。

獲物の体力が尽きてきたのを感じた俺は、獲物の背中に向かって手を伸ばした。距離はまだ十メートル以上ある。が、俺にとっては十分だった。

伸ばした俺の手の先に炎がともる。

そう。これが俺の力。

手に入れた、俺の力。

この力があれば

異変に気付いた男が振り返る。そして俺の姿を見て、再び悲鳴を上げた。

死ね。

そうして俺がその炎の固まりを放とうとした、その瞬間。

「……？」

俺は立ち止まった。

人気のないはずの路地から何者かが俺と獲物の間に割り込んだのだ。

「……やめなさい」

女だった。いや、少女、というべきだろうか。

悲鳴を上げ、獲物が走り去っていく。

邪魔をしやがって

俺はその少女を睨み付けた。

“遊び”を邪魔されたのはこれが初めてのことだった。

怒りが体の奥からこみ上げてくる。

そして、すぐに俺は思いついた。

代わりにこの女を獲物にすればいい。

そう決めた俺は、目の前に立ちふさがる女に手を向ける。
その手に炎が灯る。
と。

「炎魔だね。三人も殺すなんて」
女の髪が風もないのにふわっとなびいた。
俺は不思議に思ったが、それで躊躇するようなことはなかった。

死ね。

俺の手から炎の固まりが放たれる。邪魔をした女だ。手加減など
せずに、一瞬で焼き殺してやろうと思った。
ゴオッ！！

当たり前のことながら女は俺の炎を避けることもできず、一瞬に
してその全身が炎に包まれた。
それで終わり。
あっけないものだ。

そのはずだった。

だが、俺はすぐに異変に気付いた。

「!?」
あれだけの炎に焼かれているにも関わらず。
女の影は最初と同じようにその場に立っていたのだ。
炎に包まれたまま。
炎を身に纏ったまま。

「……許さないよ」
「！」

炎の固まりの中からそんな声が聞こえたかと思うと、少女の身を包んだ炎が突然大きく膨れ上がった。いや、炎が膨れ上がったのではない。その炎の中から何か吹き出してきたのだ。

その“何か”は女の周りを覆っていた炎をいとも簡単に掻き消し、さらに俺の周囲を吹き抜けていった。

「っ！」

身を切るような痛みに辺りを見回すと

「な……！？」

道路、塀、電柱　その全てが月の光を反射してきらきらと輝いていた。

凍っていたのだ。

俺は女を見る。

そして、再び驚いた。

そこに立っていたのは確かにさっきの女だった。

いや、“かろうじて”さっきの女だということがわかった。

だが、明らかにさっきまでとは違う部分がある。

「一度、血の衝動に駆られた人間は元には戻らない」

夜闇に舞う、銀色の髪。

「普通の人なら抑えられる衝動。でもあなたにはそれができなかった」

長く尖った耳。

そして

ぞく、と。

背筋に冷たいものが走った。

冷たい　目。

そして俺は直感的に悟った。

こいつは俺と同じ　いや、俺よりも上の存在だ、と。

俺は確かに人間離れした力を持つてはいるが、姿形は人間と何ら変わるところはない。

しかし、目の前にいるこの女は違う。

人間が持つていてはいけない、そんな雰囲気　それは、そう、
まるで。

“悪魔”

「あなたが悪魔の血を引いているのは少しの運のなさ。だけど、簡単に抑えられるはずの衝動を抑えられなかったのはあなたの罪。だから」

女が何を言っているのか俺には理解できなかった。だが、体はすでに、へびに睨まれたカエルのように動かなくなっている。

「……ごめんね」

俺がこの世で最後に耳にした言葉は何故か少しだけ悲しげで

次の瞬間、俺の体を痛みも感じないほどの極寒の冷気が包み込み、そして、次に何かが砕け散る音がして、俺の意識はそこで途切れた。

- - -

水色のカーテンから微かに差し込む朝の陽。暖かな春の日差し。

昨日まで微睡みの中で心地よく感じていたその光も、今日は僅かに鬱陶しい。

何故かって？

その理由はおそらく、学校に通ったことのあるものならば誰でもわかってもらえるだろう。

四月十六日。

春休みは前日ですいに終わりを告げ、今日から学校が始まってしまったのである。

(うえ、ねむー……)

俺は右手の甲を額に当て、寝起きのボーツとした頭で天井を見上げた。春休み、思いつきりたるんだ生活を送ったせいだろうか。七時半になっても頭が覚醒しない。それどころか油断すると再び夢の世界に引きずりこまれそうになる。

この誘惑を打ち砕くのは非常に困難だった。

(おやすみー……)

そうして俺の心が“学校<睡眠”に大きく傾き始めたときだった。
「優希！」

そんな怒鳴り声とともに、部屋のドアが蹴り破るようになられた。
「これで何回目！？ 時間だつて言ってるのが聞こえないの！？」
そう言いながらズカズカと部屋に入り込んできたのはお袋……ではなく、一人の少女だった。少女はそのままベッドまでやってくると、俺がかぶっていた布団を力ずくではぎ取るうとする。

(時間……?)

布団をはぎ取られまいと無駄な抵抗を続けながら、俺はようやくゴーカート程度の速さで回転し始めた頭で記憶を辿ってみる。

「そう言えば夢の中で誰かが」

「夢じゃない！」

俺と少女の間で繰り広げられた布団綱引きは、僅か十秒ほどで少女のほうに軍配が上がることとなった。

「うっ……さむ……」

春とはいえ、朝晩の空気はまだ冷たい。体を丸めて熱を逃がさないよう努力してみたが、どうやら無駄な抵抗のようだった。

「まったく世話の焼ける」

少女は呆れた声で腰に手を当てた。

ここまでされてしまつては仕方ない。

「ふあ……ふわあ あ」

アクビを交えながらゆっくりと上体を起こす。少女はその間にサツとカーテンを開けた。

眩しい。

一通り部屋を見回した。

飾り気の無い部屋。二年前に買ったミニコンポ。壁にかけられた制服。

そして

腰に手を当てた少女に視線が止まる。

「なによ？」

少女は俺の視線に気付いて怪訝そうな顔をした。

「お前……」

ポーンと半開きの眼で少女を見つめる。

「誰だっけ？」

ゴスッ！

「~~~~~！！」

悶絶。

「寝ぼけるのもいい加減にしなさい！」

みぞおちを襲った少女の蹴りに、俺はベッドの上でうずくまっていた。そんな俺を見下ろし、ふん、と鼻を鳴らしてその凶暴な少女が部屋を出て行く。

(瑞希のやつ~~~~~！)

俺は少女 瑞希の背中を恨めしそうに睨みつけた。

ボタン、とドアが閉まる。

あの乱暴極まりないおてんば娘は と、その前に、まずは自分のことを話そう。

俺の名前は不知火優希^{（おしほゆうき）}。十五歳で、この春に高校に進学したばかりだ。名前だけだとよく勘違いされるのだが、れっきとした男である。

で、さつき凶暴な少女が牧原瑞希^{（まきわらみずき）}という。俺の従姉。従姉、といっても同学年なのだが、誕生日がちょっと早い（俺が十二月、あいつが七月）ためか、いつも年上面をしてて口うるさい。いわば目の上のたんこぶ的存在である。当然のごとく喧嘩が絶えないわけなの

だが、天は二物を与えずとは誰が言ったものか。その格言をあざ笑うかのごとく彼女には二物どころか三物も四物も与えられているらしく、瑞希は喧嘩がめっぼう強い上に学業の成績も良く、さらには百七センチ以上のスラリとした長身で、憎らしいことにかなりの美人だ。

口喧嘩どころか殴り合いの喧嘩でも勝てないのである。

……情けない。

「おはよう、優ちゃん」

階段を下りて居間に入ると、テーブルに座っていた少女が声をかけてくる。

「ああ」

「寝癖ついてるよ」

そう言っつて微笑むのは俺の妹、不知火雪だ。こっちは瑞希と違ってそこそこ可愛げがある。ちなみに歳は同じ。誕生日も同じ。……

つまりは双子だ。

「寝癖？ どこだ？」

雪は椅子から立ち上がって近づいてくると、

「JJJ」

と、俺の頭の後ろを押さえる。

「お、本当だ。サンキュ」

すぐに洗面所に走った。

「やっと起きてきたのね」

その途中で瑞希とすれ違う。彼女はすでに学校へ行く準備が整っているらしく、片手に鞆を持っていた。

俺はその言葉を見無視して洗面所に向かう。いちいち反応をしていては、いくら時間があっても足りない。

(どうせ喧嘩になるしな)

俺は洗面所で手ぬぐいをお湯に浸すと、軽く絞って寝癖の部分に当てる。

しばらくこうしていれば何とかなるだろう。

俺はそのままの格好で居間に戻った。

テーブルの上にはちゃんと俺の分のご飯が用意されて
いなか
った。

「俺のメシは？」

すると瑞希が、何を言ってるの、とでもいうような顔をして、

「自分で用意しなさいよ。私たちもう時間ないもの。行きましょ、
雪ちゃん」

「うん」

瑞希にうながされ、雪は無情にもそう言って立ち上がる。よくよく見ると、雪のヤツの登校準備も完了していた。

「お前ら、俺を見捨てるつもりか!？」

俺がそう言っていると、雪はクスツと笑って

「大袈裟だよ。それに優ちゃん、いつも朝ご飯食べてないじゃない」

「それは休み中の話だろ！ 学校行くのに朝飯食わないと午前中に熟睡できなくなるじゃないか！」

俺がそう抗議すると、瑞希が冷たい目で俺を見て、

「雪ちゃん。そんな馬鹿にかまってたら遅刻しちゃうわよ」

「このアマ……」

俺は瑞希を睨み付けるが、彼女は全く気にした様子もない。

いや、まあ今の俺のセリフは自分でも言ってる“アレ”だとは思ったが。

「馬鹿は言い過ぎだよ、瑞希ちゃん」

雪はそう言って苦笑する。

(“言い過ぎ”じゃなくて否定してくれ……)

フォローだかなんだかよくわからない妹の言葉に、俺は反論する
気も失せてしまった。

さて。

さっきも言ったように俺たちは昨日まで春休み、今日から学校、

さらに高校一年ということは、つまり今日が入学式である。

ちなみに雪と瑞希が通うのは“桜花女子学園”という名前の女子高で、もちろん俺とは別の学校だ。俺の通う“風見学園”は“桜花女子学園”よりは家に近く、だから彼女たちが出る時間になっても俺は多少のんびりとしていられるわけである。

二人が出て行くと、家の中はとたんに静まり返った。

この家の住人は俺たち三人だけなのだ。いや、本当は俺と雪の二人暮らしだったのだが、瑞希の両親が突然、仕事の関係でこの町を離れることになり“桜花女子学園”に通うことが決まっていた瑞希が、春休みからこの家で暮らし始めたのである。

瑞希の両親、つまり俺の伯父伯母夫婦には小さい頃から世話になっていた。俺と雪が二歳で孤児になるとしばらくは彼らの家で育てられ、この家で暮らすようになってからも中学に上がるまでは毎日叔母がこの家に通って面倒を見てくれた。

そんな事情もあって、俺としてもその娘である瑞希がこの家で暮らすことを快く了承したわけであるが……

「……それにしだって態度デカすぎだろ!？」

「うーん」

通学途中、愚痴をこぼす俺の隣で苦笑をしている、眼鏡をかけたちょっと中性的な背の小さい少年は、その名を神薙直斗かななぎなおとという。

そして、直斗を挟んだ向こう側で、話を聞きながら黙って微笑んでいるポニーテールの少女が水月由香みなづきゆか。

どちらも小学校からの俺の友人で、俗に言う“幼なじみ”というやつである。

「それってさ、結局、優希が悪いんじゃないの?」

直斗が首をかしげながら言う。

「だって、寝坊したのは優希でしょ?」

「う」

たじろぐ俺を見て、由香がクスクスと笑う。

俺は恨めしそうに、

「由香。お前まで俺の敵になる気が」

「あつ……ごめんなさい」

別に本気で怒っているわけでもないのに、慌てて謝る由香。

直斗と由香。

二人ともどちらかと言えば真面目で大人しいと表現できる性格だが、この二人を並べて比べてみるとだいぶ性格が違う。直斗の方は物腰が穏やかというだけの話で、その穏やかな口調で結構鋭い突っ込みを入れてきたり毒を吐いたりするのだが、由香の方は実際になり控えめな性格だ。反射的に口をつく『ごめんなさい』が口癖だというのだから、だいたい想像がつかだろう。

そうして改めて考えてみると、俺を含めて性格的にはあまり共通点のない三人なのである。

「でも良かったね。今年は三人とも同じクラスで」

と、直斗が言う。

そう。つい先日のクラス発表で、俺と直斗と由香はそろって一組。三人とも同じクラスになるのは小学五年生のとき以来だった。

「ああ。これで宿題もやらずに済むな」

「どつという意味？」

わかっていながら直斗はそう聞いてくる。

「お前らの写せるだろ」

「優希君……」

由香が困った顔をした。

「よく言うよ。僕らがいなくても他の人のを写すくせに」

直斗が的確な突っ込みをいれてくる。

「甘いな、直斗。他の奴らだとあとで礼をしなくちゃならないだろ」

「僕らだつたらいいのかい？」

呆れた顔をする直斗。

「でも……駄目だよ、優希くん。やっぱり自分の力でやらないと」

と、由香。こいつらしい生真面目な発言だが、いざ見せてくれと言つと困った顔をしながらも見せてくれる便利な もとい、イイ

ヤツである。

「できるだけ自分でやって、それでわからないところがあつたら私たちと一緒に考えて……」

「それは無理だ」

「どうして？」

「何がわからないのかわからないからな」

「……はあ」

二人が同時にため息を吐いた。

この風見学園はいわゆる中高一貫教育校で、俺や直斗、由香もみんなこの中等部から上がってきている。そうなると当然のごとく顔見知りも多いわけで、高校に進学したという雰囲気は全くない。

入学式が終わって教室に入ってから、教室内はワイワイガヤガヤとうるさく

「よっ、優希！」

そんな中、机に突っ伏して睡眠体勢に入っていた俺の席までやってきた人物が一名。

「将太か……」

俺は軽く顔を上げてその男を見る。

この、見た目からしていかにも馴れ馴れしそうな男は藤井将太。ふじいしやうた
中等部からの友人だ。

「今日も由香ちゃんと一緒に登校かい？ 相変わらず仲の良いことだねえ」

からかうような将太の口調に、俺はやれやれと首を振ると、

「お前さ、直斗のところでも同じこと言っただけだったか？」

「……うっ」

カマをかけただけなのだが、どうやら凶星だったようだ。

ご覧のとおり、なかなか単純ややつで、こいつの前になると、俺ですら頭が良くなったような気がしてしまうのだから不思議なも

のである。

ちなみに今の少しのやり取りからも推測できるかもしれないが、将太はいわゆる噂、ゴシップ好きな人間だ。いつもメモ帳を持ち歩いてて、それに色々な噂を書き付けては周囲に広めている。それだけならまだ可愛気がある（そうか？）のだが、こいつの場合は、小さなことを勝手に脚色してデマを流してしまうというとてもなく迷惑なクセもある。

例えばさっきの質問。俺があそこで何も考えずに“ああ”とでも答えようものなら、明日には俺と由香が付き合っているとかがいう噂が学校中に流れていておかしくない、そういうヤツなのだ。

ここで厄介なのは、将太から直接吹き込まれた奴は“またか”という程度で、それほどその話を信じたりはしないのだが、どんどん伝わっていく間に、いかにも真実っぽくなってしまふところである。「いいか、将太。俺は直斗と由香と“三人”で学校に来たんだからな」

三人、というところを強調する。

実際、いかにもそういう関係を勘違いされそうな俺たちが誤解を受けずにいるのは、常に三人が一緒にいるからなのである。これで俺が直斗のどちらか片方がいなければ、事実がどうであれ“学園公認カップル”が一組誕生していることだろう。

ちなみに、昔はこれに妹の雪が加わって四人組だった。

俺が何かやらかそうとすると、雪と直斗が止めて、由香がオロオロする。

そんな光景を何度となく繰り返してきたものだ。

「ちえっ。お前らなかなかボ口を出さないなあ」

「誰が好きこのんでお前のデマ話のネタになつたりするもんか」

まあ、ネタというだけならすでにばらまいてしまっているような気もするが、芽吹いたりさえしなければいいのだ。

「しょうがない。一番素直な由香ちゃんに聞いてくるとするか」
そう言い残して将太は去っていく。

(無駄なことを)

どうせ由香のことだから『え？ え？』とか言いながら戸惑って終了だろう。だいたい素直な人間だというならあり得ない事実を口にするはずもない。その時点で将太の人選は誤っている。

そうこうしているうちにホームルームが始まった。

「えー」

教室に入ってきたのは退職間近、というような五十年代後半の先生だった。背は低く、頭もかなり禿げ上がっている。

で、なんだかんだ言っても高等部初日。クラス中の誰もが多少緊張しながら先生の次の言葉を待っていたのだが

「帰っていいぞ」

「え？」

俺は思わずそう呟いた。当然のごとく、教室内にも啞然とした空気が流れる。

「ん？ 帰りたくないのか？」

そう言いながらすでに帰りかけていた担任は教室内の啞然とした空気を感じ取ってか足を止め、不思議そうな顔をしてから、

「ああ、私の名前は岩上だ。担当は国語。お前から自己紹介とかめんどいだろ？ 俺もめんどい。だから帰っていいぞ」

それだけを言っ、岩上先生は本当に教室から出て行ってしまった。

「……」

しーん、とした空気が教室を包んだのも束の間、すぐにワッとざわめきだす。

「変わった先生だね」

そう言いながら俺の席までやってきたのは由香だ。

「そうだな」

俺が気のない返事をする、由香は少し遠慮がちに、

「帰る？」

「ん？ まあ、ここにいっても仕方ないしな」

「じゃあ、一緒に帰る?」

由香がそう言ってニッコリ微笑む。

「直斗は?」

「え?」

由香が不思議そうな顔をして、教室内を見渡す。

当然のことながら、すでに帰り始めている連中もたくさんいて、教室内の人数はかなり少なくなっていた。

「いないみたいだね。どこ行っただら?」

由香が首をかしげる。

「ちえっ、直斗の奴」

「あつ、優希君、どこ行くの?」

教室を出ようとした俺を見て、由香が声をあげる。

「俺、直斗の奴に用があるからよ。先に帰っててくれ」

俺はそう言くと、由香を残して教室を飛び出した。

(……ふう)

ある程度走ってから俺は立ち止まって息を吐く。

(初日から話のネタになるのはまずいだろ……)

エスカレーター式とはいえ、高等部からこの学園に来た連中もいる。それにさつき、将太相手にあんなやりとりをしたばかりで、いきなり墓穴を掘るのは勘弁だ。周りが皆、将太みたいなヤツばかりではないが、敢えて地雷を踏みに行く必要もないだろう。

(やれやれ)

もちろん、直斗に用があるというのも嘘だったが、どうせやることもないので本当に探すことにする。

こここの中等部から上がってきた俺には、高等部側の校舎の構造もだいたいわかっていた。

(直斗が行きそうなところねえ)

幼なじみでもテレパシーが使えるわけではない。他の教室に行ってるわけではないから、とりあえずその辺をぶらぶらしていれば見つかるだろうと軽く考える。

(高校か……)

中で仕切られているとはいえ、基本的には中等部と同じ校舎、顔ぶれもほとんど変わらないのは高校に進学したという実感がいまいち薄い。しかも、エスカレーター式にあがってきたから、受験でそれほど苦労したわけでもない。

(なんだかなあ)

特別変化を望んでいるわけではないが、このままいつもと変わらない日が続くのもつまらないな、と、そんなことを考えて歩いていくと、

(ん?)

視界に見慣れた姿が映る。直斗の後ろ姿だ。

「おい、なお」

呼びかけようとして、止まる。

直斗の隣に人影があつた

女生徒。当然だがこの学校の制服だ。

珍しい光景だった。

まあ、あいつが陰で女子に絶大な人気があることも知っているが、本人は由香以外の女生徒と話すことはあまりない。

(ふむ……)

どうしようか考えてると、直斗はその女生徒とあっさりと別れて、

「あれ? どうしたの、優希?」

俺の方に向かって歩いてきた。

女生徒は反対側に去って行ってしまい、誰かはわからなかった。

「ん? いや、お前と一緒に帰ろうかと思つてな」

俺はそう言うと、直斗は目を大きく見開いて、

「珍しいね、優希がそんなこと言うなんて」

「そうか?」

「うん。……あ、もしかして」

「ん?」

「由香と二人だけで帰るのが嫌だった?」

凶星だが、肯定するのも悔しかったので黙っていた。

(うーむ)

幼なじみというのはこういうものなのだろうか？ まるでこちらの心を見透かしたかのような発言、行動が非常に多い。

とはいえ、俺はこいつらの心はあまり読めてないのである。

(こいつだけの特権なのか？)

だとすると、世の中というのはなんて不公平なのだろう。

「あれ？ 鞆は？」

玄関に向かって歩いてしていると、直斗が俺の手元を見てそう聞いてくる。

「……忘れてた」

「優希」

「取ってくる」

呆れられる前に素早く踵を返し、慌てて教室に向かう。階段を二段とばして駆け上がり(一年生の教室は二階だ)教室に戻った。

すると、

「あ、優希君」

先に帰れと言ったにもかかわらず、教室にはまだ由香の姿があった。

「お前、何やってるんだ？」

俺が教室を出ていったときと全く同じ場所に立ったままだった。

「うん、鞆持っていかなかったから、また戻ってくるかなと思って由香はそう言いながら、机の上に置いたままの俺の鞆を差し出してくる。」

「待ってたのか？」

「うん。直斗君と三人で帰る？」

そう言ってニツコリと笑う。

「暇な奴だなあ、お前」

とまあ、そんなわけで、結局はいつも通り三人で帰路につくことになったのだった。

ちなみに俺たち三人の家はみな近く、全部の家を順番に回ってもせいぜい十分程度しかかからない。昔は何かイベントがあると誰かの家に集まって騒いだものだが、最近は勉強や部活なども忙しくてそんなこともあまりしなくなった。

とはいえ。まあこの歳までこうして三人仲良くやってこれていること自体、珍しいことだと思う。全員男同士とか全員女同士というならともかく、こうして男女が混ざり合っているグループならば、思春期を迎える中学辺りで疎遠になるのが普通だろうから。

(まあ、俺と雪の奴が兄妹だったのも大きいか)

ほんの一時期、やはり周りの目が気になって、あまり話したりしなくなつた時期があつたものの、俺と直斗、雪と由香はそれまでと変わらずに付き合っており、兄妹である俺と雪の関係はどうやったって切れるものではないから、結局、すぐにもとのさやに戻つたのである。

もちろん、その他にも性格的に相性が良かった(?)というものもあつたのだろうが。

「あら、遅刻しなかつたの」

「しねーよ」

「なんだ。あんたって万年遅刻してるのかと思つてた」

「んなわけねーだろ……」

夕食の席でさっそく俺に喧嘩を売ってきてるのは、もちろん瑞希の奴である。

「直ちゃんと由香ちゃんが迎えに来るから大丈夫だよね」

喧嘩が始まる前に、雪がさりげなく間に入ってきた。

「直ちゃんと由香ちゃん？」

瑞希が首をかしげる。

そういや、瑞希がここに来たのは春休みだ。もちろんそれまでも遊びに来たことは何度もあるのだが、直斗や由香と鉢合わせたことはなかったかもしれない。

雪は頷いて、

「優ちゃんの幼なじみなの。あ、私の幼なじみでもあるよ」

「ふーん……」

瑞希は少し興味深げな顔をする。

「雪ちゃんはともかく、優希にそんな付き合いの長い友達がいるなんて驚きだわ」

「おい。喧嘩売ってんのか」

どうしてこいつはこう、俺の気に障ることしか言わないのだろうか。

俺が瑞希を睨み付けてやると、瑞希はふふん、と鼻を鳴らして、

「買いたいなら売ってあげるわよ。やれるものならやっごらんな
さっ」

(こいつ……)

ちなみにこの女は、空手、柔道、剣道の有段者だ。

つまり、俺よりも圧倒的に喧嘩が強い。

どうしてこんな凶暴な性格の女にそんなものを習わせてしまったのか　と、このときばかりは彼女の親である伯父伯母夫婦が恨めしくなった。

すると、睨み合う俺たちを見て、雪がクスツと一言、

「いいなあ。仲良しだね」

「どこがっ……」

まるで打ち合わせていたかのように、俺と瑞希の声が入る。

が、雪は全く動じた様子もなく、ニツコリと微笑むと、

「喧嘩するほど仲が良いって言うよ。本当に仲が悪かったら、喧嘩するより無視しちゃうものね」

「……」

「ちっ……」

まあ、正直な話、雪の言うことはもつともだ。

少なくとも“赤の他人”よりは仲が良いのだろう。

(……けど、いつか倒す)

多分、いや、きっと。

「そうそう、話は変わるけど」

瑞希も次の言葉が思い浮かばなかったのか、突然話題を変えた。

「なに？」

雪もひっぱるつもりはないらしく、すぐにその話題に乗る。

すると、瑞希は少し真剣な顔になった。

「昨日、この辺りで怪奇事件が起こったんだって」

「……」

その言葉に、俺と雪は密かに視線を合わせた。

俺が口を開く。

「ああ……確か、昨日一晩のうちに三人の人間が殺されたってやつだろ？」

と、俺が言うと、瑞希は首を振って、

「殺されたのかどうかもまだわかってないのよ。なにせ、全員が焼死体で発見されたんだから。……焼死体よ？ 道の真ん中で。しかも、一晩に三人。別に辺りにガソリンが撒かれたとか、そういう痕跡もなかったみたい」

「じゃあ、何だって言うんだ？」

「だからさ。その……いわゆる、超常現象じゃないかって……」

瑞希が少し小さな声でそう呟く。

「……は？」

俺はその言葉にぶつと吹き出すと、

「あはははは！ お前、何歳になったんだよ！ 超常現象！？ そんなもんあるわけないだろーが！」

声を上げて笑うと、瑞希はムツとした顔で、

「そつ……そんなのわかんないじゃない！」

こいつはこう見えて結構、霊や超能力などを信じるタイプなのである。

俺は両手を広げて大袈裟にため息をつくと、

「やれやれ。その歳になってもそんな馬鹿なこと言ってるから、彼

氏の一人もできないんだ。そりゃそうだよなあ。この歳になって真面目な顔で霊だの超能力だの言われた日にゃあ、百年の恋も

「……優ちゃん」

言いすぎ、と、小さなつぶやきが聞こえた。

「ん？」

ふと瑞希の方に目を向けると

「げ……」

そこには拳を震わせる瑞希の姿。

そして、次の瞬間。

「大きなお世話よっ！！」

「ぐはっ！」

空手有段者の拳をもらにくらって、俺は椅子ごと後ろに吹っ飛んだ。

「私に彼氏が出来ようと出来まいと、あんたには関係ないでしょっ！」

瑞希はふんと鼻を鳴らし、不機嫌そうに居間を出て行ってしまった。

「……優ちゃん」

雪が少し困ったような、心配そうな、仕方なさそうな顔をしながら、カーペットの上に倒れた俺の元にやってくる。

「イタタタ……あの野郎、思いっきり殴りやがって」

俺は殴られた頬を押さえながらゆっくりと上体を起こす。

「あんなこと言うからだよ……」

そう言って雪は俺が起きるのを助けてくれる。

俺は苦笑いでそれに応えようと、

「それはともかく……雪」

「うん、わかってるよ」

雪は水で濡らしたタオルを俺の顔に当てながら頷く。

「今回は私に任せておいてね」

「大丈夫か？」

「任せておいて」

雪はもう一度そう言つと、少し緊張した面持ちでテーブルの上の食器を片づけ始めたのだった。

1年目4月その2

朧月の夜

その町の西側には大きな山がそびえ立っている。各所に“キケン” “入山禁止” の看板が立ち並び、地元には伝わる恐ろしい昔話の効果もあつてか、行楽シーズンを含め一年中人気のない険しい山だ。そんな山の麓には、やはりあまり人気のない神社が建っている。普通、神社には“〽神社”とか“〽神宮”というような名前が付いていて、入り口などにその名称が掲げられたりしているものだが、その神社にそのようなものは見当たらない。といって打ち捨てられた神社というわけではなく、その中には社務所があるし、巫女らしき姿の女性が働いている姿も時折見られる。

そんな、地元の間人ですら詳細の良くわからない神社の境内。うつすらと煙る月明かりに照らされたその場所に、二つの人影があった。

片方はジーパンにシャツというラフな格好の少年。

そしてもう片方は神社の関係者と思われる巫女姿の少女だった。

二人とも年齢は十五、六歳といったところだろうか。

「なんだ、話つてのは？」

先に口を開いたのは少年だった。少年は神社の鳥居に背を預け、腕を組んだ格好で少女を見ている。見た目は少年だが眼光は鋭く、髪の毛は金色。染めているのか自毛なのかはわからない。

「楓さんはすでに御存知のことかと思いますが」

それに対し少女はお腹の辺りで両手を軽く重ね合わせ、ピンと背筋を伸ばし、静かな声で少年に向かってそう言った。こちらは和装の似合う黒髪をお下げに結わえている。表情はまるで人形のように。少年の鋭い視線を向けられてもピクリとも動かない。

「先日の“力”のことです」

「なんのことだ？」

「御存知のはずです」

少女の言葉に、楓と呼ばれた少年はフンと鼻を鳴らして、

「ま、確かに“お前らにとっては”無視できない力だったかもな」

そこには無関心の色がありありと浮かんでいたが、少女はそんな言い方も特段気にした様子はなく、

「あれだけの力を発する悪魔はそう多くいるものではありません。」

これまで気付かなかったのは迂闊でした」

「だが、別に何かをやらかしたってわけじゃないぜ。それどころか、どうやらお前らの仕事を手伝ってくれたみたいじゃないか」

「結果的にはそうなりましたが、真意がどこにあるかは判断しかねます」

少女はすぐにそう切り返した。

「で？」

楓は結論を促す。

「その判断とやらを下すのはお前らだ。俺には関係がない。……にもかかわらず、俺をここに呼んだ理由はなんだ？」

「楓さんには、その人物をそれとなく見張っていてもらいたいのです」

遠慮なく少女はそう言った。

「そいつがどこの誰か、検討はついているのか？」

「桜花女子学園一年」

少女は少し間を置いて、一人の人物の名をあげる。

「なに？」

楓はそこで初めて大きく表情を動かした。

「はい。……どうなさいました？」

少女が怪訝そうに問いかける。

楓は小さく首を振って、

「俺の知ってる奴と同じ名前　いや、おそらくはそいつのことなんだろうが」

言いながら少し考え込むような素振りを見せる。

「……」

少女は黙って楓の様子を見つめていた。
やがて。

「……だが、俺たちだって一日中見張ってるわけにはいかないぜ」
楓がそう答えると、少女は頷いて、

「可能な範囲で充分です。彼女が大きな動きを見せたのは今回が初めてのことですし」

「しばらくは様子見ってことか」

「そうです。できれば彼らに察知される前に」

「……ちよつと待ってる」

楓はそう言つと、そのままの体勢で目を閉じた。

「はい」

少女は全て承知している、というような顔で答え、そのまま身じろぎもせず待つ。

二、三分ほどそうしていただろうか。

思考時間としては少々長めの沈黙を置いて、楓はようやく目を開いた。

「わかった。それとなくて良ければ見張ってやる」

「ありがとうございます」

即座にそう言つて小さく礼をした少女に、楓は少し皮肉な口調で

「お前の『ありがとうございます』は全然ありがたそうに聞こえないな」

少女は初めてその表情に僅かな動きを見せる。

「そういう性格ですから」

「ああ、知ってる」

「はい」

「用はそれだけだな？　じゃあ、帰るぜ」

言いながら楓は少女に背を向ける。

「お願いします」

楓は何も言わずに軽く手をあげてそれに答えると、神社の階段を町に向かって下っていった。

.....

タタタタタタツ……

晴れ渡る空の下、軽快な足音が響く。

時は早朝、登校時刻。足音の主は三人。風見学園の制服を着て、片手に鞆。その中の一人はセーラー服、つまり、女生徒だ。

「ったく！ 何で朝っぱらから町内マラソンやらなきやならないんだ！？」

俺は叫んだ。

マラソンは自分との戦い、なんて言葉を良く耳にするが、今の俺にとつての敵は自分ではない。

学校の門である。

「優希が寝坊したから、つて以外の理由は付けようがないと思うけどっ？」

直斗が隣を並んで走りながら冷静に突っ込みを入れる。

「うっ……！！……いや、違うね！ これはきつと誰かの陰謀だ！ 自分で言つてて意味がわからなかった。たぶん脳に酸素が足りていないのだろう。」

「誰がそんな陰謀を企むのさ……」

「ちよっ……ちよつと待つてよー！！」

俺たちの後ろを、少し遅れて由香が追いかけてくる。

「だあああつ！ おせーぞ、由香！ 遅刻しちまうじゃねえか！」

イライラしながら俺が怒鳴ると、由香は泣き出しそんな顔をして、

「二人とも速すぎるよー！ 私、そんなに速く走れない！」

「死んでもいいから走れ！」

「そんなぁ……………」

「優希……由香は歩いてても大丈夫な時間に家を出てるんだから」

「俺だつて大丈夫な時間に家を出てるぜ。……思いつきり走ればな！」

「それは大丈夫とは言わない！」

「そんなやり取りをしながらも俺たちはペースを落として由香に合わせた。が、このスピードだとどうやっても間に合わない。」

「おい！ 中央公園抜けるぞ！」

俺がそう言つと、二人ともわかつてる、というような顔で頷いた。風見学園は俺たちが走っているこの道と中央公園を挟んだ向こう側にあるのだが、普通は、この公園を迂回して行かなければならない。公園はかなりの広さがあるため、迂回するだけでもかなり時間を喰つてしまうのだが、公園の中にある茂みを抜けていけば、直線距離で学校に辿り着くことができ、これで五分以上も通学時間を短縮することが出来る。

「あ、でも……………」

公園に入って、入り口付近の砂場で砂遊びをする幼児やその母親たちの注目を集めながら、由香がためらいの声を発する。

「なんだ!？」

俺がスピードを緩めずに振り返ると、由香は息を切らせながら、

「あそこ通つたら、制服が汚れちゃう……………」

「気にするな!！」

「そんなぁ……………」

再び泣きそうな声をあげながらも、由香はしっかりと後をついてくる。

ガサガサガサガサッ!!

俺が先頭に立って茂みに突入する。その後に直斗、由香の順で付いてきた。

草やら枝やらを掻き分けていくので、ここを出るころには由香の言うように葉っぱやら枝の破片やらで制服はかなり汚くなってしま

う。

(背に腹はかえられん!!)

茂みを抜けた俺はそこにある柵を軽々と乗り越えて歩道へ出る。すると、すぐ目の前に学校の門が現れた。

だが、その前に最大の難問……車道が待っている。

俺はすぐに横断歩道の信号機のボタンを押した。

「由香、大丈夫？」

振り返ると、ちょうど由香が直斗の手を借りながら柵を登り、地面に降りたところだった。あの柵は由香の身長と同じぐらいの高さがある。特別運動神経が良いわけでもない彼女が苦戦するのも無理はなかった。

「おい、由香。いい加減にそれぐらいすぐに越えられるようにしておけよ」

「う、うん……」

由香は自信なさげに頷く。

直斗が苦笑して、

「優希が早起きできるようにした方が早くて確実だと思うけど……」

「お！ 青になった！」

俺は意図的に直斗の言葉を無視する。

キーンコーンカーンコーン……

信号が青になると同時に学校のチャイムの音。これが鳴り終わると同時に学校の門が閉まり始める。

「急げっ！」

言いながら(正確には言う前に)俺は横断歩道をダッシュで駆ける。

周りでは同じように遅刻寸前の生徒たちが、青になったと同時に横一列になって走り出した。

端から見れば、まるでオリンピックの百メートル走が始まったかのようなようである。

ダダダダダダ、と足音を鳴らして、幾人もの生徒たちが校内に

滑り込む。

「由香！」

横断歩道を渡り、門に向かおうとしたところで、俺はハツとして振り返った。

さっきまで走り詰めだったのが祟ったか、息を切らした彼女のダツシユはとても間に合いそうにないスピードだった。

「……………優希！」

同じようにそれに気付いた直斗が由香の隣に並んで、俺に目配せする。

（仕方ない…………）

俺は少し戻って直斗と同じように由香の隣につく。

「…………？」

由香が怪訝そうな顔をするのに構わず、俺は直斗と目だけで合図を交わすと、

「せーのっ！」

二人で由香を両脇から抱え込み、余った外側の腕を膝の裏側に入れる。

「えっ……………きゃー！！」

由香の悲鳴も無視し、そのまま彼女を持ち上げると、俺たち二人は全く同じ歩幅、全く同じ速さで彼女を抱えたまま門まで走る。

ギィィィィィィ、という、門の閉まり始める音。

「ラストスパートツ！！」

俺の声と同時に最後の力を振り絞って門まで駆ける。

ダダダダダダダダッ！！

ガシャーンッ！！

門が閉まる。

俺たちは 何とか校内に滑り込むことが出来ていた。

「はあっ、はあっ……………」

さすがの俺も門を抜けると同時に地面にしゃがみ込む。それは直斗も同じだったようで、肩で息をしながらしゃがみこむと、ゆっく

りと由香を地面に降ろした。

「ふうっ。何とかセーフだったね」

肩で息をする直斗が俺を見る。

「ああ。今日のは三人で来た中では新記録かもな」

俺は時計を見ながら言う。

俺の家から学校までは通常で二十分。それを、今日はなんと七分ほどで来ている。

驚異的な記録だ。

「あ、ありがとう。二人とも……」

由香はなんだか恥ずかしそうだった。

と。

「……あ！」

その由香が突然声をあげる。

「ん？ どうした？」

俺がそう聞くと、由香は少し焦ったような顔をして、

「早く教室に行かなきゃ！ ホームルームが始まっちゃうよ！」

「……げ！」

由香がそう言うと同時に、ホームルーム開始のチャイムが鳴り響いた。

ちなみに、これに遅れても遅刻扱いになってしまう。

「急げっ！」

結局、俺たち三人は再び走らされるハメになった。

「相変わらずだなあ、お前ら」

朝のホームルームが終わると、俺の席に将太のヤツがやってくる。

「なにがだよ……」

少し疲れた顔で見上げると、将太は笑って、

「いや、遅刻寸前になっても一緒に来るからよ。根性だよなあ」

「……」

俺は将太の言葉を聞きながら朝の状況を思い出す。

学校の門が閉まるのは八時二十五分。直斗と由香がウチにや
ってきたのは七時五十五分だった。ウチから学校まではさつきも言
ったように歩いて二十分ほど。歩いても充分に余裕のある時間だ。
しかしながら、まあ直斗が再三言っていたように、俺は七時三十
分頃に雪に起こされたにも関わらず、何故かまだベッドの中だった。
七時三十分から五十五分までの記憶は抜け落ちている。
ただ、

「……放っておきなさいよ。遅刻しちゃうわよ」

「優ちゃん、起きないと二人とも来ちゃうよー」

という、瑞希と雪の声だけは妙に頭に残っている。

この状況から推測される結論はおそらく一つだ。

“二度寝”である。

大多数の人がこれで失敗し、冷や汗をかいた記憶があることだろ
う。

(ちえっ、瑞希のヤツ)

俺の思考はそこで自分の反省には向かわず、『放っておけ』と口
にした瑞希に責任転嫁する方向へ向かっていた。まあ、いつも痛め
つけられているのだから、心の中で責任転嫁するぐらいしてもバチ
は当たらないだろう。

で、俺が不法侵入してきた直斗と由香に起こされ、支度を終えて
家を飛び出したのが八時二十分のちょっと前ぐらい。

どうやら俺は、直斗たちに起こされるときもかなり粘っていたら
しい。

「まあ、いつものことさ」

「ったく、しょうがねーやつだな、お前は」

ふうっとため息をつかれてしまった。

瑞希のヤツに言われるのとはまた別のベクトルで腹立たしい。が、
この件に関しては言い返す材料がない。何しろ将太のヤツは意外に
も学校に来るのが早いのだ。

曰く、『早朝の学校っていうのは、色んなネタが転がってるのさ』

という話である。

「で？ 今日とはどんなデマ話を聞かせに来たんだ？」

俺は話題を逸らすべく、そう言っただけで将太の顔を見る。

「ん？ ああ、そうそう」

将太はそう言っただけで懐からメモ帳を取り出すとページをめくり、

「あいな。言っておくが、デマ話なんかじゃないぜ」

少し遅れて文句を言う。

「どっちでもいい。聞いて欲しいんだろ？」

「今日のはちよつと今までは違っただけ」

将太は自信たっぷりの顔で言うと、少し俺に顔を近づけて、

「なんだって、これはお前の幼なじみに関する話だからな」

「パス」

速攻でそう言うと、将太に向かってしっしっ、と手を振る。

「なんだよお！ 聞きたいだろ！？」

俺はため息をついて、

「どうせ、由香の奴が間違っただけで男子トイレに入って慌てて飛び出したとか、そういう話だろ」

「……それはないだろ」

「いや……」

実際にあったことだ。

小学校ご念のときの話である。俺たちの通っていた小学校は二階

建てで、一年から四年が一階、五年と六年が二階という配置だった。

まあ、そこまでは普通だろう。

問題は、一階のトイレは右側の扉が男子、左が女子だったのに対し、二階のトイレは配置が逆になっていた、ということである。つまり、左側が男子だったのだ。これについては始業式の日にはちゃんと先生から注意されていたのだが、ちょうど風邪を引いて始業式を休んでいた由香はそのことを知らず、始業式の次の日、いつも通り左側の扉を開けて、悲鳴を上げながら慌てて飛び出して来た、というわけである。

うわけである。

ちなみに俺もそのときは近くにいて事件現場を目撃していた。

「そうじゃなくてよぉ。由香ちゃんじゃなくて、直斗の話だ」

と、将太は話を続ける。

「直斗？ 由香のヤツの方がネタとしてはよっぽど適してると思うのだが」

「お前、なにげにひどいな……」

「で、直斗がどうしたんだ？」

少しだけ興味を引かれた。九割以上デマだとは思うが、いつもやり込められている立場として、あいつの秘密を握っておくというのも悪い話ではない。

すると将太はしてやったりという顔をして、俺の耳に顔を近づけた。

「実はな。……直斗の奴にどうやら彼女ができたらしいんだ」

「……ふう」

一瞬で冷めた。

「待て待て！ 今回の結構確かな情報なんだぜ！ 相手もしっかりわかってる！」

「ほぉ」

それでも俺はすでに聞く気をなくしていた。

だいたい、直斗や由香のことに關しては、こいつよりも俺の方がずっとわかっている。直斗に彼女なんかが出来れば、俺が気付かないはずはない。

……ま、一応聞いておいてやるか。

「その相手ってのは？」

「え、えっとだなあ」

将太は俺が興味を失わないうちにと、少々慌ててメモ帳をめくる。

「同じ学年の子さ。ええっと、三組の神村。神村沙夜かみむらいさや」

「神村……？」

俺は将太の口から飛び出したその名前を口の中で反芻してみる。そして数秒。

「……知らん」

「おいおい。お前、中三のとき一緒のクラスだぜ」

将太が呆れ顔で言う。

「同じクラス？」

その言葉を聞いて再び考え直してみたが、やはり記憶にはない。

そもそも、中学三年のときのクラスメイトの女子など半分ぐらいしか思い出せなかった。残りの半分は顔と名前が一致しないやつばかりである。

俺が再び思考状態に入ると、将太はメモ帳をペラペラやりだして、「神村沙夜、十五歳、女。寡黙でかなり協調性に欠ける。仲の良い友達は、少なくとも学校内にはないらしい。成績は中の中で中学のときは三年間帰宅部。ルックスは八十八。趣味、特技、スリーサイズは不明。自宅は山の麓の神社だ」

「お前さあ……」

俺は呆れて将太を見上げる。

「そんなことまで調べてんの？」

すると、将太はふふん、と鼻を鳴らして、

「この千里眼の俺様に知らないことはないのさ」

(千里眼というか、野次馬根性というか)

「で、そのルックス八十八っていうのはいったい何の暗号だ？」

「ん？ これは俺が独断と偏見でつけた点数だ。一応、百点満点になってる」

将太は得意げにそう答える。

なるほど、単純だ。

「八十八ってのはいい方なのか？」

「当たり前だろ。きちんと五十を平均に取ってるからな」

「お前の趣味に左右されるんじゃないや、信憑性は薄いなあ」

そう言うと将太は特に反論もせず、

「ま、これだけは人それぞれだからな。ちなみに」

と言うと、将太はまたメモ帳をめくって、

「雪ちゃんは九十二だぜ」

「九十二？」

俺は笑って、

「いくらなんでも鼻頂しすぎじゃないのか？」

将太は心外、というような顔をして、

「ひいきなんてしてねえって。俺はいつだって公正な立場で判断してる」

「へえ。お前、あんなのが趣味なのか……」

と言いつつ、なんかあまり気分は良くない。

これはアレか。お前なんぞにウチの娘はやらん！ 的な心境なのか。

「ちえっ。お前は見慣れてるからそんなこと言うんだよ。誰がどう見たって可愛いじゃないか」

「何を言う。俺はちゃんと客観的に見た意見を述べてるぞ」

「じゃあ、お前から見たら何点なんだよ」

「ん、そうだなあ」

俺は頭の中に雪の顔を思い浮かべる。

特別劣っているところはない（と思う）。鼻がつぶれてもいなければ、タラコ唇でもない。顔も整っている。まあ、個人的な感想を抜きにして、常識的に考えても将太のいうとおり可愛い部類に入るかもしれない。

考えた末、

「七十五点つてところだな」

「七十五点！？ お前、なんて罰当たりな……！！」

将太がまた大袈裟なことを言い出す。

「あのなあ、七十五点だぜ。四分の三は行ってるんだぞ。五段階評価にすると四だぞ」

俺はそう言って反論する。

だいたい、自分の妹のルックスに九十二点とかつける兄がいたら見てみたいものだ。たとえ本心でそう思っていたとしても恥ずかし

くと言えたもんじゃない。

「はあ……猫に小判、豚に真珠とはこのことを言うんだな……」
「誰が豚だ」

そんな馬鹿馬鹿しい話をしているうちに一時間目の授業が始まった。

一時間目は数学。

ちなみにこう見えて、学校での俺の成績はめっちゃめっちゃ良く、授業の内容もバツチリわかるので、それほど退屈することもないのだったらしいのだが、残念ながら下から数えた方が早い俺にとって、ただでさえ苦手な数学の授業というのはいわば馬の耳に念仏状態であった。

しかしまあ。よくよく考えてみれば、人間が作り出したところの念仏とやらを無理やり押し付けられる馬も迷惑な話ではある。それをもって宝の持ち腐れの例えにされてしまうのでは、馬のほうもたまったものではないだろう。

そんなわけで。

(おやすみなさい……)

あとは睡魔に身を任せることにした。

まあ、担当の先生によつては寝られない授業もあったりするのだが、それでも午前中の半分は体力回復に費やすことができた。

で、アツという間に昼休み。

再び将太が俺のところまでやってくる。

「忘れてた！」

「何がだ？」

視線も向けずに尋ねる。

「直斗の話だよ！」

「ああ……」

「お前、忘れてただろ」

「忘れてた」

というか、もう終わったものだと思っていた。

「あのなあ……」

将太は力の抜けた顔をする。

「今回の話はマジなんだって！ 月曜日に二人が仲良く学校から帰ってたって証言もあるんだよ！」

「由香と見間違えたんじゃないのか？」

「何の話？」

と。

やってきたのはその話の張本人。直斗と由香だった。
なんとというグッドタイミング。

「あ、あー、いや、な」

将太も本人を前にデマ話をする気にはなれなかったらしく、

「と、とにかく、さっきの直斗の話は本当だからな！」

そんな捨て台詞を吐いて、去っていつてしまった。

「？」

「いつものことだ。気にすんな」

「どんなことを言ってたの？」

自分の名前が出ていたからか、直斗がちょっと興味ありそうに聞いてくる。まあ、こいつがネタにされること自体希少だから、ちょっと面白がっているのかもしれない。

「ああ、何か、直斗が三組の何とかっていう女と付き合ってるとか、そういう話だ」

「三組？」

すると直斗は意外にも食いついて、

「それってさ。もしかして神村さんのこと？」

「は？」

直斗の回答に俺は驚く。

「何でわかったんだ？」

そう聞くと、直斗は仕方なさそうに笑って、

「この前ね。月曜日……だったかな？ ちょっと事情があつて神村さんと一緒に帰ったんだ。もしかしたらそれを将太が見たのかな、

「と思つて」

そう言えば将太のヤツもさつき“月曜日”とか言っていたような気がする。ということは、月曜日に将太が直斗を見たというのは珍しく本当のことだったらしい。

(しかし、一緒に帰っただけで付き合つてることにされるのか……)
将太の強引さに恐ろしさすら感じる。

「でもよ……つと、それより飯にするか」

鞆の中から弁当箱を出す。

「机くつつけようぜ。由香、そっち頼む」

「あ、うん」

俺の前の席の住人は毎日体育館にバスケットをしに行っていてチャイムが鳴るまでは戻つてこない。その机を俺の机と合体させ、近くから椅子を一つ借りて三人用のランチテーブルを確保する。

弁当箱を開けた。

余談だが、諸事情により俺の弁当は由香の家で作ってもらっている。昔もよく運動会の弁当なんかを由香の家の母親に用意してもらったものだが、今は彼女が自分で作つたりしているようだ。

そんなわけで、俺と由香の弁当は分量以外まったく中身が同じだったりする。

(あー、たぶんこういうのも将太のヤツに見られたら“そういうこと”にされちまうんだろうな)

今後、気をつけよう。

「ところで」

と、俺は弁当の中に入っているタコさんウイナーを箸で弄びながら、

「神村なんて奴、俺は知らないな。誰なんだ？」

すると直斗がびつくりした顔をして、

「中三のときは優希と同じクラスじゃなかった？」

「それは将太からも聞いたけどよ。同じクラスでお前とある程度親しい奴なら、俺が覚えてないはずないんだけどな」

俺はいまいち納得できない。

「うーん、まあ、僕もそれほど親しいわけじゃないからね」

直斗は少し曖昧な表情で、

「神村さんのところとは家同士の付き合いでね。僕と彼女が親しいわけじゃないんだ。良く知らないけど、遠い親戚みたい」

「ああ、そういうことか」

俺はようやく納得して頷く。

「神村さんって、山の麓の神社の子？」

と、由香。

「そうだよ」

直斗が答えると、由香は納得したような顔で、

「あ、その子なら知ってるよ。神社に行ったらたまに巫女さんみたいな格好でお掃除とかしてるから。お下げの子だよな？」

「巫女さんみたいなの、じゃなくて、神社なんだから本当に巫女さんなんじゃないのか？」

俺が突っ込むと、

「あ、そうだね」

由香が可笑しそうに笑う。

(あれ、そーいや……?)

俺はそこでふと思いつく。

入学式のときに直斗と一緒にいた女生徒。由香の言うように長い三つ編みのお下げをぶら下げていたような気がする。

(つてことは、あれが神村とかいう人か)

あのときは後姿しか見えなかったが、思い出してみると一緒にいたのはちょうど三組の教室の前だった。

「私、初詣のときに会ったよ、その人に」

由香は言ってから少し考えて、

「おとなしそうだけど、綺麗な人だよな？」

と、俺に振ってくる。

「知らんぞ」

俺がそう答えると、由香は不思議そうな顔をして、

「え？ 初詣のときに見なかった？」

「俺は行ってないからな」

「あ、そうなんだ。私、雪ちゃんには会ったから、一緒に優希くんも来てたのかと」

「何が楽しゆうてあいつと二人で初詣に行かなきゃならんだ、つと」

俺は話をしながらもしつかりと弁当の中身を処分して、

「さんきゅ。なかなかうまくたぜ」

今のうちに弁当箱を返しておく。

「あ、おかずとかしょっぱくなかったかな？ 優希くん、味は濃い方がいいて言うから、ちょっといつもより濃いめに見たんだけど」

と、由香は少し心配そうな顔をする。

「まあ、いいんじゃないか？ …… っていうか、味の濃い薄いは多少なら気にしないから、お前の好きなようにして構わないし」

さすがの俺も無償で提供される弁当にあれこれケチをつけるほど人でなしではない。

「うん、わかった」

言って由香は俺の弁当箱をヘンテコな動物柄の袋に入れる。

(しかし山の麓の神社、か……)

もちろん存在は知っている。行ったことも、たぶん何度かあると思う。しかしあの神社はなんとというかあまり人気がなく、不気味な場所だという印象しかなかった。

(そのこの娘が同じ学年に、ねえ)
特に興味はない。

ないのだが 妙に気にはなった。

「ただいまー」

「あ、おかえりなさい」

学校を終えて家に帰ると、珍しく雪が先に帰宅していた。

「珍しいな。お前のほうが早いなんて」

「今日は五時間授業だったんだよ」

「そうか」

「あ、待って、優ちゃん」

階段を上がろうとした俺を雪が引き留める。

「なんだ？」

俺が途中で足を止めて雪を見ると、

「優ちゃんね。最近、由香ちゃんにお弁当作ってもらってるの？」

「ん？」

そついや言っでなかつたかもしれぬ。

「つか、誰から聞いたんだ？ 梓さんか？」

梓さん、というのは由香の母親のことである。

「直ちゃんから聞いたよ」

「ああ、そつか」

俺が納得して頷くと、雪は少し心配そつな顔をして、

「由香ちゃん、無理してないのかな？」

「一つでも二つでも手間はたいして変わらないからって言っでたぜ。

今日なんか、直斗の弁当も作っでくる、なんて言い出したりしてたしな」

「由香ちゃんらしいね」

そつ言っで雪はクスクス笑うと、

「うん、わかつたよ。由香ちゃんが大変そつだったら、また私がお弁当作ろうかと思っでただけ、大丈夫みたいだね」

「別に弁当二つあつても俺は困らんか」

「え？」

「早弁当と昼飯用」

呆れられるかな、と思ったら、雪は真顔で、

「じゃあ作る？」

「……やっぱいいい」

実際に二つの弁当を平らげることが想像してみて、俺は少し顔をしかめながら前言を撤回した。

「そう？」

俺の表情を見て雪は可笑しそうに笑う。どうやら冗談だったらしい。

(こいつ、たまに冗談と本気の区別がつかないんだよね……)と、階段を昇って自分の部屋へと移動しようとする。

「あ……優ちゃん」

またもや雪が俺を呼び止める。

「何だよ？」

二度も止められて俺がちよっと嫌な顔を見ると、雪は俺に伸ばしかけてた腕を止めて、

「……ごめん。やっぱいいい」

「あんな」

さすがに俺は頭に来て抗議しようとしたが、

「……？ どうした？ 何かあったのか？」

雪の表情がいつもと違うのに気づく。

すると、雪は少し慌てた様子で、

「ううん。そんな大げさなことじゃないんだよ。でも」

そう前置きしてから、

「……最近ね。誰かに後をつけられてるような気がするの」

「は？ 誰にだよ」

「それがわからないの」

雪は本当に困ったような顔をしている。どうやら冗談ではないらしい。

「ぶうん。気のせいじゃないのか？」

「わからない。そうかもしれない」

雪は自信なさげに言う。

「お前みたいなヤツをつけ回す物好きがいるとは思えないがなあ」
俺が冗談交じりにそう言つと、

「そうだよね」

「あっさり肯定すな」

その即答に俺が呆れた顔をする、

「？」

雪は不思議そうに首を傾げる。

こいつの悪いところ（か、良いところかわからないが）は、まるつきり自分が 将太が言っていたような 特別なルックスだと思っていないところだ。そのくせ、身だしなみには人一倍気を遣ったり、町ですれ違う女の子を見て“あの子可愛いね”とか“あの人綺麗だね”などと羨ましそうに語ったりする変なヤツなのである。意識してやっているのなら単なる嫌味だが、長い付き合いでわかっている。

こいつのは天然なのだ。

（他人のことはよく見えても自分のことは見えてないんだよな）

まあ、だからといって、こいつが突然目覚めたかのように自分のルックスを鼻にかけるようになれば、それはそれでかなりイヤである。

「まあ、とにかくはつきりしないんじゃない。でも、一応気をつけるようにしろよ」

と、注意を促すと、

「うん」

雪は素直に頷いた。

「何か困ったことがあったら言え。俺が何とかしてやるから」

「わかったよ」

そう言つて雪はにっこりと笑う。

「ただいまー」

ちようど瑞希が帰ってきた。

「お帰り、瑞希ちゃん」

「あら？ そんなところで何をしてるの？」

瑞希は階段の途中で止まっている俺と、階段の下で俺を見上げる雪を交互に見比べ、少し眉を潜めて俺を指差した。

「のぞき魔？」

「この体勢のどこをどうすればのぞき魔に見えるんだ」

逆の位置ならまだしも。いや、逆でものぞかんけども。

瑞希は靴を脱ごうと屈んだ体勢のまま俺を見上げて、

「床に鏡を仕込んでない？」

「変態かつ！」

「あら、自覚症状なし？」

「くっ……」

俺は拳を握りしめるが、それを何とか抑える。

(ふう、落ち着け。俺は大人だ。こんなオトコ女の言うことをいちいち……)

「ふう、落ち着け。俺は大人だ。こんなオトコ女の言うことをいちいち……」

「優ちゃん。口に出てるよ」

雪が苦笑して言う。

「なにい！？」

いつの間に！？

「誰がオトコ女ですって？」

「うっ……！」

殺気。

瑞希が体から怪しげな怒りのオーラを発し、俺の方にゆっくりと近づいてくる。

まずい、これはいつものパターンだ。

「あ、私、夕食の支度してくるね」

「ちよっ……」

仲裁人が消えた。どうやら激突は避けられない様相だ。

いや、待て。

「そついや瑞希」

「なに？」

「最近、雪の周りで変なこと、ないか？」

「……なんのこと？」

「いや」

この反応。どうやら雪はさっきのことを俺にしか話していないようだ。

気のせいなら別に構わない。

が、万が一

(万が一、か)

あるのだろうか。

ないとも言い切れないか。

とすると

「……」

「な、なに？」

じっと見つめると瑞希が困惑の表情を見せた。

「……いや、なんでもない」

瑞希に話そうかどうか迷って、結局やめた。

たぶんあいつの気のせいだろう。

仮に気のせいではなかったとしても、たぶん危険はない。

というより。

下手に瑞希を巻き込むと、かえって危険かもしれない。

「……？」

怪訝そうな瑞希を置いて俺は部屋へと戻った。

部屋に戻って鍵をかけ、ミニコンポの電源を入れる。カーテンを閉じて　いや、閉じようとしたところで　薄暗い窓の外、隣空き地を眺めた。

ミニコンポの小さなスピーカーが少し大人しめのメロディを奏で始める。

俺はリモコンをとってディスクを二番に変更した。一転、アップテンポの曲が溢れ出す。

カーテンを閉じ、ベッドに転がった。

あれは いつものことだっただろうか。

いつもはちゃらんぼらん伯父がひどく真面目な顔をして言った。

『そうか。やはりあいつもか』

『封印が 解けたのだから』

またリモコンを手取る。三枚目のディスクトレイは空のようだ。結局一番のディスクに戻し、お気に入りの七曲目をかける。

『幸い、お前たちは純血だ。自らを制御できなくなる可能性は極めて低い』

『ただ、封印の影響が少々不安定だ。気をつけてやらなきゃいけないぞ』

『もちろんお前自身も、だがな 』

伯父はそう言って、まるで心を見透かそうとするかのように俺の目を見つめた。

(超常現象 か)

数日前、瑞希が口にしたその言葉を繰り返す。

真相を知っている人間があのとときの会話を聞いていたらきつと失笑ものだろう。

なにせ

ベッドから身を起こし、部屋の鍵をかける。普段滅多に使うこと

のない姿見の前に立った。

超常現象の塊みたいな人間が、それを非常識だと言って否定するのだから。

軽く、全身に力を込める。

とつくに体に馴染んだ感覚。

腹の中心辺りに熱が産まれる。

産まれた熱は即座に全身を覆い、それは脳まで達すると、まるで渦を巻くようにして奥へ、奥へと浸透していった。

ミニコンポの奏でる曲がサビを迎えた。

と、同時に、俺の脳髓から溢れ出す。

それは、炎。

揺らめくオレンジの、破壊と再生の力。

『お前は イレギュラーだな』

『純血氷魔の夫婦から炎魔が産まれるとは、なんという』

ゆっくりと目を開く。

姿見の向こう。

立っていたのは異形の姿をした赤い髪の少年。

伯父さん曰く、これが俺の本当の姿だという。

ぼう、と、指先に炎を灯す。

調子は どうだろうか。感覚的には三割といったところか。

これなら今日は、雪に頼らずに済むかもしれない。

力を抜いて姿見から離れる。

再び窓の外を覗いた。

闇が 濃い。

パチッ、という奇妙な耳鳴りが聞こえる。

今夜はまた、何か起こりそうな気がした。

1年目4月その3

四月も末に迫ったある夜。

俺はウキウキしながら居間のソファに寝転がって漫画の単行本を読んでいた。

ウキウキしている理由？

今日が金曜日の夜だから。それ以上の理由はあるまい。

読んでいるのは直斗から借りた青年誌に連載されている漫画の単行本で、やや古臭い設定とありきたりな展開がウリのファンタジーものである。直斗は意外とこういうチープな展開の物語が好きらしく、ヤツに言わせると『中途半端にリアリティのある展開は現実だけで十分』とのことである。

ちなみに俺も、自分で買うほどではないがこの手の話は嫌いじゃない。

三十分ほどで二冊を読み終えた。

続きが気になる。

明日にでも借りてこようか、いや、どうせ近いんだし今からでも行ってくるかな、なんて葛藤しながらゴロンとソファの上で寝返りを打つ。

カチャカチャと食器を洗う音が台所から聞こえてきた。

なんとなしにカレンダーを眺める。

高校生活が始まって早くも半月が経った。といってもこちらは中学からそのままスライド式で上がったので、高校生活といっても大して新しいことはなく、当然感慨なんてものはない。

が、

「なあ

ふと思いついて台所の雪に声をかける。

「なあに？」

雪は手を止めることなく返事した。

瑞希のヤツは風呂に入っているのですそこにはいない。

「お前さあ、もう学校とか慣れたの？ 女子校だと今までと勝手が違ったりしないのか？」

「うん、慣れたよ。確かに今までとはちょっと違うけど、中学のときの友達も結構来てるし、瑞希ちゃんもいるし」

「そっか。なんか女子校って俺の中じゃいいイメージないからなあ」

「そうなの？」

「なんか陰湿そうな感じしないか？ いじめとか」

「偏見だよ、それ」

雪がクスクスと笑いながら、こちらにやってくる。エプロンを外したところを見るとどうやら洗い物は終わったらしい。

「そっか」

まあ、偏見なのかもしれない。

「でも待てよ。女子校ってことは女の子がいっぱいいるってことだよな」

「うん。もちろん」

「ふむう」

想像してみた。

「……一回ぐらいは行ってみてもいいかな」

「どうやって？」

雪が真顔で聞き返してくる。

「決まってるだろ。お前と入れ替わるんだ」

「そんなの出来るわけないよ」

「双子だからばれないって。双子の入れ替わりは定番だろ」

「双子でも絶対ばれるよ」

念のため言っておくと、俺たちは双子とはいえ基本的に似ていない。対極といってもいい。雪のヤツはどう見ても男装のできない容姿で、つまりその対極である俺にはどうやっても女装は無理だ。

「ちえっ、仕方ない。諦めるか」

俺が渋々といった感じで言うと、

「最初から行くつもりなんてないでしょ」

「いや、あるぞ。あー、行きたい行きたい。行って可愛い女の子と仲良くなりたい」

「用務員のおじさんでも仲良くなってくれば？」

そこへ、いつもの憎まれ口で現れたのは瑞希である。

性格に似合わない(?) いつもはアップにしている長い髪をバスタオルで丁寧に拭きながら、俺の方にいつもの小馬鹿にしたような視線を送ってくる。

「馬鹿な。何が楽しくて俺が用務員のオヤジと仲良くならなきゃならんのだ」

「あら、残念ね。用務員のおじさんは結構若くて人気なのよ。ねえ、雪ちゃん？」

「あ、うん。そうみたい」

雪はよく知らないのか曖昧な返事をする。

「休み時間とかに用務員室に行ったら、お茶とかお菓子とかくれるんだってさ」

瑞希はそう言うってから、私は行ったことないけどね、と付け加える。

「それじゃ何か下心があって餌付けしているみたいじゃないか」
瑞希は鼻で笑った。

「あんたじゃあるまいし」

「なんだよ。それじゃあまるで、俺が下心があって女子校に行きたがってるみたいじゃないか」

「それ以外に行く理由があるわけ？」

「……」

まあ、ない。

「ほら、みなさい」

俺の心を読みとった瑞希がそう言いながらソファに腰を下ろし、ファッション雑誌のようなものを手に取った。

ウチの居間には長めのガラステーブルを挟んで二人用のソファが

向かい合って置いてある。瑞希が座つたのは俺と向かい合っている方のソファで、台所から戻ってきた雪は俺の隣に腰を下ろした。

「ま、普通の奴ならそういう目的なんだろうけどさ……」
なんとなく悔しい俺は負け惜しみを言った。

「あら？ あんたは違うつて言うの？」
すかさず、瑞希が突っかかってくる。

「当たり前だ。俺は、その、なんだ。つまり、別に女に不自由してないからな」

「へえ、だったらたまには女の子でも家に連れてきてみたら？」
瑞希は全く信じてない様子である。

(……むかつく)
どうしてやるうか。

いや、家に女を連れてくることは不可能ではない。俺にだって女子の知り合いの一人や二人はいる。しかしながら、その中でも一番連れてくるのが楽な女子 要するに由香のヤツ は駄目だ。今は瑞希と面識がないからまだしも、あとで俺たちの関係を知られたときによりいっそう馬鹿にされるに違いない。

由香以外の女子で、となると。
一応、協力してくれそうなヤツの顔も思い浮かんだが、見返りが高く付きそうなので却下となった。

それ以外で、となると
(いや、待てよ)

そこでパツとひらめく。
何も、こいつの言うように女の子を連れてこなくてもいいのだ。
俺はただ、この場でこいつをギャフンと言わせることができればそれで充分なのである。

なら
俺はチラッと隣に視線を送る。

隣に座る雪はいつものように穏やかな表情で俺たちの話をただ聞いていた。

(……見てる。度肝を抜かせてやる)

俺は心の中でほくそ笑むと、

「そんな必要はないさ。だいたい、俺にはもう将来を誓い合った仲の子がいるんだ」

「は？」

俺の真面目な顔に、瑞希は怪訝そうな顔をする。

「誰か知りたいか？」

瑞希は少し考えて、

「なによそれ。私の知ってる子なの？」

「ああ、お前も良く知ってるな」

瑞希はさらに怪訝そうな顔をする。まあ当然だ。瑞希と俺の共通の知り合いなど、そう多いものではない。

「まさか絶対にあり得ないと思うけど、あの幼なじみの子じゃないでしょうね？」

「ん？」

「えっと、確か、水月さん、だっけ？」

「ああ……もちろん違う」

危ない危ない。すでに顔見知りだったか。

「そう。よかった」

「なんだよ、そのよかった、ってのは」

怪訝に思っただけでそう尋ねると、瑞希は軽く両手を広げて言った。

「いくら神様が気まぐれでも、あんないい子にあんたみたいなケダモノをあてがうなんてこと、するわけないな、と思っただけ」

「……この野郎」

睨み付けてやったが、瑞希のヤツはそ知らぬ顔で雪に尋ねた。

「雪ちゃん、知ってる？」

「ん」

雪が小首をかしげて俺を見る。

俺はそれを遮って、

「ふふん。わからないのならば教えてやるさ」

「なんでそんなに偉そうなのよ。……まあ、どうせ、その辺の野良猫と将来を誓い合ったとかでしょうけど」

「人外かよ！　んなわけないだろ。ちゃんとした女の子だ。しかも、あー、標準よりは、まあ可愛い」

「近所の幼児をだましたとか。子供って可愛いものね」

「……お前、どうしても俺を変態にしたいらしいな？」

「そんなことないわ。私だって身内から犯罪者なんて出したくないもの。でも　あんたと将来誓い合うような普通の女の子なんて、ねえ？」

と、雪に同意を求める瑞希。

「言いすぎだよ、瑞希ちゃん……」

苦笑する雪。

(……妹よ。できればそこは真っ向から否定して欲しかった)　まあいい。

この後のことを考えれば、すべては大事の前の小事。夕食の前の軽い運動。メインディッシュをおいしくいただくための軽いスパイスに過ぎない。

「ま、それこそお前の見る目のなさの証明だな」

瑞希はムツとした顔をする。

「じゃあ誰なのよ。言ってみなさい」

「じゃあヒントだ」

俺は指を一本立てて見せると、

「まず、歳は俺たちと同じ」

「わからないわよ、それじゃ」

「次に、お前と同じ学校に通っている」

「え？」

瑞希が更に混乱した顔をする。

と、

「優ちゃん、もしかして」

雪はいち早く俺の考えを察知したらしい。こちらを窺うように視

線を送ってくる。

「え、雪ちゃん、わかったの？」

「あ、うん……」

ちよつと戸惑った顔だ。

まずい、と思つて、俺は矢継ぎ早に言った。

「現在、お前の視界の中にいる」

「……は？」

瑞希がきよんとした顔をする。小さく視線を動かしたあと、すぐにその視線は俺の隣の人物に止まる。

「あんた、もしかして 雪ちゃんのことを言ってるの？」

「その通りだ」

俺は胸を張つてそう答える。

瑞希はしばらくポカンとした顔で俺を見ていたが、

「……ふう」

こめかみを押さえて大きいため息を吐く。

「なんだよ、そのリアクションは」

無然とした口調で抗議するふりをした。もちろんこの反応は予想通りだ。

「ため息も吐きたくなるわよ。オチがあまりにもくだらないというか、もう情けなさすぎて」

再びわざとらしくため息を吐く瑞希。

確かに、ここで終わったら俺はただの哀れな（しかもまるでシスコン風味の）男子高校生でしかない。

だが、今日の俺には勝算がある。

俺は余裕の表情でふふん、と笑うと、

「何を言うか。お前が知らないだけだぞ。俺と雪は海よりも深い愛情で結ばれているのだ」

「はいはい。どんな愛情か見てみたいものね」

瑞希がそう言つて手を広げてみせる。

かかった。

それを見て俺は笑みを漏らすと、

「ならば見せてやるう」

そう言っただけ口元を一回拭う。

雪がハツとした顔で、

「あ……」

それを無視し隣に座っていた雪の体を抱き寄せると

「!?!」

瑞希が驚きの表情で目を見開いた。

それもそのはず。

俺が、そのまま瑞希の目の前で雪と唇を重ねたのだから。

驚いた表情のまま瑞希の動きが止まる。

一秒、二秒、三秒　沈黙の時間が流れて

「ちよっ、ちよっ！　なにやってるのよ、あんた!!」

ようやく我に返った瑞希が慌てて俺たちを引き剥がそうとする。

俺は逆らわずに雪を解放した。

そしてもう一度口元を拭うと、

「どうだ。これで納得しただろ？」

「な、納得って　」

瑞希は完全に取り乱した様子で、

「あ、あんたねえ！　自分が何やったかわかってんの!?!」

「雪とキスした」

「っ……！　あ、あのね！　ゆ、雪ちゃんはあんたの妹で、そっ、

そそそそ、それなのに……!!」

瑞希は興奮してるれつがうまく回らないらしい。

勝った。

近頃まれに見る完全勝利だ。

俺は面白くなって、殊更平静な顔を見ると、

「なんだよ。別に雪の奴だって嫌がってなかっただろ」

「そっ、そうだけど、そういう問題じゃ　」

「優ちゃん……」

雪が本気で困ったような顔をしていた。

「やめなよ。瑞希ちゃん、本気にしちゃうよ」

たしなめるような口調。

俺がそっぽを向くと、雪は興奮気味で俺に詰め寄る瑞希の肩を軽く押さえて、

「瑞希ちゃん、落ち着いて。優ちゃんの口元を良く見てごらん」

「え？」

雪の言葉に、瑞希は少し落ち着きを取り戻したようだ。

「……赤くなってる？」

(ちえっ、もう少し眺めていたかったのに)

まあ 確かにこのまま勘違いされ続けるのもまずいか。

仕方ない。

「赤くなってるでしょ？」

雪は苦笑して、

「あのね。優ちゃん、口にテープを貼ってたんだよ。さっき、口元を拭ってたでしょ？ あのとくに貼ったり剥がしたりしてたの」

「テープ……？」

瑞希は小さくその言葉を繰り返し、もう一度俺の口元に視線を移動させる。

雪は仕方なさそうに笑って、

「優ちゃん、前にも何回かやってるから」

「うむ。みんなそれぞれに良い反応をしてくれたぞ」

雪が非難の目で俺を見る。

「良くないよ。由香ちゃんなんてびっくりして泣き出しちゃったじゃない」

「そうか。そういやあいつが犠牲者第一号だったなあ」

ちなみにそれはかなり小さい頃の話である。

「……」

瑞希はそんな俺たちの会話をしばらくボーっと聞いていたが、しばらくして、

「ふうーっ」

と大きく息を吐いて、倒れ込むように後ろのソファに座り込む。突っかかってくるかと思いきや。

「びっくりした……。本気かと思っちゃったわよ……」

俺は久々の完全勝利にちよつといい気分浸って、

「あのなあ。考えりゃわかるぜ。俺が本気であんなことするわけがないだろ」

「あんたねえ、自分でわかってないかもしれないけど」
「言いかけて、」

「……やっぱいいわ。なんでもない」

「なんだよ」

「なんでもないわ」

変なヤツだ。

と、そのとき。

「っ……」

パチ、と、耳の奥でなにかが鳴った。

「？ どうしたの？」

顔をしかめたのを見られたらしい。瑞希が怪訝そうな顔でこちらを覗きこんでくる。

俺は取り合わず、庭の方に視線を移した。

「？」

さっ、と、暗闇に包まれた庭で何かの影が動いた、ような気がした。

(気のせいかな?)

「優ちゃん？」

雪の問いかけには答えず、庭に続くガラス戸へと向かう。

カラカラ……

軽い音と共にガラス戸が開く。少し冷たさの緩んだ風が頬をくすぐった。

「……」

目を凝らしてよく見てみたが、誰もいない。

風で庭の樹木がカサカサと揺れる。

さっき見たのはこの影だろうか。

「優ちゃん？」

「なに？ 誰かいたの？」

雪と瑞希がそろって質問してくる。

「いや、気のせいだったみたいだ」

そう言っただけはガラス戸を閉じると、厚手のカーテンをしっかりと閉める。

「のぞき、とか？」

瑞希が嫌悪感をあらわにしてそんなことを言ったので、俺は笑って、

「だから俺の気のせいだって」

「……」

見ると、案の定、雪が神妙な顔をしていた。

(そついや言っただけ。誰かに見られてる気がするって) どうなのだろう。

まあ、この家に単なるストーカーやその辺のチンピラを相手にして危険のある人間はいないはずだが、あまり気分の良いものではない。

それに この耳鳴り。

今月はこれで三度目だ。

雪に目配せする。

雪は言った。

「……瑞希ちゃん、明日も部活？」

「ええ。 あら。 もうこんな時間ね」

時計を見て瑞希が立ち上がる。

「今日は疲れたし早めに寝るわ。 あ、後片付け、ありがとね」

「うん」

瑞希はチラッと俺を見て、

「じゃ、おやすみ」

「おー」

片手を上げて答える。

パタン、と、居間のドアが閉まった。

それが、合図。

俺と雪が“あちら側の世界”に足を踏み入れる合図。

急に、空気が重くなったように感じた。

-
-
-
-

この町の夜は、ある時間を境に急激に深くなる。

ド田舎というわけではないが、夜になっても人が絶えないほど都会でもない。夜の八時を過ぎれば人通りは極端に少なくなるし、駅前や一部の主要道路を除いて車の通りも減ってくる。特に町の西側にある山の麓や南側の工業地帯、住宅地であつても廃墟となつたボウリング場やアパート。ところどころにぼっかりと闇が口を開けている。悲鳴を上げても誰の耳にも届かない深い闇。地元の人間は滅多に近付くことはないが、時折外の人間が好奇心交じりに足を踏み入れる。

この日は月が厚い雲に覆われていた。

まるで飢餓感。生物である以上逆らうことのできない強烈な欲求。

その衝動はそれにとてもよく似ていた。

不思議だ。

これまで警察の世話になるようなことをしたことはない。

中学、高校、大学と特別悪さをしたこともない。

いじめられていたわけでもなく、いじめる側に回ったこともない。

友人は多かつたが、親友と呼べるほど親しい者はなく、中学、高校、大学で友人の顔ぶれはがらりと変わった。

社会に出て二年目。

その衝動は、ある日突然襲ってきたのだ。

抑えきれなくなって俺は一人暮らしのアパートを飛び出した。

周りに人の気配がたくさんあるうちはまだ良かった。

にもかかわらず、足は自然と人の少ない方角へ向いた。

五年以上前に潰れ、建物がそのままになっている二階建てのボウリング場。

そこにスポーツタイプのワゴン車が止まっていた。

真っ暗になった建物の窓から、懐中電灯と思われる微かな明かりが覗いている。

辺りに人の気配はない。

「う……ガ……」

自分のものとは思えない声が口から漏れた。

心臓の鼓動が早くなる。

口の端からよだれがこぼれた。

そして俺は、その建物の中に足を踏み入れ

- - - - -

パチッ！

耳鳴りが一際強く鳴り響いた。

「……わかった。外れのボウリング場だ」

目を開けると街灯の明かりが目に入ってくる。辺りはしんと静まり返っていた。

すでに日が変わっている。

この辺りでこの時間帯に外を出歩く人間はまずいない。

「車が止まった。急ぐぞ」

そう言っただち上がり、地面を蹴る。

腹の中心から熱が産まれ、全身がそれに包まれた。

闇が浅く。

風の香りが強く。

遠い虫の羽音が聞こえる。

五感が 研ぎ澄まされる。

ボウリング場まで一キロ強。急げば五分もかからない。

「今度の人も、やっぱり？」

と、問いかける声が後ろから聞こえる。

「ああ」

俺は意識して抑揚なく答えた。

「もう“暴走”してる」

「そう……」

チラツと斜め後ろに視線を送った。

銀色の髪。

冷たい目。

それでも、その瞳の奥には少しだけ悲しみの色が宿っているように見えた。

未だに慣れていない。

慣れるわけがないか。

見えた。

ボウリング場の駐車場にワゴン車が止まっている。

さっき 暴走した青年の意識の中で 見たものとまったく同

じだった。

間に合うだろうか。

懸念したちよūdそそのとき、建物の奥に懐中電灯の明かりが揺れているのが見えた。

「雪！ 一階を頼む！」

「うん！ ……気をつけてね」

俺は無言で頷くと、渾身の力を込めて地面を蹴った。宙に浮かんだ体は悠々と二階の窓まで達する。窓ガラスは割る必要のない状態だった。

ダン！

着地と同時に床が大きな音を立てる。

これで、少しでもこちらに気を取られてくれれば

悲鳴が聞こえた。

どうやら敵は二階にいるようだ。

散らばったガラスの破片を踏み壊しながら駆ける。

駆ける。

いた。

床に転がった懐中電灯。地面に腰を下ろした男。そして

赤い瞳の青年。

夜魔

その赤い瞳は、空間を操る夜の一族である証だった。

「待てええええっ！」

躊躇せず牽制の言葉を放ち、俺は右腕を夜魔へ向けた。その右腕からまるで噴水のように炎が溢れ、夜魔へ向かって一直線に伸びる。

「!?!」

突如として現れた闖入者に、夜魔はその赤い瞳を見開き、と同時に後ろへと飛んだ。

瞳が赤く輝く。

ボン、と気の抜けたような音を立てて四散する炎。

(衝撃波か……)

夜魔が得意とする力だ。その力が使える相手となると、少々手ごわいかもしれない。

とりあえず、座り込む男と夜魔の間に割り込んだ。

幸い男はまだ無事のようだ。

「動けるなら逃げろ」

それだけ言つて敵の動きを注視した。

腰が抜けているのか男は動かない。このままやるしかなさそうだ。

「う……ガ……」

幸い、夜魔の注意は完全に俺に向いている。生存本能が殺戮の欲求を上回ったのだらう。

つまり 夜魔は、俺を、自らを危地に誘う敵であると認識したのだ。

（雪は……）

なかなか上がつてこない。

少し嫌な予感がした。

いや、いずれにせよ敵もそうは待つてくれない。とりあえずここは俺一人でやるしかなさそうだ。

「ガアアアアツ！」

理性を失つた赤い瞳が俺を睨み付ける。

それが、赤い輝きを放った。

空間が、歪む。

（来る つ！）

夜魔の力は高威力だ。相殺は不可能ではないが難しい。

だが、その代わり

（直線的で、避けやすい ！）

軸を大きく横にずらす。背後の壁が破壊の音を立て、ひっ、という男の息を呑む音が聞こえた。

「!？」

一撃で仕留められなかったことに、夜魔は戸惑っている。

次の一撃は来ない。

戸惑っているせいか。あるいは溜めが必要なのかもされない。いずれにしてもチャンスだ。

躊躇わずに距離を詰めた。

力を込めた右腕が炎を纏う。

「俺を恨むなよ」

ああ。

俺もきつと 慣れてはいないのだ。

拳が夜魔の腹部に吸い込まれる。

嫌な感触。

喧嘩で相手を殴るのは根本的に違う。その右手が砕くのは肉で

も骨でもない。

命だ。

「っ……！」

奥歯を噛み締める。

握り締めた拳に力を込めると、夜魔の全身が一瞬で炎に包まれた。

断末魔の叫び。

いつ聞いても、気持ちのいいものじゃない。

「優ちゃん……」

戦いを終え、一階に下りる途中で雪と鉢合わせる。

雪は俺の表情から終わったことを察したのか、ホッと胸を撫で下ろし、そのあと少しだけ悲しそうな声で言った。

「女の人、下で……間に合わなかったよ」

「……そうか」

一人ではないと思っていたが……雪がなかなか上がってこなかったのは、その女性を助けようと試みたからなのだろう。あるいはまだ息があつたのかもしれない。が、普通の人間が夜魔の衝撃波を受けたのでは、助かる見込みはほぼない。

「夜魔を一人やつつけた。今回の仕事はここまでだ」

俺は勤めて明るい声を出した。

俺たちにできるのはここまで。あとは警察の仕事だ。あの男はきっと警察に見たままを喋るのだろう。だが、不思議とその内容が新聞に載ることはない。ただのたわ言だと切り捨てられているのか、あるいは何か別の力が働いているのか。

いずれにしろ俺たちには関係のないことだ。

俺たちは、ただ

「帰ろう。優ちゃん」

そ、っと、雪が俺の服の袖を掴んで身を寄せてくる。
「だな」

外に出ると火照った体に冷たい風が纏わりつく。

月は厚い雲の奥だった。

明日は 雨か。

ワゴン車の助手席に残されたスカーフが、古い記憶を刺激する。

雪が微かに息を詰める。

俺と同じことを思い出したのだろう。

「……」

耳鳴りはもう聞こえなくなっていた。

それでも そう。

一人でも、助かって良かった。

俺はそう思った。

「遅くなっちゃったね」

「あー」

もう二時近いだろうか。

五百メートルほど歩いて、雪のそんな言葉に、ようやく緊張の糸が切れた。

（明日は寝坊確定だな……）

「朝ごはん、どうする？」

隣を見ると、雪の髪はもう銀色ではなくなっていた。

俺を見つめるのは、いつもどおりのふわりとした笑顔。

「たぶん起きれないし、いいわ」

「ん」

「お前は朝強いよなー」

「双子だもの」

「ん？」

「優ちゃんが弱いところは、私が強くてちょうどいいの」

「そういうもんか」

そういうものなのかもしれない。

ちょうど眠気も襲ってきた。

以前は、こういう日は一睡もできなかったものだが　やはり少

しは慣れてきているのかもしれない。

「ね、優ちゃん」

「なんだ？」

雪は、どうなのだろう。

もしかすると朝までずっと起きているのかもしれない。

「あんまり瑞希ちゃんをいじめちゃ、ダメだよ」

「……はあ？」

何を言い出すのかと思えば。

「どっちかつつーと、いじめられてるのは俺の方　　ってか、今言

うことなのか、それ」

「うん」

と、雪は真顔で頷いた。

我が妹ながら、わからないヤツだ。

雲に覆われた暗い空を見上げる。

あと二、三時間もすれば、この深い夜も明け、またいつもの日常

が始まる。明日からはまた　今夜のことがまるで夢であったかの

ように　いつもどおりの日常が始まるのだ。

このとき、俺はそう信じて疑わなかった。

五月に入ったとある雨の日に、あの事件が起きるまでは

1年目4月その4

俺たちの家の隣は現在空き地となっている。

現在、というからには空き地ではなかった時期があるということだが、そんなに遠い昔のことじゃない。今からちょうど一年半前、俺たちが中学二年の十一月までそこには家があつて人が住んでいた。三十代の夫婦に小学生と幼稚園児の四大家族。父親は公務員、母親は二日に一回ぐらいのパートをしていると聞いた。二人の男児は、雪によく懐いていたが、健哉という名の小学三年生の上の子供は、俺の姿を見ると何も言わずに蹴りを入れてくる生意気なやつだった（もちろんそのたびに制裁を加えてやったが）。

.....

明晰夢というらしい。

俺が今見ている、この夢のことだ。

つまり自分で夢であると自覚しながら見ている夢のことである。何度か見たことがあったので、何の夢かはすぐにわかった。

夢の中の俺たちは中学二年生。

風が急激に冷たさを増した十一月、夕方からは小粒の雪がチラチラと降り始めていた頃。

パチ、というあの奇妙な耳鳴りが初めて聞こえた日の記憶だ。

『積もると思うか？』

夢の中の俺は台所で洗い物をする雪にそう問いかけた。

『うん』

台所からそう答えた雪は、やはり今より少し幼い。

『かまくらは作れないけど、小さな雪だるまぐらいなら作れるかな？』

『いや、そんなことは聞いてないが』

雪は不思議そうな顔をした。

『作らないの？ 雪だるま』

『作るのが当たり前のように言われても困るが……お前は作るのか？』

『うーん』

少し首を傾けて考える仕草をする。

『優ちゃんがどうしてもって言うなら』

『言っていないし、言うつもりもない。……終わったぞ』

テーブルを拭き終わって布巾を台所まで持っていく。

『ありがと、優ちゃん』

『おう』

別にテーブルを拭いただけで礼を言われるほどのことではないのだが、まあいつものことなので敢えて偉そうにそう答えておく。

その後は特にすることもなく、ただソファに座ってテレビを眺めていた。時折、居間の大きなガラス戸から外を眺めて積もり具合を確認する。庭はうっすらと白い物に覆われており、この勢いで朝まで降り続いたらそこそこに積もるのではないかと思われた。

『どう？ やっぱり積もりそう？』

『かもな』

『ね。二階のベランダに出てみない？』

『ん？ ああ』

俺と雪の部屋は二階にあり、ちょうど俺たちの部屋の間には大きなベランダがある。そこは眺めも良くて町並みを見るには最適の場所だった。

断る理由もない。どのくらい積もっているのか興味もあった。

そうして俺たちは二階へと上がる。

二階には部屋が四つ。そのうち南側に位置しているベランダを角に挟んで繋がっているのが俺と雪の部屋で、他の二室と一階の和室は来客用になっているが、俺たち以外でこの家に泊まるとすれば伯

父さんと伯母さん、従姉の瑞希がたまーに来るぐらいでかなり持て余している状態だ。

なんというか、ホント、俺たち二人だけで住むには広すぎる家なのである。

伯父さんなどは『お前らが結婚した後でも使えそうでいいだろ』なんて言うのだが、結婚後も同居する兄妹なんてあまり聞いたことがないから、たぶんその活用方法は実現しないままで終わるだろう。二階のホールからベランダへと出た。ベランダは俺と雪の部屋からも繋がっていて鍵さえかけなければ自由に出入りすることができるようになっていいる。

ひゅうつ、と。

ドアを開けた瞬間、冷たい空気が家の中に飛び込んでくる。

『……寒いな』

俺も雪も部屋着のままなので外の空気は当然のように冷たく、頬には針で突いたような軽い痛みを感じたが、少しぼーっとしていた頭が覚醒していく心地よさもあつた。

『気持ちいいね』

雪も俺と同じような感想を漏らした。

冬産まれだからだろうか。それとも両親が氷魔族という氷の悪魔だったからだろうか。俺も雪もどうやら夏よりも冬のほうが好きな類らしかった。

十畳ほどもあるベランダの手すりに向かい、そこに腕を乗せて町の景色に視線を移す。ところどころで街灯に照らされた空間がうつすらと白くなっているのが見えた。

『また強くなった、かな？』

雪も俺の隣にそつと並んで、同じように町並みを眺める。

『もしかしたら、かまくらも作れるかも。ね？』

『……作らないぞ』

まさかと思うが、こいつの場合は本当に作りかねない。

そうして三、四分ほども眺めていただろうか。

『さて、と。いい加減、風邪引いちまう
手すりから離れる。』

『うん』

雪も頷いて手すりから離れた。
と。

『…………あれ？』

雪が怪訝そうに動きを止めたのと。

パチ、という奇妙な耳鳴りが聞こえたのはほとんど同時だった。

パチ。

パチ

『どうした？』

右耳を軽く抑えながら雪の元へ戻ると、

『うん…………』

雪は何やらはつきりとしらない口調で、

『なんだか、変…………』

その視線を追う。

手すりの向こう。

町並みよりはずっと近く。

丁度隣家のある辺り。

『何が変だって？』

『…………』

『おい、雪』

パチン。

ガシャン…！

何かが割れる音。

それは確かに隣家の中から聞こえた。

『？』

俺たちは顔を見合わせて同時に隣家へと視線を戻す。

カーテンが閉まっているので中の様子はわからなかった。夫婦喧嘩だろうか。いや、あそこの夫婦は馬鹿みたいに仲が良い。まだ子供も起きている時間だ。

それに

『なんだ、あれ……』

カーテンが揺れている。

窓が開いているわけでもないのに、まるで風に煽られているかのように、バタバタ、と。

『優ちゃん……』

雪が不安そうな顔で俺を見ていた。

俺も嫌な予感がしていた。

『……何か、あの家の中で悪いことが起きているのかもしれない。行ってみよう』

最初に目に飛び込んだのは、床に倒れているおじさんの姿。少し離れたところにつつぶせに倒れるおばさん。

その両腕に抱えられるようにして二人の子供。

血まみれになった、四人の家族と

色白の、狂気色の瞳の

ああ。

そして思い出す。

自分が“今の自分”であること。

どうやら俺はいつの間にか夢の中に取り込まれていたらしい。

夢は再び明晰夢となった。

俺がこの力に目覚めたのは小学校五年生のとき。

雪が目覚めたのはそれから三年ほど後、中学二年のときだった。

この世には“悪魔”と呼ばれる異能の生物がいる

伯父さんから聞かされたそんな突拍子もない話も、自分がその“悪魔”だったというのだから信じざるを得なかった。俺たちの伯父つまり瑞希の父親は、何故かその手の話に詳しく、俺が持っている知識はそのほとんどが伯父から得たものだ。

悪魔がずっと昔からこの地に存在していたこと。

俺たちの両親が悪魔であること。

この地には悪魔の血を引くものが多く残っていること。

そして悪魔の血を引く者は時折、その血が持つ本能 破壊の衝動に侵され“暴走”することがあるということ。

一度暴走した者は何があるうと決して元には戻らないこと

隣家の四人を襲ったのは“暴走”した、近所に住む大学生の男だった。

男はそのまま俺たちにも同様の牙を向け

俺たちはその日、初めて他人の命を奪った。

すぐに割り切れたわけじゃなかったと思う。

ただ、その後、しばらくして俺と雪は“暴走”した悪魔を探して退治するようになった。

「何も無い平穏で退屈な日つてのも、考えてみりゃ結構贅沢なもんだよなあ」

「? どうしたの、突然」

と、変な顔をしたのは瑞希のヤツである。

「いや」

俺は軽く手を振って答えた。

「どうも我が家には最近、ところ構わず蹴りを入れてくる危険な生物が住み着いたらしくてな。……過去の平穏な日々を思いを馳せてみただけだ」

「ちよつと。喧嘩売ってるの?」

「すまん。つい正直な感想が口をついちまった」

敢えて挑発的にそう言うと、睨み合いが始まった。

「二人とも。そんなところで立ち止まったら迷惑になるよ」と、雪。

デパートの入り口で睨み合う俺たちを通りすぎる人たちがチラチラ見ながら過ぎていく。

「……」

「……」

さすがにその場は一時休戦となった。

四月最後の日曜日。

この日、俺は雪や瑞希とともにデパートにやってきていた。

当たり前のことだが、親のいない俺たちは炊事・掃除・洗濯・ゴミ出し等々、家事のすべてを自分たちでこなさなければならぬ。

今日はいわゆる食料の買い出しというやつで、俺は“たまたま”家で暇そうにしているとところを荷物持ちとして借り出されてしまったわけである。

傍目に見れば両手に花で他人から羨ましがられる状況なのかもしれないが、実際は、さっさと前を歩く女二人の後ろを荷物を持ちながらトボトボついていく男一人という状態であり、かなりトホホな状況である。もし代わりたいたいなんて奇特な人間がいるのなら、今すぐにも代わってやりたい気分だ。

そもその話、男女平等のはずのこの現代において“男だから”という理由で荷物持ちやら力仕事やらに駆り出されるのはどういうわけだ。理不尽じゃないか。

と、いうような趣旨の発言をすると、間髪いれず瑞希に突っ込ま

れた。

「っていつか、あんた、炊事も掃除も洗濯も雪ちゃんに任せっきりじゃない。こういふときぐらい役に立たないと存在価値なくなるわよ」

「……」

その言葉自体はごもつともと言うしかない。

生活能力皆無の俺と違い、妹の雪はいわゆる家事全般についての完璧超人だ。俺がだらしないから必要に迫られてそうなっただけという噂（？）もあるが、まあ、それでも文句の一つも言わず毎日俺のパンツを洗ってくれているわけだから、その点については頭が上がないのも確かである。

が。
それを瑞希のヤツに指摘されると、それはそれでやはり腹立たしいわけ。

「お前こそ」

と、例によつてしようもない反論をしようとしたそのとき。

「今日の晩御飯は優ちゃんのリクエストだよ。付き合ってくれたごほうびに、ね？」

くるつと振り返った雪がニッコリと微笑んで、

「なにがいい？」

絶妙なタイミング。

俺は完全に反論するタイミングを失ってしまい、

「……ロールキャベツ」

なんて、正直に返してしまつたのであった。
さて。

俺たちがやってきたのはこの町唯一の百貨店である。二階建てでそんなに大きくはないが、ここに来れば必要なものは一通り揃う。それほど都会でもないこの町の人間にとっては重要な生活の拠点というわけだ。

しかしまあ。

一通り揃うつてのは便利なこともある反面、それに伴う弊害もあつたりする。

「……ね、瑞希ちゃん。これ見て」

「あ、可愛いわね」

「……」

「雪ちゃん。これ似合うかしら？」

「うん、いいと思う」

「……」

（こいつら……）

両手に荷物を抱えたまま忘れられた俺は、デパート内にある女性用の衣料品専門店で、はしゃぐ二人の後ろ姿に殺意にも似た視線を送り続けていた。

ロールキャベツなんぞで懐柔されてしまった自分が馬鹿だった。

（こんなところ、学校の奴らには見せられないな）

イメージ、というものがある。

こう見えて俺は学校では一応、クールな男で通っている（多分）。それが、両手に買い物袋を抱え、こんな店の入り口で立ち尽くしている姿を見られた日には

「おーい、し、ら、ぬ、い〜！」

「！」

心臓が飛び出るほど驚いた。

いや、マジで。

嫌な予感とともにおそるおそる振り返ると、エスカレーターのある方向で見覚えのある女子がぶんぶんと手を振っている。

くせつ毛のショートカット。まるで猫のようになると表情の変わる好奇心旺盛な瞳。

どこからどう見ても知り合いだった。

「……こら、藍原。一文字一文字区切って呼ぶんじゃねえ」

ジーパンに飾りっ気のないTシャツ姿。全体的にスレンダーでしなやかな、まさに猫娘といった印象の少女。彼女の名前は藍原美弥あこはらみちや

という。同じクラスの女生徒で、由香や直斗、将太といった中等部からの友人を除けば、俺の高校での初めての友人、ということになるだろうか。

ついでにいうと、由香以外では今のところ高等部唯一の女友達である。

「えー、だつてさあ、不知火って呼ぶの、なんだか恥ずかしくない？ 語感的に」

「人ん家の苗字を馬鹿にしてんのか、お前は」
「そんなんじゃないけどさ」

言つて、藍原はあははと笑う。

もうこの辺で察しの良い人ならわかつてもらえると思うが、こいつはうるさい、しつこい、馴れ馴れしいの三拍子揃つた、いわゆる“やかまし”型のキャラクターだ。イメージ的には将太の女版というところかもしれない。

「で、何の用だ？ 金なら貸さないぞ」

「あはははは。お金借りるなら不知火のところに来るわけないじゃん」
「どういう意味だ」

聞いておきながら自分でも馬鹿馬鹿しいと思つた。

「だつて不知火、いかにもお金持つてなさそうだもんね」

正論すぎて何も言えない。

ちなみにウチの家計は妹の雪が全権を握つていて、俺には毎月一日に小遣いが支給される。そして今は月末。財布の中の惨状は敢えて語るまでもないだろう。

「でも、そーだなー。パフェ一個分ぐらいのお小遣いは残ってるのかなー？」

「は？」

「だつて、ほら」

にんまりと笑つて、藍原は視線を落とす。

「学年一クールでニヒルな男、不知火優希がまさかデパートで荷物持ちとはねー。連れはいつたい誰なのかにゃー」

「……………」

予想通りすぎる展開に涙が出てきた。

「もし口止めが必要だったりするのなら、パフェ一つぐらいで手を打つよ?」

「ぐ……………」

なんでこんなヤツと知り合ってしまったのか。半月前の自分を呪ってやりたい。

と、まあ。

そんなやり取りをしている俺たちに、雪と瑞希の二人が気付かないはずもなく。

「あれ? 優ちゃん、その子…………お友達?」

「およ?」

やってきた雪と瑞希を見て、藍原は目をまん丸にした。

「不知火、まさかまさかの二股? しかもこんな可愛い子たちと?」

「…………んなわけあるか」

やはり予想通りの反応に頭が痛くなったが、俺にとっては幸いなことに財布の危機は乗り切れそうだった。

「妹さんねえ。へええ〜」

デパートから帰る途中の喫茶店『三毛猫』。

そこで、俺たち三人はテーブルを囲んでいた。三人つてのは俺と雪と藍原のことで、瑞希のヤツは部活の先輩から電話がかかってくることになっているとかで先に家に帰っていた。

「不知火とはゼンゼン似てないねえ」

雪の顔をまじまじと見つめて藍原はそう言った。

俺はふふんと鼻を鳴らして、

「そうだろうそうだろう。こいつときたら、超美形なこの俺様と血がつながっているとは思えないほど平々凡々な」

「雪ちゃん、あたしと結婚しよう!」

「聞けよ！　つか、どさくさに紛れてなに言ってるの、お前！？」
雪の手を握ろうとした藍原の手を払いのける。

すると藍原は唇を尖らせて不満そうに、

「えー、なにそれ。独占欲？　不知火つてもしかしてシスコン？」

「なんでそうなる！」

「ムキになるところが余計アヤシイ……」

「お前の言動ほど怪しくねーよ！」

思いつきり突っ込んでやると、藍原は両手を頭の後ろで組んでケラケラと笑った。

「冗談、冗談。そのぐらい妹さんが可愛らしいってことを表現したかったわけだよ、キミ」

「本気であつてたまるかよ……」

そんな俺たちのやり取りに、隣の雪がクスクスと笑いながら言った。

「大丈夫だよ。優ちゃんがシスコンなら私はブラコンってことでいいから」

「ちつとも大丈夫じゃねー！」

「いやあ、わかるわかる。こんだけ可愛い妹さんなら誰にも渡したくないってな気持ちにもなるよねえ」

「……だから違つて……」
なにこれ。

なんで俺、罰ゲームみたいな立ち位置になってるの？

「いやあ、でもそっかあ。ふうん。不知火にこんな可愛い妹さんがねえ」

「可愛い可愛い連呼すんなっての。大袈裟すぎるんだよ、お前は」
「うん」

にこやかに同意する雪。

「美弥ちゃんのほうが可愛いよ。ね？」

「いや、さすがにそれはない」

即座にそう言ってるやると、

「うわ、ひどい！」

案の定藍原は不満そうに口を尖らせた。

「わかっているけど地味にシヨックだから即答すんなよ〜！」

「仕方あるまい。これは真理だ。俺が学園一の美少年だということと同じぐらい真理をついている」

今度は雪が即座に言った。

「じゃあ、やっぱり美弥ちゃんのほうが可愛いね」

「……お前、それはどういう意味だ？」

俺が無然とした顔を見ると、雪はニコニコしたままで答えた。

「だって優ちゃんは“美少年”じゃなくて“美青年”だよな？」

「む……」

どこからどう見ても完全なるフォローなのであるが、こいつのフォローはまるで最初から容易されていたかのような自然である。美少年と美青年という言葉に対する俺のイメージを完璧に見抜いた上で、俺がどちらをより好むかを判断した上での鮮やかな戦術だ。

……手玉に取られているような気がしないでもない。

「ところで雪ちゃんは」

「……あ、うん。それは」

どうやら女同士の会話が始まったらしい。

空気を察し、俺はしばし窓の外を眺めることにした。

この喫茶店『三毛猫』はデパートからの帰り道であると同時に、俺たちが通う風見学園と、雪たちが通う桜花女子学園のちょうど真ん中にあり、平日のこのぐらいの時間になると学生たちが頻繁にこの前の道を通る。

今日は休日なので顔見知りに出会うことはまず考えなくていいが。

と。

（おや……？）

そう思っていたのだが、俺はその通りを歩く人々の流れの中に見知った一つの顔を見つけた。

直斗のやつだ。

しかも直斗は一人ではなかった。その隣を歩いているのは同じ年ぐらいの少女で、最初は由香のやつかとも思ったが、長い髪を両側で三つ編みにしていたので、すぐに違う人物だとわかった。

（ああ、あれが神村とかいう人か）

入学式に見た後姿と将太から聞いた話を組み合わせてイメージすると、どうやらその少女が神村沙夜という人物であることは間違いないなさそうだった。そうして改めて見てみると確かに、中学三年のとき同じクラスにいたような気がする。

（うーん……）

将太のヤツはあの二人が付き合っているとかなんとか言っていたが、特別親密な仲であるようには見えなかった。というか、見た感じ、会話が交わされているのかすら怪しい雰囲気だ。

その二人は当然のように、店の中の俺たちには気付くことなく通り過ぎていった。

（ま、いつか）

呼び止めても仕方ないだろう。まったく興味が無いといえばそれは嘘になるが、将太ほど野次馬根性が旺盛でもないのだ、俺は。

そうして窓の外から視線を戻し、雪たちのほうに振り返ろうとした、そのとき。

カラーン。

「え」

店のドアが開いて、なんと、通り過ぎたと思った直斗たちが店の中に入ってきたのである。

雪と藍原の二人もすぐに気付いた。

「直ちゃん？」

「あれ、神薙じゃん。おーい！ か・ん・な・ぎょ！」

と、藍原が叫んで直斗に向かって手を振る。

「藍原さんに優希？ それに雪まで」

直斗は少し不思議そうに俺たちを見た。

「…………よお」

俺が軽く手を上げると、直斗はそんな俺の表情を見て何事か納得したような顔をした。

何故か無性に悲しくなった。

「ねえねえ、神薙。隣の子って彼女お？」

藍原が好奇心丸出しでそんなことを尋ねる。

「え？ ううん、違うよ。せっかくだからみんなに紹介しようかな

…………って、優希は本当は知ってるはずなんだけど」

直斗はそう前置きしてから、

「神村沙夜さん。優希とは中三のときに同じクラスだったよね」

何度も言うのが俺の記憶にはない。

が、

「はい」

頷く神村さん。どうやら向こうは覚えていたようだ。…………なんとなく罪悪感。

「で、そっちの子は優希の妹の雪。双子だから同じ学年だね。そっちが僕と優希のクラスメイトで藍原さん。藍原…………美弥さんだったっけ？」

俺ほど藍原との接点がない直斗は少々自信なさげだったが、

「そうそう」

「よろしくね。えっと…………沙夜ちゃん」

と、雪がニッコリと続ける。

神村さんはもう一度、今度は無言で小さく頷いた。

リアクションが薄い。

(…………ふーん)

そういえば将太が言っていた。あまり社交的な人物ではないらしい、と。俺も自分ではあまり積極的に他人と関わるタイプではないと思っっているが、第一印象からすると俺以上のようなようだ。

神村さんは何故か雪のことをじっと見つめていた。

いや、もしかするとたまたまその辺りに視線があっただけなのか

もしれない。

「えっと……」

他の連中も神村さんの独特の雰囲気を感じ取っていたのか。いきなり沈黙となってしまうた場の空気に、藍原が少々困ったような声を上げる。

やがて、

「……帰ります」

「え？」

突如としてそう言った神村さんに、直斗がびっくりした顔をする。

「でも僕に話があるって」

「また今度にします。今日でなければならぬわけではないので」
神村さんは抑揚のない口調でそう言うと、止める暇もなく店を出て行ってしまった。

「……なんだ、ありゃ」

ついついそんな言葉が口をついてしまった。

変わり者だ。それもおそらくはあまり良い意味ではない方の。

直斗は困ったような顔をして、

「無口な人だからね……」

「いや、無口っつーか」

「なーんか無愛想な子だね」

と、藍原が 嫌悪、いうほどではないが、やはりちょっと気分の悪そうな顔で言う。

「うーん。悪い子じゃないんだけどね」

直斗がフォローする。

「いや、まあ無愛想なのは性格だろうしそれだけで悪いとは言わんが」

「え、そう？」

藍原が否定的な声を出す。

「無愛想な人とはお友達になれないな、あたし」

「……お前、それでよく俺と話してられるな」

すると藍原は不思議そうな顔をして、

「え、なんで？ 不知火つてば無愛想どころかゼンゼン面白いじゃん」

「……」

好意的な意味なのだろうとは思うが、まったく嬉しくない。

「直ちゃん」

と、そこへそれまで黙っていた雪が口を開いた。

藍原と違ってあまり気を悪くした様子ではない。……まあこいつの場合、そういう負の感情を見せること自体滅多にないのだが。

「向こうの約束が先だったんだよね？ だったら追いかけたほうがいい、かな？」

「あ、うん。そうするよ。ありがとう、雪。優希、藍原さん、ごめん」

「いや、謝る必要はないが……」

「それでもごめん」

そう言っただけでもやはり店を出て行ってしまった。

結局、元の三人だけとなる。

「……はあー、神薙もなんだか大変だねえ」

と、藍原は妙に同情的な感想を漏らした。

確かにさっきのは、端から見たら彼女を怒らせてしまっただけの男の図、に見えなくもない。まあ直斗のヤツが言うのだから“そういう関係”でないのは本当だと思うが。

「不思議な子、だったね」

と、雪。

ずっと黙っていたのでどんな感想を持ったのかと思っていたが、どうやら第一印象は俺たちと大差なかったようだ。

と、思ったら、

「でもいい子そうだね。沙夜ちゃん」

「……」

「……」

俺と藍原は顔を見合わせた。

なんだろう。変わり者同士、どこか通じ合うものでもあったのだからか。

(そういや、神村さんも雪のことじつと見つめてたなあ)
なんか変な趣味の持ち主でなければいいが。
なんて。

そのときは特に深いことも考えず、1時間もすると彼女の存在自体俺の頭の中から消え去っていたのだった。

-
-
-
-

夜闇がいつそう深さを増す。

ハアツ、ハアツ。

濃い闇の中、必死の息遣いが路地に響く。

人気のない工業地区。

悲鳴も届かぬ閑散とした地域。

男が走っている。

必死の形相。

絶望に満ちた瞳。

月は厚い雲に覆われていた。

風は生温い。

追う者と追われるモノ。

この闇の中では、時折その立場が逆転することがある。

「！」

必死に逃げていた男がハツとして正面を見据えた。

男の耳は大きく尖っている。それは男が“人”ではないことの証。その視線の先に、誰かが立っている。

「お前」
視線の先にいた人物。

闇の中から浮かび上がったのは長身の男性か女性か。この闇の中では見分けが付かない。

「……お前ら、一体なんなんだよ！」

叫びながら、男が地面を蹴る。

逆方法に向かって。

賢い選択だった。

ただ

「!?!」

「無駄だ。下級水魔」

急に足が動かなくなつた。まるで底なし沼に捕らわれてしまったかのように。

なにかが両足を押さえている。が、闇の中に目をこらしても何も見えない。

「ちっ……!!」

男は瞬時に逃げるのを諦め、向き直つて利き手を“敵”へと向ける。

その空間の湿度が急激に濃くなって、水の飛礫が飛んだ。

「……」

“敵”は微かに指先を動かす。

パン。

「!?!」

パン、パン、パパンツ!

何も見えない。

にもかかわらず、男の放つた水飛礫はすべて空中で四散した。

「貴様」

驚きの声を上げる間もなく、

「!？」

“敵”の姿は男の眼前にあった。
そこでようやく。

男は 目の前の人物が女性であることを知った。
胸の辺りに鋭い痛み。

心臓を一突き。

紛れもない致命傷

「ぐ……あつ……」

ゆっくりと倒れこむ。

薄れ行く意識の中

「 緑刃様」

「来たか。後を頼む」

闇から現れた仲間らしき人物。二人の手馴れたやり取りが混濁した意識の中で聞こえた。

そうして男は彼らの正体を知る。

「おまえ……ら……は……!」

聞いたことがあった。

会ったのは初めてだ。

……当然だろう。過去に出会っていたならば、おそらくその日以降の男の歴史は存在しなかったに違いないのだから。

「あくま……が……り……」

それが男の最後の言葉となった。

「 緑刃様。先日の力の持ち主、正体が掴めました」

「この町の住人か？」

「はい。どうやら町の女子高に通う、十五歳の少女のようです」
「……」

緑刃と呼ばれた女性は微かに眉をひそめ、そして続ける。

「紫喉様はなんと？」

「危険な存在である、と」

「そうか。……“御門”へ戻る。あとを頼む」
「はい」

そういつて緑刃は背を向けた。

“悪魔狩り”

その名のとおり、悪魔の存在を否定し、それを狩る者。
それはこの町の闇に暗躍するもう一つの非日常だった。

1年目5月その1

「……昨日よ。小さい頃の夢見たんだけどな」

五月に入って数日が経過したとある朝。登校風景はいつものとおり、俺、直斗、由香の三人で、違うところといえば俺が珍しく一回で目を覚ましたため、ゆったり登校できているという点ぐらいである。

右隣に由香、左隣に直斗。何故かはわからないが意識しないといつもこの並びになる。いわばこれが俺たち三人の定位置だった。

「夢？」

直斗と由香の二人が俺の発言に注目する。

「ああ」

俺は今朝見たうる覚えの夢を思い出しながら言った。

「いや、別にどってことない昔の夢んだけどな。ちょっと不思議なことがあってよ」

「不思議なことって？」

直斗が聞いてくる。

「小さい頃から俺らって一緒にいたよな？」

「うん」

「俺と雪、お前と由香と　まあ、そこまではいいんだが」

俺はそこで一回言葉を切ると、

「もう一人、いなかったか？」

「え？　なにが？」

「だからよ。俺たち四人の他にもう一人いなかったっけ？　結構頻

繁に遊んでたヤツ」

直斗と由香が顔を見合わせる。

由香が聞いてきた。

「なんていう名前の子？」

「……」

その言葉に俺は無言のまま右手を伸ばし、由香の長いポニーテイルを軽く引つ張った。

「痛っ！」

由香が慌てて髪を押さえる。

「馬鹿。それがわかつているなら誰も考え込んだりしない」

「うっ、ごめんなさい」

由香は髪を押さえてちよっと泣きそうになりながら謝る。

「少なくとも僕の記憶にはないけど……」

と、直斗が少し考えながら答える。

「いや、絶対いた。……はずなんだが、どんな奴だったかちゃんと思い出せないんだよな」

「うーん……」

そんな俺の言葉にも直斗はまったく思いつけない様子だったが、
「……あつ。そういえばいたような気がする！」

意外や意外。直斗より記憶力が断然弱いはずの由香が急にそう言った。

正直あまり期待していなかったのだが、由香は自信ありげに、

「あの、ちよっと怖い感じの男の子でしょ？」

「それだ！」

俺はビシッと由香を指さす。

「怖い感じの？」

直斗は相変わらず首を傾げていた。こういうときはいつも最初に思いつくはずなのだが、今回はまったく思いつけないらしい。

俺の方は由香の発言のおかげで記憶の輪郭がかなり鮮明になっていた。

小学校低学年の頃だ。由香の言うとおりで、どちらかというところ調性がなく、乱暴者という印象がある。俺とは仲が良くなかったいや、一緒に遊んでいた以上は悪くなかったのだろう。ただ、いつもつまらない意見の食い違いで対立していたような気がする。
「えっと……なんて名前だったかなあ？」

由香は考え込んでいる。

「確か、か、き、く、け、このどれかで始まる名前だと思ったんだが……」

俺がそう言うと、由香はパツと顔を輝かせて、

「あ、そうそう！ か……か……かおるくん？」

「んー……うむ。なんかそんな名前だった、確か」

あまりピンとはこなかったが、

「どこ行っただらうな、かおるのヤツ」

そんなこんなでこの日の登校時間は謎の人物“かおるくん”の話題で盛り上がる。ちなみに直斗の奴は最後まで思い出せなかったらしく、ほとんど会話に参戦してこなかった。

「いやーっ、やっぱり午前授業はいいよなあ！」

窓の外に広がる五月晴れのようにすがすがしい気持ちをそのまま口にして、俺は自分の席で大きく伸びをした。

今日は午前授業、しかもたったの二時間で終了である。なんとという開放感。

休日でもないのにお昼の番組がリアルタイムで見れてしまうのだ。

「見る、直斗！ なんと十一時前に学校が終わってしまったぞ！
素晴らしいことだとは思わんか！？」

ちようどやってきた直斗と喜びを共有しようと声をかけると、

「確かにね。でも……」

そう言ってニツコリ笑い、

「肝心のテストはどうだったの？」

「……何の話だか。俺にはさっぱり」

俺はエセ外人のように（？）手の平を上に向けて腕を軽く広げてみせる。

「知らない振りをしたってテストの結果はいずれ返ってくるよ」

「ぐ……いらんことを」

今はいわゆるテスト週間で、今日はその初日だった。

世の中おいしい話ばかりではないということか。

「あ……！ まだ一日目だあ……！」

俺はさつきまでと正反対に、そんな叫び声をあげて机に突っ伏す。晴天の空に浮かぶ太陽ですら憎憎しく思えた。

「調子はどうなの？」

俺の状態を見ればわかるだろうに、直斗はそんなわかりきったことを聞いてくる。

「悪い。勉強もしていないしな。……ま、今日のところは全然分からなかったってほどじゃねえけど」

「じゃあ明日から頑張ればいいよ。今日だってこれからたくさん時間あるじゃない」

「だりい……」

「うーん」

直斗は苦笑して、

「そっか。去年までと違って、雪に教えてもらうわけにもいかないんだもんね」

教科書が違っし、と付け加える。

俺は無然とした顔を上げて直斗を見ると、

「何だよ。それじゃあ、俺がいつも雪の奴の世話になってたみたいじゃないか」

「あ、そっか、ごめん」

直斗は満面の笑みを浮かべて、

「勉強自体してなかったもんね」

「……お前って本当に笑顔で毒舌ヤローだな」

嫌味っぽく言っつてやっても直斗はあまり気にしてない。そういうヤツなのだ。

そんなやり取りをしていてふと気付くと、教室内にはほとんど人がいなくなっていた。テストが終わったあとの教室ってのはどうし

てこうも人の引きが早いのだろう。

「みんな帰って勉強するんじゃないの？」

「諦めて遊びに行くってやつもいるはずだぜ」

なんてことを言いつつ、俺はまだ後者ほど落ちぶれてはいない、つもりだ。

「さ、帰るか……」

そう呟いてカバンを手に立ち上がるうとしたとき、

「神薙さん」

「ん？」

少し離れたところから直斗を呼ぶ声。

見ると、教室の入り口に見覚えのある女生徒が立っていた。……前に会ったときは私服姿だったからだろうか、少々違和感があったが、それは先日喫茶店で遭遇した他クラスの生徒、神村さんだった。(かみむら……さやだっけ。いや、さよ、だったかな)

将太の例のメモ帳に載っていた“沙夜”という漢字だけ覚えていた。

(どうでもいいけど、なんでこんなに姿勢がいいんだ、この人?) 足音も立てずに教室内に入ってきた神村さんは、まるで背中規定でも入れているかのようにピンとした姿勢だった。お下げ髪といい、どこことなく古風な感じの子だ。和装なんか似合いそうな気がする。

(……ってか、神社の娘なんだっけ)

それも将太の情報の中にあっただ。こうして考えるとあいつの情報も、基本情報の収集という意味ではそれなりに役に立つのかもしれない(余計な情報も多数混ざっているが)。

「どうしたの？」

と、直斗が彼女に尋ねる。

「今日、時間ありますか？」

「え？ あ、うん。なくはないけど……」

「では、少しお話ししておきたいことがあるのですが」

そう言って神村さんは俺の方をチラッと見る。

……どうやら俺は邪魔者らしい。

それに気づいて俺が静かに立ち去ろうとすると、

「あれ？ 優希、帰るの？」

直斗が呼び止めてくる。

俺は小さく振り返って、

「帰る以外にやることがないだろ。それともなにか？ 俺とデート

でもしたいのか？」

「デートはしたくないけど」

直斗は平然と否定（躊躇しながら否定されてもそれはそれで困る

が）すると、

「今日は勉強でもしようかと思ってたから」

「すればいいじゃんか」

別にこいつが勉強することに異論を挟むつもりはない。

「そうじゃなくて、優希と一緒に、ってこと」

「はあ？ なんで？」

と、俺が聞くと、直斗は割と真面目な顔をして、

「一年後、優希に先輩呼ばわりされたくないからね」

「……それじゃあまるで、俺の留年がすでに決定しているみたいじ

ゃないか」

誤解のないように言っておくが、俺は中学はしっかりと三年で卒

業している。

「ねえ、神村さん。神村さんも一緒にどう？」

直斗は俺の抗議の声も無視してそんな提案を始める。

「なんですか？」

俺たちのやりとりを黙って聞いていた（いや、聞いていたかどうかどう

かは知らないが）神村さんは、直斗の言葉に微かに首を傾げる。

「ほら。中間テストの勉強。一緒にやらないかな、って」

「それは、不知火さんも含めて、ということですか？」

「もちろん」

直斗が頷くと、神村さんはほんの一秒ほどの間を置いて、
「嫌です」

「……露骨な反応だな」

あまりにもはつきりとした言い方に、俺は苦笑するしかなかった。
どうやら俺は彼女に嫌われているらしい。

(もしかしたら、覚えていなかったことを恨まれているのか?)

そんなことにこだわるような人にも見えないが、大した接点もない彼女に嫌われる理由が他に思い当たらなかった。

「じゃ、俺はさっさと帰るわ。邪魔者みたいだしさ」

俺がそう言っって手をあげると、

「あ、じゃあ、あとから家に行くから。ちゃんと勉強して待ってて
よ」

と、直斗。

どうやら俺と勉強するのには変わりないらしい。

断る理由も見つからなかったので、俺は無言のまま直斗に向かって手をあげると、そのまま教室を出た。

「……ふっ」

部屋の中央に置かれた丸テーブルの上には、数学と物理の教科書。そして、一ページ目が開かれた白紙のノート。このノート、別にテスト勉強用のものではない。普段から授業に持ち込んでいるものだ。それが白紙であるということは、つまり “あきらめる” ということだろうか。

「だいたい数学と物理が同じ日とか、ありえねえ……」

生徒たちをいたぶるのが目的としか思えない日程だった。

こうなってから改めて考えるとやはり直斗と約束しておいて良かったと思う。というより、直斗のヤツはここまで見越していたのか
もしれない。

ちなみに由香のヤツは学校が終わるなり、さっさと同じクラスの女友達数人に連行されてしまったようだ。あいつはなかなか綺麗にノートを取っていたりするので、テスト勉強のときには非常に役に立つ奴なのである。

まあ、成績自体は中の中程度なのだが。

それに比べ、直斗はノートが綺麗な上に成績もかなり良い。中学時代の成績で言えば、直斗と雪が上の方で争っていて、その後には由香、俺（順不動）だった。確か。

……あ、俺の下には将太のヤツがいたけど。

（そう言えば、雪と瑞希の奴も今日から中間テストだったかな？）
瑞希の奴の成績はあまりわからないが、それほど悪くなかったように思う。つまり、同じ親族でありながら、俺だけ成績が悪い、ということだ。

（どうもウチの親族は、男が不遇の扱いを受けているような気がする）

外見にしてもそうだ。俺は自分自身でそれほど劣っているとは思っていないが、雪や瑞希を見ていると、やはり不平等なように思える。まあ、自分の顔なんて見慣れたものだから、他人からどう見えるかなんてそれほど正確にわかるものでもないが。

「つまりだ。俺が何を言いたいかというと」

「うん」

「俺の成績が悪いのは俺のせいではなくて、この体に流れる血が悪いのだと」

「そうなの？」

「……って、いつの間に部屋に入ってきてるんだ、お前は」

俺はそう言っただけで目の前の雪を見る。

雪は背負っていた鞆を丸テーブルの横に置くと、

「今さっき来たばかりだよ。そしたら不知火がぶつぶつ言ってたから」

「なんだ、雪。いつの間にか藍原みたいなしゃべり方になってるな、」

お前」

「……不知火、何言ってるの？」

雪はそう言って後ろにいた人物を振り返る。

「気にしなくていいと思うよ。いつものことだから」

と、後ろにいた人物は言う。

「おう、誰かと思えば木村じゃないか」

俺は後ろにいた木村にそう言って手をあげる。

「木村くんは小学校五年のときに転校しちゃったよ」

「じゃあ、マザコン太一か」

「……誰だか知らないけど違うと思う」

その人物は即座に否定する。

「とまあ、冗談はさておいて」

俺は直斗から視線を横にずらすと、丸テーブルの横をすでに占領

していた藍原に目をやって、

「どうしてお前がいるんだ？」

「歩いてきたんだよ」

「んなことは聞いてない」

「じゃあ、なに？」

藍原はすでにテーブルの下に足を伸ばして、くつろぐ体勢を見せ
ている。

「つまりだな。どうして俺のテリトリーであるこの場所に、お前と
いう異質な存在があるのかということを問っているわけだ」

「大丈夫だつて。すぐに慣れるから」

「そういう問題じゃない」

ニコニコ笑っている藍原に俺は冷たく突っ込みをいれた。

「ここに来る途中で会ったんだよ」

と、直斗。

「それで、優希のところで勉強する話をしたら、藍原さんも手伝っ
てくれるって」

「ゼツタイ恩恵にあずかりたいだけだろ……」

俺はそう言っただけでチラツと藍原を見る。

どこからどう見ても勉強が出来そうには見えない。

「へえ〜。不知火の部屋って思ったより綺麗だね〜。ほうほう、これは……？」

キョロキョロと周りを見回していた藍原は、そのうち辺りの物に勝手に手を伸ばし始めた。

「こら！ 触るな！」

慌てて止めると、

「なに？ 見られたらやばいものとかあるの？ エロ本とか」

「エ、エロ本……」

「ベッドの下とか怪しいな……」

俺の言葉も無視して藍原の奴は上半身をベッドの下に突っ込んでがさごそとやり始める。

「お前な……」

これで本当にエロ本でも隠しているのなら俺も少しは慌てるつもりだが、一応その心配はない。

「というか、本当に出てきたらどうするつもりなのだろうか、こいつは。」

「ふ〜む。ベッドの下にはなさそう」

言いながら藍原はベッドの下から頭を抜く。

「だからないって」

「……ホントにないの？」

藍原が目を大きく開いて驚いた顔をする。

「健全な男子は全員持っているものだって聞いてたけど。ってことは、不知火って健全じゃないのか」

「どうもこいつはどこかひっかかる言い方かしらない。」

俺は小さくため息をついて、

「健全、健全じゃない以前に、俺の部屋にはそんなものを置ける場所がない」

「雪に見つかったら大変なものね」

笑ってそう言ったのは直斗の奴だ。

何だか気に入らないが、直斗の言うとおりである。この部屋は週に二、三回、雪の捜査の手が入る。だから、そんなものを置いていたらすぐに見つかってしまう。

「なに？ 雪ちゃんも私みたいに不知火の工口本探してるの？」

「……掃除のときに見つかっちまうって意味だ」

「ふーん。ってことは不知火が代わりに雪ちゃんの部屋を隅々までアレコレしてるわけだ。うわ、やらしー」

「どういう発想だ！」

こいつの頭の中はいったいどうなっているんだろうか。

と、そこへ、タイミングがいいのか悪いのか、

「優ちゃん？ 誰か来てるの？」

ノックの音とともに雪の声が聞こえた。

いつの間にか帰ってきていたらしい。

「ああ、気にするな。直斗と変なのが一匹来てるだけだ」

「変なの〜？ それってあんまりじゃなあい？」

「直ちゃんと……美弥ちゃん？」

先日知り合ったばかりだというのに、ドア越しの声だけで判別できたらしい。

「まあ、そつだ。だから気にするな。ちょっとうるさいかもしれんが」

「じゃあなにか飲み物持ってくるね」

「ああ、そんなの必要」

ない、と言う前に、雪が階段を下りていく音が聞こえてきた。

(……お節介なところは、由香の奴といい勝負だな、あいつ)

「雪ちゃん、おやつもお願いなね」

「ただけですつずしいんだ、お前は……」

冷たく言い放ちながら、テーブルの上に適当に置いてあった教科書とノートを一旦集めて、とりあえず三人分のスペースが出来るように、不要な物をベッドの上に放り投げる。

「あれ、なにしてんの、不知火」

「なにつて、準備に決まってるだろ」

きよとんとして藍原は言った。

「なんの？」

「……」

「……」

「……冗談だつてばさ」

藍原はようやく鞆を開けて教科書を取り出した。

「じゃあ数学から始めようか」

直斗もそう言いながらテーブルの横に腰を下ろし、教科書とノートを出した。

このノートが大事なのである。

中間、期末テストというのは教科担当の教師が作るものだ。そして、教科書の利用率はその教師によつて大幅に違う。つまり、教科書自体の信頼率というのは中間、期末テストにおいては思った以上に低いものなのだ。それに比べ、ノートはその教師が黒板に書いたものであつて、テストに出現する確率が非常に高い。特に、チョークで何重にも印を付けられた公式や英文なんかのテスト出現率はペナルティキックの成功率にも匹敵する。

これがあるとないとでは、点数にかなりの差が出るわけだ。

……と言つことがわかつていながら、俺は全然ノートを取つてなかつたりするのだが。

で、準備も整い、さて始めようか、というところで、

「ねえ、優ちゃん。ドア開けてくれる？」

ドアの外から雪の声。

「ああ。ちよつと待つてな」

俺はよいしょ、というかけ声とともに立ち上がると、ドアまで行ってゆつくりと開ける。

とりあえず、後ろから藍原の視線を感じたので、わざと雪の姿が見えないように視界を塞いでやった。

……いや、特にそうしななければならない理由はないんだけど。

「はい」

そんなこと気づく由もない雪は両手に抱えていたお盆を俺に渡す。ジュースでも持つてくるのかと思えば、そこには三人分の紅茶と、アップルパイらしきものが乗っかっていた。

「これは？」

聞くと、雪は頷いて、

「私と瑞希ちゃんて焼いたの。多分、上手くいったと思うんだけど」「多分、つてのが微妙に不安を煽るのだが……」

「私もまだ食べてないから」

「つまり、俺たちに毒味しろと？」

「うん」

雪はそう言つて屈託ない笑顔を浮かべる。

「……わかつたよ」

こういふ顔をされると、俺としては苦笑して受け取るしかない。とはいえ、雪のヤツは普段から菓子類をよく作るが失敗作に当たったことはこれまでに一度もないから、ほぼ間違いないだろう。

何と言つてもこいつの腕前は、由香や直斗の家のおばさんに“下手なお店よりよっぽどおいしい”と言わしめるほどなのだ。

「え、なになに、それって雪ちゃんの手作りなの？」

「おおう!?!」

びびった。

いつの間にか藍原が後ろにぴたりくつついていたのだ。

「じゃあちよつと休憩してお茶にしようよ。ほら、雪ちゃんも一緒にさ」

「休憩つて、おまえ」

「ほらほら。紅茶も冷めちゃったらおいしくないじゃん？」

こいつ、ほんとに何しに来たんだ。

「まあ、いいんじゃない？」

と、仕方なさそうにしながらも直斗も藍原の意見に同調したので、

何もやらないうちから休憩時間となり、俺たちがようやく勉強に取り掛かったときにはもうかなりの時間が経過してしまっていた。

「……あつ、漫画がある〜！」

「お前、ホント何しに来たんだよ！」

ほとんど勉強がはかどらなかつたのは言つまでもない。

カチ、カチ、カチ……

壁掛け時計の秒針の音が聞こえてくる。

ついさつきまで直斗と藍原がいたので、誰もいなくなった部屋は殊更静かに感じた。

テーブルの上には勉強道具が放り出されたままだ。結局直斗からノートを借りることができたので、今夜は少し気合を入れて勉強をしようか、と、一応そう考えている。

時間を見ると十八時四十分。外はかなり暗くなっていて、日が完全に沈むまであと数分といったところだろうか。

(そろそろか……)

思い立ってドアに鍵をかけ、カーテンを閉めた。

姿見の前に移動する。

『お前はどうかやらいレギュラーのようだな』

両親は俺たちが二歳ぐらいのときに事故で命を落としたから、前にも言ったようにそういう知識はすべて伯父さんから聞かされたものだ。

伯父さんの話によれば、俺たちの両親はどちらも“氷魔”、その名のとおり氷の力を操る悪魔だったらしく、妹の雪はその力をそのとおり受け継いでいたのだが、俺が操ることができるのは本来とはまったく正反対の“炎”の力だった。

それに対する伯父さんの回答が先ほどのセリフである。

別に実子ではないとかそういうわけではなく、伯父さんいわく、原因やメカニズムは不明ながら俺みたいな悪魔は稀に存在するようで、そういう悪魔を一般的（と言っていいのか？）に突然変異種“イレギュラー”と呼ぶらしいのである。

つまりレアモノというわけだ……と、本来だったら胸を張りたいところなのだが、残念なことにイレギュラーとして産まれた悪魔は普通の悪魔より力が弱いつてのが常のようで、御多分に漏れず、俺も悪魔としての力は基本的に妹の雪よりかなり弱い。

その上、普通の悪魔とは違う特徴を持つ者が多いらしく目を閉じて全身に軽く力を込めると、腹の中心辺りから熱が全身に広がっていく。

次に目を開いたとき、姿身に映る俺の髪は真っ赤に染まっていた。右手に力を込める。

（一、二割つてとこかな）
力の込め具合と右手に産まれた炎の強さからそう判断する。

日替わりで悪魔としての強さが上下する。

それが俺のイレギュラーとしての特徴その一だった。

（まあまあか）

感覚的には一、二割でほぼ通常運転。三割なら調子がいい方。五割を超えるのは月に1回あるかないかってとこだ。

チラッと外を見る。

日が沈んでいく。

再び右腕に軽く力を込める。

目を閉じる。

感覚を研ぎ澄ます。

そうして二分、三分 五分を越えた辺りだろうか。
急に、ふ、と全身の力が抜けたような感覚があった。
目を開ける。

（今日は、駄目か）

右手を見ると、そこに灯った炎はさつきまでよりも明らかに弱くなっていた。

これは伯父さんの話ではなく自分で試してみた結果だが、日替わりの基準はどうやら日没と関係があるようだった。つまり日が沈むタイミングで強さが切り替わる。

五割近く出ていた次の日が一割以下だったり、もちろんその逆もあったり、同じ程度の日が一週間以上続いたりといまいち掴みどころがない。しかも平均が二割程度で、その状態で雪の力の半分にも遠く及ばないわけだから、まあ厄介というかあまりありがたくない体質だ。

ちなみに俺のイレギュラーとしての特徴（特殊能力？）は他に二つあるが、どちらも戦闘には役に立たないものである。

「優ちゃん」

階下から雪の声が聞こえた。

「ごはんだよー」

「おう」

力を抜く。

と、同時に髪の色が元に戻った。

今日の状態だと暴走した悪魔を相手にするのは危険だろう。もし何かあれば雪に頼らざるを得なくなるし、それは兄としてどうなんだって気もするので、今夜から明日にかけては何も起こらないことを祈るしかなさそうだ。

「ただいま」

階段を下りる途中で制服姿の瑞希が外から帰ってきた。

「ずいぶん遅い。」

「なんだ、お前。テスト期間中じゃなかったのか？」

「友達の家で勉強会よ。本当は雪ちゃんも来るはずだったんだけど

」

チラッと俺の顔を見て、

「あんたのことが心配だからって先に帰っちゃってね」

何故か責められてしまった。

それって俺は別に悪くないよな？

「あんたが普段から頼りないからいけないんじゃない」

「なにを言う。俺は常日頃から頼りがいのある兄貴を演じているぞ」

「……」

呆れられてしまった。

「おかえりなさい、瑞希ちゃん。……？」

出迎えた雪が、階段の途中で睨み合う俺と瑞希を見て小首をかしげる。

「愛の告白？」

「なんでやねん！」

相変わらず思考回路の読めない妹だった。

1年目5月その2

(……勝った)

俺はついにこの長い戦いを制した。払った犠牲は数知れない。だが、この俺の勝利は、その数々の屍を乗り越えてきた結果だった。

そして、これでようやく世界に平和が訪れる

「払った犠牲つて、遊べなかつたとか見たかつたドラマが見れなかつたとか？」

「……」

直斗の一言で俺はあつという間に現実世界に引き戻されてしまった。

教室内はざわついている。無理もない。高校に入って初めての定期テストが終了した安堵感と解放感でみんな浮ついているのだ。

「ていうか、おい。俺はまだ何も言つてないぞ」

「優希の考えてることはわかるよ。テストが終わった直後だもん」
しれつとそう答える直斗。

いや、それにしてもわかりすぎだろう。もしかして思わず口に出してしまつたりしたのだろうか。

納得できない俺に、直斗はにっこりと笑つて、

「まだ安心はできないよ。テストが返つてくるまでね」

「結果はたいした問題ではない。重要なのはどれだけ努力したかだ」
「どれだけ努力したの？」

「……さて。テストも終わったことだし、どっか遊び行くか」
適当にごまかして席を立つ。

と、そこへ、

「遊びのことなら任しておきな！」

ぬつと俺の目の前に将太の顔が現れる。

「おい、将太」

俺は突然現れた将太を少しのけぞつた状態で見据えながら、

「突然アップで登場するのはやめろ。お前の顔は心臓に悪い」

「……ひでえ奴だな、お前」

将太は憮然とした顔で俺から少し離れる。

「それで？ どういう計画があるの？」

直斗が苦笑しながら将太に聞くと、

「よお、直斗。今日も相変わらず可愛いな」

「嬉しくないよ」

直斗は速攻でそう返す。

こいつは身長が百六十センチちょいしかない上に中性的な顔立ちをしている。男にナンパされたことがあるとか噂されるほどで、将太の発言はそれを踏まえたものだ。

(イヤすぎる……)

直斗本人はその噂について言及したことはないが、その時期を境に、急に男っぽい服装を心がけるようになったので、おそらく事実なのだろう。

「で？ 今日の計画は？」

俺がそう聞くと、将太は力強く頷いて、

「駅前のカラオケに行こうぜ。第三金曜日は半額だったろ、あそこ」

「そう言えばそうだったな。けど、混んでるんじゃないのか？」

すると、将太はニヤリと笑って、

「そう思うだろ？ けど、俺の調べたところによると、だな」

ぺらっと、例のメモ帳を開いて、

「ウチのガツコの二、三年はこれからもう一時間テストがある。桜花女子も全学年まだテストが終わってない。……つまり、現在、こ

の辺りの高校生で暇なのは俺らだけってことだ！」

「こういうときだけは将太の情報って役に立つね」

と、直斗が感心したように言った。

「だけってなんだよ」

将太は不満げだ。

まあ、なんにしても将太の提案を断る理由は特にない。カラオケ

に行くのも久しぶりだ。

「じゃ、さつさと行くか」

「……あ。ちよつと待て」

将太は手を出して俺を制すると、

「ヤローだけってのはつまらん。由香ちゃんも誘おうぜ」

「由香……？」

俺と直斗は顔を見合わせる。俺の頭に浮かんだのは、中学時代にたった一度だけ由香とカラオケに行ったときの記憶だ。直斗の表情を見ると、おそらく俺と同じことを思い出したのだろう。

「やめとけ」

「あ？ なんでだ？」

何も知らない将太は不満そうな顔をする。

俺は少し困った顔で頭をかきながら、

「お前はカラオケで“チューリップ”や“さくら”が聞きたいか？」

「は？」

怪訝そうな将太に、直斗が苦笑して、

「由香は歌わないんだよ、基本的に。歌うとしたら童謡とか学校で習うような歌しかないから」

「下手なわけじゃないんだがな」

一応あいつの名誉のために付け加えておく。
が、

「由香ちゃんの声で童謡なら、めっちゃはまりそうじゃん！ 聞いてみてえ！」

「……マジか？」

結局のところ、なんでもいいから女の子を連れて行きたいということらしい。

そんなわけで、俺たち（将太の強い要望により由香を含む四人）は駅前のカラオケボックスにやってきた。

駅は風見学園から、桜花女子やデパートとは逆の方向に大きな通りを歩いて約十分。そのそばに緑色のボックスがいくつも並んでい

る場所があり、これが俺たち御用達のカラオケボックスだ。と言っても、俺は特別カラオケが好きってわけでもないから来るのはせいぜい二ヶ月に一回程度。それも、大抵は将太に誘われて、である。

「カラオケなんて久しぶり……」

部屋に入ると、由香は長いポニーテイルを揺らして周りをキョロキョロと見回していた。まるつきり田舎の人みたいな仕草だ。……以前俺たちと一緒に来たのが最後なのかもしれない。

ちなみに、一番歌が上手いのは残念ながら（？）将太のヤツである。やはりこういうものは才能もさることながら、経験がモノをいうらしい。由香は曲自体がアレなのでいまいち判断しづらいが、歌自体はかなり上手いように聞こえる。意外と物怖じしないで歌うので、教育番組で歌っているお姉さんみたいだな、あんな感じた。

俺と直斗は二人揃ってそこそこである。ただ、直斗は高音が結構出るので曲のレパートリーは広い。

そんなこんなで四人でわいわいと騒ぎ、三時間ほどしてからそこを出た。

テストは十一時前に終わっていたので、まだ十四時過ぎぐらいだ。

「なあ、次、どうする？」

と、将太が言った。

「まだどっか行くのか？」

俺がそう聞くと将太は当然のような顔をして、

「せっかくテストから解放されたんだぜ？ もっと楽しまなきゃソンドらうが」

「それはいいが……」

実を言うと、俺の財布が悲鳴をあげかけている。いつものことから俺の財布は根性値が低いらしく、すぐに中身をバラまいてしまっただ。

（だからって、金がないって正直に言うのもシヤクだな……）
さて、どうしようかと悩んでいると、

「……あ、ごめんなさい。私、そろそろ帰らなきゃ」

由香がそんなことを言い出した。

すると案の定、将太は不満げな顔をして、

「なんだよ。まだ遊ぼうぜ〜〜!」

「ごめんなさい。お母さんから用事を言付かってるの」

由香が申し訳なさそうな顔をする。

「じゃあ、仕方ないよね」

将太が何か言い出す前に、直斗がそう言って許可を出す。

「ごめんなさい、将太くん」

「……ま、仕方ないか。もともと無理に誘ったんだし」

「今日は随分物わかりがいいな」

俺が将太を茶化してやると、将太はまじめな顔で、

「当たり前だ。俺は女の子には優しいんだよ」

「そうかい」

俺は呆れ顔でそう言ってやると、鞆を肩にかついで、

「じゃあ、俺も帰るかな」

「ダメだ。お前が帰ることは許さん」

がしつと将太に腕を掴まれる。

「お前は別に用事とかないだろうが。もっと付き合え」

「用事ならあるぞ」

「なんだよ」

「俺は由香の奴を送ってやらねばならぬ。そう由香んちのおばさんに言付かっている」

「お前、嘘をつくなんて」

「嘘じゃないっての」

渡りに船、だったのは間違いないが実は本当のことだ。

最近、ここ一帯に変質者らしきものが出没しているらしく、学校のホームルームでもしつこく注意を呼びかけている。そんな関係で由香の家のおばさんに頼まれ、なるべく俺と直斗のどちらかが家まで由香を送ってやることになっていたのだ。

(しかし、もう春も終わるといふのにな)

基本的にそういう輩は春じゃなくても出沒するらしい。

「将太。本当のことだよ」

直斗がそう言うのと、さすがに将太も信じざるを得なかったようだ。

「何だ。本当に本当なのかよ」

「当たり前だ。俺は生まれてこの方、嘘など吐いたことがない」

「……」

全員が黙り込んだ。

それ自体が嘘だ、などというくだらない突っ込みをしてくれる奴はこの場にはいないらしい。

「とにかく」

ちよつと淋しくなった俺がその場を切り上げようとした、そのとき。

「優ちゃん」

と、聞き覚えのある何者かの声。

と言っても、そんな呼び方をするやつは一人しかいない。

「あ、雪ちゃんだ」

由香の言うとおり、道路の向こうに手を振っている妹の雪の姿があった。

「おお！ 我らが風見学園の元アイドル、雪ちゃんではないか！」

そんな馬鹿みたいなことを言い出したのはもちろん将太だ。

……馬鹿みたい、とは言ったが、実は俺たちが中等部にいた頃、本当に雪のファンクラブが（もちろん非公式に）存在していた。そのファンクラブには男子生徒だけでなく後輩の女生徒も結構いたらしいから、男子からも女子からもそこそこ人気があったようだ。

ちなみに俺が冗談でそれに入会して、将太を初めとするメンバーの妨害活動を行っていたことは、将太しか知らない隠された事実である。

「みんなしてどうしたの？」

雪は制服姿だった。

桜花女子学園の制服はウチの学校の味気ないセーラー服と違って

ちよつと凝ったデザインになっている。どこだかの有名なデザイナーがデザインしたものらしいのだが、詳しいことはよくわからない。ただ、パツと見て単純におしゃれというか、ちよつと明るいデザインである。

「これから帰るところだ」

「これから遊びに行こうと思ってたのさ」

俺と将太の口がほぼ同時に正反対の言葉を発するが、雪はまったく戸惑った様子もなく納得した顔をして、

「そうなんだ」

「……今のでわかったのか？」

俺が疑わしげにそう聞くと雪は頷いて、

「今までみんなで遊んで、優ちゃんはそろそろ帰ろうかなって思ってたのを、将太くんがもっと遊ぼうって引き留めてたんでしょ？」

「お前は超能力者か」

直斗といい、状況判断能力高すぎだろう。

すると雪はくすつと笑って冗談っぽく言った。

「双子だから心がつながってるんだよ、きつと」

「……」

馬鹿な。それが本当だとすれば今までのアレコレも全部筒抜けになっっていることになるではないか。

ないだろ。

「……ないよな？」

「ふふ」

雪はそんな俺の葛藤すらも見通したように（たぶん俺の被害妄想だ）笑うと、

「それで優ちゃんは どうして帰っちゃうの？ まだ早いのに」

「ん？ ああ、由香のやつを送ってくんだよ」

「私が用事で帰るって言ったなら、優希くんが送ってくれるって言うてくれて……」

由香が代わりに、やはり少し申し訳なさそうにそう答える。

「そうなんだ。そうだね。最近物騒だつて言つてたもんね」
雪は納得したようだ。

「こいつみたいにおどおどした奴が一番危ないからな」

「ごめんね」

由香はシユンとした顔をする。

それを見た雪は微笑んで、

「そんなの謝ることじゃないよ。由香ちゃんが悪いんじゃないんだから」

「ま、日頃のお返しつてことにしといてやるっ」

俺はそう付け加えると、

「じゃ、そろそろ行こうぜ。用事あるんだろ」

そう言つて由香を促す。

「あ、うん。じゃあ……」

由香はそう言つてから直斗や将太の方を見る。

「……俺も帰るか。じゃあねえから」

将太はかなり不満そうにしながらも、

「じゃあまた明日な」

そう言つて手をあげる。

ここからだと言太の家は俺たちと逆の方向である。

「ああ」

「じゃあね、将太」

「ばいばい、将太くん」

それぞれに声をかけて俺たちは将太と別れる。

「直斗。お前はどうすんだ？」

「僕も帰るよ」

直斗はそれほど考えもせずになんか答える。

まあ、もともと遊び回る奴じゃないから、一人でどこかに遊びに行くなどということはありません。

「そっか」

俺はそう言つてから雪を見て、

「雪。お前はどっかで遊んでいくのか？」

「え？」

俺の問いに雪は少し驚いたような顔をする。

「だってお前、こっちに来たってことはなんか用事があったんだろ
うが」

「あ、うん。でも」

「遅くならんうちに帰ってこいよ」

「ん……」

俺の言葉に雪は少しだけ首を傾けて考えるような仕草をする。

と、そこへ、

「優希」

「あ？」

直斗は言った。

「由香は僕が送っていくよ。雪に付き合ってあげたら？」

「は？　つか、こいつの用事がなんなのか知らねえし」

「なんだっていいじゃない。ね、雪」

「……」

直斗の言葉に雪はちよつと困ったような笑顔を浮かべていた。

「じゃ行こうか、由香」

「あ、うん」

直斗は由香を連れてさっさと行ってしまった。

最後に少しだけ非難するような仕方なさそうな視線を俺に向けて。

「なんなんだ？　あいつ……」

意味がわからない。

「直ちゃんらしいね」

見ると、雪のヤツはなにやら納得しているようだ。

何か知らんが納得いかない。

「優ちゃん。付き合ってもらっても、いいのかな？」

「いいも悪いもないだろ」

こうなった以上、いまさらだろう。

「来月の小遣いアップで手を打とう」

「それはダメ。優ちゃん、無駄遣いするもの」

「くっ……」

どさくさに紛れてお許しが出るかと思ったがきっぱりと断られてしまった。

結局、雪の用事というのはただの買い物だった。学校の帰りならいつものデパートのほうが近くて便利なのだが、駅前のスーパーで売り出しをやっているとかでわざわざこっちまで来たらしい。

「由香ちゃんのこと、梓おばさんに頼まれてたの？」

「ん？ ああ、まあな」

梓おばさんというのは由香の母親の水月梓さんことだ。同年代の連中の親たちと比べて格段に若く、今年の誕生日で確か三十歳。由香が十五歳だから いや、逆算するのはやめておこう。雪は普通

と叱られるので、本人の前では“梓さん”と呼ぶようにしている。

ちなみに由香の父親は水月鉄也さん^{みなつきてつや}という。職業は刑事で、歳は確か……梓さんと二十歳以上離れていると聞いたことがあるから、もう五十歳を超えているはずだ。ちよつと恰幅の良い温厚な顔つきの人で、性格も見た目どおり（少なくとも俺たちに対しては）優しい。

対し、梓さんは本人曰く、もと不良の家出少女だったそうで、おじさんとの出会いも補導されたことがきっかけだったらしい。梓さんが十六歳の誕生日を迎えると同時に結婚したらしいから、あの若さですでに結婚十四年目である。

梓さんはそういう話をまったく隠そうとしないので俺もいろいろと聞かされていたが、どこまでがフィクションなのかわからない。ただ、二人が結婚したとき由香はすでに産まれていたことになり、はつきりと聞いたわけではないが、おじさんと由香は血が繋がってはいないようだ。

ただ、由香の性格が、サバサバした性格の梓さんより温厚なおじ

さんのほうに似ている、というのは面白いところである。

「……」

「ん？ どした？」

ふと気付くと、雪が立ち止まって後ろを振り返っていた。

「うっん。なんでもない」

首をかしげていたが、そう言っただけで追いついてくる。

「？」

雪はそれ以上何も言わなかったが、その日は家に帰るまで何かを気にしていた。

湿気を含んだ風が吹き抜ける。

憂鬱な梅雨の季節が近付いているようだった。

1年目5月その3

パチ。

「？」

耳鳴りが、聞こえたような気がした。

そのとき俺は部屋のベッドに転がって漫画雑誌を読んでいた。ミニコンポのスピーカーからは大きな音楽が流れている。

(……気のせいかな？)

近くにあつたりモコンを手にとってミニコンポの音量を下げた。と同時に辺りを見回す。カレンダーの日付は五月の最終週。壁掛け時計はちょうど十七時半の辺りを指していた。窓の外はうっすらと曇っていてオレンジ色の光もどこかくすんでいる。

パチ。

もう一度、耳の奥でその音が響いた。

気のせいじゃない。

(……またか)

“耳鳴り”

この耳鳴りは正確には耳鳴りじゃない。俺のイレギュラーとしての“特殊能力”だ。

この音が鳴るとき“何か良くないことが起きる”ことが多い。漠然とした話で申し訳ないが、そもそも経験上の話でしかないのだから仕方ない。あえて具体的に言うならば、その耳鳴りが強く鳴り響くとき“近くに暴走した悪魔がいる”ことを示唆している“ことがある”。

これ自体はあまり役に立たない能力だ。近くで何かが起こる、ということがわかるだけで、誰に、いつ、どんなことが起こるのかはさっぱりわからない。かなり悪いことが起きるはずなのに何も聞こえなかったり、あっても誰かが百メートル走で転ぶとか、そういうくだらない予告だったりもして、何のアテにもならないのである。

ちなみに、以前話した“由香の男子トイレ事件”のときもこの耳鳴りが聞こえていた。

そんな感じの適当な能力なのだ。ただ。

俺の“もう一つの特特殊能力”と組み合わせることで役に立つことはある。

(念のため)

俺は目を閉じ、もう一つの“能力”を発動させた。意識を広げる。

頭の中に周辺の地形を思い浮かべる。

五感以外の神経が研ぎ澄まされる

(……反応なし、か)

どうやら今日の耳鳴りはハズレのようだ。

よくあることだ。

寝転んだまま、ミニコンポの音を大きくする。

いつものことだ。

特に深刻に考えることはなかった。

すぐにそれを後悔することになるとも知らずに。

「……ねえ、優希」

十八時近くなった頃だった。

瑞希が部屋のドアをノックしてきた。

「なんだ？ メシか？ 開いてるぞ」

瑞希が俺の部屋にやってくるのは珍しい。呼びに来るのはだいたいの雪のヤツだからだ。

部屋に入ってきた瑞希の様子は少し変だった。

「どうした？」

「あのさ。あなた、雪ちゃんから何か聞いてない？」

「は？」

質問の意味がわからずに聞き返すと、瑞希は少し不安そうな顔を
して、

「雪ちゃん、まだ帰ってきてないの。学校の帰りに駅前で少し遊ん
で、晩御飯の支度があるからって私より先に帰ったはずなんだけど

……」

「買い物でも行ってるんじゃないのか？」

「たぶん、それはないわ。買い物だったら昨日行ったばかりだし、
買い物してるにしても遅すぎるもの」

「……」

ミニコンポの電源を切る。

時計を見た。

十八時。

外は夕日が半分近く沈んでいる。

本来なら、まだ心配するような時間じゃない。

ただ

パチ、と。

耳鳴りが聞こえた。

心なしか、さっきより大きくなっているような気がした。

「それで、ね」

不安が小さく首をもたげてくる。

「学校で色々言ってたじゃない。最近変質者がこの辺りに、って。
だから心配になって」

その言葉を聞いた瞬間。

パチッ！

「っ！」

一際大きく、耳鳴りが聞こえた。
嫌な符合だ。

いや。

ただの偶然で片付けるには、密度が濃すぎる。
俺はベッドから身を起こした。

「……………」

瑞希が心配そうな視線を向けてくる。

「ちよっと探しに行つてくる」

そう言つて上着を手を取った。

「あつ……………優希！ 私も」

「お前はここにいろ！」

自然と大きくなった声に、瑞希は一瞬驚いた顔をした後、

「わ、わかつたわ……………」

珍しく視線を泳がせながら素直に頷いた。

上着をまといながら階段を駆け下り、玄関の靴を引つ掛けて外へ飛び出す。

外はまだ太陽の支配している時間。

けど

(間違いない……………！)

その頃には何故か確信していた。

徐々に強さを増していく耳鳴り。

胸の奥で首をもたげている不安の正体は、おそらくそれだ。

いや、仮に勘違いだったとしても。それはそれでいい。

何事もないのなら

(……………ああ、そうか)

そこで俺は、数日前の直斗の視線の意味にようやく気が付いた。

あれはきつと、由香を送ろうとして雪一人をあそこに残していうとしたことを非難していたのだ。

『……………最近ね。誰かに後をつつけられてるような気がするの』

一ヶ月ほど前に雪がそう言っていたことを思い出す。

そしてその後庭で見かけた影。

関係があるのか、ないのか、それはわからない。

だが、少なくともそのときにもっと真剣に考えていれば
いや。

何かあったと決まつたわけじゃない。

今はとにかく

少々混乱した頭で駅周辺へ辿り着く。

瑞希の話によれば、この辺りで雪だけが先に別れたということだった。

買い物カゴを手にした主婦、寄り道をしている学生、遠くから聞こえる踏み切りの音、一時の別れを告げる子供の声。

特に普段と変わったところはない。

探すといっても、どうしようか。行きつけの店を風漬しに探すか、ここからの帰り道を辿るべきか。

いや、もう自宅に戻っているかもしれない。一度電話を試みるべきか。だったら公衆電話を探して

と、そのときだった。

「？」

急に頭の中を過ぎった、もやっとした、だけど覚えのあるイメージ。

(これは)

俺の能力が何かに反応している。

立ち止まって目を閉じる。

して

「！？」

次に浮かんだのははっきりとした言葉のイメージ。

(間違いない……！)

雪の気配だ。普段は感じることはない、特殊な気配。

集中する。

目を閉じる。

その瞬間。
流れ込んでくるイメージ。

暗い路地。

視界の端を流れる銀色の髪。

倒れる男。

不安。

恐怖。

そして

(……助けて)

目を開けて“同調”を断つと、俺はそのまますぐに走り出した。

他の悪魔の内面に“同調”する、俺のイレギュラーとしての、おそらく最後の特殊能力。同調できるのは“暴走”してしまった者に代表される、精神的に不安定な状態の悪魔のみだが、それはつまり、今の雪がどういう状態であるのかを示唆している。

悪魔の力を解放し、大きく動揺している。

見えた景色、感じた不安と恐怖は、今の雪が見て、感じている情景そのものだ。

何が起きたのか

(考えるのはあとだ！)

雪が見ていたその景色には見覚えがあった。ここからなら全力で走れば五分程度で辿り付ける。

雪はそこで俺の助けを待っている。

耳鳴りは止んでいない。

雪は混乱しているのか、力を解放したままの姿だ。

誰かに目撃でもされたら、取り返しのつかないことになる。

(待ってる！)

駅前の通りを人の少ない方角へ向かって。

俺は逸る気持ちを懸命に押さえ付けながら、雪の待つ薄暗い路地へ向かって走った。

「来たか、楓」

「何の用だ？」

楓はその薄暗い部屋の入り口付近に立ったまま、十畳ほどの部屋の中央に座っている初老の男を見下ろすようにしてそう問いかけた。

「紫喉さん直々に俺を呼び出すなんざ、珍しいじゃないか」

紫喉しこうと呼ばれた男は閉じていた目をゆっくりと開き楓を見据えた。外から差し込んだ微かな陽の光が男のこけた頬と、まとった白い法衣を浮かび上がらせる。

「お前を呼び出す用など一つしかあるまい」

楓に向けられた視線、口調はいずれも鋭い。

「仕事だ。お前にやつてもらおう」

ほんの一瞬の沈黙。

楓はふんと鼻を鳴らした。

「いつから俺に命令できるようになったのかな、あんたは」

「私は光刃様の後見役だ」

「関係ないね」

楓は目を細めたまま口の端に薄い笑みを浮かべて、

「確かにあんたは組織のナンバー二だ。けど、俺は組織の人間じゃない」

「ならばお前は有害な魔族として処分されることになる」

紫喉は淡々とした口調でそう言った。

そこには、やせこけた見た目からは想像できないほどの威圧感が満ちていた。

「くっ……あはははっ！」

「……何がおかしい」

楓の笑い声に紫喉の眉がピクリと動いた。

「くく……っ。いや、すまない。あんたがあまりにも面白い冗談を言い出すものでな」

楓はこらえるように笑い声を抑えると、

「まあ、本気だしたらもっと笑える話だが。今のこの組織に、俺を“処分”できるヤツがいるとでも？」

「貴様……」

紫喉の口調が少し低くなる。

楓は小馬鹿にしたような態度のまま、ジーンズのポケットからガムを取り出す。

「まあ怒るな。今のところ俺たちは一応仲間だからな。……食うか？」

「……」

「そうか」

楓は薄い板状のガムを口に放り込む。

「で？ 仕事とやらの話を聞こうか。俺を毛嫌いしているあんたが“依頼”してくるぐらいだ。あんたらじゃ手に負えない相手なんだろう？」

「相手はおそらく上級氷魔族……」

紫喉は楓のペースに乗るまいとしているのか努めて冷静な声で言った。

「上級氷魔族……？」

ガムを噛みながら楓は少し真剣な表情になる。一瞬だけ視線が泳いだ。

「お前ならば特に問題はあるまい？」

「腑に落ちないな。上級氷魔族ほどの悪魔が暴れたなら、俺の耳に

も何か情報が入ってきてるはずだが？」

「知るはずもあるまい。今しがたの話なのだからな」

「今……？」

部屋には時計がない。が、感覚が正しければちょうど十七時を過ぎた頃のはずだった。

「場所は案内させよう。お前が無害な悪魔であることを証明してみせる」

「……」

楓は思案するように目を閉じた。

夕日はまもなく山間に沈もうとしていた。

- - - - -

……妹の雪が力に目覚めたのは中学二年生するときだった。

その日の夜、雪の悲鳴に俺が部屋に駆けつけると、部屋中に霜が降りていて、まるで冷凍庫のような状態だった。部屋の中心には、姿見の前に座り込み、銀色に変色した髪を押さえ呆然としている雪。普段からおっとりしているヤツだから端からみればそれほど取り乱しているようには見えなかったが、それでもやはり内心はかなり動揺していたのだろう。

部屋に入ってきた俺の姿を見るなり、雪は『見ないで』と呟くように言った。

何が起きているのかわからないながらも、自分のその姿は他人に見せてはならないものだ、と、直感的に感じていたのだろう。

俺は先に力に目覚めていたし伯父さんからそういう話も聞いてい

たので慌てたりはしなかったが、雪のほうはさすがにそうはいかなかったらしい。

その後、俺が事情を説明し、俺も同じだと告げたときのホツとしたような顔は今でも記憶に残っている。

雪が確認するように俺に言った言葉も。

『普通に暮らしていいんだよね、私……』

だけど結果的にそれはできなかった。

力を持つ者にはやっぱりそれなりのリスクがつきまとうものだから。

たとえそれが、望まなかった力だったとしても。

- - -

どうして

目の前には男が倒れている。

男の体には血の気がなかった。

どうして、こんなことになったのだろう

体が震えた。

夕日が人気のない路地に射し込んでくる。

学校の帰り、友達数人と少しだけ遊びに行つて、その帰り。

薄暗くなりかけていた人気のない路地で、突然背後から襲われた。

脳裏をよぎったのは、学校で何度も話していた“変質者”のこと。

すぐに声をあげようとしたけど、口を塞がれてできなかった。

怖かった。
だから
でも

「どうして」

私は背後の扉に背中を預け、自分の手のひらを見つめた。

オレンジ色の光。視界の端に映る、銀色の髪。いつもとは違

う、自分の髪。

視線を戻す。

倒れた男の体には霜のようなものが付着している。その体はおそ
らく氷のように冷たくなっているに違いなかった。

だって、私の力をまともに受けたのだから。

そんなつもりはなかった。

そんなつもりはなかったのに、怖いと思った瞬間、何かに反
応したかのように力が溢れた。

(助けて)

どうすればいいのかわからず、私はその場に座り込んでしまった。
誰か通りかかったら。

いや、それよりも、それ以前に

(助けて、優ちゃん……)

- - -

「……雪！」

その路地に駆けつけたとき、雪は扉を背もたれにして座り込み、
呆然とした様子で自らの髪を押さえていた。

古い記憶が刺激される。

それはまるであの日、雪が力に目覚めたあの日をトレスしたかのような情景だった。

そして呆然とした様子の雪は俺の姿を見つけると、あの日と同じように自らの髪を手で押さえ、口を僅かに動かした。

……見ないで。と。

音はなかったが、そう聞こえたような気がした。

(……冗談じゃない)

何が起きたのかは、それなりに想像できる。

倒れる男はこの薄暗がりの中でも肌に血が通っていないことがわかった。地面、塀、電柱、そして男の体　ところどころに降り積もる霜は雪が持つ氷の力の結晶。

(冷静になれ……)

死体を見るのは初めてじゃない。が、“人”の死体を見るのは、おそらく初めてだった。

「優ちゃん、私」

雪は動揺している。

あの日よりも、さらに。

……俺が取り乱すわけにはいかない。ここで何もできないようにじや、俺は本当に瑞希の言うとおりの役立たずだ。

まずは念のため、男の生死を確かめる。生きているのなら救急車を呼ばなければと思ったが、男の体は氷よりも冷たくなっていた。

呼吸も脈もない。明らかに死んでいる。

「雪」

次に俺は雪に歩み寄り、肩に手を置いた。

「事情を聞くのは後だ。とりあえず力を抑えろ。このままじゃ家に帰ることもできないぞ」

雪は戸惑ったような視線を俺に向けた。

俺はすぐに言った。

「何も考えな。今は全部俺の言うとおりにすればいい。……いい

な？」

「あ、うん……」

今は何も考えさせないほうがいい。これからのことを考えるのは、まず家に帰って、事情を聞いて、それからだ。

「元の姿に戻るか？」

この姿のままじゃ目立ちすぎる。無理そうなら俺の上着でも頭からかぶせてやらなきゃならないと思ったが、一分ほどで雪は“人”の姿に戻る事ができた。

「よし」

手を引いて半ば無理やり立ち上がらせる。考える暇も与えないようにして俺は雪を路地から連れ出した。

幸い、その通りには誰もいなかった。

日没が進んでいる。

あと十分もすれば太陽の光は完全にこの町から消えてしまうだろう。

日の沈む方向に向かって、俺たちは早足に進んでいく。

(……くそっ)

腹立たしい。

自分の馬鹿さ加減が腹立たしくて仕方なかった。

俺が今回の件で雪のことをそれほど気にしなかったのは、心のかたきで“その力”があるから大丈夫だ、と、そう思っていたからだ。万が一、変質者とやらに出会ったとしても、普通の人間が雪のことをどうにかできるはずはない、と、そういう考えがどこかにあったから。

雪の力が不安定だという伯父さんの言葉を、忘れていたわけではなかった。ただ、今まで雪の力が暴発したことなんてなかったから安心していただけだ。これまで暴走した悪魔を退治してきたときも、ずっと安定していたから。

(……どうする)

瑞希のやつにはひとまず知られるわけにはいかない。

どうにか平静を装わなければならない。

事件の真相は、誰にもわからないはずだ。警察だって、雪があの時間、あの近くにいたことがわかったとしても雪の持つ力のことなんてわからないはずだし、雪と男の接点だってあるはずはない。

……死んだ男は自業自得だ、と、そう考えるしかない。

道徳的に問題があるのだとしても、俺にとってはそんなことは些細な問題だ。誰になんとわれようが、俺にとっては雪のほうは何倍も大事だ。

だから、あとの問題は 雪の気持ちだけだ。

しばらくは学校を休ませよう。

落ち着くまではそばについていてやるう。

そうしていれば、いつかは

「……？」

考え事に一区切りをつけた俺は、ようやくその“違和感”に気付いた。

風の音。

俺と雪の足音。

風の音。

俺と雪の

(……なんだ、これ)

ピタリと足を止めると、完全な静寂が訪れた。

静か過ぎる。

不自然だ。

人通りが少ないのはまだしも。

遠くに聞こえるはずの車の音も、踏み切りの警告音も、犬の遠吠えも。

いつさい聞こえない。

パチ。

一度は静まった耳鳴りがまた聞こえる。

俺は片手で頭を押さえた。

「……優ちゃん」

パチ。 バチイツ！

「っ……」

「優ちゃん!？」

まるで頭の中に電流が走ったかのような衝撃。

俺はゆっくりと顔をあげて心配そうな顔の雪を見て、そしてハツとした。

一人、二人

静寂と無人の世界に新たな人影が現れる。

足音一つ立てずに近付いてくる。

見た目は人。

けれど

わからない。わからない、が

あれは敵だ。

俺の中の何かがそう囁いていた。

「雪!」

「え……っ!」

とつさに雪の手を引いて、反対方向へ走り出す。

だが

「不知火雪、だな?」

「!?!」

そこにも一人の男が立っていた。

(いつの間に)

薄手の黒い服、腰には時代錯誤な小太刀を差し、その視線は明確な敵意を込めて俺たちを見据えている。

どう見ても普通じゃない。

こいつらは

「氷魔族、不知火雪。我々はお前を、人々に危害を加える存在と断定し、抹殺する」

「!」

一度だけ、伯父さんから聞いたことがあった。

“人々に危害を加える悪魔たちを退治する組織がある”と。
それなら自分たちには関係がない、と、そのときは気にも留めな
かった。

が。

間違いない。

(悪魔狩り……)

ゆっくりと事情を聞く暇もなく。

俺はおそらくこれまでの人生で最大の決断を迫られることになり
そうだった。

1年目5月その4

「不知火優希。君に対して我々は何も命を受けていない。だから、邪魔をせずに黙っていたまえ」

目の前の男は抑揚のない声でそう言った。

悪魔狩り。人間に危害を加える悪魔を退治するという組織の人間。俺たちには関係のない話だと、ずっとそう思っていた。

けど、今は いや。

俺はすぐに反論した。

「待てよ！ 雪は人に危害なんか」

「……」

先頭に立ったリーダー格らしい男は無言で俺たちの背後に視線を送った。

振り返る。

と。

“あの路地”からもう一人、同じ格好をした男が出てきて、言った。

「男性一名の死亡を確認。氷魔による攻撃の跡があります」

(いつの間に……)

その言葉に頷いて、リーダー格の男は言った。

「何か言いたいことはあるか？」

その言葉は俺ではなく、雪に向けられたものだった。

「……」

そこに至って。

「私は」

悪魔狩りの存在自体を知らない雪も、どうやらおおよその事情を察したようだ。何か言おうとして、言葉の末尾は小さくなって静寂の中に消えてしまう。

「答えられないのは、異論なしと受け取って良いな？」

「くっ……」

今の雪には自分の正当性を主張できるほどの余裕はない。
俺が代わりに何か反論しないと。

この男たちがそういう組織の人間なのであれば、雪のことを見逃しておけないだろうことは俺にも理解できる。だが、そもそもあれは仕方のないことではなかったのか？ 雪は力をセーブできなかっただけだ。もちろん殺す気なんてなかっただろうし、死んだ男が雪に対して悪意を向けなければ、そもそもこんなことは起こらなかったはずなのだ。

確かに防衛行動としてはやりすぎだった。

だが、それは雪が一方的に悪いわけじゃない。

「待ってくれ！」

だから俺は、黙ったままの雪の代わりに口を開いた。話し合いでどうにか解決できないだろうかと、そんな期待を抱いて。

だが。

「フン」

それは、路地から出てきた男の言葉で呆気なく崩れ去った。

「力を制御できないのならこの世界に住む資格などないんだよ。お前たちのような化け物はな」

「っ……!!」

嫌悪感にまみれたその言葉は、一瞬にして俺の頭に血を昇らせた。

「ふざけるなっ！」

拳を握り締め、その男に飛び掛る。

「優ちゃん！」

雪の制止。

「ふん……」

男は特段驚いた様子もなく右足を小さく後ろに下げると、

ひゅっ！

男の体が回転した。

「!?!」

何が何だかわからず、それでも俺は本能的に左腕で側頭部をガ―

ドする。

風を切る音。

直後、その衝撃はガードした左腕を弾き飛ばし、俺の側頭部を襲った。

「っ!?!」

目の前が一瞬真っ暗になる。

体が地面を離れるのがわかった。

「優ちゃんっ!」

雪の悲鳴が薄暗い静寂の中に鳴り響いて。

俺の体はそのまま地面に打ち付けられ、アスファルトの上を転がった。

「……おかしいな。こいつも悪魔の血を持っているはずだが、普通だな」

男が意外そうな顔で首をかしげる。

「優ちゃん!」

雪が駆け寄ってきた。

「っ……!」

ゆっくりと身を起こす。

そこで俺はようやく、自分が男の蹴りを食らったのだと理解した。(なんて蹴りだ……!)

中学生の頃、空手部の先輩の蹴りを食らったことがあったが、それとは速さも強さも格段に違う。意識を失わずに済んだのは、とっさにガードしたおかげか。

地面に打ち付けられた右半身が鈍く痛んだ。左のこめかみあたりもズキズキと痛む。地面を擦った右腕はシャツの肩口辺りが破け、そこから下、手首の辺りまで滲んだ血で真っ赤になった。唇も切れたらしく、口の中は血の味でいっぱいだ。

「……そこまでにしておけ」

リーダー格の男が、制止の言葉を発した。

「彼の方は普通の人間かもしれん。忘れるな。我々の敵はあくまで、

人々に危害を加える悪魔のみだ」

そう言って俺の隣の雪を睨み付ける。

(……………くそっ)

男たちの話を僅かに耳の端に引っ掛けながら、俺はフラフラする頭を押さえ、雪の助けを借りながらなんとか立ち上がった。

「不知火優希」

リーダー格の男が続けて言った。

「君はこのまま立ち去りなさい。君がいたところで我々の邪魔はできない。ただ怪我をするだけだ」

「……………」

俺は無言でその男を睨みつける。

辺りが暗いのと、出で立ちがほとんど同じせいで三人の男たちの区別がほとんどできなかつたが、口調でなんとなく特徴が判断できるようになってきた。

この比較的丁寧な口調の、リーダー格の男。

俺に蹴りをくれた攻撃的な口調の男。

それと先ほどからほとんど口を挟まない無口な男。

「んなこと……………できるかよ」

俺は唇から流れてきた血を左手で拭くと、口の中に溜まった血をプツ、と地面に吐き出した。

「……………怪我をすることになるぞ」

リーダー格の男が言う。少し脅すような口調になっていた。

俺は引かずに、

「あんたらこそ……………あまり俺を怒らすと怪我をするぞ」

軽く、全身に力を込める。

もう悩んでいる場合じゃない。こいつらは本気で雪を殺すつもりだ。

なら

腹の辺りから熱が広がっていく。

戦うしかない。

それが全身に回っていく。

「！」

男たちの警戒が高まるのがわかった。
もう後戻りはできない。

俺の風貌が変化する。

髪は真紅に。

右手には炎。

“人”から“悪魔”へと。

「不知火優希……」

リーダー格の男の声はさらに低く、警告するような声色に変わっていた。

「君がもし、この場でその力を振るうならば、我々は」

男がそこでいったん言葉を切ったので、俺はふん、と鼻を鳴らし
て割り込んだ。

「俺も抹殺対象になるってのか？」

「その通りだ」

「上等だっ！」

俺はそう言い捨てて、再び口の中に溜まっていた血を吐き出すと、
男たちを睨み付けた。

「てめえの命が危険だからって、妹を黙って差し出すような情けな
い真似ができるかよ！ なめんじゃねえぞっ！」

右手を小さく前に出して手のひらを上に向ける。

集中すると、その中心部に次第に熱いものが集まってくる。

標的は、まず

(こいつだ……！)

俺に蹴りを浴びせた、武闘派らしき男。

いくらなんでも殺すわけにはいかない。こいつを制圧して、うま
く逃げ出せれば。

(いけ……っ！)

手のひらが熱くなってそこから炎の塊が飛び出した。

「!？」

瞬時に飛び退った男の足元で炎が破裂する。避けられたことは想定範囲内。

その間に俺は距離を詰めていた。

身体能力は人間の姿のときより格段に上がっている。さっきのようなことはない。

体勢を崩した男の懐に飛び込むと同時にこぶしを握り締める。

目に止まらぬ速さの拳をその脇腹に叩き込む。

殺したらまずい。

僅かに力を抜く。

が、

「……」

拳が途中で止まった。

「!？」

動かなくなった腕。

男は慌てた様子もなく、冷静に俺の手首をがっしりと掴んでいた。

(な……!?)

驚く間もなく、背後から二人がかりで押さえられる。

「っ……! てめえら……!」

全力で振り払おうとしたが、まるで万力で固定でもされたかのようには動かない。

とんでもない馬鹿力だ。

なら、と、炎の力を集めようとしたが、

「ふ……っ!!」

眼前の男のパンチが、俺のみぞおちに吸い込まれた。

「っ……!! がふっ!!」

鈍い痛みとともに胃液が逆流する。

目の前が一瞬真っ暗になった。ひざに力が入らなくなって崩れ落ちる。

「……こいつは俺が抑えている。向こうをやれ」

そう言ったのはリーダー格の男だったか、意識が混濁して判別がつかない。

雪が何か叫ぶ声も聞こえた。

おそらく俺の名前を呼んだのだろう。

……思い違いをしていた。

普通の人間だからと、殺したらずい、などと。そんな悠長なことを言っていていられる相手ではなかったのだ。

相手は悪魔狩り。

俺たちがこれまで相手にしてきた暴走悪魔よりも、格上の相手だ。つまり

殺さなきゃ、殺される。

「てめ……っ」

力を込めようとすると、腕の関節に激痛が走った。

「大人しくしろ」

俺の腕を固めたリーダー格の男はさらに警告するような冷たい声色になっていた。

「悪魔とはいえ、私は無用な殺生はしたくない。大人しくしてれば、まだ　しばらく監視の目はつくだろうが、命まで奪われることはない」

「くっ……」

掴まれた手首が軋んだ。

（くそっ……！）

こんな日に限って、調子はどうかやら最悪だ。おそらくは一割も出していない。殺す気でやったとしても、この三人の男を相手にするのは到底不可能だろう。

この場を切り抜ける方法は一つ。

辺りは完全に闇に沈もうとしていた。

これだけの騒ぎに、辺りの人間がまったく気付かないのも不自然だったが、今はそんなことを考えている場合ではない。

「……雪！」

俺は叫んだ。

「戦え！ そいつらは本気で前を殺すつもりだ！ ……お前が本気でやりゃあ負けやしない！」

「なにを！」

背後の男の手に力が入った。

「戦え！ 雪！」

絶対に勝てるかと確信があったわけじゃない。ただ、雪のヤツは不安定な俺と違い、常時とてつもなく大きな力を操ることができる。その力は、俺が比較的調子の良いときでさえ半分程度まで行くか行かないかの強さだ。

確かに相手の力は未知数。

それでもこの場を切り抜ける自信があった。

「雪！ やれっ！」

「っ！ いい加減にしろ！ でないと君もこの場で」

「へっ！ 上等だっつってんだろが、このタコ！」

男の制止に逆らい、俺は全力を振り絞って拘束を解こうと試みた。が、やはり動かない。どうやら力の入りにくい形で極められてしまっているようだ。

間接がさらに軋む。

「くっ……！」

男がさらに力を入れる。

……外れなくてもいい。

こうして抵抗していれば、雪に向かう敵の戦力を一人分確実に減らすことができる。

自分の力でどうにかできないのはシラクだが、今はとにかくこの場を切り抜けること。

それが最優先だ。

「雪！」

……だが。

顔を上げた視線の先。

それが雪の視線と重なって。

雪は悲しそうな顔で俺を見ていた。

……嫌な予感。

「雪　！」

俺の言葉を遮るようにして。

雪は言った。

「優ちゃん……無茶しないで」

雪はまったく戦う姿勢を見せていなかった。

ただ棒立ちになったまま。

予感は確信に変わった。

「優ちゃんまで巻き添えになることないよ。私は罪もない人を殺しちゃったんだから……この人たちは、何も間違ったことは言っていない」

「ばっ……！」

最悪だ。

本当に最悪の展開だった。

「馬鹿なこと言うなッ！！」

あいつの性格と、先ほどまでの取り乱しようを思えば、あいつがそういう結論に達するのは、たぶん、わかりきっていたことだったのだ。その可能性を考えていなかったわけではない。いや、むしろ、その可能性が高かったから、そうならないで欲しいからこそ、俺はそれを敢えて考えないようにしていたのだ。

「良い心がけだ」

俺の腕を捕らえたまま、リーダー格の男は少しだけ口調を和らげた。

雪は言った。

「……優ちゃんにはひどいことしないで」

「約束しよう。ただ　っ」

「くっ！」

会話の隙を突いて全力で抜け出そうとしたところを、まるで見透

かされたかのように地面に組み伏せられてしまった。

「……我々が任務を終えるまでの間、こうして拘束しておくことは認めてもらいたい。でなければ、我々は君たち二人とも退治してしまわなければならない」

「……」

雪は男を見て、静かに俺の方を見る。

それから微かに笑って、小さく頷いた。

「っ!!」

頭の中が一瞬にして熱くなる。

「やめろ！ ふざけるな、てめえらッ!!」

「暴れるな！」

さらに強い力でねじ伏せられる。

動かない。

強化された力をもってしても。

まったく動けない。

「急げ。……なるべく苦しまないようにな」

リーダー格の男がそう言うと、他の二人の男はゆっくりと小太刀に手を伸ばした。

「くっ……!! 雪 ツ!!」

駄目だ。

雪は動かない。

ダメだ、ダメだ。

闇色に染まった景色の中、雪は微かに震えている。

微笑んだ瞳には微かに涙。

……ふざけるな。

こんな理不尽なことがあってたまるか。
いや。

不運を恨むのはあとでいい。

(こうなったら、もう……)

こうなった以上は

今は、ただ。

視界の端。

日が沈む。

(……頼む)

雪が戦う意思を持たない以上。

残された希望はたった一つしかない。

(頼む　　!!)

地平線へと沈む、ほんの僅かな太陽の光。

ただの神頼み。

“そのとき”まではおそらくほんの数秒。

男たちが雪の命を奪うまでは　どれほどの余裕があるだろうか。

その数秒が、とてつもなく長く感じた。

神経を研ぎ澄ませる。

“そのとき”に。

コンマ一秒でも早く、動き出せるように。

日が、沈む。

最後の残光に、男たちの小太刀が一瞬煌いて

そして　俺はたぶん産まれて初めて、神様とやらに感謝するこ
とになった。

「な……っ!!」

驚愕の声を発したのは、瞬時に飛び退ったリーダー格の男。

いや、正確に言うと飛び退ると同時に、数メートル吹き飛んでい
た。

それでもすぐに体勢を立て直したのはさすがというべきか。

爆音と熱風。

高く立ち上ったのは、螺旋を描く灼熱の炎柱。

辺りへの影響とか。

今後のこととか。

そんなことを考える余裕はすではない。

頭の中は、体を包む業火と同じように熱くなっていた。

俺の体内の“日付”が代わった。

“前日”弱かった反動か。“今日”の俺はどうやら絶好調だ。

「……………」

小太刀を携えた二人の男が何か叫んでいる。

「どけ……………！」

威圧する。男たちはそれでも怯まず、間合いを保ちながら俺を睨みつけていた。

俺は構わずに前に出る。

雪のもとへ。

とにかく今は、あいつの安全を確保するのが先だ。

幸い、男たちは雪のことを気にする余裕はなかったらしい。間合いを保ったまま、道を開ける。

「……………優ちゃん」

雪は眉間に皺を寄せて、泣きそうな顔をしていた。

安堵した。

「……………馬鹿野郎」

ポコツと雪の頭を叩いて、

「俺のことがどうとか言ってる場合か。殺されちまったら全部終わりなんだぞ」

すぐに振り返ってふたたび男たちと対峙する。

「でも……………こんなことしたら優ちゃんも」

何事か言おうとした雪の言葉を俺は遮って、

「お前が目の前で殺されて、俺がそのままのうのうと今までどおり暮らしていけるとでも思ってたのか？」

男たちも退く気配はない。

たぶん、戦いは避けられないだろう。

「どんな手段を使っても仇を討たなきゃならん。……………どうせ戦わなきゃならないなら、お前が生きてたほうがなんぼか得だろうが」

「……優ちゃん」

ひとまず雪の安全を確保したことで、少し考える余裕が出てきた。未だ、辺りの住民は無反応だ。これはもう、あいつらが辺りに騒ぎが及ばないよう、何らかの手段を講じていると考えたほうがいいだろう。

それはこちらにとっても好都合だ。

雪と違って、俺は静かに戦うのが苦手な性質だから。

「……」

相手は動かない。

退く気配もない。

応援でも待っているのか。

向こうがそう判断したのだとすると、俺の力は目の前の三人を上回っているということになる。

(ならば)

右手に力を集め、放射状に炎を放った。

攻撃ではなく、ただの牽制だ。

「！」

三人の男たちはその炎を避け、あるいは手にした小太刀で払い、軽々と防いでみせた。

仕掛けてくる様子はないが、俺の力を見ても怯んではない。こちらが脅して逃げ出すような連中でもないのだろう。

どうするべきか。

できれば殺したくない。

が、さっきはその考えがアダとなった。

なら やるしかないのか。

応援が来て、また追い詰められるようなことになってしまったら目も当てられない。

やらなきゃ殺される。

殺すのと、殺されることと、どちらかを選択しなければならぬのなら

(……やるしかない)
拳を握り締める。

今が、生きてこの場を切り抜けられる最後のチャンスなのかもしれないのだ。妹が殺されそうになっているのに、神頼みしかできないなんて、そんな情けない状況になるのは二度とゴメンだ。

(覚悟を決める……っ！)

奥歯をかみ締める。

拳に力を込める。

そつと背に当たった雪の手が、微かに震えたのがわかった。

おそらく俺の覚悟が伝わったのだらう。

三人。

それも相手は悪魔ではない。人間だ。

それでも。

それでも、やるしかない。

「……」

何も言わず、ただ腹の中心にゆっくりと力を込める。

魔力が全身を駆け巡る。

身を包む炎が爆発的に膨れ上がった。

「……」

男たちが目配せし、同時に身構えたのがわかる。

俺の意思は向こうにも伝わった。

もう、殺すか、殺されるかしかない。

「雪……」

雪の視線が俺を見上げる気配がわかった。

「何も考えなくていい。ここから先は全部俺の言つとおりにしる。いいな」

「……」

返事はなかったが、制止されることもなかった。

湧き出した炎が攻撃の形を取る。

先に動いたのは、相手だった。

小細工は必要ない。

こちらも真正面から迎え撃つ。

俺の手を離れた業火は、おそらく人間を一瞬で焼き殺すだけの力を秘めていた。男たちがどんな訓練を受けているか知らないが、たぶん、死を免れるのは難しいだろう。

男たちが小太刀を構える。

そんな彼らを包み込むように、炎が伸びる。

真っ赤に染まった夜の闇。

轟音。

そして

漆黒の夜空

「!？」

それは一瞬のことだった。

(空が)

視界の端に映った違和感。

遠く、遠くにあつたはずの夜空が“落ちて”くる。

「!」

それに驚愕したのは俺だけじゃなかった。

男たちが足を止める。

雪が息を呑む音。

“落ちて”きた夜空は、俺が放った炎を真上から押しつぶすように包み込み、あっという間に飲み込んでしまった。

「な」

炎のオレンジに染まっていた景色が、一瞬にして闇色に染まる。

そして

「……なに……？」

静寂。

音さえもその闇に吸収されてしまったのだろうか。

それが錯覚であると気付いたのは、
「やれやれ。間に合ったか」

誰もいない場所からそんな声が聞こえた後のことだった。

この場にいる誰のものでもない。少年の声。

誰もいない？

いや、違う。

(な !?)

俺の炎を飲み込んだ闇の中心に、その少年は立っていた。左手をポケットに突っ込み、右手を男たちの方に向けて軽く牽制するように開いている。暗くて顔はよくわからないが、それほど長くはない金色の髪、身長は俺よりだいぶ低くて百六十センチぐらいだろうか。黒いTシャツにジーパン。

「優希」

「!?!」

驚いたことに少年は俺の名を呼んだ。

「雪。二人とも下がってな」

「え……」

雪も驚きの眩きを発する。

俺もさらに驚いて問いかけた。

「お前、いったい」

「下がってる」

少年は無を言わせぬ口調でそう言って、そのまま三人の男たちに歩み寄っていった。

「……楓。何の真似だ？」

そう言ったのはリーダー格の男だった。

どうやら少年は男たちと知り合いのようだが。

俺はその事実よりも先に、脳裏の奥の記憶を襲った微かな刺激に驚いていた。

そこに残る小さなイメージ。

それと目の前の少年の後姿を重ね合わせる。

(楓……?)

それは数日前、由香との話題に上った、小さい頃によく遊んだ謎の少年 “かおるくん” のイメージだった。

「楓……? 楓……ちゃん?」

驚いたような雪の声。

それで俺は確信した。

(楓 そうだ“楓”だ)

かおるではなく、楓。

俺はその少年 楓の後姿を再び見つめた。

「ふん……」

楓はそんなリーダー格の男と相對し、小馬鹿にしたように鼻を鳴らして言った。

「何の真似か、って? それはこっちが聞きたいぜ。あんたらが一体何をしようとしているのか、な」

「わかりきったことを。我々は光刃様からの命に従い、有害な悪魔を退治」

「いいや、違うね」

楓はすぐに男の言葉を遮って、

「“光刃様” じゃなくて“紫喉” の命令だろう?」

「同じことだ」

男は表情を変えずにそう答えた。

俺たちにはわからない単語が出てきていたが、俺は黙ってその話の行方を見定めることにした。

「紫喉様は光刃様の後見役だ。その紫喉様の命令なら光刃様の命令も同然」

「ま、そういう解釈もありか。だがな」

楓はそれでも小馬鹿にしたような口調で、

「有害な悪魔を退治、って辺りがちょっと違う気がするな」

「なにを」

「聞けよ。……雪、お前も聞いておけ」

楓はそう言ってチラツと雪を見ると、すぐに男たちのほうに向き直って、

「雪が殺したつていう、その路地に転がっている男、ま、色々あって調べさせてもらっていたんだがな」

「調べた？ なにをだ？」

楓はフツツと笑って、

「人間じゃないんだぜ、その男」

「……なに？」

リーダー格の男が、隣の男 死んだ男の検分をした部下を見やる。

「……」

男は何も答えなかった。

「で、調べてみるともつと面白いことがわかった」

楓はその男をチラツと見て、

「紫喉さん直属のあんたなら知ってるんじゃないのか？」

「なにを」

男は少し動揺した様子を見せた。

楓はそれを見て、ふん、と鼻を鳴らすと、相変わらずの淡々とした口調で、

「そいつは少し前、あんたらの組織で捕えていた悪魔だよ。たいした力も持たない下級の悪魔さ。……確か、そういった連中の管理は紫喉さんのほうで管理してるはずだな」

「……」

「ま、紫喉さんが“何か条件をつけてわざと逃がす”なんてことするはずがないだろうし、自力で脱走したんだだろうな、おそらく」

そう言つて楓は小さく笑い声を漏らす。

「当たり前だ！」

男は大きく怒鳴った。

が、それが焦りを隠すためのものだというのは俺にもわかる。

それほど動揺している様子だった。

「脱走だと？ そんな話は私は聞いていないぞ」

リーダー格の男が憮然とした声を出す。

「そうらしいな。……じゃあ問題だ」

楓は男たちの様子を楽しそうに眺めながら、人差し指を立てると、
「あんたらの組織が有害な悪魔として捕らえていた男が脱走。そして正体を隠しながら町で普通に暮らしていた、人間に極めて友好的な悪魔の少女に“たまたま”襲いかかった。少女はとっさのことに自分の身を守るために力を使い、悪魔の男は死んでしまう。さて、誰が一番悪い？」

「……」

男たちの間に沈黙が訪れる。

やがて、リーダー格の男が口を開いた。

「もし、それが本当だとするならば……原因は我々にもある」

「御名答。あんたは常識をよく知っている」

楓はそう言うってから今度はもう一人の男を見て、

「あんたはどう思う？ 悪魔の少女が一人で責任を被るべきだと思

うか？」

「っ……」

男は小さく唇を噛んで、

「それは、お前の言っていることが正しいという場合の話だ！ あ

の死んだ男が悪魔だったなどという証拠は」

「それは私が保証しよう」

「!？」

背後からの突然の声に、俺と雪は驚いて後ろを振り返った。

「緑刃様……」

そこに立っていたのは背の高い女性だった。歳は二十代半ばぐらいだろうか。出で立ちは三人の男たちと良く似ていて、彼らの仲間であろうことはすぐにわかった。

その女性は俺たちの横を通り過ぎるときにチラッとこっちを見て

から、楓や男たちのそばまで行って立ち止まる。

「紫喉様の配下のものがずいぶん慌てて死体を片付けようとしていたのだな。少々待たせて私のほうで確認させてもらった」

楓は言った。

「……と、いうわけだ。納得したか？」

その言葉に、反論が来ることはなかった。

俺たちにはよく理解できない話が終わり、その場にいた人物は楓以外、全員立ち去った。

で、俺たち二人はというと、ただ成り行きを見守っていただけ。見たところ、とりあえず危険な場面を切り抜けることはできたらしいのだが

「楓って お前、あの楓か？」

「……楓ちゃんなの？」

俺たちは当然のようにそう問いかけていた。すると、楓はポケットに手をつ込み、電柱に寄りかかった格好でチラリと俺たちを見る。

「お前らの言う楓がどの楓だか知らんが、俺は少なくともお前らのことを知ってるぜ」

(……間違いない)

その言葉だけで俺は確信を得た。

このクソ生意気なしゃべり方には覚えがある。というか、たった今、鮮明に蘇ってきた。

「久しぶりだな、とでも言えればいいか？ ま、俺の場合はあまり久しぶりって気はしてないんだが」

楓はそう言っただけで薄い笑みを浮かべる。

「いや、久しぶりなのは久しぶりだが」

正直、久しぶりの再会を素直に喜べる状況じゃなかった。

「さっきのは？ お前は一体なにをやってんだ？」

未だに現状を全く把握していない。色々なことが起こりすぎて、

何に対して最初に反応すればいいのかわからなくなっている。

楓は俺の質問に小さく息を漏らして、

「忘れな。あの組織にも色々と下らん争いがあるらしくてな。お前らはそれに巻き込まれたただけだ」

言ってから今度は雪を見て、

「あの男はお前に殺させるために用意された男だ。どうせ殺される奴だったのさ。お前が気に病む必要はこれっぽっちもないぜ」

「う……うん」

雪も整理し切れていないらしく、何だか複雑な顔をしていた。

そして少しの間、沈黙。

(……こんな状況じゃ、何を話したらいいのかさっぱりだな)

それにいくら一緒に遊んだとは言っても、もう十年近くも前の話だ。話題に困ったとて、別に不思議なことではないだろう。

「あ……ね、楓ちゃんは一体何をやってるの？」

口を開いたのは雪だった。

その口調はさっきまでと比べると和らいだ感じになっていた。頭の中がようやく整理されて、幼なじみと再会した、という事実がようやく実感となったのだろう。

で、質問された楓の方はというと、ちょっと鼻で笑うような反応をして、

「ちゃん付けはやめな。子供じゃないんだぜ」

「身長はまだ子供だがな」

自然と自分の口をついた言葉に、俺自身がびっくりした。

条件反射。

思わずそんな単語が頭の中に浮かんできて、何だか無性に笑いがこみ上げてきた。

そう。

十年前、俺たちはこんな風に憎まれ口の叩き合いをしていたのだ。

「お前みたいに、頭の中身が子供よりマシだ」

楓も俺と同じように、そんな言い方で返してくる。

「何を言うか。俺は充分大人だぜ」

「お前が大人なら、世界人口の九十五パーセントは大人だな」

「……ちっ、相変わらずむかつくな、お前」

俺が舌打ちしてそう言っていると、楓もフン、と鼻を鳴らして、

「お互いにな」

「ふふっ」

それを見て雪がクスクスと小さく笑い声を漏らす。

なんだか昔と全く変わらない、楓とのこういうやりとりがとてつもなく懐かしかった。

「そう言えば楓ちゃん」

と、雪が思い出したように尋ねる。

「どうしてそんなところに立っているの？」

雪が疑問に思うのも当然だった。楓は俺たちから十メートルぐらい離れたところに立っているのだ。おかげでこうして話してはいるものの、周りの暗さのせいでお互いの顔がほとんど見えないくらいである。

「近付くと身長低いのがばれるからだろ」

俺がそう言っていると、楓は少し考えて、

「ま、そんなところだ」

反論せずにそう答えると、チラツと時計を見て、

「さてと、俺もそろそろ退散するか」

「え？」

その楓の言葉に、雪がびっくりして、

「待って、楓ちゃん。楓ちゃんは今どこに住んでいるの？ 学校は

」

「あまり質問はするな」

楓は手を雪の方に向けて制止し、

「俺にも色々複雑な事情があつてな。お前たちにちゃんと顔を見せられないのも、その辺の関係だ」

「複雑な事情？」

俺が聞くと、楓は笑って、

「機会があればそのうちまた会える。……それと、今日のことは忘れていいが、あの組織の存在は忘れるな。これからも関わらなければならぬときがあるかもしれん」

「それは」

俺が質問しようとする、楓はそれを遮って続ける。

「この世界に住む悪魔はみんなそうなのさ。あの組織はお前たちにとって、敵でも味方でもあり得る。ま、何か困ったことがあれば……そうだな」

楓は少し考えて見せてから、

「神村沙夜って女に相談しろ。知っているだろ？」

「神村さん？」

俺が少し戸惑った顔を見ると、楓は頷いて、

「あいつはあの組織のことも、お前たちの正体も知ってる。ま、難しいことは考えるな。困ったことがあれば、だ」

俺は頭の中にあのお下げの少女の姿を思い浮かべる。

(……俺、嫌われてるんだよな、確か……)

と、ちよつと嫌なことを思い出したりする。

もちろん、そんな俺の思いなど楓は知るはずもないのだが、まるで心呼んだかのように、

「お前得意のずうずうしさでなんとかしな」

などという、ありがたいアドバイスをしてくれたりする。

「……了解。努力してみよう」

考えを読まれたのが何となく悔しくて渋い顔でそう返すと、楓はフツと笑って、

「じゃあな。……また機会があれば」

そう言っただけでゆっくりと俺たちに背を向け、ポケットから出した手を軽く上にあげて立ち去っていったのだった。

1年目5月その5

「あ、アイツ、今日も来てる……」

「誰を待ってるのかしら……」

「ストーカーだったたりして……」

「……しつ。聞こえるって」

彼女らは俺に聞こえないように話していたつもりだったらしいが、完全に丸聞こえだ。

別に気を悪くしたりはしない。

ただ少し気まずいだけである。

(さて、と……)

チラツと腕時計に目をやった。

十六時十五分。

そんな俺の前を通り過ぎた四人の女生徒は桜花女子学園の制服に身を包んでいる。当然だ。ここは彼女たちの学び舎である女子高、桜花女子学園の校門前である。

そんな場所で俺みたいな男子高校生が誰かを待っているような素振りをしていれば、先ほどのような反応もまあ仕方ないことだろう。

(さすがに恥ずかしいな……)

これで、学校から出てきた超絶美人の恋人が手を振りながら俺に駆け寄ってきてくれる、っていう展開が待っているのなら、他人からの視線など一切気にしたりはしないのだが、

「優ちゃん」

非常に残念なことに、手を振りながら駆け寄ってきたのはタダの妹である。

しかもその声でさらに俺に注目が集まってしまい、俺はがっくりと肩を落とした。

「? どうしたの?」

「……頼む。大声でその呼び方はやめてくれ」

そばまでやってきた雪は片手の手提げ鞆を両手に持ち直し、真っ直ぐに俺を見ると、まるで小鳥のように小さく首を傾けた。

「どうして?」

「どうして、じゃないだろ。死ぬほど恥ずかしいんだ、このシチュは」

「?」

雪がわからない顔をしたので、俺はため息を吐きながら言った。

「あんな。……例えば俺以外の、どこからどう見ても高校生としか思えない男子生徒がこの校門に立っていたとして、だ」

「うん」

「この学校の生徒がそいつの名前を呼びながら駆け寄っていったとしたら」

「うん」

「お前はそいつらのことを兄妹だと思っか?」

「うん。思わない」

そう言っつて雪は笑った。

どうやら確信犯だ。

「笑うな。俺はちつとも面白くないぞ」

憚然としてそう言っつてやると、雪は可笑しそうにクスクスと笑いながら、

「気にしすぎだよ、優ちゃん。どうせみんな、明日になったら忘れてるんだから」

「一週間も連続で来てたらさすがに覚えられるだろう……」

俺は大げさなため息とともに、ねずみ色に曇る空を仰いでみせた。世間は明日から六月である。いよいよ梅雨の時期だ。気温はまだそれほど上がっていないが、制服の首筋あたりがいつも湿っている感じがして不快感は日増しに上がってきている。

くだらないやり取りを交わしながら、俺は雪とともに帰り道を歩き出した。

先日あの事件。

異常に気付けなかったことへの罪滅ぼし、というわけではないが、俺はあれから毎日、学校の帰りにこの桜花女子学園へ足を運び、雪と一緒に帰宅する日々を過ごしていた。

「そっぴゃ、瑞希のやつは？ 一緒じゃないのか？」

「瑞希ちゃんは部活だよ」

「ああ、部活か。……って、アイツ、何の部活やってんだっけ？」

部活をやっているとは聞いていたが、何の部活だったか聞いた覚えがなかった。

雪は頷いて、

「合気道部だつて」

「合気道、だと……」

俺はこめかみに手を当ててため息を吐いた。

「……アイツ、あれ以上強くなるつもりか？」

「ここで一つ。」

もしかすると勘違いされているかもしれないので念のため断っておくが、俺がいつも瑞希のヤツに無抵抗のままにやられているのは冗談でやられているとか、相手が女だから手加減しているとか、決してそういうことではない。

あの牧原瑞希という女はガチで滅茶苦茶に強いのだ。

空手、柔道、剣道……パツと思いつく武道は一通り経験があるそうだし、どの分野においても天才的な才能を発揮している。生まれついで天才武闘家なのである。

「そのうちボクシングでも始めるんじゃないかな。……あいつなら男相手でもベルトを取れそうな気がして仕方ない」

「ふふ、そうかもね」

雪はそう言つて可笑しそうに笑つたが、ヤツと毎日がみ合っている俺としては全然笑えない。「あ、間違つた」ぐらいのレベルで骨の二、三本はヤラれかねない。

それからしばらく。

「……あ、そうだ」

雪が急に何かを思い出したように立ち止まった。

「どうした？」

「今日は買い物して帰らないと」

「デパートか？」

雪はちよつとだけ困った顔をして頷いた。

デパートはここからだと言ったと桜花女子学園のある方向、つまり今まで俺たちが歩いてきたのと逆方向にある。

「やれやれ。じゃあ逆戻りか？」

俺が疲れた顔をしてそう言うと、雪は申し訳なさそうな顔をして、

「ごめんね。あ、優ちゃんは先に帰ってて」

「あのな。それじゃ俺がわざわざ迎えに来た意味がないだろうが」

「大丈夫だよ。一人でも」

「ダメだ」

俺は少し強い口調で言った。

たぶん危険はない。学校で注意していた変質者の話も最近では聞かなくなった。

が。

（今はまだ一人にできないしな……）

態度にこそ出さないが、雪があ的事件のことをまだ引きずっていることは明らかだった。殺した相手が罪を犯した悪魔だったとしても、それはあくまで結果の話だ。自らの意思で退治してきた暴走悪魔たちとは違う。力を制御できずに意図せず相手を殺してしまったことは紛れもない事実で、そのことにショックを受けていないはずはないのだ。

もう、力を使わせないほうがいいのかもしれない。と、そんなことを考えてもいるが、ともかく、今はそういった諸々のことに整理がつくまで、極力そばにいてやらなきゃならない。

「行こうぜ。戻ったって大した距離じゃないだろ」

「……うん。ごめんね」

申し訳なさそうな顔の雪とともに、俺は結局、今来た道を戻ることになった。

途中、

「そういえば、優ちゃん。あれから楓ちゃんと会った？」

「ん？ いや。つか、どこにいいのかわかんねーし」

楓もそうだし、悪魔狩りとも、あれ以来一度も接触していない。

「そうなんだ……」

雪はちよつとがっかりしたような顔を見ると、さらに厚みを増した曇り空を見上げながら呟くように言った。

「今頃どうしてるんだろうね、楓ちゃん」

「……やれやれ。不便なところだ」

先ほどの雪の質問に答える者があつたとすれば“山登り”とでも答えたかもしれない。

足元に生い茂る背の高い雑草を踏みつけながら、深い樹木に囲まれた道　とも言えないような斜面を楓は登っていた。それほど気温が高くないことは幸いだったが、さすがに四時間もこんなところを歩かされてはうんざりもしてくる。

ようやく視界が開けてきた。

「ふん……」

そこが目的の場所だった。

「これだけ大きい施設があるってことは、この辺りにも“門”があるのか」

深い森に囲まれた盆地に建っていたのは神社だった。いや、神社

のような施設、といったほうが正確だろうか。ここは一般の参拝客が容易に訪れることができるような場所ではない。

入り口付近の鳥居には神官風の男たちが立っている。

まるで門番だ。

「待て」

その鳥居をくぐろうとして呼び止められた。

楓はチラッと男を見て、

「影刃えいはを出せ」

「なに？」

影刃というその名に男は露骨に表情を厳しくした。

その名は普通の少年が知っているような名前ではなかった。

「何者だ？ 我々の同士とは思えないが」

「心配するな。俺はお前らの敵じゃない。楓が来たと伝えればわかる」

「楓……？」

男たちは顔を見合わせたか、やがて、

「ちよつと待ってる」

片方の男がそう言って奥へ向かう。

が、

「ああ、待て」

楓はすぐにその男を呼び止めた。

「その必要はないらしい」

「なに？ ……あ」

振り返った男は楓を見て、それから驚きに目を大きく見開いた。

いや、男が見ていたのは楓ではない。

その背後の人物だ。

「……相変わらず趣味の良い登場だな」

首筋に刃物が当てられながらも、楓は平然とした口調でそう言い放った。

いつの間にか背後に現れていた人物に対して。

「お前こそ、相変わらず生意気そうな顔をしてるじゃないか」

その人物は、まるで長旅をしてきた僧侶のようにボロい作務衣をまとった細身の男性だった。見た目、歳は楓の年齢の倍以上、おそらく四十代だろう。どちらかといえば温厚そうな目をしているが、全体的な印象は不思議と鋭さを感じさせる。

「とりあえず俺から離れる。でないと、力づくで引き剥がすことになるぞ」

「冗談の通じないやつだな」

男性は笑いながら短刀をくるっと回して収め、楓の体を解放した。

「影刃様」

「ああ、こいつは私の知り合いだ。心配ない。下がっていいぞ」

「はい」

「……さて」

男たちが下がったのを見て、その作務衣の男性 影刃は頭を掻きながら楓の正面に回る。無造作で中途半端に伸びた髪には白髪がかなり混ざっていた。

「珍しいじゃないか、お前がこんなところまでやって来るなんて」

「誰が好きこのんでこんなカビ臭い神社に来るか」

と、楓は冷たく言い放つ。

「言っじゃないか。それでも私はここで毎日寝起きしているのだがな」

「カビ臭いお前にはお似合いじゃないか」

「まあ、そうか」

影刃は笑って石段に腰を下ろした。

「つまり、私に何か用があったわけだ。それもそこそこ重大な」

楓は鼻を鳴らして、

「俺にとつちやそこそこ、だな。お前にとつちや“かなり”重大だろつが」

「……」

その言葉に、影刃の眉間の皺が少しだけ深くなる。

「不知火 か？」

「わかっているじゃないか」

影刃はふうーっと長い息を吐く。

「お前が来た時点でそうではないかと思っていた。……詳しく話してくれ」

「ああ」

と、楓は簡潔に先日のできごとのあらましを説明する。

「……紫喉は、相変わらずだな」

「あっさり宗旨替えされたら、それこそビックリしろ？」

軽口には答えず、影刃は少しだけ考え込んだ。

「光刃様は何と？」

「いつもどおりさ」

「ふむ」

腕を組む。

「その流れを見るに、紫喉はお前と不知火雪の関係には気付いていなかったか」

「どうか。気付いていたか、あるいは薄々勘付いていてわざとけしかけたって可能性もある」

「お前が下手を打つのを待ったということか。……何にしても」

影刃はニヤリと笑って、

「緑刃を引き込んでから事を進めたのは正解だったな。お前もずいぶん頭を使うようになったじゃないか」

「ただの気まぐれさ。力づくでやったって構わなかった」

「冗談を言うな。お前一人でどうにかなるものか」

「……ふん」

楓は特に反論はしなかったが、影刃の言葉を肯定したわけではない。

「いずれにしても、とうとう二人とも組織に存在を知られてしまったわけだな」

「そりゃそうだろう。あれだけの力を持つてるヤツらが、人間のフ

りして一生過ごそうなんてムシの良い話だ」

楓の言葉に影刃は頷きながらも、

「アレらの親には借りがあるのでな。組織の一員としても、せめて子供たちは無関係のまま過ごさせてやりたかったが……まあ仕方あるまい」

「これからどうするつもりだ？」

「そうだな」

影刃は少しだけ思案するような顔を見ると、ポンと膝頭を叩いて、「ここは一つ、お前に任せてみることにするか」

「なに？」

怪訝そうな顔の楓に、影刃は真顔のまま言った。

「向こうの状況はお前のほうが詳しいだろう。私もそう易々とここを離れられないものでな」

“門”の状態が悪いのか？」

そう言っただけで楓は神社の奥へチラツと視線を送る。

「周期的にな。こういうときがある」

「俺の好きにやって、あいつらが無事で済む保障はないぞ？」

「ま、大丈夫だろう。お前はなんだかんだと友達思いだからな」

「……冗談だろ？」

「冗談だ」

「……」

「冗談だ」

「どっちが」

楓が目細めるのを見て、影刃は笑いながら自分のこめかみに人差し指を当てた。

「どっちか、あるいは両方だな」

「……」

傍目には意味の通じない会話のように思えたが、楓はその意味を理解したようで、

「そんな面倒なことは真っ平ゴメン」と言いたい所だが、俺の体

はそうそう自由がきかないもんでな……」

影刃はゆっくりと腰を上げて、

「まあ頼む。紫喉のヤツも一度失敗したらそうすぐには動けないだろう。……もう行くのか？」

「かび臭い神社にはあまり長居したくないものでな」

背を向け、楓は軽く手を振ってそのまま立ち去っていった。

.....

「思ったより買ったね。優ちゃん、大丈夫？」

「ああ」

買い出しといえばだいたい俺が両手にいっぱい荷物を抱え、隣を歩くヤツは手ぶら、と相場が決まっているのだが、不思議とこの二人で行くとそういうことにはならない。必要な物だけきっちり買って、余計なものには手を出さない。だから荷物はあまり多くならないのだ。

よって、帰りはそれぞれ小さなビニール袋を一つずつぶら下げているだけだった。

「今日はね。玉子が安かったからどうしても行っておきたかったの」

「玉子？」

自分のビニール袋を覗き込むと、確かに玉子がニパック入っていた。

俺は残念な顔をして、

「玉子が入っているんじゃ、振り回して遊べないじゃないか」

「入ってなくてもやつちゃだめだよ」

雪は真顔でそう言った。

「それは初耳だ。一つ勉強になったな」

そう言うと、雪はクスツと笑って、

「良かったね。食べ物が無駄にする前に気が付いて」

「まっただ」

なんて、意味も他愛もない会話をしながら帰り道を歩く。

十七時を過ぎても通りはまだ明るい。まもなく六月だ。夏至が近い。

と。

「……ね、優ちゃん」

帰り道も中ほどに差し掛かったところで、ふと、雪が足を止めた。

「今日は、あっちから帰ろっか？」

「……」

すぐにわかった。雪が指差したのは、あの日、事件のあった路地のある通りだ。

あれ以来、俺が意識的に避けてきた場所でもある。

「……別に構わんが」

あえて素っ気無く。避けていたということ悟られないように。

……いや、それはあまり意味のないことか。雪が知らずにその道を選んだはずはないのだ。

そうして俺たちは道を折れ、斜めに伸びる影を見ながら進む。

この時間はまだ人通りが多い。改めて思うと、あの日、人がまったく通らなかつたのはやはり不自然だった。きっとあのときは悪魔狩りたちが何かやったのだろう。

「……」

いつの間にか無言になっている。一緒にいて無言になること自体は別に珍しいことじゃないが、今日のそれは少し居心地が悪い気がした。

チラッと隣を見る。

真っ直ぐに正面を見据えて歩く雪の横顔は、気のせい少し緊張しているように見えた。

(……やっぱ思い出しているのか)

ここは兄として何かアクションを起こし、安心させてやるべき場面かもしれない。

咄嗟に思いついた方法は三つ。

- 一・冗談を言って和ませる。
- 二・適当に会話を振って気を紛らわせる。
- 三・肩を抱き寄せて“俺がついてるよ”と甘く囁く。

「……なんでやねん」

「うん？」

「ああ、いや、なんでもない。独り言だ」

心の中でボケてもただむなしだけだった。

「ふーん……？ ね。優ちゃん」

ピタリ、と、雪の足が止まる。

立ち止まったのは やはり、あの路地の前だった。

「どうした？」

「あのときの話、しても、いい？」

「……」

その言い方は、俺が触れたがっていないことをわかった上での言葉だった。だが、当事者が敢えて触れようとしているのだから、俺がそれを拒否する理由はない。

「どうした？」

「あのとき ね」

雪は少し視線を落として言った。

「ものすごく怖かったの。自分がやってしまったこともそうだけど……うん。それでもう、みんなや優ちゃんと一緒にいられなくなるんだなって、そう考えるとすごく怖かった」

「……ああ」

そのときの雪の気持ちは、あの日“能力”で精神同調した俺には

良くわかっていたいし、仮にそれがなかったとしても理解するのに苦
労はなかっただろう。こんな力を持っていて、日常と非日常の世界
を行き来していても、軸足はいつでも“こっちの世界”にある。“
こっちの世界”のことをものすごく大事に思っている。
というよりも。

俺たちはそれを守りたかったからこそ、非日常の世界に首を突っ
込んだのだから。

だから そう。それを壊してしまいそうになったあの事件。
……やはりまだ引きずっているのだろうか。

俺は頭の中でかける言葉を選んだ。

が、俺が口を開く前に、

「でも、ね。嬉しいこともあったんだ」

「……嬉しいこと？」

「うん」

クルリと振り返って俺を見た雪の顔は、想像していたような暗い
ものではなく

「優ちゃんが、助けに来てくれたこと」

「……」

ほんの少しだけ影を残してはいたものの、そこにあっただのは吹っ
切れたような微笑だった。

「あんなことがあったのに、優ちゃんは私のために叫んでくれた。

……それで思ったの。こんなことがあっても、優ちゃんは私の味方
になってくれるんだ、って」

「そりゃまあ……兄貴だからな」

「ありがと、ね」

雪はニツコリと微笑んだまま、覗き込むように俺を見上げた。

「まだ言っただけだったから。今日はそれを言いたかったの。どうし
ても、この場所だね」

「あー……」

俺は視線を彷徨わせた。

「……兄貴だからな」

結局、それ以外何も言えなくなってそっぽを向く。

こんなシチュエーションで気恥ずかしくならぬヤツが果たしてこの世にいるのだろうか。いや、いない。

そんな俺に、雪はもう一度。

「ありがとね」

と、言った。

礼を言いたかったというのも本心だろうが、おそらくは“もう大丈夫”というサインなのだろう。

「じゃ、帰ろつか？」

明るくそう言って、雪はその路地から離れ、夕日の沈む方角へ向かって歩き出す。

明日からはもう、迎えに行く必要もないかもしれない。

(……心配しすぎた、か)

我が妹は俺が思っている以上に成長しているようだ。

俺はホッと胸を撫で下ろし、同じく夕日の方角へ向かって歩みを進めたのだった。

1年目6月その1

人は何故部活なんてものをするのだろうか。

俺は帰り道で部活に勤しむ生徒を横目に眺めながらそんなことを考えていた。

別に哲学的な話ではない。ただでさえ朝から夕方近くまでを学校の授業で潰されてしまうというのに、さらに自由な時間を少なくすることに意味があるのだろうか、という、ごくごく単純かつ個人的な疑問なのである。

確かに、サッカーとかテニスとか、いわゆるゲーム性のある球技なんかはやっていて楽しいことは楽しい。が、遊びの範囲を越え、そのたつた一つのこのために自由時間を大幅に削るという行為が俺には理解できないのである。

俺とて決してスポーツに興味がなかったわけではない。が、実にさまざまな問題が俺を阻み、結果として一つのスポーツに熱中するという選択肢を奪っていったのである。

中学のときはバスケットに入ろうと思っていた。が、なんとバスケットは一人ではできないスポーツだと判明し、断念。

どうせやるならば一人で世界を取れるスポーツが良かった。

次に考えたのは水泳部だった。が、どうやら俺のこの長髪は水泳には向いていなかったらしく、これも断念。

髪が長くても支障がなさそうな卓球部に入ろうかと考えたが、そもそもウチの学校には卓球部がなかった。

結局、部活には入らずじまい。

「で、結局は高校でもやらないんだよね」

そう言ったのは俺の隣を歩く直斗だ。

「勿体ないよね。優希、運動神経いいのに」

「野球部に入ったらサッカーできないからなあ」

ああ、そうか。

結局のところ、部活するのは俺のこの飽きっぽい性格との相性が悪いのだ。

「お前こそ、もうバスケットはやらんのか？」

と、俺は直斗にそう返した。

直斗は中等部時代バスケット部に所属していた。細身の体格と大人しそうな外見に似合わず、小学一年から中学三年まで続けた空手で培われた基礎体力と、頭と勘の良さを生かした頭脳プレーで、中等部では一年の後半からすでにエース的な存在として扱われていた（らしい）。もちろん中等部からの繰り上がり組が多いこの学校のこと。直斗ぐらい活躍していれば高等部の先輩たちから入部の誘いがなければもない。

にもかかわらず、直斗は現状、俺と同じく帰宅部に属していた。

「うん。あまり時間もなくてね」

「時間？ 中等部のときとたいして変わらんだろ？」

言うてから、俺はああ、と呟いて、

「そうか。これからは毎晩夜の街に出没してナンパの道に生きるのか」

「今更だけど」

直斗は笑いもせず突っ込んできた。

「優希の発想って、ほんと突拍子もないところから出てくるよね」

「何を言うか。俺の発想はいつも奇想天外だとみなさんに大好評だぞ」

「奇想天外っていうのはそうかもね。好評かどうかは疑問だけど」

「なるほど。俺のセンスはまだ早すぎたか」

「平和な証拠だね。その壊滅的なセンスに賛同する人間が少ないってことは」

「……」

結局、バスケット部に入らなかった理由については、はぐらかされてしまったようだ。

(家の事情なのかね……)

直斗の家は母一人、子一人の母子家庭である。その辺の立ち入った事情を突っ込んで聞いたことはなかったが、俺たちが出会った小学一年の頃、すでに直斗の父親はいなかった。離婚したのか死別したのかはわからない。直斗の家で仏壇らしきものを見た記憶はないから、前者の可能性が高いのかもしれない。

いずれにしても、そこまで突っ込んだ話をするつもりはなかった。さて、六月も中盤に差し掛かっている。遅咲きの桜もすっかりと姿を隠し、町並みは緑色に染まり始めていた。太陽は春と明らかに異なる力強さで輝きを放ち、歩いているだけで額にうっすらと汗が滲むようになる。

夏と冬のどちらが好きかというのは結構よくある質問だが、きつとこの辺りの住人には“夏”と答える人間が圧倒的に多いだろう。雪がたくさん降る地方であればスキーやスノボなどのウィンタースポーツを楽しめたりするのだろうが、この辺りは一応雪は降るもののそれほど積もることはない。

一方、夏は海がそれなりに近くて泳ぎにいけるし、少し足を伸ばせばキャンプ場もパラパラとあって楽しめる。

要するに、夏のほうが遊びの選択肢が多い土地柄なのである。

「でも、優希は冬のほうが好きだよね」

「まーな」

直斗とは何度か同じ話をした記憶がある。

俺はそれでも冬のほうが好きなのだ。理由は簡単。冬ならいくら寒い寒いといっても厚着をすればそれで済むし、家の中に入れば暖かい。夏の暑さはそうはいかない。家の中はクーラーがあるからこそ快適に過ごせるが、外を歩くときは、まさか裸で外を歩くわけにもいかないし、やったとしても真夏の殺人的な暑さの前には到底無力である。少なくとも逮捕されるリスクを犯してまで実行する価値があるとは思えない。

だから冬のほうがマシ。

そして、

「結局は春か秋のほうが過ごしやすいがな」

最終的に辿りつくのはいつも、実もふたも無い結論である。
と。

そんな世間話をしながら、ちょうど二人で校門を出ようとしたときだった。

「せんぱーい！」

そんな俺たちに駆け寄ってくる女生徒がいた。

(この声は)

「あれ？ 明日香ちゃん？」

と、直斗が言った。

「こんにちは、直斗先輩！」

そばまでやってきて立ち止まった少女が弾んだ声を上げる。

俺も知っている子だった。

「よお」

「げっ！」

と、まあ、俺の顔を見るなりそんな失礼な声を発したのは、今井明日香という、風見学園中等部の二年生で、つまりは俺たちの二つ下の後輩にあたる少女である。

「優希先輩もいたんですかあ……」

明日香はあからさまに残念そうなため息を吐いた。

身長は百五十センチもないだろう。小柄な体躯に藍原と同じぐらいの長さのショートカット。制服を着ていなければ小学生のクソガキに間違われてもおかしくない。

「ちよっ……誰が小学生のクソガキですか！」

「おっと、すまん。つい本音が口をついてしまった」

とぼけてそう言つと、明日香はさらに不機嫌そうな顔になった。

「じ、この……！」

「まあまあ」

直斗が苦笑しながら間に入ると、明日香はハツとした顔をして、

「あ、えつと……直斗先輩はこれから帰りですか？」

手の平を返したように口調と表情が変わった。
わかりやすいヤツである。

「うん。明日香ちゃん、部活は？」

「今日はお休みです。バレー部が他の学校と練習試合をして。あ、他の学校のバレー部との練習試合です」

「当たり前だろ。他の学校の将棋部と練習試合してたら怖いぞ」
俺がそう言うと、明日香の眉がピクツと動いた。
が、どうやら彼女は俺を無視することに決めたらしい。

「直斗先輩が高等部に行っちゃってからは練習にも身が入らないです。先輩に見てもらいながら練習するのが楽しかったのに」

直斗は笑って、

「僕をおだてても何も出ないよ」

「嘘じゃないです！ 友達もみんな言ってます！」

「うん、わかった。ありがとう」

ニッコリと微笑んだ直斗を見て、俺は目頭の熱くなる思いがした。
(哀れな……)

見ての通り、この明日香という少女は中等部時代からの直斗の追っかけなのである。中等部に入って、その頃男子バスケット部のキャプテンとして活躍していた直斗に一目ぼれし、その追っかけとして女子バスケット部に入部。後に男子バスケット部のマネージャーになれば良かったと嘆いた(らしい)が、その頃、直斗はバスケット部を引退した後だった。

ただ、彼女にとっては幸いなことにそれから縁は切れず、こうしてたびたび間接的なアプローチを続けているのだが、当の直斗はまったく気付かずじまい。

それどころか、

『妹ができたみたいで嬉しいよ』
などとのたまう始末だ。

そのうちに直斗は高等部が上がってしまったのだが、それからも

こうしてたまに姿を見かけるとすぐに駆け寄ってくるという献身ぶり。

まったく哀れなやつである。

そうこうしつつ。

明日香はちゃっかりと直斗の隣をキープして歩き始めた。帰り道が途中まで同じであることも、明日香にとっては幸いだったろう。

(さて、俺はどうしたもんか)

本当なら気を遣って退散すべき場面なのかもしれない。

が、彼女にとっては残念なことに、俺は明日香以上に帰り道が一緒である。別にそんな彼女をからかって遊ぼうなんてこれっぽっちも考えていないのだが、帰り道が一緒なのだから仕方ないだろう。

ああ、残念だ。

そうして、しばらくは中等部時代の話に花を咲かせていた二人だったが、やがて、

「あ……」

前方に見えた人影に、小さく声を漏らしたのは明日香だった。

(ん……?)

俺はその反応を目ざとく見つけ、彼女の視線の先に目を移して、

(……ああ)

その人物の正体を知って、彼女の反応に納得した。

そして、

「おお、あそこに見えるは、明日香の恋敵の」

「!」

明日香が過剰に反応する。

「?」

直斗は不思議そうに前方を見て、

「あれ？ 由香じゃない?」

小さな歩幅でやや下向きに歩くポニーテイルの制服姿。幼なじみの俺たちが見間違えるはずはない。それは紛れも無く由香の後ろ姿だった。

「ああ。あれが明日香の恋　もじっ」

「優希先輩！　ちよっと、こっち！」

俺は明日香に口を塞がれ、そのまま力任せに近くの路地に引っ張られた。

「直斗先輩！　ちよっと待っててくださいね！」

「？」

直斗は怪訝そうな顔をしたが、明日香はぎこちない笑顔でそれに応え、俺をズルズルと引っ張ったまま路地の奥へと入っていく。

「……コホン」

そこまで引っ張られてようやく口を開放された俺はちよっと咳払いして、

「おい、明日香。いくらこんなところに引っ張り込んで誘惑しようとも、俺はほぼ小学生のお前にはまったく興味がないぞ」

「ほぼ小学生ってなんですかッ！　つか、そんなこと死んでもしませんッ！」

死んでも、とは、なかなかひどい言われようである。

「ということは、かつあげ目的か？　金なら無いぞ。月半ばにも関わらず、俺の財布は早くも開店休業状態だ」

「違いますし、そんなどうでもいいこと聞いてません！」

「ふむ」

俺の推理によると、明日香はどうやら怒っているようだ。

しかしその理由まではまだはつきりしていない。

「一目瞭然です！」

しまった。どうやらまた考えが声に出していたらしい。

「何度も言ってますけど、直斗先輩の前で余計なことを言わないでください！」

明日香は本当に噛み付きそうな勢いで俺に食って掛かってきた。

直斗に聞こえてしまうのではないかと心配してしまいそうな剣幕だ。「余計なことを言ったつもりはないのだが……ただ、お前が常日頃

から由香のヤツをライバル視しているようだったから、それを直斗

に教えてやろうかと」

「それが余計なことだと言ってんのよ!」

ついに敬語ですらなくなってしまうた。

しかし、まあ。

「どうでもいいがな、明日香」

「え?」

少し真面目な声を出すと、明日香は戸惑ったような顔をした。

「マジな話、由香のヤツに勝ちたいんだったら、フランス料理のフルコースぐらいは作れるようにならないといけないぞ?」

「え? な、なんですか、それ?」

明日香は明らかに怯んだ顔になる。

俺は続けて言った。

「幼なじみである俺の見たところ、直斗のヤツは家庭的な女の子を好む傾向がある。その点、由香のヤツは料理はほぼ完璧にできるし、家事も普段から母親以上にこなしている。それに綺麗好きだ」

「う……」

「それを基準に考えるとだな。まあこう言っちゃなんだが、お前が由香に勝つてるところが一つもない」

「うつつ……」

反論できずに、明日香がたじろぐ。

……まあ、そもそも由香のヤツを恋敵だと思っ込んでいること自体が間違っている気がするのだが、それは口にしない。百パーセント無いと言い切れるわけじゃないし、何より言わないほうが色々とおもしろい。

「ぐう~~~~~!!」

俺の意地の悪い言い方に反論できない明日香は悔しそうな顔で俺を睨むと、

「わ、私はまだこれからなの! 料理だってその他大勢の家事だって、二年後には全然できるようになっているんだから!」

「日本語が怪しくないか?」

「いいの！」

顔を真っ赤にした明日香に対し、俺は極めて冷静に言った。

「日本語はいいとしても、二年後もお前はお前のままだと思うぞ、俺は」

「むっか〜！ いいわよ！ 見てなさいよ！」

とうとう明日香はぶち切れた。頭から湯気を発しながらクルツと身を翻して路地を出て行く。

今日はなかなか効率の良いからかい方ができたようだ。

(しかし、まどろっこしいヤツだなあ……)

成功するかどうかはともかく、直斗みたいなヤツにはもっとストリートに攻めてやらなきゃならないと思うのだ。

そこはまあ、単純そうに見えてもやはり恋する乙女ということなのだろうか。

「あ、出てきた」

明日香の後を追って路地を出ると、そこには直斗と、おそらく直斗が呼び止めたのであろう由香の姿もあった。

「こんにちは、明日香ちゃん」

屈託のない笑顔で声をかける由香。

「……」

だが、明日香は何も言わずにズンズンと二人に歩み寄っていった。「？」

不思議そうな顔の二人。

(ここで明日香のヤツが噛み付いたりすると面白いが)
と思っただが、さすがにそれはなかった。

その代わり、

「直斗先輩！ 私、明日からお弁当を作ってきますから！」
「え？」

これにはさすがの直斗も呆気にとられた顔。

ここまでの流れを知らない由香も同様にポカンとしている。

俺はただ一人、その理由を理解していたが、あえて口を挟まずに

いた。

で、当の明日香はというと、そんな場の空気をまったく意に介した様子もなく、

「明日、お昼は教室で待っていてくださいね！ 絶対ですよ！」

そう言つと、俺に挑戦的な視線を向け、次に由香のほうをチラッと見ると、軽く頭を下げて軽快な足音とともに走り去っていった。

(……面白いヤツ)

本当に単純といつかなんといつか。

しかしまあ、これはこれで。

「……ねえ、優希。また明日香ちゃんに何か言ったの？」

直斗が疑いのまなざしを向けてくる。

「お弁当って言ってたけど、料理ができなきゃダメとか何とか言ったんじゃない？」

「まあ、言つたよつな、言わなかったよつな」

俺は曖昧にそう答えたが、肯定したも同然だった。

もちろん直斗も由香もそんなことは百も承知で、

「はあ……」

2人同時に、呆れたよつなため息を吐かれてしまった。

家に戻つた俺は椅子に腰掛けてゆつくりと息を吐いた。開けっ放しの窓からそよ風が流れ込んできてカーテンを揺らす。微かに涼やかさを残した風が、外から帰ってきたばかりで火照つた体に心地よい。

考え事するには最適の環境だった。

先月の事件から半月が経つた。

その間、それに関連した出来事は何一つ起こっていない。楓が言う“組織”からの接触もなかったし、あいつが何かあったときに相

談しろといっていた神村さんも、学校の廊下で会っても何も言わずにすれ違っただけだ。

敢えて藪を突つくべきか。

それとも知らん振りを貫き通すべきか。

正直迷っている。

以前と同じように暴走悪魔たちの退治を続けるのであれば、こちらから動いて“組織”とやらのことを調べるべきだろう。何もわからないままでは、またいつ同じことが起きるかわからない。が、それが藪蛇になってしまいう可能性も否定できない。

(神村さん、か)

神村沙夜。別のクラスの同級生。中学三年のときに同じクラスだったらしいが、これまで接点はほとんどなく、先日直斗と一緒にいたときも結局まともに話をしていない。

楓と連絡を取る方法がない以上、組織の情報を得るためには彼女と接触してみるしかないさそうだ。

「さて、どうしたもんか」

「……考え事をしている最中、申し訳ないんだけど」と。

せつかく真面目なことを考えていた俺を、現実世界へと引き戻す冷静な声。

「ん？」

ゆっくりと顔をあげると、目の前には瑞希の姿があった。制服姿のままであるところを見ると、どうやら帰宅したばかりらしい。

「よう、おかえり、瑞希」

「……」

瑞希はなにやら呆れた顔をしている。

「おいおい、どうした？俺は今、とても真面目なことを考えているんだ。用がないのなら邪魔をしないでくれよ」

そう言つと、瑞希は眉間の間に皺を寄せ、腰に手を当てて言った。「考え事するのは別に構わないわよ。でも、場所を考えてやって

くれる？」

「場所？」

俺は椅子に座ったまま部屋の中を見回す。

まず気が付いたのは、非常に狭いということだった。俺の部屋は八畳ほどの広さがあるのだが、そこは一畳ぐらいの広さしかなく、両手を広げれば対面の壁を同時に触れるほどだ。

壁には貼った記憶のないカレンダーが飾ってある。

さらに観察を続けてみた。

カーテンの揺れている窓は異常に小さいし、俺の座っている椅子の背後には水のタンクのようなものが設置されている。

決定的だったのは、すぐ右手の壁に設置されてある、柔らかい紙をぐるぐるに巻いた物体。

……誰がどう見てもトイレレットペーパーである。

そして目の前のドアは大きく開かれていて、そこに瑞希が仁王立ちしているのだった。

俺はハツとして、

「お前、まさか俺のトイレを覗きに!？」

「っ……んなわけないでしょ!」

瑞希は珍しく顔を赤くして、

「トイレのドアが開きっぱなしだったから様子を見に来たのよ!

だいたいあんた、ズボン履きっぱなしじゃない!」

「言い訳するな。俺がズボンを履いていたのは結果論にすぎないじゃないか」

「……じゃあなに? あんたはドアを開けたままトイレで用を足すっていうの?」

「俺だって人間だ。忘れることはある」

「くっ……」

まあ、そうだったとしても瑞希のほうには何の非もない。というか、社会的にはむしろ俺がわいせつ物なんちゃらで責められることになるのだろうが、ある程度の治外法権が発生する家庭内という場

においては、勢いで押ししてしまったほうが勝ちである。

俺は調子に乗って続けた。

「よし。今日からお前のあだ名は覗き魔星人にしよう」

我ながらすごいネーミングセンスだと思った。何が“魔”で何が“星人”なのかさっぱりわからないが、こういうときはただ勢いである。

と。

本当はこの辺でやめておけばよかったのだが。

「やーい、覗き魔星人。……いや待て。これじゃ何を覗いたのかわからんな。トイレを覗いたわけだから、そうだな。便器覗き魔星人とでも」

「……いい加減にしろッ！」

ゴッ！

「ぐはっ！」

プロの格闘家も真っ青の右ひざが空を裂いて俺の顎にヒット。

ついでに

ガンッ！

「いてえっ！！！」

背後の水タンクに後頭部をぶつけてしまった。

「……ぎぎぎぎぎ」

俺は後頭部を押さえながらうずくまり、そのまま瑞希を睨み上げる。

「おまつ……手加減してもんを知らんのか！ 死んじまうだろっ！」

「あんたみたいのはいつペン死になさい！！」

瑞希は俺以上の剣幕で怒鳴りつけてくると、ふん、と鼻を鳴らし、肩を怒らせながら歩き去って行ってしまった。

……どうもからかいすぎてしまったようだ。

(基本的に下ネタはアウトらしい……マル、っ)

俺は痛みをこらえながら心のメモ帳にとりあえずその事実を書き記しておくことにした。

1年目6月その2

「突然だが」

四時間目が終了するとともに俺は席を立ち、その机の前まで来てそう切り出した。

「もしもこの世の中に男が俺と直斗しかいなかったとして、人類存続のためにそのどちらかと結婚しなければならぬとしたら、お前はどっちを選ぶ？」

「え？」

きょとんした目が俺に向けられた。

長い沈黙。

「ど、どういうこと？」

由香は机の上に出したばかりの弁当箱に手をかけたまま、戸惑いの表情でそう聞き返してきた。

まあ、当然だろう。質問した俺でさえ脈絡のない質問だなと思っているのだから。

「どういうことでもいいから、速やかに答えたまえ」

「え、と……」

困った顔のまま、それでも由香は考え始めた。

「そ、それって」

「ただし、由香さんは必ずどちらかを選ばなければならないものになります」

逃げ道封鎖。

「うっ、ん……」

由香が真面目に考えているうちに、俺は自分の弁当箱を広げることにした。

窓の外は三日連続の曇り空。にも関わらず、本日は今年の最高気温を更新した。

俺の苦手な季節が刻一刻と近付いてきているようだ。

「あのね、もしも私に選ぶ権利があつたとして……」
「おう」

ようやく答えがまとまったらしい由香へと視線を戻すと、彼女は
何故か申し訳なさそうな顔をしていた。

「それでもきつと選べないと思うから」

「ダメ」

「うん。だからね」

由香はちよつと笑って答えた。

「だからたぶん、そのときの私の気分次第だと思つな」

「気分を選ぶのか、お前は……」

俺がちよつと呆れてそう言つと、由香は相変わらず困つたような
笑顔を浮かべて、

「うん。だからね。今ならたぶん優希くん、かな？」

「俺？」

「だって昨日、学校の帰りにお買い物に付き合ってくれたでしょ？」

「ああ」

それってというのは、つまり。

「どつちでもいいってことだな、結局」

「あ、そういう意味じゃ」

「いや、別に悪いって言ってるんじゃないやねえって。そもそも俺の質問
自体アレだしな」

それに、俺が確認したかったことはその回答でも十分だった。

直斗に憧れる後輩の少女の顔を頭に思い浮かべる。

（今のがこいつの本心だとすると、やっぱ明日香のヤツは空回りし
てんだな）

まあ、わかつていたことだ。

「でも、そうかあ。もしも今このとき、世界中に俺と直斗しかいな
くなったら、お前は俺と結婚することを選ぶのかあ」

「え？ ……う、うん、そうなるかな？」

「馬鹿。なに恥ずかしがってんだよ」

由香はますます照れくさそうに頬をほんのりと赤くして、

「だ、だって、なんか恥ずかしいよね？」

「そうか？」

俺は机にひじを付いて、箸箱を開いて弁当の中身を突付きながら言った。

「俺だってこの世からお前と明日香以外の女がいなくなったら、迷わずにお前を選ぶが」

「せ・ん・ぱ・い？」

と、背後から殺気の入り混じった声。

振り返ると、この教室では見慣れない中等部の制服を着た少女がいた。

「おう、明日香。今日も来てたのか」

俺は驚いた振りをしてそう言ったが、もちろん彼女が教室に入ってきたことはあらかじめ気付いている。

「こんにちは、明日香ちゃん」

「……こんにちはです」

明日香は由香に対してのみ挨拶を返すと、すぐさま敵意のこもった視線で俺を睨んで、

「優希先輩。ずいぶんと勝手なことを言ってくれるじゃないですか」

「なんだ。そんなに俺に選んで欲しかったのか？」

「そういう意味じゃありません！」

きいん、と、耳鳴りがした。

教室に残っていた生徒たちが何事かと俺たちに注目する。が、俺や明日香の姿を目に留めると、すぐに興味を失ったように視線を逸らした。それもそのはず。何しろ俺たちはこの十日ほどずっと、それほど変わらない似たようなやり取りを繰り返しているのだから。

「何の騒ぎ？」

と、直斗もこちらにやってきた。

手には、ここ数日間のうちに見慣れた柄の弁当箱が握られている。俺はその弁当箱と明日香の顔を見比べて、

「まだ続いているのか？」

あの日の弁当を作ってくる宣言から、今日でちょうど十日目。明日香はその宣言どおり、毎日直斗に弁当を作って持ってきている。

その中身はといえば……残念なことに、驚愕するほど美味しいわけでも馬鹿にするほどまずいわけでもなく、見栄えは悪いが食えないほどのものではないという、中学生の手作り弁当としてはそこそこ及第点といえる代物に仕上がっていた。

とはいえ。

(まあ、よく続くもんだ……)

俺は少しだけ感心した。

何しろ彼女はバスケット部である。朝練が毎日のようにあるし、前日にある程度準備をしておくにしても、朝起きるのは大変だろう。

「当たり前です」

直斗が来たことで怒りを収めた明日香は、それでも俺に対してだけは相変わらずの不機嫌そうな口調で答えた。

「私だってちゃんとお料理ぐらいできるんです。わかっていただけましたか？」

「まあ……」

おそらくは料理の本か何かを参考に作っているだろうが、続いてもせいぜい二、三日だろうと思っていた俺から見れば、これだけ頑張っているのは十分賞賛に値する。

しかし、だ。

ここでそれを口に出してしまつては明日香のためにならない。

何故ならば、彼女の最終目標である直斗は、由香の存在を抜きに考えたとしても、非常に競争率の高い物件なのである。

学業優秀、運動神経抜群、頭が良くて面倒見も良く、(一部の人間を除いて)誰にでも優しい、となれば、人気が高くて当然というもので、欠点といえれば身長が少し低めなことと、やや中性的な容姿であることぐらいしか思い浮かばないし、それも人によっては長所になる場合もあるだろう。

特に下級生からの支持率は学年ナンバーワンと言っても過言ではない。

その中で、努力家であること以外に大した取り得もない明日香が生き残っていくためには、この程度のことです満足してはいけな

いのである。

と、いうわけで。

「明日香よ！」

びしっと指差してやると、明日香はビクツとして俺を見た。

「な、なんですか、急に……」

「作るだけなら誰にでもできる！俺だって料理の本を見て作ろうと思えば作れる！問題は、人を唸らせるほどの料理を作れるかどうかなのだ！」

「う……」

そんな俺の大して説得力もない主張にも、明日香は明らかに怯んだ顔をした。おそらくは彼女自身、自分の料理が“あくまで及第点”レベルであることをわかつているのだろう。

そんな彼女の努力は認めたい。

だが、俺は彼女の恋を後押しする立場として、敢えて心を鬼にすることにした。

「お前程度の料理ならば誰でも作れるわ！貴様の根性はその程度のものだったのか！」

「う、うう、それは……」

「別にいいんじゃないかな」

「!？」

そんな俺たちのスポ根調の展開に、マツタリとした調子で直斗が口を挟んできた。

「料理人を目指しているわけじゃないんだし、僕はこれでも十分おいしいと思うけどな」

「ほ、ホントですか!？」

「ぱあっと明日香が表情を輝かせる。」

「待てえい！ 直斗！」

予期せぬ展開に、俺は慌てて声を張り上げて、

「甘やかすんじゃない！ お前はアレか！？ 本当に今のままで十分だと思っているのか！？」

「うん」

「ぐうっ……！」

いきなりくじかれてしまった。

まずい。

このままでは何事もなく平穩に終わってしまう。

それではつまらな じゃなくて、明日香のためにならない。

(なにかいい方法はないものか……)

と、机の上に視線を落とし、自分の弁当箱を突付いていて、

「！」

閃いた。

「直斗」

「うん？」

「そこまで言うなら質問するが」

一拍置くと、怪訝そうな直斗と、不安そうな明日香と、よくわからない顔をした由香の、三人の視線が俺に集まった。

俺は明日香を指差して、

「こいつの料理と」

次に、由香を指差す。

「こいつの料理。どっちがうまい？」

「え？」

直斗はちよつとだけ意表を突かれた顔をして言葉に詰まった。
が。

「！」

それ以上の反応を見せたのは明日香だった。
ハツとした顔。

きつと、俺の言葉の真意を悟ったのだろう。

……そう。そもそも料理を作ってくることになった理由は、恋敵である由香を越えるためだ。つまり直斗に満足されるだけでは足りない。由香の上を行って初めて、その目的は達成されるのである。(……ま、本当はそんな必要はないんだが)
まあ、でも料理が上手くなって損をすることはないだろう。
これもすべては明日香のため。決して俺が楽しいからやっているわけではない。

「私、もっと頑張ります！」

案の定、何事か決意した表情で、明日香はガッツと立ち上がった。

「私、絶対に由香さんよりおいしいお弁当を作ってみせますから！」

「あ、明日香ちゃん」

「じゃあ、明日また来ます！」

そう言い残し、明日香は昼食も中途半端のまま、軽快な足音だけを残して走り去って行ってしまった。

(……面白いヤツ)

俺としては満足すぎる展開である。

「私より……、って？」

由香は完全に置いてけぼりできょとんとした顔だった。

「良かったな。お前、どうやら明日香のやつに敵対心を持たれてい
るらしいぞ」

「え……どうして？」

「おそらく気付かないところで何か悪いことをしたのであろう」

もちろんそんなことはないのだが、由香のヤツは本気にしたらしく、

「どうしよう……謝ってきたほうがいいかな？」

「由香。たぶん、そんなんじゃないよ」

と、直斗。

「え、でも……」

「単に明日香ちゃんのほうに何か理由があるんじゃないかな。由香に料理を負けたくない、ってね」

と、直斗は言った。

(あれ……)

意外な発言だった。

もしかすると、直斗はその理由に気付いているのだろうか。

「例えば明日香ちゃんに好きな男の子がいて」

「……」

俺と由香は黙って直斗の言葉を待つ。

「それで、その男の子はきつと由香と仲のいい男の子なんだよ。だから」

言いながら直斗は視線を横にスライドさせる。

その視線の先にいたのは

(……どうしてそこで俺を見る?)

「あ、そっか……」

そこで由香も何事が閃いた顔をした。

その視線が向いた先も、俺。

(……なんでこんなときだけ鈍感なんだ、こいつ)

もしかしてこいつには、自分に向けられた好意に鈍感になる呪いでもかけられているのだろうか。

俺は少しだけ本気で明日香のヤツが可哀想になってしまった。

- - -

生ぬるい風が神社の境内を吹き抜けていく。普段であれば辺りがオレンジ色に染まっている時間になっていたが、朝から空が厚い雲に覆われている今日はずっと変わらずくすんだ景色のままだった。

「沙夜」

そんな灰色の風景の中に、半袖のTシャツにジーパンというラフな格好の少年がいた。金色の髪、鋭い視線、口元に湛えた薄氷のような笑み。

楓だった。

そしてそんな彼と相對する少女。

「お久しぶりです、楓さん」

神社の巫女服に身を包んだお下げの少女は神村沙夜。日本人形を思わせる黒髪に純朴そうな作りの顔立ちをしているが、その顔は表情に乏しく、じつと楓を見つめる視線も、その来訪を歓迎しているのか、あるいは迷惑がっているのか、真意はまるで読み取れない。手には竹箒を携えていたが、彼女が境内に出ているときはいつもこの箒を手に行っているの、掃除の途中だったのか、別の理由で境内に出ていたのかも不明である。

「相変わらず暑苦しい格好をしているな」

楓は最初にそう言った。

「その割に、汗一つ掻いていないのがお前らしい」

「……」

沙夜はピクリとも表情を動かさず、近付いてくる楓の動きだけを視線で追いながら言った。

「かいてます」

「なんだ？」

「汗。かいてます」

そう言つて、沙夜は襟の部分をパタパタとやってみせた。

その間も、やはり表情は動かない。

楓は怪訝そうな顔をして、

「だったら違う服を着て掃除をすればいいだろう？」

「決まりですから」

「くだらん決まりだな」

「それでも決まりは決まりです」

起伏のない口調でそう答えると、沙夜は手にしていた竹箒を動か

し始めた。

「どうやら今日は本当に掃除の最中だったらしい。」

楓は腕を組んだまま近くの鳥居に背中を預けると、そのまま黙って掃除を続ける沙夜の姿を眺めていた。

「……………」

彼女は女性としても少し小柄な部類に入る。そんな彼女が一人で掃除しているのを見ると、境内がよりいっそう広々として見えた。

（よくやるものだ……………）

彼女は朝夕とこの境内を一人で掃除している。これは別に決まりごとではなく、彼女が自ら進んでやっていることのようにだ。参拝客がたくさん訪れるわけでもなく、ゴミといえば風に乗って飛んでくる枝葉やたまに混じるビニール袋ぐらいのものだと思っただが、それでも彼女は毎日念入りにこの掃除をしている。

もつとも、そのおかげか、彼女と話をするときには事前にはアポを取る必要がない。朝と夕、決まった時間にこの境内にやってくれば、ほぼ間違いなく彼女と話をすることができるのだ。

「……………楓さん」

しばらくして。掃除がひと段落したらしい沙夜が、竹箒をそばの木に立てかけ、静かに楓のほうへと歩み寄ってきた。

「なんだ？」

楓が無愛想に返事をする、沙夜はそんな彼を真っ直ぐに見つめて、

「何か急な御用だったのですか？」

「どうしてだ？」

「楓さんがここにいらっしやるのは、何か用事があるときだと思いません」

「いや、お前の顔を見にただけだ」

「楓さんでも、冗談を言うことがあるのですね」

沙夜は間髪いれずにそう言った。

しばしの沈黙。

楓は言った。

「ああ、そうだな。俺だつてたまには冗談を言うことはある」

「……そうですか」

「意外と正直だな、お前は」

楓は小さく笑った。

「何ですか？」

「いや。急ぎの用事があつたわけじゃない。急がない程度の話があつたのと、あとは暇だつたからな」

「暇だつたから、ですか」

沙夜は少しだけ視線を横に流して、

「楓さんはあまり無駄なことはなさらない方だと思っていました」
「無駄だと思つてないから来たのだから」

「……」

沙夜は僅かな沈黙の後、ゆっくりと目を閉じた。

「……よくわからない人です。楓さんは」

「気まぐれなのさ」

「そうですね」

即座にそう返して、沙夜は再びゆっくりと目を開いて楓を見た。

「それで“急ぎではない”お話というのはなんですか？」

「あの二人のことだ」

腕を組んだまま右手の人差し指と中指を立てて、楓はそう言った。

「不知火優希さんと不知火雪さんですか？」

「ああ。……優希のやつはお前に何か聞きにきたか？」

「何か？ というのは？」

「ああ、そういうえは言っていなかったか」

楓は思い出したように、

「先日の事件の後、優希のやつに言っておいたのさ。何かあつたらお前に相談しろ、つてな」

「……」

本当に初耳だつたらしく、沙夜は少しだけ戸惑つたような顔をし

た。

「そういうことだ」

「そういえば、楓さんはあの二人と知り合いだったのですね」

「言っただけだったか？」

「初耳です」

「で、その初耳は誰からの情報だ？」

「影刃様です」

「ああ……」

楓と優希たちが古い知り合いであること自体、知っている者は限られている。確認するまでもないことだった。

「不知火さんからは特に何もありません。……それと、話は変わりますが」

「なんだ？」

沙夜はチラツと後ろ 神社の本殿、いや、おそらくはそのさらに奥の空間へと視線を送った。

「楓さんにお知らせしなければならぬことがあります」

と、再び楓に視線を戻す。

その顔は相変わらずの無表情だったが、若干ながら険を湛えているようにも見える。

「知らせ？ なんだ？」

「前回、脱走した悪魔はどうやら一人ではなかったようです」

「前回？ ああ……雪のときか」

「はい。気をつけてください」

「……」

楓はすぐにその言葉の意味に気付いて、

「狙いはやっぱり俺か？ それともまた いや」

途中で言葉を切った。

沙夜は何も答えない。

答えられない、答えにくい質問であることはわかっていた。だから楓は別の質問をした。

「いいのか？ 俺のような部外者にそんな情報を与えても」

「楓さんは部外者ではありませんから」

「俺自身は関係者だと思っただけなんだがな」

楓はそう言っただけで小さく笑うと、

「だが、助かった。……欲をいえばもう少し詳しい情報が欲しいな」

「はい」

一瞬だけ申し訳なさそうな表情を見せて、沙夜は小さく頷いた。

「脱走した悪魔は全部で五名。炎魔、幻魔、風魔、そして夜魔が二名です。幻魔と夜魔は中級悪魔です」

「中級幻魔族と中級夜魔族か。思ったよりレベルが高いな。……紫喉のやつも思い切ったことをしゃがる」

最後の部分は沙夜に聞こえないぐらいの小さな声で呟いた。

「……」

沙夜は黙って楓を見ている。

もしかすると唇の動きだけでだいたいの内容を悟ったかもしれない。

「まあいい」

一つ息を吐いて、楓は組んでいた腕を解いた。

「精神操作の中級幻魔族は少々厄介だが、どちらにしても雑魚の集まりだ」

「……楓さん」

「わかっている。油断などはしない。俺はただ、力関係を冷静に分析しただけさ。そうだろ？」

「はい」

沙夜が頷く。

「さて、と」

楓は背中を預けていた鳥居からようやくやく離れると、

「そろそろ退散するでしょうか。お前は明日も学校か？」

「はい」

「ご苦労なことだな。たいして役にも立たない授業を」

「私はそう思っていますから。それを言っなら楓さんのほうではないですか?」

沙夜がそう返すと、楓は薄く笑って、

「俺はどうせ寝てるだけだ。そういう面倒ごとはいっくに任せておくよ」

言いながら背を向けると、

「じゃあ、またな」

チラッと顔だけを小さく沙夜のほうへ向け、階段を下りていった。

1年目6月その3

「おい、不知火優希」

今日はとりあえず不幸な一日らしい。

どんな人間でもクラスに一人ぐらいは嫌なヤツ、あまり関わりたくないヤツがいるもので、聖人君子ならぬ俺にも、もちろんそんな風に思っているヤツが何人かいる。

そんなヤツらの中の一人　しかもその中で三本の指に入るぐらい面倒なヤツが、朝一番で俺に話しかけてきたのだから、俺が今日という日にいきなり嫌なイメージを抱いてしまったのも仕方のないことだろう。

ああ、いや。

諦めるのはまだ早いかもしれない。

「ふう、今日は久々に遅刻ギリギリじゃなかったな」

俺はそいつの声が幻聴であったり、あるいはそもそも俺に向けられたものでないことを祈りつつ、目の前を素通りしてみることにした。

世間一般的に“シカト”と呼ばれる行為である。

が、

「こら。待たないか」

肩を掴まれてしまった。

残念ながら幻聴ではなかったようだ。

仕方なく俺は振り返って、

「悪い。今日掃除当番だからお前に構っている暇はない」

「ん、そうか。それなら仕方ないな」

男はそう言っただけ俺の肩を離す。

(やれやれ……)

ホッとしながら自分の席に向かおうとすると、

「ん？ いや、ちょっと待て。掃除当番は関係ないじゃないか」

また呼び止められた。

俺は舌打ちしながら再び振り返って、

「まったく関係ない」

「ふっ」

すると男はオーバーな仕草で前髪を軽く掻きあげながら、

「私を騙そうとは貴様もなかなか大胆な男だな」

「……」

こいつの名前は今井竜二。ご覧のとおりクラスのメイトのだが、名字を聞いてピンと来る方がいるかもしれない。今井　こいつは、あの明日香の実兄でもあるのだ。

「んで、何の用だ？」

俺の口調は自然と投げやりになる。

……いや、一応誤解のないように言っておくと、この竜二という男、別に悪いヤツってわけじゃない。かなり方向性を誤ったキザ男で、世界中の女が自分に惚れていると本気で勘違いしているような痛い男だが、基本馬鹿なので、端で見ている分にはなかなか面白いヤツなのである。

そう。

あくまで端で見ている分には、だ。

残念なことに、俺とこいつの間には、さらにもう一つの接点がある。

雪のヤツだ。

つまりこいつは、中等部の頃に雪に一目惚れして、それ以来あいつに付きまとっている輩の一人なのである。しかも他の連中と大きく違うのは、雪も自分に惚れていると勘違いしていることで、今は雪のほうから自分に告白してくるのを待っている状態らしい。

それが、俺がこいつのことをいまいち気に入らない一番の理由である。

「うむ。実はだな」

と、竜二は少し考えるような素振りを見せた。

どうせ雪のことだろうと思ひ、俺は早くもこいつをあしらう言葉を頭の中にくつか思ひ浮かべていたのだが、

「貴様、ウチの明日香に何かしなかったか？」

「は？」

いきなりわけのわからないことを言い出した。

「何かと言われてもわからんぞ。何かって何のことだ？」

当然、俺はそう聞き返したのだが、

「それがわかっていれば苦労はしない。“何か”だ」

「何か、ねえ」

なるほど、心当たりがまったくないわけじゃない。が、それがこいつのいう“何か”に当てはまるかどうか微妙だった。

少し探りを入れてみる。

「思い当たることはないが、ま、最近ちょっと話ぐらひはしてるぞ」

「ふむ、そうか。本当だろうな？」

竜二は真面目な顔のまま、ずいっと迫ってきた。

「……？」

俺はそこでようやく、竜二の様子がいつもと少し違うことに気付いた。

「どうした？ 明日香のヤツがどうかしたのか？」

「よくぞ聞いてくれた」

竜二はそう言うのと腕を組み、右肘を左手で支え右手の人差し指をこめかみに当てるような奇妙なポーズを取った。

「最近、明日香の様子がおかしくてな」

「ふーん」

「何故か朝から台所に立ってゴソゴソやっているようなのだ」

「……ああ」

なるほど。そついやこいつはいつも昼は学食へ出ている。明日香が弁当を作ってきて俺たちと一緒に食べていることは知らないのだ。というか、明日香のヤツもそれがわかっていて、兄が教室を出てから顔を出しているフシがある。

おそらく弁当を作っていることも気付かれないように振舞っていて、しかしそれが今日になってバレてしまったということなのだろう。

とすると。

ここは当たり前障りのない回答をしておいたほうがよさそうだな。

俺は言った。

「女の子なんだし料理ぐらいしてたっておかしくないだろ。そのうちお前に手料理でもごちそうしてくれるんじゃないのか？」

「うむ。私もそうだと思っているのだが　いや、そうか。考えすぎだったかもしれん。そうか。そういうことなら何もおかしいことはないな」

(んなわけないだろ……)

どこの世界に、わざわざ兄貴のために朝練の時間よりも早く起きて甲斐甲斐しくメシを作ってくれる妹がいるというのか。

が、それでも竜二はすっかり信じ込んでしまったらしく、「いや、すまん。おかしなことを聞いてしまったようだ。今は忘れてくれ」

あっさりと、そう言って自分の席へと戻っていく。

俺はそつとため息を吐いた。

(……こりゃ直斗のことがバレたら面倒なことになりそうだな)
明日香のヤツには可愛そうだが、越えなければならぬハードルはまだまだ多そうである。

.....

「……あー、もう！　うまくいかないなあ！」

カシャン！

明日香は手にしていたスプーンを皿の上に投げ捨てると、イライラした様子で頭を掻き、流し台の横にあった料理の本を手取る。

“家庭料理百戦。これで憧れの彼もあなたのトリコに！？”

なんともふざけたタイトルの上、“戦”じゃなくて“選”なんじゃないかと思つたが、中身はしごくまっとうな料理本だ。

たまたま部活が休みとなったこの日、明日香は真つ直ぐ家に帰るなり、この料理本と睨めっこしながら料理の練習に励んでいたわけである。

しかし。

載っているとおりに作っているはずなのに、どうも上手くいかないのだ。

「由香さんのはもつと美味しかったのになあ……」

明日香はぶつぶつと呟きながら、穴が開くほどにその本を見つめる。調味料の分量は間違っていない。火の加減も火を通す時間も本に書いてあるとおりのだ。手際はそう上手くはできていないが、それだけで味にこんなにも差が出るものなのだろうか。

あるいは この料理本通りに作るよりも美味しく作る方法があるのかもしれない。そうだとしたら、所詮付け焼刃の明日香には完全にお手上げである。

(もつ……！)

片手で頭を押さえ、うんうんと唸りながらページを捲っていた明日香だったが、ふと、本の中に書かれていた一つのフレーズに目を奪われる。

「……料理はある程度、相手の好みに合わせて、か」

明日香はそのフレーズを復唱しながら腕を組む。
なるほど、と思つた。

本に載っているものはあくまで一般的な調理法である。だからそれより上を目指すのなら、あとは好みに合わせてアレンジするしかない、ということか。

……しかし。

(直斗先輩の好みなんて知らないし……)

いくら追っかけとはいえ、そこまでのことは明日香にもわからない。となると誰かに聞くしかないのだが、最大のライバルである由香には聞きづらい。かといって直斗本人に聞くのもなんだか気が引けたし、それではあまり驚いてもらえなくなってしまうだろう。

(うーん……)

そうしてしばらくの間悩み続けていた明日香だったが、

「あっ！」

ふと、閃いた。

居間に移動するとそこにあっただ電話を手に取る。近くにおいてあったメモ帳を開く。

「えっと……あ、あっただあっただ」

その電話番号は本来は“とある理由”によりあまりかけたくない番号だったが、背に腹は変えられない、と、意を決してその番号をプッシュする。

トゥルルルル、トゥルルルル……

呼び出し音。

(他の人がでませんように)

祈りながら反応を待つ。

やがて

「はい」

受話器の向こうから聞こえたのは、女性の声。

明日香はホッとして口を開いた。

「雪さんですか？ お久しぶりです。私、明日香　今井明日香です」

「……あ、しまった」
夜。

毎週見ていたクイズ番組がもう始まっていることに気づき、俺はテーブルの上のリモコンを手に取って電源ボタンを押した。

「あれ？」

反応しない。

「おかしいな……」

テレビへ向ける角度を変えたり、ボタンを強く押したりしてもダメだった。

すると、流し台から雪の音がする。

「あ、優ちゃん。リモコン、電池切れちゃってるよ」

「なんだ。替えの電池は？ ……よ、っと」

ソファから腰を上げて直接テレビの電源を入れに行く。

「ちょうど無くなってたみたい。明日、学校の帰りに買ってくるね」

「あー、いや、他の買い物のでいいぞ。無くてもすぐ困るもんじゃねーし」

チャンネルを変えて目的の局に合わせると、番組はちょうど中盤に差し掛かったところだった。画面の中では俺たちとそれほど変わらない年齢のアイドルタレントが、俺でもわかりそうな簡単な問題を間違ったところだ。

スピーカーから流れ出す会場の笑い声を背にして、俺は再びソファへと戻った。テーブルの上に置いたスナック菓子の袋を開ける。

この番組でレギュラー出演しているアイドルタレントがおかしな回答をするのは、もはや定番の展開だ。たぶん事前の打ち合わせどおりに答えているだけなのだろうし、最近ではほぼマンネリ化してきてもいるのだが、たまに腹を抱えて笑うほど面白い珍回答があるので、それを楽しみに見ている。

画面の中では、その珍回答をしたアイドルが耳まで真っ赤になつて何やら言い訳していた。

あるいは、本人は本気で回答しているのだろうか。そこまでも演技なのか。

なんて不毛なことを考えるのも、まあ楽しい。こういう番組はなんでもいいからとにかく楽しめばそれでいいのだ。

「紅茶淹れるけど、優ちゃん、飲む？」

「んー？」

「今日はふわふわのチーズスフレケーキ付きだよ？」

「おー」

「ふふ……じゃあ準備するね」

カチャカチャと食器を取り出す音がした。一音しか返していないのに正確に俺の意図を理解する辺り、さすがは双子の妹といったところか。

ややあつて、紅茶の香ばしい香りが居間に漂ってくる。

「あ、またこの番組見たの？」

「まーなー」

「はい。どうぞ」

「おう、サンキュ」

テーブルの上に置かれたケーキと紅茶に早速手を伸ばす。雪はエプロンを外して、二人がけソファの隣に収まった。

「優ちゃんつて、このアイドルの子好きだよね」

「んー、まあ嫌いじゃないな。可愛いし」

単純な話だが、テレビの中の住人に対してはそれが唯一にして絶対の基準、だと俺は思う。性格だのなんだのつてのはテレビ画面を通すとどれが本物かなんてどうせわからないのだ。とすれば、見た目だけで好き嫌いを判別するしかなかるう。

そもそも可愛い女の子を嫌いな男なんて、そうはいないのだ。

雪も自分の紅茶に口を付けながらテレビを見て、

「可愛いよね」

「可愛いな」

「瑞希ちゃんどどっちが可愛いかな？」

「そりゃ、この子のほうが可愛いだろ」

「そうかな？」

「……」

俺は無言を返した。

確かに瑞希のヤツは美人だ。あるいはこのアイドルより上かもしれない。……とは思っても、素直にあいつのことを賞賛する気にはなれない。

雪はちよつとだけ真剣な顔でテレビを見つめて、ポツリと言った。

「私もこの子みたいに可愛かったら良かったな」

「……」

再び無言を返す俺。

常に上を目指そうとするのはいいことだ。いいことなのだ……が、たまには妹との仲介役を頻繁に頼まれる兄の身にもなって欲しいものである。しかもその中には竜二のような変な輩も結構混ざっているのだから。

「……あ、そつだ」

と。

俺が竜二のことを考えていたから、というわけでもないのだろうが、

「今日、久しぶりに明日香ちゃんから電話があったよ」

と、雪は言った。

テレビはちよつとコマーシャルに入ったところだった。

「明日香？ お前に？」

「うん。元気そうだったけど、最近学校で会ってる？」

「んー、今日、会ったかな」

というか、毎日昼休みに会っていた。

そしてあいつが雪に電話した理由も大方見当がついている。

「直斗の好物とか聞かれたのか？ ついでにその作り方も」
「うん」

明日香が直斗を好きなことは、雪も知っている。

「当然、嘘を教えてやったんだろっな？」

「うっん。……優ちゃん」

と、雪はちよつとだけ困った顔で俺を見た。

「ダメだよ、前みたいに変なこと教えちゃ。明日香ちゃんだって真剣なんだから」

「うっ……」

怒られてしまった。

まあ、最近は俺もあいつの根性に少し感心させられているし、直斗の気持ちがかどうかという問題はあるものの、若干応援したい気分にもなっている。

だから変なことは教えてない……と、思う。少なくともここ数日は。

「わかったわかった。……ま、最近はあるんまり熱中しすぎてて、からかうネタもなくなってきたところだしな」

「うん」

雪はニツコリと微笑んで、ティーカップを手を取った。

コマーシャルが終わる。

「上手くいくといいね」
と。

雪がそう言った瞬間。

微かに、ほんの微かにではあるが、耳の奥で“耳鳴り”が鳴った気がした。

— — —

「……よし！ 頑張るぞ！」

夕食後、明日香はすぐに台所へと向かった。

共働きの両親は今日は帰りが遅くなる予定だったし、何かと口うるさい兄の竜二は部屋にこもっている。

雪から電話で教わったことを早速実践するチャンスだった。

「ええっと、まずは」

メモした内容を流し読みながら材料を準備。野菜を洗い、調味料を準備してフライパンを火にかける。

と。

……カタ。

「？」

洗面所の方から微かな物音がした。 したような気がした。

「竜二兄さん？」

呼びかけても返事はない。いや、当たり前だ。洗面所に行くには必ず台所の横を通る必要がある。いくらなんでも明日香が気付かないはずはなかった。

耳を澄まして、それ以上の音は聞こえない。

「……風、かな」

今日は暑かったので、この時間になっても窓を少し開けたままにしている。そこから入った風で何か動いた音だったのかもしれない。

「そうだ。そろそろ窓閉めなきゃ」

コンロの火を止め、洗面所へ向かう。念のため少し慎重に覗き込んでみたが、もちろん洗面所には誰もいなかった。

開きつばなしの窓に手をかけて。

そして気付く。

（あれ、窓、こんなに開けてたっけ……？）

スライド式の窓がほぼ全開になっていた。

流れ込む、生ぬるい風。

……キイ。

「？」

微かにきしむ音。

洗面所のドアが動いてた。

人の気配。

「……え？」

明日香はその気配に気づき、ゆっくりと後ろを振り返った。

1年目6月その4

事件があつたのは明日香が雪に電話をかけてきた日の翌日、その昼休みのことだった。

(雪のアドバイスで少しは上達したのかな、あいつ)

なんて、俺も少しだけそのことを楽しみにしながら直斗の机へ向かう。

するとそれに気付いた直斗が怪訝そうな顔をして、

「あれ？ どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないだろ。俺がこれから勉強でもするように見えるか？」

そう言っって持ってきた弁当箱を直斗の机に置く。

直斗は真顔で首を横に振った。

「教科書を持ってきたってそうは思わないけどね」

「……」

そのとおりなのだが、ストレートに言われるとそれはそれで何か納得できないものがある。

俺が無然とした顔をしていると、直斗は苦笑しながら、

「でも珍しいね。優希のほうから来るなんて」

「そうか？」

明日香の弁当がどうなったかが楽しみで　なんて理由はおくびにも出さず、空席となっていた前の席のイスを反転させて座る。

ちなみにこの学校においては、昼食は教室以外の場所で食べるのが一般的である。学食に行く連中はもちろんだが、弁当組や購買組も天気の良い日は中庭や屋上など　そこは広々としている上にベロンチやら花壇やらがきちんと整備されていて、ランチを楽しむには絶好のロケーションとなっており、わざわざそこに移動して食べる連中が多いのである。

だから昼飯時、教室の人口密度は半分以下になる。もちろん竜二

のヤツは学食に行ったし、由香は女友達に連れられていなくなった。いつもうるさい将太と藍原も姿が見えないところをみると、どうやら学食に行ったようだ。

と。

(……お、来たな)
それほど待たされることなく、教室の入り口に明日香の姿を発見できた。

が。

「？」

違和感。

いつもなら入ってくるなり、すぐに直斗のところに駆け寄ってくるはずの明日香が、何やら静かに歩み寄ってくるのである。

表情も暗い……というか、何か思い悩んでいるような表情だ。

簡単に言つと覇気がない。

「こんにちは、直斗先輩」

明日香は近付いてくるなり、いつも通りにそう言った。が、やはりいつもの彼女のような元気さはない。心ここにあらずというか、感情がこもってないというか、そんな感じだった。

「こんにちは、明日香ちゃん」

だが、直斗は何事もなかったかのように挨拶を返す。

気付いてないのだろうか。

それとも俺の気のせいか。

「どうしたんですか、優希先輩？」

「ん？」

明日香の問いかけに、俺は思考の世界から現実世界へと引き戻される。

「ああ、いや、なんでもない」

「そうですね？」

あ、直斗先輩。これ、お弁当です。今日のは自信作なんですよ

「ありがとうございます」

「……」
そのやり取りに不自然なところはない。

(……やっぱり気のせいかと。)

そのときだった。

「！」

耳の奥にチリチリとした軽い痛み。

いや、これは

(“耳鳴り”……！)

今度は気のせいじゃない。

咄嗟に辺りを見回す。

教室。

窓の外。

何も変化はない。

「？ どうしたの、優希？」

「優希先輩？」

気付くと、怪訝そうな直斗と明日香の視線があった。

「あ、いや」

俺はそう答えながらも軽く耳を押さえる。

耳鳴り自体は決して珍しいものじゃない。悪いことが起きる前兆だったり、そうじゃなかったり。悪いことが起きるとしても、それが何なのかを察知することは難しい。そのすべてにいちいち反応していたら普通の生活は送れない。

それでも。

今回ののは、明日香の様子がどこか奇妙であることと重なって少し気になった。気にはなったのだが、それで何ができるといってもなく。

「いや、なんでもない」

「？」

直斗は首をかしげていたが、やがて明日香から受け取った弁当箱

に視線を戻した。

「じゃあ、いただきます」

と、蓋を開く。

俺もその弁当箱を覗きこんだ。

「ん……ずいぶん変わったな」

それが最初の感想だった。先週末まではところどころに隙間があったのだが、今日はかなりしっかりと詰め込まれていて彩りも鮮やかだ。

「綺麗だし、おいしそうだね」

直斗も俺とほぼ同じ感想を口に出して、箸を手取る。

俺の感想はともかく、直斗の言葉にはたいそう喜ぶのではないかと思っただが、

「……」

当の明日香は、どこを見ているのかわからない顔でポーっとしている。

(……やっぱり変だ)

いつもの彼女なら、頬を赤く染めて必要以上にはしゃぐはずなのに。今日はまったくの反応無し、というより、直斗の言葉が耳に入っているのかどうかさえ怪しい。

(あれか。いわゆる女の子の曰とかそういうヤツなのか)

なんて、口に出したら間違いなく非難の集中砲火を浴びそうなことを考えていると、

「……え」

今度は直斗が奇妙な声をあげた。

「どうした、直斗？」

見ると、直斗の手は弁当のおかずに着をつけようとしたところで止まっている。止まったまま、直斗は動かなかった。

何があったのだろうか。

直斗の視線の先、つまりは弁当箱のおかずを見ても特におかしなところはない。

もう一度直斗の顔に視線を移す。

すると一瞬だけ直斗と目が合って、

「あ、そうだ」

急に箸を置いた。

「食べる前に何か飲み物でも買ってこようか。ねえ、優希も明日香ちゃんも、何か飲むでしょ？」

「は？」

唐突な申し出に、俺は少しびっくりしながら、

「ああ、飲まないことはないが……」

「僕が買ってくるから。明日香ちゃんも。お茶でいい？」

「……え？ あ、はい」

どこか惚けた様子の明日香も、今度はきちんとそう答える。

「じゃあ、ちよつと行ってくるね」

急いだ様子の直斗が席を立とうとして

ガンツ！

「あー！」

かなり慌てていたのだろうか。

立ち上がるうとした直斗の膝が机を直撃した。

「危ねえッ！」

俺はそう叫んだが、時すでに遅し。

直斗に蹴り上げられた机は斜めに傾いて……俺が咄嗟に押さえたので転倒はまぬがれたが、机の上にあった弁当箱は教室の床に投げ出されてしまった。

「あっ……」

ワンテンポ遅れて、明日香がそれに反応する。

「ごっ、ゴメン！」

直斗が慌てて机を元に戻す。

が、しかし。

「……ごめん、明日香ちゃん。せっかくのお弁当……」

蓋を開けていなかった俺の弁当は無事だったが、直斗の弁当は中

身がすべて床の上にぶちまけられてしまい、ティッシュを駆使して残骸を回収したものの、当然ながらも口にできるような状態ではなくなってしまうていた。

「ごめん」

「あ……いえ、気にしないでください」

平謝りする直斗に、明日香は空になってしまった弁当箱を胸に抱えながらそう答えた。

表情にいつもの元気さはない。

いや、それは最初からか。

「……本当にごめんね」

と、直斗が本当に申し訳なさそうに謝ると、明日香は初めて微かに笑顔を見せて、

「いいです、そんなの。私、また作ってきますから。本当に気にしないでください。……あ、それじゃ私、今日はこれで失礼しますね」

明日香はそう言うと、さっさと教室を出て行ってしまった。

そんな彼女の後姿を見送って、

「……ゴメン」

再び、直斗は小さく呟いた。

「……？」

そこでもう一度。

今度は、そんな直斗の様子に俺は奇妙な違和感を覚えた。

直斗は明日香の後姿を見送りながら申し訳なさそうな顔をしている。

それはいい。

あんなことをしてしまったのだから、それは当然だろう。

だが　なんだろう。

そこにこもっていた感情は、それだけのことではないような気がした。

(なんだ……?)

それが何なのか、そのときの俺にはわからなかった。

その日、直斗は結局昼食を食べなかった。

そして夜。

我が家の電話の呼び出し音が鳴った。

トゥルルル、トゥルルル……

俺はそのとき二階の自室でベッドに転がり漫画の単行本を読んでいた。ちなみにウチの電話は一階の居間に親機があり、二階の廊下に子機が一台置いてある。外線はもちろんどちらでも取ることができるが、居間にはまだ雪と瑞希がいるはずだったし、わざわざ部屋を出て電話を取る気はなかった。

やがて下で誰かが取ったのだろう、呼び出し音が止まって、そして数秒後。

「優希ー！ 電話よー！」

階下からそんな瑞希の声がした。

(電話?)

俺はゆっくりとベッドから身を起こし、時計に目をやる。

夜の九時を少し回ったところだった。

ちよつと乱れた髪を適当に直しながら部屋を出ると、それとほぼ同時に、子機が先ほどまでとは違う呼び出し音を鳴らした。これは外線ではなく、親機からの呼び出し音だ。

俺は受話器を手にとつて、

「この電話番号は現在使用されておりません……」

「馬鹿。つなぐわよ」

いきなり外線と繋がっていたらどうしようかと思っただが、俺のお約束のボケは受話器の向こうの瑞希にさらっと流され、続いて受話器を置く音がした。

「もしもし」

相手が切り替わると同時に、俺は少し真面目な声色になってそう

呼びかける。

すると、

「相変わらず間の抜けた声だな」

「ん？」

いきなり失礼な第一声だった。

しかもあまり聞きなれない声である。聞いたことのある声であることは間違いないが

……ああ、そうか。

「お前は隣のクラスの野口だな？ どうした野口？ また女にフラれたか？ まあ気を落とすな。人生楽ありや苦もあるさ」

「悪いが」

電話の向こうの野口は冷たい声でそう言った。

「お前のおふざけに構っている暇はない。用件だけ言わせてもらおうぜ」

「……相変わらずノリの悪いやつだな、お前」

「お前ほど暇じゃないんだ」

「そうかい。ま、なんにしる久しぶりだな、楓」

「まあ、そうだな」

電話の向こうの野口 もとい、楓はそう言った。

例の事件以来だから、もう一ヶ月以上ぶりにもなるか。といっても前回の再会が十年ぶりぐらいだから、それに比べたら大したことはない。

もう向こうから接触してくることはないのかと思っていたので、

この電話はかなり意外だった。

「で、用件ってのは？」

俺は少し真面目に聞いた。

向こうの口調から、世間話をするためにかけてきたんじゃないことはわかる。ということは例の組織か、少なくとも悪魔絡みの話であることは間違いない。

楓は言った。

「今井明日香。知ってるな？」

「……明日香？」

思わず反応が遅くなった。意外すぎる単語だった。少なくとも“非日常世界”の住人である楓の口から出てくるべき名前だとはとても思えなかった。

嫌な予感がする。

俺は素直に答えた。

「もちろん知ってる。お前は何であいつを知ってる？」

逆にそう質問したが、楓はそれには一切答えようとはせずに、

「その女 あるいはその女の周りで何か異変が起きてないか？」

「異変つてのは？」

「もつと些細なこと……違和感と置き換えてもいい。心当たりはないか？」

違和感。

それならとてつもなくタイムリーな表現だ。

「ああ、起こってる」

今日の明日香の様子が思い起こされる。電話がかかってきたこのタイミングを考えても、楓はたぶんその辺りのことを言っているのだろう。

「お前、何か知っているのか？」

もう一度、逆質問。

今度は電話の向こうで二、三秒沈黙した。

そして、

「毒だ」

「……なに？」

聞き慣れているようで、あまり聞き慣れない単語が受話器の向こうから飛び込んできた。

「毒、と言ったか？ 何の話だ？」

楓は相変わらず淡々とした口調で、

「あの女の作った弁当から毒物が検出された。それもただの毒じゃ

ない。こつちの世界では簡単に手に入らない特殊な遅効性の毒物だ」
「……なんだって？」

あまりに非現実的な話に、一瞬だけ思考が停止した。

そんな話 推理小説やドラマではよく耳にする話だが、まったく現実感がない。

「ちよつと待てよ。明日香が直斗の弁当に毒を入れたってのか？」

「いや、別の誰かが隙を見て入れた可能性もある。ただ、どちらにしても、その明日香とかいう女に殺意があるわけじゃない」

「言ってる意味がわからん」

再び沈黙。

受話器の向こうから面倒くさそうなため息が聞こえ、言葉がすぐに続いた。

「優希。お前は精神操作の力を持つ大種族のことを知っているか？」

「……幻魔のことか？」

そういうことは伯父さんから聞いて多少知っていた。

大種族というのは悪魔の力を炎、水、氷、風、雷、地、夜、幻、光、妖と大きく十種類に分別したものだ。その中で精神操作という特殊な力を持つものを幻魔族という。

幻魔族は人の心の隙間に入り込み、その記憶や精神状態を操る。

強い力を持つ幻魔なら人の行動そのものを操ることができるらしいが、通常は錯覚や軽度の混乱を起こさせる程度、とのことだ。

幻魔つてのはこつちの世界との関わりがもつとも薄い種族らしく、幻魔族というのは俺も相対したことがない。

「幻魔族がかかわってるっていうのか？」

そう問いかけると、楓は小さく笑って、

「そうでもなきや、俺がわざわざ調べるはずがないだろう」

「ま、そうかもしれんが」

そこまで言っただけ俺は気付いた。

「ちよつと待て。ってことは、今回狙われたのは俺じゃなくて直斗ってことか？ どうして直斗のヤツが命を狙われなきやならないん

だ？」

「……………」

俺の質問に、今度は長い沈黙があった。

「楓？」

もう一度呼びかける。

「……………」 そうだな。お前にはある程度教えておいたほうがいいのか」

まるで独り言のようにそう呟くと、

「詳しい事情までは話せんが、直斗のヤツには命を狙われるだけの理由がある。今回だけの話じゃない。これから先もある程度、こういうことが起きる可能性がある」

「……………」 そんな説明だけで納得しろと？」

「別に納得しなくてもいい。そのうちわかる。それに」

受話器の向こうで楓が薄い笑みを浮かべたのがわかった。

「納得してもしなくても、お前は直斗の命を救うためなら動く。そうだろう？」

「……………」

もちろん不満ではあったが、それは楓の言うとおりだった。直斗が本当に命を狙われているのであれば、そんなことを議論している場合ではない。

そして俺は この楓という男のことは気に食わないヤツだとは思っているが、基本的に味方であると認識している。それは昔から変わっていない。

仕方なく俺は受話器を手にしたまま小さく頷いて、

「わかったよ。で、どうすればいい？ 幻魔を捕らえることは可能なのか？」

「すぐには無理だ。明日香とかいう女が本当に幻魔の手の内にあるのか……………」 まず間違いないだろうが、確実じゃない。それを調べるのにも少し時間がかかる」

「……………」 けど、もしお前の話が本当なら、明日持つてくる弁当にも毒が入っているってことにならないか？」

「だろうな」

「どうすんだ」

毒が入っているのがわかっていると、直斗はそれを知らない。かといって、毒が入っているから食べるのをやめるなんて言うわけにもいかないだろう。何しろ、幻魔の仕業だとすると明日香はそのことをまったく知らないのだ。

何よりも、明日香の作った弁当に毒が混入されていた、なんてことが周りに知れたら冗談ごとでは済まなくなってしまう。

最悪、殺人未遂だ。

それを避けるためには、明日の昼までに幻魔を捕まえるか、あるいは

「優希。不本意だが、今回はお前の力を借りたい」

「それはわかっている。けど、何をすりゃいい？」

受話器の向こうでほんの少しだけ思案するような時間があって、「まずお前は明日香とかいう女と接触しろ。話をするだけでいい。そしてその女の子の状態を詳細に俺に報告するんだ。夜にはまた俺のほうから電話する」

「お前は？」

「俺は幻魔がその女に接触しないかどうか監視する。幻魔がかかわっているなら必ずどこかのタイミングで現れるはずだ」

「待てよ。明日の昼にはまた毒が」

「その点は心配ない。直斗は明日から三日間風邪で学校を休む」

「風邪で休む？」

「どういう意味だろうか。」

が、楓はそのことについてそれほど説明する気はないようで、「方法はいくらかもある。だからリミットは週明け、月曜日だ。それまでに決着をつける」

「……わかった」

納得できないところはいくつもあったが、とりあえず俺はそう答えた。

楓はおそらくこういうことにかけてはプロなのだ。素人同然の俺がアレコレと口を出す必要はないと思っただし、なんと言っても直斗や明日香のことだ。間違いがあつては困る。今回に関しては楓に任せたほうがいいだろうとの判断だった。

そして俺は、俺のできることをやる。

わからないことが多い現状では、それが一番いい。

「じゃあ、そういうことだ。……頼んだぞ、優希」

楓は最後の最後によく殊勝な言葉を残し、電話を切った。

「頼むぞ、ね。……お前に頼まれなくてもやるっつーの」

考えるべきことはたくさんある。どうして直斗が狙われたのか。

楓はどうやって明日香の弁当の中身を調べたのか。そして今日の昼、明日香の様子がおかしかったこともそうだが、それと同様に、直斗の様子がおかしかったことも気になる。

それだけじゃない。

だいたい、直斗が今日弁当を食べなかったのは、誤って弁当箱をひっくり返してしまったからだ。いわば偶然。しかも慌てて机にひざをぶつけ、机ごとひっくり返してしまう、なんて、あいつらしくもないミスが偶然起こったおかげだ。

だが、楓はそのことについては何も言っていないかった。

もしも以前から明日香の周辺に気を配っていたのなら、もっと早くに行動を起こして、今日のことだって未然に防げていたはずではないのか。

楓が明日香の周辺に目を付けたのがたまたま今日だった、というだけの話だろうか。

……いや、そんなはずはない。

楓は“直斗には狙われる理由がある”と言った。だったら、あらかじめもっと直斗の周辺に注意を向けていたはずだ。

なのに、直斗が助かったことはあくまで“偶然”。

(偶然、か)

本当に、偶然だったのだろうか。

俺は今日の昼の出来事を思い出していた。

直斗はあのと時確かに一度弁当箱の中身に箸を伸ばした。伸ばして、その直前で何事か思いついたかのように箸を止めて　そして突然、飲み物を買うに行く、と言い出したのだ。

そのときの直斗の態度は、どこか不自然だった。

そして立ち上がるうとした直斗は机に膝を引つ掛け、弁当箱ごと机をひっくり返した。

それもいつもの直斗らしくない失敗だった。

まああいつだって人間だ。たまには失敗もするだろうが

(もし、直斗が気付いていたなら?)

明日香の弁当に毒が入っていることに、それを食べようとする直前で気付いていたとするなら。

そう仮定すると、びっくりするぐらい今日の直斗の行動が説明できるような気がした。

そして弁当をひっくり返したのがわざとだったなら。

(……考えすぎか)

食べる前に毒が入っているなんて　異臭でもしていたならともかく　普通、気付けるはずもない。いくら直斗の勘が常人を遙かに超えるほど鋭いとしても、だ。

常日頃から狙われていることを自覚しているならともかく

(まさか、な)

俺はすぐにその考えを打ち消し、なんとなく釈然としない気分のまま自室に戻った。

その先を考えることは敢えて封印し、ベッドに転がる。

(今はただ、やるべきことをやるだけだ　)

1年目7月その1

「うん。熱が三十九度ぐらい出てね」
朝。

すがすがしい朝、ではなかった。空には薄い雲が一面にかかっていて辺りは薄暗い。七月に入ってもこの辺りはまだ雨の日は続き、昨日も夜遅くまで雨が降っていたためか、ドヨンとまとわりつくような空気が非常に不快な朝だった。

歩いているだけでじんわりと汗が噴き出して来る。

「もう大丈夫なの？」

「うん。土日を入れて五日も休んだからね」

あれから俺は何度か明日香と話をした。できるかぎり意識しないように、いつもと同じように接したつもりなのだが、明日香の方はやはり少し様子がおかしいようだった。からかってもいつものように噛み付いてこないし、やはり何か他のことを考えているような感じだった。

そのことを報告すると、楓はそれに対する見解は特に何も口にしなかったが、何やら納得していたようだ。

だが、結局

「本当はお見舞いに行こうと思ってたんだけど……」

「期末も近いしね。風邪うつしたら大変だから」

「うん……優希くん？」

「ん？」

由香の言葉で俺は我に返った。

いつもの通学路だ。隣には直斗と由香。いつもどおりでないことといえば、今日は比較的時間に余裕があることが。

「ああ。直斗の風邪の話だった？」

と、俺は適当に話を合わせた。

あの日、楓が言ったとおり直斗は風邪で学校を休み、週明けの今

日、ようやく学校に出てくることになった。

風邪で高熱を出していたということだが

「優希くん、どうしたの？ 何だか難しい顔してるけど……」

由香は心配そうな顔で俺の顔を覗き込んでくる。

「そうか？ 別に何でもないが」

そう返したが、由香の怪訝そうな表情を見る限り、どうやら俺はかなり深刻そうにしていたらしい。

もちろん、何でもなくはない。

が、その理由を彼女に説明することはできなかった。

『……どうもあの女の周辺には見当たらないな』

昨日の夜、楓はいつものように淡々とそう言った。

明日香の周りに幻魔は見当たらない、ということだ。

現時点で、直斗の命を狙っているという幻魔はまだ捕らえられていないのである。それはつまり、相手が諦めたのでなければ、今日、明日香が昼食に持つてくるはずの弁当にも“毒”とやらが仕込まれている可能性が高いということでもある。

『学校では俺は手を出せない。明日の昼までに俺から何の連絡もなければ』

お前の判断でどうにかしろ、と、楓は言った。

要するに丸投げされてしまったわけだ。

(どうするか……)

俺は昨日の夜からそのことで頭がいっぱいだった。

いざとなれば、何としても直斗がその弁当を口にすることを阻止しなければならぬ。ただ、偶然を装って弁当をダメにしてしまうことにも限界がある。

明日香のヤツの様子がおかしいことは確かだ。それは先週、直斗が休んでいる間に何度か接触したことでも確信している。心ここにあらず、もつと具体的に言つと、他の何かが気になって集中できていないような、そんな様子だった。それが幻魔の精神操作による影響である可能性は充分に考えられる。

が、その明日香の周りに幻魔の姿は見当たらないという。

楓の話によると、犯人である幻魔はある程度の力を持つてはいるものの、対象にかけた力を永久に持続させるほどの力はない。だからおおよそ二日に一回程度は対象に接触し、力をかけなおす必要があるはず、とのことだった。

つまり、今もその幻魔が直斗を狙っているのであれば、直斗が休んでいるこの数日のうちに、対象に少なくとも二、三回は接触していることになる。

だが、明日香の周辺にその気配はなかった。

楓がとんでもないドジで致命的なミスを犯してでもない限り、明日香は精神操作されていない、ということになる。

楓がドジった可能性はとりあえず除外するとして

(けど、明日香の弁当に毒が仕込まれていたことは確かだ)

その仮定で考えた場合、どうなるだろうか。

明日香は精神操作を受けてはいない。

それでも明日香の弁当に毒が入っているという事実。

……明日香以外の誰かが、その弁当に毒を入れた可能性。

俺はハツとした。

(明日香の態度の変化が、別の要因によるものだとしたら)

「あ！ 優希くん!？」

「優希？」

急に走り出した俺に、直斗と由香が驚きの声をあげる。

だが、俺はそんな二人に対し、振り返りもせず、

「先に行く!」

そう声を投げると、そのまま全速力で学校へと向かった。

(昼までに、明日香のヤツに確かめないと)

三時間目の休み時間。

今井竜二は終了のチャイムと同時に席を立って教室を出た。三時間目は化学室での実験だったから出ていく竜二の行動をいぶかしむ者は誰一人としていなかったし、その途中で集団から外れ、玄関のほうへと向かった彼の行動もほとんど誰にも気にされなかった。

「……」

竜二はどこか遠くを見つめる視線で玄関から外に出ると、無言のまま校舎に沿って歩き、ちょうど周りから陰になって目立たない体育館の裏辺りへとやってきた。ここにも体育館への入り口はあるが、普段は閉鎖されていて開かれることはほとんどない。かつ、四時間目に体育館を使うクラスはないらしく、中はしんと静まり返っていた。

「……来たか」

そこには一人の男の姿があった。

茶色の綿パンに白いＴシャツと七分袖の薄い上着。歳の頃は三十歳前後だろうか。つばが大きめの帽子をかぶっていて顔はよく見えない。

「……」

一方、男と相對する竜二は、まるで催眠術にかかっているかのよう
うに虚ろで無表情だった。

男はそんな彼に歩み寄って顔の前に手をかざす。

「念のためだ。もうしばらくは俺の言うとおりにしてもらおうぞ」

男はそう呟き、竜二の耳元に口を寄せて何事か呟き始めた。

“中級幻魔族”

男はそう呼ばれる種族の悪魔だった。幻魔という大種族の中では上位にランクする種族であったが、男自身はどちらかといえば落ちこぼれの部類だった。

だから毎日決まった時間に自分のところに呼び出しては、力を掛け直す必要があったのだ。

「今度こそ前回のようないくシデントはないはずだ。今度こそは」

「この仕事が終われば彼はまた自由の身。

そういう約束だった。

「今度こそは」

.....

「.....はい、そこまで」

俺は頃合を見計らって体育館の陰から飛び出した。

「！」

俺が想像していたよりも遥かにオーバーなりアクションで、幻魔と思われるその男は弾かれたように竜二から離れ、こちらを振り返った。

「な、なんだお前は！　ここの学生か！？」
かなり慌てている。

もっとプロの殺し屋的なヤツをイメージしていた俺は、微妙に肩透かしを食った。

「見てのとおりここの学生だ。つか、あんた、俺のこと知らないのか？」

そう言つと、男は怪訝そうな顔をした。

「.....なるほど」

つまりこの男は、自分のターゲットの周りにいる俺の顔すら覚えていなかったというわけだ。

「どうやら、間抜けなフリして実はすごいヤツ、的な路線もなさそうである。」

「まあいいか。俺は……そうだな。あんたが狙ってるやつ親友、かな」

「そう言うと、男はさらに目を見開いて驚愕の表情を作った。」

「な！？ ど、どうしてここがわかった!？」

「どうしてって、こいつの後をつけてきたからに決まってるだろ」

「そうやって俺は棒立ちになったままの竜二を顎で示す。その竜二は俺たちのやり取りにもまったく反応しない。一種の催眠状態にあるのだろう。」

「好都合だ。」

「ば、馬鹿な！ 何故こいつが怪しいと い、いや、それ以前に、どうして俺がああ男を狙っているなんてことがわかった!？」

「あ……」

「あまりに典型的すぎる小者くささに、俺は思わず言葉に詰まってしまった。」

「こいつは要するに、自分の行動がまったく誰にもバレていないと、そう信じていたわけだ。たぶん先日明日香の弁当に毒を仕込んで失敗したことも、すべてはただのアクシデントで、毒を仕込んだこと自体は誰にも発覚していないと思っていたのだろう。」

「説明するのも面倒だった。」

「まあこの馬鹿については上手く操っていたんじゃないかと思うぜ。少なくとも俺は今日までこいつの様子がおかしい、なんてことは思わなかったからな」

「正しくは、気にも留めていなかった、だが。」

「だ、だったら何故」

「こいつの妹が気付いていたのさ。何かおかしい、ってな。……あれだな。たいして仲良さそうに見えなくても、兄妹ってのはやっぱり互いのことを結構見ているもんなんだな」

「ば、馬鹿な！ そんな、簡単に気付かれるようなおかしい行動は

していなかったはずだ！」

と、幻魔。

なんだかそのオーバーなアクションがクドく感じてきた。

「聞いてみたのさ。お前の兄貴、最近おかしなところはないか、つてな。……なんて返ってきたと思う？」

俺はそのときのことを思い出して苦笑すると、

「最近の兄さんはまともすぎておかしい、気持ち悪い、何か悪い病気にかかっているんじゃないか……だとさ」

「……！」

幻魔も呆気に取られた顔をした。

怪しまれないように、と、まともに、あまり目立たないように行動させていたのだろう。それが完全に裏目に出てしまったわけだ。

と言っても。先日俺と話したときの竜二はそこそこに変人オーラを出していたような気がしたのだが、あれでもまともな方なのだろうか。

その辺りのことは明日香にしかわからない部分なのかもしれない。

「まあ、アレだ。刺客に変人を選んでしまったのが運の尽きってことで。少なからず同情する」

「くっ……！ だ、だが！」

幻魔は悔しそうな顔をしながらも、それでもまだ虚勢を張った。

「俺の前に出てきたのは失敗だったな！ 言っておくが俺はそんなやそこらの雑魚とは違う！ 何しろ俺は“中級幻魔族”だ！」

「……」

中級悪魔といえ、確かに手強い相手のはずである。

とはいえ。あんな醜態を目の当たりにさせられた後ではいまいち迫力がない。そもそも幻魔族ってのは十種類ある大種族の中で、もっとも直接戦闘に向かない種族だと聞いている。悪魔であり、しかも中級である以上、身体能力は普通の人間より遥かに優れているのだろうが、他の大種族に比べると見劣りするはずであった。

「中級幻魔族、ねえ」

俺はポケットに突っ込んでいた右手を体の前に翳した。

今日は三割ぐらいか。

すこぶる調子が良い。

「そんなじゃ、ちよつくら試させてもらうとするか。その、中級幻魔族とやらの力を、な　！」

右の拳が凝縮した炎を纏う。

場所が場所だ。あまり派手な力を使うわけにはいかない。

小さく、強く。

拳に纏うのは凝縮した熱の塊。太陽の拳。

「　！」

幻魔は今までで一番大きく目を見開いた。

「……馬鹿な！　お、お前、一体、何者　ッ！」

「だから言っただろ。お前が殺そうとしてるヤツの親友だ、ってな」
右の拳を握り締めたまま、俺は一步、幻魔へと歩み寄る。

「さて、一緒に来てもらおうか。大人しくしないと　蒸発しちまうぜ」

と。

そのときだった。

「つ……竜二!？」

それまで棒立ちになっていた竜二が急に動き出したかと思うと、俺に向かって拳を振り上げ突っ込んできたのだ。

「ちよつと待て！　お前　！」

後ろにステップすると、竜二の拳が空を切る。

その不意打ちに、拳の炎は四散して宙に消えてしまった。

「ふ……ははははは！」

先ほどまでの追い詰められた様子はどこへやら。幻魔が勝ち誇った笑い声を上げた。

「どうだ!?　こいつは確かお前の同級生だったな！　そいつを倒さない限り俺のところまでは来られないぞ！」

「……なるほど」

確かに、竜二は俺と幻魔の間にしつかりと入っていて通せんぼをしていた。表情は虚ろなままで、まだ催眠状態にあるのだろう。

幻魔はニヤリと口元を歪めた。

「ふふふ、いくらとんでもない力を持つていようと、操られた友人を傷つけることはできない！ 俺を捕まえたくばそいつを攻撃するしかないぞ！？」 ふふふ、ははははは 「

ゴン！！

「ははは は？」

幻魔の勝ち誇った笑い声が、惚けた言葉に変わった。

「これでいいのか？」

俺はそう言つて、足もとに倒れた竜二を顎で示す。

殴つたのはもちろん素の拳だ。

「催眠状態つてのは反射的に避けようとしたりもしないんだな。変などこ打つたりしてなきやいいんだが」

竜二は完全に気絶していた。

「な、な……」

幻魔は顔を真っ赤にして、

「お、お前、それでも人間か！？ 自分の親友を傷つけるとは！」

「親友どころか、そもそも友達でもねえし」

「ば、馬鹿な！ 人間つてのは自分の友達を傷つけない生き物じゃないのか！ そういうときは殴るんじゃないやなくて、頼む、正気に戻ってくれと叫ぶものだろう！？」

「馬鹿はお前だ」

「どうやら真性だ。

と。

そこへ四時間目の開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

それを合図に。

「……くそっ！」

「あ、おいッ！」

幻魔が背中を見せて逃げ出す。

俺は慌てて追いかけた。

ここで逃がしてしまったら厄介だ。

「逃がすかッ！」

追いかける。

追いかける

と。

「！？」

ズシ、と。

急に辺りの空気が質量を増した。

(これは)

四方八方すべてを隙間のない壁で塞がれた様な違和感。

圧迫感。

閉塞感。

周囲の喧騒もどことなく遠のいている。

それは、覚えのある感覚だった。

(悪魔狩りの結界 !)

雪が悪魔狩りに狙われたあのときに感じたものと同じだった。

そして、

「わっ！」

幻魔の逃げた方向から驚いたような声が聞こえ、尻餅の音がそれに続く。

視線を向けると、

「あ、あなたは」

幻魔は怯えたような声で、尻餅をついたまま少しずつ後ろ、つまりこちら側に下がってくる。

(楓が来たのか……?)
と。

その予想は外れていた。

「観念してください」

体育館の陰から現れたのは風見学園の制服に身を包んだお下げ髪の女生徒

「……神村さん？」

俺がそう呼びかけると、女生徒　神村さんは俺の方をチラッと見て言った。

「不知火さん。授業が始まっています。教室にお戻りください」

「え？　けど」

「あとは私にお任せください。神薙さんのお弁当についてもこちらで何とかします」

抑揚のない調子でそう言った。

俺は少し戸惑った。が、彼女の前で尻餅をつく幻魔はすでに戦意を喪失していたし、楓の話とこの結界から彼女が悪魔狩りの一員らしいことはわかってている。いずれにしてもこの幻魔の身柄は彼らに渡すことになるのだし、それであれば、この後の処理は最初から彼女にすべて任せたほうがいいのかもかもしれない。

俺はそう考えて、

「わかった」

頷いた。

頷いてから、このまま黙って立ち去るのも何となく勿体なかったので、

「けど、神村さんはいいのか？　授業？」

と、少しだけ冗談交じりに言ってみた。

すると、

「……」

神村さんは少し意外そうな顔をした。

そして、

「保健室に行っていることになってますから」

「仮病か」

「……そうですね」

神村さんは素っ気なくそう言って幻魔に向き直った。

が、

(……今、ちょっと笑ったか?)

もしかしたら錯覚だったのかもしれない。

「不知火さん」

それを確認する暇もなく、続けて神村さんは言った。

「今回の件、不知火さんのおかげで助かりました。感謝します」

「……ああ」

最初に抱いた印象よりも若干柔らかい口調。

(嫌われてると思ったのは……勘違いだったのかな)

単に彼女が、そういう性格なだけだったのかもしれない。

俺は勝手にそう納得して、

「じゃ、後は任せる。俺は戻るから」

「はい。ありがとうございます」

そんな神村さんの言葉を背に、一仕事終えたという満足感を覚えながら俺は教室へと戻っていくのだった。

1年目7月その2

「直斗せんばーい！」

あの日を境に、明日香の態度は元に戻った。今日もまた弁当を作ってきた彼女は、俺たちのクラスの中でいつの間にか“直斗の彼女”という地位を確立しつつある。直斗は苦笑しながらその話を否定するものの、それほど強く反論することはない。性格もあるのだから、少なくとも嫌がってはいないらしい。

もしかしたら本当に脈があるのかもしれない。

俺は自分の席からそんな明日香と直斗の姿を眺めながら玉子焼きを口に運ぶ。

最近と同席することもなくなった。それどころか、ここまできたら密かに応援し続けてやろうか、なんて、らしくないことを考え始めていたりもする。

そんなある日の放課後のことであった。

「……ねえ、優希くん。明日香ちゃんって、もしかして優希くんじやなくて、直斗くんのが好きなのかな？」

なんて、今更惚けたことを言い出した由香には色々突っ込んでやりたいところだったが、そこは敢えて知らなかったふりをして、

「そうかもな」

と、返した。

学校からの帰り道。つい先ほどまでは直斗も一緒にいたのだが、用事があるとかで途中で別れ、そこから先は珍しく由香と二人きりでの帰り道となっていた。

「優希くん、どう思う？」

「どう、ってのはどういう意味だ？」

「上手くいくかなって」

「どうだろうな」

わかるはずがない。

ただ俺が知る限り直斗に付き合ってる彼女はいないし、可能性はあると思う。

「そうだよね……わからないよね」

ふと気付くと、由香は何だか少し考え込むような表情だった。

「どうした？」

「うっん。ただ、ふと、思ったの」

由香は頭を小さく横に振って、言った。

「恋人同士になる人って、最初から決まっていればいいのにな、って。自分が好きになる相手は絶対に自分のことも好きになるの。その人しか好きにならないの」

「は？ なんだそりゃ？」

俺が怪訝な顔をしてそう聞き返すと、由香も頓狂なことを言っている自覚があつたのか、ちよつと照れくさそうに笑って、

「そうしたらね、例えば“片思い”なんてすることはなくなるし、親友同士で同じ人を好きになったりすることもないでしょ？」

「そりゃそうだが」

俺はちよつと呆れた顔をして、

「それって逆に恋愛の醍醐味みたいなものがなくなるんじゃないのか？ よくわからんが、お前の好きな恋愛小説もこの世から消えちまうぞ、きつと」

そう言うと、由香は少し慌てたように頬を赤くして、

「れ、恋愛小説なんて最近読んでないよう……」

「もう止めたのか。お前の部屋の本棚にそんな本が大量にあるって聞いてたが」

由香は俯き加減に小さく呟いた。

「……少しだけ」

「読んでんじゃねーか」

別に恥ずかしがることでもないと思うのだが。

照れくさそうな、はにかんだ笑みを浮かべながら由香は言った。

「でも、優希くんには関係ないよね、きっと。片思いなんて、したことないでしょ？」

「失敬な」

こいつは俺のことを感情の無いカカシか何かだと思っているのだろうか。

「俺だって片思いぐらいしたことあるぞ」

「ほんと？」

由香は本気でビックリした顔をする。

「それって……どんな人か、聞いてもいい？」

「幼稚園の先生」

「……あ」

苦笑された。

なんだかものすごく馬鹿にされた気分だった。

俺は無然としてみせて、

「何だよ。お前、俺の初恋を馬鹿にする気か？」

由香はハツとした顔で、

「あ、ご、ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんだけど……」
消え入りそうな声で俯く。

俺はすぐに、

「冗談だって。……つか、そういうお前はとうなんだ？ 何だか経
験したみたいない方だけど」

「うん……あるよ」

由香はあっさりと言った。

「ふーん。それって片思いか？ それとも親友同士で同じ人を、つ
てやつか？」

「……両方、かな？」

「へえ。ぜんぜん気付かなかったな」

俺は内心ちよつとだけ驚いていた。が、考えてみればこいつも高
校一年生。恋の一つや二つを知っていてもおかしくはない。

「優希くん、そういうの鈍感そうだもん」

「……………」

悔しいが、実際に気付いていないのでは言い返せなかった。

(しっかし、こいつが片思い、ねえ……………)

確かに、性格的にはいかにも言い出せなくてずっと片思いを続けていそうな感じではある。この手の女が好きなら男ってのはそこそこいそうなもののだが、やはりちょっと地味な感じが良くないのかもしれない。

「で？ それは結局どうなったんだ？」

「え？」

由香が不思議そうな顔をする。

「だから、振られたとか上手くいったとか、その友達のほうに取られちゃったとか」

まあ、こうして俺や直斗と毎日登下校をしているぐらいだから、上手くいって実はもう付き合っているとかが、そういう可能性は低いのだろう。

由香は少し考えて、

「まだわかんない……………かな」

「ってことは、現在進行形か？」

「うん」

「ふーん」

思わず、クラスメイトの男どもの顔を思い浮かべてしまった。由香は男子とあまり接点が多くないし、仲が良い男子なんて俺と直斗あとはせいぜい将太ぐらいのもの。

色々考えてみたが、それらしき相手は思い当たらなかった。

「で、お前の友達とどっちが優勢なの？」

言いながら、今度は由香と仲が良い女子の顔を頭に思い浮かべてみる。

これは候補がかなり多い。

が、その中でも特に仲が良いといえば藍原のヤツか。あるいは

(……………雪？ まさかな……………)

確かに、由香にとってあいつは未だに一番の親友であるといえなくもない。

けど いや。

妹の恋愛事情なんぞ、考えてもなんの得にもならん。考えるのをやめた。

すると、少し考え込んでいた由香が言った。

「……たぶん、私のほう、かな？」

「あ、お前のほうが優勢なの？」

ちよつと拍子抜けする。こいつのことだから、また自分を過小評価して相手が有利とかなんとか言い出しそうな気がしていた。

「周りの人から見たらね。きっと私のほうが有利に見えると思う」

「ふーん」

こいつも見た目はたぶん標準よりは上だろうから、ライバルは容姿的にあまり恵まれてないのかもしれない。

と。

「……あはは」

そこで由香は照れたように笑った。

「優希くんとこんな話するのって、何だか変な感じだね」

「そうか？ 高校生ならそんな話をしたって何もおかしくないと思っけどな」

「うん。そうなんだけど……でも優希くんとするのは、やっぱり何か変な感じがするかな」

由香はやはり照れくさそうだ。

俺はそんなにも恋愛に縁がなさそうな人間に見えるのだろうか。

(……まあ、実際ないわけだが)
空しい。

由香のヤツもなんだか変な雰囲気だし、この話題はそろそろやめるとしよう。

と。

俺はふと思いついて、立ち止まった。

「俺、ちよつと寄り道していくわ」

不思議そうに由香が振り返る。

「え、優希くんも？」

「いや、ちよつとヤボ用」

「そっか」

由香は頷いて、

「じゃあ、また明日ね」

「おう」

そんな彼女の後姿を見送って、俺は普段の帰り道を逸れて歩き始めた。

足を向けたのは北西の方角。

この町唯一の神社がある方向だった。

-
-
-
-

山の麓の神社。

この町唯一の神社はそんな呼び方をされることもあるが、町から見ると神社自体はかなり高い場所にある。そこに辿りつくまでの唯一の道である階段は間違いなく二百段以上あり、初詣などのイベントがない限りその階段を登ろうという酔狂な人間はそれほど多くはない。

普段から人気がないことも納得の場所である。

「……珍しいな。誰か来たようだ」

そんな神社の境内にいた楓は、その長い階段を登ってくる人間の気配を真っ先に感じ取り、目の前にいた沙夜に対して酔狂な来訪者の存在を告げた。

その言葉を向けられた沙夜はいつものように竹箒を携え、いつものように無感情な視線を無言のままに楓へと向ける。

「誰が来たのかは知らんが」

呟くようにそう言った楓の言葉は、その内容が嘘であることを自ら告白しているかのように芝居がかった口調だった。

「顔を見られるのは都合が良くない。俺はそろそろ退散するかな」

「……」

沙夜は何も言わずにじっと楓の顔を見つめている。

それに気付いた楓が問いかける。

「なんだ？ 何か言いたそうだな」

「先日のことです」

「“先日”？ お前にしては曖昧な物言いじゃないか」

沙夜は間髪いれず、

「今井明日香さんの一件、どうしてあそこまで幻魔を放置したのですか？ 楓さんはあの幻魔が誰と接触していたか気付いていたはずです」

「違うな、沙夜」

楓はポケットに手を突っ込んだまま、小馬鹿にしたような薄い笑みを口元に浮かべて、

「はず、じゃない。気付いていたさ。妹を監視していて、兄の周りをつろちよろしている小ネズミの存在に気付かないわけがないだろうっ？」

「……」

「優希のヤツを試した。今後使えるかどうかをな」

「……」

「賛同できない、って顔だな？」

沙夜は少しだけ視線を横に流した。

「不知火さんのことは、楓さんほどには知りません。下級炎魔だという話もあれば、上級炎魔に匹敵する力を見せたとの話も聞きます」
「そうだな。俺も本当のところまでは知らん。だからお前が知らな

いのは当然だ」

「……」

無言の沙夜に、楓はチラッと神社の奥に視線をやった。

「俺が優希のヤツと結託して何か企むかもしれないな。ついでに上級氷魔の雪もいれば、これはもう無視できない戦力だ」

「……そう考える人は、決して少なくはないです」

「まあ、わかった。せいぜい企みがバレないように注意するさ」

背を向けて軽く手を上げた楓は、階段のほうには向かわずに神社を囲む森林の中へと消えていった。

「……」

沙夜は無言のままその背中を見送って、視線を横　階段へと向ける。

そこを登ってくる者の気配は、すでに彼女にも感じられていた。

- - - - -

長い。

とにかく長い。

(こんな長かったっけか、この階段)

この神社を訪れたことは初めてじゃない。ただ、初詣なんかのときは周りに人がそれなりにいるから、こんなにも長くは感じなかったものだ。

半分ほど登ったところで一息つく。

太陽はまだ沈んでいないが、階段の表面に伸びる影はかなり長くなっていった。額にはうっすらと汗が滲んでいる。この暑さも階段を長く感じる一因だろう。

上を見る。

階段の入り口付近は僅かにカーブしていたが、ここから先はほぼ真っ直ぐだ。その頂点には鳥居が見える。

神村さんはほぼ毎日この階段を上り下りしているわけだ。

(やっぱり階段登るときもあんな涼しい顔をしてんのかな……)

なんて、どうでもいいことを考えながら俺は再び階段を登り始めた。

もちろん、ここに来たのは神村さんに会うためだ。

……会えるだろうか。

ここの神社の娘だという話は知っていたが、事前にアポなど取っていない。そもそも電話番号を知らないから、直接来る以外に連絡を取る方法がなかった。家族構成も知らない。神社ってことは父親は神主なのだろうか。しかしこの神社で神主らしき人間の姿を見た記憶がない。

結局のところ、俺は神村さんのことを何も知らないのである。

ふう、ふうと息を吐きながら階段を一段ずつ上がっていく。上を見ると気が遠くなりそうだったので、階段に張り付いた自分の影を見つめながら登ることにした。

一步、一步。

小休止してから、だいぶ登った。

……もう、そろそろだろうか。

そう思って、上を見上げると

「……うわっ！」

いきなり眼前に女の子の顔があって、俺は思いつきりのけぞりそうになってしまった。

「か、神村さん？」

「はい」

階段の終着点まで、あと二段。その終着点に立っていたのは神村さんだった。学校の制服ではなく、神社の巫女のような服装。両手で竹箒を携えている。俺にとっては見慣れない格好だったが、彼女

の表情は学校でも良く見慣れた無表情だった。

「何か用ですか？」

「え。ああ、いや」

会えるかどうかを心配していたところにいきなり本人が現れたものだから、俺は一瞬だけ言葉が継げなくなってしまうた。

「あー……」

とにかく、何か言わなくては。とはいえ相手はあの神村さんだし、適切な言葉を選ぶ必要がある。下手なことを言ったりすればそこで会話は打ち切り終了、先生の次回作に御期待ください、的な展開にもなりかねない。

そこで俺が選択した言葉は

「い、いい天気だな」

「そうですね」

「……」

「……」

会話、終了。

「あー……」

どうにか言葉を続けようとして、俺は自分がまだ階段の途中であることに気付く。

「登っても、いいか？」

そう聞くと、神村さんはピクリとも表情を動かさず、抑揚のない口調で、

「どうぞ」

と、言った。

神村さんを避けるようにして階段を登りきり、一息。辺りを見回す。

何の変哲もない境内だった。正面には社殿らしき建物と賽銭箱。

上には大きな鈴がぶら下がっている。そこに続く道の途中には手水舎があり、反対側には社務所と思しき建物。周りは森林に囲まれている。俺の古い記憶にあるものと大差はない。少しだけ狭く感じた

のは、俺の体が当時より大きくなったからだろうか。

一通り眺めてから、俺は階段のところ立っただまの神村さんを振り返って、

「水、飲めるとこないか？」

ずつずつしくもそう尋ねた。

「……」

神村さんは無言のまま背中を向けた。

怒ったのかと思ったが、向かった先が社務所であるところを見ると、おそらく“ついてこい”ということなのだろう。

社務所に入った神村さんはコップに水を汲んできてくれた。

一息に飲み干してようやく生き返った気がする。

「サンキュ。助かったよ」

コップを返すと、受け取った神村さんはもう一度、

「何か用ですか？」

と、言った。

水を飲んだことで少し心に余裕ができていた俺は、少し冗談めかして言った。

「用がなかったら来ちゃいけないか？」

「はい」

即答。

これは地味にへこむ。

「……まあ用がないわけじゃないんだが」

来ると決めたのはただの思い付きだったが、話をしたいと思っていたのはかなり前からだ。

俺は言った。

「この前は神村さんのおかげで助かった。サンキュな」

「なんのことですか？」

「助けに来てくれただろ。学校で」

そう言つと神村さんは淡々とした口調で答えた。

「それならお礼を言われる筋合いではありません。もともと私たち

の仕事ですから」

「そうなのか？ 俺は神村さんたちの……“組織”だったけ？ 何が目的なのかよく知らないからな」

「……」

神村さんは黙ってこつちを見つめている。無表情なのに思ったほど冷たい印象がないのはもともと穏やかな顔立ちをしているからだろうか。

俺は言った。

「ま、それでもあいつは俺の友達の命を狙っていたんだからな。礼を言う筋はあるだろ」

だが、神村さんは答えた。

「ありません。あの幻魔はもともと私たちが拘束していた悪魔です。逃亡したのは私たちの責任です」

頑なにそう言うので俺は少しムキになって、

「だからそんなこと関係ないんだって。あいつを逃がしていたら直斗がまた危険な目に合っていたかもしれないんだ。神村さんのおかげでそれを阻止できた。だから礼を言ったただけだ」

「必要ありません」

「いいだろ別に。礼ぐらい言わせてくれよ」

「嫌です」

強情だ。

「意地張るとこじゃないだろーが」

「意地を張っているのは不知火さんです」

「……」

「……」

睨み合う。いや、険しい表情をしているのは俺のほうだけで神村さんは相変わらず人形のように無表情だ。

そうして、三十秒ほど。

埒が明かない。

結局、俺はため息をついて、

「……わかった。そこまで言うのなら」
仕方なくそう言つて、一呼吸。

「意地でも礼を言わせてもらうぞ、このやろう!」

「……」
その一瞬、初めて神村さんの表情が動いた。

俺はそんな神村さんに対し、体を腰からほぼ正確に四十五度曲げて、

「ありがとーございましたッ!」

半ばヤケクソ気味にそう叫んだ。

周りに誰かいたら間違ひなく注目を浴びていたところだったが、幸いここは人気のない神社の境内である。

「……」

俺はバネのように体を元に戻すと、

「どうだ! 拒否できるものならしてみやがれ!」

やはりヤケクソ気味にそう言った。

「……」

神村さんは少し驚いたようだった。ほんの僅かにはあるが目を大きく見開いている。

やがて、

「……変わった人です。不知火さんは」
そう言った。

その言葉はどこか諦めたような口調だったが、意地の張り合いにはどうやら勝利したらしい。

「……まあ、さっきの俺の言葉が“お礼”の言葉として適切だったかどうかは甚だ疑問ではあるが。」

「お話はそれだけですか?」

「ん? ああ、いや」

むしろここに来た理由はこれから本番だった。

「悪魔狩りのこと、色々と教えてもらいたくて来た。俺もどうやら無関係とは思えない立場のようだしな」

「俺がそう言つと、

「……」

いいとも悪いとも言わず、神村さんは黙って俺を見つめてきた。何を考えているのかは読めない。

俺は気にせずに言葉を続けることにした。

「神村さんは悪魔狩りとかいう組織の一員なのか？」

「はい」

神村さんは間髪入れずにそう答えた。

どうやら俺の質問は受け付けてくれるらしい。

俺はホツとしながら続けて尋ねた。

「楓は？」

「楓さんは関係者です」

微妙な言い回しだ。

「神村さんはどうして悪魔狩りになったんだ？ いつから？」

「答えられません」

そこで初めて拒否された。

やはりなんでも答えてくれるわけではないようだ。

俺は雪の事件を思い出しながらさらに尋ねた。

「神村さんは俺や雪のことをどう思っている？ 敵か、味方か？」

「私たちの敵は人に危害を及ぼす悪魔です。敵か味方かは私が決めることではないです」

「……」

「じゃあ俺たちは神村さんの敵じゃないな」

「……」

神村さんは何も言わなかった。

何を考えているのかはやはり読めない。ただ、俺たちが彼女から無条件に信用されているわけではない、ということだけはわかった。

俺は少し矛先を変えて、

「楓のヤツは、人間じゃないようだが」

「答えられません」

「楓は神村さんの味方か？ それとも敵か？」

「……」

それまで即答していた神村さんが一瞬だけ言葉に詰まる。

そして、

「楓さんは、私の味方です」

と、答えた。

「……なるほど」

少しだけ人間味を感じる回答。それが楓に向けられたものであるというところが個人的には納得できないのだが、彼女の信頼を得ることが不可能でないとわかっただけでも収穫としておこつか。

「悪魔狩りつてのは全国どこにでもいるのか？ 外国とかにも？」

「答えられません」

「俺みたいな悪魔が悪魔狩りをやってるってパターンは？」

「答えられません」

「普通の人間は悪魔とか悪魔狩りとかの存在は知らないと思うが……神村さんたちの組織つてのは国とか警察とか、そういうところにも繋がりがあつたりするの？」

「答えられません」

なるほど。

組織に関することは軒並み答えられない、ということらしい。

俺はさらに矛先を変えることにした。

「じゃあアレは？ 神村さんも使ってただろ、あの変な…… 空気が重くなる感じの」

「音と光、一定量の物理的、魔力的な力を遮断する結果です。悪魔狩りが任務を行うときは必ず使用します」

その回答は俺が想像していたとおりだった。そういうものでもなければ、一般人に気付かれずに任務を遂行することなどほぼ不可能だ。

さらに言えば、それがあつたとしても完全に隠し通すことは不可能なはずで、そこから推測するに、悪魔狩りは一般世界の権力者、つまりは国家の組織ともある程度協力関係にあるはずだと想像でき

る。

あるいは、悪魔狩りそのものが国の機関の一部なのかもしれない。……そう考えると、それに喧嘩を売ろうとしたのは我ながら背筋が寒くなる話だ。

さて。

「……………」

神村さんは次の質問を待っているのか、微動だにせず俺を見つめている。

（こんなところか？）

パツと思いつくことはだいたい聞けた。悪魔狩りのことで聞いたことは他にもいくつあったが、神村さんからこれ以上のことを聞くのは難しそうだ。

とりあえず。

今のところわかったことを推測も含めて簡単にまとめてみるとこんな感じか。

- 一・悪魔狩りの目的は、基本的には人に危害を加える悪魔を退治することである。
- 二・ただし、それ以外の悪魔の命を狙う連中もどうやら存在する。
- 三・神村さんはおそらく項目二には該当しない。
- 四・楓は悪魔狩りの一員ではないが、神村さんとは協力関係にある。

五・神村さんはツンデレだ。

「意味がわかりません」

「……………」心の呟きに突っ込むとは。神村さんもエスパーだったか」

「不知火さんが口に出していただけです」

神村さんは目を閉じて、淡々と言った。

「変な人です。不知火さんは」

「……………」

“変わった人”と“変な人”は、使っている漢字が同じなのにどうしてこうも受ける印象が違うのだろう。前者は場合によっては誉め

られているようにも取れるが、後者は言われてもちっとも嬉しくない。

「ま、いいや」

見ると、太陽も半分沈みかけている。

思ったよりも長居してしまったようだ。

「助かったよ。楓のヤツは何も話してくれないもんでさ」

「……」

神村さんは何も言わない。

何を考えているのか、俺には推測することも難しかった。

そのうち、わかるようになるのだろうか。

……自信はない。

「んじゃ、また明日学校で」

軽く手を上げて背を向ける。

……と。

「不知火さん」

「ん？」

振り返ると、神村さんはその場から動かず、変わらぬ淡々とした

口調のまま言った。

「組織から逃げた悪魔は、あと三名います」

「え？ ああ……」

少し考えて、神村さんの言わんとしていることがわかった。

……雪の一件、明日香の一件。どちらも組織から逃げた悪魔が起こした事件で、かつどちらも俺の周りに関わりのある事件だった。

それはつまり、残る三人の悪魔もそうなる可能性がある、ということになる。

「サンキュ、神村さん」

「お礼を言われる筋合いではありません」

「言ったもん勝ちだ」

軽く笑いながらそう返すと、神村さんは少し戸惑ったようだった。

1年目7月その3

この日、突然隕石が俺たちの町に落下した。

それは宇宙を漂う無数の隕石の中で見ればごくごく小さなサイズの隕石であったが、とてつもないスピードで地表に落下すると、そこから生じた衝撃波は俺たちの町を一瞬で粉々に吹き飛ばしてしまった。

その被害は俺たちの学校にも例外なく訪れて

「それで？」

「いや、そうならばいいなあ、と思っただけ」

隣の直斗にそう返して、俺は正面の掲示板を見つめた。

七月中旬。夏休みを間近に控えたこの時期、俺たち高校生には夏休み前の最大の難関ともいうべきイベントが訪れる。

“期末試験”である。

この風見学園ではすべてのテストの成績 順位、総合得点、優等生、劣等性の区別なく一階の掲示板に貼り出され衆目に晒される。晒されるのが総合得点であり、とある科目における俺の壊滅的な点数が公表されないのはまだマシであったが、それでもまあ、俺のようなお世辞にも成績優秀とはいえず、かといって学校のテストなんてどうでもいいというほど割り切ってもいない生徒にとって、この結果発表というのは歓迎できない呪いのイベント以外の何物でもないのであった。

「あーあ。町は吹き飛ばなくてもいいから、学校のテストぐらい燃えてくんねえかなあ」

「自然災害にそんな器用なこと求めても……」

と、直斗は苦笑する。

さて。

今まさに、俺の目の前の掲示板にはその結果が貼り出されている。

こいつが貼り出されるのがだいたい一時間目の最中、つまりその後の休み時間から見ることができののだが、その時間は全校生徒が集まってかなり混雑するため、俺と直斗が見に来たのは昼休みになつてからのことだった。

一年の生徒数は四十人のクラスが五つで二百名。何らかの理由でテストを受けていないヤツがいるらしく、今回の期末試験での最下位は百九十八番だった。

とりあえず最下位のそいつは知らない名前だ。

視線を一番上へと向ける。

最初に目についた名前はやはり直斗のものだった。

十九位。

この風見学園はエスカレーター式であることの影響か、上位と下位の生徒の学力差が大きい。上位には近隣の進学校の上位陣を上回る生徒が固まっている反面、下位には大学進学はおろか、卒業すら危うい生徒たちがそれなりにいる。

そんな中での十九位はかなり優秀だ。しかも、これでもいつもの順位に比べるとちょっと低いぐらいで、いずれにしても俺のような一般人からしてみれば雲の上の成績である。

視線を少し下のほうにずらす。

次に目に付いたのは由香だった。

六十一位。

うちの学年はだいたい二十位と五十位付近に超えがたい壁が存在しているらしく、直斗のいる辺りからすると二ランクぐらい下の成績ではあるものの、全体から見れば十分に好成績であるといえるだろう。

次に意外な人物の名前が目に飛び込んできた。

「うえ。藍原のやつ、九十三位かよ」

俺は思わず驚きの声をあげる。

あいつが九十三位ということは、アレよりも下が百人、つまりは半数以上いるってことだ。当然俺もその中に入っているわけで、な

んというか、こう……納得できない。

「藍原さんは中間試験もそのくらいだったよ。実際、普段からちゃんと勉強してるしね。優希と違って宿題もやってくるし」

「くっ……」

確かにそうなのだが。

納得できん。

と。

ここでようやく俺の名前があった。

百七位。

意外に上のほうだなと思ったなら、それは正解だ。今回はヤマが当たっていつもより順位が上がっている。いつもはこの二割増しぐらいの順位だ。

最後に将太は いや、これは本人の名誉のために伏せておくことにしようか。とりあえず俺よりも下で、十の位が五より大きいことだけは確かである。

「……あれ？」

と。

今回はもう1人、その近辺の順位で目に付いた名前があった。

神村さん、百四十八位。

「意外に成績悪いんだな、神村さん」

これこそ俺の勝手な想像でしかないのだが、てっきり優等生の類なのかと思っていた。

「神村さん？ 家のお手伝いとか忙しいみたいだし、あまり勉強する時間がないみたい。家に帰ってからとか、休みの日もほとんど手伝いしてるみたいだしね」

と、直斗は言った。

家の手伝いというのはつまり、先日の事件のときのような、ああいう類のものだろうか。そう考えると勉強する暇がないというのも頷ける話ではある。

そうそう。先日の事件で思い出したが、竜二のヤツは四十九番だ

った。ああ見えてなかなか勉強のできるやつなのである。

「お、谷のやつは百四十九位だな。あいつ、将太だけには負けねえって気合入れてたからなあ」

その後も俺は知り合いの名前（軒並み真ん中より下の連中ばかりで、今回に関して言えばほとんどが俺より下である）を探しては、明日はわが身とわかっていながら馬鹿にして笑っていたのだが。

ふと。

「……五百？」

俺のような人間には永遠に縁のない領域、つまりは最上位の面々に視線を移して、そして俺は思わずそんな呟きを漏らしていた。

「え？ なに？」

直斗も俺の視線を追ってきて、ああ、と呟くと、

「神崎さんだね。すごいよね、満点なんて」

「え、なに？ お前、こいつのこと知ってるの？」

指差したその先には“神崎歩”という名前が書かれていた。

「優希、知らないの？ 神崎さんはこの学校始まって以来の天才だって、有名じゃない」

「知らん。どこから来たやつだ？ ここの中等部じゃないよな？」
いくら俺でも、そんな天才と中等部三年間一緒にいれば知らないなんてことはない（と思う）。

「うん、違うよ。確か」

直斗は少し考えて、

「どこだか忘れたけど、隣の何とかって小学校から来たって言うてたかな」

「ふーん、隣町か」

それなら知らなくても仕方ない。

「うん、隣町」

「隣の……隣の、なんだって？」

「小学校」

「小学校？」

危うく聞き逃すところだった。

「うん。飛び級なんだって」

直斗はさらっととんでもないことを言った。

「おい、待てよ。中学校飛ばして高校に入るなんて、そんなことってあるのか？」

「普通はないみたいだけど特例中の特例らしいよ。小学校六年のときに超難関の大学入試問題で満点取ったらしいしね」

「小学生が大学入試で満点!？」

あまりのとんでもなさにも、俺は思わずため息を吐いてしまった。

「どうやらほんまもんの“天才少年”というやつらしい。」

「……ついにこの学園にも地球外生命体がやってきたわけか」

俺がそう言うと、直斗はちよつと考えながら、

「そんなことないよ。普通の子だよ。年相応のね」

「年相応、ねえ」

小学校から飛び級してきたことは十二歳か十三歳。普通なら中学一年生で、数ヶ月前まではランドセルを背負っていたわけだ。

年相応のその少年が平気な顔で大学入試の問題をスラスラと解いていくところは、それはそれで恐ろしくはある。

「ってか。お前、そのこと随分と詳しそうだな？」

俺たちはその場を離れ、二階の教室へと足を向けた。

「うん。神崎さんとは遠い親戚だからね」

「遠い親戚？」

どこかで聞いたフレーズだ。

「お前、神村さんのときもそんなようなこと言ってなかったか？」

「うん。だから神村さんと神崎さんも親戚ってことになるのかな。」

どっちが近いのかわからないけど」

「ふーん」

神薙、神村、神崎……名字だけ並べてみると確かにどことなく親戚っぽい。

直斗はそんな俺の考えを見透かしたかのように、

「僕の家も神崎さんの家も、元々は神村さんみたいな神社の家系だったみたい」

「なるほどな」

それっぽい話だ。

そんな話をしながら教室へと戻ってくる。昼休みは三分の二ほどが過ぎて、ちょうど昼食に出ていた生徒たちが戻り始めたころだ。

そんな中、

「お、戻ってきた戻ってきた！」

教室の入り口をくぐろうとした俺たちを見つけるなり、その声を張り上げて歩み寄ってきた生徒がいる。

「おう。百八十二番目の男じゃないか」

「百八十二番目の男？ 何の話だ、そりゃあ」

と、将太は眉間に皺を寄せた。

この反応を見るに、どうやらこいつは結果発表すら見に行つてないらしい。

「で、何の用だ？ 金なら貸さんぞ？」

「言つてねえつての。だいたいもうメシは食い終わつてんだしよ。

……んなことより」

将太は俺の肩をポンポンと叩き、教室に入るよう促してきた。

「なんだ？」

ニヤニヤしていて気味が悪いことこの上ない。こいつがこういう態度のときは大抵ろくでもないことを企んでいるのだ。

そのまま俺が自分の席へと移動すると、後ろをくつついてきた将太は空いていた前の席へと腰を下ろして切り出した。

「同士よ。俺たちにとって最大の難関であった期末テストも終わり、あとは楽しい夏休みを待つだけとなったな」

「それがどうかしたか？」

“同士”という部分を否定したい気持ちをぐつとこらえてそう聞き返す。

ちょうど次の授業の準備を終えた直斗もこちらにやってきた。

「直斗も聞いてくれ。俺から提案があるんだ」

「提案？」

嫌な予感しかしない。

将太はすうつと一息。

そして、バン！ と机を叩いた。

「楽しい夏休みの計画、その名も“みんなで白い砂浜に二泊三日で行こうツアー”の提案だ！！」

「……」

「……」

俺と直斗は顔を見合わせた。

そんな俺たちの反応を勘違いしたのか、将太が得意げに説明を始める。

「あまりに魅力的な提案に声も出ないか。そうだろうさうだろう。

実はなあ。俺の親戚が海のそばで旅館をやつてな。格安で泊めてくれるつてことですでに話を通してある。ああ、いや、礼はいらんぞ、礼は。俺はただみんなに楽しい夏休みを過ごして欲しいだけ。ただそれだけなんだからな」

一気にまくしたてる将太に、俺は右手を上げて発言した。

「海で、しかも泊まり？ 遊びに行くならカラオケでもゲーセンでもいいんじゃないか？」

「愚か者！」

ずいっと将太の顔がどアップで迫ってくる。

「夏といえば海と相場が決まっているのだ！ 海といえば砂浜！

そして砂浜といえば可愛い女の子の水着ではないか！」

「……ああ」

将太の口から熱く語られたその内容は、悲しいほどに予想通りだった。

(どうすっかなあ)

泊まり、しかも二泊三日つてことで少々面倒くさくはある。が、その提案自体は魅力的でもあった。泳ぎは得意なほうだし、水着の

可愛い女の子に興味がないわけでもない。

が

一つ、懸念事項があった。

俺は質問した。

「行くのはいいが、メンバーは決まってるのか？」

将太のことだ。この三人だけ、ということはないだろう。この三人で海水浴場にいったところで一緒に遊んでくれる女の子が見つかるとは限らないし、それならば最初から誰か誘って連れて行ったほうが確実である。

すると案の定、

「この三人は決定な。けど、男だけで海ってのは寂しすぎるよなあ？　せつかく海に、しかも二泊三日で行けるっていうのによあ。そこで俺は考えた。これから俺たちで女の子を誘えばいいのだと！」

「で？」

そこまでは予想通りで聞くまでもない。

問題はその先だ。

将太は言った。

「お前と直斗で二人、あるいは三人誘ってくれ」

「三人？　誰のことだ？」

「由香ちゃんと雪ちゃん。んで、できれば　牧原さんっていったっけ、お前の従姉」

「断る」

「なに！？　なんでだよ！」

嫌な予感があっさりと的中してしまったようだ。

「なんでって、俺にメリットがなさすぎる」

「だから彼女たちの水着が　」

「興味ない。お前が誘ってお前だけ行ってくれ。せめてもの情けだ。邪魔はしないでおいてやる」

「そんなあ」

将太は急に情けない顔になって、俺の袖を掴んだ。

「無茶言つなよ。俺が誘つたつて来るわけねえだろうがよ。」

「だったら諦める!」

「優希い〜」

「だあああ! 袖を離せ! 暑苦しいからくつつくな!」

ぶんぶんと腕を振り解いて、シツシツと手を振る。

だが、将太は諦めず、

「わかつたわかつた! じゃあ俺も女の子を一人誘つて連れてくる

! それならどうだ!？」

「……」

ピタ、と、追っ払おうとした手を止める。

そして、

「……ふーん」

こう見えて、将太は女友達が少ない。その将太が連れてくる女の子、という辺りに少しだけ興味を引かれた。それに俺が雪（瑞希）を、直斗が由香を、将太がもう一人を、つて形であれば不平等もない。

「本当に連れてくるんだな？」

「男に二言はない!」

ドン、と胸を叩いて、将太は少し咳き込んだ。

なら、と俺は頷いた。

「けど一応誘つてみるだけだ。来なくても責任取らないからな」

「それで問題ないぜ! 由香ちゃんと雪ちゃんは来るに決まってるしな!」

「えらい自信だな」

「それだけ、お前ら二人を信頼してるってことさ!」

わけのわからないことを言いながら、将太は嬉々として自分の席へと戻っていった。メモ帳を取り出したところを見ると、これから綿密なスケジュールでも組み立てるのだろうか。マメなヤツだ。そういうことに労を惜しまないところは、あいつの唯一誉められるところかもしれない。

「行くことにしたんだ？」

と、いまさら直斗が発言した。左手にはいつの間にか文庫本がある。途中から聞いていなかったらしい。

俺は頷いて、

「最初から断る気なかつたけどな。たまにはいいだろ」

「だったらすぐに行くって言ってあげればいいのに」

「あいつにも苦労してもらわねーと」

「優希は何も苦労しないじゃない。行くぞーって言うだけでしょ？」

「んなことないぞ」

相手が雪だけならそうかもしれないが、瑞希のヤツを誘わなきゃならないというのは俺の精神にとってかなりの負担だ。

まあ実際には、雪から声をかけてもらっただけなのだが。

(しかし、海か。久しぶりだなー)
と。

なんだかんだ言いながら、俺の心はすぐに間近へと迫った夏休みへと飛んでしまったのだった。

-
-
-
-

ガサガサガサガサ！！

木の葉の隙間から差し込む僅かな月光。しんと静まり返った閑静な森林の中を一つの影が動いている。

その影はどこかに移動しようとするでもなく、ただある一点の周囲をしきりに動き回っているようだった。

「……………」

その一点には楓が立っていた。その上空だけ木の葉のカーテンが

ポカんと口を開けていて、真円の月が顔を覗かせている。

風が吹く。

次第に茂みを揺らす音が輻輳し始め、やがて影の居場所が掴めなくなる。

風。

それは一方から吹き付けるだけではなく、強さを増しながら、まるで意思を持っていているかのように楓の周囲を縦横無尽に吹き抜けるようになった。

「ふん……」

楓は動じることもなく正面を向いたまま、ただ視線だけを左右に動かしていた。

風が一段と強くなる。

枝葉同士が擦れ合い、不吉な音色を奏でる。

パン！

何かの破裂音が聞こえた。

と、同時に、楓の足元には鋭利な刃物で切りつけたような複数の跡が刻まれた。

さらに風が強くなる。

パン！ パン！

楓の周りで発生する破裂音、地面や周囲の樹木に刻まれる裂傷もその数をどんどん増やしていったが、楓自身の体には傷一つついていない。それどころか、強風が吹き荒れているにも関わらず、その金色の髪が風にたなびくことすらなかった。

目を凝らしてみると、楓の体の周りに薄っすらと黒い靄がかかっているのがわかる。強い風に混じって飛び、地面や樹木に傷をつけている“何か”は、その黒い靄と衝突して破裂音を発しているようだった。

そんな、一般人の目には何が起こっているのかわからないような攻防が五分ほども続いただろうか。

ついに、動きがあった。

まるで何の気配もなく、楓の背後の茂みから一つの影が飛び出てきたのだ。

男は右手に短めの鋭利な刃物を持っていた。刀身には呪文のような文様が刻まれ、微かに青白い光を帯びている。それが楓の首筋へと向けられていた。

が、

「ようやく出てきたか」

楓は口元に薄笑いを浮かべると、まるで男がそこから飛び出してくるのがわかっていたかのように、振り返りざま、刃物を持った男の右手首を掴んだ。

「っ!？」

男の手からナイフが落ちる。刀身が纏っていた青白い光は地面に到達する前に輝きを失った。

「下級風魔ごときが、正攻法で俺を殺せるつもりでいたのか？」

楓は伸ばした手で男の首を掴んだ。

「がッ……ぐぐぐ……ッ!!」

男が苦しそうなうめき声を上げる。両手で楓の手首を掴み引き剥がそうとしたが、その手はびくともしない。男の身長は楓よりもかなり大きく、比較的小柄な楓が片手で男を持ち上げている姿は、傍目に見てひどく異様な光景だった。

楓はさらに冷酷に口元を歪める。

「後悔するといい。お前の選択がどれだけ愚かしいものだったのかおとなしくやつらに捕まったままでいれば死なずに済んだかもしれないのにな」

男を締め上げる手が黒い光を放ち始める。

「ま、待て……」

その黒い光を見て青白い顔を恐怖に歪めたその男は、締められている喉を懸命に開いて苦しそうにそう言った。

「お、俺が悪かった。だから、殺さないでくれ……」

「殺さないでくれ？」

楓はフンと鼻を鳴らして、

「お前が殺してきた人間たちも、同じことを言わなかったか？」

「っ……」

楓が再び手に力を込めた。

男の顔がさらに大きく歪む。目を閉じ、死を覚悟する。

「だが、お前は運がいい」

「……？」

楓の手にこめられていた力が急に抜け、男の体が地面に落ちた。

男は地面に尻餅をついたまま、呆気に取られた顔で楓を見上げる。

楓はすでに男を見ていなかった。

その視線は自分の背後へと向けられていて、

「青刃。お前だろ、いいかげん出てきな」

木陰に向かってそう言い放つ。

そこに、急に気配が産まれた。

「おや、気付いていたか」

出てきたのは背の高い男だった。歳は二十代半ばほどだろうか。

少し日焼けしていて整った顔立ちをしているが、どこか軽薄そうな印象を受ける。格好は特徴的な黒ずくめで、ひと目で悪魔狩りであることがわかった。

「俺がこいつを殺さないかどうか見張ってたのか？」

楓は黒いジーンパンのポケットに手をつ込み、体半分だけ青刃のほうへ振り向けた。

青刃はその言葉に少し笑みを浮かべて、

「ま、そんなとこだ。その風魔はとつくに戦意を喪失しているよ
うだしな。光刃様は無駄な殺生がお嫌いであらせられる」

「ふん……」

楓はつまらなさそうに青刃を一瞥すると、

「後始末するんだろ。俺は帰るぜ。……それと紫喉のヤツに言っておけ。“偶然”俺の命を狙う悪魔ばかりが脱獄するような失敗は、
今回だけにしておけよ、ってな」

「偶然、ね。お前の態度次第じゃ、今後も“偶然”があってもおかしくないかもな」

「……………」
楓はその言葉には何も答えず、無言のまま青刃とすれ違うようにして森の中へと消えていった。

「……………無愛想なことだ」

そう呟いて楓を見送ると、青刃は地面に尻餅をついたままの下級風魔を見下ろして、

「さて、と。んじゃ、お前には脱走した残る二人の仲間について知ってることを語ってもらおうとするか。なあ？」

少しだけ冷たい印象の笑みを浮かべて、そう言った。

そこから、少し離れた場所。

「……………あれが、楓か」

二人の男が楓と風魔の戦いぶりをずっと眺めていた。

片方は縁なしの眼鏡をかけた背の高い男。もう片方は短髪で背の低い男。どちらも歳は二十歳前後だろうか。服装は一般人と変わらずまるで大学生のような出で立ちだが、赤い瞳と尖った大きな耳が、彼らが悪魔、おそらくは夜魔であることを主張していた。

「あれは力押しじゃ厳しいかもしれないな」

独り言のようにそう呟いたのは眼鏡をかけた背の高い夜魔のほうだ。

「そうか？ たかが下級風魔だろ？」

短髪の背の低い夜魔が疑問を投げかける。

「いや。下級とはいえアイツは戦い慣れしていて、力も強いほうだった。それがああも赤子の手をひねるようにやられるなら」

「上級悪魔でもない相手にならないってことか？」

短髪男の問いに、眼鏡の男は少し考えると、

「あいつが上級風魔だったとしても 結果は同じかもしれないな」

「……」

「とにかく、少し考えよう。どちらにしても俺たちには、アイツをやるしか道は残されていない」

「……ああ、そうだな」

そうして二人の夜魔は、夜闇に溶け込むようにその場から姿を消した。

1年目7月その4

桜花女子学園はこの近辺では唯一の女子高である。

いわゆるお嬢様学校というほどではないが、本物のお嬢様が通って支障がないほどの施設を備えている、という触れ込みで、実際に有名企業の社長令嬢なんかが通っている話も耳にする。生徒数は三百名弱。俺たちの通う風見学園の半分程度だが、学校の敷地の広さは同程度。学費についても二、三割増しで、普通科しか存在しないものの進学コースと就職コースがあり、そのどちらでも優秀な進学率、就職率を誇る、近隣でも随一の優良私立高校だ。

なお、俺たちが通う風見学園とは創設者が同じだか親戚だかのいわゆる兄弟校であり、十一月の文化祭は毎年両学園が合同で開催するなど、相互交流もある。普段、男子生徒がこの桜花女子学園の中に入ったたり、その女生徒と交流するなんてことはそうそうないだけに、その文化祭はかなり盛り上がる、らしい。

そんな文化祭の開催はまだ三ヶ月以上も先の話なので置いとくとして

俺は今、その桜花女子学園にいた。

ここに来るのは初めてではない。知つてのとおり、以前にも雪を迎えに校門前まで来たことがある。

ただし、中に入ったことはない。

校門には守衛がいて、用事がないものはもちろん門前払いだし、俺のように生徒の家族であっても家族である証明書を守衛に見せて基本的には中の生徒を呼び出してもらうことになる。中に入ることはできない。

しかし。

俺は今、何故かその桜花女子学園の“中”にいた。

周りは女の子しかない。

正真正銘の、紅一点ならぬ“黒一点”といったところか。

「……………で？ あんた、なんでここにいるわけ？」

そんな瑞希の問いかけに、俺は疲れた顔で、

「それはこっちが聞きたい……………」

そう答えるのが精一杯だったのであった。

こんなことになってしまった事の発端は、約一時間ほど前に遡る。

「あち……………」

いよいよ夏本番。あまりの暑さに寝苦しくて目が覚めてからも何もする気が起きず、まどろみと覚醒を繰り返しながらようやくベッドから起き上がったのは、時計の針が間もなく正午を指そうとしている頃だった。

貴重な夏休みの日だが、まだ三日目なのでこの一日の有難みにもそれほどの実感がない。

さすがに腹が減ってきた。

だるい体を引きずるようにして部屋を出る。

湿気が多いせいだろうか、フローリングの上を歩くとペタペタと音がする。

玄関にあった安物のスリッパを履いて居間へと向かった。

「おはよ、優ちゃん」

居間に入ると、雪の声と一緒に全開の扇風機の音が俺を出迎えてくれた。

「おー」

居間のだ真ん中に設置してある二人がけソファの上で、雪は雑誌を読んでいる。薄いパステルカラーのブラウスに薄手の生地のカラダグスカート。この暑さにも関わらず長袖だった。

そんな妹の座るソファの脇を通り抜けて冷蔵庫に直行し、作ってあった麦茶をコップに注ぐ。

一息に飲み干して、ようやく頭がすっきりした。

何気なく移した視線の先、庭には三本のヒマワリが咲いている。

「夏だなあ」

「夏、だね」

もう一杯の麦茶をコップに注ぎ、ラップをかけてあったおにぎりを二つ手にとってリビングに戻ると、雪の向かいの一人がけソファへ座った。テーブルの上にあったテレビ雑誌を手に取ってひざの上で開く。おにぎりのラップを開けて、一口。

ぶおおおおお……ん。

部屋の中に響くのは扇風機の音だけだ。テレビもついていない。

「瑞希のやつは？」

聞くと、すぐに雪が返事をした。

「今日は夕方ぐらいまで部活だよ」

「ああ。合気道部だった？」

「うん。……あ、そうだ」

と、雪が雑誌から顔を上げてこっちを見る。

「ん？」

「ちょっとお願いがあるんだけど、いい？」

「サインなら後にしてくれ」

そう言つと、雪はちよつと首をかしげて、

「私のお気に入りの写真の裏でもいい、かな？」

「いや、冗談だから。突っ込み放棄とかないわあ」

俺がそう言つと、雪はクスクスと笑つて、

「こつちも冗談、だよ。……それでね」

と、そう言つて立ち上がると台所へ向かう。そして戻ってきたとき、雪の手には包みに入ったままの弁当箱があった。

「瑞希ちゃんにお弁当を届けてきて欲しいの。瑞希ちゃん、忘れていつちやって」

「弁当？ 瑞希の？」

俺はあからさまに嫌そうな顔をしてみせた。っていうか、嫌だ。

といつても、別にあいつに弁当を届けること自体が嫌なわけじゃない。あの学園に行くのが嫌なのだ。

……先日、雪を迎えに行つたときの気まずさは記憶に新しい。あの学園の前で男が待ちぼうけしていること自体、ある種の羞恥プレイなのである。まあ、実際に可愛い彼女でも迎えに行つてるならともかく、つてのは前にも言つたか。妹が従姉に変わったところで、俺の心境には何の変化も及ぼすことはできないだろう。

そこで俺は抵抗を試みる。

「別にいいじゃん。昼飯ぐらい抜いたつて死にゃあしないだろ」

素直に断るといふ選択肢もあるが、俺は雪の頼み事を上手く断れた試しがない。

雪はちよつと困つた顔をして、

「でも瑞希ちゃん、運動してるんだよ？」

「問題ない。ヤツにとつては部活動でやる程度の運動など、朝飯前のたくわんみたいなものだ」

「朝飯前のたくわん？」

雪が不思議そうに小首を傾げた。

「それつて、口がしょっぱくならないのかな？ ゴハンも欲しいよね？」

「いやいや。そこ、突つ込むところじゃねーから」

「そう？ 駄目、かな？」

「別に駄目じゃないが」

「じゃあ、はい」

「え？」

手渡された弁当箱と雪の顔を見比べる。

「あ、いや。今の駄目じゃないはそつちの駄目じゃないじゃなくて、すると雪は困つたような顔をして、

「どうしても駄目？」

微かに揺れる瞳をこちらに向けてくる。

「……」

ああ、いつものパターンだ。

断れ、という言葉が頭の中に浮かんでくる一方、それよりももっと深い胸の奥の根幹的な部分から“断ってはいけない”という気持ち急速に首をもたげてくる。

断じて言うが、俺はシスコンではない。

ではないのだが

「あー、もう。わかったよ」

一瞬の後にはそう答えている自分がいた。

結局のところ、俺は結構お人よしなのかもしれない。

「……用件は？」

「弁当を渡しに来ただけです」

校門の入り口にあるプレハブ小屋の中には守衛のおじさんがいた。守衛といってもガッチリした体格のガードマンではなく、元気の有り余っていきそうな初老の親父という雰囲気だ。

俺がどこからどう見ても他校の男子高校生という感じだからか。家族だといつてもなかなか信用してもらえず、証明書を出しても守衛は不審そうな目付きで俺を眺めながら渋々といった感じでようやく室内の受話器に手を伸ばした。

(……ったく、これだから)

俺はため息を吐きながら周囲に視線を移す。視界に最初に飛び込んできたのは、この町の景観には不似合いの十五階はあろうかという豪華なマンションだった。

この桜花女子学園の女子寮だ。

いつ見ても金がかかっていそうな、見事な建物である。

一ヶ月入るのにいくらぐらいするのだろうか、寮だからそれなりの値段なのか、あるいは金持ちしか入れないような金額なのか

なんて、そんなことを考えながら、再び校舎のほうへと視線を戻す。

守衛はまだ受話器を相手に格闘していた。内線の掛け方に慣れていないのか、時折首をかしげながら番号を何度もプッシュしている。「……」

もうここに着いてから二十分近く経っている。

俺はだんだん腹が立ってきて、

「あの」

と、守衛に声をかけようとした、そのときだった。

「あら？ あんた、何やってるのよ」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには瑞希が立っていた。

俺は守衛に言った。

「あの。本人が来たんでやっぱ呼び出さなくていいです」

「へ？」

守衛の呆けた声に背を向けて、俺は不審そうな顔の瑞希へと歩み寄る。

「何やってるの、じゃねえって。お前のせいでこのクソ暑いのに余計なストレスを溜めちまったじゃねえか」

「ストレス？ 何の話よ」

そう言って眉間に皺を寄せる瑞希は、合気道部のものなのか、道着姿だった。いつもオシャレな服ばかり着ているせいか、その姿は妙に違和感がある。

俺は言った。

「弁当だよ、弁当。お前、忘れていっただろ」

「え？ お弁当？」

「こいつだよ」

俺はそう言って家から持ってきた弁当箱を瑞希の目の前に差し出した。

「……差し出した、はずだったのだが。」

「あれ？」

右手にあったはずの弁当箱がいつの間にかなくなっている。

辺りをキョロキョロと見回し、さらにポケットの中まで探ってみ

たがもちろんそんなところに入るはずもなく。

俺はハツと気付いて瑞希を見た。

「おい、瑞希。お前、俺の弁当箱取ったな？」

「？」

「しらばっくれても俺にはお見通しだ。……いや、待てよ。その弁当はもともとお前のものだから　おお、そうかそうか。そういうことが」

俺はポンと手を打った。

「じゃあ、そういうことだ。弁当は間違いなく渡したぞ。後でもらってないと言っつなよ？」

「……」

「んじゃ」

「待ちなさい」

立ち去ろうとした肩を掴まれてしまう。

「……つまり」

振り返ると片手を腰に当てた瑞希が、哀れなものを見るような目で俺を見ていた。

「忘れたお弁当を届けに来たつもりが、そのお弁当を家に忘れてきたわけね？」

「……」

弁当箱を持って玄関に出た。

靴を履くため、弁当箱を下駄箱の上に置いた。

靴を履いた。

その後、弁当箱を手にした記憶がない。

深い、ため息。

「あんたって、ホント……」

「……気持ちだけ受け取ってくれ」

「……」

俺の顔を見る瑞希。

針のむしろにいるかのような、数秒間。

そんな彼女の口から、どのような罵声が吐き出されるのかと俺は身構えていたのだが、

「……ま、いいわ。元々は私が悪いんだし、その気持ちだけでもらっておくわね」

「？」

そのときの俺はさぞや間抜けな顔をしていたんじゃないだろうか。

今日は機嫌がいいのか。

学校で何か良いことがあったのかもしれない。

可能性としては。

- 一・部活で選手に選ばれた。
- 二・彼氏ができた。
- 三・彼女ができた。

俺としては三番が色々な意味で面白いと思うのだが、そんなことを口に出せば、今のこの友好的な空気が一瞬にして砕け散ることは間違いない。

「お弁当は帰ってから食べるわ。どうせあと二、三時間もすれば終わるしね」

そう言いながら、瑞希は校門から外に出ようとする。

「あ？ どこ行くんだ、お前」

「そのコンビニよ。さすがにお腹が減ったからパンでも買おうかと思って。あんたが来るなんて知らなかったしね」

そう言って、道路向かいのコンビニを指差す。

「金、持ってるのか？」

「なかったら貸してくれるの？」

「いや、貸せないけど」

と、俺はポケットがすっからかんであることをアピールしてみせた。

「……なんで聞いたのよ」

「道着のまままでコンビニに行くのか？」

俺はそう言いながら、信号待ちで止まっている瑞希の隣に並んだ。「わざわざ着替えないわよ。みんなそのまま行ってるわ。ウチの部だけじゃなく、柔道部とかも」

「剣道部もか？」

「……防具は外して来るわよ？ さすがに」
ボケの前振りを先に潰されてしまった。

「つか、柔道部に剣道部に合気道部って。女子ばかりで生徒数もそんなに多くないのやっていけるのか？」

「格闘系は結構盛んよ。空手部もあるし、部員だってそれなりにいるわ」

「……ここってお嬢様学校の皮を被った士官学校かなんかか」
瑞希はクスクスと笑って、

「ウチの部員もたまにそんなこと言ってるわね。でも、どこもそんな本格的にやってるわけではないわ。護身術という意味で人気があるだけよ」

信号が青になり、俺は瑞希と並んで歩き出す。

「お前のは護身術の域をとくに通り過ぎてる気がするが……」
言ってから失言だったかな、と思ったが、瑞希は特に気にした様子もなく、

「そう？ ま、私の場合は護身っていうより趣味に近いから。そうかもしれないわね」

「趣味、ねえ」

もっと女の子らしい趣味を持ってもらいたいものだ。

コンビニの自動ドアが開く。

特に用事もないのに、結局瑞希にくっついてきてしまった。

(……うお)

店内を見て一瞬怯む。混雑していた。ちょうど昼時で、店内には瑞希と同じ道着姿の女生徒だけでなく、テニス部やバスケット部らしき格好の生徒もいる。中には弓道部だろうか、袴姿の連中もいた。店

員を含めて全員が女性だ。まるで女性専用車両に紛れ込んでしまったような、そんな居心地の悪さがある。

(これは結構きつい……)

たまに冗談で“俺も女子高に行きてー!”なんて言う連中もいるが、あいつらはこんな空気の中で三年間を過ごす覚悟があるのだろうか。

俺なら絶対に無理だ。

と。

「瑞希」

「あ、先輩」

話しかけてきたのは瑞希と同じ格好をした女生徒だった。

合気道部の先輩なのだろう。長めの髪を後ろで一つに束ね、背は比較的長身の瑞希よりもさらに高く、下手をすれば俺よりも大きいかもしれない。ただ、体の線は細く、道着姿にもどこか違和感がある。普通の格好をしていればどこぞのお嬢様、といった風情の女の子だった。

「先輩もお昼ですか？」

「ええ。お腹が空いては膝行もできないしね」

上品に微笑んで、その女の子はさらに瑞希と一言二言言葉を交わした。そうしてからようやく、瑞希の斜め後ろにいた俺のほうに視線を移動させる。

「ところでそちらの男の子は」

「彼氏じゃないですよ。私の従弟です」

間髪入れず、瑞希が釘を刺した。

「あら。違うの?」

「違います」

と、瑞希は言った。

まあ、俺とてそんな勘違いをされるのは本意ではないが、そこまで力強く否定されるとそれはそれで何か微妙な敗北感。

すると、瑞希がそっと耳元に口を寄せてきて、

「そういう話が好きな人なのよ。下手なこと言ったらどんな噂が立つかわからないから、あんたもいつもの調子で適当なこと言わないでね」

「なるほど」

そう言われると逆に“下手なこと”を言っただけでやりたくなるがなんて。

そんな企みを考える間もなく、

「ぶちよー。どうしたんですかあー？」

店内にいた数人の、これまた同じ道着をまとった女の子たちが次々に集まってきた。

(部長なのか、この人)

俺は驚いてその部長さんを見た。

おっとりした印象で活発そうには見えないし、ぶっちゃけて言うともあまり強そうではない。

「あ、うん。なんか瑞希が彼氏さんを連れてきたからちょっとお話を聞いてたの」

「ええーッ!？」

背後の女の子たちが過剰な驚きの声をあげて、視線が一斉に俺に集まる。

「違います!」

すぐさま否定する瑞希だったが、女の子たちは興味津々な様子で口々に“意外とカッコいい”だの“意外と優しそう”だのと基本的な誉め言葉でそのほとんどに“意外”がつくのは、いわゆる初対面だからこそその社交辞令なのだろう。

まあ、そうとわかっていても悪い気分ではない。

「だから違いますって!」

しかしまあ。瑞希が最初から釘を刺していたにも関わらず、この誤解の広まりよう。俺が企むまでもなかった。

「従弟なんですって! 雪ちゃんの兄です!」

ピタリ、と。

「え、雪ちゃんの？」

「お兄さん？」

急に騒ぎが止み、それから再び全員の視線が俺の顔へと集まった。「？」

どうしてまったく関係ないはずの合気道部の人間が、雪のことを知っているのだろうか。

なんてことを疑問に思っていると、

「へー、これが雪ちゃんのお兄さんかあ」

「あまり似てないなあ」

「でも、まあまあいいかも」

「……」

今度は先ほどと違って、なにやら本音っぽい寸評が囁かれ始めた。「つか」

そこでようやく俺の発言のターンが回ってくる。

相手が年上か同い年かもわからず、敬語にするか普通に喋るか少し迷ったが、畏まる雰囲気でもなかったので普通に喋ることにした。「なんで雪のこと知ってたんだ？ まあ同じ学年のヤツとかもいるんだろっけど……」

と、その問いには部長さんが答えてくれた。

「雪ちゃんはね、ウチの部によく差し入れとか持ってきてくれるの。それで」

「へえ」

容易に想像できる話ではある。何しろ雪のヤツは俺ランキングにおいてお節介度で堂々の二位にランクインしているほどのツワモノだ。そのぐらいのお節介では特別驚きもしない。

関係ないが、ランキング一位は由香である。

「さ、みんな。買ったもの買ったらそろそろ出ましようか」

部長さんがそう言うと、女生徒たちはハイイと素直に返事をしてそろそろとコンビニから出て行った。

そして部長さんは俺を振り返ると、

「雪ちゃんのお兄さん　えつと三年生かしら？　だったら私と同じなんだけど……」

「あ、いえ。双子なんで。一年っす」

とりあえず部長さんに対してだけは敬語っぽく喋ることにした。

「あら、そうなの？　……へえ。結構年上に見られない？」

「年下に見られることはあまりないっすね」

そう答えながら部長さんと並んで外に出ると、一足先に出た女生徒たちから質問が飛んだ。

「お兄さん、名前はなんていうの？」

「優希」

短くそう答えると、その女生徒は笑って、

「違う違う。雪ちゃんじゃなくてあなたの名前」

「は？」

その言葉の意味が一瞬理解できなかったが、やがて勘違いされたことに気付いて言い直す。

「ゆ・う・き。俺の名前。“ゆき”じゃなくて“ゆうき”な」

「うわ、なにそれ！　ややこしい！」

びつくりした顔でそう言って笑う。

釣られて周りの子たちもワイワイと騒ぎ始めた。

「……」

そんなお腹を抱えて笑うほど面白いかどうかは疑問だったが、まあ、悪意のある笑いではないし、ムスツとした顔で対応されるよりは何倍もマシである。

「でもいいよね。雪ちゃんと一緒に暮らしてるんでしょ？」

と、別の女生徒が聞いてくる。

「あ？　まあそりゃそうだが」

いいって、なにがだ　と、そう聞き返す前に、

「ああ……毎日雪ちゃんと顔を合わせて、毎日雪ちゃんの手料理が食べられるなんて、なんて幸せなんでしょう……」

女生徒はうっとりとした表情でそう言うと、両手を組んで上空を

見上げた。

(……まさか“そっち”の世界の住人じゃあるまいな)
その仕草に、背筋が寒くなる。

「お兄さん!」

「いや。だから俺の名前は優希」

俺の言葉を遮って、女生徒は力強く言った。

「敢えて“お兄さん”と呼ばせてください!」

「冗談でもやめてくれ!」

百パーセント冗談だと言い切れないその表情が恐ろしい。

「心配しないでください! 雪ちゃんは私が必ず幸せに」

「心配以外の何物もねーよ!」

「まあまあ」

と、部長さんが割って入ってくる。

「その辺の話はあとでゆつくりしましょう。ねえ、優希くん」

「ゆつくり? ……へ?」

いつの間にか、周りに合気道部員たちの壁が出来ていた。

「つか、用も済んだし、俺はもう帰」

「ウチの部、見学はいつでも大歓迎よ?」

そう言って部長さんは、年上とは思えないほど可愛らしくウインクをしてみせて って。

「じゃなくて! 俺、ここの生徒でもねーですし!」

「大丈夫よ。あの守衛さん、お昼はいつもうたた寝してるから」

「話を聞け ツ!」

……と、いうわけで。

「文化祭が不安だ……」

結局、俺は部活が終わるまで見学させられてしまったのである。

帰りもどうにか守衛の目を盗んで、というか、あの守衛は基本的

に桜花女子の生徒が一緒だと安心するらしく、数人の部員と一緒に難なく門を抜けてくることができた。

「あんたも案外流されやすいわね。見知らぬ女の子相手だと勝手が違う?」

隣には瑞希がいる。

部活後にシャワーを浴びた髪はまだ完全に乾ききっていないようだった。

「あの人数になると、もはや女の子じゃない。制圧力を有した別の何かだ」

「その割に、ちやほやされて満更でもなさそうだったじゃない」

「……絶対見てなかっただろ、お前」

凶星だったらしく、瑞希は視線を少しだけ横に逸らした。

「ったく。とにかくあの変態女に、雪はやらんぞって言つとけよ」

「大丈夫よ、いつもの冗談だから。……たぶんね」

「だから笑えねーって」

腕時計の針は十六時を示そうとしていた。

今日もお天道様は元気だ。夏至を過ぎたとはいえ、まだまだ日は高い。

「けど、ま、俺は合気道とかよくわからんが、あんま、こつ、殺伐とした感じじゃないのな」

と、俺は言った。

適当にやっているわけじゃないが、どちらかという仲良しクラブ的なそんな雰囲気の一部活だった。

「そうね。うちの学校の部活はだいたいそうみたいけど」

と、瑞希は言った。

そついや桜花女子の体育系の部活が大会で活躍したという話はあまり聞いたことがない。

「あの部長さんは見た目と違ってなかなか貫禄あったけどな」

背は高いが華奢な雰囲気。けど、その雰囲気とは違ってなかなかいい動きをしていた ように思う。

すると、瑞希は少し意外そうな顔をして、

「あんた、なんだかんだ言いながらすっかり見て来たのね」

「ん？ そりゃ女子高の部活動なんて滅多に見れるもんじゃないからな。あそこまで来たら見ないと損だろ」

「イヤラシイ目で見てないでしょうね？」

「見てねーって！」

「ホントかしら」

「だいたい俺は強引に連れて行かれたんだぞ！ いわば被害者だ！」

「……ま、いいけど。変なこと考えないでよね。あんたがおかしなことしたら私や雪ちゃんも迷惑するんだから」

「ただだけ信用ないんだ、俺は。」

「無然としながら、

「心配しなくてもお前や雪の知り合いに手を出したりしねーよ」

「ならいいけどね」

「頷いてから、瑞希は何事か考えて、ふと言った。

「そっぴやあんたって、彼女いないわよね？」

「は？」

突然の質問に、俺の思考は一瞬停止してしまった。

「は、じゃなくて。今日もそうだけど、あんた、休みの日はいつも暇そうじゃない。部活やってるわけでもないし」

「……まあな」

「悔しいが事実である。」

「だから彼女作ったりしないのかな、って。……あ、他意はないわよ」

他意つてのはもしかして、瑞希のやつが実は俺のことを好きで、興味なさそうな振りをしながら探りを入れてくるというアレのことだろうか。

「ありえない。」

たとえこの世が俺を主人公としたラブコメ世界だったとしても、それだけは絶対でない。

なので、俺は普通に答えた。

「彼女ねえ。ま、欲しくないわけじゃないが、どうも俺様の眼鏡にかなうような子がいないくてな」

「……雪ちゃんみたいなの？」

「はあ？」

「だからね。雪ちゃんみたいに出来た妹がいると、女の子を見る目が厳しくなるのかしら、ってこと」

「いや、そんな意識したこともないが」

彼女にする相手をいちいち妹と比べるヤツはいないだろう、普通。じゃあ何故彼女ができないのか　と言われれば、それは簡単な話で、作ろうという努力をしていないからなのだ。何もしなくても女の子が周りに寄ってきていつの間にか彼女ができている、なんてそんな便利な体質は持ち合わせていないのである。

ならば、どうしてそういう努力をしないのかと問われれば

「ま、彼女なんていなくても、今のままで十分楽しいしな。高校生だからって無理して彼氏彼女作る必要もないだろーし」

と、答えると、瑞希は何だか複雑そうな顔をした。

「……あんた、二十年後も同じこと言ってるそうね」
「かもしれない。」

「つか、そういうお前こそどうなんだよ」

「私？」

瑞希は意外そうな顔をした。

「考えたことないわ。そんな機会もなかったし」

「機会もないってことはないだろ。誰かに告白されたこととかないのか？」

こいつの外見なら、周りの男どもが放っておくはずがない。……
ああ、いや、あくまで外見の話だ。中身を知っていれば、こいつに手を出そうなんて無謀なことを考える男は　言葉でなじられるのが三度のメシより好きとか、一日に一回は回し蹴りを食らわなきゃ悶々として夜ゆっくり寝られないとか、そういう特殊な性癖を持つ

たヤツぐらいだろう。

なんて。

そんなことを考えていると、いつの間にか瑞希が眉をひそめてこつちを見ていた。

「……あんた、何か失礼なこと考えてない？」

鋭すぎる。

「いや、まったく。むしろ底なし沼の中から一欠けらの宝石を見つけ出そうとするぐらいにポジティブなことを考えていたところだ」

「？ まあいいけど……」

変な顔をしながらも、深く考えないことにしたのか、瑞希はそのまま正面を向いて、

「告白もなにも、同年代の男の子自体、ほとんど知り合いもないもの」

「へ？」

俺は少し驚いた後に思い出して、

「あ、そっか。そういえばお前、女子中出身だったけ？」

「ええ。小学校でも男の子の友達はいなかったけどね」

それは意外な話だ。

「お前って男友達のほうが多そうなイメージだったなあ」

「……どうしてそう思ったのかは聞かないでおくわ。たぶん手が出るから」

「俺も言わないでおこう。死にたくないからな」

ほとんど言ってるようなものだが、幸い手も足も飛んでこなかった。

考えてみれば、俺も瑞希もお互いの学校生活のことはほとんど知らない。従姉で幼い頃から見知っているとはいえ、顔を合わせるのはほぼ休日限定だった。その辺、直斗や由香とは基本的に立ち位置が違っている。

「別に男が苦手ってわけじゃないんだろ？」

「苦手そうに見える？」

「いや、ぜんぜん」

「だったら、聞かないでよ」

確かに聞くまでもなかった。こいつはそんな性格じゃない。単に男子と遊ぶ機会も、必要もなかっただけなのだろう。

俺は今まで知らなかった瑞希の一面を知って、思い出したように言った。

「ま、でも良かったじゃないか。海、行くんだろ？ 一応俺の友達が二人来るし、これを機会に男友達も作ったらいいじゃないか。海だし、ナンパされたりするかもしれんぞ」

「ナンパはお断りだけど、あんたの幼なじみの……神薙くんだったっけ？ あの子とは仲良くなれそうない気がするわ」

「直斗ねえ」

朝、直斗と由香が俺を迎えに来るのをたまに見かける程度で、まだ正式に顔見知りではないらしい。

直斗と瑞希……美男美女といえなくもないが、想像するとどこことなく違和感のあるカップルだ。

あと、一応将太のことも忘れないであげてほしい。

この日の夜、将太から連絡があり、旅行の日程が正式に決定した。メンバーは俺、直斗、将太、雪、瑞希の五人と、将太が誘ってくるといいう見知らぬ女の子が一人の計六名。由香は家の都合で不参加となった。

- - - - -

「……あれが、不知火優希か？」

「らしいな」

二人の男が、夕日の方角へ歩み去っていく優希たちの後姿を監視していた。

「楓の代わりにあいつでもいい、ってのは、美味しい話だな。たいしたことなさそうだし」

背の低い短髪の男がそう言うと、

「いや、逆に考えるべきだろうな。そういう条件を提示してきた以上、楓ほどじゃないにしても、それなりの力を持っていると見るべきだ。強い力を持つやつほど、それを隠す術にも長けている」

背の高い男はそう言って軽く眼鏡の位置を直す。

「それにどうやら一人になることが少ないヤツのようだ。やり方を考えんなきゃならんだろう」

そうして二人の夜魔はその街角から姿を消した。

1年目8月その1

「……あれが、お前の連れてきた“女の子”か？」

“みんなで白い砂浜に二泊三日で行こうツアー”の初日はあいにくの曇り空だった。ただ、天気予報によると雨が降り出すようなことはなく、明日、明後日と回復傾向にあつて、最終日には憎らしいほど絶好調な夏のお天道様を拝めるとのことだが、ぶっちゃけ、今はそんなことはどうでもいい。

「おうよ。何か文句でもあるか？」

改札を済ませた駅のホーム。約五分後に到着する電車を待つ俺たちの元へ、このツアーの主催者である将太は一番最後に現れた。

俺と直斗、雪に瑞希、そして将太ともう一人。

「不知火、やつほー」

「文句しかない。というか連れて帰れ。今すぐにだ」

将太の連れてきた“女の子”は、どこからどう見ても知ってる顔だった。

藍原だ。

まあ、正直予想していなかったかといえは嘘になる。女好きを公言していながら女の子と付き合ったことのない将太が、この短期間の間に見知らぬ女の子と知り合いになって、しかも二泊三日の旅行に連れてくるなんて、普通に考えてありえない。ありえない、のだが、ほんの少しだけ、それ以外の未来を期待していたこともまた確かだから、がっかりしなかったかといえはそれは嘘である。

結局。

瑞希がいること以外は“いつものメンバー”になってしまったわけだ。

「んなことより。ほら、優希。紹介しろよ、紹介」

「ん？」

と、将太に急かされて思い出す。

「ああ、お前は初対面だったな。じゃあ紹介するぜ。あいつは俺の昔っからの友人で神薙直斗」

「そつちじゃねーよ！」

もちろんわかってる。

「あつちは俺の義理の妹の雪だ。よろしくな」

「だからそつちじゃ　　つて、え！？　お前ら、本当の兄妹じゃないの！？」

「んなわけないだろ」

そう言つと、将太はとてつもなく疲れたような顔をした。

というか、この場合は信じるほうがどうかしてる。

「……おい、瑞希」

少し離れたところで列車を待っていた瑞希が振り返って、

「？　あら、その二人？」

こちらにやってくる。

それを見た藍原が、おー……、という、何ともいえない声をあげた。

「はじめまして。従姉の牧原瑞希です」

初対面で、さすがの瑞希も少し畏まっていた。彼女の身長は将太と同じぐらいのはずだが、姿勢とスタイルのせいだろうか。明らかに将太のほうが低く見える。

「どもー。藍原美弥つす。敬語はなしでいきましょー」

藍原が軽くそう言つと、瑞希もすぐに応じて、

「わかったわ。だったら美弥ちゃん、でいいかしら？」

「問題なしつす」

俺は眉をひそめて、

「藍原。お前、キャラがブレてないか？」

「そんなことないつす。キャラが定まってないのがあたしのキャラつす」

「……そいつは新しいな」

いずれにしろ、どうでもいい話である。

「それと」

瑞希の視線が将太のほうを向く。

……将太はぼかんと口を開けて瑞希の顔を見つめていた。

「えっと？」

瑞希が怪訝そうに眉をひそめると、将太はハツとして、

「……ふ、藤井将太でございます！ 本日はわたくしめのつまらぬ企画に御同行いただきまして、恐悦至極に存じます！」

「……」

もっとブレているヤツがいた。

「……うわっ、すごい人！」

藍原がそう叫んでしまったのもわかる気がした。

電車に揺られ、乗り継いで合計一時間半、降りてから歩くこと十数分。ようやく視界に見えてきた海岸はそれほど多くの人で埋め尽くされていた。

「将太の親戚の旅館だというから、もっとマイナーなさびれた海だとばかり思ってたんだが……」

肩から提げた荷物を抱えなおしながら振り返ると、将太は得意げな顔をして、

「そんなはずはなからう。俺様の計画に間違いなどないわ！」

「……どうでもいいが」

俺はそんな将太を冷たい目で見て、

「大丈夫か、その荷物」

「……問題ない」

額に脂汗を浮かべながら答える将太は、両手から両肩まで抱えた荷物で一杯だった。

「ねえ、将太くん。やっぱり無理しないほうがいいよ。私たち、自分で持てるから」

と、雪。

そう。将太のヤツは何を血迷ったのか自ら女性陣全員の荷物持ちを買って出て、電車を降りてからずっとこの状態で歩いてきたのである。

（荷物の量を見ただけで無謀だとわかりそうなもんだが……）

だいたい女性陣の荷物は俺たちよりも明らかに多い。それが三人分。これも将太が良く言う“ポイント稼ぎ”なのかもしれないが、彼の現状を見てわかるとおり、それが功を奏したことは一度もない……まあ、ここまで根を上げずにやり通したことだけは賞賛に値するかもしれないが。

「だ、大丈夫だよ、雪ちゃん、ハハハ……」

その笑いはさすがに乾ききっている。

「……根性ね」

瑞希が俺の耳元で呟くようにそう言った。

「馬鹿なだけだろ。おい、将太！ 大丈夫ならさっさと旅館まで案内しろよ！」

「うん！ 早く荷物置いて泳ぎに行こうよ！」

と、藍原。

「あ、ああ……」

ハアハア言いながら将太が恨みがましい目で俺を見る。

もちろん知らん顔をしてやった。

そうして海岸沿いをさらに歩くこと十分。

ようやく将太の親戚の旅館に到着した。

「へえ……」

海水浴場ということもあって、周りにはいくつもホテルらしきものが建っているのだが、そこはやはり“ホテル”というよりは“旅館”という雰囲気建物だった。とはいえ、ボロいわけではない。小奇麗な風情のある旅館だった。

他の面々も、表情を見る限りは好印象のようだ。

将太に連れられて旅館の中へと進む。手続きはすべて将太に任せ、

俺たちはロビーの中でとりあえずくつろぐことにした。

「ねえ、優ちゃん。見て」

と、雪がやってきて俺の袖を引っ張る。

「ん？」

雪の指差す先に視線を向けると、

「……クマ？」

入ってきたときは気付かなかったのだが、入り口のすぐ横に大きなクマの人形、というか剥製？ が置いてあった。

「ね。可愛いね」

「可愛いかどうかはともかく、何故にクマ？」

この辺りは別にクマの名産地（？）ではない。縁もゆかりもないはずだ。

「言われてみれば……なんでかな？」

俺の言葉に、雪は小さく首をかしげる。

その仕草を見て、俺は唐突に、小学校の頃のことを思い出した。あれは確か五年生のときだったろうか。当時、雪のクラスの男子の間で密かに流行って（？）いた“女子を動物に例えようゲーム”。雪も当然そのターゲットになったのだが、そのとき例えられたのが、確か“鳩”だった。

その話を聞いたとき、なるほど、と妙に納得したのを覚えている。この、小さく首を傾げる仕草である。

俺なんかはずっと一緒に暮らしているから意識していなかったのだが、改めてみると、雪はこの仕草をすることが非常に多い。それもただ多いだけではなく、どうやらその仕草がすごく可愛く見えるらしいのだ。一時期、わざと不可解なことを雪に言っ、この仕草をさせようとする男子どもがいたほどである。

本人にはそれが癖である自覚はないらしく、一度直接言っ、たときは、

『え、そうかな？』

なんて不思議そうに言いながら、やはり小首をかしげていた。

「……優ちゃん？」
そして今。

ボーッと考え事をしている俺を見て、雪がまたも不思議そうに小さく首を傾けていた。

(うっ、可愛い……！)

……と、感じるのだろうか。

俺にはよくわからない。

「にしても、将太のやつまだかな」

見ると、将太はまだカウンターでなにやら話をしていた。

退屈になって周りを見回すと、ちょうど別の客が旅館に入ってきた。大学生だろうか。単車のヘルメットを手にした二人組の男だ。

今は正午を少し過ぎた辺り。チェックインするには早めの時間だから、本格的に客が来るのはこの後だろう。

さらに視線を横にスライドさせると、直斗と瑞希、藍原の三人が旅館内の小さな土産物屋を覗いていた。

(あっさり溶け込んだな……)

別に心配していたわけじゃないが。

窓の外には海が見える。曇り空からわずかに日が射ってきているのがわかった。

と。

「困ったことになった……」

「……ぬお」

突然目の前に現れた将太のドアップに、俺は思わずのけぞってしまった。

「だからお前、突然のアップはやめろっての……」

「それどころではない」

「？」

将太が眉間に皺を寄せている。

「どうしたの？」

雪が聞く。

直斗たちも集まってきた。

「実は、だな」

全員が集まったのを確認して、将太は説明を始めた。

「部屋のことなんだが……本当は三人部屋を二つ取ってもらってもりだったんだ。男三人、女三人だからな。ところが」

「どうなったんだ？」

俺が聞くと、将太は力なく首を振って、

「どうやら言葉の行き違いがあったらしく、二人部屋が三つしか取れてなかった。どうにか替えてもらおうと思ったんだが、なにぶんこの時期で、部屋は全部埋まっているらしい」

「……」

将太以外のメンバーが顔を見合わせる。

将太は残念そうにため息を吐いて、

「まあ、こうなった以上は仕方ない。ここは公正にあみだくじで部屋割りを決めるしかないと思い、すでにくじを作っておいた」

そう言いながら将太はポケットから紙切れを出す。

「いやまあ女の子たちはちょっと不満かもしれないけど一緒の部屋になったからって変なことをしようとするヤツは俺らの中にはいないからさ、悪いけど我慢して」

「ちよつと待て」

変に早口になって事を進めようとする将太に、俺がストップをかける。……その前に、将太以外の五人の間で“お前が止める”的な視線のやり取りがあったことを申し添えておこう。

「なんだ、優希？」

将太は張り付いた笑顔で俺を見た。少しだけ頬の筋肉がピクピクして、なにやらこちらに目配せしている。おそらくは、余計なことを言わないでくれ、という意味なのだろうが、もちろんそんな将太の意図を汲んでやる気はさらさらなかった。

「だったら俺と雪が同じ部屋でいいだろ。で、お前と直斗、瑞希と藍原。それで何の問題もない」

「僕もそれでいいと思う」

と、直斗。

「あ、そっか。そうだよな」

気付いていなかったのかとぼけているのか、藍原がポンと手を打つ。

「……」

あっさりと言望を打ち砕かれた将太は、端から見てもわかるほど落胆した顔をしていたが、それでも食い下がって、

「で、でもよ、ほら！ 雪ちゃんだって、優希と一緒によりは女の子同士のほうがいいだろ？ だからここは公平にだな」

「？ 私、優ちゃんと一緒に部屋がいい、かな」

雪がトドメの一撃を放った（もちろん悪気はない）。

「うっ……」

「これで万事解決だな」

俺はそう言っただけで足元の荷物を抱え上げる。

だが、将太はなおも食い下がって、

「ま、待て！ そんなことして、もしも“間違い”があったらどうするつもりだ！」

「俺と雪がダメなら、他の組み合わせなんて論外だろ」

「うぐ……」

言葉を失った将太の背中を、藍原がぽんと叩いて、

「お疲れさん、藤井！」

にこやかにそう言っていると、将太はがっくりと肩を落としたのだった。

「……と、まあ。」

そんな他愛もないやり取りがあった後。

「しっかし、懲りないよな、あいつも」

砂浜に立てたビーチパラソルの下。寝そべったビニールシートから砂の熱がじわじわと伝わってくる。上空は雲と青空が半々になっ

ていた。

「あれが将太の生きがいみたいだからね」

直斗は隣で軽く足を抱えて座っている。珍しく眼鏡を外しているのは、つい先ほどまで海に入っていたからだ。

そして将太は

軽く上半身を起こし、あたりを見回すと、すぐにその姿が視界に入った。どうやらその辺にいる女の子に片っ端から声をかけて回っているようだが、すべて失敗に終わっているらしい。

荷物の中から腕時計を探して時間を確認すると、四時近くなっている。昼食を摂ってすぐに砂浜に出たから三時間ぐらいは経っているだろうか。俺も直斗も適当に泳いだりして海水浴を満喫していたが、将太はずっとあの調子で海にも入っていない。

「ま、楽しみ方は人それぞれだけだな……」

ちなみに普通に遊んでいた直斗は二回ほど、見知らぬ女の子から声をかけられていた。

(なんとという格差社会……)

悲しいかな、俺たちの周りは需要と供給のバランスがあまりよろしくないようだ。

「でも、よくよく見ると将太みたいな人、たまにいるね」

「ん？ あー……」

確かに。将太ほどあからさまなのは滅多にいないが、それらしき姿、それらしき会話がチラッと聞こえることもある。

「海、だからなあ……」

なんて、知ったようなことを適当に口にしながらペットボトルの炭酸飲料を飲み干す。

と、そこへ、

「ねーねー、不知火！」

と、なにやら上機嫌な様子で戻ってきたのは藍原だった。

ちなみに藍原の水着は藍色だった。デザインについては、まあ“普通”とでも言おうか。ヘソは出ているが、全体的な露出はそれほど

ど多くない。ついでに言うと、瑞希は黒っぽい色の、競泳用のものをちよつとおしゃれにしたような水着。雪は白、だったか。よく見てないのでわからないが、腰に布みたいのを巻いていた気がする。「ちよつとちよつと、聞いてよ〜」

ふと我に返ると、目の前に藍原の太ももがあつた。……さすがは元陸上部。普段の身のこなしから想像してはいたが、筋肉の付き方はいかにもアスリートっぽい。

「なんだ？」

顔を上げると、それと同時に藍原が俺の眼前でしゃがみこんだ。

「あたし、さつきナンパされたよ〜。ね、すごくない？」

「……あ、そう」

としか、言いようがなかった。

「それだけ？ もつと驚かないの〜？」

藍原は不満げだ。

俺はぱんつと手を叩いて、

「おおつ、それは驚きだ！ まさかお前をナンパするヤツがいるなんてッ！」

「……なんか違う〜！」

「じゃあ、どうしろと？」

「あるじゃんか〜。感心するとか、どんな人だったの、とか、俺の藍原に手を出すなんて許さん！ とか」

「熨斗を付けて贈呈いたします」

「……ひどっ！ この薄情者！」

「注文の多いヤツだな……」

俺がため息を吐くと、藍原はいじけた様子で、

「いいよいいよ、不知火なんかさ。……ねえねえ、神薙、聞いて聞いて〜」

「うん。聞いてたよ」

と、直斗はにっこり微笑んで、

「でも気をつけて。そういうの、悪い人ばかりじゃないと思うけ

ど、中には変な人もいるかもしれないからさ」

「うん、わかってる。……やっぱり男の子はこうじゃないとね」

ニヤニヤしながらチラツと俺を見る藍原。

俺は知らん顔をして、

「俺は優しさを安売りしないだけだ。その資格があるヤツにしか優しくしねーの」

「シスコンだもんね」

「……お前も好きだな、そのネタ」

ムキになって反論すると調子に乗るのはわかりきっていたので、俺はできるだけ冷静にそう返した。

すると藍原は思い出したように、

「そう言えば雪ちゃん、ずっと姿見えないね。瑞希ちゃんもだけど」

「ん？ あれ、お前、一緒にいたんじゃないのか？」

「最初だけね。ほら、あたし、いきなりあつちの島まで泳いだりしてたから」

と、藍原は遠くにある小島を指差した。

「いきなり遠泳かよ……」

さすがは元陸上部、である。

「直斗、お前は？」

「いや。そういえば僕も見えてない」

と、直斗。

辺りを見回す。とりあえず俺の視界の中ではあの二人の姿を見つけることはできなかった。

「もしかしたらあたしみたいにナンパな人に捕まっていたりして。」

あの二人、並んでたら目立ちそうだし……あ、今、ちょっと顔色変わった？」

「あのな……別にそんなんじゃないよ」

抗議する。

と。

直斗がゆっくりと立ち上がって言った。

「でもちよつと心配だし、探してみるよ。優希。どうする？」
と、聞いてくる。

「ん？ ……ま、面倒だが、どうせ暇だし、行ってみるか」
そう言つて腰を上げる。

「んじゃ、あたしは荷物番してるよ。藤井は？」

藍原の問いに、直斗が答える。

「その辺で生産性のない行為に励んでるみたい」

「……あー。それは残念だねえ。瑞希ちゃんを口説くのは早くも断念したか。ま、正解だろうけど」

と、藍原は苦笑した。

「それじゃ藍原さん、荷物頼むよ。優希、行こう」

「おう」

そうして俺は直斗と一緒に雪たちを探すことになった。

おそらくは瑞希のやつも一緒にいるのだろうからあまり心配はな
いと思うが、長い時間ずっと姿が見えないのはやはり少し不自然だ。
それに、瑞希のやつは運動神経こそ抜群だが、泳ぎは苦手にしてい
る。雪だつて特別上手なわけじゃない。泳いでいて何か事故があつ
たという可能性も考えられなくはない。

俺たちはとりあえず海の家なんかがある賑やかな浜辺のほうを探
してみた。が、パツと見、それらしき人影は見当たらない。

ただ、人が多いので単純に見落としている可能性もあつた。

「優希。僕はもうちよつとこつちを探してみるから、優希はあつち
のほうを探してみて」

「了解」

あつちのほう、とは、ここから見ると逆側、あまり人が来ない浜
辺の端のほうだった。浜辺はかなり広くてかなりの広範囲に人がい
るのだが、そつちは浜辺も海も岩が多くて遊びづらいため、ほとん
ど人がいない。と、聞いている。

直斗と別れて浜辺を歩く。夏休みだからか、大学生と思しき客が
多かつた。中には黒人かと思うほどに日焼けした連中もいる。

そんな連中の間をまっすぐに突っ切っていく。
喧騒がどんどん離れていく。

途中、振り返ってみた。

(この辺はあつちからは死角になってるのか……)

俺たちがパラソルを立てていた辺りからだ、浜辺のいくつかの大きな岩が邪魔になって、こっちのほうはあまり良く見えない。向こうの喧騒だと、こちらの物音もあまり届かないだろう。

「よ、っと」

行く道を遮るようにしている、俺の背より少し低いぐらいの岩を乗り越える。この辺りまでくると岩と砂浜の比率が半々ぐらいになっていて、とても遊べるような環境ではなかった。

さらに進む。

と。

「……あれ？」

いくつかの岩の群れを乗り越えると、再び広い砂浜へ出た。そこはちょっとした入り江みたいになっていて、波も向こうより穏やかだ。

(……へえ、こんなところがあったのか)

向こうの混雑していたところと違って人影はまばら。

穴場というやつなのかもしれない。

(いいな……花火はここでやるか)

いい場所を見つけた、と思ったが、さすがに雪も瑞希もこんなところにはいないだろう、と、思い、適当に見回して戻ろうかと考えた、そのときだった。

「しつこいわね！」

「！」

聞きなれた怒鳴り声。

俺は思わず身を竦めて振り返った。

(瑞希の声だな……)

自慢じゃないが、俺はその怒鳴り声をこの世でもっとも多く浴び

てきた男である。聞き間違えるはずはない。

声のしたほうへ足を運ぶと、百メートルも行かないうちにその姿を見つけることができた。

瑞希と、雪。

それと

「だから、嫌だって言ってるでしょう!」

案の定、というべきか。

困むように、大学生らしき男が二人。瑞希たちに向かって何か言っているみたいだが、遠くてその内容までは聞き取れない。ただ、瑞希の様子からして、どんな状況かは大体想像できた。

(……藍原のヤツの言うとおりだったか)

さて、どうしたものだろう。

個人的には、別にナンパが悪いことだとは思わない。そういう風に出会って上手くいくヤツらはたくさんいるだろうし、節度を守ってさえいればそれはそれで構わないだろう。ただ、こうして見る限り、瑞希のヤツは感情をむき出しにして明らかに怒っている。あいつが俺以外にあそこまで怒るということは、おそらく相当しつこくされているのだろう。

(止めるか)

そう思って、俺が近付いていこうとしたときだった。

「いいよ。じゃああなたは諦めるって。ただ、そっちの子は別に嫌がってないじゃん。な?」

二人組のうちの片方　少し気が短そつな短髪の男がそう言って

雪の腕を取った。

「……!」

雪が一瞬だけ、嫌悪感を表情に出す。

その瞬間。

「触るなッ!」

鋭い、声。

途端、雪に手をかけた男の体がクルリと一回転した。

「えっ？」

見ていた男も、回転した男も、何が起きたのかわからないような呆けた声を出して、

ドスン！ と、男が背中から砂の上に落ちた。

「てっ……！」

「……」

瑞希は砂の上に落ちた男を見下ろしながら、ポンポン、と手を払う。

(……やばい、かな)

俺は走った。

瑞希とて本気を出してはいない。が、手を出してしまえば向こうだって黙ってはいられないだろう。

「お前……！」

最初に怒りをあらわにしたのは、ひっくり返された短髪の男だった。

パツと立ち上がって瑞希に向かって手を振り上げる。

「……」

瑞希は冷静に構えた。

そこへ、

「ちよーっと待ったあああッ！」

ギリギリ、間一髪。

俺はその二人の間に割り込んだ。

「……！」

驚きで、短髪男の手が止まる。

「……優希？」

「優ちゃん？」

瑞希と雪もびっくりした顔だった。

俺はそんな二人に背中を向け、すかさず短髪男に頭を下げる。

「すいません。こいつら、俺の連れなんです。さっきのことはこのとおり謝ります。だからどうか許してやってください」「

一息に、そこまで言った。

「ちょ、ちよっと、優希……」

戸惑ったような瑞希の声は無視して頭を下げ続ける。

「……ああ？」

「お願いします！」

男が何か言う前に、もう一度、力強くそう言い放った。

「……」

怒りを削がれたのか、短髪男が無言になる。

少しの沈黙。

やがて　口を開いたのは、短髪の後ろにいたもう一人の男だった。

「いいよ、あんた。俺らもちよっとしつこかったみたいだしな。……」

「おい、行こうぜ」

「え？ あ、ああ……」

短髪の男は少し納得できない様子だったが、もう一人の男が背中を向けると、渋々といった様子で立ち去っていった。

「……」

十秒ほど。

男たちの気配がなくなったことを確認して、俺はようやく頭を上げた。

「ちょ、ちよっと、優希」

何事か言いかけた瑞希の言葉を遮って、俺は言った。

「戻ろうぜ。直斗が心配してる」

「……」

瑞希は少し納得できないような顔で。
ただ、

「瑞希ちゃん。ありがとう」

「え？ あ、ええ」

「行こ？ 直ちゃんが心配してるって」

と、雪が促すと、瑞希はおとなしくそれに従った。

夜。

旅館の一階にある小さな個室で、俺たちは夕食を囲んでいた。

「……へえ、そんなことがあったのか」

将太が鳥の唐揚げを口に運びながら言った。

もちろん、先ほどの話である。

妙に行儀良く箸を口に運んでいた藍原が続けて、

「いや、仕方ないよ。あたしが男でも絶対ナンパするもん。……ああ、でもどっちにしようかな。雪ちゃんとのほんわかした生活もいいけど、瑞希ちゃんとの耽美で刺激的な生活も捨てがたい！ ねえ、不知火はどっちがいい？」

「知らん」

というか、瑞希のヤツは確かに美人だが、別に耽美な世界の住人ではないと思う。

「でも良かったね、結局、何事もなく済んで」

と、直斗。

すると将太がすかさず口を挟んで、

「でもよお。俺だったら間違はなくそいつらを殴り倒して二人を助けたね。男子たるもの、女の子を守るためには体を張らなくちゃな」
俺は鼻を鳴らして、

「ボコられるのがオチだからやめとけつて。それにあいつらが地元
のヤツだったら面倒だろ。まだ明日もあるんだしな」

「……悪かったわ」

「ん？」

見ると、瑞希が珍しく殊勝な態度だった。

あの事件の直後は不服そうにしていたが、冷静になって、どうやら先に手を出してしまったことを反省しているらしい。

俺は軽く手を広げて、

「いや。まあ、お前だったらトラウマが残るぐらいボコるんだろうし、それはそれで逆に大丈夫なんじゃね？」

「……」

反論はなかった。

そして夕食の後。

「お前、どうしてあんな人気のないところに行ってたんだ？」

雪と二人で部屋に戻って、必要以上にくつつけられていた布団を離す。

「えっと……」

雪は珍しく歯切れの悪い態度だった。

その様子から、俺はすぐに察して、

「瑞希の練習か？」

「……うん。やっぱりわかっちゃうんだ」

「まーな。ってことはあいつ、やっぱり未だに泳げないのか」

俺の記憶にあるのは五年以上前。

その頃は水に顔をつけることすら危うい状態だった。

今は、さすがに泳ぐぐらいはできるようになっているかと思っ
ていたのだが

「あ、ううん。昔よりは平気になってるみたい。でも、やっぱり苦
手みたいで……」

「ふーん」

あいつのことだ。天敵である俺に弱みを見せなくなかったのだろ
う。

……暑い。

俺は窓を開けるため、部屋の奥へ向かった。

「ねえ、優ちゃん」

「ん？」

窓を開けると、潮の香りに乗せた涼しい風が部屋の中に吹き込ん
できた。

「明日はね。優ちゃんが瑞希ちゃんに教えてあげてくれないかな？」

「はあ？」

俺が怪訝な顔を見ると、雪は微笑んで、

「私も泳ぐのあまり上手じゃないから。でも優ちゃんだったら色々教えてあげられるでしょ？」

「ま、お前よりは、多分な」

「だから」

「でもよ」

俺は窓際の椅子に腰を下ろす。

「瑞希のヤツ、絶対に嫌がるぜ。なんたって犬猿の仲だからな、俺たちは」

「犬猿の仲なの？」

雪はクスクスと笑って、

「じゃあきつと、犬と猿は本当は仲がいいんだね」

「……何が言いたい」

「素直じゃない犬と猿のお話、だよ」

「……」

俺が懽然としてみると、雪はいつもの穏やかな微笑みで、

「大丈夫。瑞希ちゃんには私から言っておくから。だから、ね、優ちゃん？」

「……」

俺は答えず、窓から真っ暗な夜の海を眺めていた。

波の合間に浮かぶ半月を眺めながら。

そうして一日目の夜は更けていった。

1年目8月その2

二日目は晴天だった。空には本当に雲ひとつさえない。

二泊三日、とはいえ、最終日の明日は午前中でこちらを引き払うことになるので、つまり思う存分遊べるのは今日が最後ということになる。

「なのに、なんでこんなことをせにやらんのだ……」

俺は昨日、雪に言われたとおり瑞希の泳ぎの練習に付き合うハメになっていた。

「だから頼んでないって言ってるでしょ」

俺はまるでやる気なし。

瑞希も嫌がっている。

にもかかわらず、憎まれ口を叩きあいながらの練習が成立しているのは、俺がどうかと瑞希がどうかとということではなく、すべては雪の力だ。あいつの持つ得体の知れない何かの力が、俺と瑞希の行動を縛っているのだ（多分）。

「つか、お前、やりやあできるんじゃねえか」

瑞希の上達具合は大したものだった。今はまだ昼前。二時間足らずの練習で彼女はすっかり普通に泳げるようになっていた。まあ、もともと武術をやっていて基礎体力はあるし、運動神経も必要以上にいいから、当然といえば当然なのかもしれない。

「水に顔をつけるのが苦手だったただけだもの。できないわけないじゃない」

「へーへー、そうですか」

水から上がり、海面に少しだけ顔を出している岩の上に腰を下ろす。

ここは海底に足をつけると顎の辺りまで水に浸かるほどの深さだ。

「んじゃ、そろそろ戻るか。ちょうど昼飯の時間だしな」

「あら？ もうそんな時間？」

瑞希は俺の座る岩に手を付き、少しだけ体を浮き上がらせて俺の腕時計（もちろん防水だ）を覗き込む。

「ああ。さて、行くか」

俺は腰を上げ、勢い良く海の中に飛び込んだ。

大きな水しぶきが上がって

「きゃっ！ ……ちよつと！ なにすんのよ！」

不意打ちで海水をかぶった瑞希が抗議の声をあげる。

俺は岸に向かって泳ぎながらチラッと彼女を振り返って言った。

「午前中の授業料だ。安いもんだろ？」

「……この！」

瑞希の頭が海面から消える。どうやら潜って俺を追いかけるつもりらしい。

「ふっ、愚かな。ようやく泳げるようになった程度のお前が、この俺様に追いつけるはずが」

なんて。

余裕をかましていると、急に足首を掴まれた。

「え？ ……げ、ちよ、ちよつと、わ、うぶっ！」

足を引っ張られて海中に引きずり込まれる。突然のことに、思いつきり鼻の中に海水を吸い込んでしまった。

「ゲホゲホッ……てめえ、俺を殺す気か！」

「あら。あんた流の授業料を払ってあげただけじゃない」

海面から顔を出した瑞希が得意げな顔をする。

どことなく嬉しそうだ。

「このヤロウ……」

この女、俺の心の安定のためにここで駆逐しておくべきかもしれない。幸い今は水の中。陸上ほどの戦力差はない。改めて考えてみれば、これは千載一遇のチャンスではないか。

「やり返す！」

「やってみなさい。追いつけるものならね」

瑞希は平然とそう言って再び海の中へ潜った。昨日まで泳ぐのが

苦手だと言っていたやつとはとても思えないほど自然に、スイーッと岸のほうへと泳いでいってしまう。

(……ったく。だから嫌だったんだ)

俺はそれを眺めながら、雪の申し出を受けたことを今更ながらに後悔していた。

そして、午後。

「あれ、優ちゃん？」

「ん？」

太陽のまぶしさに薄っすらと目を開ける

昨日に引き続き、ビーチパラソルの下に寝転がっていた俺のところへやってきたのは雪だった。

「どうしたの？」

「なんだ？ 俺が寝ているのがそんなに不思議か？」

そう聞くと、雪は小さく首を横に振って、

「瑞希ちゃんと一緒だと思ってたから」

「もう泳げるようになったみたいだから、俺がついてる必要はないだろ？」

「あ、やっぱりそうなんだ」

「やっぱり？」

「うん。だって」

そう言っただけで雪は俺の隣に腰を下ろそうとしたが、

「ゆつきちゃ〜ん！ ちょっととちよつと〜！」

聞こえてきたのは相変わらず能天気そうな藍原の声だ。

「ちよつとこつち来て〜！ 何かいるよ〜！」

何か面白い生き物でも見つけたのだろうか。

「あ、うん！ ちょっと待ってねー！」

立ち上がって、雪は振り返りざま言った。

「瑞希ちゃん、機嫌よさそうだったから。たぶん優ちゃんにちゃんと教えてもらって泳げるようになったんだろっと思ってたの」

「つか、俺は別に何も教えてないんだが……」

事実である。俺はほとんど見てただけで、あとは瑞希のやつが勝手に練習して勝手に泳げるようになったのだ。

「優ちゃんが一緒にいたことが大事なんだよ」

「なんだそりゃ」

まったく意味がわからない。

雪が走り去っていく足音を聞きながら、俺はごろりと寝返りを打ってうつ伏せになる。が、その拍子に右腕がシートからはみ出して砂まみれになってしまった。

(ちえっ……)

起き上がって腕についた砂を払う。が、汗を掻いているせいではないかなかなか綺麗にならない。

「あれ。どうしたの」

濡れた髪の毛の水を落としながら、直斗が戻ってきた。

「おう。泳いでいたのか」

「うん。こういう機会でもないと海に来ることなんてないし、堪能しとかなくちやね」

「あー、桜さんは海に遊びに来るってイメージじゃないもんなあ」

「それ以前に、この歳になって母親と二人で海に遊びに行く人なんていないよ」

「いや、桜さんなら、高校生同士だと言っても通用するんじゃないか？」

「そついう問題じゃないでしょ」

辺りを見回してみると、相変わらず砂浜を駆け回っている将太の姿が見えた。

誰かに絡まれてもしなければいいが……まあ、あいつなら自分の力でボコボコにするらしいから気にしなくてもいいか。

瑞希はおそらく、あっちの人気のない入江で泳いでいるのだろう。機嫌が良さそうだったという雪の言葉が本当ならば、泳ぎの楽しさに目覚めでもしたのかもしれない。

「……ま、いいや。俺もちょっと海に入ってくる」
俺は直斗にそう言い残して、海へ向かった。

.....

(泳ぐのがこんなに楽しいとはね……)

優希の予想どおり、瑞希は人の少ない入江を泳いでいた。まだ海の中で目を開けることはできなかったが、ゴーグルをつければそれも問題ない。

砂浜は結構遠くに見えている。昨日までなら怖くてこんなところまで泳いでくることはできなかったが、今は何の問題もなく行き来できる自信があった。

もう“泳げる”と胸を張って言っても嘘にはならないだろう。

(……優希にいつまでも弱みを見せてるわけにいかないものね)

この短時間でこれだけ泳げるようになったのは、そんな意地が彼女の中にあつたからだろう。雪がそれを見越して優希をコーチに付けたのだということも、瑞希は薄々感づいている。あのほんわかとした雰囲気の従妹は、あまり表には出さないものの、とにかくそういう人の心の動きを悟るのが大得意なのである。

ひとしきり泳ぎを楽しんだ後、瑞希は砂浜へと戻ってくる。首筋が少しひりひりと痛んだ。今日は日差しが強いから、日に焼けてしまったのかもしれない。

(そろそろ戻ろうかしら)

せっかく大勢で海に来たのだ。いつまでも単独行動というわけにはいかないだろう、と、瑞希はそう考えてそちらへと足を向けた。

わわわわ……、という波の音が耳の奥に響く。

こちらの入り江は、一段と人が少なかった。人影がまったくない。無人といってもいいだろう。

「……？」

初めは、正面から誰かが歩いてきたな、ぐらいの認識だった。が、その男の顔を見て瑞希は眉をひそめる。

見覚えのある顔だった。

「……」

それもそのはず。

「よう。今日は一人かい？」

昨日、彼女と雪をナンパしてきた、大学生風の男。瑞希に投げ飛ばされた短髪の男ではなく、後ろにいた眼鏡の男のほうだ。昨日と違い水着ではなく普通に服を着ている。

「……」

瑞希は何も答えなかった。

「無視か。まあ、俺はそれでも構わないが」

「……」

「けど、一人なのは好都合だ。今日こそ、ちょっと付き合ってもらいよ」

「……」

瑞希は無視して横を通り過ぎようとする。

男が苦笑いを浮かべ、そしてすれ違いざま、

「……無理やりにでも」

「！？」

直後、ヒュツと風を切る音。

瑞希は咄嗟に上半身を反らせた。

その直後、体のすれすれのところを何かが横切っていく。

「……かわした？」

「なんのつもり？」

鋭い蹴りだった。それも冗談や脅しではない、明らかに瑞希の体

に当てることを目的に放たれた蹴りだ。

瑞希は後ろにステップして男から離れると、頭につけていたゴーグルを外して地面に放り、構えた。

「もう一度聞いわ。なんのつもり？」

「……」

男が眉間に皺を寄せる。

質問に対する答えは返ってきそうにない。

（……昨日と、別人？）

何故そんな風に思ったのか、瑞希自身うまく説明できない。昨日が初対面とはいえ、昨日の今日で顔を忘れるはずもなく、目の前にいるのは紛れもなく昨日の男だった。

にもかかわらず。

まるで別人のようだ、と、瑞希は感じていた。

（……リーチは向こうが上ね）

大声を出して人を呼ぶ、という考えは頭になかった。彼女の頭にあつたのは、人を呼ぶのは相手を動けなくしてからでも遅くはない、という、なんとも女子高生らしくない考えだったのである。

ただ、それはただ無鉄砲というだけのもではなく、実力に裏付けされた考えでもあつた。

ヒュッ！

男の右足が前にステップし、少し遅れて男の右拳が動く。

（遅い。フェイント）

軽く体を傾けて右拳を避ける体勢を取る。が、予想通り右拳は瑞希の体まで飛んでこなかった。

「左！！」

あらかじめ注意を向けていた左拳が飛んでくる。

瑞希は右手を直角に立てると、向かってきた男の左腕の内側に当て、外側に弾き飛ばす。

「！？」

男が驚きの表情を浮かべた。

瑞希の体はそのまま、左足とともに前にスライドする。

「はぁッ!!」

左の拳が男の鳩尾に吸い込まれた。

確かな感触。

「ッ!」

男の体が数センチ宙に浮き、一メートルほど後ろに倒れこんだ。

普通の人間なら間違いなく悶絶し、動けなくなる一撃。

それでも瑞希はすぐに構えを解こうとはせず、しばらく男の挙動を注視していた。脳裏によぎっていたのは、先ほど感じた“得体の知れない雰囲気”。

ただ、それから数秒間。

男が動き出す気配はなかった。

「……見かけ倒しか」

気のせいだったのかもしれない、と、瑞希は思った。最初の蹴りの速さはかなり鍛えられたもののように思えたが、技に関してはまったくの素人だ。見え見えのフェイントや大振りの拳は、少なくとも武道に携わる者の動きではない。

構えを解いて、手を払う。

緊張の糸が緩む。

「これって警察を呼ぶべきなのかしらね」

ピクリとも動かない男を見下ろしながらポツリと呟く。

少しマジになっていたので、思いつきりまともに入れてしまっていた。もしかすると救急車も必要になるかもしれない。

「……過剰防衛とか、言われないわよね」

冗談交じりに呟くと、とりあえず男から離れ、放り投げたゴーグルを拾いにいく。

「……そんな心配は……… 必要ない」

「え………?」

「念のため……… 結界を張っておいて正解だった……… な」

振り返る。
と。

……ドス。

「ッ……!???」

瞬間。お腹の辺りに激痛が走った。

何か重い塊　鉄球でもぶつけられたかのような衝撃。

「あ」

一瞬にして意識が遠のいていく。

(なに……?)

霞んでいく瑞希の視界で、立ち上がろうとしている男の姿が見えた。

が、

(どうして)

男と瑞希の間は三メートルほどの距離があった。男はただ見つめているだけで、手に凶器らしきものは持っていない。

男がどうやって攻撃してきたのか、瑞希には理解することができなかった。

ただ

(赤い、目)

真っ赤に輝く男の目が脳裏に焼きついて、

「ゆ……き……」

助けを呼ぼうとした声は言葉にならず　彼女の意識は途切れた。

.....

泳ぐのに飽きてしまって、他の連中に声をかけた後、俺が一足先

に旅館に戻ったのは、午後四時を過ぎたころだっただろうか。

「不知火様？」

「え？」

旅館の受付で突然封筒に入った手紙を差し出され、俺は目の前の四十代後半と思しき女性を見つめる。

「これは？」

「不知火様の知人の、牧原様という方からお預かりしました」

「牧原？」

俺の怪訝そうな顔に気付いたのか、

「はい。男性の方でしたが、不知火様のお知り合いではなかったですか？」

「あ、いえ。知り合いです」

俺はそう言っ手紙を受け取った。

“牧原”は言うまでもなく瑞希の苗字である。受付の女性が瑞希のことを男と勘違いした、なんて面白い可能性も一瞬脳裏を過ぎったが、あいつは性格はともかく見た目はどう見ても女性だし、そもそもあいつが俺宛の手紙をここに預ける理由がない。

その苗字で知り合いの男性というと、思いつくのは瑞希の父親くらいだった。

部屋に戻って座布団に腰を下ろし、封を切って折りたたまれた一枚のメモ紙を取り出す。

「!？」

開いた瞬間、嫌な感覚が背筋を駆け上った。

(これは)

雑誌や新聞の切り抜きをツギハギして作られた文章　まるで、刑事ドラマなんかでよく目にする脅迫状のようなそれには、こんなメッセージが書かれていた。

『友人の女は預かっている。午後七時に下の地図の倉庫に一人で来い』

脅迫状のよう、ではない。

紛れもなくその類のものだ。

一瞬、将太の悪戯という可能性も脳裏を過ぎったが、悪戯にしては悪趣味すぎるし、将太は今も砂浜で不毛な行為に耽っているところだ。可能性は低い。

悪戯ではない。

と、すると

俺はもう一度その文面に視線を落とす。

“友人の女”

この状況で思いつくのは三人しかいない。

中でも、一番可能性が高いのは

俺はそのメモ紙をポケットに突っ込んで旅館を飛び出すと、真っ直ぐに俺たちが陣取っていたビーチパラソルを目指した。

「……藍原！」

「んー？ あれ？ 戻ってきたの？」

砂浜に敷いたシートの上には藍原が座っていた。

俺は内心の焦りを悟られないよう一呼吸置いて、

「雪と瑞希を見なかったか？」

「んー？ 雪ちゃんならさっきまでここにいたよ。瑞希ちゃんは…

…アレ？ そっぴやずつと見てないや。あ、ほら。雪ちゃん、戻ってきた」

俺は藍原が指差した方向には目も向けずに、

「……なるほどな。わかった」

「あれ？ どこ行くの？」

藍原が怪訝そうな顔をする。

俺の足の向いた先が旅館の方向ではないことに気付いたのだろう。

俺は答えた。

「ちよつと買い物だ。少し遅くなるかもしれないから、晩飯、みんなで先に食べててくれ」

それ以上追求されないうちにその場から離れる。

「え？ あ、ちよつと！ 不知火！」

早足に歩きながらポケットのメモ紙を取り出し、再度目を通す。

(瑞希のヤツが、誘拐……?)

手紙の相手が“牧原”を名乗ったのだから“女”ってのが瑞希であることは容易に想像できた。

が、ちよつと信じられない。なにしろ相手はあの瑞希だ。あいつを誘拐するつてのは名のある格闘家を誘拐するようなものである。拳銃か何かで脅して、という可能性もあるが、これだけ人のいるこの砂浜でそれが可能なのだろうか。

いや。

俺は足の向きを少し変えた。

あれだけ人のいる砂浜で誘拐されたとは考えにくい。となると、瑞希は例の人の少ない入江にいたと考えるべきだろう。

指定された倉庫までは徒歩で一時間近くかかる距離だったが、午後七時まではまだかなり余裕がある。

念のため、俺はその入江に向かうことにした。
が

(……普通には、難しいよな)

到着した入江は相変わらず閑散としていたが、人がまったくいないというわけではない。大きな岩が散在しているので死角はいくらもあるが、ずっと拳銃を突きつけたまま誰にも見られずに移動するのは 絶対に無理ってことはないが、かなりリスクが高い。

一応ざつと見回ったが、瑞希の姿はなかった。

(あそこに車を止めていたとして……)

波打ち際から道路までの距離は百メートルぐらいだろうか。

(うまく気絶させて背負って歩けばいけるか)

拳銃を突きつけたまま歩くよりはよっぽど現実的だ。

ただ、周りに気付かれないようにあの瑞希を気絶させるというのは、そう簡単なことではないはずだ。スタンガン、あるいはそれに類するものを用いて、おそらくは不意打ち。一撃で彼女の意識を奪った。

「……」
いや。

それよりももっと現実的な可能性がある。
もう一度メモ紙を取り出し、その文面に目を落とす。

『友人の女は預かっている。午後七時に下の地図の倉庫に一人で来い』

ごくごく簡単な文面だが、考えるべき点が二点ある。

まずは“倉庫に一人で来い”という指示。それしか書かれてないという点。目的は金でもなければ瑞希自身でもない、つまりは俺を呼び出すことこそが目的であると推測できる。

そしてもう一点は“午後七時”という時間の指定。今からだ三時間近くある。指定の場所まで徒歩で一時間かかること、俺が何時に手紙を見るかわからなかったことを考えると妥当な時間なのかもしれないが、本当にそれだけの理由だろうか。

海の方角へと視線を向ける。

日はかなり沈んでいた。季節的には夏真っ盛りだが、日の沈む時間は日増しに早くなってきている。

(今日なら六時半過ぎには沈むか……)

最近、自分の力のこともあって日の入りの時刻は常に頭に置くようにしている。

午後七時なら、俺にとっては“次の日”になっている頃だ。

メモ紙を再びポケットに入れる。

いずれにしても、この誘拐犯は“そっち”絡みの可能性が高い。

個人的な恨みを買うような覚えはない、とは言わないが、少なくとも俺を呼び出すために白昼の砂浜から女を一人さらっていきこうとするような連中には“日常側”では心当たりはない。

とすると

こちらもそれなりの準備が必要になるだろう。

1年目8月その3

指定された倉庫は海のすぐそばにあった。

廃倉庫なのか、あるいは使用される季節が限定されているのか。

辺りに人の気配はなく、照明も近くを走る県道から街灯の明かりが僅かに届くだけで非常に頼りない。

倉庫へと続く道は限られている。明かりは少ないが身を隠す場所はないので、そこを見張っている者がいるとすれば、気付かずに近付くのは困難だろう。

……というのは、辺りがまだ明るいうちに近くの百貨店で双眼鏡を買って、遠くから確認したところで得た、とりあえずの情報だ。

そして今、時間は十八時四十分。

俺はその倉庫から一キロほど離れた公園のベンチに腰を下ろし、時を待っていた。

ペットボトルのお茶を飲み干し、近くのゴミ箱へと放り投げる。コンビニで買ったおにぎりは結局食欲が沸かず、ほとんど手をつけないままで捨てることになってしまった。

海岸線を見ると、ちょうど日が沈んだところだ。

「……行くか」

俺はゆっくりと腰を上げた。

- - -

広々としたその空間には小さなランプが一つだけぶら下げられている。

何のために使われていた場所なのだろう。少し生臭い匂いが残っているところから、近隣の海産物を格納、あるいは加工するために使われていた空間なのかもしれない。

その、ちょうど中心辺りの柱に瑞希は後ろ手に縄で縛り付けられていた。

「……どうするの？」

「どうもしない」

瑞希の問いに答えたのは、彼女をここまで連れ去った大学生風の眼鏡の男だ。男は返答するときも彼女の方を見ようとせず、脇腹の辺りに包帯を巻き付けているところだった。

薄暗闇の中、微かに見えた男の腹にはかなり目立つ青アザがある。それは間違いなく瑞希の拳の跡だった。

「だったら、どうして私を連れてきたの？」

瑞希はそのアザをチラツと見てさらに質問を続けながら僅かにお尻の位置をずらす。倉庫の床はむき出しの硬いコンクリートで、水着姿の彼女にとっては少々座り心地の悪い場所だった。

「お前には何もしないってことだ」

男がそう答えたところで倉庫の入り口が開く音がした。

(……外はもう暗くなっているわね)

僅かに開いた入り口から差し込んできたのは、遠くの街灯の弱い明かりだけだ。しばらく気絶していた瑞希には時間の感覚がない。が、少なくとも夜の六時は回っていると考えていいだろう。

入ってきたのは予想通り、昨日も眼鏡の男と一緒にいた短髪の男だった。

「来たぜ。少し早いが」

「そうか」

眼鏡の男がそう言って上着を羽織る。

「ちよつと待って。私には、ってというのはどういう意味？ 何をするつもり？」

瑞希の脳裏に咄嗟に浮かんだのは雪のことだ。この二人組が、昨

日彼女をナンパしようとした連中だったことを考えれば、彼らが雪に対してよからぬことをするのではないか、と考えたのは当然だった。

だが、そんな瑞希の問いかけに対し、眼鏡の男は少し考えて、

「自由を手に入れる」

わざとらしく、芝居がかった口調でそう言った。

「自由？」

あまりに突拍子もない回答に、瑞希は眉をひそめて聞き返した。

「ああ、ちよつと事情があつてね。こうすることで俺たちは自由の身になれる。ま、過去の過ちの清算つてとこか」

「……それと私がここにいるのと、どういう関係があるの？」

「あんたには直接関係ない。あんたはただ、こうして連れ去るのに一番適任だっただけさ」

そう言ってから眼鏡の男は苦笑してお腹をさすった。

「にしては、少々苦戦させられてしまったが。あの一撃はかなり効いた。もう少しまともに入つてりゃ本気でダウンだったな。……」

……普通の人間だと思って気を抜いたのがいけなかった」

「私に言わせれば、あれで起き上がれるあなたの方が普通じゃないと思うけど」

「つまり、普通の人間じゃないんだろう」

笑いながらそう言った男の言葉はまさにその通りだったのだが、瑞希にその言葉の本当の意味がわかるはずもなかった。

「おい、そろそろ行くぞ」

短髪の男がチラッと瑞希を見てそう言った。

「……ああ」

眼鏡男がゆっくりと立ち上がって瑞希を見下ろす。

「明日の朝早くには誰か来るだろう。そうしたら縄を解いてもらおうといい」

「どういうこと？」

「あんたの用はもう済んだってことだ」

そう言つて男は吊るしていたランプの明かりを消した。

「済んだ？」

瑞希は先ほど短髪男が言つていた“来た”という言葉を思い出す。そして、自分が誰かを呼び出すための人質として使われたのだと思ひ至る。

そしてそれは普通に考えて、彼女に縁のある人物だろう。

瑞希は反射的に声を張り上げた。

「待つて！ もっとちゃんと説明なさい！」

立ち去りかけていた眼鏡の男はその彼女の呼びかけに足を止め、少し意外そうな顔をした。

「もうあなたの用は済んだ。……無事に帰してやるつてことだ。余計な詮索はしないほうが身のためじゃないか？」

男は少し脅すような声でそう言つたが、瑞希は怯まずに言い返す。

「こんなところに勝手に連れてきておいて、用が済んだとか言われて、はいそうですか、なんて言えるわけないでしょ！ 来たつて誰のこと！？ その人に何をするつもり！？」

「……」

「……」

二人の男は沈黙のままでお互いの顔を見合わせる。

瑞希はそんな二人の男たちを睨み付けた。

外から入り込んだ風に、ランプを吊るしたロープが少しだけ軋む音を立てる。

……やがて、短髪男の方が小馬鹿にしたような笑いを浮かべて言つた。

「こんな状況で、気の強い女だな。なんなら、そんな口が利けないようにしてやつてもいいんだぜ？」

「よせ」

眼鏡の男がそれを制し、それから瑞希を一瞥して言った。

「一般人には手を出さない。お前のような一般人を傷つけると依頼主からクレームがついて、俺たちの求める自由がなくなるからだ。」

だから俺たちが用があるのは“一般人”じゃない。ま、俺に説明できるのはそんなところかな」

「……」

回りくどい物言い。ただ、その言葉は　おそらくは男の目論見どおり　瑞希に一定の安心を与えることとなった。何しろ彼女は彼女と一緒にだった友人たちが“一般人ではない”ことなど知りもしないのだから。

「おいおい。やけに親切じゃねえか」

二人はもう入り口のほうへ歩き始めていて、その話し声は瑞希から少しずつ遠ざかっていく。

「いや。ああいう女は俺の好みでな。……なあ、あんた」

そう言っただけ眼鏡の男は声を張り上げ、瑞希を振り返る。

「もつと時間があれば口説いてやるところなんだが、残念だ」

「どれだけ時間があってもお断りだわ」

瑞希が睨みながらそう答えると、眼鏡の男は苦笑して再び背中を向けた。彼らは二度と瑞希を振り返ることはなく出て行って倉庫の扉が閉じられる。

「……」

同時に、しん、という静寂が訪れた。

今まで聞こえなかった外の風の音が耳に届いてくる。

(……なんだったのかしら、あいつら)

男たちの言葉が真実なら、彼女の身はこれで解放されたことになる。そのことに安堵しなかったかといえは嘘だ。が、男たちの言葉は瑞希にとって意味不明で、結局、何のために連れてこられたのかはわからないまま。

少し手首をひねってみる。縄はかなりしっかりと結ばれていて、その試みは彼女の手首の肌を傷つけただけで終わった。

力づくで解くのは難しそうだ。

諦めて、瑞希は暗い天井を見上げる。

寒くはなかったが、水着のままではやはり心細かった。

(……優希たちはどうしてるかしら)

瑞希がいなくなったことにはもう気付いているだろう。みんなで探しているか、警察に届け出ているか。この場所があつた砂浜からの程度遠いのか瑞希にはわからない。あの眼鏡の男の言葉を信じるなら、朝には誰かがやってきて彼女を解放してくれることになるが、それだつて本当かどうかを確かめる術はない。

このまま何日経っても助けが来なかつたら　そう考えると少し恐ろしくなつたが、とりあえず明日の朝までは我慢するしかない。もし誰も来なければ、なんとか自力で脱出する方法を考えよう、と、そう心に決めて時が経つのを待つ。

そうして　時折響く風の音を聞きながらどれほどの時間をじつとしていたろうか。

少なくとも一時間。もしかすると二時間近くは経っていたかもしれない。

キィイ……

「！」

倉庫の入り口がゆっくりと開いて、来訪者は驚くほど早く現れた。薄い街灯の明かりがその隙間から差し込んでくる。

そして、

「やれやれ、生きていたか」

姿を現したのは一人の少年だつた。

少年　おそらくは少年、だろう。瑞希の縛られている位置からは遠かつたし、逆光にもなつていて顔までは見えない。彼女と同じくらいかそれより年下の少年であろう、と、そう考えたのは、その人物の声とシルエットによる推測だ。

「牧原瑞希だな。助けに来た」

「助け……？」

「ずいぶんと早い。」

「いや、それよりも、と瑞希は問いかける。」

「誰？　どうして私の名前を知ってるの？」

「……」

問いかけに少年は無言を返すと、それどころか入り口で立ち止まり、腕を組んで扉に背中を預けて動かない。

瑞希はその態度を怪訝に思っ

「助けに来たのなら、縄、ほどいてくれない？」

「ああ、そのつもりだが」

少年は思案しながら言った。

「顔を見られるのは少し都合が悪いのでな。どうしたものか考えている」

「……」

その悠長な物言いに瑞希は少し顔をしかめたが、どうやら相手は本気らしかった。

「いいわよ。じゃあ、目をつぶってればいいの？」

得体の知れない相手ではある。が、今の彼女はいずれにしても身動きが取れない状態だ。仮にこの少年が彼女に対して害意を持つ人間だったとしても、目を瞑っていたからといって状況は大して変わらない。

「ああ、それでいい」

少年は瑞希の言葉をあつさり信じて　あるいは顔を見られることはそれほど大したことじゃないのか　すぐに足音が近付いてくる。

推定五メートルほどの距離まで気配が近付いたところで少しだけ体が緊張したが、目を開けることは我慢した。

彼女の不安を余所に、近付いてきた足音はすぐに彼女の背後に回り、ブツツと音がして両腕が解放される。

「……目、開けてもいいかしら？」

「振り返らなければな」

瑞希はゆつくりと目を開けた。

腕は自由になっていた。

「……ありがとう」

「運が良かったな。てつきり殺されてるかと思ったが」

「縁起でもないこと言わないでちょうだい」

言いながら瑞希は軽く両手を振る。両手首には縄が擦れた跡ができていた。

「で？」

少年が遠ざかっていく気配。しばらくして、扉の開くような音が聞こえた。瑞希は気付かなかったが、どうやら反対側にも出口があるようだ。

「お前を連れてきたやつらはどこへいった？」

「どこかに行ったわ」

「二人ともか？」

「ええ」

そう答えてから、どうして二人だとわかったのだろう、と、疑問に思ったが、そもそもあの二人組の正体も少年の正体もわからないのだから、考えるだけ無駄だと気付く。

少年の態度からすると、それを聞くとしてもおそらくは答えないだろう。

それよりも　そう。

呼び出された“誰か”が危険な目に合っている可能性がある。

瑞希はそのことに思い至り、

「誰かを呼び出したような話をしてたわ。……ねえ、あなたは

いえ、それは言えないのよね。でも私のことを知ってる。じゃあ私の友達のことも知ってるかしら？ 私と一緒にここに来た友達は大丈夫？ それだけでも知っていたら教えてちょうだい」

少年は少し間を置いて、

「冷静だな。いきなり誘拐されてビビってるかと思ったが」

「ビビってるわ。もしかして私の大事な人たちに害が及んでいるんじゃないかと思って。だから教えて。あなた、私を誘拐した連中のこと知っているんでしょう？」

「それは知ってるが、お前の友達とかいうのは知らんな。お前が誘

拐されたのは 一般人なら誰でも良かったんだろう。ただの偶然だ」

「本当に？」

「本当だ」

「……そう」

本当かどうかはわからない。が、あの二人組も一般人には手を出さないと生きていた。そう考えると本当の可能性が高い、と、瑞希はそう考えてとりあえず胸を撫で下ろした。

「あなた、少なくとも警察の人じゃないわよね」

「似たようなものだ。……さて、おしゃべりは終いだ」

少年が再び足を進める気配がする。

「一人で帰れるな？」

「場所がわからないと帰れないわよ……」

瑞希がそう答えると、少年は平然として、

「外に出ればだいたいわかる。わからなければ交番に行くかタクシ―を拾えばいい」

「……助けてもらったという文句は言えないけど。自力で帰れる場所なんでしょっかね」

「おそろくな」

そう言った少年のシルエットが暗くなった外の風景の中に消えていく。

少年の気配が消えたのを確認して、瑞希はゆっくりと立ち上がった。

「っ……!!」

鳩尾の辺りに鈍い痛みが走る。

鉄球のような“何か”を受けた場所だ。

(……なんだったのかしら、本当に)

少しだけ現実感のない出来事 瑞希はまるで狐に化かされたような気分になっていたが、今はとりあえず皆のところに戻り、無事であることを知らせなければならぬ。

瑞希は帰路を急ぐことにした。

.....

「……来たか」

俺が足を踏み入れた倉庫の中には僅かな明かりが灯っていた。

中には見覚えのある男が二人。

「お前ら、昨日の」

雪と瑞希をナンパしていた、大学生風の男たちだった。

畏を警戒し、一歩だけ足を踏み入れたところで慎重に倉庫の中を見回す。

広さは学校の体育館ぐらいだろうか。隅っこのほうにポツンと木箱が置かれている以外は何も無い。鼻をつくのは染み付いた魚介類の匂いだ。

後ろ手にゆっくりと扉を閉める。

「瑞希のヤツはどこにいる？」

少し声を張り上げて中央にいる二人に問いかける。

「ここにはいない。が、心配するな。危害は加えていないし、いずれ解放されるだろう」

答えたのは眼鏡の男だった。

「……」

本当かどうかを確かめる術はない。が、今はそれを問い詰めても仕方ない。

俺は視線をもう一度、倉庫の隅の木箱に止めた。

大人が隠れるには少し小さいだろうか。とすると、敵は目の前にいる二人だけと考えるも良さそうだ。

「で、俺に何の用だ？ 昨日ナンパの邪魔をした仕返しでもしよう
ってのか？」

とりあえず軽い口調で探りを入れてみる。

「まさか」

と、眼鏡の男は鼻で笑った後、

「ま、俺たちが普通の人間で、お前も普通の人間だったと仮定する
ならあり得なくも無いか。イイ女だったからな」

「眼科に行くことをオススメするぜ。いや、どっちかつーと精神
科のほうかな」

と、軽口を返す。

これではつきりした。この二人は俺が普通の人間でないことを知
っていて、そして向こうも普通の人間ではない。

つまり

「おい、おしゃべりはいいだろ。さつさとやっちまおうぜ」

と、もう片方 短髪男が眼鏡男にそう言った。

「俺を呼び出した理由は？」

「聞く必要はねえさ」

短髪男が好戦的な笑みを浮かべてじりつと歩み寄る。

「どうせすぐにわかんだから……なあ！」

「!?!」

男の風貌が変わった。

瞳が深紅に染まり、耳が大きく尖る。

周囲の空気がざわめく。

(夜魔か)

空間を操る力を持つ、夜の一族。その名のとおり、日が沈んだ後
の時間帯にもっとも力を発揮することができる種類の悪魔だ。

短髪男の目が赤く光った。

「ッ！」

咄嗟に一步飛び退ると、派手な音を立てて俺が立っていた場所の
足元のコンクリートが小さく砕けた。

ボウ……ッ！

俺の手の平に炎が灯る。

「……お返したッ！」

炎の塊が短髪男に向かつて飛んだ。

「ふん……！」

短髪男が床を蹴って回避する。

と、同時に、その目が再び赤く光った。

「ッ！」

避ける。今度は鉄製の倉庫の壁が大きくへこんだ。

衝撃波。

空間を歪めて放つ、夜魔がもつとも得意とする攻撃方法だ。威力は高いが速度は遅い。目が赤く光るので打ってくるタイミングはわかるが、無色透明の力自体は凝視すると微かに歪みが見える程度で捉えることが難しく、戦うときには相手の目の動きをしっかりと追っていく必要がある。

そしてそのセオリーから言つと、俺の今の状況はあまり歓迎すべきものではなかった。

「……ッ！」

左側面から感じた微かな悪寒に、俺は迷わず身を伏せる。

ゴオツ……と、音がして、頭の上を“何か”が通り過ぎ、少し時間があつて倉庫の隅にあつた木箱が砕け散った。

「避けたか。いい勘をしているな」

「ッ……！」

赤い瞳。

眼鏡男もその身を夜魔のものに変貌させていた。

（まずいな……！）

複数の夜魔と戦うのは賢いことではない。残念なことに俺の目は顔の正面にしか備わっておらず、二人分の目の動きを完全に追うことが不可能だからだ。

加えて運の悪いことに

「いいのか、その姿のまままで」

眼鏡男がそう言った。

“その姿のまま”というのは、俺が悪魔本来の姿（俺の場合は炎魔の特徴である赤い髪）を見せていないことを言っているのだろう。

「……お前ら相手にや勿体ないからな」

俺の強がりはこの状況ではかなり滑稽に響いた。

俺が悪魔の姿にならないのは、別に誰かに見られたら困るとかそういう理由ではない。

単純に、できないのだ。

つまり、とてつもなく運の悪いことに今日の俺は絶不調だった。

悪魔の姿に戻ることもできないほど 割合にすれば一割未満。

先ほど短髪男に放った小さな炎の塊。

あれが今の全力である。

（さて、どうしたもんか……）

もちろん俺だって馬鹿じゃない。自分の力の特性は理解しているし、こういうときのために一応準備はしてある。

ここに来る前には神村さんを通して楓に連絡を取り協力を依頼した。

ただ、この二人に他に仲間がいる可能性を考えると、楓がここに救援に駆けつけるためには先に瑞希の身の安全を確保してもらわなければならない。

状況的に、期待はしないほうがいいだろう。

自分だけの力で何とかしなければならぬ。

となると

（やるしかない、か……）

右手に力を込めると、拳が炎に包まれた。

幸い、炎の力と違って身体能力は調子による影響が小さい。悪魔の姿になったときと比べれば能力は落ちるが、人間の姿での最高の動きはいつでも出すことができる。

とすると、接近戦が最良の選択だ。

「行くぞッ！」

床を蹴って突進する。

男たちは牽制の衝撃波を放ち、俺の死角を取ろうと左右に分かれた。

俺は横にステップして衝撃波をやり過ぎすと、右に動いて短髪男を追った。理由は簡単。先ほどの攻撃を比べて、短髪男のほうが衝撃波の力が強かったからだ。

「ッ……速い!？」

短髪男が驚きの声を発する。

どうやら身体能力のベースはこっちが上のようなのだ。

再び放たれた衝撃波をやはり横のステップで避け、一気に短髪男へと肉薄し、

「はぁッ!！」

炎を纏った右拳を短髪男に叩き込む。

「くっ!！」

短髪男は足を止め、ガードの姿勢を取った。

だが、

「!？」

再び、側面から迫ってくる悪寒。

俺の足は反射的にブレーキを踏み、バックステップした。

直後、眼前を空間の歪みが通過していく。

「……ちっ」

舌打ちして眼鏡男を睨みつける。

(やっぱりまともにもいくと厳しいか……)

なるべく眼鏡男の射線上に自分と短髪男が並ぶように動いて援護しにくくしたつもりだったが、気配だけで位置を探るには限界がある。ましてや目の前の敵にある程度集中しつつ、死角にいる敵の位置を正確に把握するなんてのは不可能だ。

「……わりい。こいつ、案外いい動きしやがる」

「油断するな。楓のヤツほどじゃないが、連中が危険視するぐらい

だ。甘い相手じゃない」

男たちは俺を挟み込むようにして体勢を整える。

(……連携も悪くない、か。こいつはきつついぜ)

二人で戦うことに慣れている。

当然、夜魔の特性もよく理解している。

これでは隙を突くのも容易ではない。

とにかく一人。

どうにかして戦闘不能にできれば

俺はチラッと倉庫の中央を見る。

倉庫の天井には、それこそ学校の体育館のような照明が備わっている。が、今は電気自体が通っていないのか明かりは点いておらず、この倉庫の中を照らしているのは中央にぶら下げられたランプだけだった。

(……一か八か)

俺は後ずさるようにして中央へと移動する。

そうしながら、言った。

「……なあ。お前ら、夜魔だよな？ 夜の一族ってのはやっぱりアレ

か？ 夜目も効くもんなのか？」

「なんの話だ？」

二人の男は俺の突然の問いかけに怪訝そうな顔をした。

俺は続ける。

「俺はどつちかつつーと鳥目だ。夜に便所に起きたときなんか、電気点けるの面倒くさがると大体ロクなことにならねえ。何かに躓いたり、ドアの角に足の指ぶついたりしちまってさ。……あんたらはどうだ？」

俺の体がランプの真下へと至る。

眼鏡男が俺の意図を察したようだった。

「……明かりを消そうというのか？」

「あんたらのその赤い瞳、やっぱり力を使うときは暗闇の中でも光るのかい？」

「馬鹿な。お前のほうこそ右手に纏ったその炎、暗闇で有利に働くとは思えんがな」

眼鏡男はそう言った。

俺は口元を小さく歪めて、

「どうかな。やってみなくちゃわからないぜ」

そう言つて、頭上に手の平を向ける。

放たれた炎はランプを吊るしていたロープを一瞬で焼き切った。

「!?!」

本当にやると思っていなかったのだろう。二人の男は驚きの表情を浮かべて

ガシャン!

ランプの碎け散る音。

それと同時に、辺りは急速に闇に包まれた。

(……見えねえ)

当然である。夜魔の赤い瞳が輝くのは力を放つときだけだ。それも別にカメラのフラッシュのように輝くわけじゃない。辺りが暗いほうが認識しやすくなるのは確かだが、視界に入っていないとタイミングが計れないのは暗くても明るくても同じである。

もちろんそんなことは承知の上だ。意図は別にある。

右拳に炎を灯す。

すると薄っすらと視界が広がって、暗闇の中、二つの影が動くのがわかった。

すぐには仕掛けてこない。おそらくは何か罠があると考えているのだろう。

(……そんじゃ、やるか)

俺はポケットに突っ込んでいた左手を出す。

そうしながら、薄闇の中で動く二つの気配に集中する。

……チャンスは一瞬だ。

敵を牽制するために少し動く。

と、

(……来た！)

薄闇の中で赤い瞳が小さく輝く。位置からすると短髪男のほうだろうか。

俺は横にステップしてそれを避けると、回り込むようにしてその相手に向かっていった。

そして左の拳に力を込める。

気配を感じた。

二人の男たちが、俺の動きを　俺の拳に宿った炎の動きを懸命に追う気配を。

(……さあ。食らいやがれ！)

ぐつと目を閉じ、左拳に炎を灯す。

その瞬間。

「!?」

突然、眩い閃光が俺の左拳から放たれた。

「な　ッ!?」

男たちの驚愕の声。

それは俺が左手に握りこんだマグネシウム粉末の閃光だ。……十
九時という時間指定から、相手が夜魔である可能性を考慮して、近
隣の高校から(かなり強引な手段で)急遽調達したものだ。た

暗闇の中で俺の動きを追っていた男たちに、それを回避する術は
ない。

(……ここしかない！)

俺は苦悶の声を上げる短髪男に一直線に迫った。

「くっ……!!」

視界を失いながらも短髪男が衝撃波を放つが、その力は見えない
相手に当てられるほど簡単なものじゃない。

俺は見当外れの衝撃波を一直線にやり過ごして短髪男に肉薄した。

「くらいやがれええええええッ!!」

右下から突き上げるように繰り出した右拳が短髪男の脇腹にめり
込む。

短髪男が苦痛の声を上げる。

それだけじゃ終わらない。

「おおおおお　　！！！」

拳の炎が唸りを上げ、男の右半身が炎に包まれた。

「ぐあああああッ！！！」

短髪男が床に転がり苦悶の声をあげる。

「……………貴様　　！！！」

振り返ると、僅かに視力を回復していた眼鏡男が、短髪男を助けようと向かってくるのが見えた。

瞳が赤く輝く。

俺はその攻撃を横に動いて軽く避けると、その後で襲ってきた眼鏡男の右足も、体を横に捌いて避ける。

「く……………ッ！」

俺の目の前、僅か数十センチの距離に、体勢を崩した眼鏡男の無防備な胴体があった。

右の拳に再び力を込める。

そこに宿るのは凝縮された熱の塊　　“太陽の拳”。

「終わりだあああああ　　ッ！！！」

右拳は眼鏡男の胴体を捉え、暗闇に包まれていた空間はオレンジ色に照らされた。

1年目8月その4

真つ黒な波が海岸に押し寄せてくる。

夜の海は不気味だ。波打ち際に座り込んでこうして眺めていると、まるで何か見えない力が自分をその中に引きずり込もうとしているかのような、そんな錯覚を覚えてしまう。

こういうのを見ると、昔の人間が、海に魔物が棲んでいると考え、てしまったのもわかるような気がした。

「ふう……」

息を一つ。

昔からたくさんの人がこの海で漁をして、あるいはこの海を渡ろうとして、そして幾人もの人間がこの海に引き込まれて死んでいったのだろう。まだまともな船も造れないような時代。この広い海に放り出されてしまえば、ちっばけな人間など助かるうはずもない。あるいは俺が感じる見えない力は、そうして散っていった人間たちが自分を誘おうとする声なのだろうか。

昼間とはまったく違う姿を見せる海。

「瑞希……」

ポツリ、と、俺はあいつの名を呟いた。

あいつはいつたどこに行ってしまったのだろう。

まさかこの暗い海に飲み込まれてしまったのだろうか。

俺は足元に転がっていた小さな白い貝殻を手にとって見つめる。

……もしそうだったとしたなら。それは、まだ経験の浅い瑞希を一人で泳がせるようなことをした俺の責任だ。

「……瑞希」

俺は貝殻を力いっぱい握り締めた。手のひらの痛みなどほとんど気にならなかった。そんなことを気にするような隙間は、今の俺の心の中にはなかった。

頭に浮かぶのは、ただ瑞希のことばかり。

「すまない、瑞希」
そして俺の目から一筋の涙が零れ落ち

……ゴソツ!!

「いてえ！」

突如、後頭部を襲った鈍い痛みで現実へと引き戻された。

俺は頭を押さえながら後ろを振り返って、

「だ、誰だ！？ 人がせつかく悲しみに浸っているというのに！」

「……悲しみに浸るのは勝手よ。でもね」

と、そこには。

怒りに拳を震わせる浴衣姿の女がいた。

「勝手に死んだことにすな!!」

ゴキイ!

「すげえいてえ!!」

首の骨の辺りから何やら不吉な音がした。

「……ったく」

二発お見舞いして満足したのか、パンパンと手を叩きながら瑞希が腰に両手を当てる。

「何が“手のひらの痛みなどほとんど気にならなかった”よ。そんな薄い貝殻、そんなに力いっぱい握ったら割れるに決まってるじゃない」

迫る瑞希の顔。

俺は視線を泳がせて、

「い、いや。だってお前、泳ぎを覚えたばかりのやつが調子こいて一人で泳いで帰ってこなかったっていったら、そりゃあもう海の魔物に魅入られてしまったというのが定番で　いや、ごめんなさい。俺が悪かったです」

再び向けられた瑞希の鋭い視線に、俺は自分の非を認めざるを得なかった。

……俺、いつからこんな卑屈な人間になったんだろう。

「まったく。海を見てボーっとしてるからどうしたのかと思って見に来てみれば……」

ブツブツ言いながら、瑞希が去っていく。

俺はそんな彼女の後ろ姿を見送りながら腕時計を見た。

時間は夜の九時三十分。

……あの戦いの後。十分ほどして姿を現した楓に、まだ息のある二人の夜魔を引き渡した俺は、その口から瑞希が無事だったことを聞くと、すぐにみんなの待つ旅館へと戻った。

俺が旅館に着いたのが八時三十分を少し回った頃。楓の言葉どおり瑞希もすでに旅館に戻っていたが、あいつは自分がどういう状況だったのかをみんなには話さなかったらしい。

みんなはそれこそ瑞希が溺れたんじゃないかと心配していたようだが、俺が旅館に戻るなり、今度は“二人で抜け出してどこかに行っていたんじゃないか”なんてあらぬ（ありえない）疑いをかけられることになってしまった。

まあ、そこは俺たちを探しに行っていたらしい雪と直斗がタイミング良く戻ってきたおかげで曖昧なまま誤魔化すことができたのだが。

それで、ひとまず事件は一件落着。

(……とはいえ)

晴れ晴れ、という気分にはほど遠い。

“瑞希が狙われた”

その事実が俺の胸に暗い影を落としている。

俺と雪が力に目覚めて 暴走した悪魔たちを退治するようになって 今年の春までずっと、日常と非日常の境界ははっきりしていた。俺たちは昼間は他の連中と何も変わらない、ただの学生として何の気兼ねなく過ごすことができていたし、夜、悪魔たちを退治するときも、雪以外の周りの人間のことを気にかける必要はなかった。

今回の件が“たまたま”なら、それはそれでいい。しかし。

ついに“非日常”が“日常”側へと手をかけつつある。そんな悪い予感がしていた。

きつかけはやはり、雪が狙われたあの事件か。

あるいは、火種はもともあって、今それがたまたま表に出てきているだけなのか。いずれにしても、今回の件は特に楓のヤツに問いたださなくてはならないだろう。身内が狙われた以上、これまでのように曖昧なまま、つてわけにはいかなかった。それだけは確かだ。

「優ちゃん」

いつの間にかすぐ後ろまで雪が近付いてきていた。

「ん」

何の用だ、という意味の適当な擬音を返すと、雪はそつと俺の両肩に手を置いて言った。

「お疲れ様、優ちゃん」

「は？　なんだ、突然？」

聞くと、雪はニツコリと微笑んだ。

「よくわからないけど、瑞希ちゃんのピンチを助けてくれたんでしょ？」

まあ、色々な事情を知っているこいつなら想像できなくはないだろう。

「……なんのことだか」

それでもバレバレであることを承知の上でとぼけると、

「なんのことだろうね？」

雪はそれ以上追求しようとはせず、両手に持ったものを俺の眼前にぶら下げてみせた。

「そろそろ準備できるよ？　花火、やる？」

「ん。ああ……」

今日の午後は色々とあってバタバタしてしまっただが、明日の午前

中にはここを経つことになる。

「そうだな。やるか」

気持ちは未だすつきりしないままだったが、事件はひとまず無事に落着いたのだ。少しの間は懸念を忘れて楽しむのもいいだろう。

「お〜い。おせ〜ぞ！」

雪と並んでみんなの待つところへ向かうと、すでに手持ちの連発花火をいくつか抱えた将太が手を振っていた。

「おそ〜い！」

藍原も将太に便乗して俺を非難する。その少し後ろに瑞希と直斗もいて、どこで調達したのか、雪をはじめとする女性陣はみんな浴衣姿だった。

「不知火、どう、どう？ あたしの浴衣、可愛くない？」

と、デフォルメされた猫の柄の浴衣を着た藍原がくるっとターンしてみせる。

俺は言った。

「ああ。浴衣は可愛いな」

「よっしゃー！ …… って、あれ？ なんか意味合いちがくない？」

「気にすんな。ってか、なんで浴衣？ 海で浴衣って違和感ないか？」

「なにを言う！」

俺の呟きに将太が即座に反応する。

「夏といえば花火！ 花火といえば浴衣！ これが定番だ！ ちなみに浴衣はすべて俺が自腹で用意した！」

「あ、そ」

すげえどうでもいい。

「じゃあ、そろそろ始めようか」

と、相変わらずマイペースな直斗の一言でプチ花火大会が始まった。

最初は地面に置いて火をつけるタイプの花火。光の玉が打ちあがるもの、色とりどりの火花が噴水のように溢れ出してくるもの

それらが光を発するたび、海や砂浜、そしてみんなの顔の輪郭が色とりどりに浮かび上がる。

正直、見慣れた花火ばかりなのだが、実際に目の当たりにすると意外に気分が高揚するから不思議なものである。

置くタイプの花火がなくなると、今度はそれぞれが手に持つタイプの花火へと移行する。

「砂浜でねずみ花火はあんま面白くねーな……」

砂で身動きが取れず、その場で火花を噴射するだけの哀れなねずみ花火を見下ろしながら、俺は改めてみんなを見回した。

「花火はいいねえ。なんか青春って感じ。あれ、雪ちゃんはやんないの？」

「うん。私はこうやって見てるだけのほうが好きかな」

「ほほう。だったらあたしが雪ちゃんの分まで頑張っちゃうかねー」
藍原と雪が少し離れたところで遊んでいる。

少し視線を横に移動させると、直斗はバケツに海水を汲んできて終わった花火を片付けているところだった。

さらに視線を移動させると、

「シヨルダーバズーカー発射ああああッ！！ ふははははは！

！ 見たか、この火力！ 貴様らごとき虫けらも同然よッ！！」

「……」

連発花火を手に、海に向かって恥ずかしい小芝居をしている可哀想な少年が一人。

昼間、女の子にフラれすぎておかしくなったか。

そして

「優希」

「ん？」

「ちよつと隣、いい？」

そうやって俺の隣を指差す瑞希。

俺は答えた。

「ダメ」

「……そう」

「こら、待て」

あっさり立ち去ろうとした瑞希を俺は慌てて引きとめた。

「なに？」

「なに、じゃねえだろ。どういふ反応だ、それは」

「？」

「だから。そこであっさり引き下がられると俺が寒いだろうが」

俺がそう言っていると、瑞希は少し考えて、

「ああ。冗談ってこと？」

「……」

なんだろうか、このいたたまれない気持ち。

俺は照れ隠しにそっぽを向いて、

「つか、なんだよ。らしくねえな。さっきだつて人の頭ポカポカ殴りやがったくせに」

「あれはあんたが変な小芝居やつてるからでしょ。……そんなことより、ねえ」

瑞希が俺の隣に屈み込む。ふわっと長い髪がたなびいて、潮風にシャンプーの香りが混じった。

「優希。あなた今日、私がない間どこに行っていたの？」

「……」

チラッと横目で顔を窺うと、真剣な目が俺を見つめていた。

……予想していた質問ではある。あの二人の夜魔がどこまでのことを瑞希に喋ったのかはわからないが、この様子だと俺の正体とか、悪魔のこととか、そういうことは聞かされていないようだ。ただ、自分がいなくなっていた時間に俺がここを離れたことを藍原から聞かされたらしいから、自分がさらわれたことについて何か知っているんじゃないかと、そう疑っているのだろう。

もちろん本当の話はできない。

瑞希は自分がさらわれたこと自体をみんなに隠している。

なら、俺はその設定で答えるしかないだろう。

「さあな。お前と同じで、ちょっと秘密の逃避行さ」

「……」

疑い。

戸惑い。

それらの感情が行き交って、瑞希の視線はようやく俺を離れた。

ホッ、と、息を吐く。

その、直後。

「ありがとう、優希」

「……へ？」

意表を突かれて瑞希を見ると、彼女の視線は再び俺の顔を捉えていた。

「……何の礼だよ」

「そうね」

瑞希は少し微笑んで、

「昼間、泳ぎを覚えてくれたお礼、かしら。一応、泳げるようになったのはあなたのおかげでもあるしね」

「……気持ちわりいな。何か企んでるじゃねえのか？」

俺がそう言っつて悪態をつく、と、瑞希は小さく笑った。

「ありがたく受け取っておきなさい。感謝してるのよ。普段から適当でグータラなあんたが、それなりに真面目に私のために働いてくれたんだから」

「素直に喜べないぞ……」

「あら。精一杯褒めてあげたのに」

と、瑞希は平然とした顔で言う。

「……」

真意が読めない。

まさか真相に気付いたということはないだろう。とすると、カメラでもかけているのか。それとも俗に言う女のカンってやつなのか。いずれにしても

「線香花火、持ってきたわ。一緒にやらない？」

「……ま、たまにはいいかな」

確証はないはずなのだ。であれば、余計なことを口にする必要はないし、珍しく良さそうな彼女の機嫌を敢えて害する必要もないだろう。

「はい。一本ずつよ」

瑞希の手から線香花火を受け取ると、近くにあつたろうそくでその先端に火を灯す。それがくるくると丸まって火玉になると、パチッ、パチッ……と小さな音を立て始めた。

最初の一つは風に揺れてすぐに落ちてしまった。

二つ目は長持ちして、火玉が落ちることなくそのまま消えてしまった。

「最近の線香花火って、このパターン多いよなあ」

昔の線香花火って、最後は必ず火玉が落ちて終了だった気がするのだが。

三つ目。今度は二本の線香花火を束ねて火をつけることにしたと。

瑞希がポツリと呟く。

「いつ以来かしらね」

「なにが？」

「あんたと一緒に花火なんて」

「あ……」

俺は少し言葉に詰まって、

「十年ぐらい前じゃないか？」

記憶にはないが、おそらくは幼稚園か、小学校低学年か、そんなもんだろう。瑞希がウチに頻繁に出入りしていたのはちょうどその頃までだ。逆に言うと、その頃まではほぼすべてのイベントに一緒に参加していたような記憶がある。花火も何回かは一緒にやっていたはずだ。

「……」

瑞希は何も言わずに線香花火の火玉を見つめていた。

「え!？」

ああ、無情なるかな。危機を察した瑞希は将太を止めるところか、自分だけ雪たちのところへと避難しているではないか。

「やれ!！」

無責任なかけ声は藍原だ。

「将太。危ないからほどほどにね」

なんて、相変わらず冷静な直斗。

二人揃ってどついてやろうかと思ったが、距離的に不可能だった。

「待て、将太! それはシャレにならんぞ!！」

「問答無用! 死ねえ!！」

シュルシュル……と、音を立て、火が導火線を駆け登っていく。

そして将太の持つ筒の先は俺の方へ。

「!！」

俺は体を庇うようにして反射的に屈み込む。

シュルシュル……シュルシュル……

「……」

「……」

そして 静寂。

想像していた音も光もなく。

「あ、あれ?」

最初に声を発したのは将太だった。導火線はとっくに花火の本体に達している。にもかかわらず何の反応もない連発花火を将太はしばらく見つめていたが、やがて不発らしいことに気付き、手にした筒を覗き込もうとする。

「あ、危ない……!！」

そう言ったのはおそらく雪だったと思われる。

……その後、どういう結末が待っていたかは、ほぼご想像のおおりだと思われるが、一応、人を呼ぶには至らなかった、ということだけ言っておこう。

そうして、二泊三日の海水浴は過ぎていったのだった。

.....

神社の奥。鬱蒼と生い茂る森の中。ひっそりとたたずむ和式の小さな建物から小さな灯りがこぼれていた。

「そうか。結局五匹ともダメだったか」
ろうそくの明かりが揺らめく。

部屋の中央には男がいた。白い法衣に身を包み、年のころは五十歳前後といったところだろうか。

「紫喉様」
そしてその初老の男の前には若い青年が一人。

「こうなつては仕方ありません。多少の犠牲は覚悟の上で、我々が自らの手で楓とその一味を」

「馬鹿を言つな」
紫喉が厳しく青年の言葉を制する。

「楓を討ち取るのにどれだけの悪魔狩りが必要だ？ 二十人か？ 三十人か？ しかもヤツには仲間がいる。少なくとも上級氷魔が一匹、実力は未だ不明だが、二匹の中級夜魔を退けた炎魔が一匹。それだけではない」

こけた頬の奥から鋭い眼光が青年の体を射抜く。
「この組織の中にもまだ、あの連中に肩入れしようとする輩が残っている」

「光刃様はなんと……？」
「光刃様はもちろん、この紫喉の考えを理解してくださっている。だが表向き、ヤツはまだ、我々とはつきり敵対しているわけではな

いからな。今のままでは全力を挙げて討つことはできん」

「……では、どうしたら」

青年が悔しそうに唇を噛むのを見て、紫喉はわずかに表情を緩めた。

「急ぐことはない。今回のこととて、ヤツの仲間を炙り出すための探りにすぎん。……次の機会が訪れるまではしばし様子を見るところ。ただし楓と、そして 不知火雪に、優希、だったか。連中の監視は怠らぬようにな」

「畏まりました」

ろうそくの炎が揺れて まばたきを終えたとき、青年の姿はそこから消えていた。

「……」

静寂。

紫喉はゆっくりと目を閉じた。

虫の声。

「……忌々しい」

呟き。

「悪魔どもの力など借りずとも、我々は十分に役目を果たせる。二翼が欠けようとも、我らは」

見上げた紫喉のその瞳には、黒い炎が宿っていた。

1年目9月その1

終わった。

おそらくこうなることはずっと前から決まっていたのだろう。

“運命”。そんな言葉を俺は信じたくはないが、それでもこれは運命と呼ぶしかない。決して逃れることのできない運命。たとえ、その日が訪れることを、そこにいるすべての人間が望んでいなかったとしても。神が作り上げたその運命からは逃れることができないのだ。

そして今日。

その日は訪れてしまった。

悪魔の力を持つ俺にも、もちろん雪のヤツにも、それはどうすることもできない。

俺たちはただ、それがこの町に訪れるのを黙って見ているだけだった。

そして今。

俺は一人、この屋上から変わり果ててしまった景色を眺めている

「学校が始まったぐらいで下げさだよ……」

「む？」

その言葉で俺は我に返った。

振り返った視線の先には、風見学園の制服に身を包んだポニーテイルの女子生徒が一人、腰の後ろで手を組み、苦笑しながら立っている。

「……今日の突っ込み役はお前か」

再び視線をグラウンドへ。間近に迫った体育祭の準備だろうか。

新しく引かれたトラックの白いラインがこげ茶色のグラウンドにく

つきりと浮かんでいる。

由香が少し心配そうな顔をして、

「そんなに学校イヤなの？」

「いや、別に」

「……」

即答すると、沈黙が返ってきた。怒ったのかと思って振り返ったが、どうやら返す言葉に迷っていただけらしく、

「もう……」

由香は結局、困ったような顔をしてそう言っただけだった。

と、いうわけで。

俺たちの学校では十日ほど前から二学期が始まっている。

例の海水浴後、夏休み中は特筆するようなイベントはなく。ただ毎日をダラダラと過ごし、最後の二日間ぐらいは宿題に精を出して夏休みは平穩無事に終了した。

そして二学期。

ひと夏を越してクラスメイトの連中にも何か変化があるのかと思いきや、少なくとも俺の周りにはこれといって特筆すべき変化もなく。初日に行われた席替えでも俺は奇跡的に前までとまったく同じ窓際の一番後ろの席を引き当てて、まあ、本当に何の変哲もなく始まったわけである。

そして今。

「ところで由香。……何がどうなって、俺はお前と二人でこんなところにいるんだ？」

「え？」

俺の素朴な疑問に、由香は不思議そうな顔をした。

ここは屋上である。この風見学園の屋上は昼休みなどには大いに賑わう憩いの場所なのだが、今は放課後。しかも最後の授業が終わってから一時間近く経っている。放課後のこの時間ともなると、この屋上には人影がほとんどなくなってしまい、現に、今ここにいるのは由香と俺の二人だけだった。

「どうしてって、優希くんが話があるって言って呼んだんでしょ？」
「む？」

言われて、俺は今日の出来事を思い返してみるが、まったく思い当たらない。というか、さっきまですぐそのベンチでウトウトしていたせいか、今日の出来事がまったくもって思い出せない。

「ふーむ」

だいたい、何故由香のヤツを屋上に呼び出す必要があるのだろうか。話があるのなら別に教室でもいいはずだ。

（まるで俺がこいつに愛の告白でもするかのようなシチュエーションではないか）

念のため言っておくと、俺はこいつに告白する気もプロポーズする気もない。

と。

カサ。

「ん？」

何気なくポケットに突っ込んだ手に乾いた紙切れの感触。

（……おお、そうか！）

俺はようやく思い出した。

『水月さんにこれを渡してくれないか？』

なんて、今日の昼休み、中等部時代のクラスメートだった同級生に呼び出されて手紙を受け取ってしまったのだった。

確認するまでもなく、それがいわゆる“ラブレター”というものであることはすぐにわかった。

何故俺に、とも思ったが、そいつの話によると、最初は直斗に相談を持ちかけたものの断られしまい、自分と由香を繋ぐ共通の知人は、他に俺しか思い当たらなかった、ということらしい。

最初に話を聞いたときは直斗同様に断ろうと思ったのだが、そいつがあまりにも真剣な顔をしていたことと、万が一、由香がそいつのことを好きだったりしたら千載一遇のチャンス逃すことになってしまうので、とりあえず受け取ることにしたのである。

「？」

由香はきよとんとした顔で俺を見ている。

(……けど、まあ)

その男子生徒は由香とクラスメイトになったこともあったはずだし、もちろん名前と顔ぐらいは覚えているだろうが、こいつの口からこいつの名前を聞いたことはないし、仲良く喋っているところも見たことがない。顔は悪くないが特に目立つ存在というわけでもなかったし、そもそもこいつは人見知りだから、よく知らない相手からいきなりラブレターなんかもらっても困惑するだけだろう。

たぶん、そうなる。

が。

(待てよ。万が一、これであの男と由香が上手くいったとしたら……)

もちろんあの男も最初のうちは俺に感謝するだろう。が、そのうち俺の存在が煩わしくなってくるに違いない。いくら幼なじみとはいえ、自分の彼女が別の男と親しくしているのを見るのはおそらく気分がよくないはずだ。

(ふーむ……そうすると今作ってもらってる昼の弁当も無くなってしまっかな)

それは困る。

こいつの作る弁当は少なくとも購買のパンや学食の定食より遥かに上だ。

「優希くん？」

怪訝そうな由香の声。

だが、俺は構わずに思考を続けた。

(そもそもどうして俺がこんなことをせにゃならんのだ？ 上手くいったら俺が損をする恋の仲立ちなど……)

そんなことを考えているとだんだん腹が立ってくる。

(だいたい……なんと叫びたかな、あの男 福田、だったか。あいつなんか、料理ができて、世話好きで、いかにも理想的な奥さ

ん予備軍である由香の彼氏だなどと)

「ねえ、優希くん！」

俺が思考の世界に旅立っていることを察したのか、由香が少し強い調子で俺の名を呼び、制服の袖を引っ張った。

「……」

俺は思考を一時中断し、由香の顔をじっと見つめた。

「え。あの……」

由香がびっくりした顔をする。

「しかも、少なくとも不細工ではない」

「？」

「いや、待てよ。見慣れているからそう思うだけか？ 赤の他人が見たら不細工なのかもしれん」

「……あの。優希、くん？」

じっと見つめていると、恥ずかしがりやの由香らしく、頬が少しずつ赤みを帯びてくる。

そういう照れ屋なところも、ある一定数の支持を得られるポイントになるだろう。

「……ま、いいや」

しかしながら。

一回受けてしまった以上、まさかこのまま手紙を握りつぶすわけにもいくまい。

俺はポケットから少し皺のついた紙切れを由香の眼前に差し出す。すると由香は予想通り困惑した顔をした。

「これ……？」

「お前に渡してくれって頼まれた。まあ、なんだ。中身はよく知らん」

「あ。そうなんだ……」

さらに困惑した顔をして、由香は少しの逡巡の後、その手紙を受け取った。おそらくはこいつも、それがラブレターであることはわかったのだろう。

「……」

「……」

少しの沈黙。

俺は言った。

「……中、見ないのか？ ああ、差出人は中にちゃんと書いてるはずだぞ」

「あ、うん。家に帰ってからにしようかな」

「そうか。……まあ、そうだよな」

「なんだ、この気まずい空気。……例えるなら、息子がベッドの下に隠していた工口本を見つけた母親のような気分とでもいおうか。いや、そんなもの俺にはわかりやしなないし、これから一生体験することもないんだろうけど。」

まあ、とにかく気まずい。

そんな空気を向こうも感じ取っていたのか。

言葉を探していた由香がようやく口を開く。

「……でも、どうして優希くんが？」

「ん？ まあ、たぶん俺しか頼る相手がいなかったんだろ」

「そうなんだ」

そう言っただけで由香は手紙を鞆の中にしまい、それから顔を上げて俺を見た。

「じゃあ、返事も優希くんにお願いしてもいいのかな？」

「……別に構わんが」

俺がそう言っただけで、由香は小さく頷いて、

「じゃあ……他に好きな人がいるからごめんなさい、って、そう伝えて？」

「あー……」

なるほど。

「そうか。そいつはお前の好きなやつじゃなかったか」

「うん」

「それじゃ仕方ないな」

と、俺は言った。

こいつは片思いの相手がいながら、他の男のことを考えられるほど器用なヤツじゃない。それは手紙に目を通す前に答えが決まっているところから見ても明らかで、現時点ではまったくの脈なしってことだろう。

可哀想だが、そのまま伝えてやるしかない。

「呼び出した用って、それだけ？」

「ああ」

俺がそう答えると、由香はちょっとはにかんだ表情で手にしていた鞆を目の前に出して、

「じゃあ、たまには一緒に帰らない？ 今日友達ももう帰っちゃってるし……」

「ん……？」

少し考える。

どうしようか。

本当はこいつと二人で帰るのは諸事情によりあまり好ましくないのだが、まあ、今日は俺が呼び出して引き止めてしまったのだし、もともと俺たちの仲がいいのは知れ渡っていることだ。たまに一緒に帰るぐらいなら。

と、俺はそう考えて、

「だな。ま、帰る方向も一緒だし、別々に帰る理由もないだろ。じゃ、行こうぜ」

そう言って歩き出すと、由香は大きく頷いて後を付いてきた。

階段を下り、人の少なくなった廊下を進んで玄関へ。

男女の下駄箱は列が別々になっているのでいったん別れ、その出口で再び合流すると外へ出た。

(夕暮れか……)

下校時間ぐらいに外がオレンジ色に染まっていると、ああ、夏が終わったんだなあと思う。

グラウンドから遠く聞こえる部活の声。

どこことなく寂しい。

「そっぴや体育祭」

それらの声を背中に感じながら校門を抜けたところで、俺は少し斜め後ろを付いてきていた由香を振り返った。

「え？」

何か考え事でもしていたのか。由香はハッと顔を上げて俺を見た。

「体育祭？ 体育祭がどうかしたの？」

「何の種目に出るんだ？」

「私？」

と、由香がびつくりした顔で自分の顔を指差した。

「お前以外に誰がいるんだよ」

そう言うと、それもそうだね、と、由香は照れくさそうに俯いた。我が校には春と秋、年二回の体育祭があり、春は球技、秋は陸上とはつきり種目が分けられている。九月中旬に開催される後期の体育祭はリレーや百メートル走などという定番のものから、玉入れなどという、本当に陸上なのかと疑問符を付けてしまいたくなる競技まであり、陸上競技というよりは、いわゆる運動会のイメージに近い。

「私は女子の百メートルと二人三脚だよ」

「へえ」

俺は納得して頷いた。

こういう性格なので勘違いされることが多いが、由香は運動神経はそんなに悪くない。足の速さだけならクラスの女子で五本の指には入るし、持久力も結構あるから長距離走も無難にこなす。

ただ、要領が悪いのでいわゆる球技はダメだ。バスケのシュートなんて入ったところを見たことが無いし、バレーボールはサーブの番が回ってくるとほぼ失点確定という体たらくである。

その点、この秋の体育祭は、春の体育祭でかぶった汚名を晴らす絶好の機会といえるだろう。

「百メートルはやつぱ華だからなあ。ま、頑張れよ」

「うん。応援してね。……美弥ちゃんほどは無理だけど」

「藍原？ ああ、百メートルのもう一人は藍原のヤツか」

これまた納得する。藍原のヤツはあのネコのような外見のイメージどおりに足が速い。中学時代には陸上部でスプリンターをやっていたというから、それもまあ当然のことである。

「で？ 二人三脚は誰とだ？」

と、俺は尋ねた。

驚くべきことに、ウチの学校はいまどき男女ペアの二人三脚である。思春期真っ只中の高校生にはちょっときついんじゃないかと思うのだが、不思議と今のところ廃止になる気配はない。

そして由香の口から出てきた名前は予想通りだった。

「直斗くんだよ」

「……だろうな」

じゃなきゃ、由香が出場を承諾するはずがない。こいつのことだ。よく知らない男子と体を密着させるだけで、恥ずかしくて競技どころじゃなくなることだろう。

「けど、直斗のヤツ、二人三脚なんかに出るのか？」

大きな通りを右に曲がって住宅地の中へ。

近くの公園から子供のはしゃぐ声が聞こえた。自転車の買い物かごにビニール袋を乗せた主婦が俺たちを追い抜いていく。

「うん。私がお願したの」

「ふーん。直斗のやつ、もっと活躍できる種目があるだろうになあ」
体育祭では、基本的に同じヤツが出られるのは二種目までである。逆に、どんなに運動が苦手なヤツでも最低一種目には出なければならぬので、誰をどの種目に出すか、というのは結構重要な問題なのだ。

ま、男女問わず、運動神経の悪いヤツは大体玉入れと相場が決まっているのだが。

「で？」

俺は続けて聞いた。

「俺は何の種目に出るんだ？」

「え？……あ、そっか。優希くん、その時間はいなかったよね。どこに行ってたの？」

「まあそれはいいから。委員長には何でもやるから勝手に決めといてくれて言つといたんだ。その代わり一種目だけって約束でな」

「そうなんだ」

由香は納得顔で頷いて、

「優希くんが八百メートルに出るなんて珍しいなって思ったんだ」

「うげ。やっぱり八百かよ……」

八百メートルは単独で走るものとしてはウチの体育祭で最長の競技だ。長い距離はみんな嫌うので当然といえば当然で予想通りの結果ではある。

「頑張つてね。応援するから」

「……ま、適当にな」

そう答えた視線の先に俺の家の屋根が見えてくる。

「じゃ、また明日ね、優希くん」

「おう」

そうして俺たちは玄関先で別れた。

“組織”

楓がそう呼ぶ悪魔狩りの組織は千年ほど前にこの地に誕生したらしい。

聞いた限り、概要は次のとおりだ。

この国には、いくつもの悪魔狩りの組織が各地にあり、ここでいう“組織”というのは、その中の一つでしかない。

組織のトップは“光刃”と呼ばれる人物。といってもこれは名前ではなく役職名のようなもので、世襲制によって受け継がれてきたものらしい。

そして組織には光刃直属といわれる役職が五つ。

光刃の右腕、左腕、あるいは右翼、左翼といわれる“空刃”と“海刃”。光刃の護衛として常のそのそばに仕える“青刃”と“緑刃”。そしてこの地を滅多に動くことにはない光刃に代わり、各地を飛び回って地方の部隊を中心に統括する“影刃”の五人だ。

このうち“緑刃”という人物には雪の事件のときに俺も会っている。二十代と思しき女性だったが、顔はあまり覚えていなかった。

なお、この五つの役職のうち、空刃と海刃は世襲制。青刃と緑刃、そして影刃についてはその時点でもっとも相応しい者が選ばれることになっているそうだ。

まあ、その辺の事情は俺にはあまり関係ないので興味はない。

問題はここから。

現在の光刃はまだ若く、その親族が後見人として付いている。その人物は“紫喉”といって、組織の現ナンバー二であり、実質的な最高権力者。そして俺や雪を狙った張本人、ということらしい。

じゃあ何故、その組織のナンバー二が俺たちを狙うのか、ということろだが

悪魔狩りといっても、組織は昔から悪魔の力を借りてきたそう。実際に光刃直属の役職の一つである空刃は代々悪魔の血を引く家系だというのだから、悪魔は何でもかんでも排除する、というような組織ではないらしい。

ただ同時に、組織の中には、そのことに疑問を唱えるものも絶えなかった。

つまり“悪魔許容派”と“悪魔排除派”が常に混在していたというわけだ。

「色々あって何年前、極端な悪魔排除派の紫喉が組織の実権を握ったところへ、とてもタイミングの悪いことに」

電話の向こうから聞こえる楓の声はどこか愉快そうに聞こえた。

「これまで組織が悪魔の存在を受け容れざるを得なかった最大の要因 悪魔の血を引く最大の身内である空刃の今期の後継者が、組

織に従うことを拒否した。で、紫喉のヤツはそれを幸いに、組織やこの町から強力な力を持つ悪魔を排除する企みを始めた、ってわけだ」

淡々と話を続ける楓に、俺は質問した。

「俺や雪が急に狙われ始めた理由は？」

「たまたまさ。お前らが夜にコソコソとやっていたことがたまたま嗅ぎ付けられた。それは連中にとって無視できないレベルの力だった。だから狙われるようになったただけだ」

「瑞希のことは？」

「あれこそイレギュラーだ。連中は本来、一般市民に手を出すことはない。……ま、あの女が一般人の枠に収まるかどうかはわからない」

そう言って楓は笑った。

つまり 少なくとも悪魔狩りは一般の人間に危害を加えることにはないらしい。今後、瑞希に再び危険が迫ることや、由香たちにさらなる手が伸びるようなことはまずないだろうということだ。

それを聞いて俺はひとまずホッとした。

しかし

俺はさらに質問を続けた。

「今後俺たちが悪魔狩りに狙われないようにするのはどうすりゃいいんだ？ 今の話だと、もともと俺たちが狙われなきゃならない理由はないんだろ？ その なんつったっけ？ 紫なんとかいうオッサンをぶん殴りにいけばいいの？」

「それも面白いが、それじゃ向こうに理由を与えるだけになるな。

……雪の事件にしろ先日の事件にしろ“悪魔の側に落ち度があった”“脱走した悪魔が勝手に命を狙った”なんて、あんな手の込んだことをしなきゃならなかったのは、そもそもお前たちの命を狙う正当な理由が向こうにないからだ。組織は表向き、害のない悪魔を退治してはいけないことになっているからな」

「じゃあ」

「今は、とりあえず大人しくしている」

楓はそう言った。

「悪魔がらみで何かあったら沙夜のやつに相談するといい。あまり勝手に動く連中の罠にはまる可能性があるからな」

「神村さんも悪魔狩りなんだろ？ あの人は味方だと思っただけか？」

「味方？ ……ま、今のところ敵じゃあないな」

「……」

その言い方には何か意味があるのか、あるいはこいつ特有のただの意地の悪い言い回しなのか、判断がつかなかった。

俺の思いを受話器の向こうで感じ取ったのか、楓は補足するよう続けた。

「とにかく今は連中に理由を与えなければいい。向こうだって偶然を装った作戦が二度も失敗したんだ。そう何度も手は出せない。しばらくは大人しくしてるだろう」

「わかった。こっちには判断できるほどの材料がないからな。お前の言うとおりにしとく」

「それが賢明だ」

そう言って、電話は一方的に切られた。

「……」

ツィ、ツィ、という音を発する電話の子機を無言で見つめ、俺はベッドの上で大きなため息を吐く。

子機の電源を切ってベッドの上に転がった。

窓の外はもう真っ暗になっていた。

時間は二十二時三十分。

しばらくボーっとしていたが、やがてベッドから起き上がり、部屋を出た。

一階に下りると居間は真っ暗だ。雪も瑞希も自室に戻っているらしい。

冷蔵庫を開けて麦茶を取り出す。

(……とりあえず)

そこでようやく俺は思考を再開した。

楓の言葉を信じれば、俺の最大の懸念は払拭されたことになる。命を狙われることがあるとしてもそれは俺と雪だけで、他の連中に危害が及ぶことは心配しなくても良さそうだ。

もちろん自分と妹の命が狙われているというだけでも気分の良いものではないが、楓によるとそれもしばらくは考えなくて良いらしい。

まずは平穏な日常が戻ってくるだろうということだ。

ただ 次に狙われるときまで何もしないで待っている、というのも性に合わない。

(……楓のやつに頼りっぱなしってのも、どうもな)

ただ、下手に動けば楓のいう“やぶ蛇”にもなりかねない。

(どうしたもんかな……)

コポコポと透明なコップに茶色の液体が注がれていく。それを一気に飲み干すと、少しだけ思考がすっきりとした。

「……よし」

とりあえず寝よう。

とりあえず寝て、明日辺り……そう、まずは神村さんに再び接触してみるのがいいだろうか。あの人から情報を引き出すのは少し骨が折れそうな気がするが、まあ何もしないよりはマシだろう。

「……ふああああ」

大きなあくびを一つ。

そうして俺は自室へと引き上げるのだった。

1年目9月その2

そんなこんなで体育祭の日。

「ねえ、優希くん！」

「あん？」

校舎裏で水を飲んでいた俺のところには由香がやってきたのは、昼休みの少し前のことだった。

「あのね、あのね。四百メートル、斉藤くんが一位だったんだよ。

それでね、私たちのクラス、全体で総合四位だって」

「まあ、落ち着け」

蛇口をひねって水を止めると、珍しく興奮した様子の由香を止める。

空はススキ雲が少しかかっている程度の体育祭日和だ。グラウンドからは大きな歓声と、時折悲鳴のような声援が聞こえてくる。

何やら盛り上がっているみたいだ。

ちなみにこの学園は一学年五クラスで全部で十五クラス。その中で総合四位なら一年生としてはかなりの好成績といえるだろう。

「斉藤のやつ、サッカー部でも一年レギュラーだしなあ……」

四百メートルで一位をとった斉藤というのは、サッカー部期待のエース候補で俺とも比較的仲の良い男子の一人だ。

「すごいよね。二年生と三年生の人と一緒に走ったのに」

「ん？ そっぴや、もうそろそろお前も出番じゃないのか？」

「あ、うん」

由香の出場する女子百メートルは次の次回りだ。

「応援しててね、優希くん」

「気が向いたらな」

ひらひらと手を振って由香と別れ、学校の敷地内をブラブラと。そっぴや。

ウチの体育祭は日曜日開催で、父母や家族の観戦がある。だからこうして敷地内をブラついていると、小学校の運動会ほどではないが、生徒の家族らしい人たちの姿が結構目に付いた。

(そっぴや雪のヤツも応援に来るとか言ってたな)

日曜日だから雪も瑞希も今日は普通に休日だ。とはいえ、瑞希のヤツは部活があるはずだから、来るとしたら雪だけだろう。

……本当に来るのだろうか。

俺としてはあまり来て欲しくない。

何故かというと

「おい。彼女はまだ来ないのかー？」

「次、俺の種目なんだけど、雪さん、見てってくれるかな？」

「おいコラ、優希。彼女はいつたいたいところ」

「知らん！」

というやり取りを、中等部からの繰り上がり組　つまりは雪のファンを自称する連中と繰り返すハメになるからである。俺がクラスの応援をほっぽってこうしてブラブラしているのも、そんなやり取りに嫌気がさしたからに他ならない。

と。

ワアアアア、というひととき大きな歓声が聞こえた。

どうやら午前中の花形競技、百メートル走が始まるようだ。

百メートル走には各クラスから男女二人ずつ、一年生から三年生の合計十五クラスで計六十人が参加する。それを男女別に、一年生から三年生までをすべてごちゃ混ぜにし、くじで六人ずつの男女各五グループに分けて競うのだ。

ウチの学校の方針として、一年生も三年生もハンデはつけないことになっている。高校生にもなればそれほど運動神経に差はないだろうというのがその理由だが、それでもやはり一年と三年では結構差があるものだ。

だから三年生ばかりのグループに一年生が入ったりすると結構悲惨だったりするのだが

「……あいつって、そういうヤツだよな」

俺は百メートル走の順番待ちをしているグループを遠くから眺めて思わずそう呟いていた。

視線の先にはジャージ姿の由香。そしてそこに並ぶ他の五人履いているジャージの色から、全員が三年生であることがすぐわかる。

周りを三年生に囲まれた由香は一人、肩身が狭そうにしてちっちゃくなっていた。

(……南無)

遠めに見てもかなり緊張しているようだ。周りが三年生ばかりということ以外にも、ウチのクラスが現在総合四位で、一年生としてはかなりいい位置につけていることもプレッシャーになっているのかもしれない。

(やれやれ……)

ちよっとぐらいアドバイスしに行つてやろうかな、なんて思っていると、ちよつとその由香に近付いていく直斗の姿が見えた。

どうやら考えることは一緒だったらしい。

まあ、あいつなら俺よりもよほど上手いアドバイスをすることだろう。

そして結果、由香は六人中四位だった。

他が全員三年生だったことを考えれば、十分な結果といえるだろう。

さて、そんなこんなで種目は進んでいく。女子の百メートル、もう一人の選手である藍原はぶつちぎり第一位になっていたようだが、あまり興味はないので詳細は割愛しよう。

続いて男子の百メートル。足の速い直斗とサッカー部の斉藤は別の種目に出場が決まっているため、半分捨てる形で将太と、あいつと仲の良いクラスメイトの谷というお調子者のデコボココンビが出場したが、それぞれ三位、四位と健闘した。

その後の障害物リレーでは竜二　忘れてる人も多いかと思う

があえて説明はしない　　が、二位と大健闘。

結果、ウチのクラスは午前中の苦戦が予想された種目で、思った以上の成績をあげることができていた。

「……頑張ってたなあ」

そんな中、俺は相変わらず敷地内をブラブラ彷徨っていた。

時間は十一時三十分。

午前中の競技はいよいよあと二種目　二人三脚と玉入れを残すのみとなり、俺はそのころになってようやくクラスの待機場所へと戻ってきた。

もちろん、競技に参加する直斗と由香の様子を見るためである。

「あ、優希」

行くと、ちょうど直斗と由香がクラスの女子二人の助けを借りて足をタオルで縛っているところだった。

「どーなんだ？　いけそうなのか？」

ジャージのポケットに手を突っ込んだまま歩み寄っていくと、

「あ。じゃ、頑張ってたね」

手伝っていた女子二人がそそくさと立ち去っていく。

「……」

その二人は中等部でも同じクラスになったことのある生徒だ。嫌われているってほどではないにしろ、避けられているのは気付いている。まあ、学校の中　特に中等部から上がってきた連中の中には結構多い反応で、こちらとしてもある程度慣れっこではある。

俺も特別愛想を良くしようとは思っていない。

「ちょっとしか練習してないけどね」

そんな空気に気付いているのかいないのか。

直斗が何事もなかったかのようにそう言った。

「そうか。俺のおかげだな」

「……なんで？」

直斗の問いかけに、俺は由香を指差して、

「毎朝遅刻しそうになっているから、こいつの走りに合わせるのは

もう慣れっこだろ?」

「あ、そうかも……」

なんて、由香が納得しそうになったが、

「自分の寝坊を正当化しようとししないでよ。まったく」

直斗が苦笑する。

その言葉に、俺はわざとらしく不満そうに言った。

「だったらどうしてお前らはいきなり息が合ってるんだ? まさか

愛の力とでもいうつもりか?」

「そうかもね」

直斗はさらりと流してしまった。

「……」

こういう返し方をされると、俺としては非常に面白くない。

「ああ、そうかいそうか。だったら二人でせいぜい楽しくやってみてくださいな」

拗ね気味にそう言ってその場を立ち去ろうとすると、

「あ、優希くん。応援しててね」

と、由香。

俺はチラリと視線だけで振り返って、

「イヤだ。お前らの愛の力だけでなんとかしてくれ」

そう捨てセリフを吐いてその場を立ち去った。

結果 直斗、由香組は見事一位となった。愛の力があつたかどうかはともかく、やはり十数年の付き合いは伊達ではなかったらしい。

そんなこんなで二人三脚が終了。

午前のプログラムは残すところ玉入れのみとなった。

はつきりいつてこの競技こそまったく見所がない。

さっさと昼飯の準備でも始めるとしようか と。

そう思っていたのだが、

「……ん?」

玉入れの準備中、ふと、待機している選手のところへ視線が止ま

った。

一年三組。他所のクラスの待機場所に、見覚えのある三つ編みのお下げの女子が立っていた。

神村さんだ。

後ろ姿だったが、あんな素朴な感じの髪型はいまどき珍しい。見間違えることはない。

(どうして玉入れなんか……)

仮にも悪魔狩りである。彼女が戦っているところを見たことはないが、一般の生徒と比べて運動神経が悪いということははずだが

と、一瞬そう考えたが、俺はすぐにその理由を推測することができた。

まず一つめに、見た目からして彼女は大人しそうで、決して運動が得意そうには見えないということ。二つめに、彼女はおそらく自分をアピールするようなタイプではないということ。そして三つめに、俺のように話し合いに参加しない人間は勝手に出場する種目が決められてしまうということ。

これらのことを総合して考えてみると、なるほど、神村さんの出場種目は玉入れしかないような気がしてくる。

(……ま、こういう行事、あんま興味なさそうだしな、あの人)

なんて、そんなことを考えながらも、俺はずっと神村さんのほうを眺めていた。

と。

「……ん？」

「……」

いつの間にか神村さんがこっちを見ていた。視線がぶつかり合う。

「……」

「……」

五秒、十秒……

(……え っと)

視線が離れない。

困った。

話しかけるには遠すぎる距離だし、目をそらすのも失礼な気がする。かといって、にこやかに手を振ったりするのは俺のキャラじゃない。

……だいたい、俺と神村さんの関係ってのはなんなのだろう。

赤の他人より親しいといえるのか、といっても友達ってわけじゃない。例の悪魔がらみの話をするのならともかく、日常的に気軽に話しかけていい関係なのかどうかもわからない。

こういうとき、テレパシーなんてあったりすると便利なのになんてことを思っていると、

ピッ!

笛の音がして競技が始まった。

神村さんもようやく俺から視線を外し、足元の玉を拾い始める。

俺もホッと視線を外して、

(そろそろ戻るか……)

昼食の準備をすべく、クラスの待機場所へと再び足を向けた。

途中、もう一度神村さんのほうを見る。

彼女は淡々と玉をカゴに投げ込んでいた。……が、全然入らない。

(……意外と不器用なんだな)

そう考えると妙に可笑しくて、俺は小さく笑いながらクラスの待機場所へと戻っていった。

昼食後。

「うげえ……食いすぎた」

「優希くん、大丈夫？」

隣には心配そうな顔の由香。

「だから食べ過ぎないようにって言ったのに」

正面には少し困ったような顔の直斗。

俺は右手を口もとに当てながら、

「もうダメだ……非常に残念だが、こんな状態で八百メートルを走っても皆に迷惑をかけるだけだろう。俺は保健室に行ってくる。だから直斗。お前が代わりに」

「ダメ。僕はもう二種目決まっているから代理では出られないよ」
「ちっ……」

「ったく」

直斗は呆れながらも笑って、

「優希は運動神経いいんだからさ。真面目にやれば一位だって狙えるでしょ。頑張んなきゃ」

「なにを言ってる。頑張ったら疲れるじゃないか」

「たまには疲れるぐらい頑張らないと。そのために普段怠けて力を貯めているんでしょ？」

「……」

嫌味なのか、あるいは普段の怠け癖をフォローしようとしてくれているのか、どうにも判断のつかない言い回しである。

「だいたいよお。別に勝ったからって大金持ちになれるわけじゃねえし。これで勝ったら冬休みが延びるってんなら頑張るんだが、いまいちモチベーションがなあ」

「でもみんな頑張ってるし……」

と、俺の屁理屈に由香が真面目に返答しようとしたところで、

「あ、由香！ ちょっと、ちょっと！」

「えっ？」

クラスの女子が遠くで由香を手招きしていた。

「あ、……ちょっと行ってくるね」

由香は俺たちにそう断って立ち上がる。

「おう。……ってことで」

走り去っていく由香の後姿を見送りながら俺は言葉を続けて、

「走って得なことがあるならいくらでも頑張るが、何も無いのに頑張ることはできないと、俺はこう主張したいわけで」

と、言いかけたところで、由香と入れ違いに近付いてきた影があった。

「要するに、勝つ自信がないから負けたときの予防線を張ってるだけでしょ」

「なにい!?!」

その言葉に俺は振り返る。

「実力が無いのを隠したいからやる気がないフリしてるんでしょ?」

そう言いながら歩み寄ってきたのは、黒を基調にした洒落た服装の背の高い女性　瑞希だった。

「こんにちは、直ちゃん」

そのちよつと後ろには、瑞希と対照的な白っぽいブラウスにちよつと長めのスカート姿の雪が微笑んでいる。

「いらつしゃい、雪。牧原さんも、応援に来てくれたの?」

と、直斗がにこやかに二人を迎える。

が、

「おい、雪」

俺は当然のごとく不機嫌な顔をして瑞希を指差すと、

「お前が来るらしいことは聞いていたが、こんな余計なものがついてくるなんて聞いてないぞ」

そう言うつと、当の瑞希は涼しげな顔をして、

「別にあんたの許可なんて必要ないでしょ?　私は直斗くんや由香ちゃんを応援しにきただけなんだから。別にあんたの結果なんかどうでもいいし」

「……いきなり喧嘩売ってんのか、このヤロウ」

「売って欲しいなら売ってあげるわよ。高いけど」

と、瑞希は笑う。

「くっ……」

すると、そんな俺たちの様子を見ていた雪が微笑みながら、

「瑞希ちゃん、今日は部活午前中だけだっていうから、せっかくだから一緒に。ね?」

「そこまでして連れてくんなよ……」

「心配ないわ。あんたが無様に惨敗する姿、しっかりとカメラに収めてあげるから」

と、瑞希が手に持ったコンパクトサイズのカメラをヒラヒラと揺らす。

「このアマ……」

俺は瑞希を睨みながら立ち上がる。

と、ちよつどそのとき、

「午後の八百メートル参加する選手の方はスタート地点までお集まりください。繰り返します」

と、場内アナウンス。

「ほら。さっさと行って負けてきなさい」

瑞希は妙に楽しそうだ。

「……」

俺はしばらく黙って瑞希を睨みつけていたが、

「ふん。わかったよ。お前の口車に乗るのはシヤクだが、負け犬呼ばわりされるほうがよほどムカつくからな」

そう言い捨てて、グラウンドのほうへ足を向ける。

「頑張つてね、優ちゃん」

後ろから聞こえた雪の声に軽く手を上げて応え、俺は八百メートル走のスタート地点へ向かって歩いていった。

わああああッ!

俺が僅差のトップでゴールを駆け抜けると、クラスの待機場所から大きな歓声が上がった。

「よっしや! よくやったぞ、優希!」

ゴール地点で待っていた将太が駆け寄ってくるなり、満面の笑顔で俺の背中を叩く。

「いてえから叩くな……」

俺は膝に手をつけて、荒い息とともに言う。

……きつい。とてつもなくきつい。

しかも昼飯を食った後に全力で走ったせいで脇腹が痛い。

「不知火く！ 今のであたしたち三位だよッ！」

将太と一緒にいた藍原の弾んだ声に、どうにか視線を上げてスコアボードを見ると、確かに、さっきまで三位だった三年四組との順位が入れ替わっているのがわかった。

「……そうか。そりゃよかった……」

だが、今の俺にはそれを喜ぶだけの体力もない。

「優希くん。タオル、どうぞ」

「……おう、サンキュ」

駆け寄ってきた由香からスポーツタオルを受け取り、ようやく上体を起こす。

汗を拭きながら雪たちのいる待機場所へと。

「うわ、めっちゃクール。つまんな〜」

後から付いてきた藍原が口を尖らせて文句を言う。

続けて将太が、

「おいおい、少しぐらいは喜べよ。一年生で三位なんてすげえことだぜ」

「あー……」

確かにすごいことなのかもしれないが、何度も言うように今の俺にはそれを素直に喜べるほどの体力が残っていないのだ。

やがて将太と藍原はそんな俺の無反応に飽きたのか、

「ちえっ、しゃーないなあ。じゃあ、あたしはクラスのみんなと喜びを分かち合ってくるですよ」

「んじゃ、オイラもそうしますかねえ」

二人揃って奇妙な口調になって、藍原と将太はクラスの待機場所

へと戻っていった。

俺はその二人の後姿をチラッと見て、

「喜ぶほどの元気なんて残ってねぇっての……」

「あの……ね、優希くん」

「ん？」

由香が何やらモジモジしていた。

「何だよ」

こいつがこいつという態度を取るときは、たいてい何か頼みごとがあるときだ。

俺が先を促すと、由香は俯き加減に俺を上目遣いに見て、

「あ、あのね。実は午前中の二人三脚でね。佐々木さんと木村さんが走ったでしょ？」

「ん？ ああ、そうだったけ？」

覚えていない。というか、こいつら以外の出場者がいたことすら初耳だった。

「けど、確か ああ、そうだ。佐々木のヤツ、確か選抜リレーにも出るんじゃないかったか？」

と、俺は言った。

選抜リレーは午後の最終プログラムで、男三人、女三人で一人二百五十メートルずつ、計千五百メートルを走るものである。午前中の華が百メートル走なら、午後の華は間違いなくこの選抜リレーであり、配点も全競技中で最高と、各クラスが一番力を入れる種目でもある。

「物好きなヤツだよな。二人三脚に出た上、選抜リレーにも出ようなんざ……って、待てよ。ってことは佐々木のヤツ、直斗と同じ組み合わせなんだな」

「うん……」

「で？ それがどうかしたのか？」

俺がそう聞くと、由香は再び視線を落として、

「あのね。木村さんに聞いたんだけど、二人三脚のとき、佐々木く

んがちよつと足首をひねつちやつたみたいなの」

「足首？ 大丈夫なのか？」

そういえば昼休みに由香を呼んでいたのはその木村だった。

「うん。大丈夫みたいなんだけど、走るのはちよつと無理そうだった」

「……」

話が見えてきた。

「それでね」

「ちよつと待った」

続けようとした由香の言葉を俺は制止した。

「言っておくが、俺は代理で走ったりはしないぞ。もう、今ので全力を使い果たしちまったからな」

「あ……で、でもね。直斗くんにも相談したんだけど、まだ一種目しか出てなくて足が速いのは優希くんしか残ってないみたいで」
「知らん」

俺はそう言つて再び歩き始める。

一応、この体育祭では正当な理由がある場合に限り、事前に決められた選手を入れ替えることができるが、それは“一人二種目まで”というルールに引つかからない限り、という条件付きだ。つまり代理を務めるものは全体で一種目にしか出場しない者に限られる。

ところが まあ、当然の話ながら、運動神経の良いヤツつてのは最初から二種目に出場するのが常だから、自分でいうのも難ながら、俺のように運動神経がそこそこ良いヤツが残っていることのほうが稀なのである。

だから由香を呼んだクラスの女子、それに由香自身も、俺を出場させたがるのはよくわかる。

しかし、だ。

午後の競技つてのは実をいうと三種目しかない。

今、俺がやった八百メートル。そして二百メートル。最後に選抜リレー なのだが、八百メートルつてのは男子限定で、二百メー

トルつてのは女子限定の競技であり、レース数が非常に少ない。早い話、これからいくらかも経たないうちに選抜リレーが始まってしまつのである。

ただでさえ瑞希にそそのかされて全力疾走してしまったというのに、この後、さらに二百五十メートルも走る気にはとてもなれなかつた。

グータラと呼ばれようが協調性がないと言われようが、嫌なものは嫌なのだ。

(……戻つたら色々うるさそうだな)

選抜リレーが始まるまでは、クラスの待機場所はもちろんのこと、雪や瑞希のところにも戻らないほうが良さそうだ。

そう考えた俺は方向転換し、校舎のほうへと足を向ける。

「あ、優ちゃん!？」

遠くから俺の姿を捉えていたらしい雪の声が聞こえたので、

「ちよつと気分悪いから保健室行ってくるわ!」

大声でそう返し、俺はそのまま校舎へ向かうことにした。

さて。

体育祭の開催中、校舎の中はトイレなどを利用するために一部が解放されているが、基本的には保健室の先生以外はほとんど人がいない。

(誰にも見つからんのはいいが、さすがに退屈だな……)

そう思った俺は、予定通り保健室へと足を向けた。

高等部の養護教諭は山咲晃先生という。晃と書いてヒカルと読む。漢字を見る限り男のように思えるが、今年三十歳になるれつきとした女性の養護教諭である。

ちなみにこの山咲先生、由香の母親と同一年の幼なじみという関係で、俺もこの高等部が上がってくる前からの顔見知りである。

「先生、いますかー？」

保健室のドアを開けると、中には白衣姿の山咲先生が窓際の椅子に座って何やら資料のようなものを眺めていた。

「ん？ …… ああ、キミですか。またサボリですか？」

山咲先生は顔を上げ、縁なし眼鏡の奥の瞳を俺に向けた。

見た目や口調は少し真面目で堅い感じがするが、実際のところ学校の先生としてはかなりオープンな性格である。

俺は軽く肩をすくめてみせて、

「八百メートルを全力で走って疲れたんですよ。 …… 向こうに戻ると選抜リレーも走らされそうなのでここで休ませてください」

俺はそう言いながら壁際に置いてある、カバーが外れて少しボロつちくなったソファに腰かける。

山咲先生は小さく首を振って、

「保健室は休憩場所ではないのですけど」

「一着取ったご褒美ってことで」

俺がそう言うと、山咲先生はふうっとため息を吐きながら、

「まあ、いいです。ただ、寝てる子がいるので静かにしてください

ね

そう言って、ボールペンの先でベッドのほうを指し示す。

「ん？」

見ると、二つあるベッドのうちの片方にカーテンがひいてあった。

「もしかして日射病とかですか？」

「まあ、そんなところですよ」

先生はそう言って机の上のコーヒーを口に運ぶ。

この先生は仕草やら何やらが妙に男っぽい。いや、見た目は間違はなく女なのであるが、優男っぽい口調や、今こういう風に足を組んでコーヒーを飲む仕草なんか、完全に男の仕草である。

その辺が災いしているのかどうかは知らないが、三十路近くなっただ今でも独身で恋人もいないという噂。しかも本人はまったくそれを気にしていないらしい。

(見た目はバリバリ女の人のになあ……)
外見とのギャップが結構激しいのである。
と。

カタ。

「ん？」

カーテンの向こうから物音がした。

起こしてしまったか　と、思ったが、山咲先生のほうを見ると
どうもそうではないようだ。

ゴソゴソ、と、カーテンの向こうで何やら動く音、布の擦れる音
が聞こえ、やがて、シャツ、とカーテンが開いた。

中から出てきたのは一人の女の子だ。

(……?)

俺は思わず、その女の子を凝視してしまった。

今時珍しく、腰の辺りまで伸びたストレートの髪。優しげな印象
の丸く大きな瞳。

……いや、そんなことはどうでもいいのだ。

問題は

「もう、いいんですか？」

山咲先生がその女の子に問いかけると、女の子はにこっと笑った。

「はい。どうもお世話になりましたー」

柔らかい声質ながらも明るく元気の良い口調でそう答えると、山
咲先生に向かってぺコツと頭を下げた。

山咲先生は言った。

「キミは体があまり強くないのだから、無理はしないようにね」

「はいっ」

女の子は素直に返事をする、俺の目の前を通り過ぎるときにち
よっただけ頭を下げ、

「失礼しましたー」

そう言って保健室を出て行った。

「……」

「どうかしましたか？」

女の子の出で行ったドアを見つめたままボーっとしている俺を見て、先生がそう問いかけてくる。

「……先生」

俺は言った。

「ここって高等部の保健室だよな」

「もちろんそうですが」

当然のごとく先生はそう答える。

俺は額に人差し指を当てて考え込むと、

「いつから小学生の面倒まで見るようになったんだ？」

と、尋ねた。

そう。さっきの女の子、である。

外見はさっき言ったとおりだが、そこに付け加えると、どこからどう見ても高校生という外見ではなかった。いや、そりゃあ童顔なヤツはいくらでもいる。妹の雪にしたってどちらかといえば幼く見えるタイプで高校生に見えないことはあるし、特別珍しいことではない。

しかし、である。

さっきのはどの角度からどう見ても高校生ではなかった。明らかに小学生、どう頑張っても中学一年生つてところだろう。

「生徒の家族か何かか？ いや、違うな」

あの子が着ていたのは確かに高等部のジャージだった。高等部、それも俺と同じ一年生のジャージの色だ。

「ああ、彼女のことですか」

と、山咲先生は納得したように頷くと、

「彼女は小学生なんかじゃありませんよ。れっきとしたこの高等部の生徒です。確か……一年四組ですね」

「ちよい待つてくれよ、先生」

俺はこめかみに指を当ててフウツとため息を吐く。

「あれで高校生はいくらなんでも反則でしょうよ。バス会社勤続五

十年のベテラン運転手だってノーチェックで小学生料金ですよ、ありゃ」

すると山咲先生は意味ありげにフフ、と笑って、

「いえ、間違いなく高等部の生徒です。ただし年齢はまだ十三歳ですが」

「は？」

俺が呆気にとられた顔を見ると、

「神崎歩くん。名前を聞いたことぐらいはあるでしょう？」

「神崎、歩……？」

俺はどこかで聞いたことのあるその名前を頭の中で繰り返す。

そんな俺の様子に、山咲先生はちよつと驚いた顔をして、

「あら。すぐに浮かんできませんか？」

そう言つて少し笑つと、

「では、飛び級で高等部に入った頭の良い女の子、といえばわかりますか？」

「……あー」

そう言われて俺はようやく思い出した。

一学期の期末試験、その結果を直斗と一緒に見に行ったときに出てきた名前だ。

「つか、歩はアユムで男だとばかり思つてたんですけど……」

「アユミ、ですね。見たとおりれっきとした女の子ですよ」

「ふーん。じゃああれがその天才少女というわけですか」

彼女の出て行ったドアを見つめながら俺がそう言つと、

「まあ……そうですね」

と、山咲先生はちよつと含みの入った言い方をした。

「なんですか？」

尋ねると、山咲先生は笑みを漏らして、

「いえ。“天才少女”って言い方ほど、彼女に似つかわしくない言葉はないと思ひまして」

「は？」

その意味を聞き返そうとしたが、それより先に。
コンコン。

「はい。どうぞ」

ノックの音で山咲先生が視線を移動させる。

俺も釣られて、再びドアのほうへと目を向けた。
すると、

「あの一」

と、そこから顔を出したのはさっき出て行ったばかりの天才少女
神崎歩だった。

「どうしました？」

山咲先生がそう尋ねると、神崎歩はちょっと照れくさそうに、え
へへ、と笑って、

「学生証、落ちてませんでしたか？ ジャージの上着を脱いだとき
にポケットから落ちちゃったみたいで一……」

「学生証、ですか？」

山咲先生がそう呟いて足もとを見回す。

つられて、俺もちょっとだけ周囲に目を配った。
すると、

「あの一……」

と、神崎歩がトコトコと目の前までやってきて、ちょっと言い
くそうに俺の顔を見る。

「ん？」

俺が彼女の顔に視線を合わせると、彼女はちょっと笑って、

「たぶん、お兄さんの座っているとこるじゃないかと……体温測ると
きにそこで上着を脱いだので一」

「ん、おお」

言われて初めてお尻の下の違和感に気付いた。

ちよつと腰をあげると、定期入れみたいなものに入っている学生
証が出てくる。

一年四組、神崎歩。……間違いない。

「悪い悪い。ぜんぜん気付かなかった」

俺がそう言っただけで学生証を差し出すと、彼女は人懐っこい笑顔で浮かべて、

「こちらこそすみません！。私、よく物を落として気付かなかったりで」

たはは、と、照れくさそうに頭を掻く。

そんな少女の仕草に、俺は先ほどの山咲先生の言葉を思い出した。
(そっぴい直斗のヤツも“普通の子だよ”なんて言っただけな…)

確かに、こうして見る限りは普通の子だ。とても“天才”なんて感じではない。

「あ、お兄さんってもしかしてさっきの八百メートルを走ってた人ですか？」

一見大人しそうに見えるが、人見知りはないタイプなのだろう。初対面であるにもかかわらず、少女は俺に向かって興味津々の表情でそう尋ねてきた。

「ん？ あー、どうかな。一応走ってはいたが、その人かどうかはわからないな」

「一着になっただんですよね。私、窓からずっと見てたんですよ。一年生なのに、もう、すっごい速さで勝っちゃって。あれ、お兄さんですよー」

「ああ、そうかもな」

八百メートルで一位になった一年生は俺しかいないはずだから、たぶん間違いないだろう。

「それより、その“お兄さん”ってのはやめないか？ 俺、一組の不知火つてんだ。不知火優希」

俺がそう言くと、少女は屈託のない笑顔で答えた。

「不知火さんですね。私、四組の神崎歩と申します」
変にかしこまった口調でペコリと頭を下げる。

「了解。神崎さんだな」

「あ、呼び捨てちゃってくださいー。私のほうがニコも年下ですから」

「だったら神崎？ それとも名前のほうがいいか？」

そう尋ねると、少女はすぐに答えた。

「名前のほうが嬉しいです」

「おーけー。じゃあ歩」

「はいー」

すると歩は本当に嬉しそうにニコニコと笑った。

「実は私、学校のお友達に名前と呼ばれたことがあまりないのです。ですから不知火さんはもしかするとその第一号かもしれないです」

「ふーん」

少し意外な話だった。

「ま、いいや。あー、その変な敬語もやめようぜ。年違っても学年同じなんだからさ」

「……と、申されましたー」

そこで歩は少し困った顔をした。

「年上の男性の方に敬語無しというのはちょっと難しいかも、です……」

予想以上に深刻そうな顔をしたので、俺はすぐに前言を撤回して、

「そっか。ま、そっちのほうが楽ならそれでもいいや。けど、慣れたら別にかしこまったりしなくてもいいんだぞ」

「そう言っていただけだと助かります」

と、歩は再び笑顔になった。

コロコロと変わる表情。

三年前の同級生たちはこんな感じだっただろうか、と、少し昔のことを思い出そうとして、途中でやめた。その頃の記憶には俺にとってあまり思い出したいくないものが含まれている。

山咲先生が言った。

「なるほど。不知火くんはそうやって女の子をたらしこむわけですね」

「ちょっと先生。なに納得顔で人聞きの悪いこと言ってるんですか」
「初対面の女の子といきなりそれだけ仲良くなれるのも才能ですね、
と言っただけですよ」

「いやいや。さっきのは完全に悪意が籠もってたっつか、悪意しか
なかったじゃないですか」

「そうですか？」

山咲先生はそう言っつてとぼけると、手元の紙の束をトントンとま
とめながら、

「ま、それはいいとして、せっかく仲良くなったんです。キミ、神
崎くんを家まで送っつていっつてあげてください」

「……はあ？」

突然、何を言い出すのだろうか、この人は。

「あつ、先生、私、大丈夫ですよー」

と、歩。

山咲先生はまず歩のほうを見て言っつた。

「ダメですよ。あなたはさっきも言っつたとおり体が弱いのですから。
調子の悪い日はもっと慎重にならなければなりません」

そこは養護教諭らしく、きっぱりとした口調だっつた。

「うっつ、大丈夫なのにー……」

「キミの大丈夫は大丈夫じゃないことのほうが多いですよ、神崎く
ん」

「うー……」

返す言葉がなくなっつたようだ。

そうして山咲先生は俺のほうを見る。

「そういうわけです」

「そういうわけっつて……」

「帰る途中で倒れられても困りますから。キミが家まで送っつてあげ
てください」

「や……あのね、先生。俺、まだ一応学校に拘束されている時間な
んですけど」

「担任の先生には私のほうから説明しておきます。どうせあとはいこでのんびりしてるだけなのでしょう?」

「……まあ、それはそうですね」

「じゃあ決まりです。男ならつべこべ言わずに送ってきなさい」
有無を言わさぬ口調。

言葉遣いは丁寧なのに、いい意味で適當かつ強引なところがこの山咲先生の特徴である。

「……」

歩のほうを見ると、ちょっと困ったような、申し訳ないような顔をしていた。が、どうやら俺に送られるのがイヤだ、という意味ではなさそうだ。

それを確認して、俺は仕方なく頷いた。

「わかりましたよ。これ、先生に貸しですからね」

「おや。私はキミにもっとたくさん貸しがあるつもりでいましたかね」

「……へえへえ」

言い返せない。

「んじゃ行くか、歩」

どうにも妙なことになってしまったが、まあお近づきの印に送ってやるぐらいはいいだろう。

「……いいんですか?」

歩はちよつと遠慮がちだった。

「こついう言い方をされては、俺も嫌な顔はできない。」

「いいんだよ。なんたって先生様のご指示なんだからな」

「じゃあ、その……」

と、歩はそれでも少しためらって。

そして最後にはやはり笑顔を浮かべた。

「よ、よろしくお願いしますー!」

そんなこんなで。

俺は我が校始まって以来の天才少女、神崎歩と知り合うことになったのだった。

余談ではあるが 体育祭の最終結果は、選抜リレーの成績が響いて結局、総合六位だった。

後日、俺が藍原や将太から思いつきり非難を浴びたのは言うまでもない。

1年目9月その3

「ちわ〜」

ガラッ。

「どうしたの、不知火さん？」

とある金曜日の昼休み、俺が保健室のドアを開けるとベッドの上には見慣れた光景　上半身を起こした歩の姿があった。
保健室の中を見回す。

「どうやら山咲先生はどこかに行っているらしい。」

「なんだ、歩。また倒れたのか？」

そう言いながらベッドに近付いていくと、歩は、たはは、と照れくさそうに笑って、

「ちよつと気分が悪くなっただけー。でも、山咲先生が寝てなさい、って」

「なら大人しく寝てろ」

上半身を起こしていた歩の肩をポンと押してやる。

「うあ……」

体に力が入らないのか、あるいはもともと貧弱なのか。歩の上半身は無抵抗のまま、ポスツとベッドの上に転がった。

「うう、大丈夫なのに……」

「お前の大丈夫は大丈夫じゃない。だろ？」

「うー……」

山咲先生の口癖を真似ると、歩は少し不満そうな顔をしながらも黙り込んだ。

俺は部屋の隅からパイプ椅子を持ってきて、ベッドの横に座る。

「不知火さん、あのー……」

「なんだ？」

「お昼は、食べないのかなー、と」

「食べるに決まってるだろ」

と、持参した弁当を取り出して膝の上に乗せる。

あの日　神崎歩と知り合ってから十日ほどが経過した。お互いあのときが初対面だったのだが、山咲先生に言われて渋谷家まで送ってやったからなのか、あれ以来、俺は妙にこの子に懐かれていた。休み時間なんかもたまにウチのクラスに顔を出すようになったし、廊下で姿を見つけるなり、まるで子犬か何かのようにちょこちょこ駆け寄ってくるようになった。

俺としても別に嫌な気はしない。

性格的には明るくて元気なものの、ちょっと角度を変えれば弱々しく、どこか守ってやりたくなるようなタイプ　ちょっとだけ妹の雪に似ているところがあるからだろうか、俺はこのあまり天才っぽくない天才少女のことをいつしか気に入るようになっていた。

「お前のほうこそ、昼はどうするんだ？」

「いつもは食堂で食べてるよ」

「弁当とかは？　家で作ってくれないのか？」

「うん。仕事忙しくて」

「ふーん」

俺は歩の表情を横目に見ながら弁当の蓋を開けた。

今日のおかずはミニハンバーグに煮物。ほうれん草のソテーに弁当には定番の玉子焼き。あとはウサギの形をしたリングゴが一切れ。

もちろんこれは由香の作品である。

(……ガキの弁当かよ)

思わずそんなことを思ってしまったが、せつかく作ってくれた弁当にケチをつけるほど恩知らずな人間でもないつもりだ。

俺は早速その弁当に手を付け始めた。

……と。

「ん？」

歩が俺の手にしている弁当箱の中身をジーツと見つめていた。

といつても別に物欲しそうにしているわけではない。

「なんだ？ 何か変か？」

「あ、ううん。ただねー」

歩は顔をあげて俺の顔に視線を移すと、ちよつと微笑んで、

「不知火さんのお母さんってきつと優しい人なんだろうなー、って思っただけ」

「あん？」

俺が怪訝な顔をする、

「お弁当から、そういう匂いがするの」

「……ふーん」

弁当箱に顔を近づけてみたが、ハンバーグソースの匂いしかなかった。

「あはは、そういう意味じゃないよー」

「いや、わかつてるけどさ」

いくらなんでも本気でボケたわけじゃない。ちよつとやってみただけだ。

「でもま、弁当作ったの母親じゃないけどな」

「え？ ……もしかして不知火さんが自分で？」

歩がびっくりした顔をする。

「んなわけあるかい」

そうだとしたら俺もびっくりだ。

「これは あれだ。俺の友達が作ったもんだ」

一瞬、適当に誤魔化したほうがいいかとも思ったが、まあこいつになら喋ってもいいだろう、と、俺は素直にそう答えた。

すると歩はさらにびっくりした顔をして、

「お友達？ 女の人？」

「男友達だったらちよつとアレだなあ……」

いや、まあ、由香だって別に俺の彼女ってわけじゃなく、友達というか幼なじみとしての好意で作ってくれているわけだから、万が一間違つて由香の代わりに直斗が弁当を作ってきてくれるとか、そ

ういう展開になっていた可能性もないわけじゃない。

「が、いくら直斗が中性的な外見をしているといっても、いや、むしろそれだからこそ、そんな展開は俺の望むところではなかった。歩は、へえ、と笑顔になって、

「やっぱり不知火さんってそういう人がいるんだー」
何故か嬉しそうだった。

三つ下とはいえ一応は思春期の女の子。そういう話は好物なのかもしれない。

が、

「残念だが、アレはお前が言うところの“そういう人”なんかじゃない」

「？」

「本当に“友達”だ」

「ええっ？ お友達がお弁当を作ってくれてるの？」

やはり驚くか。いや、それはそうだろう。由香のことを知らないのだからなおさらだ。

「ああ、変わったヤツだろ？」

と、俺が言うと、歩はベッドの中で首をかしげて、うーん、と考
え込むと、

「……うん。その人はきつと不知火さんのことが好きなんだね」

「そりゃ嫌いならそもそも友達になんぞなってないだろうが」

俺がそう返すと、歩は苦笑して、

「あはは、ええつと、そういう意味ではなくー……」

「……」

俺は無言のまま歩に向かって両手を伸ばした。

「？」

不思議そうな顔をする歩のほっぺたに両手を当てると、軽く引っ張ってやる。

「あやややや！ 痛い！ 痛いー！」

「お子様のクセに生意気なことを言った罰だ」

「う、ごめんなさいー!」

頃合を見て手を離してやると、歩はちょっとだけ涙を浮かべた目で恨みがましく俺を見て、

「うう、イジメっ子……」

「お前が悪い」

俺はそう言ってベッドから離れる。

「……教室に戻るの?」

歩が少しだけ赤くなった頬を両手でさすりながらそう聞いてくる。俺はチラッと彼女を振り返ると、

「パンか何か買ってきてやるよ。何がいい?」

すると歩はちよつと慌てたような顔をして、

「あ、悪いからいいよー」

「良くねーよ。食うもの食わないとまた倒れるぞ」

「でも……」

「別にたいした手間じゃないから遠慮すんな」

「……うん。ありがとうー」

そんな俺のお節介に、歩はまだ少し遠慮がちながら嬉しそうに笑顔を浮かべたのだった。

.....

「あいつ、最近変だよなあ?」

「うん。確かに変」

「そ、そうかな……?」

「まあ、いつもと比べるとね」

保健室にいた優希がちょうど購買に向かって移動を始めた頃。

一年一組の教室の一角では四人の男女が何やら深刻そうに話をしていた。

順に、将太、藍原、由香、直斗の四人である。

話題となっっているのは言うまでもなく、今、この場にいない優希のことであった。

「元凶はやっぱりよお……」

口の中に物を入れた状態の不明瞭な発音でそう言っつて、将太は箸の先を正面の直斗に向ける。

「あの、例の天才少女だよな。絶対」

「元凶つて、別に悪いことしたわけじゃないんだから」

直斗がそう返すと、その隣の藍原が勢い良く首を横に振って、

「悪いつてば〜。絶対洗脳とかされてるつて、あれ〜」

「洗脳つて……」

由香が苦笑すると、藍原は真面目な顔でずっと由香に迫って、

「笑い事じゃないつてば。相手はこの学園始まって以来の天才。不知火みたいに単純な男を洗脳するぐらい容易いに決まってるよ」

「え、でも……」

冷静に考えればそんなことあるはずもないのだが、藍原の真面目な表情と口調に、由香が少しだけたじろいだ。

そこへ、将太が藍原の言葉に同調して、

「そうそう。だいたいあの優希が自分からあんなにマメに会いに行くななんて、絶対普通じゃありえねえつて！」

「そう？ 優希の保健室通いは結構前からだよ。別に神崎さんに会いに行っているわけじゃないと思うけど」

一人冷静な直斗がそう言っつと、少し考えて、

「まあ、昼休みとかに行くのは珍しいかな。普段は授業時間が多いから」

「ほら！ やっぱりおかしいんじゃないか！」

と、将太。

「だとしても、優希の気まぐれでしょ。洗脳されたつていうよりよ

ほど現実的だと思うけどね」

「ううん。あれは絶対洗脳だってば〜！」

藍原はどうしても洗脳されたことにしたいらしかった。

「で、でも」

由香が反論する。

「神崎さんっていう子、体が弱い子なんですよ？ 優希くん、そういう子を放って置けなかったり、優しいところもあるから……」

いつもどおり控えめにそう言ったが、残念なことに、その場に居る他の人間からの賛同はまったく得られなかった。

やがて、将太がポツリと呟く。

「……実は、ロリコンだったとか」

「……」

「……」

直斗と由香が沈黙。

「あ、その可能性もあるかも〜」

藍原が一人、将太の意見に同意すると、うーん、と考えて、

「でも不知火ってば、シスコンにロリコンじゃいよいよ救いがないね」

「……それ、優希が聞いたらすごく怒るよ、きっと」

直斗がさすがに苦笑する。

そこへ、由香が取り繕うように言った。

「私、その神崎さんって子にちょっと会ってみたいかな」

「あ、あたしも！」

藍原は興味津々の様子で勢い良く手をあげる。

「なんたってあの不知火を洗脳しちゃうほどの実力者だかね！

これは興味あるね！」

「えー。俺はガキにはあんま興味ねえなあ」

将太は乗り気ではない様子だ。

が、

「といっても、三つしか変わらないんだけどね」

直斗がそう言うと、一転、
「よし！ じゃあいつちよ見に行ってみるか！」
と、他の三人に向かって親指を立てて見せると、真っ先に教室を
飛び出していったのだった。

- - - - -

と、いうわけで。

「……なにがどういいうわけなんだ？」

いきなりぞろぞろ保健室にやってきたメンバーを、俺はゼロ距離
から発射した制汗スプレーのような冷たい言葉で出迎えてやった。
が、残念なことに、先頭を切って入ってきた面々は、そんな言葉
の刃など気に留めるような連中ではなく、

「いやあ、俺も噂の天才少女とやらを一目見たくてよー」

と、将太。

「私も〜」

続いて藍原。そしてその後ろから、俺の不機嫌そうな顔に気付い
た由香が少し申し訳なさそうな顔をして入ってくる。

ちなみに俺も今、パンを買って戻ってきたばかりだった。

山咲先生はまだ戻っていない。

「？ どうしたの、不知火さん」

歩が寝ているベッドはカーテンで仕切られていて、こちらの様子
は見えていないらしい。

「ごんちは〜」

制止する間もなく。

藍原がズカズカと歩の寝ているベッドのほうへと侵入していくと、

「あ、こんにちはー」

突然の乱入者にも驚きもせず、愛想よく挨拶する歩の声が聞こえた。

俺はため息を吐いて、

「やれやれ……」

藍原の後に続き、歩のもとへと戻る。

そんな俺の後ろにくっついてきた将太も、ベッドを覗き込むなり、
「やっ！俺、こいつの親友で藤井将太ってんだ。よろしく！」

造った声色でそう言った。本人は爽やかな好青年を演じたつもり
だったらしいが、正直不自然でインチキくさいことこの上ない。

「あ、えっと……神崎歩です。よろしくお願いしますー」

歩も少し戸惑ったようだが、やはり将太に対しても愛想よく挨拶
を返した。

「歩ちゃんね。あ、歩ちゃんでもいいのかい？」

「あ、はい。じゃあ私は……藤井さんでいいですか？」

「藤井さん？うーん、ちょっと他人行儀だなあ」

「え、じゃあ……」

歩が少し困った顔をする。

将太は相変わらずのインチキ笑顔のまま言った。

「遠慮することないさ。俺のことはズバリ、将太お兄ちゃんと呼んでくれ！」

「将太……お兄ちゃん……？」

歩がちよつと戸惑ったような顔で笑う。

「冗談だと思ったらしい。」

(そいつはきつと大真面目だぞ、歩………)
と。

そんな俺の推測の正しさを裏付けるかのように、将太は胸の前で
手を組んで、

「ああ、いい響きだなあ。実は俺、ずっと妹が欲しかったんだ……」
うっとりしている。

かなり鬱陶しい。

「え、えっとー……」

歩は苦笑しながらも、どう対応していいのかわからず俺に視線を送ってくる。

「その馬鹿はかまわなくていい。なんなら完全シカトしても一向に問題ない」

「そうそう。このキモチ悪い人は気にしなくてもいいからね」

藍原がそう言って将太をカーテンの外側に押しつけようとする。

「ちよっ……な、なにを言うか、貴様ら！ 妹といえば世の中の一人っ子男子諸君の憧れなんだぞ！」

「はいはい。っていうか、藤井以外に一人っ子男子いないしね、ココ」

「うおっ……ちよっ、藍原、貴様！」

藍原に押され、将太の体は歩の視界からフェードアウトした。

……藍原の言葉で思い出したが、直斗は来ていない。ちなみにもいつも一人っ子男子だが、妹が欲しいなんて台詞を耳にした記憶はなかった。

将太を押しつけた藍原はベッドの脇の椅子に腰を下ろし、歩に声をかける。

「あたしは藍原美弥っていうの。どういう風に呼んでも構わないよん」

「えっと……はい。美弥さんですね」

「美弥お姉ちゃんでもいいよ！」

大げさなアクションで藍原がそう言うと、歩は今度は声を出して笑った。

そのリアクションに藍原は満足げに頷くと、

「んでもって……」

くるっと俺のほうを振り返り、俺の少し後ろに立っていた由香を指差して、

「あの子が由香ちゃん」

「あ、えつと、水月由香です。よろしくね」

由香は急に紹介されてちょっとだけ慌てたようだが、すぐに笑顔になって自己紹介をした。

「はい！ こちらこそよろしくですー」

歩もニツコリとそう返した。

そうして

「あ、そうですそうです。あの俳優さん、オジサンですけどカッコいいですよー」

「ほほう、歩ちゃんはなかなか渋い趣味だねえ。由香なんてこんな大人しそうな顔して結構ミーハーだったりするの」

「み、ミーハーじゃないよ。たまたま好きなドラマに出てたから

」

なんて。

女子の会話が始まってしまったわけである。

これで他に患者がいるのなら迷惑以外の何物でもないが、唯一の患者である歩が楽しそうにしているのだから、これはこれでまあいいのだろう。

ただ。

「お前、結局何しに来たわけ？」

「……俺も今、それを考えていたところさ」

完全に仲間外れにされてしまった将太の背中には、何ともいえない哀愁が漂っていた。

まあ、同情する気にはまったくなれない。

「あら。ずいぶんと賑やかですね」

そうこうしているうちに保健室の主、養護教諭の山咲先生が戻ってきた。

時計を見ると、昼休み終了まであと五分。

そろそろ潮時かもしれない。

俺は言った。

「なんかこいつら、保健室を遊び場と勘違いしてるみたいですよ。注意してやってください」

山咲先生は間髪いれず、

「あなたも含めて、でしよう?」

「……俺はちゃんと休憩に来てるんですって」

「何度も言いますが、保健室は休憩所ではありません」

山咲先生はきっぱりとそう言って、定位置である窓際の椅子に腰を下ろす。

そして机の上の冷めたコーヒーを口にしながら、親指で柱にかかった時計を指して、

「さあ、キミたち。そろそろ授業が始まりますよ。本当に調子の悪い人以外は戻ってくださいね」

「あ、はい」

山咲先生の言葉に素直に返事をした由香が、歩に向かって笑顔を向ける。

「じゃあまた今度、お話しようね」

歩も笑顔を返す。

「はい。また遊んでやってくださいー」

「じゃあね〜」

と、藍原も立ち上がって手を振る。

その二人が離れたところで、俺はようやくカーテンの中を覗き込み、

「これ、買ってきたパンな。……あんま無理すんじゃねえぞ」

「あ、ありがとー、不知火さん。無理なんかしてないよ、私、お喋りしてるのすごく好きだから」

「そうか」

俺は頷いてベッドから離れると、山咲先生のほうを見て、

「じゃ。しょうがないんで俺も授業に出てきます」

「しょうがあっても授業に出てください。それがキミの仕事なんで

すから」

机の上から視線も上げずにそういった山咲先生に俺は軽く頭を下げ、最後にもう一度ベッドの上の歩に視線を送ってから保健室を後にした。

- - -

「……神崎くん」

優希たちが保健室を去って、授業開始のベルが鳴った頃。

晃は歩のベッドの隣まで椅子を持ってきてそこに腰を下ろした。

そして近くにあった小型のテーブルの上に、新しく淹れたコーヒークップを置く。

「なかなか楽しそうでしたね」

するとベッドに仰向けになっていた歩は、晃のほうへと視線を向けニツコリと笑顔を浮かべた。

「はい。誰かとこんなにお喋りしたのは久しぶりで」

「そうですか」

晃はそう言うと、歩の足の辺りにかかっていた布団をちゃんと肩の近くまで引き上げる。

「でも、今日は調子が良くなかったのでしょうか？ 不知火くんも言っていました、無理をはいけませんよ」

「そんなことないんですよ。確かに最初は調子悪かったんですけど

」

そう言うってから歩は、たはは、と照れたような笑みを浮かべる。

「私って現金なもので。お喋りしていると気分良くなってきちゃいました」

「そう。ならいいのですが」

晃が少しホツとしたような顔を見ると、歩は少し目を細めてそんな晃を見つめる。

「……先生のおかげです！。先生、私にあんまり友達いないの知ってて、それで不知火さんと引き合わせてくれたんですね？」

「そこまで深い意図はありませんよ。あの日、彼がここに来たのも単なる偶然ですし。……でもま、多少は」

言いながらコーヒーに軽く口を付ける。

「キミがクラスに馴染めなかったのは我々にも原因がありますし、それに学校にいるときくらいは楽しい思いをして欲しいですからね」「え？」

その言葉に、歩は驚いた顔をする。

晃はそんな歩に頷いてみせて、

「あなたの事情は、多少聞いています。神村くんが話してくれましたから」

「沙夜さんが？ ……そうですか」

一瞬怪訝そうな顔をした歩は、すぐに納得した様子で小さく頷いた。

「こちらのこととはともかく、そちらのほうは私にはどうにもできないことですから」

と、晃はすまなそうな顔をした。

一瞬、沈黙。

室内の雰囲気为重く沈んだ。

が、それは一瞬のことで、

「あはは、先生、そんな顔しないでくださいよー」と、歩は言った。

「私、こう見えて色々体験してますし、色々なこと知ってるんですから。ちよつとしたことじゃめげたりしないんですよ」

「……そうでしたね」

「それに新しいお友達ができましたから。ぜんぜんへっちゃらです」

歩がそう言うと、晃はようやく笑みを浮かべた。

「そうですね。ま、不知火くんはちょっとアレですが、悪い子ではないですし」

「ひどーい。アレってなんですかー」

歩が笑う。

「ご想像にお任せしますよ。……じゃ、ゆっくり休んでください」「はいっ」

歩が元気にそう答えたのを見て、晃は静かにベッドから離れる。

もちろん晃は、歩の口から出たその言葉すべてが本心でないことはわかっていた。ただ同時に、彼女が心を痛めているその原因に対し、自分にできることが限られているということも理解している。

だからこそ、それ以上のことを追求はしない。

「彼が何かの助けになればいいのですが……」

歩に届かないほどの小さな声で晃はそう呟いた。

微かな期待を、その言葉の中に込めて。

1年目9月その4

歩がフラフラと倒れたのは、九月も末に差し掛かったとある木曜日の六時間目。一組と四組合同の体育の授業で、バスケのゲーム真っ最中のことだった。

「……………歩ッ」

真っ先に駆け寄ったのは俺だった。といっても、別に彼女の動向をずっと気にしていたからではない。ちょうど俺も男子側のゲームに参加していたたまたま近い位置にいたからだ。

「歩。大丈夫か？」

「う……………」

倒れたといつてもいきなりバタンといったわけではない。フラフラとその場に崩れ落ちただけで、意識はあり、貧血のような症状に見えた。

「先生！」

すぐに視線を上げて体育の栗田先生の姿を探す。

先生はちょうど異変に気付いて駆け寄ってくるところだった。

男子も女子もゲームが中断している。

「うあ……………あれ……………不知火さん……………」

「おう。歩。わかるか？」

「は、はい……………」

今度の返事は比較的しつかりしてとりあえず大丈夫そうだが、なんにしても保健室に連れて行くべきだろう。

そう思い、俺は四組の保健委員の姿を探す。他クラスの保健委員が誰なのか俺が知っているはずもないのだが、この状況なら自分からこつちに近付いてくるだろうと。

そう思っていたのだが、

「……………」

四組の生徒は誰一人として近付いてこなかった。

男子も女子も、みんな揃って遠巻きにこちらを眺めている。
不思議な空気。
不思議な視線。

(……俺か?)

俺が真つ先に駆け寄ってしまったせいだろうか。確かに俺は同級生、特に多くの女子からあまり好かれていない。

そんな俺が来てしまったせいで、近寄りにくくなってしまったのだろうか、と。

「大丈夫か？」

結局やってきたのは栗田先生だけだった。

「先生。保健室に」

俺がそう言っていると、先生はすぐに頷いて、

「そうだな。じゃあ……不知火。お前、連れて行ってくれるか？」

「俺が? ……ああ、いや」

こういうときはクラスの保健委員が連れて行くものじゃないのだろうか　と、思ったが、すぐにそれは些細なことだと思い直し、

「わかりました。歩、立てるか？」

「え……あー……はい……」

俺は歩の眼前に手を差し出して、

「ほら。保健室に行くぞ」

「え、あ……」

歩の目の焦点がようやく安定する。

そうして一瞬、俺の手に自分の手を伸ばしかけたが、

「あ……い、いえー……自分で立てますー」

慌てて手を引っ込め、その手を膝に当ててゆっくりと腰を上げていく。

「おい、無理すんな。ほら、俺の手を」

「だ、大丈夫ですからー」

歩は少し強い口調でそう言って、フラフラと立ち上がった。

「……?」

頼りない足取りで、それでも自分の力でなんとか立ち上がった歩。再び、周囲の不思議な視線を感じる。

「……」

そして俺は気付く。

俺に向けられているものと思っていたそれらの視線が、俺ではなく、目の前の小さな少女に向けられていたことに。

それがどういう意味を持つのか、そのときの俺にはわからなかった。

今にも雨が降り出しそうな空模様。

右手には朝、雪に無理やり持たされた傘。

左肩には鞆をかけて。

背中には

「……いつもごめんね」

「大したことじゃないから気にすんな」

背中に乗った歩に対し、俺はそう答えた。

あの後、保健室まで歩を運んだ俺は、体育がこの日最後の授業だったということもあり、山咲先生の勅命を受けてそのまま歩を家まで送ることになっていた。

「もつと体が強ければ、不知火さんにも迷惑かけずに済むんだけどなあ……」

と、歩は消沈している。

「迷惑？ 馬鹿、お前ごときが俺に迷惑なんか掛けられるわけないだろ。俺様はお前が想像することさえ難しいほどに器の大きな存在なのだ」

「冗談交じりにそう言うと、歩は特に突っ込みを入れてくることなく、ただ小さく笑って俺の頭に頬を擦り付けてきた。

「……なんだ。甘えたって何もいいことないぞ」

「違うよ。ただ甘えたいだけー」
そう言って子犬のようにさらに頬を擦り寄せてくる。
くすぐりたい。

「……」
妙な話だ。

初めて会ったのは体育祭の日だから、たった半月前のこと。にも関わらず。こいつとのやり取りはまるで古くからの友人か、あるいは親子、兄妹だったかのようにさえ錯覚してしまう。

こいつが人懐っこい性格であることを考慮したとしても、それはやっぱり妙な話だと思う。

そうそう。

奇妙な話といえば、先ほどの授業のこと。

歩はこのとおり人懐っこくて、誰とも仲良くなれそうな性格だ。実際に由香や藍原とはあれ以来仲良くなっていて、保健室なんかでお喋りをしている姿をよく見かけるのだが、不思議なことに、自分のクラスである四組の人間と話しているのを見たことがない。

たまたま俺が目撃していないだけなのかと思っていたのだが、今日、歩が倒れたときのことを思い返すと、どうも自分のクラスには友達がいらないんじゃないかと、そう思えてしまうのである。

歳が違うとはいえ、これだけ人懐っこければ友人の一人や二人、すぐにできそうなものなのだが

「……」

あの空気。

俺は自分のクラスにいるこいつの姿を見たことがない。いや、正確に言うと、今日の体育の合同授業まで見たことがなかった。だから自分のクラスでのこいつの立ち位置はまったく知らない。

少し嫌な想像が頭を過ぎった。
が、ひとまず振り払う。

……歩の家は結構遠い。学校から駅とは反対の方向に歩き、途中にあるこの町唯一のデパートを通り過ぎて、さらに少し歩いたとこ

ろに公営住宅と民間のアパートの立ち並ぶ一角がある。学校から普通のペースで歩くと、軽く三十分はかかってしまう道のりだ。

そんな、立ち並ぶアパートの中の一つ。

その二階に歩の家があった。

「ほら。着いたぞ」

「……ありがとう」

ドアの前にかがみこんで歩を下ろすと、俺は立ち上がって軽く肩を回した。

さすがに疲れた。

「大丈夫？ やっぱり重かった？」

そんな俺の仕草を見て歩が心配そうな顔をする。

俺は答えた。

「めっちゃくちゃ重かった」

「……ひどーい。そういうときは思っても軽かったって言うもんだよー」

不満そうに言いながらも歩はコロコロと笑う。

どうやらだいぶ調子は戻ってきているようだ。

「ほら、鍵」

「あ、うん」

と、歩は首にぶら下げていた鍵を取り出し、鍵穴に入れてクルツと回す。

カチリと金属質の音がして、ドアが開いた。

「……さて。これでお役御免だ。」

「じゃあな。中で倒れんなよ」

「あ、ちよっと待って！」

「ん？」

下り階段に一段だけ踏み出したところで振り返る。

「せっかくだから少し上がって行って。この前も送ってもらったし、今日は飲み物ぐらい出すよー」

「んー……」

それは俺にとって魅力的な提案でもあった。ここまで歩を運んでもちろん疲れていたし、喉も渴いている。家の中には人の気配もなかったし、あまり気兼ねする必要もないだろう。

俺は簡単にそう考えて、

「そうだな。じゃあちよつと邪魔するわ」

「どうぞどうぞ」

歩はニコニコしながらドアを大きく開けて俺を迎え入れた。

靴を脱いで中へ。

間取りは何の変哲も無い2DKだった。どちらかという家具は少なめで、若干薄暗い印象だ。

「どうぞ」

飾り気のない居間の丸テーブルの脇に腰を下ろすと、歩が台所からオレンジジュースの入ったコップを持ってきた。

「おう。サンキュ」

受け取ったジュースを半分ぐらい一気に飲んで、小さく息を吐く。少し火照った体が食道と胃の辺りから冷却されるような感じがして気持ちいい。

「じゃあ、着替えてくるからちよつと待っててね」

そう言って、歩は二つある部屋の片方へと消えていく。

(…………ふむ)

俺は冷たいジュースのコップを片手に、特に目的もなく家の中を見回していた。

女子の家に招かれてのこのシチュエーション。これが同級生の可愛い女の子だったりするならドキドキものなのだろうが

(…………ああ、いや。あいつも一応同年の女の子だったか)

しかし残念ながら、そういう意味でのドキドキ感は無である。俺たちぐらいの年頃の三歳差はデカいのだ。

「…………どうしたの？」

程なく戻ってきた歩はクリーム色の薄手のニットと薄いピンクのスカート姿に装いを変えていた。どちらとも無地で飾り気は少ない。

まあそれだけに彼女には良く似合っているといえるだろう。

「ああ、いや。お前の家だからもうちよっとファンシーな雰囲気を想像していたんだが、イメージと違ってたな」

「そんなわけないよー、私だけの家じゃないんだから」

俺の向かいにちよこんと座った歩は可笑しそうに笑って、

「そういえば」

と、何事か思いついた顔をする。

「私、不知火さんの家のこと知らないなあ。私の家には何度か来てもらってるのにねー」

「ん。まあ、話した記憶はないな」

「じゃあ、せつかくだし色々と聞いてもいいですかー？」

「まあ、構わんけど」

進んで語るようなことはないが、敢えて隠すようなこともあんまりない。

一方の歩は見るからに興味津々といった表情だった。

「じゃあ、まず、ご兄弟は？」

「妹が一人」

「歳は？」

「同い年」

そう答えると、歩は一瞬だけ不思議そうな顔をしたが、

「あ、双子の妹さん？　じゃあ不知火さんの家は四人家族？」

「ん。あー、えつとなあ」

そのところは少々説明が難しい。

「三人家族、つてことになるかな。父親も母親もいなくて、うるさい従姉と一緒に住んでんだ」

「え？」

歩はきよとんとした顔をする。

まあ、改めて考えてみれば確かに奇妙な家庭環境だ。

俺は付け加えて説明する。

「両親とも小さい頃に死んでてな。で、その従姉の両親が一応の保

護者で　ま、あとの事情は適当に想像してくれ」

「う、うん。わかった」

一応、納得したらしい。

「じゃあじゃあ……妹さんはどんな人？　あ、同じ学校じゃないよね？」

「桜花女子に通ってるよ。どんな人か……難しいな」

と、俺は頭の中に雪の顔を思い浮かべる。

周りからの一般的な評価といえば“おっとり”とか“誰にでも優しい”とかだろう。もうちょっとアレな連中に言わせれば“女神様”だったり“未来の妻”だったりもするが　それは置いといて。

あいつは確かに一見穏やかで大人しそうに思えるが、実は私生活では結構口うるさかったりもする。泰然としているかと思えば、体重計の数字がショックだったという理由でへこんで衝動的に断食したりすることもある。特定のアイドルや俳優が好きだったりとミーハーなところもあるし……簡潔に表現しようとするとき意外に難しいものだ。

そんな俺の悩める様子に気付いたのか、歩は言った。

「じゃあ、ほら。趣味とかそういうのもいいよー」

「趣味か」

それならすぐに思いついた。

「料理は結構上手いと思うぞ。家事だから趣味といえるかどうかは知らんが」

「あ、そうなの？」

すると歩はちよつと嬉しそうな顔をした。

「実は私も好きなんだー、お料理」

「へえ。そりゃ偶然だな」

そついや由香のヤツも料理好きだ。どうやら俺の周りには料理好きが集まるらしい。

「して？　腕のほうは？」

俺は軽い気持ちでそう聞いてみたのだが、

「う……………」

歩の反応はあまりよろしくない。

というか、完全に“聞かないほうが良かった”系の反応だ。

「……………もしかして、下手の横好きってやつなのか？」

「ち、違うよー！今はただ、その、臥薪嘗胆の時というか、日進月歩の真っ只中というか……………」

つまり、ダメらしい。

俺は眉をひそめて言った。

「先に言っとくが、俺を実験台に使うのはやめてくれよ」

「えー！」

と、歩は不満そうな顔をした。

もしかしてそのつもりがあったのだろうか。

「不知火さんは、私が一生料理できなくてもいいっていうんですか
ー」

「いいんじゃないか、別に。今時それほど困らんだろ」

「うあ、あっさりと……………」

歩はガツクシとうなだれた。

「お前の料理の腕が上達することよりも、俺は自分の命が大切だ」

「そ、そんなにひどくないよー！味付けとか、加減とか、その辺がうまくいかないだけで……………」

「……………ふむ」

まあ命を落とすとか腹を壊すとかの話はとりあえず置いといて。

「ま、アレだな。あまり上手くないのを自覚してるってことは、少なくとも味覚音痴じゃないはずだろ。ってことは上手くなる可能性もあるわけだから、そうになったら食べてやらんこともないぞ」

一応、フォローのつもりである。

が、歩は案外、素直に表情を輝かせて、

「じゃあ、私が納得できる料理ができたなら、ちゃんと食べてくれる
？」

期待感のこもった目で見つめてきた。

「納得できるものが出来たら、な」

「じゃあ、約束」

「ああ」

なんて。

たわいもないやり取りをしつつ、引き続き家庭環境に関する質問を浴びせられ続けること、小一時間ほど。

いつの間にか時計の針は午後五時を指そうとしていた。

(……そろそろ帰るか)

歩のペースに合わせて長居してしまっただが、どうやら体の調子はもう大丈夫のようだし、そろそろいいだろう。

「それじゃあ、俺はそろそろ」と。

俺がそう言いかけた、そのときだった。

……カチャ。

玄関から鍵の開く音。

「！」

歩がピクツとする。

どうやら誰か帰ってきたようだ。

俺は玄関のほうへと視線を向けつつ、

「おい、歩。お前の親か？」

「え。あ、でも」

歩は時計を見て、それから立ち上がって足早に玄関へと向かう。

慌てた様子だった。

「？」

その姿に俺は首を傾げる。

(もしかして、友達を家にあげたらダメとか、そういう厳しい家なのか……?)

だとしたら、ちょっと帰るタイミングを誤ってしまったかもしれない。

「あ、お帰りなさい……………」

玄関から歩の声が聞こえてくる。

その口調にはやはり焦りと困惑が混じっていた。

「今日はずいぶんと、その、早かった……………ですね」

「……………」

玄関から聞こえてくる歩の不自然な敬語に、俺は少しだけ嫌なものを感じた。

「仕事が早く終わったのよ」

歩の言葉に重なるように聞こえたきた声は、想像していたよりも若い女性のものだった。

(歩の母さんか……………?)

だが、その口調はおっとりとした歩の性格から連想できない刺々しいものだ。

「なに？ 邪魔だからそこどいて」

言いかけた女性の声が止まる。

そして、

「靴？ 誰か来てるの？」

棘が強くなる。

不穏な空気だった。

俺は軽く腰を上げる。

「あ、あの……………お友達が来て……………」

「友達？ ……男の子？」

「は、はい……………」

続いて聞こえてきた歩の声は、明らかに震えていた。

「……………」

空気がピンと張り詰めるのがわかった。

俺はすぐに立ち上がり、足早に玄関へと向かう。

そして、

「……………歩ッ！ おまえ ……！」

「……………こんにちはッ！」

女性の怒声と、俺の大声は、ほぼ同時のタイミングだった。

「！」

二人の視線が同時に俺の顔に止まる。

肩をすくめ、今にも泣き出しそうな顔の歩。

玄関で片足だけハイヒールを脱いだ女性。

（この人が……歩の母親？）

俺は信じられない思いでその女性を見つめた。

声から受けたイメージのとおり、女性は三十歳前後のように見える。歩が十三歳だから三十歳そこそこの母親でも決しておかしくない。ただ　俺が怪訝に思ったのはその若さよりも、外見のイメージだ。

痩せ型でメガネをかけた、いかにも神経質そうな顔立ち。身なりはきつちりしているが、香水の匂いかなりきつく、ハイヒールは派手な赤。歩からはまったく想像もできないイメージの女性だった。チラリ、と、歩に視線を送る。

「……………」

歩は動揺している様子で俺の視線には気付かない。ただ、どうやら俺を家に上げたことがNGであることはもう間違いなさそうだ。

俺は女性が驚きで言葉を失っている隙に、続けた。

「俺、歩さんのクラスメイトで不知火といいます。今日は保健室の先生に言われて歩さんをここまで送らせていただきました。ついでに喉が渴いていたので飲み物をご馳走になりました。どうもありがとうございます。」

「……………」

俺が深々と頭を下げると、何事か言いかけていた女性は言葉を嚙む。

「し、不知火さん……………」

恐る恐る口を開いた歩の言葉を遮って、

「俺はこれで失礼します。……………どうもお邪魔しました」

もう一度、深々と。

「……………」
女性は眉をひそめ、そして無言のまま、きつい視線で俺を見た。
何も言わない。

何も言わないが、その視線は“早く出て行け”と語っているように見えた。

その視線を感じながら、俺は玄関に下りて靴を履く。

「……………」
歩は泣きそうな顔だったが、何も言わなかった。

一瞬、これで大丈夫だろうか　と、思った。

もつときちんと説明して、歩が叱られないようにしたほうがいいんじゃないか、と。

しかし

「……………」

苛々した女性の態度を見る限り、俺が長居すればするほど歩にあって悪いことになりそうだった。

「それじゃあ……………」

その空気。

その違和感。

そこに理不尽なものを感じながらも、俺はその家に向かってもう一度、三度目の深いお辞儀をした。

「お邪魔しました」

玄関のドアをくぐり、扉を閉める間際、最後にもう一度歩を見る
と、

「……………」
歩が無言で笑顔を浮かべようとし、諦めて、小さく頭を下げたのが見えた。

ボタン。

扉が閉まる。

カチリ。

すぐに鍵のかけられる音。

「……」
静寂。

ドアの向こうで、二つの気配が遠ざかっていく。
そして 一瞬の間。

「……養われてる身分のクセに、勝手なことをするんじゃない！
この、化け物がッ！！」

「！」

怒声。

そして乾いた打音。

小さなうめき声。

「……」

胸が嫌な音色の鼓動を打つ。

手が汗ばんだ。

俺はその場に立ったまま。

少し、耳を澄ませた。

なんなのだろう。

怒りが胸にこみ上げた。

少し思考が乱れる。

……そりゃあ、厳しい家なら友達を連れてきちゃダメだ、という親も少しぐらいはいるだろう。それ自体は、たとえば勉強が疎かになるからとか、教育の事情があったり、家庭ごとの事情があったりして、それこそ他人がとやかく口を出せる類のものじゃないかもしれない。

だけど

ドアの前に立ったまま、耳を澄ませる。

次、女性が歩に手を上げるような気配があれば、怒鳴り込んで行ってでもそれを止めるつもりだった。

だいたい“養われてる身分のクセに”なんて言い方があるだろう

か。親が子を養うのは当たり前のことだ。もちろん子どもだってその庇護の上にあぐらを掻いてばかりではいけないが、まだ十三歳の歩に、養われずに生きていけというのは無理な話だろう。

それに

さっきの歩の顔を思い浮かべる。

本気でおびえていた……と、思う。

それにあの、親に対するとは思えない、オドオドとした言葉遣い。今日、俺を家に上げたからとか、そういうことだけではなく。

それはきつと、それ以前からの問題。

(いったい、どういう)

再びこみ上げる怒り。

だが、今は何もわからないし、何もできない。

……どのぐらいそこに立っていただろうか。

幸いなことに、それ以降、家の中から歩を折檻する音が聞こえてくることはなく、俺はしばらくしてからようやくそのドアの前を離れることにした。

「だあああああ!! なんなんだよ、あのババアはッ!」

「……どうしたの、優ちゃん」

家に帰るなり、あそこで溜めに溜めた怒りを爆発させた俺に、雪がちよつとだけ心配そうな顔でそう聞いてきた。

「どーもこーもあるかッ!」

と、俺は歩の家で起きた一部始終を雪に話した。

「ふうん……」

紅茶を煎れながら話を聞いていた雪は、珍しくちよつとだけ眉をひそめて、

「それは確かにひどい言い方だね……」

と、俺の目の前に紅茶のカップを置く。

俺は怒りが収まらず、口調を荒らげたままで、

「だろ？ それどころか、自分の娘を捕まえて“化け物”だぜ！？」

……そりゃ確かに、俺もあいつに会う前は、中学生が高校のテストで満点取るなんて人間じゃねえ、なんて言ってたけどよ……」

俺は紅茶を一口すすると、怒りに任せてテーブルを叩く。

「あいつを目の前にして平気であんなこと言えるなんて、あのババアこそ人間じゃねえよッ！」

「落ち着いて、優ちゃん」

雪が宥めるような口調で言った。

「私、その子に会ってないからなんとも言えないけど、優ちゃんがそこまで言うんだからきつといい子なんだね」

「いいヤツだよ。あいつは」

俺は別れ際に、無理に笑顔を作ろうとしていた歩の顔を思い浮かべる。

「少なくとも、親にあんな扱いをされて、それで仕方ないと思えるようなヤツじゃない。……あー、腹が立つ！ こんなことならあそこでぶん殴ってやりゃあ良かった！」

「……」

雪はそんな俺の顔を黙って見つめていたが、ふと、何か思いついたような顔を見ると、

「ねえ、優ちゃん」

「あん？」

そう言っつて雪を見ると、

「その子と私、どっちがいい子、かな？」

「……はあ？」

唐突な質問に呆気に取られた。
が。

「ね、どっち？」

と、そんな雪の穏やかな笑顔に、胸に渦巻いていた怒りが少し収まっていく。

俺はその質問の裏にある彼女の真意に気付き、ゆっくりと息を吸った。

「あー、そうだなあ……」

質問に答える振りをして、深く息を吐く。

……少し冷静になろう。

何の事情も知らない雪に怒りをぶちまけたところで、どうにもならない。

何かしたいなら。

何かしてやりたいなら、まずは冷静になって考えることだ。

雪はニコニコしながら俺を見つめている。

強引に話題を変えようとしたのは、おそらくそれを俺に気付かせるため。

俺はそんな妹の配慮に少し感謝しながら、その話題に乗ることにした。

ちなみに。

おそらくこういう質問をされたとき、多くの人は目の前にいない方の人間のことを良く言うのではないだろうか。目の前にいる人間を素直に褒めるのはなにやら気恥ずかしいし、質問した本人だってストレートに自分を褒めてくれるとは考えていないはずだ。

で、雪の場合。

ここで“歩のほうがいい子だ”というと、それを本気にする。きつとニコニコと笑いながら。

さらに意表をついて“雪のほうがいい子だ”と答えると、嬉しそうにしながらきつと本気にしない。

そういう、ちょっと面倒くさいやつなのである。

まあ、今回の場合はただの雑談。

別に深く考える必要もない。

「基本的には歩のほうが上だが、今月の小遣い次第では逆転する可能性がないとも言切れんな」

俺がそう言くと、雪は不思議そうに首を小さく傾けて、

「なにか欲しいもの、あるの?」

「小遣いがたくさん欲しい。ついでに言うと、木陰から俺をじっと見つめている可愛い転校生との出会いも欲しい」

「瑞希ちゃんに転校してもらおう?」

「……それじゃ恋愛じゃなくてバトルものになっちまうだろーが」

「じゃあ、私、ヒロイン役やるよ」

「そういう危険な香りのシチュエーションは求めてないッ」

「そうなんだ。残念」

そう言つて、雪はクスクスと笑つた。

結局わけのわからない話になるのはいつものとおりである。

「……さてと」

その会話で完全に毒気の抜けた俺は、空のティーカップをテーブルに置いて立ち上がった。

「部屋に戻るわ。晩飯になったら呼んでくれ」

「うん」

雪の返事を背中に聞いて居間を出る。

……と。

「優ちゃん」

「ん?」

振り返ると、雪が少しだけ真剣な面持ちでこちらを見つめていた。そして、

「あのね。他人のお家のことだからあまり気軽に口を出しちゃいけないと思っただけど……」

そう前置きしてから言つた。

「きつと何か事情があるんだと思う。だから、もしもその子が優ちゃんを頼ってきたら、力になってあげないとダメだよ」

「……わかつてるよ」

言われなくてもそのつもりだ。いや、頼つてこなくてもできる限りのことはやってみようと思つている。

「そう」

雪は微笑みながら小さく頷いた。

「じゃあ晩ご飯になったら呼ぶからね。すぐに降りて来なきゃダメだよ」

「わーってるよ」

そうして俺は居間を後にする。

(……山咲先生に話をしてみるか)

雪の言葉で決意を新たにした俺は、とりあえず歩と一番関係の深そうな山咲先生に相談することに決め、階段を上がっていった。

1年目10月その1

「……それで、どうして私のところに？」

十月に入ったばかりのとある月曜日。

周りの、まるで新種の生き物でも発見したかのような不思議そうな視線を一身に集めながら、俺は目の前の女生徒に対して答えた。

「一番詳しいって聞いたもんで」

昼休み、一年三組の教室。

窓際、前から四番目の席に俺は自分の弁当箱を広げていた。

そして、そんな俺の目の前。

「誰がそんなことを？」

椅子に座っていながらも決して崩すことのない、ピンと背中を張った見事な姿勢。そして手元の弁当箱に手をかけたまま俺を見つめる無表情な瞳。

「山咲先生が。歩のこと一番詳しいのは神村さんだってな」

「……」

そう。今、俺の目の前にいるのは神村さんだ。

歩のことをどうにかしてやろうと、そう決意した翌日の金曜日。

放課後に山咲先生のもとを訪ね、単刀直入に歩の家での出来事を打ち明けると、返ってきた答えが、

“神村さんに聞け”

だった。

というわけで、その週末明けの本日月曜日の昼休み。

俺は早速こうして神村さんのもとを訪ねたわけである。

ちなみに　これはまあ、別に今気付いたことでもないのだが、

神村さんはクラス内でかなり浮いた存在のようで、昼休みに一緒に弁当を食べる友人どころか、近付いてくる生徒さえも見当たらない。神村さん自身もそれをまったく気にしていない様子だから、なおさら周りと関わりがなくなってしまうのだろう。

……で、そんな神村さんと他クラスの男子である俺と一緒にいる、という辺りが、冒頭で説明した、周りから奇異の視線の原因となっているわけだ。

ちなみに、一緒に弁当を食べないかとの誘いは、神村さんに速攻で断られていた。

「それでも、ここで食べるつもりなんですね」

「ん？ いや、だって、たまたま同じ机で別々に弁当食べてるだけだろ？」

「……」

神村さんは呆れたのか、あるいはどうでもいいと思っているのか、何も言わずにゆっくりとした動作で自分の弁当箱の蓋を開く。

「わかりました。何が知りたいのですか？」

話が早い。

俺は言った。

「歩のこと。いや、歩が家でどうしてあんな扱いを受けているのか」
「……」

神村さんの無表情な視線が、思考するかのようにほんの僅かに横に泳いだ。

その反応は俺の言葉の意味　つまり歩が周りの人間からどういう扱いを受けているか　を知っているということだろう。

「不知火さんが彼女の事情をどこまで知っているのかわかりませんが」

神村さんはそう言うと、再び真っ直ぐに俺を見据えた。

「それを聞いてどうするのですか？　あなたに何かできるのですか？」

ゆっくりとした口調ながら、言葉自体は厳しい。

が、俺は微動だにせず彼女を見返すと、

「そんなのわからない。けど、何かできるならしてやりたいとは思ってる」

と、答える。

「中途半端に何かしたところで、逆に悪い結果を生み出すこともあります」

「やるなら中途半端になんかやらないさ。そんな気持ちなら、他人の家の中にまで口出ししようなんて最初から思わない」

「何故、そんなに神崎さんを？」

「何故？ あーっと、そうだな……」

ちよつと考える。

「なんとなくかな。ま……友達っばかりするしな、俺ら……」

神村さんは再び黙り込んで、そのままさらに真っ直ぐに俺の目を見た。

まるで、俺の心を見透かそうとしているかのように。

そして、一呼吸。

「神崎さんのご両親は二年ほど前に亡くなられています」

「……え？ じゃあ今一緒に暮らしてるのは？」

「神崎さんの母親の弟夫婦、つまり叔父と叔母にあたります」

「なるほど」

つまりあの女性と歩の間には血のつながりがないことになる。容姿も性格もまったく似ていなかったことも納得だ。

ただ、その事実だけですべてが納得できたわけではない。

俺はさらに尋ねた。

「けど、叔母さんなんだろう？ 自分の姪っ子にあんな態度取るか、普通？」

そう言いながら俺は、俺の母親代わりである伯母さんのことを頭に思い浮かべていた。

伯母さん 瑞希の母親である宮乃伯母さんは、二歳の頃に両親を失った俺たちを、自宅と俺たちの家とを頻繁に行き来しながら懸命に育ててくれた。俺たちに注いでくれた愛情は、たぶん実の娘である瑞希ともそう変わらないものだったと思う。

もちろん、歩とは両親を失った年齢も違っし、そもそも宮乃伯母

さんと歩の叔母との性格の違いもあるのだろうか

そんな俺の疑問に対し、神村さんは続けた。

「彼女が叔父叔母夫婦に養われるようになってから、その一家には立て続けに悪いことが起こりました。叔父の会社が倒産して失業した直後、それまで住んでいた一軒家が不審火による火事で全焼。今のアパートに移り住んだ後も叔父の再就職先は見つからず、かなり苦労しているようです。……叔母が彼女のことを疫病神だと思いはじめたのに、それほど時間はかかりませんでした」

「……んなアホな」

神村さんの言葉に、俺は呆れると同時に怒りがこみ上げてきた。

「そんなん、どう考えたって偶然だろ。偶然の不幸を歩のヤツに押し付けてるだけじゃねーか」

だが、神村さんは表情一つ変えずに、

「彼女がそう思い込んだのには、理由もあります」

「理由？」

「はい。神崎さんの本当の父親は特別な力を持っていました」

「特別な力……？」

その言葉で俺はピンと来た。

「それって、もしかして悪魔、ってことか……？」

少し声をひそめてそう尋ねると、神村さんは小さく首を横に振って、

「近いですが、正確には違います。……不知火さん、こんな話はご存知ですか？」

と、言って 話しっぱなしなのにいつの間にか食べ終えていた弁当箱の蓋を閉じ、膝の上に両手を重ねて真っ直ぐに俺を見た。

「人間というのは、もともとは悪魔と同じ。悪魔の中の一種族であった、という話です」

「人間が、悪魔……？」

もちろん聞いたことはなかった。

「その昔、“人間”という種族だけが魔界を出てこの世界にやって

きた。そして他の悪魔たちと争うことのなくなった“人間”は種族特有の力を退化させていきました」

「……本当なのか？」

唐突な上、何の知識もない俺にはオウム返しのように聞き返すことしかできなかった。

「私にも真実はわかりません。ただ」

どうやらその話の真偽はそれほど重要ではないらしい。

神村さんは続けた。

「そのときに失ったとされる“種族特有の力”は、この時代においても時折、一部の人間に発現しています」

「というと？」

「この世界で時折取り上げられる力　俗に言う“超能力者”がそれに該当します」

「……超能力？」

「はい」

「……」

いや、まあ、俺自身がこういう存在なのだから、いまさら超能力者が実在する程度の話で驚いたりはしないのだが

「つてことは……アレか？　テレビとかで見る透視とか物体浮遊とか瞬間移動とか……ああいうのは、トリックとかじゃなくて、その超能力者が実際に力を使っているってのか？」

「いいえ、それらの大半は何らかのカラクリによるものでしょう。」

人間の超能力は基本的に念動力と精神感応力の二つしかありません。透視などは精神感応力の応用で可能ですが、瞬間移動は不可能です」

と、神村さんは言った。

念動力と精神感応力、いわゆるサイコキネシスとテレパスというやつか。

具体的にどういうものなのかわからないが、神村さんが言うのであればそうなのだろう。

俺は尋ねる。

「じゃあ、その叔母さんが不幸の原因を歩に押し付けてるってのは……」
「神崎さんの家はそういう家系です。……それが遺伝で受け継がれる例は非常に珍しいのですが」
「歩もその力を持っている？」
「はい。彼女のそれは弱いものですが」
「で、歩の叔母さんは、その力が自分たちに不幸をもたらしている、と？」

神村さんは頷いた。

「神崎さんの叔父叔母夫婦は“こちら側”のことをほとんど知りません。その力がどういった類のものであるかもわからないのです」
「……なるほどね」
わかつてきた。

つまり歩の叔母が口にした“化け物”という言葉は、俺が考えたように、歩が人間離れた学力を持っているからとかそういうことではなく、叔母にとって正体不明の力 歩の持つ超能力を指して言っている言葉なのだろう。

確かにそれは人間の常識で計れない力で、その中身を知らない人間にとつては不気味なものだ。そんな力を持った歩を引き取った直後、偶然とはいえそれだけの不幸が重なったのなら、それが原因なんじゃないかと、そう思い込みたくなる気持ちもわからないではない。

わからないではない、が

あれでは何の罪もない歩があまりにも可哀想だ。

あいつだって両親を失って間もなく、誰かの愛情に飢えているに違いないというのに、それを期待すべき相手にああいう態度を取られたのでは。

学校でも、何があったのかは知らないが、自分のクラスに溶け込めないでいる。

孤独、だったのだろうか。

……知り合った後、訪ねていくたびにパツと顔を輝かせていた歩の態度を思い出して、それでも俺たちの前で明るく振舞っていたその心情を慮って、俺は何ともやるせない気持ちになっていた。

「お話しできるのはこのぐらいです」

「……ああ。そっか」

神村さんの言葉に、俺は頷いた。

本当はもう少し聞きたいこともある。そもそも神村さんが何故、そんなにも歩の事情に詳しいのか、とか、もしかして悪魔狩りとか関係があるんじゃないか、とか……

だが、それはひとまず後回しだ。

「サンキュ、神村さん。時間かけさせて悪かったな」

と、俺はまだ半分以上残っている弁当箱を持って立ち上がった。

「いえ。……不知火さん」

「ん？」

神村さんは相変わらず感情の読めない瞳で俺を見つめていた。

「食べている最中に動くのは良くないです。最後まで食べてから戻つたらどうですか？」

「え？」

俺はそんな彼女の言葉に少しだけ驚いたが、

「……ん、まあ。神村さんが邪魔でないなら」

手に持った食べかけの弁当箱と神村さんの顔を見比べながらそう言うし、

「どちらかといえば邪魔です」

「……」

そのときの俺はきつと、かなり微妙な表情をしていたことだろう。「でも、少しぐらいは仕方ないですから」

と、神村さんは言った。

彼女の好意(?)を喜んでいいものなのか、非常に判断に困るところである。

が、俺は結局、

「じゃ、お言葉に甘えて」

再びその席に腰を下ろすことにした。

その後、無言で弁当箱の残りを片付け始める。

「……」

その間、神村さんは黙って外を眺めていた。

……人の少ない教室に、俺の箸が弁当箱をつつく音だけが響き渡る。

教室の隅には生徒たちがお喋りする声。グラウンドからは、昼を早めに食べ終えてサッカーをしている生徒の掛け声が聞こえた。

そんな中、

「不知火さん」

しばらく無言だった神村さんが口を開いた。

「……んむ？」

口の中に食べ物詰め込んだまま、不明瞭な返事をして顔を上げる。

「……」

神村さんの視線は外を向いたままだった。

何か思い悩んでいるかのようなそのポーズは、もともと大人しそうで儂げに見える彼女には妙にピッタリと似合っていた。

「……彼女はとてめいい子です」

「え？」

突然の言葉に俺は呆気に取られた。

「神村さん？」

そして問いかける。

ポツリとつぶやいたその言葉は、いつもの彼女のものではないように思えた。頑なに逸らしたままのその視線にも、いつもの無表情なものとは違う、何らかの感情が少しだけ渦巻いているように感じられる。

「神村さん……？」

しかし、俺がもう一度問いかけたとき、神村さんはすでにいつも

の表情に戻っていて、そしてそのままの視線を俺に向けると、言った。

「先ほども言いましたが、中途半端に口出しするようなことはしないでください。もっと悪い状況になりかねませんから」

「……」

感情のない言葉。

だが、先ほどの表情を見た後だと、その言葉も、まるで俺の行動に期待し、応援してくれているかのように聞こえた。

「……何とかするよ。約束する」

「そうですね」

神村さんの返答は、いつものごとく素っ気無かった。

1年目10月その2

「……あ、やべ！ 悪い、伯父さん！ 待ち合わせの時間に遅れっちまう！ 話、あんがとな！」

受話器の向こうから聞こえてくる、ところで学校の成績はどーたらこーたらとかいう伯父さんの言葉をボタン一つで強制終了させて俺は慌てて自分の部屋を飛び出した。

玄関へと続く階段の途中。

窓の外から見える空はあいにくの曇り空だ。

「あ、優ちゃん！ 傘、傘！」

バタバタという俺の足音に気付いた雪が居間から出てきた。

俺は右足に靴を引っ掛けながら、

「傘あ？ 今日はいせいで霧雨ぐらいだろ？ 平気だったの」

「ダメだよ。優ちゃんは平気でも、向こうが平気とは限らないんだから。……ほら、ポケットちゃんとしなきゃ」

そうやって、裏の生地が少し飛び出していた俺のズボンのポケットを直し、ポンポンと叩く。

そうしながら雪は上目遣いに俺の顔を見た。

「せっかくのデートなんだもの。女の子をガツカリさせちゃダメなんだから」

「デートって、お前なあ……」

我が妹は今朝早くからずっとこの調子だ。

ちなみに今日の俺はいつものヨレヨレシャツに穴あきのジーパン姿 などではなく、白のシャツにライトグレーのニット、ダークブラウンのジャケットとピシッとした新品のジーンズ。

普段なら面倒くさくて絶対に着ないようなこの服装は、朝飯を食べてすぐ、このおしゃれ好きな妹に着せ替え人形させられてしまった結果なのである。

「デートなら少しくらいは、ね？ ……それじゃ行ってらっしゃい、

「優ちゃん」

と、どこか満足げな妹に追い立てられるようにして。

俺は家を出たのだった。

(……やれやれ)

腕時計を見ながら目的地へ向かって歩き出す。

そんな俺の見慣れない格好に、途中で偶然会った仲田というクラスメイトに怪訝そうな顔をされてしまったが、適当にあしらって、目的地である駅前広場に到着したのは待ち合わせ時間である十時のちょうど十分前だった。

(なんだ。意外と早く着いたじゃないか)

いや、むしろ早すぎたかもしれない。

一応、待ち合わせの相手を探してぐるりと辺りを見回してみた。

休日の朝はこの広場が一番賑わう時間帯だ。中学生から大学生までの様々な年齢の男女が、明らかに待ち合わせという様子でそこかしこに立っている。もちろん中には友達同士の待ち合わせもあるだろうが、その多くはこの休日恋人と過ごすというカップルの片割れだろう。

(……ホント、平和なもんだ)
なんて。

周りから見れば俺も明らかに同類に見えるのだろうが、そのことはとりあえず考えない。

結局、待ち合わせ相手の姿は見当たらず。

彼女がやってきたのはそれから約五分後のことだった。

「不知火さーん！」

赤い傘を片手に、俺の名を呼びながら駆け寄ってくる少女が一人。我が校きつての天才少女、神崎歩様である。

「おい、転ぶなよ！」

と、俺が声をかけた途端。

「あっ……」

段差もなにもないところにつまずいて、フラフラと前のめりにな

る歩。

「おいっ！」

俺は咄嗟に手を出した。

「……っど、っど」

転ぶ直前、まさに間一髪のところ、歩が俺の手を掴む。

歩はそのまま俺の顔を見上げると、

「たはは……ごめんなさい」

と、照れ笑いを浮かべた。

なんともまあ、どんくさいヤツである。

俺は呆れながらも、

「足、ひねってないか？」

歩をちゃんと立たせてそう聞いた。

「うん。不知火さんが支えてくれたから大丈夫だよー」

歩はそう言っただけで、俺から少し離れ、つまずいた方の足だけでピョンピョンと軽く飛び跳ねてみせた。

「ったく」

本当に天才なのかと疑ってしまうその行動に、俺は呆れ顔でもう一度ため息を吐いた。

……実はこうして歩と会うのは実に二週間ぶり。家に行き、歩の叔母さんと初めて会ったあの日以来のことだ。もともと学校で会うのは、歩が俺たちの教室に遊びに来るか、あるいは俺が保健室に行ったときに偶然歩がそこにいるかのどちらかだったのだが、俺はあれからあまり保健室には行ってなかったし、歩のほうもちょっと気まずかったのか、自分からウチのクラスを訪ねてくることはなかった。

「あのね。私、不知火さんが怒ってると思って会いに行けなかったの。だから昨日電話もらったときは、あんまり嬉しくて電話台に頭ぶつけちゃった」

額に手を当てながら笑う。

「大げさなやつだな」

昨日の電話で、どこか遊びに行かないか　はい、の後にゴッソ
という音がしたのは、どうやら気のせいではなかったらしい。

重ね重ね、どんくさいヤツだった。

そんなこんなで、とりあえず並んで一緒に歩き出す。

目的地は特に決めてなかったのだが、歩はこの辺りをあまり歩い
たことがないのか、駅前には並ぶ店にとりどころで足を止めては、

「あ、ねえねえ、不知火さん。あれ見てー」

などと、たびたび俺の袖を引いた。

最初のうちはそんな歩を黙って眺めていたのだが、あまりにもそ
んな状況が続いたので、

「どこか行きたいとこないのか？　そんなの眺めてたって楽しくな
いだろ」

「えー？　楽しいよー」

と、今度は女の子向けファンシーショップの店頭に並んだアクセ
サリーを眺めていた。といっても買う気はどうやらなさそうで、俺
には理解できないがそれで本当に楽しんでるらしい。

「今度はあっちー」

「……あー、わかったわかった」

俺を引つ張る歩はずっと笑顔のまま。その明るい表情は、家で
身内に冷たくされているというような暗い影など微塵も感じさせな
いものだった。

……実を言うと、ここ数日ずっと考えていた。無理して明るく振
舞っていたことに気付けなかったのは、俺の目が節穴だったからな
んじゃないか、と。

けど、どうやら違う。

この少女はきつと、切り替えが上手なのだろう。

たとえ後に辛いことが待っているのだとしても、今を素直に楽し
むことができる。だからこうして見せる笑顔は本当の笑顔だし、俺
のような周りの人間に暗い影を感じさせることもない。

そういう意味できつと、本当に頭の良い子なのだ。

「……なあ、歩」

そうして特に起伏のない時間を二時間ほど過ごした後。

「なあに？」

俺の手を引いて次の店に向かおうとしていた歩が不思議そうに振り返る。

「ちよつと休まないか？」

「え？ あ、疲れちゃった？ ごめんね。ちよつとはしゃぎすぎちゃったみたいー」

たはは、と照れ笑いを浮かべる。

「いや、別に疲れたってわけでもないんだが」

俺は真顔で、歩に引かれている右手首を指して言った。

「あんまり引つ張られすぎて、手首が外れそうだ」

「え？」

歩がきよとんとした、その瞬間。

突如、俺の右手首がスポンと抜けた。

「!？」

歩の表情が凍りつく。……すっぽ抜けた俺の右手首を持ったまま、一度、二度……その手首と、ダラリと垂れ下がった俺の右袖を見比べる。

そして、

「あ……え、と……？」

困った様子で俺の顔を見上げた。

その反応に俺は吹き出して、

「わはははは、引っかかったなッ！」

そう言いながら、服の袖から本物の右手をよきつと出現させる。

「……あーッ！」

それを見て、歩はようやく自分がかかわれたことに気付いたらしい。よくよく見てみれば、歩の持っている右手首が、本物によく似た触感の作り物であることがわかる。それは中学の修学旅行先で売っていたのを衝動買いしたもので、本来は手品とかで使われるも

のらしいが、今までそんな高尚な（？）目的で使ったことは一度たりともなかった。

「ふ。まだまだ甘いな、歩くん」

笑いながら歩の頭をポンポンと叩くと、

「ひつどーい！ 本気で心臓止まるかと思ったー！！」

歩はふくれっ面をして、最初は本気で怒ったような顔をしていたのだが、やがて自分でも可笑しくなってしまったのか吹き出すように笑つと、

「……でも、これすごい。ホントに良く出来てるねー」

「俺の秘密の七つ道具のうちの一つだからな」

「他の六つは？」

偽者の手をプニプニさせながら聞いてくる。

「もちろん秘密だ。何しろ秘密道具だからな」

「じゃあこれで秘密の六つ道具になっちゃいましたねー」

そう言つて歩はやはり楽しそうに笑つた。

そんなこんなで。

十四時近くまでブラブラしていて、かなり遅い昼食をとるために俺たちが入ったのは、駅のそばにあるファミレスだった。

結局、待ち合わせ場所から大して移動していないことになる。

窓際の席に座るなり、俺はメニューをチラツと眺めて言った。

「ここはおごつてやるう。好きなものを選ぶがいい」

「ホントに？ ……えへへ、なんだか今日は不知火さん優しいねー」

「いつも優しい、の間違いだろ」

「そうだけど、今日はもつと、かな」

「……」

冗談をまともに返されると何ともいたたまれない。

そんな俺をよそに、歩は嬉々とした様子でメニューを選び始めた。「なに頼んでもいいの？」

「ま、太らん程度にな」

「うーん、どうしようかなー」

と、歩は真剣に悩んでいる様子だった。

で、結局。

「一応、昼飯のつもりだったんだが」

俺は自分の頼んだきのコスパゲッティをフォークで突付きながら、彼女の手元にあるものを見る。

透明なグラス。

山盛りになつたアイスクリーム。

それは見ただけで胸焼けがしそうなチョコレートパフェだった。

「だって食べたかつたんだもんー」

歩は幸せそうな顔でパフェの一番上のアイスを口に運んでいる。

「やっぱお前も女の子だねえ……」

俺が呆れ顔でそう言うと、

「女の子だよー」

歩はニコニコしてそう答えた。

ちなみに俺は甘いものがあまり得意ではない。嫌いなわけではないのだがあまり量を食べられないので、目の前のこのチョコレートパフェなら、上に乗っかっているアイスクリームですでに致死量ギリギリである。

「……」

俺は自分のスパゲッティを速攻で平らげ、あとは黙って歩の食べっぷりを眺めることにする。

歩は途中からちょっと遊んでいるような感じで、かき混ぜたり底のほうを突ついたりして、その表情は本当に幸せそうだ。

あまり食べたことがないのかもしれない。なんてのは勝手な想像か。ただ、少なくとも今のあの家の状況では、こんな風に家族で町を歩き回るといふこともなさそうに思えた。

……そろそろ、頃合だろうか。
俺はそう決心して、口を開いた。

「……歩」

「？」

歩はちよつとだけ手の動きを止めた。

「どうしたの？　なんだか眉間に皺寄ってますよー」

「いや」

そんな歩の様子に、俺は少しだけ言葉に詰まった。

思考をまとめるため、視線を泳がせて間を置く。

……ピークの時間を過ぎていているファミレスは、俺たちの他に二人、三人の客がいるだけだった。

厨房の陰に、暇そうにしているウェイトレスの背中が見える。

窓の外は相変わらずの曇り空。それでもまだまだ雨は降り出していない。

視線はぐるりと一周して、再び歩のもとへと。

「？」

その間も歩はずっと笑顔のまま。

……もしも俺が次の言葉を発すれば、この笑顔はすぐに曇ってしまうに違いない。楽しい時間も幕引きとなってしまうだろう。

だけど、このまま放っておくわけにはいかない。

神村さんとそう約束したし、俺自身、歩には俺たちの前だけでなく、どこでも笑っていられるようにしてやりたいと思う。

『……何故、そんなに神崎さんを？』

神村さんに言われた言葉が頭の中をグルグルと泳ぎ回る。

何故だろうか。

神村さんに答えたように、単に友達だからかもしれない。

妹の雪にどこか似ているところがあるからかもしれない。

あるいは、彼女が非日常的な力の所有者であることを知って、親近感が沸いたからかもしれない。

思いつく理由は色々あるが。

……そんなことはどうでもいいのだ。

放っておけない、と、俺が今、そう感じていることが全て。だからこそ。

歩にとつておそらく触れられたくない話題であっても避けて通るわけにはいかない。

俺は仕切りなおして、再び言った。

「……歩。この前の話だが」

「この前？」

歩は怪訝そうな顔で聞き返してくる。

が、その表情は少し芝居がかっていた。おそらくは、俺が何を言いつ出すのか予想がついているのだろう。

「事情は神村さんに聞いた」

「沙夜さん？」

そして歩の表情が明らかに曇っていく。俺を見つめる瞳は、その話題に触れないで欲しい、と、懇願しているかのようにも見えた。

それでも俺は先を続けて、

「お前の両親が亡くなっていること。一緒に住んでいるのが叔父さんと叔母さんだということ。それに」

歩の視線が少し下に落ちる。

俺はさらに続けた。

「お前があの家でどんな扱いを受けてるのかってこと。……俺も実際に見たけど、もうちょっと詳しい話も聞いた。前からそうだったってことも」

「……そっか」

沈んだ声だった。

「けど、勘違いしないでくれよ。俺は別に好奇心でそんなこと聞いたわけじゃないし、神村さんだつて面白半分で話してくれたわけじゃない」

俺はそう言うってから少しだけ間を置くと、大きく息を吸い込んで言った。

「神村さんはきつとお前のこと心配してる。俺だつてそつだ。どうにかしてやりたいと思ってる。だから……お前がどう思っているのか知りたい。今日は、本当はそれが目的でお前を呼び出したんだ」
「……どう、つて？」

俯いた視線が、ほんの少しだけ上目遣いにこちらを見る。

俺は真つ直ぐにその視線を見返して、

「お前だつて自分の受けている扱いがまともじゃないってことくらいわかつてんだろ？ その状況をどう思ってるのか聞きたい」

嫌だ。

辛い。

どうにかしたい。

言葉は何でもいい。この現状を打破したいという意味さえ確認できればそれで良かった。

客観的な事実は揃えた。

それを解決するための力も用意した。

それでも。

それでも俺は、まだ部外者だ。今のままでは何をする権利もない、ただの他人に過ぎない。

だから歩の言葉が必要になる。

あの家での暮らし、そしてそこで一緒に暮らしている人々について、どう思っているのか。これからどうしようと思っているのか。

本人の意思がどうしても必要だった。

……二、三分ほど沈黙が続いただろうか。

ようやく歩がそつと口を開いた。

「……私、疫病神だから」

独り言のような呟きだった。

「……」

俺は俯いたままの歩を黙って見つめる。

「叔父さんと叔母さんに不幸を持ってきたいけない子だから。普通の子じゃないから。だから、仕方ないの」

「だからどんな扱いを受けても我慢する、ってのか？」

「だって、仕方ないよ……仕方ないの……」

少し声が震えた。

泣き出すのかと思ったが、寸前のところでこらえているようだった。

「……どうして仕方ない？」

俺は少し声を低くして言った。

「お前は何も悪くないだろう。仕方なくないだろう？俺はお前の叔父さん叔母さんのことはほとんど何も知らない。けど、俺が実際に見て、聞いて、お前が受けている扱いが不当なものだってことぐらいはわかる」

「……」

「会社潰れたとか、家が火事になったとか、それを全部お前のせいにして、八つ当たりして。最低じゃねえか、そんなの。大人として、いや、人間として」

「……やめてッ！！」

「！」

聞いたこともないような、ヒステリックな声だった。

そんな声が出せたのか、と。

驚きに彼女を見つめる。

「やめて、やめてやめて！」

歩は耳を塞ぐと、小さい体から声を絞り出すようにして叫んだ。

「……」

俺は口を噤んだ。

少し焦りすぎたのかもしれない、と。

だが、冷静になった俺とは正反対に、熱を帯びた歩の言葉は止まらなくなった。

「だって、私に来るまでは幸せに暮らしていたんだもん！叔母さんだって優しくって、いつもお菓子を持ってきてくれて……！」

膝の上に置いた歩の手が、興奮で小刻みに震え出す。

そして、

(…………?)

俺はそこで異変に気付いた。

空気が、震えている。

(これは)

まるで歩の感情に呼応しているかのように、俺の肌にもはっきりと空気の振動が伝わってきていた。

「歩、落ち着け…………ッ！」

危険を感じ、歩を落ち着かせようと手を伸ばしたが、

「全部…………！」

歩は顔を上げて俺の手を払った。

その両目は溢れ出した涙で濡れていた。

「全部壊しちゃったんだもの！ お父さんとお母さんも、叔父さんと叔母さんだって、全部、全部、私が ツー！」

ピッ…………

鼓膜に響く小さく甲高い音。

「っ…………！」

テーブルの上のコップに小さな亀裂。それを確認したのとほぼ同時に、パン、パン！ と、目の前のコップが立て続けに割れていく。周囲がどよめく。

「なっ、なんだあ!?!」

「なに、これ」

店中のあらゆる場所で同じ現象が起こっているようだった。

(…………これが念動力か！)

神村さんから話を聞いていた俺は、それが歩の力だと理解するまでにそれほど時間はかからなかった。

「歩！ やめろ！」

俺はそう叫び、歩の肩を両手で押さえる。

が、それでも歩の興奮は止まらなかった。

「私がいなければ…………私が ツー!」

「歩ッ！」

と、俺が歩の肩を大きく揺さぶった、その瞬間。
パァンッ！！

「!?？」

俺たちの頭上にあつた蛍光灯が破裂した。

「……………歩！！」

興奮している歩は、降り注いでくる蛍光灯の破片にも気付いていない。

俺は咄嗟にテーブルを乗り越えて歩を抱きしめると、その上に覆いかぶさった。

「……………え？ あ　ッ！」

歩がそう声を発するのと、蛍光灯の破片が降り注いでくるのはほとんど同時だった。

「ッ！」

頬と首筋に鋭い痛みが走った。

蛍光灯が地面に落ちて割れる。

「し……………不知火さんッ！」

耳元で、歩が悲鳴のような声をあげた。

「……………大丈夫だ」

「で、でも……………ッ」

と、心配そうな声。

どうやら興奮は少し収まったようだ。空気の振動もなくなっている。

ひとまず俺はそのことに安堵して、

「だから大丈夫だったの」

俺の頭についた蛍光灯の破片を払おうとする歩の手を止め、ゆっくりと体を起こす。

首筋にちくりとした痛みが走ったが、大した怪我ではなかった。

そして俺はゆっくりと大騒ぎの店内を見回す。

ところどころで同じような現象が起きているようだったが、どう

やら怪我人はいないようだ。

「よし……」

それを確認した俺は歩の手を取って、

「歩。……とりあえず逃げるぞ」

「え？ で、でも……」

「いいから。話がややこしくなるだろ」

戸惑う歩の手を強引に引っ張って、まだ混乱の収まらない店内から逃げ出す。

店はどうやら窓ガラスも割れていたようで、外には少しずつ野次馬が集まりかけていたが、正面から店を出た俺たちに注意を向ける人間はほとんどいなかった。

「し……不知火さん！ その、御代もまだ」

「いいから黙って走れッ！」

そうして俺たちは野次馬に紛れながら、逃げるようにその店から離れたのだった。

「……大丈夫か？」

歩は疲れた様子でベンチに頂垂れたままだったが、俺が買ってきたジューズを目の前に差し出すと少しだけ顔を上げた。

「あ、ありがとー……」

お礼の言葉にもいつもの元気はない。

……あの後、俺たちは駅前通りを離れ、俺の通学路の途中にある中央公園まで逃げてきた。

体の弱い歩には、駅前からこの公園までのダッシュは相当きつかったらしい。ただでさえ色白な顔がさらに青白く見える。

まあ、彼女に元気が無いのは、それ以上に先ほどの出来事の影響が大きいのだろうが

「今頃騒ぎになってるな、きつと」

歩の隣に腰を下ろし、俺は自分のジュースの缶を開ける。

「……………」

歩は受け取ったジュースを両手で握りしめた格好で、視線は下に落としたままだった。

「ま、怪我人はいなかったみたいだし、窓とコップと蛍光灯についてはとりあえずゴメンなさい、だな。……………まさか弁償しに戻るわけにもいかないだろうし」

そう言っただけは笑う。

「でも、ああいう場合って原因の説明はどうすんだらうな。案外、後で心霊スポットとして紹介されたりして」

「……………不知火さん」

歩がゆっくりと顔を上げた。

「ん？」

俺はジュースに口を付けたままで歩を見る。

歩は真剣な表情だった。

(……………まあ、当然か)

これでヘラヘラ笑っていられるようなら、かなりの大物が単なる馬鹿のどちらかだろう。

歩はそのどちらでもないようだ。

「不知火さんは……………どうして平然としていられるの？」

「んー、なに？ さっきのことか？」

歩は頷いた。

「だって不知火さん、わかってるんだよね？ さっきのこと、私のせいだ、って」

「ああ」

「不気味じゃないの？ だって私は」

「疫病神、か？」

「……………うん」

歩は目を伏せて小さく頷いた。

そんな彼女の仕草に、俺は苦笑する。

「？」

歩は怪訝そうな顔をした。

俺がどうして笑ったのかわからない様子だった。

「つまりさ」

俺はその種明かしをすべく、ポケットからティッシュを一枚取り出すと、

「こういふこと」

それを丸め、ポン、と、軽く宙に浮かせる。

そして、

「……燃える」

手の平に力を集中させた。

すると、

「え……？」

丸めたティッシュは歩の目の前で燃え上がり、一瞬のうちに燃え尽きてしまう。

驚く歩に、俺は言った。

「見てのとおりさ。普通じゃない、って点じゃ、お前より俺のほうがずっと上だよ」

と、手の平に残った黒いティッシュの残骸をふつと吹き飛ばす。

そして、驚いた顔のまま俺を見上げる歩に視線を戻すと、

「お前は、そんな俺が普通の人間のように暮らすのはおかしいと思うか？ 俺には普通の人間のように暮らす権利がないと思うか？」

「う……うん！ そんなこと思わないよ！」

歩は慌てて首を横に振った。

ここで“うん”と言われたら俺も少なからずダメージを被るところだったのだが、幸いそんな展開にはならなかったようである。

俺は少しだけホッと胸を撫で下ろしつつ、

「じゃあ俺より普通に近いお前には、俺よりももっと普通に暮らしていく権利があるはずだ。そうだろ？」

「……でも、私」

「そこでだ」

歩が何か言おうとするのを遮り、俺は言葉を続けた。

「俺に名案がある。お前が悩むことなく、お前の叔母さんたちもきつと納得できるんじゃないかって妙案だ」

「……妙案？」

それは、神村さんの話を聞いたときからずっと考えていて、なおかつ、今日の朝になってようやく現実味を帯びた作戦だった。

俺は言った。

「家出するんだよ」

「い、家出？」

歩は驚きの声をあげた。

「そ。まあ、今時家出なんか珍しいことじゃないだろ」

俺が何でもないことのように言うと、歩は困惑した顔で、

「そ、そんな、私、叔母さんにとずっと迷惑かけっぱなしなのに、家出なんて……」

当然の反応だった。

だが、俺はそのメリットを説明する。

「今の状況ってのはさ。お前にとってもあの叔母さんにとっても決していいもんじゃない。けど、お前が家出すりゃ、お前が叔母さんに変な気を遣う必要はなくなるし、こう言っちゃなんだが、叔母さんも頭を冷やしやすい機会になる。……別に、永久にあの家から離れろって意味じゃない。お互いに色々なことを考え直すきっかけにしるってことさ」

「で、でも、家出しても私、行くところないよー……」

歩は俺が本気なのか冗談なのか判断しかねているらしい。

が、俺はもちろん本気だ。

ゆつくりとベンチから立ち上がって、くるりと歩に向き直る。

日は少しずつ西に傾き始めていた。

「行くところ？ あるだろ、ちゃんと」

歩が不思議そうに俺を見上げる。

……この作戦は、単なる俺のわがままだ。

俺自身の力ではどうすることもできなくて、伯父さんの力を借りる必要があった。

俺の周りには、たまたまそれを実現できる環境があった。

今後のこととか、色々な細かいこととか、そういうったものはほとんどよくわからない。

だからそれらは何一つ、俺の力じゃない。俺がそうしてやったのだと胸を張るところか、こんなわがままを聞いてくれた伯父さんや、妹や、従姉に頭を下げて回らなきゃならないことだ。

だけど、それでも。

それでも俺は、この明るくて優しく、そしてちょっとだけ弱々しい少女のために、何かしてやりたいと思ったのだ。

そして俺は、彼女に向かって右手を差し出した。

「ウチに来いよ、歩。今日からは、俺がお前の家族になってやる」

「……え？」

ぼかん、と。

歩は惚けたように口を開いたまま固まってしまった。

1年目10月その3

「君が……不知火くんかい？」

開いたドアの向こうにいた男性は驚いたような顔だったが、それはこつちも同じだった。

いや、驚いたというより拍子抜けといったところだろうか。

公営住宅やアパートの立ち並ぶ住宅街の一角、その中でもそこそこ年数の経ったアパートの二階にある歩の家。

半ば喧嘩も辞さない意気込みでそのドアを開けた俺を出迎えたのは、以前に一度だけ会ったあの神経質そうな女性ではなく、なんとも気の抜けたような男性の声。

その男性が歩の叔父であると理解するためには、三秒ほどの時間が必要だった。

「……いや、びっくりしたよ。てつきり牧原さん 君の伯父さんと一緒に来るものだと思っていたからね。麦茶しかないけどいいかい？」

「いえ。お気遣いなく」

部屋の中に通された俺は、先日と同じように居間の中央にある丸テーブルの脇に腰を下ろし、それからゆっくりと家の中を見回した。そんな俺の仕草を、歩の叔父は目ざとく見つけて、

「妻ならいないよ。仕事でね」

「日曜日も仕事ですか？」

「休日が不定期なんだ」

叔父はそう言って麦茶の入ったコップを俺の目の前に置いた。

アパート裏の広場あたりから子供の声と、注意を促す男性の声が聞こえてくる。

休日の朝、家族サービスをする父親の図、といったところか。

俺は置いたコップから手を引っ込める叔父の動きを何となく目で

追いながら、

「なら、出直したほうがいいですかね。俺、伯父さんから今日のこの時間って聞いてたもんで」

「ああ、いやいや」

と、叔父は手を振った。

「違うんだ。妻はもともとの話に参加するつもりはないらしくてね。だから問題はないよ」

「そうですか」

別に驚きはしなかった。

というよりも、ああ、やっぱりか、という感覚だった。

……と。

そんな俺の態度に何か感じたのか、歩の叔父が少し言いにくそうに口を開く。

「その、なんだ。妻は、自分が入ると話がこじれるからと言ってね。別にどうでもいいと思ってるわけじゃないんだよ」

と、何故か言い訳のようなことを言った。

「……」

俺は改めて正面の男性を観察する。

歳はおそらく三十代前半だろう。見た目から神経質な印象の叔母とは正反対で、大きな目、丸っこい輪郭の童顔で、こちらはなるほど、歩の血族であると納得できる外見をしていた。喋り口調は穏やか、悪く言えばボソボソという感じで少し聞き取りにくい。

この夫婦の関係が何となく透けて見える気がする。

と、そんなことを考えながら俺は言った。

「信じられませんがね。血が繋がってないとはいえ、一緒に暮らしてきた姪がこれからどう生活していくかって話に参加すらしようとしないうから」

「……」

歩の叔父は少し驚いた顔をして視線を泳がせた。

そして、

「……君は結構はつきり物を言う子だねえ」

と、意図のわからない苦笑いのようなものを浮かべた。

「いや、正直ね。歩の友達だというからもっと、こう、違う感じの子を想像してたんだ。……あ、いや、別に君が悪いという意味じゃなくてね」

「はあ」

歩の叔父は慌ててフォローのようなことを口にしたが、言いたいことはなんとなく伝わってきた。要するにもっと優等生みたいな……直斗みたいなタイプを想像してたってことだろう。

そして歩の叔父はふうつと息を吐いた。

「でも、良かった。あの子が、君のような良い友達に巡り会えて」
「……？」

感慨深げに呟いたその言葉は本当に安堵しているように聞こえて、少し意外だった。

……いや。最初からついつい悪いイメージを重ねて見てしまっていたが、もしかするとこの叔父は叔母と違い、歩を嫌っているわけではないのかもしれない。

そんなことを考えた俺に対し、叔父は言葉を続けた。

「あの子を君たちの家に預かってもらうという話……最初に聞いたときはいったい何を言っているのかと思ったよ。牧原さんからの話も突然だったしね」

「まあ、そうですね。伯父さんは　あの人はいつても唐突な人です」

素直に頷きつつ、俺はちょうど一週間前のことを思い出す。

……歩の意思を確認したあの日、電話口に出た伯父さんはすぐに事情を察したらしく“わかった”と言うと、歩の家の電話番号だけを聞いてすぐに電話を切った。

再び伯父さんから電話がかかってきたのは、その約三時間後。しかも“話をする場は作ったからあとは自分で何とかしろ”と、一週間後の午前十時、つまり今のこの日時を指定して、さっさと電話を

切ったのである。

だから俺も今日、ここで誰が待っているのか、向こうが伯父さんからどんな話をされたのか、まったくわからないまま来たのだった。でも、それでよく伯父さんの話を真に受けましたね」と、俺は尋ねた。

歩の叔父の言い方からすると、伯父さんと話をしたのはそのときの電話が初めてだったようだし、今回の“作戦”について事前に話をしてあったとはいえ、まったく面識のない伯父さんがその日のうちにこんな場をセッティングしてしまえるなんていくらなんでも手際が良すぎる、と、そう思ったのだ。

そんな俺の疑問に対し、歩の叔父は小さく笑って答えた。

「君の疑問はもつともだね。……いや、これは偶然なんだけど、ちょうど私の知人が牧原さんのことをよく知っていてね。それで話が比較的スムーズだったんだよ」

「え？」

もちろん初耳だ。が、伯父さんはもともとこの町の出身だし、昔から顔の広い人だったみたいだから、そういうことがあっても不思議ではない。

ひとまず納得すると、歩の叔父は言った。

「さて、それじゃあ本題に入ろうか。……あ、遠慮せずに飲んで」

「じゃあ……いただきます」

それほど喉は渴いていなかったが、せつかなので、と、俺は麦茶を一気に飲み干した。

空のコップをテーブルに置いて、歩の叔父の顔を見る。

本題、といってもどうやらこちらの考えはすでに伝わっているようだ。とすると、あの叔母が参加していない以上、あとはこの目の前の叔父がどういった結論を出すか、それを聞くだけである。

叔父は言った。

「基本的には……君たちの申し出を有難く受けようと思っている。あつさり」と。

本日二度目の拍子抜け。

「いいんですか？」

思わず、俺は逆に質問してしまった。

「うん。……というか、ね。これは私にとって渡りに船の話だったよ。最近はずっと、そのうちあの子に怪我をさせてしまっくんじゃないかと、気が気でなかったんだ」

「……」

俺が無言で小さく眉を動かすと、叔父はその動きを目ざとく見つけて、

「今、私のことを情けないと思ったかい？ そんな心配するぐらいならどうして止めなかったのかって」

「ええ。正直」

俺が即座に頷くと、やっぱり容赦ない子だなあ、と、苦笑いした。「確かに私の性格もあるんだが……妻は昔から精神的に脆いところがあつてね。それがこー、二年……私が失業してしまったこと、仕事の忙しさ、それに色々な不幸が重なってノイローゼになってしまっていたんだ。服用している薬の影響で浮き沈みも激しくてね。……それを理由にしちゃいけないことはわかってるんだが、それでも私は症状が悪化するのを恐れてあまり口出しができなかった」

「……」

そう話す叔父の言葉は相変わらず言い訳じみていたが、少なくとも嘘ではなさそうだった。

「君は信じてくれないと思うが、妻は今でも時折私に懺悔するんだよ。今日は歩に悪いことをしてしまった、明日からは絶対に気をつける、ってね。……残念なことにずっとその繰り返しなんだが」

俺は申し訳なさそうな表情の叔父から少し視線を横に逸らして、「……俺、そういう話は正直よくわかりませんが。でも色々なことの責任を歩に押し付ける理由にはならないと思います」

と、言った。

「ましてや、両親と死に別れて、不安や悲しみでいっぱい、それ

でも明るく笑って生きていこうとしてる、あんなよく出来た子を相手に」

別に責めたてる意図はなく、ただの率直な感想だった。別に彼らに同情したわけではないが、彼らにも彼らなりの事情があるのだとわかって、ここへ来たときほどの嫌悪感はなくなっている。

そんな俺の言葉に、歩の叔父はやはり申し訳なさそうな顔をした。「それは妻もわかっていたよ。見てのとおり私たちには子供がいなし、最初は姉夫婦よりもたくさん愛情を注いでやろう、なんて意気込んでいたぐらいでね。わかってはいたんだが……」

そしてポツリと言った。

「……いい子すぎたのかな。いつまでたっても心を開いてくれない、と、そう感じていたみたいなんだ」

「……」

独り言のようだったので、俺は何も言わなかった。

ただ、確執の原因が本当に単なるすれ違いだったのだとすれば……あるいはいつか、その関係が修復することもあるのかもしれない、と、そう思った。

結局

話し合うというほどのことは何一つなく話はまとまり、つまり「自分で何とかしろ」と言った伯父さんの言葉はほぼハツタリだったようだ。

あとは条件　というほどのことではなかったが、歩の叔父は一ヶ月に一度ほど様子を見に来ることと、養育費（といっても歩は学費が免除されているのでほぼ食費）は自分たちが負担することを約束事として提示してきた。

養育費については一度辞退した。ウチには両親の遺産があつて生活には困っていないし（雪曰く、高校を卒業して働かなくても三十歳ぐらいまで二人で暮らしていけるほどの金額らしい）歩のヤツがそれほど大喰らいだとは思えない。

それに口には出さなかったが、歩の叔父は現在失職中で、そうす

るとその養育費は叔母の稼ぎから払われるものだ。それが将来的な関係修復の妨げになるんじゃないかという懸念があったのだ。

が、

「これは妻の言い出したことなんだ。だから断らないでほしい」

と、そう言われ、考え直した。

あの叔母も、もしかすると断絶まではしたくない　と、そんなことを考えているのだろうか、そう思って。

あとの細かい問題についてはすでに伯父さんとの間で話し合いがあったようで、俺はその辺の話をただ聞かされただけだった。別に戸籍を動かしたりするようなことがあるわけでもなく、ただウチに居候するだけという形なので、当事者同士の了解さえあれば特に大きな問題はなかったようだ。

それらの話を終え、最後に歩の叔父から“よろしくお願いします”と頭を下げられてアパートを出ると、日はまだ昇りきっていないかった。

ほとんど仕事らしい仕事はしなかったが、それでも少しの達成感を感じ、俺は大きく伸びをした。

休日はまだ長い。

まずはウチで待っている連中と伯父さんに結果を報告するとしてよ
うか。

そう思って歩き出す。

と。

「……………ん？」

ふと気付く。

アパートを出たすぐのところ。

大きな通りとの合流地点に一人の男が立っていた。

「……………」

男、というよりは少年、というべきか。歳はおそらく俺と同じぐらいだと思うが、大きな目と、痩せ型ながらやや丸みのある顔立ちのせいで幼く見える外見。男にしては少し長めの、肩ぐらいまであ

る髪を後ろで一つに束ねている。

少年はこちらを見ていた。
いや。

正確に言うとは見ていない。……支離滅裂だが、状況だけを説明すると、少年は電柱に背中を預け、その場で俯いていた。見られていると思ったのは、地面を凝視するその少年の意識が俺に向けられているとそう感じたからだ。

気のせいだろうか。

もちろん面識のない少年だった。

「……」
俺も同じように意識を向けながら、その少年に近付いていく。
が。

「……」
目の前を通り過ぎてても少年は何も反応しなかった。

すれ違い、三歩、四歩

さらにしばらく歩いて振り返ると、いつの間にか少年の姿はなくなっていた。

(……気のせいか)

最近の色々な出来事のせいで、少し過敏になっていたのかもしれない。

俺はすぐにそう結論付けて、再び家への帰路を歩き出す。
すると、

「 優希お兄ちゃん！」

「 ん？」

今度は遠くから俺の名を呼ぶ声が聞こえて視線を上げる。

実の妹である雪は、俺のことをそんな風には呼ばない。

つまり

真正面に視線を向けると、そこには手を振ってこちらに駆け寄ってくる歩の姿があった。

その後ろには雪の姿も見える。

「迎えに来たよー！」

と、ちよつと恥ずかしくなるぐらい大きな声で叫びながら駆けてくる歩に、俺は既視感のようなものを感じて、

「おい、歩。走ると危な

「……………あつ

案の定。

歩は割れたアスファルトの小さな隙間につま先を引っ掛けて派手によるめいた。

「……………うわつ、と、つと……………」

ちゃんと窪みにつまづいたのだから、何もないとこで転びそうになった前回より少しはマシか　なんて、その展開を予測していただけに、俺にはそんなことを考える余裕もあって。

よろよろ、よろよろと。

まさに転倒する寸前の歩に向かって手を差し出す。

「

歩はよろめきながら懸命に顔を上げて俺を見た。

そして

(……………ああ、そうか)

そのときになってようやく、こいつを放っておけなかったその理由に気が付いた。

真っ直ぐにこちらを見つめる大きな瞳。

そこに浮かぶ信頼の色。

……………きつとこいつは、能天気な明るい笑顔を浮かべながらも、ずっとそうやって俺に訴えていたのだろう。

目は口ほどに物を言う、なんて。

そんな古臭いことわざを、こいつは無意識のうちにずっと体現していたわけだ。

「歩

差し出した手が、同じように伸ばした歩の指先に触れた。

歩はさすがのように俺の手を掴む。

俺はそんな歩を、転ばないように力いっぱい引き上げた。

転倒しそうになっていた少女は、俺の手を借りてバランスを取り戻し、ようやく地面に両足をつける。

そして、

「たはは……いつもいつもすみません」

その言葉どおりの、いつもの照れ笑いで俺を見上げた。

俺はそんな歩に、少し悪態をつきながら答えた。

「……ったく。悪いと思うなら少しは学習しろよ。次は助けねーからな」

すると、

「ごめんなさい。でもそれは嘘、ですよー。だって……」

歩はそう言って、それから嬉しそうに目を細めると、両手で包み込むように俺の手を強く握った。

「……だってこんなにも優しく、私のこと想ってくれているんだもん」

「？」

俺はそんな歩の言葉を一瞬怪訝に思ったが、すぐに脳裏に一つの単語が過ぎる。

“精神感応力”。

俺はハツとして、

「あああ！ お前、まさか！ 俺の心を読んだのか！？」

「え、あ」

歩はしまったという顔をしてパツと俺の手を離すと、

「あ、その、今のは読んだというか、読めてしまったというかー」
あたふたと弁解する。

「読んだのは今のが初めてで、えと、私の場合は手の平で強く触れると流れ込んでしまふというか、そ、それに読めるっていうのもなんとなく感情のイメージが見える程度で、何を考えているかわかるというわけではー」

そしてガツクリと頂垂れる。

「ふ、不可抗力です……」

「……」

そんな歩を見てみると、すぐに、まあいいか、という気持ちになった。悪気がないのは明らかだったし、別に何かやましいことを考えていたわけでもない。

ただ、俺はふと気付いて、

「けどお前、初めてつてのは嘘だろ。先週も同じように転びそうになつて俺の手を掴んだじゃないか」

そう言つと、歩は首を横に振つて、

「だ、だって、あのときは嘘の手だったじゃないー」

「……そういやそうか。あれは傑作だったな」

すっかり忘れていた。

「あのとき何も流れ込んでこなかったから、優希お兄ちゃんって見かけによらずクールな人なのかなーって思つちやつた」

「見かけによらずつて、それじゃなんだか俺が頭の悪いヤツみたいに聞こえるな」

「そ、そういう意味じゃないよ、もうー……」

と、歩は仕方なさそうに笑つた。

「……ところでお前」

そこで俺はようやく、最初から疑問に思つていたことを投げかける。

「その“お兄ちゃん”ってのはいつたいなんなんだ？ 昨日まで普通だっただろ？」

「え？ あ、えつと、せつかく家族になれたので皆さんのことをお兄ちゃん、お姉ちゃんと呼ばせていただこうかと思ひましてー。…

…ダメですか？」

「別にダメじゃないが って、え？ 家族つて、なんでお前、もうそのこと知つてんだ？」

今日の話し合いの結果はまだ知らせていないのに と、そんな俺の疑問には、ゆっくりと近付いてきた雪が答えてくれた。

「さつき伯父ちゃんから電話があったの。それで歩ちゃんと一緒に優ちゃんを迎えにきたんだよ」

「あー、そういうことか」

おそらくは歩の叔父からすぐに伯父さんへ連絡がいったのだろう。「それで二人で何の話をしたの？ ずいぶん楽しそうだったけど」そんな雪の問いに俺は答えた。

「こいつの手には絶対触れるなよって話
すると歩が抗議の声を上げる。」

「ひどーい！ それじゃ私がるまで、ばばっちい人みたいじゃない
ー！」

「似たようなもんだろ。……ああ、雪。お前も気をつけるよ。こいつに手握られたら心の中読まれちまうからな」

「あ、そうなの？」

雪はそれほど驚いた様子もなく、

「じゃあ今は私に触れないほうがいいよ、歩ちゃん」

「え？ どうしてですかー？」

歩が不思議そうな顔をして聞くと、雪は真顔で言った。

「唯一の妹の座を歩ちゃんに奪われて、今まさに悪の道に墮ちそう
になってるからね、私」

「ええーッ!？」

「おいおい……」

こいつの冗談は冗談だとわかりにくいから夕チが悪い。

「もちろん冗談、だよ」

そう言っつて雪はニッコリと微笑んだが、歩はまだ半信半疑という表情だった。

「……ま、この辺の機微は、付き合っていくうちにわかるようになるだろう。」

「じゃ、買い物行こ？ 今日歩ちゃんの歓迎会だから、たくさん準備しないとね」

「買い物？ ……ああ、つてことは、俺を迎えに来たっつのはつい

での話か」

そういやこの通りは、デパートに買い物に行くときの通り道だ。

「あ、それじゃ私もお料理手伝いますー」

と、歩。

「ホント？　じゃあみんなで一緒にやるうね。瑞希ちゃんもお昼過ぎには帰ってくるって言ってたから」

「はいー」

並んで歩き出す雪と歩。

後ろから眺めると、仲の良い姉妹にしか見えなかった。

それを見て、再び胸に沸き上がる達成感。

歩はきつと、雪たちともすぐにいい関係を築けるだろうと、そんな確信めいたものを俺は感じていた。

「優希お兄ちゃん。早く来ないと置いてっちゃうよー」

明るく俺を呼ぶ声に、軽く手を上げて応える。

そして、

(……こんなとこ、将太や藍原に見られたら何を言われるかわからんな)

ひとまず歩がウチに居候することは隠しておこう、と、俺はそう決めて二人の後姿を追いかけることにしたのだった。

- - -

そんな三人の後ろ姿を遠くに見送って。

お下げの少年はしばしその場にぼんやりと立ち尽くしていたが、やがて小さなため息とともに頷いて踵を返す。

すると、

「よお、氷騎。そんなとこでなにしとんのや？」

そんな少年に声をかける人物がいた。

顔を上げた少年の視線の先から歩いてきたのは、デニムのパンツにチエックのシャツというカジュアルな服装に身を包んだ、眼鏡で長身の大学生風の青年だった。

「純か。いや、なにも。ただぼんやりとしていただけだ」

氷騎と呼ばれた少年はそう返し、再び背後の通りに視線を向ける。見送った三人の姿はもうその視界から消えていた。

そんな氷騎の仕草をなんとなしに眺めながら、純は言った。

「どや、氷騎？ 俺、これから大学の女の子たちと遊びに行くんですけど、お前も飛び入り参加せえへんか？」

「……興味ない」

「なんや。相変わらず暗いやツやのう」

本当につまらなさそうにそう言った純に対し、氷騎は冷めた口調で、

「純。お前こそ、相変わらずのその胡散臭い関西弁、いい加減やめたらどうだ？」

「ん？ ああ、これか？ どや、なかなか様になってきたやろ？」

なんや、合コンじゃ関西弁のほうかモテるらしくてな。最近はあるちのほう出身ですか、って真面目に聞かれることも多くなってきたぞ」

「……遊び回るのはいいが、ほどほどにしとかないとまた遙に怒られるぞ」

「平気やて。遙は今ブルーの護衛で、それこそあっち方面に行つとるからな。案外戻ってきたら二人とも関西弁になつとるかもしれんぞ？」

「……」

呆れた様子で肩をすくめ、氷騎は純の横を通り過ぎた。

「……相変わらずやのう」

そんな氷騎を見送った純は、彼が見つめていた通りの先をなんと

なしに見つめて、

「普通の生活を楽しめるのはせいぜいあと一年か二年。せめて今だけでも充分に楽しんでおけばええのになあ　　ま、性格ならそれもしゃーないか」

ポツリとそう呟いて歩き出す。

それは不穏な空気など微塵も感じない、秋晴れの一日のことだった。

1年目11月その1

文化祭は風見学園最大のイベントである。

前にも少しだけ説明したとおり十一月初旬の土日を利用したこのイベントは兄弟校である桜花女子学園と合同で行われる。外部の客も自由に出入りすることができる、おそらくはこの学園にもっとも人が集まる二日間だろう。

いつも真面目そうなヤツらしか集まらない図書室では、事前に先生や生徒たちから寄付された古本が売られ、体育館では二年生の各クラスによる素人演劇、職員室は図書室と同じようなチャリティバザールと化す。外には出店も並び、普段地味な文科系の部がこのときとばかりに様々な出し物を行う。

おそらくはこの日、いつもどおりの姿を保っていられるのは山咲先生の常駐している保健室ぐらいのものだろう。さて。

この文化祭、風見学園と桜花女子学園の生徒たちはそれぞれの学年に応じた出し物をする決まりとなっている。先ほども述べたように二年生は体育館で演劇、三年生は受験を間近に控えていることから各教室での自由な出し物。

そして俺たち一年生は、軽食喫茶である。

これがそれぞれの売り上げによる順位付けがされるとあって、各クラスともなかなか熱が入っている。売り上げが自分たちの儲けになるわけでもないのだが、体育祭を見てもわかるとおり、ウチの学校にはそういうことに真剣になる連中が伝統的に集まるようで、“他のクラスには負けない”と意気込み、できるだけ客の集まりそうな喫茶店を計画するわけである。

で、俺たちのクラスはというと

「真正面からぶつかってもトップをとるのは難しい！ ここは“奇

拔な喫茶店”を合言葉にしようではないか!」

ある人間のそんな主張がまかり通ってしまい、あーだこーだと議論した拳句“インド風喫茶店”とかいうわけのわからないものに決定した。

何がインドかというと、メニューとしてナンとかスूपカレーを出すわけではなく、単に窓や壁にゾウの絵とかタージ・マハルの写真とかをペタペタ貼って、ウェイターやウェイトレスがインド人っぽい(あくまで“っぽい”だ)衣装を着ているというだけの、中身はごくごく普通の喫茶店である。

馬鹿馬鹿しいと思うかもしれないが、これでもウチのクラスの連中は大半が本気だった。

一応言っておくと、俺は“本気でない”ほうのグループである。

……ああ、そうそう。

先ほども言ったとおり、この文化祭は桜花女子学園との合同イベントのため、向こうの生徒たちもこちらの各クラスに振り分けられる。当然のごとくウチのクラスにも何人かの女生徒が割り当てられていて、放課後には学校のバスでわざわざこっちに来て準備を手伝ったりしているのだが、知っている顔も特になかったし、名前もあまり覚えてはいなかった。

ちなみに将太のヤツは初日の段階で、全員のプロフィールを例のメモ帳に追加したらしい。

曰く“スーパージ級の女子はいなかった”そうだ。

そんなこんなで。

今日はそんな文化祭の一日目。

「……やれやれ、やっと終わったか」

俺はそれまで身に着けていた妙な衣装を脱ぎ、頭にかぶっていたターバンらしきものを外すと、うーん、と小さく背伸びをした。

隣で着替えていた直斗がそんな俺を見て、

「それほど大変じゃなかったじゃない。お客さんも少なかったし」
「少なかったな」

俺はそう言っただけで近くに脱ぎ捨ててあった制服を手を取った。
九時から十一時半まで。それが俺たちに割り当てられた喫茶店のお勤め時間である。ちなみに明日の午後にも勤務時間が割り当てられていたが、そっちはそっちで終了間際の時間だからやはり大した数の客は来ないのだろう。

「やることないのにボーッと突っ立ってなきやいけないってのは、それはそれで苦痛なもんだろ」

「ま、そうだけどね」

「さて、と」

制服に足と腕を通し、ズボンのポケットを叩いて財布が入っているのを確認して教室の出口へと向かう。

「優希、鞆は？」

「別にいらんだろ」

俺がそう答えると、

「そうだけどね」

と言いながらも、直斗は机の上にあった自分のショルダーバッグを肩にかけた。

二人並んで着替え用の教室を出ると、廊下にはかなりの数の人がいた。

例年どおりだとこれから客が急激に増え始め、午後三時ぐらいまでその状況が続くらしい。だから逆に言う俺たちがウェイターをしていた時間帯は客が少なくて当然で、別にウチのクラスの喫茶店が圧倒的に人気がなかった、と決まったわけではない。

結果が出るのはこれからなのである。

とはいえ

「そういえば四組の喫茶店だけど」

と、直斗が言った。

「すごいことになってるらしいね。……ううん。すごいことになり

そうだね、のほうが正しいのかな」

「ん？」

「ほら、四組つて雪がウエイトレスやるから」

「……ああ」

それは俺にもある程度予想できていた。

他の中学から来た連中はともかく、中等部から上がってきたヤツらの中で雪のことを知らない生徒はまずいない。それは先輩方についても同じことで、それこそ中等部時代の雪は生徒会長よりも知名度の高い生徒だった。

しかもそれはウチの学校に限ったことではなく、ある程度は近隣の学校にも及んでいて、その辺りの事情を考えれば四組の喫茶店が一番繁盛するであろうことは簡単に想像できたのである。

ちなみに将太が“真正面からぶつかっても勝ち目がない”と主張したのはまさにそのことで、他の連中がそれに同意したのも同じ理由なのである。

つまり、これは最初から負け戦だったのだ。

などと。

わかったようなことを考えながらも、どんなもんかと様子を見に、俺と直斗は四組のほうへと向かったのだが、

「……おかしいんじゃない？ こいつら」

その光景を目の当たりにして、俺は思わずそう呟いていた。

正直、俺の想像以上だった。四組の教室前には大行列。軽く一クラス分以上はいるだろうか。大半は男子だったが、女子もそこそこに混じっている。

「だから、すごいことになりそうだって言ったでしょ？」

呆然とする俺の顔を見て、直斗が苦笑しながら言った。

「いや……ここまでとは思わんだろ、フツー」

俺は渋い顔をして返す。

「なんか勘違いしてんじゃないのか。アイドルのサイン会会場じゃねーぞ、ここは」

「当たらずとも遠からずだね。雪はアイドルみたいなものだったから。……で、どうする？ 僕たちも並ぶ？」

「馬鹿。並んでられっか、こんなもん」
即答した。

当然である。何が楽しくて毎日顔を合わせている妹に会うためにこんなにも並ばなきゃならないのか。

四組には歩もいるし、雪にも顔を出してねと言われていたので一応様子を見には来たが、この状態ではさすがに無理ってもんである。「でもま、これは雪だけの力じゃないと思うけどね」

と、直斗は言った。

「ん？」

「牧原さんもここでしょ？」

「……あー、あいつも見てくださいだけはなー」
認めたくはないことだが。

というかむしろ、一割ほど混じっている女子はアイツが目当てだったりするのかもしれない。なんて。

アイツに聞かれたらまた蹴り飛ばされそうなることを密かに考えていると、

「あら？ あなたたち」

「ん？」

立ち去ろうとした後ろから声をかけられて、俺と直斗はほぼ同時に振り返った。

そこにいたのは なんとタイミングの悪い。牧原瑞希その人だった。

「や、牧原さん。久しぶり」

と、直斗が無難な挨拶をする。

瑞希もそれに微笑み返して、

「夏休み以来かしら？ ホント久しぶりね。……なに？ じろじろ見て」

俺の視線に気付いた“学生服姿”の瑞希が露骨に嫌そうな顔をす

る。

学生服である。

セーラー服ではない。

つまりは男子生徒の制服である。

俺はまじまじと彼女を見つめて言った。

「似合いすぎだろ、お前。いつ性転換したんだ？」

ゴンッ！

「……ってえ！」

「言っと思っただわよ……」

拳を握り締めた瑞希が怒りをこらえる表情で言う。

「いてて、冗談ぐらい理解しろよ……」

「明らかに悪意がこもってるでしょうが。……だいたいあんた、私にしかそういうこと言わないじゃない。雪ちゃんや歩ちゃん相手だったら言わないでしょ」

言われてみて、少し考える。

「雪になら言うかもしれないが……下手なこと言うときよくわからんうちに逆に俺が女装する展開になってそうで嫌だ」

「……あり得るわね」

それについては瑞希も同意見だったらしい。

雪ワールド、おそるべし。

直斗が笑って、

「でも本当に似合ってるよ、牧原さん。いつも女性っぽい服装が多いから気付かなかったけど、そういう服も意外と似合うかも。役者さんだったら色々な役ができそうだよね」

「そっ？ ……ありがと」

瑞希は素直に嬉しそうな顔をした。

「……」

言ってることは俺とそんなに変わらないような気がするのだが、なんだろうか、この結果の差は。

どうも納得できん。

「けど、それって四組の衣装なんだろう？ 四組の喫茶店って全員学生服なのか？ もしかして応援団的なアレか？」

「違うわよ。男子が学生服着たって面白くもなんともないでしょ。」

「……要するに逆。女子が男装して、男子が女装するの。別に制服に限らないわ。私はただ、身近にそういう服がなかったからこの格好をしてるだけ」

「あー。そっぴりさつき四組から、スカート履いた地球外生命体が何匹か飛び出してきてたっけ」

「しかしまあ男装はともかく、女装はいいたい誰が喜ぶんだろうか。全員学生服のほうがいいかなんばかマシだと思っただが。」

「……って、ちょっと待て」

「そこで俺は気付いた。」

「……気のせいかな？ お前が着てるその制服、どうも俺の中等部時代のものと似てるんだが……」

「そっぴり。だから言ったでしょ。身近にあったって」

「瑞希があっさり頷く。」

「あ、そっぴりええそうだね。ほら、右の袖のところ、ちょっとだけ焦げた跡が残ってる」

「直斗がワンテンポ遅れてそう言った。」

「俺は頭の中の記憶を辿りつつ、」

「少なくとも俺は貸し出しを許可してない……というか、許可を求められた記憶するないのだが、これは俺の記憶が間違っているのか？」

「だって言っていないもの。いいじゃない、減るものじゃないし」

「……」

「いや、それはそう　というか、中等部時代の制服を取ってあったこと自体、今初めて知っただが。」

「それでも、」

「……ま、いいか。今回だけは許してやるっ」

「あえて恩着せがましく言うのと、瑞希はヒラヒラと手を振って、」

「はいはい。それはどうも」
「適当にあしらわれてしまった。」

「あ、そろそろ当番の時間だね。じゃあね、直斗くん」

「うん。機会があったらお店に行くよ」

「……オススメしないけどね」

行列をチラッと見て苦笑し、瑞希はそのまま四組の教室の中へと入っていった。

直斗はその後姿を見送って、もう一度聞いてくる。

「優希、どうする？ 並ぶ？」

「冗談だろ」

俺は再度その意思がないことを表明し、そのまま反対の方向へと歩みを進めた。

直斗がすぐに隣に並んでくる。

「じゃあ図書室でも行ってみようか。古本とか売ってるみたいだけど」

「古本ねえ。今は別に欲しいものないしなあ」

「外の出店は？」

「腹減ってない」

「だったら体育館で二年生の演劇でも見ようか？」

「興味なし」

「……」

「……」

直斗が困った顔をしたが、俺も困った。

「文化祭って、暇なもんだな……」

最終的に導き出した俺の結論に、直斗は呆れ顔で小さくため息を吐いたのだった。

で。

回りまわって、結局俺たちは自分のクラスへと戻ってきた。

もちろんウエイターではなく客として、である。

時間は午後一時。

なんだかんだで二時間ほどは学校内をブラブラしていたようだ。

……さて。

先ほど説明した我がクラスの喫茶店。誰が書いたかわからない稚拙なゾウの絵が壁や天井いっぱいにはばヤケクソ気味に貼り付けられているだけでも十分怪しいのだが、加えて天井の蛍光灯をピンクのセロファンで覆っていて、それがよりいっそう怪しい雰囲気醸し出している。

この演出を考えたやつは、絶対にインドを別の何かと勘違いしているに違いなかった。

結果。

それなりに混む時間帯であるにもかかわらず、我がクラスは閑散としたままだった。

「やっぱり単に奇抜な発想だけじゃダメってことだよね」

と、直斗。

まさにそのとおりだ。

まあ、最下位になることが決定的となった今、もはや気にする必要もないだろう。むしろ静かでゆっくりできる空間が確保できて万々歳である。

「いらっしゃいませー」

俺たちが席についてから三十秒ぐらい経って、ウエイトレスがやってきた。

「……って、お前か」

「うん」

やってきたのは、ちょっと照れくさそうな笑みを浮かべ、銀色のトレイをお腹の前で抱くように抱えている由香だった。

直斗はそんな由香を見て、

「お疲れ様、由香。……うちのクラス、女子の衣装はうまくできてるよね」

と、言った。

由香が着ているのは“インド人っぽい女性の衣装”といえれば大半の人が同じものを想像できるのではないかと思うが、いわゆるサリと呼ばれる民族衣装……っぽい雰囲気のみがい物である。

しかしまがい物といっても、直斗が言うようにパツと見、本物じゃないかと思えるほどの出来栄で、いかにもやつつけて作った男子の衣装とはクオリティが格段に違っていた。

由香はまるで自分が誉められたかのように嬉しそうな顔をして、「うん。柿原さんがこういうものすごく得意だね。デザインからみんなの指導まで全部やつてくれて……」

「柿原？ そんなやつ、ウチのクラスにいたか？」

「あ、ほら。桜花女子から来てる、眼鏡をかけた小柄な子だよ」

「あー……」

と、考える素振りをしてはみたものの、まったくわからなかった。直斗が苦笑して、

「優希に言っても無駄だよ。とにかく人の名前と顔を覚えられない人なんだから」

「おいおい。それじゃ俺が馬鹿みたいじゃないか」

「僕は言わないけど、それを他人に言われたら否定はできないかな。いくら親友でもね」

「おまえな……」

無然とした顔を見ると、由香が可笑しそうにクスクスと笑う。

軽く睨んでやると、

「あつ、じゃ、じゃあ注文はどうしようか……お客さん……だよね？」

由香は慌てて取り繕った。

「あー、んじゃメロンソーダ」

「僕はホットココアをもらおうかな」

そう言っ、生徒全員に配られる飲食用のチケットをちぎって渡す。

「かしこまりました」

ちよつときこちない口調でそう言って、由香がそそくさと奥に引
つ込んでいく。

それからしばらくして。

「お待たせー」

由香が持つてきたのは直斗が注文したココアと、何故かメロンソ
ーダが二つだった。

「お客さんほとんど来ないから、休憩してていいって」

「昼を過ぎたとはいえ、悲惨な状況だな……」

そう言ってガラリとした教室内を見回す。

我がクラスの最下位は不可避の情勢だ。直斗ではないが、女子の
衣装の出来が非常にいいだけに、基本コンセプトの部分で大すべり
してしまったことが非常に悔やまれる結果である。

「そういえば、今日、雪ちゃん与会った？」

メロンソーダの入ったコップを両手で包み込むようにして持ち、
ストローで少しずつ飲みながら由香がそう尋ねて来た。

「会った」

当たり前だろ、という顔で俺が答えると、

「あ。朝じゃなくて、学校で……ってことだよ？」

「会えたと思うか？」

今度は逆に聞いてやると、由香はそれだけで状況を察して笑った。
「やっぱりそうなんだ？ 私、お昼はずっとここでウエイトレスや
つてたからわからなかったんだけど、クラスのみんなが四組がすご
いよーって話してたから……」

「交通整理が必要なレベルだったな」

「ふーん。やっぱり雪ちゃんすごいなあ。……でも」

と、由香は形の良い眉をちよつとだけ不可解そうにひそめて言っ
た。

「雪ちゃんってあんなに人気あるのに、どうして男の子は誰も告白
しないのかなあ？」

「……」
「……」

由香の言葉に、俺と直斗は黙って顔を見合わせた。

「え？ なに？」

由香が不思議そうな顔でこっちを見る。

直斗が苦笑しながら答えた。

「その疑問は根本的に間違ってるよ、由香。僕も優希も、中等部の頃はよく告白の仲介とかお願いされてたよ」

「え？ そうなの？」

「俺なんか一時期、アイツ宛てラブレターの専門配達員と化していたぞ……」

「そ、そうだったんだ……。知らなかったよ。雪ちゃん、そういう話全然しないから」

「ま、俺の場合、手紙を預かっただけで忘れて渡さなかったのも結構多かったがな」

「それはちよつと可哀想だよ……」

と、由香は困ったような顔をしたが、

「妹に毎日のようにラブレターを届けなきゃならない兄の気持ちも少しは察して欲しいもんだ」

俺はテーブルに片肘をつけて、半分以上減ったメロンソーダの底をストローで軽くかき回しながら言った。

「けどま、人気あったサッカー部の先輩が玉砕してからは少し数が減ったな。俺にとっては有難いことに」

「その先輩って、もしかして」

「本人の名誉のために実名は伏せておく」

といつても、中等部時代に人気のあったサッカー部の先輩といえは、たぶん俺たちの中では一人しか思い浮かばないはずだ。

雪にフラれた傷を癒すため、卒業後は遠くのサッカーが盛んな高校に行つたとか言われていたが、原因はたぶん後から誰かが適当に付け加えたものだろう。

「あの先輩、私の周りにもいっぱいファンがいたよ。……そう考えると、雪ちゃんって不思議だね。男の子と付き合ったりする気ないのかな？」

「本人に聞けよ」

当然のように俺がそう答えると、直斗が突然思い出したように、

「そういえば一時期噂が流れたよね。雪があまりにも断り続けるものだから、もう誰か付き合ってる人がいるんじゃないかって」

「最有力候補はお前だっただろ」

そう言つと、由香はちよつと驚いた顔をする。

「そんな噂あつたんだ……私、全然知らなかった」

その話は男子の間でのみ流れていた噂だったから、由香が知らないのも無理はない。

「僕の場合は一緒にいることが多かったってだけだからね。優希と由香が付き合ってるって噂になるのと一緒だよ」

「あー」

それはよくわかる。

この時期の男女間の友達付き合いってのは色々と面倒なものなのである。付き合ってる噂だけならそれほど大きな被害はないのだが、時折それを前提とした下世話な話題を振られたりするのが困りものだ。

それに、

「……木陰から俺を見つめ続ける美少女を落胆させてしまつかもしれんしな」

「え？」

由香がきよとんした顔をする。

……しまった。願望が強すぎるあまり最後のところだけ口に出してしまった。
と。

俺たちがそんな高校生らしい(?)話題に花を咲かせているところへ、

「あッ！ いたッ！」

非常にやかましい声が教室内に響いた。

「不知火！ 大変大変ッ！」

突然現れたやかましい来訪者に、直斗や由香も一斉に振り返る。

声の主は確認しなくともわかっていた。

「おい、うるせーぞ、藍原。他の客の迷惑になるだろ。……っても、ま、客なんてどこにもいないけどな」

「そんな冷静に自虐ネタを披露してる場合じゃないってば！」

駆け寄ってきた藍原がバンツとテーブルを叩く。

コップの底に残っていた氷がカラカラと音を立てた。

「別に自虐のつもりはないのだが……」

「どうしたの、藍原さん？」

と、直斗が冷静に返す。

藍原はキツと直斗を見つめて、言った。

「不知火の妹！ 雪ちゃんだよ、雪ちゃん！ 雪ちゃんが大変なの！」

「雪がどうかしたのか？」

俺が聞くと、

「どうかしたのか、じゃないってば！ 雪ちゃんがガラの悪そうな男にどつか連れていかれちゃったんだよ！」

「ええッ！？」

由香が目を見開いて驚く。

「ガラの悪そうな男に……？」

俺は少し真顔になった。

「おい、藍原、詳しく聞かせろ」

「うん。あのね」

藍原の話は簡単に要約するところだった。

昼の混雑時間を過ぎ、雪がウエイトレスの仕事を終えた頃、藍原はトイレに行くために偶然四組の教室の前を通っただけらしい。

その時間になると行列もかなり小さくなって少し落ち着き始めて

いたらしいのだが、その教室の前にちよつとだけガラの悪そうな男が立っていたというのだ。

そのときは藍原もそれほど気にしていたわけじゃないらしいのだが、藍原がトイレから戻ってきてまた四組の前を通ったとき、雪がその男に連れて行かれるのを目撃したというのである。

「で、雪とそいつはどこにいったのかわかるか？」

藍原に案内されて廊下を移動しながら、先頭を歩く藍原にそう尋ねる。

「体育館裏のほうに向かっていったよ。間違いない」

「体育館裏ね……」

念のため、と、付いてきていた直斗を振り返る。

視線が合うと、直斗は無言のままちよつとだけ首をかしげてみせた。

……直斗もきつと俺と同じことを考えているのだろう。

俺にはこの先のオチがある程度予測できていた。

そして

「……うん。ごめんね」

ようやく駆けつけた体育館裏では予想通りの光景が展開されている。

「そつ……」

そこには雪と、藍原曰く“ガラの悪い男”がいた。

男は落胆の表情。

雪はいつもと変わらない穏やかな表情。

どう見てもガラの悪い男に拉致された状況ではない。明らかに、中等部時代に何度も見させられたのと同じ告白、もとい玉砕シーンである。

……念のため言うておくが、俺がその光景を何度も見たのは、友人たちの玉砕覚悟の突撃に何度も付き合わされたせいで、決して自らが覗きに行っていたわけではない。ちなみに俺の知る限り、玉砕率は百パーセント。一度では諦めないやつもいて、中等部の三年間

で五回フラれたヤツもいた。

まあ、それに関しては雪の断り方も悪い。

アイツはこうして告白されると、最初にとても嬉しそうに微笑む。そうしてからすぐに“ごめんね”と来るのだ。

これでは諦め切れないヤツらが出てくるのも仕方がないというものである。

「……………ていうか」

物陰からその光景を眺めていた俺は、

「お前がアレのどこを見て“ガラが悪い”と判断したのか俺にはさっぱりわからん」

そう言った。

その男、背は高くて体格はいいが、どう見てもそれほど悪そうには見えない。ガラが悪いというよりは生粋のスポーツマンという感じだ。

俺と同じように顔を出してその光景を見つめていた藍原は、人差し指を口元にあてて、うーん、と唸ると、

「言われてみるとそうでもないかも。先入観って怖いね」

「……………絶対ワザとだろ、お前」

すると藍原はあっけらかんと笑って、

「まあまあ。おかげで面白そうな場面に出会えたんだし。他人の告白シーンなんて、ドラマ以外じゃ滅多にお目にかかれないよ」

まったく反省の色がなかった。

というか、その滅多にお目にかかれない場面を、俺は目が腐るほど目の当たりにしてきたのだが……………本当、こいつに付き合つとロクなことがない。

「馬鹿馬鹿しい。行こうぜ、直斗」

「そうだね」

やはりこの結果を予想していた直斗はすぐに俺の言葉に同意して腰を上げた。

「あ、ちよ、ちよっと、不知火…。なんで？ 気になるでしょう

よ」

「これっぽっちも興味ない」

というか、どう見てももう結果が出ているし、出てないとしても覗きなんて誉められた趣味じゃない。

「藍原さん。ほどほどにね」

結局、藍原が何やら色々言っているのをすべて無視し、俺と直斗は校舎へ戻ったのだった。

そして約三十分後。

「……ねえねえ、どうなったか気にならないの？」

図書館へ向かった直斗と別行動をすることになり、また校舎を適当にブラブラしていたのがまずかった。

運の悪いことに、体育館裏から戻ってきた藍原と玄関でばったりと鉢合わせてしまったのである。

藍原はしきりに“先ほどの結果”を報告したが、俺は冷たくあしらって、

「だから興味ないって言ってるだろうが」

「薄情者」。妹にちゃんとした恋人いるかどうか把握しておくのは兄としての義務でしょうよ」

「なんだそのトンデモ常識。初めて聞いたぞ」

「も、わかっただけじゃないあ」

藍原はピツと人差し指を立てて、

「もしも雪ちゃんが悪い男に引つかかっていたら大変でしょ。そこは兄としてなんとかしてあげるのが常識でしょうよ」

「だからそんな常識はねえっの。だいたい悪い男かどうかなんて誰が判断すんだよ」

どうせ“余計なお世話”になってしまうのがオチである。

「じゃあ兄じゃなくて父代わりとしてさ。二人きりの家族なんですよ。だったら不知火は雪ちゃんの親代わりみたいなものじゃない」

「まあ、それはそうかもしれんが」

「周りが見てどっちが親代わりだと思っかは知らないが、少なくとも俺自身は雪の保護者のつもりでいる。双子とはいえ俺が一応兄なのだし。」

「じゃあ話ぐらい聞いておくべきだと思うな、あたしは」
「……」

「あまりにもしつこいので、俺はついに根負けしてしまった。」

「わかったよ。で、なんだ？ あれから超展開でも起きたか？ 雪に四十代の恋人がいることが発覚したか？」

「ううん。あの人は普通にフラれたし、恋人もいないって言ったよ」

「あっそ。じゃあ俺の出る幕はないな」

「そう言っただけでスタスタと歩き始める。」

「あ、ちよつ、ちよつと待ってよ、まだ続きが」

「もういいだろ。俺は保護者として雪のことを充分に理解した」

「この先が大事なんだってば」

「藍原はそういって俺の服の裾を引っ張る。」

「不知火ってば、人の話はちゃんと最後まで聞くべきだって教わらなかったの？」

「ためになる話なら、な」

「あたしの話にはそれだけの価値があるよ」

「豚の鳴き声をエンドレスで聞いていたほうがマシだ」

「うわ、ひどっ」

「と、藍原は口を尖らせたが、服を離すつもりはないようだ。」

「……何故こいつはこんなどうでもいいことに無駄な情熱を燃やしているのだろうか。根性を発揮するならもっと有効な場面がいくらでもあるだろうに。」

「冗談じゃなくてさ。不知火には聞く義務があるのよ、この話は」
「……」

ため息。

再び根負けして、俺は無言のまま藍原に先を促した。

「やっと聞く気になったか」

「いいからさっさと言ってみろ」

ほとんど投げやりだったが、それでも藍原は満足そうに頷いた。

「あのねえ。雪ちゃんが言うには、恋人はいないんだけど、好きな人はいるんだって」

「ああ」

別に驚くことじゃない。

「で、なんだ？ その好きなヤツってのが俺と関係あるヤツなのか？」

「厳密に言うとは違うけど、だいたいそんなところかな」

「それで？」

さらに先を促すと、藍原は急に上目遣いになって、

「聞いても、後悔しない？」

「……お前なあ」

今までずっと話したがっていたくせに、今度は急にもったいぶり始める。

「これはウザい。」

ここでまた突き放してやってもいいのだが、それだとまたさっきまでのやり取りの繰り返しになってしまうのが目に見えている。

「後悔しねーから。さっさと話せ」

何となくコイツの術中にはまってしまった気がしないでもないが、さっさと言わせてしまったほうがすっきりするだろう。

藍原はちよつとだけ声を低くして、

「ホント？ 絶対に後悔しないんだよね？」

「ああ、しないしない」

適当に答えると、藍原はピツと人差し指を立てた。

「？」

その人差し指が俺の鼻の頭を指す。

「…………お兄さん」

「は？」

「自分のお兄さんだつて。好きな人」

「…………」

数秒、沈黙。

「…………お前なあ」

俺は大きなため息を吐いた。

「何を言い出すのかと思えば…………お前、よりもよつて…………」

だが、藍原は俺の鼻先に突きつけていた指を下ろし、

「これ、冗談じゃないよ。本当にそう言つてたの、あたし聞いたんだから」

「…………」

俺が黙り込んだのを見て、藍原の目には少しだけ好奇心の光が過ぎった。

「ねえねえ、どうするの？」

「…………どうするも何も」

藍原は俺が何かショッキングな反応をすることを期待しているよ
うだが、残念ながらそうはいかない。

何度も言うが、俺はその光景を何度も見ているのだ。そして当然、
断られた連中の中にはその理由を求めるヤツらもいた。

そういうときに雪は決まつてある言葉を口にする。

藍原にとつては残念なことだろうが、俺はその言葉も何回も耳に
しているのだ。

「お前つてホント、事実を歪曲させて伝えるのが得意なやつだよな」

俺がそう言うと、藍原は心外そうな顔をして、

「なんで〜？ あたし、嘘なんてついてないよ」

まあ、聞きようによつてはそう聞こえなくもないし、厳密にいえ
ば嘘ではないのかもしれない。

ただ、意図的に曲解していることは確かだ。

俺は軽く肩をすくめて、

「バレバレだつっの。雪のヤツが言ったのってどうせ、兄貴より大切に思える人じゃないと付き合えない、とか、そんなんだろ？」

「え……」

と、藍原が驚いた顔をする。

「そんなんつてか、そのまんまだよ。なんで知ってんの？」

「だから何回も聞いてんだって」

俺にとっては不思議なことでも何でもない。

別に告白シーンだけに限らないのだ。アイツ相手に“彼氏作らないのか”なんて話をする、いつもここう答えるのである。

『優ちゃんより大事な人ができたらね』
と。

恋人より兄貴のほうが大事なんてそんなことは普通ないだろうから、アイツは当たり前のことを言っているだけだ。断るときに俺のことを引き合いに出すのは、俺たちが仲の良い兄妹であることがそれなりに知られていて、断るのにわかりやすい理由だからだろう。

まあ、“兄に手がかかるから恋人が作れない”と意識できてしま
うので、俺としてはあまり有難くない話なのだが

「……ちえっ。もっと面白い反応があるかと思ってたのになあ」

と、藍原は本気でつまらなそうな顔をした。

「どんな反応を期待してたんだよ、お前」

一応聞いてみると、藍原はあつけらんとして言った。

「これをきっかけに二人が禁断の愛に走ったら面白いな〜って
「変なマンガの読みすぎだろ。だいたい
と。」

「あれ、優ちゃん？」

「！」

振り返る。

「美弥ちゃんも、どうしたの？ 玄関なんかで」

雪が玄関の入り口に立っていた。

どつやら告白された帰りのようだ。

「あ……あー、これは雪ちゃん。どもども。こんちゃ〜」
「？」

藍原は焦ってちょっと挙動不審になっていたが、雪は別に盗み聞きしていたわけでもないようで、不思議そうに首を傾げるだけだった。

俺は仕返しの意味も込めて藍原に言っっちゃった。

「おい、藍原。今の話、コイツに直接聞いてみたらいいじゃないか？ 何がどうなったら面白いんだっけ？」

藍原は慌てて、

「わーわー！ 冗談！ 冗談だつてばさ！ おっと、そんじゃあたし、お店の当番があるからこれにて、御免ッ！」

そう言っていると、巻物をくわえた忍者のようなポーズをして、さすがは元スプリンターと感心してしまうものすごいスピードで走り去っていった。

ウザいことに変わりはないが、優位に立って眺めている分には愉快なヤツである。

上履きに履き替えた雪がますます不思議そうな顔をして、

「美弥ちゃん、どうしたの？」

「さあな。……って、お前その格好」

「うん？」

先ほどは気付かなかったが、雪も瑞希と同じ学生服姿だった。

「あ、これ？ 似合ってる？」

そう言っつて、クルリと一回転する雪。

俺は答えた。

「全然」

男っぽさとは無縁の外見だから違和感しかない。しかもよくみるとズボンの裾と上着の袖の長さがあってなくてダボダボだ。

と、そこで俺は気付く。

「っていうか、お前のその学生服」

雪はニッコリと微笑んで、

「これ、優ちゃんが一年生のときに着た制服だよ。背が伸びてすぐ着れなくなっちゃったんだよね。……あ、二年と三年のときに着てたのは瑞希ちゃんが着てるよ」

「だからお前らはどうしてそう勝手に」

俺は再抗議しようとしたが、

「ほら」

と、雪は両手で自分の体を抱きしめるようにして言った。

「ごうすると何だか優ちゃんに抱きしめてもらってるみたいだよ。ね？」

「……やめんかッ！」

コイツ、本当は俺と藍原の話を聞いていたんじゃないだろうか。

「冗談、だよ」

クスクスと笑い、雪はぴょこんと俺のそばまでやってきて手を取る。

「おい……」

「ね」

雪は下から俺の顔を覗き込むようにして言った。

「優ちゃん、この後は暇だよな？　せつかくだし一緒に見て回る？」

「……まー、別に構わんが」

断る理由はなかった。

が、

「まさかその格好のままか？」

「うん。たまには直ちゃんみたいなのポジションもいいかなって。ね？　ごうすると仲の良い男友達みたいに見えるでしょ？」

そう言ってニコニコしながら俺の隣にピッタリと並ぶ学生服姿の雪。

「……いや、見えないだろ」

というか、この光景は本当に大丈夫なんだろうか。

なんだか二重三重の誤解を生みそうな気がしてならないのだが

結局、その日は夕方まで雪に付き合って学校中を見て回ることに
なり。

次の日の朝、俺の下駄箱にはラブレターが入っていた。

差出人は男だった。

……中身を見ずにその場で燃やしてやったことは言っただけでもない
。

1年目11月その2

たとえば高校生ぐらいの男女が一緒にプールに行って夕方近くまで遊び、帰りに喫茶店に寄って雑談を交わした上、辺りが暗くなつてから男が女を家まで送ってそこで別れる、という光景の一部始終を目撃したとしよう。

その二人が“いや別に付き合つてねーけど？”と言って、はたしてどれだけの人間がその言葉を信じてくれるだろうか。

十人に一人、それとも二十人に一人か。

それについては至極当たり前の反応だと思う。客観的に見れば俺だつてきつとそう思う。その男女がどういふ関係なのか深く知らなければなおさらのことだ。

……しかし、である。

だからといって、どうして俺がこんな苦労しなければならないのか。

その辺りがどうにも納得できないのだ。

文化祭が終われば二学期の残るイベントは期末テストのみ。その難関を越えるとあとは冬休みにクリスマス、正月と楽しいイベントが目白押し。

周りが少しずつ浮き足立ち始める十一月中旬の、とある月曜日のことである。

俺はその日の朝、いつものように直斗と由香、そして先月から一緒に登校するようになった歩の計四人で学校へ向かっていた。

「今朝は寒いねー、歩ちゃん」

「ホント、寒いですねー、由香さん」

意味のないことを言い合つて、意味もなく笑い合っている後ろの二人。

仲が良いのは結構なことだ。

俺はそんな二人を横目に見ながら大きくアクビをした。

「ふわぁ……あ。やっぱり月曜日の朝はだりーな」

白い息が上つていく。

十一月も中旬を過ぎればもう立派な冬の空気だった。

「優希の場合は“月曜日は”じゃなくて“土日以外は”の間違いでしょ」

直斗の的を射た嫌味に、俺は反論するほどの気力もなく、

「まー、そーだが」

右手を口に当ててもう一度アクビをすると、意味もなく通りのあちこちを見回した。

電柱の根元には昨日の夜に降った雨が少しだけ残っている。あと一ヶ月もすれば、あの表面に氷が張るような寒さになるのだろう。

ふと、由香が言った。

「そういえば優希くん、昨日はちゃんと濡れずに帰れた？」

「あー、ちよつと濡れたかな」

俺がそう答えると由香は少し心配そうな顔をした。

「大丈夫だった？」

「まあな。たいしたことねーよ」

「？ 昨日、なにかあったの？」

と、直斗。

「うん。実は昨日優希くんに送ってもらったとき」

ここで唐突だが。

この水月由香という人間が、俺たちの学校の中でどういう立場にいるのかを少しだけ語っておくことにしよう。

俺たちと一緒にいるときのコイツは、見てのとおり気が弱そうで“ごめんなさい”がやや口癖になっていたりする、典型的な“大人しくてちよつと目立たない子”的なキャラクタだ。

が、実をいうと、学校の中では別にそういうわけでもなかったりする。対人関係についてはそこそこ積極的に話しかけて、それこそ自分から友達を作ろうとするタイプだし、それなりに話好きでもあ

る。その上、今時の高校生にしては珍しく真面目で世話好き、クラスの仕事も面倒がらない、人の好き嫌いが無い（あるいは表に出さない）から、どんな相手でも比較的きちんと話ができる。

だからコイツに対するクラス内の評価は“控えめだが真面目な明るい子”といったもので、ある意味ではクラス委員長的なキャラクタだったりするのである（もちろん実際に委員長なわけではない）。そんな性格だから女子の友達はクラス内外を問わずに多いし、男子の友達は俺たちを除いてほとんどいないものの、ちょっと言葉を交わす程度の知り合いはそこそこにいる。

つまり人気があるのだ。

中等部時代の雪のようなアイドル的な人気ではないが、いわゆる好感度が高い、という意味での人気者なのである。

さて、一方。

前にも何度か説明したとおり、俺の学校での評価は基本的に芳しくない。

直斗経由で耳にした限りの話だが、仲の良い一部の男子からの評価は“変なヤツ”。あまり交流のない男子は“協調性のないヤツ”。女子の評価は“無愛想でちょっと怖い”。どれもこれも、斜め読みしたところで賞賛の言葉に化けたりはしない、そんな酷評ばかりなのである。

“変だけど面白いヤツ”なんて言われたこともあるが、これは発言者が藍原のヤツなのでまったく喜べない。

と、いうわけで。

そんな“真面目な明るいクラスの人気者”と“協調性がなくて無愛想な厄介者”の仲が良いことを、クラスの大多数の生徒が訝しげに思っている、というのはむしろ当たり前のことなのだ。正直俺だって、コイツと初めて会うのが高校に入ってからだだったとしたら、きっと三年間をほとんど関わりなく過ごしていたんだろうなと思う。だから、俺たちがこうして仲良くしていられるのは、いわゆるめぐり合わせの妙、というやつなのだ。

まあ、そんなわけで。

クラスメイトの大部分が想像している俺たちの関係ってのは、間に直斗を挟んだ“友達の友達”というのが大半を占めているらしかつた。

……で、結局。

俺が何を言いたいのかというところ

ピタッ、と。

一瞬だけ、ざわめきが止まった。

風見学園の二階に並ぶ一年生の教室。階段を上りきったところで歩だけが別れ、俺と直斗と由香の三人が自分たちの教室のドアを開けた、その瞬間の教室内のリアクションである。

「？」

俺はもちろんのこと、直斗と由香の二人もその異様な雰囲気気付いたようだったが、それはほんの一瞬のこと。次の瞬間、俺たちに向けられてた視線は次々に外れ、教室内はまた喧騒を取り戻したが

(……なんだ？)

席に向かう途中、由香が周りの女子から次々に話しかけられているのが視界の端に映った。会話の中身はわからないが単なる朝の挨拶という雰囲気ではない。

怪訝に思いながらも自分の席につくと椅子を引いて足を伸ばし、それからもう一度由香の席のほうへと視線を移す。

彼女の周りには四、五人の女友達が立って、やはり何事か質問している。由香本人はなにやら困惑した表情で軽く手を振りながらそれに応じている。

しかも

(……なんだ、この空気)

友人たちの視線はたまにこっちを見たり、直斗のいる辺りにも向けられたりしているようだ。

何が起きているのかさっぱり理解できなかった俺は、とりあえず
“歩く情報掲示板”の将太に聞いてみようかと思ったのだが

(……サボりか)

将太の席は空席になっていた。鞆もない。

いつも“情報を集める”とかいうわけのわからない名目で早く来
ているアイツがこの時間にいないということは、風邪かサボりか、
とにかく今日はもう来ないと思って間違いないだろう。

(ちえっ、珍しく必要なときに限っていねーんだよな)

もう一人の情報源である藍原の姿も見えない。……まあ、こっち
はいつもどおり時間ギリギリにやってくるのだろう。

そうこうしているうちに、だんだんと面倒くさくなってくる。

(……ま、いつか。俺に関係あるんならそのうち誰かなんか言っ
てくるだろう)

結局俺はその疑問を解明することなく。そのまま机に突っ伏して
授業が始まるまで仮眠を取ることにしたのだった。

と。

(おやすみなさい……)

授業が始まるまでのほんの僅かな安らぎの時間をエンジョイしよ
うとした、そのときである。

「おい、不知火」

「ん……？」

聞き覚えのあるその声に俺が顔を上げると、いつの間にか机の横
に一人の男子生徒が立っていた。

俺はそいつの顔を見るなり、

「……なんだ。佐久間か」

かなり厚めの眼鏡をかけていかにも真面目で秀才チックな外
見をしており、そのとおり学業優秀で生活態度も良く、先生たちか
らは典型的な優等生のレッテルを貼られているのだが、その実、裏
ではタバコを吸うし酒も飲む、いわゆる知能犯的な不良。

こいつは佐久間といって、俺の数少ない友人の一人だ。

で。

そんな佐久間が珍しく、きゃあきゃあとやかましい女子のほうを気にしたような顔で言った。

「お前、そんな呑気にしてて大丈夫か？」

「あん？ …… ああ、なんか騒いでるやつか？ やっぱ俺が関わってんのか」

俺が無関心にそう答えると、佐久間は小さく肩をすくめてみせて、「関わってんのか、じゃないだろ。斉藤のやつがひどく怒ってたぜ」「斉藤？ なんで斉藤のやつが？」

斉藤もやはりクラスの友人の一人だ。サッカー部に所属していて、そっちはこの目の前にいる小悪党と違って本物の優等生だが、俺や佐久間と仲良くしていることからわかるように、人当たりの良い社会的な人間だ。

顔も良くて人望もある。

クラス内の立ち位置からすると、由香の男版みたいなもの、と言えるかもしれない。

「なんで俺が斉藤のヤツに怒られなきゃならん？」

由香といえば そうそう、忘れちゃならない。

斉藤のヤツは中等部の頃から由香にベタ惚れだったりする。

サッカーをやってるバリバリの体育会系にしては色恋沙汰には奥手らしく、中等部時代からまったく進展はない というか、斉藤のヤツは実質、俺を挟まずに由香と会話をしたことすらない。別に女が苦手というわけではないようなのだが、どういうわけか由香と話そうとすると緊張して言葉が出てこなくなってしまうらしいのだ。俺も過去、そのことで何度か相談されていて、成り行きで協力を約束させられた、なんて経緯もあった。

「斉藤がお前に怒るといったら一つしかないだろ」

と、佐久間が言う。

「一つしかない、ねえ」

俺はチラッと由香のほうを見た。

由香は未だ三人の女友達からなにやら質問攻めにあっていて、相変わらず何かを否定するかのように手を横にブンブンと振っていた。そして時折、こっちへチラチラと向けられる視線。

「……ははあ」

俺は理解した。

「わかったの？」

と、佐久間。

俺は頷いて、

「つまりアレか。突然クラス中の女子が俺の魅力に気付いて虜になつてしまったわけだな。それで斉藤のヤツはそれを妬んでいると」

「ん、まあ似たようなものか」

「……」

普通に流されてしまった。

「お前に都合の良い部分だけは間違ってるけど」

冷静に訂正する佐久間。

俺は憮然として、

「……要するに由香のことか。ってことは昨日の話だな」

「わかつてるじゃないか」

と、佐久間は少しだけ笑った。

実を言うと今朝話していた雨が云々という話は、俺が昨日、由香と二人でプールに遊びに行ってきた、その帰りの話なのである。

誤解のないように言っておくが、これは別にデートとかそういう類のものじゃない。もともとは、夏休みに一緒に海に行けなかったのを残念がっていた由香のために、俺と直斗、それに雪の三人で計画したものだったのだが、夏休み明けからなんだかんだと全員の予定が合わずに延び延びになっていて、最終的に昨日に決まったところ、直斗は直前になって家の用事、雪は風邪をひいてしまった瑞希の看病をするために家に残ることになり、結果的に俺は由香のヤツと二人きりでプールに行くことになってしまったわけである。

そのシチュエーション自体に何か嫌な予感を感じなかったといえ
ば嘘だ。が、プールのシーズンはとくに過ぎていたし、隣町だか
ら誰にも見られることはないだろう、と、互いにそう高を括って
いたのである。

「温水プールで遊んで、喫茶店で軽く晩飯食って、仲良く帰ってき
たんだった？」

「なんでそこまで筒抜けになってんだよ……」

俺はげんなりした。

プールに着いたのは昼近くで、最終的に家に帰ったのは午後
の七時である。そこまでの行動が筒抜けになっているとすると、俺か由
香のどちらかにストーカーでも付いているんじゃないかと疑いたく
なってしまう。

「ま、どういふ経緯かは知らないけど、とにかく斉藤の誤解ぐら
いは解いておいたほうがいいんじゃないのか？」

「迷いもなく“誤解”という辺りは、周りの噂なんかには流されな
い性格のコイツらしい。」

「ま、ほんとに誤解なのかどうかは知らないけどな」

「ニヤニヤしながら意地の悪いことを言うのも、らしい。」

基本的には人の困っている顔を見て喜ぶ、嫌なヤツなのだ、コ
イツは。

「やれやれ、しゃーない」

俺は一つため息をつく。

「どこかの木の陰で俺を見つめている健気な女の子を悲しませな
いために、誤解を解いておくとするかな」

「ま、がんばれよ」

特に突っ込みもせず佐久間が俺の肩を叩く。

そしてホームルーム開始のチャイムが鳴った。

(……と、言っではみたものの)
昼休み。

早めに弁当を食べ終わって俺は廊下をブラブラしながら考えていた。

……誤解を解く。今朝は簡単に言ったがよくよく考えるとこれが結構難しい。噂話をしている連中はそのほとんどが親しい人間じゃないし、そんな連中を捕まえていきなり“それは誤解です”なんて主張したらドン引きされること間違いなしだ。

できればスマートに全員の誤解を解いてしまいたいものである。
と、

(……ん?)

ふと、廊下の向こうからやってきた、仲の良さそうな三人組の女生徒を見て、俺はピンと閃いた。

(あ、そつか。簡単じゃないか)
と、すぐさま教室へとUターンする。

向かった先は、直斗のところだ。

「おーい、直斗」

「ん? どうしたの?」

男性ファッション雑誌を読んでいた直斗が顔を上げた。ちなみに校則の緩いウチの学校は、よほどいかがわしいものでない限りこういう雑誌の持込は禁止されていなかったりする。

「ちよい頼みがあるんだ」

ちようど直斗の前の席が無人だったので、俺はそこに横向きに座ってそう切り出した。

「頼み? なに?」

直斗は雑誌を閉じて鞆にしまう。

「ああ。お前、今日の放課後は暇か?」

「うん、なにもないけど。遊びの誘い?」

「じゃあ決定」

俺はポンと軽く手を叩いて言った。

「お前、今日はデートな」

「デート？」

直斗は困惑した顔をする。

「優希と？」

「んなわけあるかい」

「冗談なのはわかってているが、真顔で言うので俺も思わず真顔で突っ込んでしまった。」

「俺じゃなくて由香のヤツとだよ。買い物でも映画でもなんでもいいや。とにかく適当にデートしてきてくれ」

「……ああ」

直斗はすぐに納得顔をすると、

「もしかして例の噂対策かい？ 僕と由香を一緒に歩かせておいて誰かに目撃させれば、噂が立ち消えるんじゃないかってこと？」

「話が早いな」

「こういうときのコイツの察しのよさは非常に助かる。」

「由香のヤツには俺から指令を与えておくから。そういうわけで協力してくれ」

と、俺は言った。

が、

「嫌だよ」

「……え？」

俺は予想だにしなかった直斗の返答に、一瞬固まってしまった。

……断られることは考えていなかった。断る理由はないだろうと思っていたから。

「優希、ちよつと勘違いしてるよね」

直斗はそんな俺の考えを見破ったかのような顔をして、

「いくら幼なじみだっていったって、僕も無神経に由香と付き合ってるわけじゃないよ。この歳になれば色々あるからね。休日二人きりで出かけることなんてまずないし、あったとしても買い物で偶然一緒になったとか、その程度だし」

すらすらと言いつつ放った。

……言われてみれば、と思う。確かにここ最近、コイツと由香が二人で遊びに出かけたって話は聞いたことがない。半年ぐらい前にデパートと一緒に買い物しているところを見たが、あれは確か直斗の従妹の誕生日プレゼントを買うのに付き合ってたとか、そういう話だった。

(いや、けど俺だって)

俺だって同じだ。こうなるのが目に見えていたから、学校の帰りだってなるべくアイツと二人きりで帰らないようにしていたし、まあ弁当を作ってもらってるってのもあるが、あれはなるべく学校で受け渡ししないように注意しているし

「けど、今回ののは仕方ないだろ。そもそもお前と雪が直前で急に行けなくなっちゃまったのが原因じゃねーか」

「まあね。それが悪いって言ってるんじゃないよ。僕はただ直斗は小さく笑った。」

「昨日優希と遊びに行ったのは由香の意思でしょ。でも今日僕とってというのは違う。だから嫌だったこと」

「なんだそりゃ。俺なら良くしてお前ならダメってことはないだろ」「かもね。……でも逆効果ってことも考えなきゃ。昨日は優希とデートしてたのに、今日は僕と同じようなことしてる、なんて。僕らのことを知ってる人なら誤解せずに優希の思惑どおりになるかもしれないけど、もし良く知らない人なら……逆におかしな話になるかもしれないよね」

「……むう」

言っていることもわからないではないが、とにかく直斗は俺の提案に乗るつもりはない、ということのようだ。

「だからね」

難しい顔をしている俺に、直斗は言った。

「今回のことは放っておくのが一番。だって昨日のことは嘘でもなんでもないんだし、そのことで誰がどんな想像をしても別に関係な

いでしょ」

「木陰の女の子が悲しむじゃないか」

「木陰の女の子？」

「いや、まあそれはどうでもいいが。……たとえば」

俺は直斗に向かって人差し指を立ててみせる。

「あるところに一人、由香に惚れている男がいるとする」

「いるの？」

「いるとして、だ」

コホン、と、咳払いをする。

斉藤のことは直斗も知っているが、由香に惚れていることは知らない。知っているのは直接相談を受けた俺と、それを密かに立ち聞きしていたらしい佐久間の二人だけなのだ。

俺は言葉を続けた。

「もしもその男が今回のことで俺と由香の関係を誤解してしまったとすれば、やはりそこには色々な問題が生じるだろう？」

俺がそう言うと、直斗は少し考えて、

「つまり優希の友達の中にそういう人がいるんだね？」

「……お前な」

いちいち核心を突いてくる。

「あ、ごめんごめん」

直斗は苦笑して、

「でも、確かにそういう事情があると少し面倒だね」

「だろ？ 由香のヤツだってそうさ。たとえば自分の好きなヤツにそんな誤解受けたままだったら困ると思うぜ」

「由香の好きな人？ それはないと思うけど」

と、直斗はあっさりと言い放った。

「なんでだよ。だって」

言いかけて、止まる。

(……あ。コイツは知らないのか)

好きな男がいるという話を、俺は由香から直接聞いている。が、

直斗はそのことを知らないのかもしれない。
となると。

いくら直斗が相手とはいえ、そんなことを本人に無断で話すのはマズイだろう。それに由香の好きな相手が直斗って可能性もある。

万が一“事故”つたときのことを考えると

結局、俺は少し濁して反論することにした。

「わかんないだろ、そんなこと。アイツだってもう高校生だぜ。好きな男の一人や二人、いたっておかしくないじゃんか」

そう言うと、

「そういう意味じゃないんだけどね。……ま、とりあえずあとで由香にも相談してみようか。優希のほうにそういう事情があるのなら放っておくわけにもいかないしね」

「……アイツに相談するのか？」

俺がちよつと気が進まない顔を見ると、直斗は軽く手を振って、

「もちろん詳しい“事情”の話はしないよ」

「……ならいいが」

けど確かに。事情も話さずに“直斗とデートしろ”よりは、そのほうがスムーズにいくかもしれない。

そう考え、俺は直斗の提案に乗ることにしたのだった。

1年目11月その3

尾行をするときの心得。

それは近付きすぎず、離れすぎず。近付きすぎれば見つかってしまう危険性が高くなるし、離れすぎれば見失ってしまう。人通りの多いところでは近めに、少ないところでは遠めに位置するのが理想なのだろうが、これがなかなか難しい。

木曜夕方の駅前通りは比較的空いていた。

俺は今、その近くにある路地から通りの様子を窺っている。髪は後ろで束ね、丸っこいサングラスをかけて軽く変装済み。が、それは気休めにしかならない。敵はこちらの顔を知っているし、そんな変装を軽々見破ってしまうほどの強敵だ。気は抜けない。

ターゲットの男女はなにやら楽しそうに会話をしながら駅前通りを歩き、やがて近くの喫茶店に入ってしまった。

(予想通りだな)

俺はそれを確認すると、彼らが店員に案内されている隙を見計らって喫茶店の向かいの本屋に入った。そこで適当な本を手に取り、立ち読みする振りをして喫茶店内を観察する。

幸いターゲットは窓際の席に陣取ってくれたので、様子を観察するのは非常に簡単だった。

(順調、順調)

そう思つて少し気を抜いた矢先のこと。

「あれえ？ なにやってんの、不知火？」

「!?!」

突然背後に聞こえた声に、俺はどうか声を上げるのだけは我慢して振り返った。

「そんなカツコして。えつちな本でも物色してるの？」

背後から俺の手元を覗きこむようにしていたのは藍原だった。

「な、何故俺だとわかった!?! 変装は完璧だったはず!」

俺がわざとらしく狼狽してみせると、藍原はニツコリと笑って言った。

「それはきつと、あたしと不知火の愛の力だね！」

「……へ？　んなわけないだろ。気色悪い」

「え、ちよっ！？　せっかくノってあげたのに！」

「別に頼んでねーし」

そう言っただけ俺は再び向かいのファストフード店へと視線を戻した。今の俺はこんなヤツに構ってる暇はないのだ。

……例の噂の件、結局由香を交えた話し合いの結果、直斗と由香をデートさせるといふ俺の最初の案がほぼそのまま採用されることになった。デートというか、今週いっぱい放課後に二人で適当に寄り道してから帰ってもらおうという程度なのだが、まあ連日やっていればそれなりに目撃者も出るだろうし例の噂に対抗する効果も出るだろう。

ちなみに由香のやつには“ちよっとした事情があつて”としか説明できなかったのだが、快く承諾してくれた。あいつなりにその事情を予測して納得したらしいのだが、きつとその予測は見当違いだろうと思っっている。

「……どうでもいいけどさ」

藍原はそう言っただけ俺のかけているサングラスをちよんと触った。

「不知火、学生服にサングラスはおかしくね？」

「……はッ！？」

その言葉に俺は改めて自分の格好を見直す。

確かに今の俺は学生服姿だった。……当然だ。学校の帰りなのだから。

「言われてみれば。ふ、俺としたことが迂闊だったな」

「常にボケを仕込んでおくなんて、不知火ってば芸人だなあ」

別にそんなつもりはなかった。ただ変装といえばサングラスだなと思っただけで、深いことは何も考えていなかっただけだ。

「で、なにやってんの？」

「見ての通り本を読んでいる」

俺が即答すると、藍原はふーん、と呟いて、

「逆さ読みの練習してるんだね」

「ん？ ああ……」

持っていた本が逆さになっていたことに気付き、慌てて元に戻す。

「……」

「……なんだよ？」

それでも藍原がジツと見つめてきたので、怪訝に思ってそう聞き返すと、

「だって、その本」

と、俺の手にした本を指差す。

「ん？」

ゆっくりと自分の手元に視線を落とし、そして、

「……おわあ！ なんじゃこりゃあッ！」

“生後一年までの赤ちゃんの育て方”

そう書かれた本のタイトルを見て、俺は慌てて本を放り投げた。

(よりもよってなんちゅう本を……)

いくらなんでも適当に選びすぎだった。

学生服にサングラスだけでも怪しすぎるといつのに。

藍原は怪訝そうな顔をして、

「誰の子供？ まさかして」

「その先を言ったらグーで殴る」

そう言っただけで拳を握り締める。

こいつの言いそうな次の言葉は容易に想像できた。

すると藍原は頭の後ろに手を回して朗らかに笑う。

「わかってるわかってる。雪ちゃんの子供かもなんてこと絶対に言わな」

「ゴンッ！」

「……いった~~~~いッ！」

「だから殴ると言っただろ！」

拳を握り締めたままで怒鳴ると、藍原はなみだ目で俺を恨めしそ
うに見上げて、

「ただの可愛らしくてお茶目な冗談なの……」

「お前の冗談は笑えねえんだよ！」

「暴力反対……」

「とつとと帰れ！」

「ちえっ……」

藍原はおでこの辺りを押さえながら納得のいかない顔をして去っ
ていった。

(……つたく)

うるさいのが店を出て行ったのをきちんと確認し、今度は違う柵
から男物のファッション雑誌を手取る。

(そついやあの二人は)

しばらく目を離していたことを思い出し向かいの喫茶店に視線を
戻すと、幸い二人ともまだ店内にいてちょうど精算に立つところだ
った。

俺はホツとして、手にしたばかりのファッション雑誌を元の場所
に戻し、再び尾行の準備を始める。

……ちなみに。

何故俺があこの二人を尾行しているのかというと、その辺には色々
と複雑な事情があった。

“ヒマ”だったのである。

(……一言で説明できてんじゃん！)

脳内一人漫才という生産性も面白みの欠片もない行為に俺が空し
さを感じていると、やがて直斗と由香の二人が向かいの喫茶店から
出てきた。

(さて、と)

二人がある程度遠ざかったところを見計らって、俺も本屋を出た。
(次はどこに行くのかな……?)

それはそこそこ興味深い疑問だった。二人とも基本的には、しょ

つちゆう遊びまわっているようなタイプじゃない。俺が一緒のときはゲーセンやカラオケなんかに行くことが多いが、あの二人なら進んでそういうところには行かないだろう。

(とりあえず買い物とか、かな……)

案の定、二人は駅のすぐ前にある洋服専門店に入ってしまった。

(……ビンゴ)

まあ、今更あの二人の行動パターンを当てられたからって別に自慢できることでもなんでもないのだが、いつもはこっちが見透かされてばかりいるものだから何となく気分が良い。

二人の買物物がそこそこ長引くであろうことを予測した俺は、少し間を置いてその店に入ることにする。その店は俺も何度か入ったことがあるが、広い店で物がいっぱいあるから、少し注意していれば挟み撃ちにでも合わない限り見つかる心配はなかった。

(しかし……ふむ)

物陰から商品を手物色している二人の姿を見て、

(なかなかサマになってるじゃないか)

二人で並んでいるその姿は、まるで本物の恋人同士のようなのだ。どつちも真面目な優等生タイプだから、俺と由香が並んでいるよりはよほど絵になる光景といえる。

……それから約一時間。

俺もさすがに退屈だったので、時折店の商品を物色しながら二人を観察していた。二人も商品を買うつもりはないようだったが、直斗に似合う服でも探しているのか、男物の服を手にとって二人でアレコレ意見を交わしたりして、非常に楽しそうだ。

そして、ふと、

(……由香の好きなヤツって、やっぱり直斗なのかな)

そんなことを思った。

上手く言えないが、今日の由香はいつもと違うテンションのように見えた。三人でいるときとも、俺とプールに行ったときとも、明らかに違う。いつもよりはしゃいでいるというか、より気を許して

いるというか、そんな感じに見える。

(考えてみりゃ、俺よりずっと付き合い長いんだもんな、あいつら……)

俺とあの二人が初めて会ったのが小学一年のとき。そこから今まで付き合ってきたるってのも十分長いが、あの二人はそれよりもさらに前、幼稚園に入る前からの付き合いだ。俺よりも互いのことを知っているだろうし、当然さらに強い親近感を感じてもいるのだろう。

(……うーむ)

そんなことを考えていると、なんだかちょっと寂しくなってきた。これでもし、直斗と由香が本当に付き合いはじめたりしたらどうなるのだろう。俺は完全に蚊帳の外に置かれてしまうのではなからうか。

まあその程度のことと落ち込むほど子供ではないつもりだが

(……待てよ?)

そこで俺はふと閃いた。

たとえば、だ。あの二人が付き合い始めて十八歳で結婚したとする。……最近の風潮からすると早いかもれないが、直斗は母親が二十歳のときの子供だし、由香にいたっては十五歳のときの子供(深く考えてはいけない)だ。それを踏まえればあり得ない話じゃない。

二十歳で子供が産まれるでしょう。子供は女の子で、あいつらの子供ならかなりの高確率で美人かつ優しい(ほんのちよつとだけ毒舌風味の)子に育つだろう。

その娘が十六歳ぐらいになった頃、直斗と由香は三十六歳。つまり俺も三十六歳。小さい頃から刷り込み効果によって俺に懐くように仕向ければ、ほら。

労せずして二十歳も年下の美人の奥さんが手に入るという寸法だ。

(……素晴らしい計画だ)

問題があるとすれば、俺があの子の二人のことをお義父さんお義母さ

んと呼べるかどうか。

それが最大の難関である。

「……って」

しばし妄想の世界に浸っていた俺は、いつの間にか時間がかなり経過していたことに気付き、慌てて直斗たちのほうに視線を戻したが、

(……しまったあああ！)

店内に二人の姿はなかった。

どうやら外に出て行ってしまったらしい。

俺は慌てて外に出て左右を見渡したが

(どっから現れたんだ、この人ごみ……)

駅前通りはいつの間にか学生と社会人の帰宅ラッシュの時間になってしまっており。

結局俺は、その人ごみの中から二人の姿を見つけることはできなかったのだった。

沈みかけの太陽が当たり一面を赤く染めている。

かなり気温も下がってきて、暖かい家の温もりが恋しい。

この時間、風見学園近くの中央公園は閑散としていた。夏の夜は恋人たちの憩いの場所になるこの公園も、この季節になると極端に人の姿が少なくなる。

(……また雪のヤツに怒られるな。無駄遣いして、って)

二人を見失ったあの後、もともと暇つぶしでしかなかったこともあって俺はすぐに二人を探すのを諦めると、三十分ほどゲーセンに寄り、そこで散財した後で帰路についていた。

公園にはその途中でふらっと立ち寄ったのである。

俺の家から歩いて十分程度のこの公園はその昔、小学生の俺たちにとつての良い遊び場になっていた。その時代は今のような立派な

公園ではなく、滑り台やブランコ、砂場がある程度の小さな公園だったのだが、数年前に大きく拡張されて噴水や小さな池が作られ、どこからか運んできた木が植えられて、たちまち巨大な公園へと変貌したのである。

ちなみに俺たちのよく遊んでいた昔の小さい公園跡は、ちゃんと隅っこのほうに残っている。もうほとんど誰も使わなくなったブランコに滑り台。本当に隅っこのなのでその存在を知らない人間も多いだろう。

ただ、俺にとってはそっこのほうが思い出深い。
と。

(久々に行ってみるかな……)
そんなことを考えていると急に懐かしくなってきた、俺はその場所へと足を向けることにした。

残っている、とは言ったものの、前回その存在を確認してからさらに時間が経過している。もしかしたらもう撤去されているかもしれない。

と、そんなことを考えながら木々に囲まれた遊歩道を抜け、奥へと進む。

すると、

(……ん？ 誰がいるな……)
見えてきた公園跡には二つの人影があった。

片方はブランコにちょこんと座り、もう片方はそのすぐそばに立って。

話し声も聞こえる。

(……って、なんだ。直斗と由香じゃないか)
あの二人も俺と同じで、ふいに懐かしさに誘われたのだろうか。

(……行くか)
どうやらこれから帰路につくようだ。これは本当に偶然会っただけだし、ここで姿を現しても問題はないだろう。

と、俺はそう考えて二人と合流しようと思ったのだが、

「？」

ふと、妙な気配を感じて足を止めた。

(……なんだ、あれ)

少し真剣な顔で言葉を交わす二人。しばらく沈黙が続いた後、由香が懐からなにやら白いものを取り出したのである。

(ハンカチ、いや手紙か?)

由香がそれを直斗のほうへと差し出す。

何の模様も入っていない白い封筒、裏側に張ってあるハートマークのシールがかるうじて見えた。

(……ラブレター？ 由香から直斗に?)

一瞬そう思った、が、そうとも限らない。

由香が誰かからもらって直斗に相談している可能性もある。

直斗はなんだか戸惑ったような顔で由香を見つめ、由香が二言三言、何事が呟くと、直斗は少し考えてからその手紙を受け取った。

(……うーむ)

完全に出て行くタイミングを失ってしまった。

……いや、これは出て行かないのが正解だろう。

俺は、何だかいけないものを見てしまったような気がして、とりあえずその場を離れることにした。

ここで見つかってしまったら、それこそ気まずいことこの上ない。

(……しかし、ラブレター、ねえ)

誰から誰にあてたものなのか。

可能性はいくつか考えられるが、もし本当に由香から直斗にあてたものだったなら

「……」

噴水のところまで戻ってきた俺は、一度だけ直斗たちのいる公園跡のほうへと視線を向け、それから帰路についたのだった。

「なあ、雪。あー、歩でもいいや」

「なあに、優ちゃん？」

台所で洗い物をしていた雪が顔をあげてこちらを見る。

「でもいいや、って、ひどーい」

不満げ顔をしつつも、エプロンを外しながらトコトコとこちらにやってくる歩。

「あ、優希お兄ちゃん、なんか飲んでるー」

「いるか？ 半分でもう飽きた」

帰りのコンビニで買った新商品らしき甘ったるい炭酸飲料のペットボトルを歩に差し出すと、歩は嬉しそうにそれを受け取った。

炭酸飲料はやはりあの黒いのが一番だ。

少し遅れて、雪も台所の電気を消して居間のほうへとやってくる。

「歩ちゃん、明日、帰りはいつもどおり？ 時間があつたらお買い物をお願いしたかったんだけど……」

「うん。大丈夫だよー」

並んで二人掛けソファに座ると、雪はテーブルの下から毛糸のかたまりを取り出して膝の上で編み物を始めた。

歩は俺が渡したペットボトルに口を付けて、

「あ、これ美味しい。雪お姉ちゃんも飲んでみて？」

「そうなの？ じゃあちよつとだけ」

と、雪。

そんな二人に俺は言った。

「おいおい。ペットボトルの回し飲みなんてはしたないぞ」

すると歩が口を尖らせる。

「えー……優希お兄ちゃんだっしてたじゃないー」

「俺は最初だからセーフ。……で、話だが」

歩がさらに抗議の口を開く前に、俺は本題に入ることにした。

「お前ら、ラブレターって書いたことあるか？」

「え？」

唐突な質問に二人そろってきよとんとした顔をしたが、やがて、

「わ、私はないかなー……」

たはは、と、照れくさそうに笑いながら答える歩。

俺は深く頷いて、

「まあお前には最初から期待してなかった」

「なんでー!？」

「私は毎年書いてるよ」

雪が、軽く口を付けたペットボトルを歩に返しながらそう答えた。

俺は眉をひそめて聞き返す。

「毎年？」

「うん。毎年十二月二十五日に、優ちゃんあてにね」

「……それはただのクリスマスカードであって、決してラブレターなんかじゃありません」

丁寧語で突っ込むと、雪は言った。

「愛のこもった手紙は全部ラブレターだよ？」

俺は反論する。

「ラブレターの和訳は恋文だろ。恋文つてのは異性愛が前提だ。…

…まあ同性愛でもいいが」

「うん」

「どちらにしても家族愛的なものには該当しません」

「うん。……ん？」

「……」

なんだその、合ってるよね、みたいな顔は。

……よし。無視しよう。

俺は風呂場のほうにチラッと視線を送って、

「瑞希のやつは……聞くだけ無駄か」

「……どうしたの？ 急にラブレターだなんて」

雪がようやく興味を持った様子で逆に質問してきた。

「ああ、いや。ラブレターってのはどういいうときに渡すもんなのか
と思っとな」

俺がそう言くと、歩が不思議そうな顔をして、

「好きな子に告白したいときじゃないんですかー？」

「まあ、そうなんだが、そうじゃなくて。なんつーか、つまり、口で言えば済む相手にわざわざ書いて手渡しする必要があるのかってことだ」

すると雪が答える。

「手紙のほうがいやすいこともあるから必要はあるんじゃないかな？ でも、直接手渡せるなら口で言えちゃう気もするよね」

「だよな、やつぱ」

そこなのだ。

下駄箱に入れとくとか誰かを經由して渡してもらうとかならまだわかるのだが、告白したい相手に直接手紙を渡すというのがイマイチ理解できないのである。

雪の言うように緊張して上手く話せないから手紙で、という考えもあるが、

(直斗と由香だからなあ)

いまさら？ という気がしなくもない。
と、なる。

先ほど見たあの光景はやはり第三者の絡んだものだと考えるべきか。

「優ちゃん、ラブレター渡したい子がいるの？」

雪が小首を傾げている。

「ああ、いや」

「やめたほうがいいわよ。読まずにゴミ箱に捨てられるのが見えるから」

「……」

振り返ると、脱衣所から出てきたパジャマ姿の瑞希が視界に入った。

俺はそんな彼女を睨みつけて、

「だから俺はラブレターなんか渡さねえっつーの。……引導を渡したい女なら目の前にいるがな」

「あら、面白いわね」

笑いながらキッチンへ向かい、牛乳をマグカップに注いで戻ってくる。

「お風呂いいわよ。歩ちゃん、入ってきたら？」

「はい」

「あ、じゃあ今日はもう遅いし一緒に入る？」

雪が編み物を置いて立ち上がる。

「是非とも」

歩が嬉しそうにそう言って、二人はパタパタと着替えを取りに二階に上がっていった。

俺はそんな光景を横目に見ながら、

(……あんま参考にならなかったな)

結局のところ、明日あいつらに直接聞いてみるしかなさそうだ

、と、俺はそう考えて、膝に置いていた漫画雑誌をパタンと閉じたのだった。

1年目11月その4

(……ふーむ)

公園のベンチで缶ジュースを片手に俺は考えていた。

「? どうしたの、優希くん?」

右隣ではクレープを手に持った由香が怪訝そうに俺の顔を覗き込んでいる。

「またアツチの世界に行っちゃったんじゃない?」

左隣には相変わらず失礼なことを口にする直斗。

いつもと変わらない二人だ。

昨日の翌日(?)つまりは金曜日の放課後。俺たちは最後の仕上げとして“三人仲良く遊んで帰ろう作戦”の実行中だった。これはつまり、二人で遊びに行くこともあるけど俺たちは三人揃って仲良くグループなんだよアピールなのだが、正直な話、もうあんまり必要ない気もしている。

昨日までの作戦が功を奏したのか、もともとそんなもんだったのかわからないが、あの噂が聞こえていたのはせいぜい水曜日ぐらいまでで、今はもうそんなことが本当にあったのかどうかもわからないほど周りは静かになっていた。そしてなにより、今の俺の関心ごととはそれとは別のところ。昨日のラブレターが、いったい誰かのものなのかというところに移ってしまっていたのである。

(……いつもどおりだよなあ)

直斗と由香。

そう、いつもどおりすぎるのだ。

昨日のあれが仮定その一、つまり由香から直斗への告白の類であったとすると、この“いつもどおり”はどうにも不自然だ。

仮定その一を前提として今のこの状態を見た場合、直斗の返事がイエスだった可能性はゼロに近いだろう。もしも二人が付き合い始めたとかならそれはきつと俺にもわかるだろうし、なにより二人が

俺にそのことを黙っているはずがない、と思いたい。

とすると、ノーか未回答かということになるのだが、それだと由香の態度が自然すぎる。断られて落ち込んでいる様子もないし、未回答ならもつとそわそわしてそんなものだ。

こいつの場合、それを隠そうとして隠せるほど器用な人間でもない。

(……ま、とりあえず探りを入れてみるか)

そのターゲットはもちろん由香だ。

俺は直斗がベンチから少し離れた隙を見て話を切り出した。

「なあ、由香」

「え？」

今まで黙り込んでいた俺に声をかけられて、由香はびっくりしたような顔をした。

様子を見ながら、さりげなく切り出す。

「デートは楽しかったか？」

「え？」

突然の質問に由香は不思議そうな顔をしたが、やがてニッコリと微笑んで、

「うん。楽しかったよ」

「そうか」

そこでいったん会話を止める。

(……どう判断すべきかな)

こいつのことだから“つまらなかつた”とは絶対に言わないだろうが、今の言葉は素直に本心っぽい。

「だってね。優希さんとプールに行くなんてすごく久しぶりだったし。だから」

「は？」

「え？」

由香の言葉にしばし考えて、

(あ、そっか)

どつやら俺の言葉が足りていなかったらしい。

俺は言い直した。

「そうじゃなくて、昨日までの直斗と遊んでたやつのことだよ」

「え、あ……」

「だいたい俺たちのは別にデートじゃないだろ。遊んできただけだ」
俺がそう言うと、勘違いしたのが恥ずかしかったのか由香は少し
しどろもどろになりながら、

「で、でもそれだったら直斗くんのもデートじゃないよね？」

「いいや、あれはデートだ」

「ど、どうして？」

「いいんだよ、細かいことは。で、楽しかったのか？」

由香はまったく納得できていない様子だったが、それでもそれ以上
上反論してくることはなく、

「うん。もちろん楽しかったけど……」

やはりそう答えた。

「そうか。そいつは良かった」

「……」

少し歯切れが悪かった。

やはり何かあったのだろつかと少しだけ疑問が首をもたげてくる。
そこで俺は少し切り口を変えてみることにした。

「俺らってよ。どういう縁だか知らないけどもう十年近くも一緒だ
よな？」

「え？ う、うん、そうだね」

「で、まあ、たまに思うわけだ。これっていつまで続くんだろうか、
なんてさ。十年も続いたんだからこれからも続くんじゃないかと思
うこともあるし、何かのきっかけであっさり途切れてしまったりも
するんじゃないかって気もする」

「ここは俺の本心だった。」

「ど、どうしたの？ 急に……」

由香が少し悲しそうな顔をする。それを見るだけで、こいつがど

れだけ俺や直斗や雪との関係を大切に思っているかが窺えた。

「いや、だからさ」

俺は少し間を空けて言った。

「お前と直斗あたりがくつついたりすると、案外いいんじゃないかと思うわけだ」

「……………」

由香は不思議そうな顔だった。

どうやら俺の言葉の意味するところがわからなかったらしい。

「いや、だから。お前が俺らのよく知らない男と付き合い始めたりしたら、この関係ってたぶん自然消滅しちまうんじゃないかなって。その点、相手が直斗だったりしたら問題ないわけじゃないか」

と、説明する。

が、由香はそれでもきよとんした顔のままだった。

あまりにも反応が薄いので、俺は眉をひそめて、

「……………なんだよ。そんなに変なこと言ったか、俺」

そう聞いてみると、由香はハッと我に返り、

「うっん。そんなことないけど……………」

そう言って一度視線を落とす。

何事か考える素振りをして、

「それ、私も考えたことあるもん。でもそれだったら」

「ん？」

「私と優希くんで、雪ちゃんと直斗くんが一番いいんじゃないかな

……………」

「む……………」

俺は言葉に詰まってしまった。

そして、

(まあ、確かに……………)

一理ある。

だいたい直斗と由香がくつついたところで、必ずしも俺との関係が継続するとは限らない。が、由香の考えた組み合わせだと、俺と

雪が兄妹の縁を切りでもしない限り、半強制的に関係が続くことになる。

由香は少し照れくさそうに笑いながら続けた。

「私、昔からそう思ってたよ。そうなったらきつといつまでも一緒だなぁって。それって夢みたいなお話だよな」

まるで空想世界の物語を語っているかのようだ。

「どうやらパツと思いついた俺とは年期の入り方が違うらしい。」

そんな彼女に俺は思わず苦笑して、

「大げさだろ」

そう言った。

と、同時に、やはり昨日のラブレターは由香が書いたものではないのだろう、と確信した。こいつはその状況で今みたいな素知らぬ会話ができるような器用な人間じゃない。

そして確信しつつも、俺は言った。

「昨日の直斗あてのラブレターはお前のか？」

「……え？」

ワntenポ遅れて言葉が返ってくる。

「昨日、直斗に渡してたやつだよ」

と、俺が言うと、

「え、あ……優希くん、見てたの？」

「ああ。いやあ、びっくりしたぜ。たまたま懐かしくなってあの公園に行ったらお前らがいて、しかもお前が直斗にラブレターなんか手渡しているんだからさあ」

案の定、由香は慌てた顔をした。

「あ、あれは私の知ってる子から頼まれて……」

「結婚式には呼べよ」

「ち、ちがつ」

「どうしたの？」

と、直斗が戻ってくる。

「また何か変なこと言ったのかい？」

顔を赤くして慌てている由香を見て、俺の方に責めるような目を向けた。

俺は素知らぬ顔で、

「いや、別に。ただ、婚約おめでとぅって言ったただけだぜ」

「？ 婚約？ 由香と優希が？」

「……………んなわけないだろ。なんで自分におめでとぅとか言わなきゃならんのだ」

「優希なら普通に言いそうだけどね」

そう言いながら、直斗は俺の隣に再び腰を下ろす。

「で、今回はどういう冗談？ 急に小学生時代に戻りたくなっただか？」

「なんだそりゃ。……………ああ、そういうことか」

確かに小学校のときは仲のいいクラスメイトの男女のことを“婚約”だの“結婚”だのとよくはやし立ててた気がする。

ああ、いや。

俺たちはどちらかというとはやし立てられていたほうか。

「あ、あのね、直斗くん。昨日の公園のこと、優希くんが偶然見たみたいで……………」

と、由香。

「ああ、僕と由香のことか。なるほどね」

直斗はそれだけで状況を悟ったらしく、今度は苦笑して、

「それならやつぱり冗談だよ。本気でそう思ってるなら、優希がそんなこと軽々しく口にするわけないもの。……………だよな？」

「……………んなことねーけど」

いや、相変わらず鋭い。

「え、冗談？ 本気じゃないの？」

そして相変わらず鈍い。

この差ははたしてどこからやって来るのだろう。一般的にそういうのは男より女のほうが優れているんじゃないかと思っていたのだが。

いや。

雪のことも考えると、むしろ由香が特別に鈍いだけなのかもしれない。

「でもそれを知ってるってことは、昨日、僕たちの後をつけてきた？」

「いや、偶然だ」

と、俺は答えた。

あの公園での目撃は本当に偶然だったのだから嘘はあんまり言っていない。

「だいたい、なんで俺がお前らの後を付けて回らにやらんのだ」

「元はといえば優希のお願いだったんだから。少しくらい気にしたってバチは当たらないと思うけどね。……ね、由香」

「え？ あ、うん？」

「……なにやってんの、お前」

見ると、由香は直斗が買ってきたジュースのプルタブを開けるのに四苦八苦していて、その俺たちの会話は耳に入っていなかったらしい。

「子供かよ、ったく」

呆れつつ、由香の手からジュースの缶を奪い取って開けてやる。

「ありがとう」

由香は嬉しそうにそれを受け取った。

こいつは昔からこの缶ジュースを開けるのが苦手だ。別に特別なコツが必要なわけでもないのに、単純に指先の力が弱いということなのだろう。

「……ふむ」

俺は急に思い立って、空いていたほうの由香の手を取ってみた。

「え？」

由香は驚いて反射的に手を引っ込めようとしたが、すぐに思いなおしたように手の力を抜いた。

「ふうむ……」

手の平、指先。

ふにふにだ。

「……………優希くん？」

「ん？ ああ、いや」

疑問の声に、俺はようやくその手を離して、

「ずいぶん貧弱な手だと思ってな。これならプルタブごときに苦戦するのもしらないか」

「そ、そんなに貧弱？」

「まー、ひのきのぼつぐらいだな」

「え？」

ピンとこなかったらしい。

そこへ直斗がフォローに入る。

「女の子なんだから仕方ないでしょ」

だが、俺はその主張には大いに異論があった。

「そんなことないだろ。俺が知ってる女の子はうっかり岩を叩き割つちまいそつな拳だぜ？」

「……………ああ」

「……………あはは」

二人ともピンときたようだ。どうやらあいつの凶暴さ加減はこの二人もそろそろ認識しつつあるらしい。

なんだか同志が増えたような気分だ。

俺はそのことに少し気を良くして、

「拳もアレだが、それよりも問題なのは足のほうだな。気を抜けばいつでも殺人キックが飛んでくる。あいつと一緒に暮らすってのはまあ、飢餓状態のライオンの檻の中で生活しろってのと同じだよ」

「……………あー」

「……………」

直斗の声のトーンが少し下がって、由香は反応が無くなった。

俺は調子に乗って続ける。

「そんな猛獣と何ヶ月も一つ屋根の下で生活してみる？ ワニの口

の中に頭を突っ込めるアノ人だつて荷物まとめて逃げ出 あれ？」

「……」

「……」

ついに二人とも反応が無くなった。

「え？」

そしてよくよく見てみると、二人の視線は俺の顔のほうを向いていなかった。その視線は俺の背後 つまりはベンチのすぐ後ろのほうを見ている。

そして揃って苦笑い。

(……あれ？)

そこで初めて感じた、嫌な予感

「……で？」

「！？」

ずんツ、と、空気が沈み込んだ。

地の底から響いてくるような、ド迫力の低音。

「……」

額を汗が伝う。

俺は直斗の苦笑いを見つめたまま、後ろを振り返ることができないでいた。

(体が、動かん……)

……わかつている。もうわかつているのだ。この圧迫感の正体が何なのか。

しかしおかしい。

この中央公園は桜花女子学園の下校ルートからは離れているし、ヤツのテリトリー外だ。

この時間、こんなところに出没するはずがないのに

「……あ、優希さん」

そこへ、遠くから手を振りながら駆け寄ってくる歩の姿が視界に入ってきた。

「実は学校帰りのお使いを忘れちゃいましたー。瑞希お姉ちゃんに

付き合ってもらって買い物に行く途中なのですよー」

たはは、と照れ笑いを浮かべる歩。

（お、お前の仕業か　ッ！）

まさに天災少女の本領発揮であった。

「さてと、優希？」

そして背後の殺戮兵器がついに動き出す。

「肩甲骨を砕く拳と、膝の皿を粉碎するキック、どっちがお好み？」

「……」

“岩を叩き割る”とかよりよっぽど恐ろしい気がするのは何故だろうか。

「どっち？」

「……」

満面の笑顔を浮かべてそう言った彼女の言葉に、俺は自らの死を悟ったのだった。

1年目12月その1

期末テストが終わった。……と言うと、何故かみんな憐れむ顔で俺を見るのだが、どうやら何か勘違いされているらしい。終わったといっても別に絶望的な意味の終わったではない。文字通り終了したという意味だ

と、言うのと、さらに憐れまれてしまった。

あいつらは一体俺をなんだと思っているのか。

まあ、いい。

何にせよ二期の最大の山場を終えて、あとは冬休みに向けて一直線となった。クリスマスなんてイベントも控えていて、思春期真っ盛りの高校生たちは否応なしに盛り上がる。

その話題の中心は色恋沙汰についてのもので、先日流れた俺と由香の噂もその一環といえるだろう。彼氏彼女のいる生徒はクリスマスをどう過ごすかで盛り上がるし、いない奴らはとりあえずクリスマスまでに相手をゲットしようとする今更無駄な努力を繰り返したりする。

さて、そんな時期。

俺の周りはどうと

「優希くん。付き合ってくれないかな……」

「ああ、別にいいぜ」

これで目の前にいるのが超がつく美少女で、たとえば誰もいない校舎裏だとか屋上だとかだったたりするならもう言うことはないのだが、残念ながら俺の目の前にいるのは一応女の子ではあるものの死ぬほど顔を見飽きた幼なじみであり、場所はまだ何人も生徒が残っている教室内、そして彼女がラブレターの代わりに手にしているのは学級日誌。

今日はたまたま俺たち二人が日直で、日誌を職員室まで届けるから付き合ってくれ、という、なんとも色気の無い話なのである。

……そうそう。

先日の噂の件、俺たちに対する周りの認識は結局“そういうものだ”というところに落ち着いてくれたらしい。雨降って地固まる、とでも言おうか。俺は逆に以前よりも気軽に由香と接することができるようになった。

まあ、十二月に入ってみんな他人のことを気にする余裕がなくなってしまうただけなのかもしれないが　ともかく。

そんな事情もあって、学級日誌を職員室まで届けた後、今日はそのまま自然の成り行きで由香と二人で下校することとなった。

「もうすぐクリスマスだね」

この国ではたしてどれだけの人間がこのセリフを口にするのだろうか。

きつと数百万人単位で存在するに違いない。

「俺たち恋人いない組には縁のない話だな」

あまり興味もないので素っ気なくそう答え、空を見上げた。

今日は曇り空。

そういえば数日前、この辺りでは今年初めての雪が降った。今日の冷え込みを考えるとまた近いうちに降ったりするかもしれない。

「なんだか去年もまつたく同じ話をした気がする」

由香が俺の吐く白い息を見つめながらそう呟いた。

「そうだったか？」

「うん。それで、私と優希ちゃんと雪ちゃんと直斗くんの四人で、恋人が一番最初にできるのは誰だろうね、って、そんな話をしたの」

「あー」

微かに覚えていた。

「そういやそんなこと話したな。結論は直斗だったんだよね？」

「そうそう。その次が私で、優希くん、最後が雪ちゃん」

「なんで雪のヤツが最後だったんだっけ？」

「うーん」

覚えていないのか、由香はなんだか複雑な顔をした。

「しかし、ま、一年経っても相変わらずか」

「相変わらずだね……」

と、由香は笑った。

「つか、お前ら本気で恋人作る気あんのか？」

そんな由香をチラツと横目に見て、俺はそう言った。

雪にしる直斗にしる、そして目の前にいるこの由香にしる、その辺の男子女子と比べて何か特別に劣っているわけではない。むしろ優れている部分もあるぐらいだから、作ろうと思って作れないはずがないのだ。

雪と直斗は言うまでもなく人気者だし、由香だって斉藤のようにちゃんと好いてくれるやつが実際にいる。こいつの場合は巡り合わせが悪いのか、あるいは俺や直斗の世話を焼きすぎてそういう連中がなかなか間に入ってこられないだけなのか　後者だとして俺にも責任の一端があるということになるが。

だが、由香は言った。

「私はあるよ。好きな人と二人でクリスマスを過ごしたいって思うもん」

「ホントかよ。まったくやる気が感じられないぞ」

俺がそう言うと、由香は少しだけ不満げな顔をして、

「そ、そんなこと、見た目でわかるものじゃないよ……」

「そんなもんかね」

ほっ、と白い息を吐き出して、冷たくなった右手から左手へと鞆を持ち替える。右手はそのままポケットの中へ。

「だいたいお前、前に話してた好きなヤツのことはどうしたんだ？」

「え？……どうにもなってないけど」

「ほら。やっぱりやる気ないんじゃないか」

俺に言わせりゃ、そんなにはつきり好きだと思っているならとつとと告白でもなんでもすればいいのだ。できないのなら忘れればいい。言いもせずに相手が振り向いてくれるかも、なんて考えはあまりにも虫が良すぎるんじゃないだろうか。

いきなり告白が無理なのだとしても、仲良くなる努力をするとか、何らかのアピールをするとか、そういう方法を模索していくべきだ。何年間も進展なしじゃ現状維持どころかジリ貧になっていくばかりである。

「で、でもね」

と、由香は珍しくちよつとだけ強い口調で反論してくる。

「今、どうにかしようとしても多分上手くいかないから」

「んなことわからんだろ」

「わかるよ。だって私なんか相手にしてくれるような人じゃないし……」

断言するようにそんなことを言ったので、俺はちよつとムキになつて、

「だからわかんないだろって、そんなこと。それに“私なんか”っていうけど、お前だっていいところあるし、魅力がないわけじゃないぞ」

言いながら、斉藤の顔が脳裏に浮かぶ。

そう。

少なくとも最低一人はこいつにベタ惚れしているヤツがいるのだ。「……」

すると由香はなにを思ったのかちよつと意外そうに俺を見た後、クスツと笑って、

「……珍しいね。優希くんがそんなお世辞を言うなんて」

「お世辞っていうほど誉めたつもりもねーけどな」

それでもこいつにはそういう風に聞こえたのだろうか。……いや、普通の俺の言動がひどすぎるせいかもしれない。

「その相手が誰だか知らねえけど、お前から告白されて断るなんて特別な理由でもない限りありえないと思うけどなー、俺は」

半分本心でもあった。

見た目だつて（たぶん）悪くないし、ちよつとトロいところはあがるが、料理が上手いとか世話好きとか、欠点を補って余りある長所

がある。すでに彼女がいる、とか、ものすごく気の強い女以外はノ
ーサンキュー！とか、そういう信念でもない限り、こいつを彼女
にして損をしないことは俺が保証してやってもいい。

「……………」

由香は不思議そうな顔で俺を見ていた。

もちろん俺がこんなことを言うのは珍しいし、そんな顔をする理
由もわからなくはない。が、やがて俺の言葉が冗談じゃないことを
察したのか、

「……………」お世辞でも嬉しいよ

今度は少しだけ恥ずかしそうにそう言った。

「だから、お世辞じゃねーって。なんで俺がお前にお世辞を言わな
きゃなんねーんだ」

そう言つと、由香はちょっと困つたように視線を所在なさげに動
かした。

……………ちよつと唐突に誉めすぎたかもしれない。

「じゃあ」

「ん？」

由香は少しためらつて、

「……………優希くんだったら？」

「なにが？」

主語、あるいは目的語の欠けた問いかけに、俺は当然のごとくそ
う聞き返した。

「私が優希くんに告白したら、優希くんは断らない？」

と、そう言つてから恥ずかしくなつてしまったのか、少し頬の辺
りが上気する。

「……………」

まあ、この質問を予想していなかったわけじゃない。こいつにし
てみりゃ、俺だつて一応男なわけだし、参考意見を聞くにはうつて
つけの相手だろう。

とはいえ。

これは答えづらい質問でもある。

たとえばの話だから、その出来事を想定して回答すればいいのだろうが、まず想像すること自体が難しい。

「……一つだけいえることは」

それでも“由香の初恋を成就させる会”会長である俺としては何も答えないわけにもいかず、

「俺の答えはきつと参考にならんぞ」

「どうして？」

由香がわからない顔をする。

俺はピツと人差し指を立てて、

「だって俺らは男とか女とかあまり区別ない頃からの付き合いだろ。そんな俺がお前にどんな答えを返しても、一般的な意見から離れてる可能性が高いんじゃないか？」

と、答えた。

俺がその場面を想像できないのもこの辺りに原因がある。

他の幼なじみなヤツらがどうなのかは知らないが、少なくとも俺はこいつのことをそういう風に見ることはできない。

というより。

ここだけの話、現時点で俺はこいつのことが“好き”だ。そして今、俺がこいつに対して抱いているそれが、単なる友情なのか、それとも恋愛感情を含んだものなのかは、俺にもわからない。何故ならその感情は、俺が性別の違いを意識する前から抱いている感情だからだ。

つまりそれが“なってみなければわからない”部分の正体。この歳になってその性質が変化していたとしても、してなかったとしても。それを自ら進んで確認しようとも思わない。

つまり俺にとって由香は、幼なじみとしてはあまりに距離が近すぎるのだ。

……これは俺が小さい頃、そもそも男とか女とかいうのをまったく区別、認識できていなかったってことにも起因するのかもしれない

い。

俺が初めてそういうことを認識したのは小学三年ぐらいのときだろうか。極端に言えば、俺はそれまでの間、直斗が男で由香が女だということすらほとんど意識してなかったのだ。

早い話。

俺がこいつを見る目は“男の目”じゃないのだ。小さい頃は当然のようにそうだったし、今は、少なくともそうであると信じ込ませている。

それが事実であろうとなかろうと。

そんな男の意見が役に立つはずもない。

「だから、ま。そういうことを聞くな、その、お前の好きなヤツと同じぐらいの基準でお前のことを見られるヤツに聞くんだな」
が、しかし。

由香はそんな俺のことを見つめたまま、

「うっん。優希くんの意見はきつと参考になるよ……」

そう言うってから正面を向き、ほんの少しだけ視線を落とした。

「私の好きな人も、私のことを昔から知ってる人だから」

「……」

「だけど　いつからか。」

“もしかしたら”と感ずることはあった。

それを考えるときに、いつもは一番最初に可能性を否定するのに、最初からその可能性だけは枠の外に除外してしまうのに。

ある瞬間に、ふと頭を過ぎる。

いつもの弁当を受け取るときに。

一緒に帰ろうと誘われたときに。

「クリスマスはね　」

鞆を抱える由香の手に微かに力が入ったように見えた。

……でも。

俺にとつてそれはあくまで“もしかしたら”。現実になることは考えないようにはしていたし、少なくとも今は現実になって欲しくない。

かった。

俺のそばにはすでに幾人かの大切な友人たちがいる。
今はそれで十分。

何か変化があつて、その中から誰かが消えてしまうことになるかもしれないのなら、今はこのままがいい。

「クリスマスはまた、みんなと一緒にパーティーがしたいな……」

だから、一瞬のためらいの後に続いた由香のその言葉。

また通り過ぎただけの“もしかしたら”に、俺はホッと胸を撫で下ろしていた。

「……だな。雪に直斗に歩に　ま、ウチでやるなら瑞希のヤツも仲間に入れてやるか」

俺は鞆を肩にかけるようにして持ち直す。

そのときにはもう、いつもの空気に戻っていた。

「将太くと美弥ちゃんは？」

「ミヤちゃん？　誰だっけ？」

「藍原さんのことだよ」

「おう。そういえばそんな名前だったか。あいつに似合わぬまともな名前だな」

そういつと由香は控えめに笑つて、

「それってどういう意味……？」

「笑ってるってことは意味わかってんだろ」

「美弥ちゃん、優希くんが思ってるほど変な子じゃないんだけどなあ……」

笑いながらそう呟いた由香に、俺は真顔で一言、

「変なヤツだなんて一言も言つてねーけど？」

「え？」

「そっかー。お前は藍原のことをそんな風に思つてのわー」

由香は慌てた顔をして、

「あつ……だつて、優希くんが　」

「俺が？」

「……」

眉間に皺を寄せて困った顔になる。

こんな冗談でもまともに受けて泣きそうになるところが、こいつのこいつたる所以だろう。

「冗談だ」

本当に泣き出したら困るので、俺はそう言ってすぐに話を切り上げた。

「とにかく将太と藍原も、な。あまり気は進まんが」

「……うん」

と、由香は笑った。

「そろそろ準備しとかないとなー、いろいろと」

そう言っただけ俺は再び厚い雲のかかった空を見上げた。

今年のクリスマスも、多少メンバーの入れ替えがあるだけで去年と同じ雰囲気になるのだろう。

来年はどうなっているかわからない。

ただ、今の俺にとってはそれが何よりだ。

1年目12月その2

十二月中旬のとある金曜日。

この日の夜、我が家にはちよつと珍しい客人が訪れていた。

「はじめましてー。私、神崎歩と申しますー」

歩がそう言つてペコリと頭を下げると、居間のソファにどっかりと腰を下ろしたその軽薄そうな人物は顎に右手を当ててその無精ひげを擦るように動かしながら、

「ほほう。優希の奴がたぶらかしてさらつてきた女の子というのは君か」

「あはは、そのとおりですー」

「ちよつと待て」

初対面にもかかわらず、いきなり和氣藹々と、しかも俺の評判が傷つけられそうな中身の話を始めた二人に対し、俺は即座に横から口を挟んだ。

「久々に来たと思つたらいきなり人聞きの悪いこと言いやがって。

……おい、歩。お前も適当なこと言つてんじゃねーよ」

そう言つて歩の頭を軽く小突いてやると、歩は悪戯が見つかった子供のような顔をして、

「えへへ、ごめんなさいー」

「ほら。挨拶が済んだら雪のそこ戻れ」

「はい」

追い立てられるようにして歩が台所のほうへと下がっていく。

「……ったく」

「ふむ」

俺のため息と重なるようにして、ソファの上の人物が感心したように呟く。

「なかなか可愛らしい子じゃないか。私もあのような妹が欲しいものだな」

「自分の娘より小さい子捕まえてなにおかしなこと言ってるの」と、台所からその“娘”が呆れた様子で顔を出す。今さつき部活から帰ってきたばかりで、まだ制服姿のままだった。

「娘より下の弟や妹がいても別におかしくはないだろう」

「いつの時代の話よ……」

ため息を吐きながらテーブルの上にビールと枝豆を出す瑞希。

この会話で予想はつくだろうと思うが、ソファに座っている珍しい客人というのは瑞希の父親、雅司伯父さんだ。

年齢は確か四十歳を少し過ぎたぐらいだっただろうか。昔はこの家からそれほど離れていないところに住んでいたのだが、今は仕事の都合で伯母さんと二人遠くの町で暮らしていて、今日は急な出張でこの近くに来たついでに寄ったらしい。

見ての通りのちよつとすつとぼけた感じでアウトローな匂いがするが、先日、歩の一件で色々根回ししてくれたのもこの人で、昔住んでいたこの町でも結構顔が広く、いざというときには頼りになる一面もある。

ちなみに伯父さんの奥さん、つまり伯母さんは宮乃さんといって、伯父さんとはあまり性格の似ていない温厚な人だ。俺なんかは小さい頃から母子のように接してもらってきたが、怒ったところを見た記憶はほとんどない。その役目を伯父さんが一手に引き受けていたというのもあるかもしれないが、宮乃伯母さんはどちらかというところ静かな声で優しく諭してくれるタイプだった。

それがちよつとアメとムチみたいないい塩梅になっていたのかもしれない。

ただ、伯父さんに言わせれば“怒らせると怖い”ようだ。

そのどちらにも、基本的に真面目で怒りっぽい娘とは性格が似ていないというのだから面白いもので、雪なんかに言わせると、

『伯父さんはどちらかというところと優ちゃんこそつくりだよ』

とのことである。

「伯父さん、お風呂沸きましたよ」

その雪が風呂場から顔を出して伯父さんにそう告げる。

「おお、すまんな、雪」

「瑞希の持ってきたビールを一気に飲み干した伯父さんはゆっくりと腰を上げ、軽く首を回しながら風呂場へ向かっていく。

と、その途中、

「ああ、そうだ」

「何事か思いついた顔で台所に戻りかけた雪に声をかけた。

「雪、久々に一緒に入らんか？ 昔みたいに頭をガシガシ洗ってやるぞ？」

「え？」

「雪はきよとした顔をしたが、すぐにいつもの微笑みを返す。

「私はいいですけど、伯母さんに怒られちゃいますよ？」

「ふむ。それは怖いな」

「パパ！ 馬鹿なこと言つてないで早く入ってきてよ！」

「眉間に皺を寄せた瑞希が怒鳴る。

「ああ、はいはい。わかったわかった」

「伯父さんはおどけた調子でヒラヒラと手を振ると、ようやく風呂場のほうへと消えていった。

「……………」

「腰に手を当てて、これ以上ないぐらいの深いため息を吐く瑞希。

「まあ、気持ちわかる。

「……………なあ、雪」

「その一部始終を見ていた俺は、念のため確認することにした。

「なあに？」

「と、雪がカウンター越しに顔を覗かせる。

「俺って、伯父さんとそっくりなんだっけ？」

「うん。」

「……………」

「ってことは、将来あんなエロオヤジになるってことか？」

「……………何かイヤだ。」

夕食後。

片付けをしている女三人組を置いて、俺と伯父さんは寒空の下に出た。ビールが切れたので買いに行くという名目だったが、どうやら何か話があるらしいのはすぐにわかった。

「……さむっ」

太陽は完全に沈んでいて街灯の明かりも人通りも少ない中、俺と伯父さんは並んでコンビニ向かって歩いていく。

「で」

いくらか歩かないうちに、伯父さんは前置きなくそう切り出した。

「雪の様子はどうなのだ？」

「……見てのとおりだよ。最近、そっちにはほとんど関わらせてないしな」

その質問を予測していた俺は即座にそう答える。

伯父さんが言っているのはもちろん五月のあの事件のこと。あの事件のことはすぐに伯父さんに連絡して状況を説明していたし、何か困ったことがあったらすぐに連絡しろとも言われていた。あれ以来、伯父さんと直接会うのは初めてだから、ずっと気にしていたのだろう。

「代わりに俺は色々あったけどな」

「お前なら別に問題あるまい」

伯父さんは笑って、それから少し真剣な顔になった。

「本当なら私がそばにいてやるべきだが。瑞希のことにしろ、お前には負担をかけるな」

「……」

俺は無言で足元の小石を軽く蹴り飛ばす。

そして、

「そう思つのなら、あいつの暴力癖をなんとかしてやってくれ」
言葉の意味をわざと曲解してそう答えた。

「……無理な話だ」

「親のくせに」

「あの歳になると私の言葉はあまり効果がないらしくてな。父親ってのはなかなかどうして淋しい生き物だ」

「よく言うぜ。そんなことで落ち込む性格じゃねーだろ」

そう言いながら冷えてきた手を上着のポケットに突っ込む。

街灯の下の水たまりの表面には薄っすらと氷が張っていた。

もう完全に冬模様だ。

そして少し、空白。

「……負担とか迷惑とか、そんなの思ったことない。あんたは俺たち兄妹の恩人だからな」

夜空を見上げて小さく、呟くようにそう言った。

「約束だったからな……」

と、伯父さんは懐かしそうに呟く。

横目で見ると、伯父さんも俺と同じように夜空を見上げていた。

……伯父さんと俺の両親との関係。それについて俺が知っていることは少ない。

ただ確実なのは、血縁という点において、伯父さんと両親は赤の他人だったということ。当然だ。人間である伯父さんと、純血の悪魔だった俺の両親とが兄弟であるはずもない。詳しい話は知らないが、行方不明扱いになっていた伯父さんの弟夫婦の戸籍を俺の両親がそのまま使っていて、だから記録上は伯父さんと俺たちは親戚関係にある。

そのことを瑞希だけは知らない。

それは伯父さんの意向であり、おそらくは俺たちを普通の人間として育てたいという意志の表れでもあったのだろうと思う。

「悪かったと思ってるよ。あんたの努力を無駄にしちまってさ」

俺はそう言った。

悪魔狩りに俺たちの存在がバレたのも、元はといえば俺たちが不用意に力を使っていたせいだ。

俺たちにも俺たちなりの理由があったとはいえ、それが伯父さん

の長年の努力を無駄にしてしまったことに変わりはない。

だが、伯父さんは素っ気無く、

「わかっている」

とだけ言った。

伯父さんも俺たちなりの理由　隣家で一家が惨殺された事件のことを知っている。

もちろんそれが暴走した悪魔の仕業であることも。

……それからはお互い無言でコンビニに到着した。

「いらっしやませー」

こここのコンビニは家から一番近いのでよく利用するのだが、ちょうど深夜シフトに入るであろうこの時間に来ることはそれほど多くなく、店内にいた大学生と思われる二人の店員はどちらも見覚えがなかった。

「こら、優希」

「ん？」

カゴにお菓子類を適当に放り込んでいる俺に、伯父さんが言った。「雪に頼まれたのは二つか三つじゃなかったか？　お前が個人的に食う分は自腹だぞ」

「なんだよそりゃ。雪の頼みは良くて俺はダメなのか？」

「当然だろう。あいつは可愛い姪っ子だからな」

「こっちは可愛い甥っ子だろ」

「お前は“可愛い”甥っ子だ」

そう言っつて伯父さんは意地悪くニヤツと笑った。

「……ちえっ。ケチくせーなあ」

俺は悪態をつきながらカゴに放り込んだ十個ほどの菓子類を棚に戻していったが、結局、半分ほどは買ってもらえることになった。

他、缶ビールを五本と少量のつまみを買って、コンビニを出る。

「ありがとうございましたー」

抑揚のない店員の言葉を背に受けながら、相変わらず人気のない通りに入る。缶ビールの入った重いほうの袋は菓子代として俺が持

つことになった。

そして帰り道の途中、

「……この町はな。この近辺ではもっとも悪魔の現れやすい場所なのだ」

伯父さんは再び、そう切り出した。

「？」

俺が怪訝に思っただけで、伯父さんに視線を向けると、

「お前もだいたい関わってしまったみたいだからな。多少は教えておく。同じことは繰り返さないからきちんと聞けよ」

「……おう」

今までは俺たちが関わるのを嫌ってか最低限の話しかしてもらえていなかった。これは俺にとっても有難い話だった。

伯父さんは言葉を続けた。

「この町にはこの国最大の“門”がある」

「門？」

「まあわかりやすく言えば悪魔たちが住むとされる魔界から人間界への通路だな。大抵の悪魔はそこを通って、あるいはそこに巻き込まれてこの世界にやってくる。その中でもかなり大きい、つまり強力な悪魔が通ってこられる“門”がこの町にある。だからこの町には国内でも最大規模の悪魔狩り “御門” という悪魔狩りの総本部が置かれているのだ」

そう言っただけで伯父さんはある方角を指さす。

「向こうにある神社のことはお前も知っているだろう？」

「そりゃ知ってるよ」

そこは神村さんのいる神社がある方角だった。

……と。

そう言っただけで俺は気付いて、

「……もしかして」

「そう。あそこが“御門”の総本部。正確に言つとあの神社の奥の林の中だな」

「あそこが総本部だって……？」

見た感じは普通の神社だ。普段人気は少ないが正月になればそれなりに初詣の参拝客が訪れたりするし、そんな場所に一般的には知られていない悪魔狩りの本部がある、なんてのはあまりピンとこない。が……よくよく考えてみると、あそこには悪魔狩りである神村さんがいるのだから不思議ではない話か。それにあの神社の奥の林は背後の山に続いていて、人の入り込まない非常に広い空間が存在していることも確認済みだ。

（けど、どっちにしてもそんなすごい場所って感じじゃないよな……）

そんなことを思ったのが顔に出ていたのが、伯父さんはチラッと俺の顔を見て、

「神社もあれはあれで本物だ。副業、と言ったら悪いが、まあそんなようなもんだろう」

「ふーん」

その言葉に、なるほどと思う。

「でも副業にしちゃ結構一生懸命やってるよな」

と、毎日朝夕に境内の掃除をしている神村さんの姿を思い浮かべてそう言つと、

「それをおろそかにしてたら参拝客に申し訳ないだろうが」

「そりゃそうか。……って、そーいや」

ふと、疑問に思ったことを伯父さんにぶつける。

「伯父さん、なんでそんなに悪魔狩りのことに詳しいんだ？」

今までは、単純に俺の両親と関わったからそういう方向の知識が豊富なのだろうと勝手に考えていたのだが、今みたいに悪魔狩りのこともそれなりに知っているとなると、どうやらそれだけじゃ説明できないような気がしてきた。

すると、急に、

「ああ、それは――」

伯父さんは足を止めた。

「？」

俺も同時に立ち止まる。

向けられる、伯父さんのいつになく真剣な視線。

少しの沈黙。

それほど強くもない風の音が聞こえてくるほどの静寂。

そして、伯父さんは言った。

「置いていて、お前の高校生活の話でもしよう」

「……ふざけんな。質問に答えろ」

「どうでもいいではないか、そんなこと」

伯父さんはいつものとぼけた表情に戻って、

「で、どうなんだ？ 彼女の二人や三人はできたのか？」

「……」

先ほどの伯父さんは少し迷っていたようにも見えたが、どうやら「喋らない”ほうの結論を採択したらしい。

こうなるといくら突っ込んで聞いたところで無駄なことはわかっている。

「つか、彼女って二人も三人も作るもんじゃねーだろ、フツー」

「なんだ。つまり一人もいないのか」

伯父さんは俺の皮肉を軽く受け流し、さっさと歩き出す。

「でもまあ落ち込むな。いざとなれば瑞希のやつもいるぞ」

とても父親とは思えないセリフだ。

「冗談じゃねえって。俺に殴られて喜ぶ趣味はないんだ」

「未だに頭が上がらんのか？」

伯父さんは苦笑して、遠くを見るような目つきで呟く。

「あいつは昔から恥ずかしがりやな娘だったからなあ」

「……今の会話のどこにそんな要素があった？」

俺がそう言うと、伯父さんは逆に意外そうな顔を俺に向けて、

「恥ずかしがりやで口下手だから先に手が出るのだとは考えないのか？ あいつは男っ気がない環境で育ったからな。男に対する接し

方がちよっとだけ不器用なのだ」

「ちょっと？ ……俺とあなたの思考回路には致命的な食い違いがあるようだ」

「父親が言うのだから間違いないさ」

「あんたほど説得力のない父親は他にいねえよ」

嫌味をたっぷり塗りたくってそう言うと、伯父さんは笑って、

「実は私もそう思っていた」

「……ったく」

結局、完全に話を逸らされてしまったようだ。

(……ま、焦って聞き出すことでもないか)

そう結論付けて、伯父さんの後をついていく。

それに……予感があった。

伯父さんが先延ばしにしたその話、伯父さんのこと、俺の両親のこと。

それらはきつと近い将来、黙っていてもわかる日が来るのだろうと。

それを知ったとき、俺の生活がどう変わるのかはわからない。別に何も変わらないのかもしれない。

ただ、どちらにしても、今はまだこれまでどおりに暮らしていてもいいだろう。

それが伯父さんと俺の両親との約束だったらしいから。

そうして俺と伯父さんは再び他愛のない会話を交わしながら、人気のない帰路を歩いていった。

1年目12月その3

.....

十二月中旬のとある月曜日。

「あー、先生います?」

二時間目の休み時間。歩は保健室のドアをノックして小さくスライドさせ、中をチラッと覗き込んだ。

そこからだと養護教諭のいる机を見ることはできなかったが、
「いますよ」

中から声がしたので、歩はホツとしてドアを開く。

「どうしました、神崎くん」

養護教諭の山咲晃はいつもどおりの白衣姿で、窓際の机の前に両足を組んだ格好で座っていた。右手には資料らしきものを持ち、左手にはマグカップ。漂ってくる香りからしていつもどおりのコーヒーだろう。

そのまま縁なし眼鏡の奥の一見無感動な、それでも長く付き合った者には十分に感じられる優しさを含んだ瞳を向けてくる。

歩は言った。

「頭痛の薬をお願いしますー。今日は朝から調子が悪くて……」

額を押さえ、頭が痛いというジェスチャーを試みせる。

「頭痛ですか」

晃は手元の資料を机の上に置いて少しゆっくりとした動作で立ち上がると、歩のそばまで行ってその額に手を当てる。

「熱が少しありますね。ひどいですか?」

「いえ、それほどでもないですー」

「そうですか」

晃は小さく頷いて、薬の入っているガラス棚へと向かう。

「では普通の風邪薬にしておきましょう。朝食はきちんと摂りましたか？」

「はい。……あの。オブラートは」

粉末状の薬を受け取った歩は窺うように梟を見たが、

「ありません。そのまま飲んでください」

「……はい」

歩は言われたとおりコップに水を汲み、少し顔をしかめながら苦い薬を口の中に入れると、コップの水で一気にそれを喉の奥に流し込んだ。

「……二がい」

歩はさらに顔をしかめると、すぐにコップにもう一杯水を注ぎ、口の中に僅かに残った薬を完全に流し込むと、ふうと息を吐いた。

そんな彼女の様子を横目で見ていた梟は小さく笑みを浮かべて、

「よく効く薬は苦いものらしいですよ。念のため楽になるまで休んでいてください。ベッドはどちらを使ってもいいです」

と、言うのと、再び机に向かって先ほどの資料を手を取った。

彼女が忙しそうであると悟り、歩は速やかに言われたとおりのベッドへと向かうと、カーテンを閉め、畳むようにして置いてあった毛布と掛け布団を広げてその中に潜り込んだ。

（あつたかい……）

今日は外が冷え込んでいることもあって、保健室のこの温もりはまさに楽園だ。今日ばかりはこの頭痛に少しぐらい感謝していいのかもしれない、なんて、歩はそんなことを思った。

（あ、制服脱がなきゃ……）

思い出し、上半身だけ起こして上下の制服を脱ぐ。少し皺になってしまったところを伸ばし、綺麗に畳んで再び布団の中に潜り込んだ。

肌当たる毛布の感触が心地よい。

目を閉じる。

ストーブの上のヤカンが鳴らす、シユンシユンという音が耳に心

地よい。この学校で校舎に備え付けられているもの以外に暖房器具が置いてあるのはこの保健室だけだ。そのストーブがやや古いタイプのものだったり、水の入ったやかんを加湿器代わりにしたりしているのは養護教諭である晃の趣味らしかった。

やがて眠気が襲ってくる。

抵抗する理由もなかったので、歩は素直にそれに身をゆだねることにした。

彼女が再び目が覚めたのは昼休み。

薬が効いたのかさつきまで頭の中心を襲っていた痛みはだいぶ治まっていたが、とりあえず予鈴が鳴るまでは布団にくるまっていることにした。

と、そこへ、

「起きていますか？」

カーテンが静かに開いて晃が顔を出す。

「あ、はい。起きてます」

「入りますよ」

晃はそう言っただけでカーテンを後ろ手に閉めると、ベッド脇の椅子に腰を下ろした。カーテンの向こう側に人の気配はない。昼休みの保健室には珍しく誰も来ていないようだった。

晃はまず歩の額に手を置いた。どうやら熱も下がっていたようで、「五時間目からは出られそうですか？」

「はい。ちゃんと出ますー」

「そうですか」

そう言っただけで席を立つのかと思いきや、晃は座ったまま、間を取るように手にしていたコーヒークップに口を付けた。

「どうやら何か話があるらしい、と歩は気付いて、

「もしかしてお小言ですか？」

「冗談交じりにそう尋ねると、晃はコーヒークップを手近なテーブルの上に置いて、

「どうですか？ 不知火くんと一緒の新しい生活は？」

「え？」

歩は少しビックリした。

「どうして知ってるんですか？」

それはまだ話してはいないはずのことだった。あるいは優希が話したのだろうか、歩が続けてそう尋ねようとすると、それよりも先に晃が口を開いて、

「神村さんから聞きました。キミが不知火くんの家に居候することになったとね」

「あ、そうだったんですかー。……でも、あれね？ 沙夜さんはどうして知ってるんだらう？」

「さあ、そこまではわかりませんが」

晃は小さく首をかしげながらも、

「何にしる、最近ここに来ることが少なくなったということは元気でやっているようですね」

「あ、はいー」

確かにそれ以来、歩が保健室に顔を出す回数は目に見えるほどに減っていた。それがたまたまなのか環境が変わったおかげなのかはまだわからないが、少なくとも晃はそれを良い傾向と捉えているようだ。

歩は言った。

「優希さんの周りの人もみんな優しいです。優希さんの妹さんも、従姉の人も」

「ああ、そうか。不知火くんの家はご両親がいないのでしたね」

「あ、知ってるんですか？」

「ええ。彼とはこの学校以外のルートでも少し付き合いがありました」

「へえ……」

歩にとっては初耳だった。もちろん目の前の養護教諭が由香の母親の昔馴染みである、なんてことを彼女が知るはずもない。

「まあ、とにかくキミが元気になったようで良かったよ」

晃の話はそれで終わりのようだった。彼女はゆっくりと椅子から立ち上がると、テーブルの上に置いたコーヒーカーップを手に取る。

そして、

「そうそう」

背中を見せたところで思い出したように振り返る。

「クリスマスは彼氏と何か予定でも？」

「あはは、彼氏なんているわけないですよー」

歩が即答すると、晃は真顔で首を傾げて、

「そうですか。最近の高校生は遅れているのですね」

「私、実際は中学生ですし……」

「周りに年上の男の子がいっぱいいるのですから、上手く甘えて貰がせるといいですよ」

と、冗談なのか本気なのかわからない顔で言う。

「むう。それじゃあ私、まるつきり悪女じゃないですかー」

歩が軽く抗議の声を上げると、

「あの不知火くんを言葉巧みに懐柔したぐらいですからね」

「うう、言いがかりです……」

「冗談ですよ」

小さな笑みを漏らし、晃が自分の机へと戻っていく。歩は苦笑しながらそれを見送ると、とりあえず布団を出て制服に着替えることにした。

(クリスマス、かあ)

乱れたシーツ、毛布、掛け布団を綺麗に直しながら、今朝、雪が口にしていたクリスマスパーティーの話の思い出す。

そして、

(……そのほうがいいな)

先ほどの晃の言葉を思い出し、そんなことを心の中で呟いた。

今まで彼氏が欲しいなんてことを考えたことは一度もない。まったく興味がないというわけではなかったが、今はそれよりも家族や

兄弟のような存在を求める気持ちのほうが強かった。だから、クリスマスはその人たちと過ごすことができるということは、今の歩にとっては彼氏と過ごすクリスマスよりもきつと嬉しいことだ。

(楽しみだな、クリスマス……)

それは偽りでも誇張でもない、彼女の心の底からの思いだった。

.....

桜花女子学園の放課後。

「雪ちゃん。一緒に帰りましょ」

鞆を持ってそう声をかけた瑞希に対し、雪は不思議そうな顔で振り返った。

「瑞希ちゃん部活は？」

「今日はお休み。部長と顧問の先生がどっちもいなくてね」

と、瑞希は答えた。

彼女の所属する合気道部はこの学校の武道系の部活の中では比較的真面目に取り組んでいるほうだが、それでもスパルタというにはかなり遠く、あくまでもほどほどの雰囲気の中で行われている部活である。だから顧問がいなければそれなりにだらけるし、部長もいないとなれば休みになったとしても何ら不思議はないのだった。

それを聞いた雪はニツコリと微笑んで、

「そうなんだ。じゃあ一緒に あ、でもちよつと待ってて？ 私、音楽準備室の鍵を返しに行かなきゃならないから」

そう言って手にしたキーホルダーを瑞希の視線の先にぶら下げてみせる。

「音楽準備室？」

その言葉を聞いた瑞希は少し考えて、
「……そう。なら私も付き合おうわ」と、言った。

瑞希がそう答えたのはちょっとだけ理由があつて彼女たち二人はどちらも選択授業で音楽を履修している。音楽の担当は非常勤の若い男の教諭だったが、そこそこカツコ良くて独身、さらに非常勤とはいえ女子高の教諭となれば色々な話の種にされることも多い。

つい先日。

その音楽教諭が雪に付き合ってくれと告白したらしい、という噂を瑞希は耳にしていた。

もちろん瑞希もいきなりそれを鵜呑みにしたわけではない。彼女を見る限りその音楽教諭は人間的に問題がありそうには見えなかつたし、勝手に噂的にされてしまうその境遇に対してむしろ同情的ですらあつたから、その噂についても最初はどっちかという懐疑的だったのだ。

が、しかし。

その噂を聞いてからというものの、確かにその教諭の視線が不自然に雪に集中していると思うようになった。気にしなければ気付かない、ただし気にしてしまうと明らかに不自然な程度に。

そうしてそのうち、どうやらその噂が本当なのではないかと思うようになっていたのである。

(噂は噂、だと思つてただけど……)

そしてこの日、職員室の入り口から雪とその教諭の様子を眺めていて、瑞希はさらにその疑いを強めることになった。

「失礼します」

雪が職員室の中に向かってペコッと礼をして出てくる。

「お待たせ。……瑞希ちゃん？」

「え？ あ、ううん」

雪の動きを追ってきた音楽教諭と視線が合つて、向こうから視線

を逸らしたのを確認し、瑞希はようやく雪の言葉に返事をした。

「なんでもないわ」

「？」

小首を傾げる雪。

そんな彼女に悟られないようにと、瑞希はすぐにその場で踵を返し、

「じゃ、行きましょうか」

そう言って歩き出すと、雪はそれ以上追求することもなく彼女の後に続いた。

玄関で靴を履き、外へ出て校門へと向かう。

彼女たちにとっては徐々に二人きりの下校だった。瑞希が部活に入ってからというもの一緒に帰ること自体あまりなくなっただし、たまに雪が部活を見に来て一緒に帰るときは他の部員と一緒にいることがほとんどだったのだ。

その途中、

「ねえ、雪ちゃん。あの先生に告白されたって本当？」

黒のロングコートのポケットに冷たくなった手を収め、白い息を吐きながら瑞希は結局そう尋ねていた。……元来、回りくどいやり方が合わない性分なのである。

「え？」

案の定、雪はきよとんとした顔をする。

「そんな噂を聞いたものだから」

「それ、先生の冗談のこと？」

「冗談？」

「うん」

「本当に冗談だったの？」

瑞希がそう確認すると、雪はクスクスと笑って、

「冗談じゃないとそんなこと言わないよ。だって先生だもの」

「……」

むしろ生徒に対して冗談でそんなことを言うほうがどうかしてる、

と、瑞希は思ったし、実際には冗談ではなかったのだらう、とも思う。雪が冗談と解釈したので、向こうも最終的に冗談に紛らせてしまったというのが真実のような気がした。

「寒いね。ホワイトクリスマスになるかな？」

そう言って無邪気に微笑む雪に、

(本当に、わかってないのかしらね……)

と、瑞希はちよつと興味を引かれて、

「雪ちゃんは、男の子には興味ない？」

「？」

突然の質問に、雪は当然のように不思議そうな顔をした。

それでも、うーん、と考えて、

「あるよ。どうして？」

「ううん。ちよつとね」

と、瑞希は曖昧に返して、

「じゃあ……好きなタイプは？」

「男の子みたいなこと聞くんだね」

と、雪は可笑しそうに笑った。

そう言われて瑞希もそのとおりだなと思い、苦笑しながら、

「いつもはどうやって答えるの？」

「そのときによって少し違うよ」

雪は視線を地面に落として考える。

そしてすぐに、

「一番大事なのはね。私のそばにずっと居てくれる人、かな」

「それだけ？」

「他にもあるよ。優しくて、カッコ良くて、あとお金持ち」

「冗談っぽく笑いながら雪はそう言った。

「なるほどね」

それはそうであるに越したことはない、と、瑞希も思う。

雪は続けた。

「でもやっぱり最初のが一番大事かな。好きな人とはいつも一緒に

いたいもの。それだったら貧乏とかでも別に構わないの」

「あら。ずいぶんと優等生な発言ね」

瑞希はからかうようにそう言った。

「でしょ？ だからね。今は幸せだよ」

「？」

瑞希が怪訝な顔を見ると、

「好きな人と一緒に暮らせてるから」

「……誰のこと？」

尋ねると、雪はちよつとだけ口を閉じ、それから横目にチラッと瑞希の顔を見て、

「瑞希ちゃん、かも？」

「……それが歩でも好ましい発言じゃないわね」

瑞希は苦笑する。

それ以上は聞かなかった。

（わかりきったことを聞いても、ね……）

優希の名を口にしなかったのはもちろん意図的なものだ。

（ホント、どこまで本気なのかしら）

気付かれないように小さなため息を吐く。

……瑞希はこの従妹のこういふ部分に対して、ある種の不安のようなものを感じていた。

いくら仲が良いとはいえ、高校生になっても自分の兄のことをためらいなく“好きな人”と言えてしまうこと。

その違和感。

親がなく、二人きりの兄妹ということ、ある程度仕方ないのかなと思っていたが

（いくらなんでも、極端よね）

彼女がその兄に寄せる信頼と献身。それは兄妹としては 仮に恋人だったとしても説明しづらいほどのものだ。瑞希は感じていた。もちろん普段はそれほど盲目的に信奉しているわけではない。小言を言うこともあれば、小遣いアップの要求を適当にあしらったり

することもある。

が、瑞希が感じているのはそういう小さなことではなく、もっと大きな部分の話なのだ。

例えばの話。もしも優希が世間からどう非難されてもおかしくないほどの犯罪をおかし、それで逃げ回る生活になったとして。それでも雪は、もしかすると自分の周りのものをすべて捨てて彼に付いていくのではないだろうか、と、そんな風に思ってしまうのである。……もちろんそれは瑞希の勝手な想像であって、真実であるかどうかは定かではない。それに雪はもともと本心と冗談の区別が付け難い喋り方をするので、その想像が的外れである可能性もあるにはあるのだが

(どっちにしろ、こんなじゃ彼氏なんて当分できないんでしょねえ……)

「……あ、そうだと。」

雪が何か思いついたような顔で瑞希を見る。

「どうしたの？」

瑞希がそう尋ねると、

「瑞希ちゃんにはまだ話してなかったよね。クリスマス、何か予定ある？」

「予定？　ないけど？」

「よかった。クリスマスはウチでパーティをしようかと思って」

「パーティ？　四人で？」

瑞希の言った四人と言うのはもちろん、優希と歩、雪と彼女自身のことだった。

が、雪は首を横に振って、

「うん。直ちゃんと由香ちゃんと、他にお友達も誘って」

「あら、結構大人数になるのね。大変じゃない？」

瑞希がそう言うと、

「うん。だから瑞希ちゃんにも手伝って欲しいな、って」

「……なるほどね」

苦笑する。

もちろんこの従妹にアテにされることは彼女にとって不快なことではない。

「そんなに期待されちゃ応えないわけにはいかないわね。でも、雪ちゃんほど料理上手くないから、みんなから苦情が出ても知らないわよ」

「ふふ、冗談ばかり」

じゃあお願いね　という雪の言葉に頷いて、瑞希は薄曇りの空を見上げた。

(……雪ちゃんの彼氏の心配する資格なんてない、か)
自分だってクリスマスに予定がないと即答できてしまうのだからと。

瑞希は笑って、

「楽しいクリスマスになるといいわね」

「うん」

そうして二人は冷たさを増した冬の風の中、彼らの家に向かって歩いていった。

1年目12月その4

どうしてそんな突拍子もないことを思いついたのだろうか。

永遠に続くかのようなその長い階段を最初は一段飛ばしで登っていたが、すぐに疲れてやめてしまった。

見上げる先、階段の終着点辺りから吹き付けてくる風は相変わらず冷たい。空の雲は数日前よりも厚みを増しているような気がした。そついや最近はずっと太陽を拝んだ記憶がない。

階段はまだ三分の一ほど残っている。ゼーゼー言うほどではないが、運動不足がデフォルト値の俺にとって階段を登るといってこの単調な作業はあまり楽しいことではない。

「今年も初詣はパスだな……」

雪のヤツは毎年のように一緒に行かないかと誘ってくるのだが、俺は今まで一度もあいつと初詣に行ったことはない。理由は色々あるのだが、とりあえずこの寒さと人ごみ、そして年寄りに優しくないこの長い階段も理由の一つだ。

そんな俺が今回、わざわざこの階段を登っているのにはもちろん理由がある。

(神社つてのは高いところがないとダメって決まりでもあんのかね) そりゃ神を祭るところなのだから低いところに作るのは問題があるのかもしれないが、先ほども言ったようにこの高さは年寄りの体にはこたえるだろう。もちろんエスカレーターやエレベーターなんてものはない。

こういう地味な神社に参拝に来るのは年寄りのほうが圧倒的に多いはずだというのに。

「それともこれはアレか。年寄りの体力を地味に削ることによって自然死させ、高齢化社会の難しい問題を一気に解決しようという姥捨て山的なアレなのか」

「違います」

驚いたことに、俺のこの完璧でブラッくな推論に異論を唱える者がいた。

「そうは言うが、この階段の長さは確実に命を削るぞ……」

「それは単に運動不足だからでしょう」

「俺は毎日少なくとも千歩は歩くように心がけてる」

「少なすぎます」

「なるほど。つまり君はアレか。この俺が運動不足だと、そういうことが言いたいわけか？」

「最初からそう言ってますけど」

「……そうか」

俺はコホツと咳払いして見上げた。

「それはそうとこんばんは、神村さん」

「……」

箒を手にした神村さんが、いつもの無表情で俺を見下ろしている。見下ろしている、といっても別に見下した視線を向けられているというわけではなく、単純に神村さんの身長が三メートルほどあって、俺よりも視点が高いというだけのことだ。

「三メートルもないです」

「悪魔狩りつてのは心も読めるのか？」

「不知火さんが口に出しているだけでしょ」

「ちなみに直斗は百六十二センチしかない」

「知ってます」

「つまり神村さんは直斗の二倍近く」

「ないです」

早い。

「それはそうとこんばんは、神村さん」

「……」

階段の途中で見上げる俺を、神村さんは完璧に無表情で見下ろしていた。

「なにがなんでも挨拶はしてくれないわけか」

「まだお昼ですから」

「神村さんは昼には挨拶をしないのか？」

「少なくとも『こんばんは』とは挨拶しません」

「じゃあ、こんにちは」

「……」

無言。

(……これは手強い)

どうにか会話を成立させようという俺の努力も空しく、神村さんとの間にはまったく会話らしきものが成立しなかった。こっちのペーすに巻き込んで糸口を掴もうという作戦はどうやら完全に空振りに終わってしまったらしい。

「懺悔したいのならここでではなく教会へどうぞ」

「……どういう意味だ」

無然とする。

神村さんは俺を犯罪者か何かと勘違いしているのだろうか。

「何か用ですか？」

先ほどの言葉が本気だったのか冗談だったのかを確認する間もなく、それでもようやく本題に入れそうなきっかけを神村さんのほうから差し出してくれた。

……表情と口調は相変わらず無感情だ。

俺は言った。

「今日はいい天気だな」

「用がないのなら帰ってください」

「うお！ ちょっと待ってください！」

踵を返そうとした神村さんを必死に呼び止めて、俺は再び咳払いをする。

「冗談冗談。ちゃんと用があるんだ」

「なんですか？」

「神村さん、二十四日は暇か？」

「暇じゃないです。学校があります」

取り付く島もない。

いや、これは俺の聞き方も悪かったか。

「学校が終わった後、空いてる時間があるかってこと」

改めてそう聞くと、今度は少し間があった。

「ないことはないです」

「なるほど」

つまり用件次第ということだろう。

俺は真面目に用件を切り出した。

「二十四日、ウチでクリスマスパーティーをやるんだ。直斗とか呼んでな。で、よかつたら神村さんも一緒にどうかかって」

そう。俺が今日ここにやってきたのは、数日後に控えたクリスマスパーティーに神村さんを誘うためだった。直斗の名前を真つ先に出したのはもちろん意図的で、おそらく俺たちの間で一番交流の深いあいつがいれば、彼女も顔を出しやすくなるだろうと考えたためだ。もちろんこんなことは学校で話をすればいいのだが、それだと、

『いやです』

の一言で逃げられてしまいそんな気がしたので、こうして逃げ場のない神村さんの住処までやってきたのである。

いわゆるひとつの“誠意”ってやつか。

「いやです」

「……だよなあ」

結果は同じだった。

いくらなんでもいきなりすぎるってのは俺も気付いてた。

しかし、なんというか。

「あのだ」

神村さんがもともとこういう人であることは俺もわかっている。

が、いくらなんでも素っ気無さすぎやしないだろうか。

そう思い、俺は聞いてみることにした。

「俺、神村さんに何か悪いことしたっけ？」

「なんです?」

そこで初めて、神村さんの表情が怪訝そうに動く。

「いや。俺、もしかして神村さんに嫌われてない?」

「いいえ。嫌いになるほど親しくないですから」

「あー」

喜ぶべきか悲しむべきか。

「じゃあ今のところ、好きか嫌いかと言ったら?」

「嫌いです」

「……」

完全にハートを抉られた。ああ、いや、女子に嫌われるのは結構慣れっこだったりするのだが、彼女の真顔と淡々とした口調で言われてしまうと余計に効く。これならきつい口調で“死ぬ”とか罵倒されてしまっほうがまだマシだ。

……いや、それはそれできついかと。

「好きではないので」

「?」

「だからどつちかと言えば嫌いです」

俺は顔を上げて尋ねてみた。

「普通か嫌いかで言えば?」

「普通です」

なるほど。そういうことか。

「じゃあ普通かカッコイイかで言えば?」

「普通です」

「優等生か不良かで言えば?」

「……不良です」

「ラブかライクかで言えば?」

「ヘイトです」

「……」

なんとという鉄壁少女。

「冗談です」

そう言って神村さんは今度こそ踵を返し背を向ける。

「他に用がないのなら帰ってください。ここはあなたにとって居心地の良い場所ではないはずですよ」

「……」

先日の伯父さんの言葉　この神社の奥が“御門”という悪魔狩りの本部であるという話を思い出す。彼女の言葉をそれを踏まえた発言なのだろう。

だが、俺はそんな彼女に答える。

「別にそんなことないけどな。まあ、中に俺たちを狙ってる連中がいるらしいのは知ってるけどさ。でも神村さんは俺たちの敵じゃないんだろ？」

「……」

「悪かったな。掃除の邪魔をして」

そう言い残して階段を下りようとする時、

「不知火さん」

振り返ると、神村さんはこちらに向き直っていた。

「……どうして私を誘おうと思ったのですか？」

「ん？」

その表情。

微かな戸惑いの色があるように見えた。

俺は正直に答える。

「ただの思いつきだよ。でもまあ、神村さんと仲良くなりたかったからかな」

「どうしてですか？ 私に近付いても不知火さんにメリットはありません」

「どうして、って」

そんな彼女の言葉に俺は苦笑した。

「神村さんが可愛いから　ああ、待て、これは冗談だ。んー、なんだろな。根拠はないんだけど興味を引かれるというか、この人は

どういふ人なんだろうって気になるっーか」

「私はこういう人です」

素っ気無い言葉。

だけど、俺はそんな彼女の真剣な表情が妙に可笑しくて、つい笑い笑ってしまった。

「おかしいですか？」

相変わらずの無表情。けどその中でも多少の感情の動きが隠れていることに俺は気付いた。

「ああ、いや、すまん。真面目な顔で言うから」

俺はそれでも笑いをこらえながら、ほんの少し　　本当にちよっ

ぴりだけ不思議そうな神村さんの顔を見つめると、

「でもアレだ。そういう神村さんを見ると、なんか笑わせてみた
いって気になる」

「意味もなく笑顔にはなれません。……あ」

と、神村さんは少し黙り込んだ。

「？」

少しの空白。

再び顔を上げて、

「不知火さんは楓さんと同じことを言うんですね」

「……は？」

俺が怪訝な顔を見ると、神村さんはほんの少し、注意して見ていなければ気付かない程度に表情を緩めて言った。

「二十四日はお正月の準備が忙しいので行きません」

「……そっか。じゃあ仕方ないな」

同じ断られるのでも、理由があるのとないのではだいぶ違う。

俺はそんな彼女の返答に満足した。

「不知火さんは、元日は初詣に来ますか？」

「え？」

「神楽を舞います」

「かぐら？　神楽ってあの、巫女さんが踊ったりするやつ？」

正直言つて、あまり良く知らない。

「神村さんがやるのか？」

「はい」

頷く神村さん。

はつきりとは言わないが、どうやら誘われているらしかった。もしかすると俺がクリスマスに誘ったから、そのお返しという意味なのかもしれない。

俺はその気持ちを素直に嬉しく思つて、

「わかった。じゃあ見に行く」

当然のようにそう答える。もちろん先ほど初詣をパスしようと考えていたことはとくに忘れた。

「そうですか」

神村さんは相変わらず素っ気ない。が、今となつてはそんな仕事すらちよつと可愛らしく思えてきてしまった。

(無愛想つていうより、もしかしたら不器用なのかもなあ……)

体育祭で玉入れに苦戦していた彼女の姿を思い出すとますます可笑しくなつて、こらえ切れずにまたまた笑みをこぼしてしまう。

「なんですか？」

「いや。……ああ、そうそう」

そして俺はそんな神村さんに向かって言った。

「さっきの訂正。やっぱ冗談じゃない」

「なにがですか？」

その言葉の意味を求めるように、神村さんが真っ直ぐに俺を見詰めてくる。

俺はそんな彼女の瞳を見つめ返して、

「仲良くしたい理由。神村さんが可愛いから、つてやつ」

「……」

無反応だった。が、俺もただ本心を言っただけで、別に良い反応を期待していたわけじゃない。

「んじゃ、また明日」

俺は今度こそ彼女に別れを告げて、それから少し苦笑すると、

「いや、学校で会うことはあまりないか。ってことで、またそのうちな」

「そうですね」

神村さんもほんの少しだけ表情を緩めると、まったく足音の立たない動きで俺に背を向け、その手に箒を携えたまま境内のほうへと消えていった。

1年目12月その5

「おい！ ビール持ってこーい！」

「おお、んじゃあたしは日本酒！」

「ねーよ！ んなもん！ つかお前ら未成年なんだから少しは遠慮しろ！」

「まあまあ。年に一度のことなんだし」

「そっだそっだ〜！」

「うっせえ！ てめえら絶対年に一度じゃねえだろ！」

「……うっつ、不知火がいじめるよ〜！」

「ダメだよ、優ちゃん。女の子泣かせるようなことしたら」

「俺が悪者かよ！ おかしいだろッ！」

「そのとおり！ お前がすべて悪 いてッ！」

「あれれ？ 頭がフラフラ……」

「あら？ ……ちょっと誰よ、歩に変なもの飲ませたの」

「さつき将太がちょっと混ぜてたけど」

「あ、直斗、お前チクってんじゃ いてッ！ おつまえな！ さ

つきからポコポコ殴りやがって！」

「殴られるようなことしてっからだろうが！ 直斗！ お前も見てたなら止めるって！」

「止めようと思ったんだけど、もう飲んじやってたんだよね」

「……あれ？ どうしたのみんな、騒がしいね」

「おお、由香っち〜、酒とつまみ持ってきて〜！」

「え。えっと……美弥ちゃん、顔が真っ赤だけど……」

「おろ？ 不知火の顔が三つある……」

「とつとと潰れちまえ」

「ふふ。はい、お水だよ」

「おお、さすが雪ちゃんは気が利くね〜。ぶつくさ言ってるだけの兄貴と違ってさあ」

「なんで俺がお前なんぞに気を利かせなきゃならんのだ……」
「……さすがのあんたもこのメンバーだと抑え役なのね」
「仕方ねーだろ。俺が止めなきゃ誰がこの二人を　　って！」
「あうー、このお水、なんだか体がポカポカしますー」
「だああああ！　おい、雪！　歩からそいつを取り上げる！」
「ほら歩ちゃん。今ホントのお水持つてくるからね」
「たはは、ごめんなさいー」

……ご覧のとおり、ウチは今クリスマスパーティーの真っ最中だ。
そしてご覧のとおり、すでに収拾がつかない状態となっている。最
初のうちは女性陣の作ったオードブル的なものを食べながら雑談で
盛り上がっていたのだが、話のネタがなくなってくると、出てきた
のは誰が買ってきたのか不明なアルコール類だ。

そして一時間後。
この惨状である。

「……ったく」

顔を真っ赤にしているのは将太と藍原、それに歩の三人。俺だっ
て別に品行方正な優等生ではないから、他人に迷惑をかけない範囲
での飲酒まであーだこーだうるさく言うつもりはないが、この二人
のそれははつきりと（主に俺に）迷惑がかかっている。

これで気分が悪くなったとか言い出したらそのまま外に放り出し
てやるうかと思っているぐらいだ。

床の上に転がった缶を拾い上げ、少し静かになったリビングを見
回す。

ソファでは顔を真っ赤にした歩が気持ち良さそうに転がっている。
目を閉じているが、寝ているのか休んでいるだけなのかは判別不能
だ。

テーブルでは将太と藍原が未だに酒だかジュースだかわからない
ものを飲んでいる。直斗と瑞希がそれぞれ話し相手になっていたが、
よくよく見ると適当に相づちを打っているだけのようだ。

由香は殊勝にも使い終わった皿を洗い始めている。
そして雪はといえば

「優ちゃん」

「あ？ なんだお前、どっか行くのか？」

部屋に戻って着替えていたのか、雪は厚手のコートにマフラーと
いう防寒装備だった。

「うん。洗剤を切らしちゃって」

「ああ……」

そう呟いて台所を見ると、由香がちょっと困った顔で笑っていた。
外を見ると、もう真っ暗だ。

俺はゆっくりと腰を上げて、

「用意してくるからちよっと待ってる」

「え？ ……あ、うん」

と、雪はちよっと嬉しそうな顔をした。

外には白いカケラがチラチラついていた。年に一度、この時期にだけ
ライトアップされる駅前通りのイルミネーションは、その下を歩く
人々を幻想的に照らし、暗い夜空に舞い散る雪の結晶をきらきらと
輝かせる。

道を歩くカップルは肩を寄せ合い、年に一度の聖夜にそれぞれの
思い出を刻み込んでいくのだろう。

「ホワイトクリスマス、か」

俺が夜空を見上げながらそう呟くと、隣を歩く雪は空から落ちる
白いカケラを手のひらに乗せて、

「ホントだね」

「こんな夜に隣を歩いているのが、こともあろうにただの妹とはな
あ
」

「ふふ」

そんな俺の言葉に、何が嬉しいのか雪は満面の笑顔を浮かべて、
「ただの妹じゃないよ？ 可愛い妹、でしょ？」

「うつせえ」

こいつにしては珍しく浮かれた感じの冗談に、俺はその額を指先で軽く小突いてみせる。

雪は額を押さえて、それでもやはり楽しそうに笑った。

「……あ、そうだ。優ちゃん」

目的地のスーパーへ向かう途中、雪がとある店の前で立ち止まる。

「せっかくだから、こっちも今日、済ませちゃおっか？」

「ん？」

雪が指差していたのはCDショップだ。

「欲しいって言ってたよね。んー、なんだったかな。ナントカって

いうバンドの」

「ナントカって、一文字も合ってねーよ。英語だし」

「うん。そのナントカさん」

「だから一字も合ってねーって。つか、言っただろ。金が無くて次

の小遣い待ち」

「だから、ほら」

俺の口元に人差し指をピタッと当てて、雪はニコッと微笑んだ。

「誕生日プレゼント、だよ」

「ん。……ああ」

そう。

今日はクリスマスイブ。

そして明日はクリスマスであるとともに、俺とこいつの十六回目の誕生日だった。

二人並んで店に入り、目的のCDを買って外に出る。俺はその場でそのままCDを受け取るうとしたが、雪に怒られてしまった。

「あとで、ね。そのためにちゃんとプレゼント用に包んでもらったんだから」

「あんま意味ねー気がするんだが」

俺が抗議の声を上げると、雪は、

「そういうものだよ」

とだけ、言った。

次に向かったのは女子向けのアクセサリ類が置いてあるファッションショップ。

そこで雪が手に取ったのは針金よりも少し太いぐらいの金属で作られた、丸い円の内側に三角形の入った 数学的に言つと円とそれに内接している正三角形。そんな形の小さなペンダントだった。

色は銀一色。何の工夫もない。

値段はピッタリ三百円。

……もしかすると俺の懐事情を考慮してくれたのだろうか。だとすると少々情けないような気もしたが、金が無いのは本当なのでここはその気遣いに素直に感謝しておくことにする。

ただ、それもプレゼント用に包装してもらつと、雪は充分に嬉しそうな顔をしていた。

(ま、こいつの場合は何を付けてもそこそこに見えるからなあ……) 文化祭の性転換喫茶 学生服のときだつて、後で聞いた話によれば男子からも女子からも大好評だったらしい。何を着ても付けても良く見えるつてのは羨ましい特技だ。

ちなみに歩はそのとき体中に包帯を巻いて“ミイラ男”をやつてたらしい。それは男装じゃないだろと思つたが、そこは敢えて突っ込まなかった。天才の考えることは凡人にはよくわからん。

「似合うと思う?」

「値段分ぐらいには似合うんじゃないのか?」

素っ気無くそう返すと、

「ありがと、優ちゃん」

「……おいこら。お前の耳には今の俺の言葉が褒め言葉かなにかに聞こえたのか?」

「うん。違つた?」

「……」

確信を含んだ雪の口調に、俺は返す言葉も無く。

こいつは大体いつもこうだ。いつも俺の本心を見抜いているかの

ような態度を取る。

「勝手に勘違いしてる。……ほら、行くぞ。由香のやつが待ちくたびれてる」

「うん」

俺が歩みを速めると、雪はニコニコしながら後ろを付いてきて、そつと俺の腕に手を絡めてきた。

……何年か前。

こんな雪の反応を鬱陶しいと思う時期があった。

中学一年の夏。それは俺がいわゆる“荒れて”いた時期の一番最初の頃と重なっていて、今にして思えば、俺が荒れ始めたのはそれが原因だったような気がする。

俺はその頃あまり家に帰らず、悪友や先輩たちの家を回ったり、時折野宿をしたり。昼間は学校に行かず他校の生徒と喧嘩をしたり、家から持ち出した幾ばくかの金を無駄遣いしたりした。

そういう生活がしたかったわけじゃない。

喧嘩することが楽しかったわけでもない。

ただ、雪に会いたくなかった。

俺を苛立たせるその目を、見たくなかった。

……根拠のないその信頼を裏切ってやりたかった。

自分は信頼に値する人間じゃない、と、そう思い知らせてやりたくて。

その頃の俺には、きつと重すぎたのだろう。

彼女の、俺を信じきっているその瞳。何をしても最終的に正しい方向に向くはずだと、そう確信しているその眼差しが。

もともと俺は小さい頃から妹を守るのは自分の役目だと強く感じていたし、伯父さんからもそう言われていた。だから自分は彼女の

期待と信頼に百パーセント応えなければならぬと思っ
ていて、それはちょうど、俺がその重圧を緩和させる方法も知らず、その重
さに耐え切れなくなつてすべてを投げ出したいと、そう感じ始めて
いた頃のことだつた。

その年の九月から十月にかけては、学校にも家にも顔を出さない
時期が一ヶ月近く続いた。さすがにその間をずっと悪友の家に厄介
になるわけにもいかず、後半は夜のほとんどもを駅のベンチや公園で
過ごした。

変なヤツに絡まれることもあつたが、その頃の俺は悪魔の力に目
覚めていたし、それを使うことにそれほど大きな抵抗もなかつたか
ら問題はなかつた。

そんな、特に楽しかつたわけでもない生活が一ヶ月ほど続いた頃。
俺はとうとう手持ちの金をすべて使い果たしてしまい、仕方なく
一ヶ月ぶりに家の玄関に立つていた。

そのとき俺が考えていたのは、ああ、今にして思えば馬鹿げて
いる話だ。

雪がどんな反応をするのか。

怒る顔。

泣いている顔。

そのどちらにも容易に想像することができて、そしてそのどちらだ
つたとしても、俺が彼女を裏切つたことを証明できるだろうと思っ
ていた。

そうすることで俺はようやく彼女の瞳から解放されると思つた。
長年積み重なつてきた苛立ちから逃れることができるだろうと思
つた。

……ただ。

そんな俺の愚かな希望はあっさりと裏切られる。

俺を出迎えた雪の反応は、そのときの俺にとって、最悪だつ
た。

『……………』

玄関から姿を見せた雪は、憔悴しきった顔をしていた。いつも身だしなみには人一倍気を遣っている彼女が、そのときは目の下に薄っすらと隈を浮かべ、前髪はいつもよりもずっと伸びてあまり整っていないかった。

……だけど。

その憔悴しきった顔で、雪は怒るでも泣くでもなく。

俺を見るなり、一ヶ月前と変わらない“あの笑顔”で言ったのだ。

『おかえりなさい、優ちゃん』

と。

……ああ、思い出したくもない。

その言葉に俺の頭には一瞬にして血が上ってしまつて。

もう何が何だかわからなくなつて。

……どうしてそんな目で俺を見るのか。

……どうして非難の言葉を口にしてくれないのか。

本当に何が何だかわからなくて、それが腹立たしくて

俺はその日、産まれて初めて彼女を殴つた。

拳ではなく平手だったが、それでも覚えていいる限り、二発か三発は殴つただろう。

何事か怒鳴りながら。

正直、何を言ったのかは覚えていない。

ただ、そのときの手の平の感触は今でも鮮明に覚えていて、その感触とともに思い出すのだ。

床にうずくまって泣きじゃくる、妹の姿。

それは俺が家の前に立ったときに望んでいたはずの場面で。

望んでいたはずの場面、だったのに。
それを見た俺の胸には得体の知れないざわめきが沸き起こって
いて。

完全な静寂の中に聞こえる、雪のすすり泣く声。

そのときの俺が感じたものは、彼女の眼差しから逃れることが
できた解放感などでは決してなかった。

……後悔と絶望。

取り返しのつかないことをしてしまったという後悔と、彼女の笑
顔が二度と見られないのではないかという絶望。

まるで気が付いていなかった。

そのことが。彼女の笑顔が二度と向けられないであろうことが、
そのときの自分に、生きる目的を見失わせるほどの絶望感を与えて
しまうということに。

俺の勝手なわがままは、彼女がいつもこっちに笑顔を向けてくれ
ていることが大前提で。

それがなくなったときのことなど、想像すらしていなかったのだ。

俺はそのまま、再び飛び出した。

今思えば、どうしてそれほど思いつめていたのか俺自身にもわか
らない。あの当時の俺に聞いたところできつと明確な答えは返って
こないだろう。

ただ、そのときはとにかく、もうその場にいることはできなくて。
一刻も早く、自分が引き起こしてしまった最悪の場面から逃れたく
て。

何も持たずに家を飛び出してしまうってどうするのか、なんてこと
は考えてもいなかった。……いや、そのまま餓死してしまうのなら
それでもいいと頭の片隅で考えていたかもしれない。

それだけのことをしてしまったような気がしていたのだ。

だけど

『……優ちゃんッ!』

家の門を飛び出したところで俺の足は止まる。

俺が泣かせてしまった雪に。

俺が、俺の都合だけで苦しめ、そして泣かせてしまった妹に抱き留められて。

『……』

言葉を返すことができなかった俺の頭の中は、まだ熱に侵されていた。でもそれは、その直前に感じたものとは明らかに違う性質のものだった。

振り解こうと思えばいつでもできただろう。

それほどに彼女の力は弱々しかった。

だけ。

俺は一步も動けなかった。

まるで金縛りにあってしまったかのように。

背中に当たる、彼女の暖かな温もりに。

泣いて、しまいそうだった。

『優ちゃん』

そして雪は俺の背中に耳を当てて、言ったのだ。
涙声で

すうっと、後ろから体に腕が回される。

背中には暖かな感触。

強く吹き抜ける冷たい冬の夜風の中、その部分だけには確かな温もりを感じて。

俺は思わず立ち止まった。

そしてほとんど無意識に、前に回された雪の冷たい手を包む。

「優ちゃん」

小さくて細い、彼女の手。

背中に耳が軽く押し当てられる。

そして、雪は言った。

「聞こえてるよ。優ちゃんのホントの言葉、いつでも私に届いてるから……」

……そのときに俺は誓ったのだ。

それは兄としての義務、なんてそんな偉そうなものだけでは決してなく。

ただ、彼女が与えてくれる大きな温もりへの、ささやかなお返しとして。

何があっても、彼女は絶対に俺が守るのだと。

……少しの沈黙。

俺はパツと雪の手を離し、顔だけを後ろに向けると、

「なんだよそりゃ。俺が心の中で“似合ってる”って、そう言ったとでもいうのか？」

「ふふ」

雪は俺の顔を見上げ、嬉しそうに微笑んだ。

「あいな」

俺は呆れ顔をしてため息を吐くと、体に回された雪の腕をゆっくりと引き剥がして、

「どうでもいいけど離れろって。学校のヤツらに見られたら半殺し

にされかねん」

「？ 半殺しにされるの？」

「全殺しかもな。……どっちでもいいからとにかく離れる」

そう言っただけで、雪は素直に離れて俺の右隣に並んだ。

そして、ひとたび止んでいた白いカケラがまた夜空に舞い始めたのを見上げながら、

「来年もいい年になるかな？」

「来年も、ってことは、今年はいいい年だったのか？」

「うん。今年はずっと優ちゃんがそばにいてくれたから」

「……」

だけど、未だにわからない。

こいつがどうして、俺なんかにもここまで信頼を寄せられることができるのか。

今となってはもう、その原因など特に気になることではなかったが

「馬鹿。だからそういうセリフは兄貴に向けるもんじゃねえよ」

そう言っただけで、俺は再び指先で彼女の額を小突いてやる。

「でも今の私にはそれが一番嬉しいから」

「今のうちだけだ」

「うん。だから“今”が続くうちはそれでもいいよね？」

「……勝手にしろ」

そう言っただけで俺が再び歩く速度を速めると、やはり雪は少し早足になっただけでついてきた。

「来年もきつといい年だよ、優ちゃん」

「ああ、そうだな。お前が俺の小遣いを増やしてくれればきつといい年になるだろうな」

「それはダメ。優ちゃん、すぐに無駄遣いするから」

「馬鹿言っただけ。俺は貨幣の流通に積極的に一役買ってやっているだけだ」

「優ちゃん、ボランティアに興味があったの？」

真面目な顔で首をかしげる雪に、俺は苦笑して、

「いや、それはボランティアとは言わないと思うが」

「じゃあ無駄遣い？」

「ボランティアだ」

即答すると、雪は可笑しそうに笑って、

「そっか。じゃあ明日は私のお手伝いもしてね。ボランティアで」

「……」

やはり雪のほうが一枚上手だった。

(やれやれ……)

まあ誕生日プレゼントを節約させてしまった分、そのぐらいのこととは文句言わずにやってやるべきか。

そう考えた俺は、いつの間にか腕に回された彼女の手を振り解く気にもなれず。ほんの少しだけ歩調を緩めると、そのままみんなの待つ自宅への帰路を辿っていった。

1年目1月その1

大晦日ってのはたいてい遅くまで起きてるもんだ。昼間には大掃除の残りを片付けて、夕方にはこの日の夕食と正月に使う食料の買い出し。いつもよりも豪華な夕食を終えた後は年末恒例のテレビ番組を見たり、滅多にやることのないトランプなんか持ってきて遊んだり、日が変わる直前になると年越しそばを食べる。

で、除夜の鐘を聞いた後、ようやく一人ずつ自分の部屋へと戻り始める。

最初は瑞希だった。こいつは通常朝練があるもんだから早く寝るクセがついているようで、年越しそばを食べる前からかなり眠そうにしていたが、除夜の鐘が鳴り終わるなりさっさと部屋に引きこもってしまった。

雪と歩の二人はその後も台所で何やらゴソゴソとやっていたが、午前一時近くなると、

「そろそろ寝るね」

と、雪が部屋に戻っていく。

普段から意外と夜更かしな歩がさらに台所で粘ってて（といても別に怪しい匂いとか煙が出てたりとかはしなかった）寝たのがだいたい二時ぐらいだっただろうか。

そして俺はそこからさらに一時間、午前三時ぐらいに部屋に戻って布団に入った。
さて。

ここで少し話は変わるが、人間ってのは通常六時間から八時間ぐらい寝るといらしい。俺の場合は普段から夜更かしなこともあって、朝起きるのが遅い割に、毎日の睡眠時間はだいたい六時間から六時間半ぐらいだ。

六時間。午前三時に寝ていつもどおりの睡眠時間だとすれば目が覚めるのはだいたい九時だ。

ちなみに、神村さんからこの日に誘われたことは覚えていて、初詣にはもちろん行くつもりだった。神村さんが神楽を舞うのは十時半ぐらいだと聞いていたので、九時に起きれば支度と朝食に三十分、神社までは余裕を見て三十分、合計一時間程度だから、さらに十分ぐらいの余裕はある。

と、そんな計算だった。

ただ、そんな俺の計算に穴があったとすれば、二つ。

その日の朝がかなり冷え込んでいたことと、雪のヤツに対して寝る前に『今年は俺も初詣に行く』ということ宣言しておかなかった、ということである。

「……そりゃ、いくら予定が狂ったとしても五時間もずれ込むはずはないわなあ」

腕時計を見ると十五時二十七分。

俺の目の前には木で組み立てられた舞台らしきものが残ってはいたが、左右に立っているかがり火の台にはすでに火が灯っていないかった。

初詣の参拝客も少なくなっている。交通安全のお守りや破魔矢を売っているところにもほとんど人影はなく、巫女服姿の（おそらくバイトの）女の子数人が暇そうにしていた。残念ながらそこに神村さんの姿はない。

「どうしてこんなに日に限って十時間以上も爆睡を……」

ガツクリと頂垂れる。

途中、何度か目を覚ました記憶はあった。ただ、冷え込みがきつかったことで布団から起き上がることができず、二度寝、三度寝と繰り返してしまったのだ。

結局俺が起きたのは、例年よりもかなり遅い時間に初詣に行ってきた雪と歩が、家に戻ってきたその後、彼女らに起こされてようやく、だったのである。

「神村さんには後で謝っとくかあ」

過ぎてしまったことは仕方ない。もちろん彼女には俺がその場にしたかどうかを確認する方法などはなかっただろうし、確認する気もなかったと思うが、一応見に来ることを約束してしまった以上は、謝っておく必要があるだろう。

と、まあ、そんなこんなで。

せっかく来たので、俺は少し神社の境内の中をブラブラすることにする。

まずは挨拶代わりのおみくじを。

(……また小吉か)

おみくじなんてもんはその内容を話の種にするぐらいのもので信じる気持ちゼロパーセントの俺としては、小吉とか末吉とかよりは、大吉とか凶とか、入っているのであれば大凶とか、そういう極端な結果のほうが有難いのだが、どうにもここ数年そういう極端な結果を見た記憶がない。どのくらいの割合で入っているものなのかはわからないが、たぶん引きが悪いのだろう。

(……ああ。そういう意味での運試しにはなってるのかもな)

そういう考えでいけば、今年もあまりいい年になりそうもない、ということか。

それ以上お金を使うのも馬鹿らしいので、適当に歩く。

ちなみにこの神社、結構広い。鳥居をくぐって少し歩くと門があり、そこをさらにくぐっていくと神社の本体(本殿?)があつて賽銭箱が置かれている。そしてそのさらに奥のほうには大きな林が

伯父さんの言葉によればそっちはもう神社ではなく、悪魔狩り総本部の領域ということになるのだろうが 広がっていた。

「……ん？」

そんな風に奥の敷地の方を眺めながら歩いていると、そっちの方からちよつど見覚えのある女性が歩いてくるのが見えた。

(あれ、誰だっけ)

見覚えがあるといつても、しょっちゅう顔を合わせているような人ではない。実際そのときの俺は、その人物をどこで見たのかなか

なかい出し出すことができなかった。

神社の関係者らしく巫女のような衣装を身に纏っていたが女性にしては少し、いや、かなり背が高い。俺よりも少し大柄、百八センチ近くはあるだろうか。大柄といっても横幅はそれほどもなく、細身でしなやかな、イメージとしては女子バレーとか女子バスケの選手みたいな感じだ。

目付きは鋭い。

年齢は二十代前半ぐらいだろうか。

「ん？」

女性が俺の姿に気付く。そして少し視線を泳がせるとすぐに納得したような顔をして俺の方へと歩み寄ってきた。

「不知火優希くん、だったかな」

近くまでやってきてその女性はそう言った。

やはり顔見知りだったようだ。

「……ああ。あんたは確か」

その声と口調で、俺はようやくその女性のことを思い出す。

半年ほど前、例の雪の事件で、最後に楓と一緒に現れた女性

悪魔狩りの一員だ。

名前は確か

「緑刃。本名ではないけれど」

「そうそう。緑刃さんだ」

「今日は初詣か？」

最初に会ったときもそう感じたが、緑刃さんはまるで男のような言葉遣いだった。が、見た目からして男勝りな雰囲気があるので、それはそれでピッタリとはまっている。

「ええ。緑刃さんはこの人なんですか？」

とぼけてそう尋ねると、

「まあ、そういうことになるな。……君に会うのはあの事件以来か」
緑刃さんはそう言って小さく頭を下げた。

「すまなかったな。あのときはお前たちに何の非もなかったはずな

のに」

俺は少し驚いて、

「え。あ、いやまあ、結果的には無事だったわけですし。もう昔の話だから気にしないでください」

そう答えた。

というか、彼女はどちらかという俺たちを助けてくれた側だし、組織の一員として謝っているというのはわかるのだが、正直彼女に謝ってもらってもどうしようもない。

ただ、どうやらいい人らしいということにはわかった。

緑刃さんは『そうか』と言って頭を上げると、

「すまん。今日は私も忙しくて、ゆっくり話をする時間もないんだ」

「ああ、構いませんよ」

すると緑刃さんはもう一度『すまん』と言って、そのまま俺の横を通り過ぎていった。

いや。

「……ああ、そうだ」

そのまま去っていくかと思いきや、緑刃さんは思い出したように俺を振り返って、

「君は確か、沙夜と同じ学年だったかな？」

「ええ。クラスは違いますけどね」

「そうか。まあ私が言うことではないのだが、仲良くしてやってくれ。あまり同年代の友人がいないようなのでな」

「？ 緑刃さんは彼女と親しいんですか？」

そう尋ねると、緑刃さんは一見無愛想にも見えるその顔に意外なほど人の良さそうな笑顔を浮かべて、

「親しい、というより小さい頃から知っているからな。年の離れた妹のようなものなんだ」

「ああ、なるほど」

すんなり納得できた。

緑刃さんは俺に対して背中を向けながら、

「頼む。同年代の話し相手が“アイツ”だけでは、沙夜はそのうち捻じ曲がってしまうからな」

「え？ アイツって？」

そう問いかけようとしたとき、緑刃さんの背中はまだ遠ざかっていて、俺の疑問に答えてくれることはなかった。

「……アイツって誰だ？」

独り呟く。

だが、そんな俺の疑問に答える者は

「もちろん楓のことさ」

……いた。

振り返る。

「……誰だ？」

そこには緑刃さんよりもさらに背の高い、少し軽薄そうな印象の男が立っていた。

(……ぜんぜん気付かなかった)

少し警戒心を高める。

その男が立っているのは俺から二メートルほどの距離。にもかかわらず、俺は声をかけられるまでその存在にまるで気が付いていなかった。

「はじめまして、不知火優希くん。俺の名前は青刃という」

「青刃……？」

「もちろん本名じゃない。美琴 ああ、いや、緑刃と同じさ」

青刃と名乗ったその男は笑いながら、わざとらしく言い間違えてみせた。

(……この男も悪魔狩りの一員ってことか)

楓のことを知っていて、緑刃さんの本名らしきものを口にしたのだから間違いないだろう。

そんな警戒する俺の表情を楽しんでいるかのように、青刃は言った。

「不知火優希」

「え？」

「純血の上級氷魔族である不知火雪の兄ということになっているが、炎の力を操ることから便宜上の兄妹である可能性が極めて高い。力の程度から下級炎魔、あるいは半炎魔であると考えられるが、それを上回る力を見せたという情報もある。こちらの世界に滞在する目的については現在調査中……」

一息でそこまで言って、青刃は楽しそうに笑った。

「これがウチが持つてる君についての概要だ。あとは楓のヤツと何か繋がっているらしいという情報もあるのだが、さて、どう思う？」

「どう思うって……」

俺は少し戸惑った。

悪魔狩りにとって、俺はまだ敵か味方が判別できてない存在のはずだった。それは先日の神村さんの“居心地が良くない”発言からもはっきりしている。

にも関わらず。この青刃という男は組織が持っている“秘密”の一端を意味もなく俺にさらしたのだ。

それが大した情報でなかったとしても、公開する必要のない情報であった以上、俺を戸惑わせるには充分だった。

「別に、どうも思いませんけど」

警戒を強めていたこともあって、俺は殊更ぶっきらぼうにそう返答した。

俺には悪魔狩りに対する敵対心はない。ただ、向こうが俺や雪を危険視しているのはわかっていたから、今のところ向こうの人間で無条件に信用できそうなのは神村さんと楓、入れても先ほどの緑刃さんぐらいで、それ以外の人間は俺にとってまだ心を許せる相手ではない。

「どうも思わないのか」

青刃はそう呟いて少し考え込むような素振りを見せると、

「いや、君がどうやら中級夜魔を二人相手にしてこれを撃退したら

しいという情報をちらつと耳にしたものでな。それが本当だとすると下級炎魔や半炎魔という情報はどうにも辻褄が合わない」

「何が言いたいんですか？」

「ああ、ちよつと待ってくれ」

俺の低い声に青刃は少しおどけたような調子で、

「一つ言っておくけど、俺は君の敵じゃないぞ。君も知つてるとおりうちの組織にも色々な連中がいるが、俺は君たちを敵対視している連中とは一線を画している」

「……」

嘘を言っている感じはあまりしない。が、先ほどの緑刃さんと違って、こっちはなぜかすんなり信用できそうになかった。

(……好き嫌いの問題かもな)

単に好きになれないタイプだと、そういうことなのかもしれない。この手の連中はどことなく胡散臭いというか腹に一物抱えているよ。うな、そんなイメージがあるのだ。

ついでに言うと

「ま、いいか。いや、単にふと思ったただけなんだ。君はひよつとして突然変異種、つまりイレギュラーなんじゃないか、ってね。そう考えれば純血の上级氷魔族の血筋で炎を操るつても充分に有り得る話だ」

……頭が良くて勘が鋭いタイプでもある。

「なにを企んでるのはわかりませんが」

俺はそんな青刃のペースの惑わされないよう、努めて冷静に言葉を返した。

「俺、そんな初対面の誰かもわからない人に何でもかんでもペラペラ喋るほどアホじゃないですよ。そう見えるのかもしれないですけどね」

すると青刃も即座に返してきた。

「俺もただ、最近何かと話題になる悪魔の少年をこの目で見てみたかっただけさ」

「……」

俺は何も言わずに青刃の前を離れる。

敵であるにしろ味方であるにしろ、ここで無駄話をする必要はないように思えた。この妙な男のことについては後で楓か誰かに聞いてみれば済む話である。

「……用心深いのは結構なことだ」

背中にそんな呟きが聞こえたが、結局呼び止められることはなかった。

1年目1月その2

正月の三が日もあつという間に過ぎ去り、冬休みも残り三日となった頃。

いまだに正月ボケを引きずっていた俺は、午前十一時頃になつてようやくパジャマを着替え、階段を下りてリビングに向かおうとしていたのだが、

「ん？ おい、歩。どこ行くんだ？」

玄関で出かける準備をしている歩とばかり出くわした。

歩は顔を上げ、もうお昼だよと笑いながら、

「私はこれから病院だよー」

「病院？ 具合でも悪いのか？」

俺はそう言つて歩の表情を凝視したが、調子が悪そうな気配はない。

「えへへ、定期検査なの」

「定期検査？ そんなのあつたのか」

「えー……」

俺の言葉に歩は不満そうに口を尖らせた。

「ここに来てすぐみんなに説明したよー。月に二回あるって」

「そうか？ わりい。ちゃんと聞いてなかったわ」

「ひどーい」

不満げに言いながらも顔は笑っていて、

「でも、優希お兄ちゃんらしいかな、そういうとこ」

「褒め言葉と受け取っておこう」

「うん、褒めてないよー」

そう言いながら、トントンと履いた靴のつま先で床を蹴る。

「あ、今日はちょっと遅くなるかもしれないから、雪お姉ちゃんにそう伝えておいてー」

「何時頃だ？」

歩は玄関の壁時計を見て、

「今からだ夕方過ぎになっちゃうかな？」

「そんなにかかるのか」

「うん。私もよくわかんないけど、体が弱いのは病気のせいなんだって。珍しい病気だから治療に時間がかかるって言ってたよ」

「……」

「あ、そんな深刻な病気じゃないみたいだから」

不安が知らずに顔に出ていたのだろうか、歩が慌ててそう付け足した。

「……こいつに気を遣われるようじゃ俺もまだまだだ。」

「別にそんな心配してねーけどさ。でもそんな珍しい病気がこんなちっぽけな町の病院で治せるのか？」

「わかんないけど、たぶん」

と、歩が少し困った顔をする。

病気の正体がわかっていて治療をしているってことはおそらく大丈夫なんだろうと思うが。まあ、歩の叔父も何も言っていなかったし、医者でない俺があれこれ考えても仕方がない。

「ま、いいか。気を付けて行ってこい」

「了解しました、軍曹殿！」

そう言って歩はビシッと敬礼した。

どうやら昨日見ていたアニメか何かに影響されたいらしい。

「誰が軍曹だ、誰が。……あ、ちよつと待った」

「うん？」

出て行くこうとしていた歩が振り返る。

「……」

マジマジと見つめて、

（……大丈夫だよな）

知つてのとおり、こいつはとところどころで変に虚勢を張ったり無茶をしたりする厄介な性格の持ち主だ。俺も注意して見るようにしてはいるのだが、その人並み以上の我慢が限界に達するときまで無

理をしていることに気付かないことも多い。この家に来てからも、それで何度か具合が悪くなって寝込んでしまったこともあった。

それ自体は仕方がない。なんだかんだ言っても、俺と歩はまだ三ヶ月余りの付き合いでしかないのだから。

ただ、こいつの家族　保護者になると誓った以上は、そんな言い訳ばかりをしているわけにもいかない。

だから俺はなるべく、こいつには他の人間の何倍も注意を向けるようにしている。

時間という不利を少しでもカバーできるように。

俺は言った。

「遅くなるようだったら連絡しろ。今日は暇だから迎えに行つてやる」

「え？　あ、いいよー。そんなに遠いわけじゃ」

「してこなかったら罰ゲームな」

「えー……じゃ、じゃあ七時過ぎたら」

「四時を過ぎるようだったら電話しろ。まだ日が落ちるの早いからな」

「う、うん。……ありがとねー」

歩は最初困ったように笑っていたが、やがてちよっと嬉しそうにしながらそう言った。

俺は何も言わずに片手を上げてリビングへと向かう。

歩は小さく手を振りながら出かけていった。

.....

(……どうしたのかな、優希さん)

病院までのおよそ十五分ほどの道をてくてくと歩きながら、歩は出かける直前の優希の態度に少しだけ首をかしげていた。

彼が自分のことを気にかけてくれているということは、彼女も常日頃から感じていたし、それ自体はさほど珍しいことでもない。

が。今日はいつも以上だった。

(病気だなんて言ったから心配させちゃったのかなあ)

そう考えて歩は少し後悔する。

彼に特別扱いされて心配してもらっていること自体は彼女としても嬉しかったし、それを心地よいと感じることも多かったが、それはどちらかといえば彼女が本来望んでいる形ではない。健康な体に憧れ、他人と同じように走り回ることを夢見て、そしてそれが未だに叶っていない彼女にとって、元気なときぐらい他の人と一緒につもりでいたい、というのが正直なところだったのだ。

だからこそ歩は、なるべく優希に心配されないようにと、多少の調子の悪さは我慢するようにしている。

……それが悪循環となっっていることは今のところ気付いていない。病院に到着すると、歩はまっすぐ受付へと向かった。すでに顔見知りの事務職員に挨拶をして、受け取った体温計を脇に挟み、待合室の椅子に座って大人しく待つ。

ピピピ、と音がして体温計を取り出して見るとどうやら熱はないようだった。

それを受付に戻してからさらに十五分ほど待つと、名前を呼ばれて診察室へ向かう。

担当の先生はいつも同じで、メガネをかけた三十代半ばの女医だ。見た目がどことなく養護教諭の髯と似ていて、歩はこの先生が結構好きだった。

最近の様子を聞かれ、その後でいつもと変わらない診察を一通り受ける。といってもこの“いつもと変わらない”が結構長い。歩自身、何を調べられているのかわからないような機械で頭の中身から足の爪の先まであちこち調べられるのだ。

その診察だけで三、四時間ほどは経過しただろうか。ようやく一息ついたところで時計を見ると、すでに午後四時近くになっていた。

(あちゃあ……やっぱりかかったあ)

これからもう一度呼ばれて、説明を受け、薬を受け取るころには間違いなく午後四時は過ぎているだろう。

(……先に電話かけてこよ)

出かける前の優希の言葉を思い出し、歩は椅子から腰を上げた。迎えに来てもらうかどうかは別として、とりあえず連絡はしておかないと後の罰ゲームが怖い。

(電話、どこだったかな……)

病院の中を少し動き回る。が、ようやく見つけた公衆電話には“故障中”の張り紙があった。

(どうしよう。……あ、そうだ)

歩は自分が一時期ここに入院していたときのことを思い出し、エレベータへと向かう。入院病棟のある三階へと上がりナースセンターへ向かうと、その入り口のところ電話が置いてあった。

硬貨を入れて家の電話番号を押す。

「……はい。不知火ですけど」

電話口から聞こえてきた声は瑞希のものだった。

心なしか不機嫌そうだ。

「あ、瑞希お姉ちゃん？ 私、歩だよ」

「ああ、歩？」

途端に瑞希の声色が元に戻る。

(……また優希さんと喧嘩してたのかな)

すぐに浮かぶその光景に歩は思わず苦笑する。おそらく電話のそばでは優希が不機嫌そうなフリをしてソファに座っているのだろう。その二人がいつも本気で喧嘩しているわけではないことは歩にはわかっていた。

「そういえば今日は定期検査だったわね」

と、電話口の向こうから瑞希の納得したような声が聞こえてくる。

「うん。それで終わったら電話しろって、お兄ちゃんが」

「ああ、なるほど。わかったわ。じゃあ私が迎えに行くから」

「あ、うん」

電話の向こうでは、優希が瑞希に向かって何やら抗議をしているようだった。

「……………うるさいわね。あんたは来なくていいわ」

最後に瑞希のそんな声が聞こえて、電話が切れる。

ツー、ツー、という電話の音を聞きながら、歩は思った。

(……………きつと二人で来るんだろっうなあ)

そんなことを考えると妙に可笑しくなってしまうって、こみ上げる笑いをこらえながら受話器を置く。

あとは下で診察結果を聞いて、迎えを待つだけだった。
踵を返し、エレベーターへと向かう。
と。

そのときだった。

『……………ロ……………ヤ……………!』

(!?)

突然、頭の中に鳴り響いた声。

いや、正確には“声”ではない。

イメージ。

流れ込んできたのは強烈な怒りと憎しみのイメージだった。

(なに、今の?)

軽く頭を抑え、辺りをキョロキョロと見回す。

特に変わったところはなかった。

が、

『……………ユルサナイ……………ユルサナイ!』

今度はさらにはつきりと聞こえた。

強力な思念だ。

断続的に流れ込んでくる。

『ユルサナイ……………コロシテヤル……………!』

「ッ！ 痛いッ！」

頭の奥に鋭い痛みが走る。

「……やだッ！ やめてッ！！！」

歩は耳を塞いでその場にしゃがみ込んだ。と、同時に、頭の中に流れ込んでくる思念の通り道を意識的に遮断する。

「……！！……！！」

それでもなお、思念は立て続けに流れ込んできた。ただ、そのイメージの輪郭はぼんやりと薄くなり、痛みを伴うほどのものではなくなっていた。

（……こんな強力な思念）

歩は確かにテレパシストとしての能力を備えている。だが、その能力は基本的に相手と接触しない限り発動しないものだ。にも関わらず。

その思念は接触していないはずの歩の頭の中に直接響いてくるほど強烈なものだった。

（誰、だろっ……）

遮断したまま、それでもその思念を送ってくる相手の姿を探した。その強さから考えて、この病院にいる何者かのものであることは間違いない。

（……あ）

歩は辺りを見回して、そして気付く。

ナー�センターが少し慌しくなっていた。何人かの看護師たちがそこを出て、入院患者のいる病棟へと向かっていくのが見える。

「……」

一瞬のためらい。

歩は看護師たちの後を追った。

……憎しみに満ちた思念。歩にはその思念が、なんとなく助けを求める叫びのように感じられたのだ。

「……！！……！！」

看護師たちの後を追っていくと、案の定、思念は強さを増してい

く。

確実に発生源に近付いていた。

そして

「え……」

泣き声のような叫び声のような金切り声が鼓膜に届いてくる。

看護師たちの向かった病室を覗き込んで、歩は啞然とした。

「落ち着いて！ 真くん！」

中では数人の看護師たちがベッドの上で暴れる患者を押さえつけ、懸命に呼びかけている。

そんな看護師たちの中心にいたのは、

(子供……?)

男の子なのか女の子なのかすら判断の難しい子供だった。幼稚園児か、せいぜい小学一年生ぐらいだろう。ただ看護師たちが“真くん”と呼びかけているので、どうやら男の子らしいということがわかった。

(こんな子が、あんな憎しみの思念を……?)

「うわあああッ!!」

「!?!」

啞然としていた歩は、その少年の叫び声で我に返った。そして一瞬の躊躇の後、病室の中に飛び込んでいく。

「え!?! ころ、入ってきちゃダメ!」

途中で看護師に制止されたが、その看護師は歩の顔を見るなり、

「……え、歩ちゃん?」

驚いたように目を見開く。

「婦長さん、ごめんなさい。ここは私に任せてください」と、歩はぺこりと頭を下げる。

その女性は歩が入院中に世話になった看護師で、歩が不思議な力を持っていることを知っている数少ない人物の一人だった。

「やだッ! やだああああ ツ!!」

少年はとても子供とは思えないような力で、自分を押さえつける

二人の看護師の手を振り払おうとしている。

そんな少年の様子を見て、婦長は一瞬のためらいの後、

「わかったわ。歩ちゃん、お願いね」

「はい」

その決断に感謝して、歩はすぐにその少年へと駆け寄った。

（……すごい思念）

遮断しているにも関わらず、歩の頭の中には立て続けに憎しみの思念が流れ込んでくる。

（取り込まれないように気をつけなきゃ）

歩は気合を入れるようにグッと両手を握り締めると、右手でその少年の肩に触れた。

「ッ!?!」

途端、濁流のようなものすごい思念の波が歩の脳を襲う。

揺さぶられる。

気を抜けば飲み込まれてしまいそうなほど強烈な感情だった。

（……落ち着いて）

歩はその波に飲まれないよう、向こうからの思念を遮断しながら自分側の意識のみを少年に流し込んでいく。

（落ち着いて……）

まずは自分の心を落ち着ける。

その感覚を相手に流し込み、優しく呼びかける。

（落ち着いて……）

それを繰り返し返す。少年の心の波が収まるまで、何度も、何度も。

……どのくらいそれを続けていただろうか。

『……………!……………』

少年の思念が弱まっていく。同時にその口から漏れていた叫び声も収まった。

もう大丈夫。

それを確認して、歩は目を開き、ぼかんとした顔の少年にニッコリと微笑みかけて言った。

「大丈夫？」

「あ……」

少年は目尻に涙の跡を残したまま、不思議そうに歩の顔を見上げていた。

まるで初めて歩の存在に気が付いたかのように。

「突然ごめんね。こんにちは。私、歩っていうの」

「あ……」

少年は戸惑ったように言葉をつむぐ。その体を押さえつけていた看護師たちはすでに離れ、遠巻きに成り行きを見守っていた。

「ぼくは、えっと……」

「まことくん、だよ。看護師さんに聞いたよ」

と、歩は汗に濡れた少年の顔を手元にあつたタオルで拭う。

「なにがあつたのかな？ ……ね。何か悲しいことがあつたなら私が聞いてあげるから。よかつたら話してみて？」

「……」

そんな歩の言葉に、少年はきよんとした顔をしていたが、やがて、

「うぐ……っ」

急にその顔を歪ませると、

「……うわああああん！ おかあさん……おかあさんがああッ！」

「お母さん？」

抱きついてきた少年の頭を優しく撫でながら、歩は後ろで見守っている婦長を振り返る。

「……」

婦長は黙って頷いた。

（……そっか）

詳しい事情は歩にはわからなかったが、どうやらこの少年は母親を亡くしてしまったらしい。

（……可愛そうに）

その悲しみはかつて同じ境遇にあつた歩には痛いほどに理解でき

る。

それでも彼女はそのとき、この少年よりはまだ年長だったから、それなりに事情を理解し、そして自分の力で立ち直ることもできた。しかし、まだ世界の右も左もはつきりとはわからないこの少年にとつて、突然母親を失ってしまった悲しみはいかほどのものか。

それは先ほど歩が感じた思念の強さを見れば、明らかで。

……結局、少年が泣き疲れて眠ってしまうまで、歩はその頭を優しく撫で続けていた。

「五日前の夕方のことよ。交通事故があつたでしょ？」

少年が眠った後、歩はナースセンターに招かれて婦長からその少年の話聞いていた。

「あ、はい。みぞれの降つた日ですね」

と、出されたオレンジジュースのストローに口を付ける。

その事故は歩も新聞で読んで知っていた。隣町のことだったから注意して見ていた記憶がある。

「確か歩道を歩いていた親子が撥ねられたんですね。……じゃあ真くんが、その？」

「ええ。……あのね。本当に運が悪かつたのよ。車を運転してたのは若い男の人だったんだけど、スリップして中央線をはみ出した対向車を避けようとしてね。ハンドルを切りすぎて歩道に乗り上げてしまつて、ちょうどそこにあの子とお母さんが歩いてたの」

「……」

「あの子は幸いやすり傷程度で済んだんだけど、お母さんの方はまともに撥ね飛ばされてしまつて、ここに運ばれてきたときはもう意識がなかつたわ」

婦長はそう言つて悲しげな顔をした。

「目の前のことだったし、ショックだったんでしょね。それでた

まにさつきみたいに暴れるのよ」

「そうだったんですか」

それで納得する。

(じゃあ、あの憎しみの思念はそのせいで……)

その気持ちは、歩にもわからないわけではなかった。

(……だけど、そうだとしてもあんな小さな子があれだけの強い憎しみを放つなんて)

それ自体は少し不自然に思える。その少年の思念の強さは、下手をすれば回りのごく普通の人間にも何らかの影響を与えてしまいかねないほど強力で、感応力の強い人間ならあの感情の渦に取り込まれてしまう危険すらある。

それほどのものだった。

幸い、この病院の看護師にそういう者はいなかったようだったが

「それにね。これもショックが強すぎたせいだと思っただけど」

と、婦長が付け加える。

「発作を起こしているとき以外は、あの子、お母さんが死んだことを忘れているみたいなのよ」

「え……」

記憶障害、だろうか。

それとも

眉を曇らせた歩に、婦長はパツと口調を変えると、

「あ、なんだか変な雰囲気になってしまったわね。ごめんなさい。…

…さ、歩ちゃんもそろそろ帰りなさい。もう時間も遅いでしょ」

「え……あ！」

時計を見て、歩は慌てて立ち上がった。

すでに午後五時を回っている。歩が家に電話したのが四時ちょうどぐらいだから、迎えはとっくの昔に到着しているはずだった。

「あ、それじゃあ、ごちそうさまでした！」

空になったジュースのコップを置いて頭を下げ、歩は慌ててナー

スセンターを飛び出していく。

……と、すぐにまた戻ってくるよ、

「婦長さん。あの男の子って、昼間は面会できます？」

「え？ ええ、できるけど……」

「じゃあ明日また来ますー」

歩はそう言って、なるべく足音を立てないように静かに廊下を走っていった。

1年目1月その3

「こんにちはー」

ノックをして声をかけながら歩はその病室のドアを開いた。こぢんまりとした真っ白な壁の部屋には少し大きめのベッドが一つ。

一人の少年が横になったまま漫画の本を読んでいた。

「あ、お姉ちゃん！」

少年は歩の姿を見ると、漫画の本を放り投げて嬉しそうに上半身を起こす。

「真くん、今日も元気そうだね。お姉ちゃん、安心したよー」

歩は壁に立てかけてあったパイプ椅子を持ってベッド脇へ移動し、そこに腰を下ろした。

……あれから一週間。歩はこの少年 真のことが気になって毎日学校帰りにここに通っている。真はどうやら発作の日のことをまったく覚えていないようだったが、周りの大人たちより歳が近いからか、改めて自己紹介した歩にすぐに懐いた。

「今日はなにして遊ぼっか」

「えっとねえ。えっと……」

本気で悩む表情が愛らしい。

真はまるであの日の取り乱しようが嘘だったかのように、歩の前ではいつも明るく、彼女がやって来ることをずいぶんと楽しみにしているようだった。

歩自身もその思いは充分に感じていて、そしてそれは彼女にとって新鮮な喜びだった。

つい最近まで、自分は誰かのお荷物になってばかりだと思っていたし、そんな風に誰かに必要とされることがほとんどなかったから。

「うーん、うーん……」

(弟ってこんな感じなのかなあ)
真剣な唸り声を上げる少年を見て、歩はなんともいえない幸せな気持ちに浸っていた。

.....

「.....嫌な予感がする」

「どうしたの、優ちゃん？」

俺の独り言に台所の雪が素早く反応した。

俺がいるのはカウンターを挟んだりビングのソファで、眩きはごくごく小さなものだったし、雪は近くで水を流したりしているので聞こえるはずはないと思っていたのだが、どうやら地獄耳な妹にはしっかりと届いてしまっていたようだ。

「ああ、いや言ってみただけだ」

「？」

「ほら。嫌な予感がするとか言つと予言者みたいでなんかカッコいいだろ？」

「んー」

どうやらいまいちピンと来なかったらしく、雪は首をかしげたまま、結局何も言わずに夕食の支度へと戻っていった。

トントン、という包丁とまな板が奏でる打音を聞きながらゴロツとソファに横になる。

「瑞希のやつは？」

「部活だよ」

「今日もボディビルダー目指して奮闘中か。歩は.....病院か」

「うん。そう言ってた」

あいつが足しげく通っている病院の少年のことは俺も雪も報告を受けている。人間にしては強い思念とやらを持っていて不安定だから、それが落ち着くまで様子を見てあげたいという希望も聞いていた。

「あいつもまあ、お節介というかお人よしというか……」

再び独り言を呟くと、雪はやはりそれを聞きつけて、

「女の子はお父さんに似るっていうよ」

「それ、性格の話じゃないだろ？」

もしそうだとしたら、世の中には親父くさい女しかいないことになつてしまつてはないか。

あまりにも夢がなさすぎる。

「ああ、でも、ま、歩の本当の親父のことは一つも知らねーけど、あの頼りなさそうな叔父にだったら似てないこともないかもな、あいつ」

俺がそう言うと、雪はクスクスと笑つて、

「違うよ。私が言ったお父さんは、優ちゃんのこと」

「……おい。三つしか離れてないんだぜ、歩とは」

俺は憮然としてそう返したが、まあ俺があいつの保護者のつもりでいることは確かだったし、雪の言葉はそういう意味だったのかもしれない。

「歩ちゃん、近くに年下の子がいないから、小さい子の面倒を見るのが楽しいんだよ、きつと」

再び包丁のリズミカルな音が聞こえてくる。

「そういうもんかね」

「きつとね」

「ふーん」

一応納得してリビングの天井を見上げた。

先ほどの嫌な予感　もとい、例の“耳鳴り”のことが少し気になつていたが、遅くなるようだったら連絡をしろと言つてあるし、まあ大丈夫だろう。

俺はソファの上で寝返りを打ってテレビのリモコンを手に取った。

.....

「じゃあ、また明日ねー」

「うん。ばいばい」

元気な真の声に見送られて歩は病室を出た。別れ際にはいつも寂しそうな顔をする真だったが、また明日も来ると約束をするとすぐに笑顔になる。

慕われているのだと実感できて、歩の気分は高揚した。そのときの彼女の心情は、ほぼ雪の推測どおりだったといえる。兄弟がおらず、小さい頃から年上の人間とばかり接したきた歩にとって、それはまるで、産まれて初めて書いた作文が学校で表彰されたときのような、そんな新鮮な喜びだった。

(明日は何かお土産持ってきてあげようかなあ……)
など。

そんなことを考えながら入院病棟の廊下をエレベータに向かって歩いていると、

「あ、えつと、君？」

「え？」

見知らぬ男性に突然声をかけられて歩は驚いた。

廊下の端に一人の男性がたたずんでいることには気付いていたが、まったく知らない顔だったし、まさか声をかけられるとは思っていなかったのである。

歩は立ち止まって姿勢を正すと、

「なんででしょうか？」

「君、あの子の友達？」

「はい？」

その問いかけに歩はさらに戸惑ったが、どうやら“あの子”というのが真のことを指しているらしいと気付き、そこで初めて、歩はその男性の様子を深く観察した。

歳は二十代前半ぐらいだろうか。脱色しているのか髪の毛は少し茶色がかっていたが、きちっとした背広を身に纏っていて、どうやら大学生ではなく社会人のようだった。体格はかなり細身でいや、そう見えたのは男性の顔が少しやつれていたからかもしれない。普段の男性の姿を知らない歩には断言することはできないが、顔色も悪く、どうもかなり疲れている様子で、歩に向けてくる笑顔もどこかぎこちない。……何か悪いことを考えているか、あるいは本来笑顔を浮かべていられる心理状態ではないかのどちらかだろう、と歩は思った。

いや。

後者だろう。

歩はその時点で、半ばその男性の正体に気付いていた。

だから歩は正直にそう返答する。

「はい。そうです」

「そうか。……じゃあお願いがあるんだけど」

と、男性は手にしていた小さな箱を歩に差し出した。

「これをあの子に渡してくれないか？ 看護婦さんの許可はもらってるんだけど、ちょっと理由があつて僕は

「えっと……」

歩はそこから見えるナースセンターのガラス越しに、中にいる婦長の顔を窺った。どうやら婦長もこちらの様子を気にしていたらしく、すぐに目が合うと歩に向かって頷いてみせる。

それを確認して、歩はすぐに頷いた。

「わかりました」

「え？」

何か事情を聞かれるとでも思っていたのか、あっさりとした返答に逆に男性のほうで驚いた顔をする。

歩はそんな男性から箱を受け取ると、

「ちよつと待っててくださいね」

踵を返して真の病室へ戻っていく。

「……あれ？ お姉ちゃん、どうしたの？」

「えへへ。あのね、今日は真くんにお土産があったの」

歩は笑顔でベッドまで近付いていくと、男性から受け取った小さな箱を真の目の前に差し出して、

「じゃーん。これ、なんだと思う？」

「え？ えと……」

箱には駅前通りにあるケーキ屋の名前が書いてあって、見慣れていればその中身がケーキであることはすぐにわかるのだが、どうやら真はその店のことを知らないようだった。

そして散々迷ったあげく、急に何事かひらめいたような顔で歩を見上げて、

「あ、ケーキだ！」

「正解！」

そう言っただけで箱を開けると、真はさらに顔を輝かせた。

「わあ！ ありがとう、お姉ちゃん！」

「どういたしまして！。あ、看護婦さんから許可はもらっているけど、食べたらちゃんと歯を磨かないとダメだよ」

「うん！」

真は力強く頷いた。

「うむ、よろしい。じゃあ今度こそさよならだよ。また明日ね」

「うん！ 明日も待ってる！」

そんな真の頭を軽く撫でて歩は病室を出た。

パタン、と、ドアを閉じる。

目の前には男性が立っていた。

「……すまないね」

「いいえー」

見上げた男性は相変わらず暗い顔をしていた。
無理もない、と歩は思う。

チラツと後ろを振り返って、

(……ここだと真くんに聞こえちゃうかも)

そう思っただがドアから離れると、男性はそんな彼女の懸念に気が付いたのか黙ってその後ろをついてきた。

少し離れたところで、歩は男性を振り返ると、

「私が持ってきたことにしちゃいましたけど、良かったですか？」

「あ……ああ。そのほうが都合が良かったよ」

と、男性は影のある笑みを浮かべる。

歩は少し迷いながらも、

「あの、私が口を挟むことじゃないかもしれませんが……」

「うん？」

「いつかは直接渡してあげてください。気持ちはわかりますけど、でも……」

「？」

男性が怪訝そうな顔をする。

「車の運転してた方ですよ？ 事故のときの」

「え……ああ」

男性は一瞬驚きの表情を浮かべたが、すぐに納得顔で息を吐くと、

「君は、頭の良い子みたいだね」

「いいえ、何となくそう思っただけです」

テレパスを使って男性の心を覗いたわけではない。

ただ、そういう力を持っているがゆえに、歩はそれを使わずとも他人の心情を察する能力に長けていた。男性の表情に、後悔と、真実に対する罪悪感らしきものが浮かんでいることに気付けば、その事実を察することは決して難しくはない。

「……いや、確かに君の言うとおりなんだけどね」

男性は小さく首を横に振って、

「前に一度来たとき、僕の顔を見るなり急に暴れだしちゃってね。それ以来、直接病室に行くことは看護婦さんにも止められてるんだ」「暴れた……ですか」

と、歩は呟きながら、真に初めて会った日のことを思い出した。(……そっか。あの思念はこの人に向けられたものだったんだ)じつと歩は男性を見つめる。

悪い人ではなさそうだった。が、まだ小さい真にはあの事故がどういうものだったかの判断などできるはずもなく、この男性の車が母親の命を奪ったという事実以外、理解することは難しいだろう。「それに看護婦さんの話だと、あの子は事故当時の記憶が無くなってるみたいだね。僕が顔を出したらそれを思い出して暴れるんじゃないかって。それで」

「そうですか……」

現時点で、その判断はおそらく正しい。

ただ、

「……真くん、記憶が無くなっているわけじゃないですよ。お母さんが死んだことちゃんとわかってると思います」

「え……」

「だって変じゃないですか。本当に忘れてるだけなら、お母さんが顔を見せないこと絶対不思議に思うはずですよ」

「……」

歩の言葉に、男性は黙り込んだ。

そのぐらいのことはこの男性も気付いていたはずだ、と、歩は思う。ただ、おそらくはそう思い込みたかっただけなのだ。

「忘れたフリをしてるだけだと思います。もちろん意識してはいないでしょうけど、そうじゃないとおかしいんです、やっぱり」

歩自身、男性に何を求めてそんなことを口にしたのか理解してはいなかった。真に直接謝罪をして欲しいのか、あるいは二度と姿を見せないようにして欲しいのか

どうすることが真にとって一番いいことなのか、歩もわかっては

いなかったのだ。

「ずっと誤魔化し続けられるはずはないんです。だから、いつかはきつと……」

「……」

男性はもう口を開こうとはしなかった。いや、何か言いたげにはしていたが、結局何も口をついて出てこなかったようだ。

そんな彼の苦悩の表情を見て、歩は小さく頭を下げる。

「……ごめんなさい。偉そうなこと言ってますけど、どうするのが一番いいのか私にもわからないんです。お兄さんが色々大変なものわかってます。仕方のない事故だったって、そう聞いてます。でも、私は何とか真くんに立ち直って欲しい。そのためにはどうしたらいいの？」

その先の答えは、出てこない。

歩はもう一度頭を下げた。

「ごめんなさい。答えもないのに勝手なことばかり喋っちゃって」「……いや、いいよ」

男性は唇を噛んで何ごとか考えているようだった。

「じゃあ……私、失礼します」

最後にもう一回、頭を下げると、歩はその男性の前を離れる。

その数秒後。

……男性がその場に力なくしゃがみ込む音が歩の耳に聞こえてきた。

1年目1月その4

……最近、歩の様子がおかしい。

雪も瑞希も同様にそう感じているというのだから、気のせいではない。

どうやら何か悩んでいるようで、具体的にはとにかくボーっと考え事をしていることが多い。たまに何か聞いたそうに俺や雪の元にやってくるのだが、結局何も切り出すことなく再び一人で考え込んでしまうのである。

まあ、ここ最近の行動から考えて、その悩みの種が病院の男の子であることは間違いないだろう。

歩から聞いたところによると、その男の子は事故で母親を亡くしたというから、もしかするとその子との接し方なんかで悩んでいたりするのかもしれない。

「行ってきまーす」

とはいっても、別に常時様子がおかしいわけでもなく。

日曜日の今日も歩は元気良く病院へと出かけていく。

「おう、気をつけるよ」

俺もその辺りのことを突っ込んで聞くつもりはなかった。本当にどうしようもなくなったら改めて相談にくるだろうと思っている。

そんなわけで、俺はいつもどおりに送り出そうとしたのだが、

「……あ、そうだ」

外に出ようとしたところで、歩は急に何事か思いついたように振り返った。

「ね、お兄ちゃん。今日はこれからヒマ？」

「ヒマじゃないぞ。これから寝てメシ食って寝て風呂入って寝なきゃならないからな」

「そんなに寝られないよー」

「来るべき決戦の日に備え、俺は普段から寝貯めすることを心がけてるんだ」

「ふふふ」

歩は何故か急に得意げな顔になって、中指を眉間の辺りに当てた。「残念でしたね、不知火くん。人間の体というものは寝貯めができないように作られているのですよ」

ありもしない眼鏡をくいくい上げる仕草をする歩。誰かの物真似のようだったがちつともわからない。あえて言うなら養護教諭の山咲先生だろうか。だとしてもあまりにも似てなさすぎる。

とりあえずスルーしておくことにしよう。

「で？ ヒマだと何かあるのか？」

歩は急に我に返った顔をして、

「あ、うん。良かったら今日は一緒に来て欲しかったんだけど……」

「病院にか？」

「うん」

「その心は？」

「え？」

歩は一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに、

「あ、えつとね。私、真くんにお兄ちゃんのこといっぱい話したの。そうしたら会ってみたいって」

「ほー」

どんな話をしたのか少々気になるところではあったが……さて、どうしたものだろう。

予定というほどのものじゃないが、今日は直斗でも誘って、駅前通りのゲーセンに新作のゲームをやりに行こうかと思っていたところだ。

新作ゲームと歩のお願い。

天秤にかけてみると、これがなかなか微妙な判定だった。
が、

「よし。じゃあ付き合ってやろう」

結局、小遣い日前で財布の中身が寂しかったことが決定打となる。それによくよく考えれば今日は新作が入って最初の日曜日だ。きつと辺りのゲーマーたちが殺到して混んでいるに違いない。

「ホント？　ありがとうー！」

断られると思っていたのか、歩はちよつと大げさに喜んで右腕にぶら下がってきた。

「ああ、わかったわかった。わかったから離せって」

何だか日増しにスキンシップが激しくなっている気がする。

こつして懐かれるのはもちろん悪い気分じゃないのだが、こいつが相手じゃ色々なところがアレすぎてくつつかれてもあんまり嬉しい気持ちになれないのが残念なところだ。

……と。

「あれ？」

歩はちよつと不思議そうに俺を見上げて、

「……なんか今、私のこと馬鹿にした？」

「おまつ……勝手に心読んでんじゃねえよっ！」

「あうっ！」

ぺちんと額を叩かれて、歩は泣きそうな顔をした。

「ご、ごめんなさいー。つい……」

「つい、じゃねーよ。ったく。俺がアレな妄想をしてる最中だったりしたらどうするつもりだ」

「アレな妄想？」

きよとんとした顔。

「……なんでもねー。ほら、上着取ってくつから待ってる」

「はい」

ニコニコと頷く歩にため息を吐いて、俺は階段を上っていった。

病室に入ると特有の匂いが鼻をつく。

白い壁。

白い天井。

個室のせいかな、少し閉塞感を感じる部屋だった。こういう場所に縁のない俺としては、あまり居心地の良い感じはしない。

そんな部屋の奥。

ベッドの上には幼稚園か小学一年生ぐらいの少年が上半身を起こして待っていた。

「あ、いらっしやい、お姉ちゃん！」

「こんにちはー、真くん。今日は」

言いかけた歩の横から顔を出し、少年に向かって軽く手を上げる。
「おっす」

少年は一瞬目をパチクリさせたが、やがてパツと表情を明るくして、

「あつ！もしかしてお姉ちゃんがいつつも話してるお兄ちゃん！？」

「お、なかなか鋭いじゃないか」

少年は嬉しそうに歩を見て、

「本当に連れてきてくれたんだ！？」

「うん。約束だったもの」

俺はパイプ椅子を二つ持ってきてベッドの横に並べた。少年の顔に近い場所に歩を座らせ、俺はその隣に腰を下ろす。

「で、早速だが、真。この姉ちゃんは俺のことをなんて言ってたんだ？」

「え？」

真はうーん、とうなり声をあげて、

「優しくて面白いお兄ちゃんだ、って」

「よし、飴玉をやるう。ほら、口開ける」

「え？ あー……んむ」

ポケットから出したソーダ味の飴を口の中に放り込んでやると、

真は梅干を食べたときのような酸っぱい顔をした。

「で？ 何か悪口は言ってなかったか？」

「んむ？」

不思議そうな顔をする真に、歩がちよつと不服そうに、

「私がお兄ちゃんの悪口なんて言うはずないよー」

「真。この機会に正直に言っといたほうがいいぞ。実はこの姉ちゃんにいつつもいじめられてるとか、失敗作の酸っぱいクッキーを食わされたとか」

「？」

「もう、お兄ちゃん。真くん困ってるじゃない」

真が困惑顔になったのを見て、歩が俺の服の袖を引っ張る。

「それにアレは酸っぱかったんじゃないかって、ちよつとしょっぱかっただけで」

「……知つとるわ。しかもちよつととかじゃねえからな、アレ」

何しろ俺は、こいつが我が家に来て最初に作った創作菓子“塩クッキー”の最初にして唯一の犠牲者だ。

塩クッキーといっても、塩味のクッキーではない。

クッキーの形をした塩の固まりのようなものだ。

「あ、あれは別に塩と砂糖を間違えたわけじゃなくて、おしるこにお塩を入れるみたいに甘さが際立ったりするかなと思っただけで」

「甘味成分が欠片もないのに際立つわけねえだろ！」

「そ、それは確かに盲点だったけど……」

これほどに素人の浅知恵という言葉が似合うやつも珍しい。

「でも私が味見する前につまみ食いしたお兄ちゃんも悪いよー……」
歩は情けない声でそう言った。

と。

「……お。面白いか？」

ベッドの上を見ると、真はあまりよく理解していない様子だったが、それでも可笑しそうに笑っていた。

「うん。なんかお姉ちゃんがいつものお姉ちゃんじゃないみたい」
「あー。気付いてしまったか。実はこれがこの姉ちゃんの本当の姿なのだ」

「うう、なんだか私の株が急降下している気がー……」

「柄にもなくお姉さんぶつたりするからだろーに」

「短い夢でした……」

歩ががっくりとうな垂れると、真はやはり可笑しそうに笑った。

……よく笑う子だ。

そんな真を見て俺はそう思う。

このぐらいの歳になるとむしろ人見知りする子が多い気がするのだが、俺の前でもこうして無邪気に笑っているところを見ると、どうやらそういうものとは無縁の性格らしい。

昔、隣の家に住んでいた子供のことを思い出す。

ここまで懐っこいと単純に可愛がってやりたくなるもので、こいつを放っておけない歩の気持ちもわかる気がした。

……しかし。

気になることがある。

一通り自己紹介を終えると、俺は空になっていたコップに水を汲んでくると言っていたんその場を離れた。

少し距離を置き、楽しそうに話している二人を眺める。

今日は何をして遊ぶのか、と話しかける歩。

変わらぬ笑顔で答える真。

元気だ。

……そう、元気すぎるのだ。

その笑顔は、母親を亡くしたばかりの子供が見せるような表情ではなかった。

歩が言うには、本人はどうやらそのことを忘れていて、あるいは無意識のうちに記憶の底に閉じ込めて思い出さないようにしている状態、らしい。その両者にどれほどの違いがあるのか俺にはわからないが、この様子を見る限り、少なくとも表面上の意識は、確かに

母親のことを“忘れている”状態のようだ。

その状態が真にとっていいことなのか悪いことなのかは俺にはわからないし、それについては医者に任せておくしかないだろう。

ただ

もう一つ、気になることがあった。

この雰囲気。

この気配。

ほんの微かに香る程度で歩はおそらく気付いていないのだろうが、これは魔力の気配だ。ここには俺たち三人しかいないのだから、発生源はおそらく目の前のこの少年だろう。

真は悪魔の血を引いているのだ。

ただ、それ自体は別に珍しいことじゃない。

伯父さんの話だとこの町では半数近くの間が多少なりとも悪魔の血を引いているそうだし、その中の何パーセントかは微弱ながらも魔力のようなものを発しているらしい。

真はおそらくその何パーセントかというところに属する人間で、それでもこの町じゃせいぜい二十人に一人とか、その程度のレベルに過ぎない。もちろん自らの意思で力を顕現できるほどのものじゃないし、実態は人間と何ら変わらないのだ。

だから気にするようなことではない。

気にするようなことではないはずだが

「……」

その日、俺と歩が帰るときまで、少年はずっと笑顔のままだった。

1年目1月その5

俺が初めて真の病室に行った週の金曜日。

その放課後のこと。

この日は明け方に、この辺りでは珍しいドカ雪が降ったり、健康だけが取り柄みたいな藍原が風邪を引いて学校を休んだりと、普段起こらないような出来事が立て続けに起こったりしていたので、今日こそは木陰で俺を見つめ続けている美少女が勇気を出して告白してきてくれるんじゃないかと密かに期待をしていたのだが、

「不知火さん」

どうやらそれらの前兆は、別の希少なイベントを暗示したものであったらしかった。

「……神村さん？」

そのときの俺はさぞかし間抜けな顔をしていたに違いない。

彼女が教室に入ってきたこと自体には気付いていたのだが、どうせまた直斗に用事があるのだろうと思っていて、そんな彼女が俺の机に真っ直ぐやってくることなど想像もしていなかったのである。

この学校内で彼女のほうから俺に声をかけてきたのは、もしかするとこれが初めてのことでないだろうか。

「お話があります。時間、ありますか？」

と、神村さんはまるで愛の告白をする美少女のように照れくさげに……しているはずもなく、いつもと変わらぬ淡々とした口調でそう言った。

「まあ……とりあえずヒマだけど」

「では、屋上までお付き合ってください」

神村さんは簡潔にそう言って背を向けると、残っている生徒たちの奇異の視線をまったく気にした様子もなく教室の出口へと向かっていく。

「あ、おい、ちょっと待ってくれって」

俺は詰め掛けのプリントを慌ててカバンに押し込み、脱げかけた上履きを履きなおして彼女の後を追った。

……なんとなく予感はしていた。

彼女の話とやらが、少なくとも俺にとって明るい話題ではないだろうということ。

「……真が、暴走するかもしれない？」

案の定、というべきか。

俺の悪い予感的中してしまっていた。

……しかもかなり最悪な方向に。

「いいえ。かも、ではなく、彼はすでに血の暴走を始めています。

神崎さんや不知火さんと会う以前から予兆がありました。幸いまだ被害は出ていませんが、おそらくもう手遅れでしょう」

「手遅れって……」

血の暴走。

それは悪魔の血を持つ人間が、ある日突然、破壊行動を繰り返すようになる現象のことだ。

俺はそういつた悪魔と戦ってきた経験があるし、伯父さんからも話を聞かされていたから、その現象についてはある程度の知識がある。

どうやら精神的な何かがきっかけとなること。

悪魔の血を持っている人間は誰もが 純血の悪魔を除き そ

のリスクを抱えていること。

それまで力を発現できなかったような人間であっても魔力を行使できるようになること。

そしてもう一つ。

暴走してしまった人間が“二度と元には戻らない”ということ。

……脳裏に浮かぶ。

真の笑顔と、その隣にいる歩の

「不知火さんもご存知のこととは思いますが」

そんな俺の心の動きをすべて見透かしたかのように神村さんは言った。

「暴走した悪魔は退治しなければなりません」

「ちよつ、ちよつと待てよ！」

淡々と言い放った神村さんに、俺は反射的に反論していた。

「暴走を始めているも何も、あいつはまだ普通じゃねえか！ どうして暴走し始めてるなんてことがわかるんだッ!？」

「私たちはずっと彼を監視していましたから」

「……監視？」

「事故の日の夜、彼が病院で暴れたときから暴走は始まっていたようです。軽傷だった彼が未だ入院しているのも、その出来事が暴走の前触れである疑いが強かったからです」

「え……」

言われてみれば確かに、俺が訪ねて行ったときも真の体に怪我していることを感じさせるようなものは一つもなかった。事故の際も母親にかばわれて、真自体は軽傷だったらしいということも歩から聞いている。

「あの病院は私たちの管理下にあります。そうして監視してきた結果、彼の血の暴走がすでに取り返しのでないところまで進行しているとの結論を得たのです」

整然と続ける神村さんに、俺は一瞬返す言葉を失った。

神村さんが嘘をつく必要はおそらくない。そんな彼女に食って掛かったところで何の解決にもならないだろう。

一つ深呼吸する。

まず、落ち着くことだ。

一度、二度、三度……

心臓が正常な鼓動音を刻み始めたのを確認して、俺は口を開いた。「聞かせてくれ、神村さん。真が暴走するかもしれないとわかったのに、どうしてそれを止められなかったんだ？」

「手は尽くしました。組織内の専門の者が医者に代わって精神のケアを試みたり、わずかな効果しか望めませんが血の暴走を抑える効力が確認されている薬も使用しています。ですが、これは最終的には本人の心次第で、予見したからといって確実に止める手段はないのです。きつかけを得てしまった場合、怒りや悲しみ、強い欲望の感情を抑えられなければ血の暴走は避けられません。そして……」
言葉がいったん途切れる。

「……神村さん？」

怪訝に思っただけの顔を見ると、神村さんはほんのわずかに視線を横に逸らしていた。

「残念ながら、あの男の子にそうするだけの強さはありませんでした。母親の死を受け入れ、その上で血の暴走を抑えられるだけの強さが」

「……」

ぐつと拳を握り締める。

あの年齢でそんな強さを持っている人間など、そうそういるはずもないだろうに。

あまりに酷な話だった。

普通の人間なら悲しみに泣き叫ぶだけで終わる。仮に悪魔の血を持っていたとしても、大半は何も起こらず、時間の経過とともに解決してしまうはずなのに。

だけど。

真は血の暴走を引き起こしてしまう何らかの要因を持っていた。

そして不幸な事故。

いずれかでも欠けていれば起こりえなかった暴走。

運が悪かったと。

そう考えるしかないのだろうか。

「不知火さん。心の準備はしておいてください。そう遠い未来のことではないはずですよ」

「……」

珍しく視線を合わせようとしない神村さんに対し、それ以上何が言えただろうか。

そもそも、彼女がその事実を俺に明かす必要は本来ないのだ。あの病院が悪魔狩りの管轄であるというのならばなおのこと、俺や歩に何も知らせず、いきなり事を成してしまうことだってできたはずだろう。

それでも彼女は、おそらく責められるであろうことがわかっていながら、俺にそれを伝えにきた。

俺、というよりは、おそらく歩に気を遣ったのだろう。

……責められない。

彼女が悪いわけではないのだから。

俺は重苦しい息を吐いて、頭上に広がる赤みがかかった空を見上げた。

(……歩)

どう伝えればいいのだろう。

いや、そもそも本当に手立てはないのだろうか。

暴走した悪魔が元に戻らないのは俺もわかっている。が、俺が会った真は純真爛漫なただの少年だったし、魔力を感じはしたもののこれまで俺が見てきたような、理性を失い破壊行動を繰り返していた連中とは明らかに違う。

だったら、今からでも何とか暴走を抑える手立てがあるんじゃないか。

と。

「神村さん、それって」

その疑問を口に出そうとした、そのときだった。

「……っ！」

突如、頭の中に泡が弾けたような痛みが走る。

(これは……)

“耳鳴り”だった。

しかもかなり強烈。

またいつもの　と無視することができないほどの“嫌な予感”。

「不知火さん？」

神村さんが怪訝そうにしている。

その視線に答えるのは後に回して、俺は目を閉じた。

集中する。

流れ込んでくる意識

『……………ヤ……………！』

抑えきれない怒り。

抑えきれない憎しみ。

抑えきれない悲しみ。

白い壁。

白い天井。

そして……………狼狽した表情の、見覚えのある少女

「……………神村さん！」

そこまで見えたところで俺は“同調”を切断した。

「病院だ！　病院へ、早く！」

神村さんは一瞬躊躇したが、

「……………はい。急ぎましょう」

すぐに状況を察したらしく、頷いたと思ったときにはすでに屋上の入口まで移動を始めていた。

そのまま俺が追いつくのも待たずに階段を駆け下りていく。

俺もすぐにその後を追った。

（歩　　）

脳裏には、何が起きたのか理解できずに狼狽する彼女の表情が焼き付いたまま。

（……………無事でいろよ！）

神村さんを追って走りながら、俺は強くそう祈っていた。

「最近ね。夢を見るんだ」

「え？」

いつもどおり学校の帰りに病院へ立ち寄った歩は、花瓶に水を汲みにいこうとしていたところで、真の突然の言葉に手を止めてベッドを振り返る。

「夢？」

そのときの真の表情にいつもの笑顔はなく、それが決して明るい内容のものでないことは簡単に予測できたが、どうやら本人は話したがっているようだった。

歩は花瓶を手に持ったまま、

「へえ、どんな夢？」

「あのね。僕が漫画の主人公になる夢なの」

「漫画の主人公？」

意外だと思った。

真が口にしたその夢の内容は、この年頃の少年としては特に珍しいものではないだろう。それでも意表を突かれてしまったのは、彼のその暗い表情から、もしかしたら母親に関連した夢なのではないかと、歩が勝手にそう予測していたためである。

その悪い予測が外れたことに歩は少し安堵しながら、

「どんな漫画なの？」

「うん……あのね。僕が超能力者でね。悪い人をやっつける話なの」

真の口から出てきた話は、小さい子供なら誰でも一度は見そうな夢。

自分がヒーローになって悪人を倒す。
そんな夢のような夢。

「そしてね。僕は悪い人をどんどんやつつけていくんだ」

「へえ。真くん、すごいんだね」

「うん」

歩はそんな真の言葉に相づちを打ちながら、頭の中では別のことを考えていた。

(……ちつとも楽しそうじゃない)
普通なら。

自分がヒーローになる夢を見たのなら、いつもの笑顔を見せながら話してくれてもいいはずなのに、と。

その拭い去れない違和感は、彼女の心の中に得体の知れない不安を植えつけるには充分すぎるものだった。

「あとね。歩お姉ちゃんも出てくるの」「私?」

心の動揺を悟られないように、明るく聞き返す歩。

「うん。でもお姉ちゃんはお姉ちゃんじゃなくて、僕のお母さんなの」

「……そ、そうなんだ」

動揺を隠せないまま、不安だけが広がっていく。

話題を変えたほうがいい、と、歩は直感的にそう悟って、

「そ、そうだ、真くん。明日は土曜日だからまたこないだのお兄ちゃんに来てもらおうか。真くん、また会いたいって言って」

「だけど」

「……!」

歩の言葉を遮るように真は言った。

「いや、遮るつもりはなかったのかもしれない。」

「真くん? いったいどうし」

「だけど、お姉ちゃんが」

「っ……!??」

聞こえていない。

その態度はまるで、歩の言葉が耳に届いていないかのようだった。

歩の脳裏にフラッシュバックする、真と出会った日の記憶。

「その悪い人たちに、お姉ちゃんが。お姉ちゃんが」

ポタツ、と。

布団の上に雫が落ちた。

歩は手にしていた花瓶を乱暴に棚に戻し、ベッドに近付いて真の肩を掴む。

「真くん！」

「……………」

瞳がゆっくりと動く。

「お姉ちゃん……………」

「真くん……………」

反応を示した真にホツとして、歩は肩を掴む手を緩めた。
その瞬間。

「あ、おかあ……………さん……………？」

「え？……………きゃっ！」

ビクン、と、真の体が痙攣して、歩はその場に尻餅をついてしまった。

「ま、まごとく」

「お母さんが……………お母さんが　　ッ！」
渦巻く。

「えっ……………!？」

風。

(窓、開いてないのに……………ッ！)

カーテンがゆっくりと踊りだす。

微かな風が真を取り囲むように渦を巻いていた。

「……………真くん！　しっかりして！」

なにが起きたのか咄嗟に理解することはできなかったが、考えるよりも先に歩は動いていた。

立ち上がって真の肩を掴み、力を込めて揺さぶる。

「真くん！」

「お母さん……ッ！ お母さん　　！」

言葉が届いている様子はない。

その様はまるで、初めて真を見たあの日と同じ

……いや。

バタバタとカーテンが大きく揺れている。

それはあの日には見られなかった現象だった。

「お母さん……お母さんッ！」

まるで癲癩を起こした子供のように真は同じ言葉を繰り返し、それは徐々に大きく、ヒステリックになっていく。

その叫びが大きくなるほど、病室に渦巻く風はその強さを増していった。

……やがて。

「！」

歩は驚きに目を見開く。

真の髪の色がぼんやりと、薄緑に変色し始めていた。

（……風魔！？）

薄緑色の髪。

大きく尖った耳。

それは風の力を持つ悪魔の特徴。

（まさか……まさか、血の暴走！？）

それは知識に乏しい歩にとってさえ、はっきりと認識できる事実だった。

「……真くん　ッ！」

ふいに溢れそうになった涙を堪え、歩は力の限りに呼びかける。

（だとしても、まだ間に合う！）

真の体はまだ変貌を始めたばかりだった。

彼を暴走へと駆り立てたのはおそらく、昨晚見たという夢が引き金になって蘇った悲しみと、その原因となった人間への怒りだ。

(それを取り除いてあげられれば)
そのための力を彼女は持っている。今こそ、その力を役立てると
きだと思った。

初めて会ったあの日のように。

(真くん、真くん……落ち着いて……)

肩を掴んだ手の平から自分の思念を真の心に送り込む。

『……コロシテヤル ！』

「！」

強烈な憎しみの思念が逆流してきた。

真の体が大きく痙攣する。

飲み込まれてしまいそうなほどに強烈な波動。

(……真くん、すっかり！)

それでも歩は、強さを増していく風と津波のような思念に逆らい
ながら、手の平に意識を集中し、思念を送り続けた。

真の発する風は病室中を吹き荒れ、辺りはすでに滅茶苦茶になっ
ている。騒ぎに気付いて誰かが駆けつけてくるのも時間の問題だろ
う。

だが、今の歩にはそんなことを気にしている余裕はなかった。

(落ち着いて、落ち着いて！)

こみ上げてくる不安を胸のうちに閉じ込めて、祈るように思念を
送る。

心を落ち着かせ、そのイメージを送り込む。

それを何度も何度も繰り返し返すのだ。

風に飛ばされたメモ帳が頬を掠めても、すぐ後ろの花瓶が床に落
ち、派手な音を立てて砕け散っても。

緊張の糸を切らすことなく、続ける。

(飲み込まれたら……諦めたら、真くんは二度と戻ってこられなく
なる！)

それだけを強く言い聞かせて。

そして どのぐらいの時間が経っただろうか。

歩にとつてはとてつもなく長い時間に思えたが、この極限状態に精神力が保ったことや、まだ誰も部屋に駆けつけていないことを考えれば、それはほんの一、二分程度の出来事だったに違いない。

「……………」

一瞬、真の放つ思念の波動が弱まった。

（……………真くん！）

その機を逃さない。

歩は精一杯の力を振り絞って呼びかけた。

（真くん！ しっかりして！）

「……………」

急激に弱まる波動。

部屋の中を吹き荒れていた風が、少しずつその力を収めていった。

「……………お姉ちゃん……………」

真の口が動く。

「真くんッ！」

実際に口に出して大声で呼びかけると、

「あ……………」

焦点が定まる。

風が止む。

と、同時に、真の体に顕れていた変化も消えていった。

「歩……………お姉、ちゃん……………」

何が起きたのかわからないといった様子で、真は歩をきょとんと見つめている。

「真、くん……………」

発作は治まったようだった。

急に体中の力が抜け、歩は床の上に座りこむ。

「……………良かった……………」

ホッと息を吐く。

病室の外から足音が響いてきた。ようやく騒ぎに気付いた看護師たちが駆けつけてきたようだ。

が、

（大丈夫、だよね……）

幸い、真の姿はもう元に戻っている。

あとは風で滅茶苦茶になってしまったこの状況の言い訳を考えるだけだ　と。

……歩は後悔する。

気を抜いてしまったこと。

予想できたかもしれないその事態に対処することができなかったことに

「おい！　大丈夫か！　いったいなにが　！」

病室のドアを開けて飛び込んできた一人の男性。

「あ、ええつと、これは……」

と、歩が苦笑いしながら言い訳をしようと振り返った、そのとき。「！」

ひととき大きな波動が歩の全身を貫いた。

「え　？」

そして歩は一瞬にしてその正体を理解する。

それはさっきまでの何倍もの大きさに膨れ上がった憎しみの思念。思念の向く先は

「おい、どうしたんだ！　なにがあつた！？」

非常事態を察し、彼女たちのことを心配して飛び込んできた男性

は……真の母親を撥ねてしまった、あの青年だった。

「だめ　」

それは誰に向けて発した叫びだったのか。

「だめええええ　　ッ！」

次の瞬間。

爆音と衝撃が病院の一角を襲った　。

1年目1月その6

ドン、という微かな振動が聞こえてきたのは、俺と神村さんがちよつど病院の一階ロビーに駆け込んだときだ。

上階、おそらくは三階の入院病棟から聞こえてきたであろうその音は、このロビーではそれほど大きくは聞こえず、待合室の人々も不思議そうに辺りを見回すぐらいの反応だった。

「誰かが簡易結界を張って音漏れを防いだようです」

「……つてことは」

実際にはそれ以上の大事になっている、ということだ。

「急ぎましょう」

神村さんとともに駆け出す。

「階段は向こうです」

エレベータのボタンを押そうとした俺を制して、神村さんが奥へと走っていく。

真の病室は三階だ。

俺は神村さんの後を追って階段を駆け上がっていった。

三階はさすがにざわついていた。が、看護婦たちが様子を窺おうとする入院患者を制していて、まだ大きな騒ぎにはなっていない。

（やっば真の部屋か……！）

「あなたたち」

そこへ向かおうとする俺たちも看護婦に制止されそうになったが、その看護婦は神村さんの顔を見るなりハツとして口を噤んだ。

疑っていたわけじゃないが、この病院が悪魔狩りの管轄だったというのは本当のようだ。

ナースセンターの前を駆け抜けて急ぎ廊下の奥へ向かうと、何もないところで薄い膜を突き抜けたような感覚に襲われた。

おそらくこれが神村さんの言っていた簡易結界なのだろう。

真の病室の前では一人の男が壁を背に尻餅を付くようにして倒れていた。見覚えのない男だったが生きてはいるようだ。

その男のことは医者や看護婦に任せることにして、俺たちはすぐに病室の中へと飛び込んでいく。

「歩！」

病室に入った途端、強烈な風が襲われる。

「くっ……」

すぐに力を開放して抵抗力を増強した。

幸い、それほど強力ではない。

部屋の中を見回すと、ベッドの上にいる子供の風魔と、窓の下でぐったりとしている歩の姿が見つかった。

「歩！」

とりあえず風魔 いや、真のことは無視して歩に駆け寄る。

「歩！ しっかりしろ！」

「うっ……」

抱きかかえて声をかけるとすぐに返事があった。

ひとまずホツとする。

「お兄……ちゃん？」

見たところ外傷はない。どうやら風に飛ばされて転んでしまっただけのようだ。

「あっ……お兄ちゃん！ 真くんが！」

「わかってる」

「不知火さん」

そんな俺たちのやり取りを黙って見ていた神村さんが、一步、真のほうへと踏み出す。

普通の人間ならよろめいてしまうほどの強風。それが彼女の三つ編みを大きく揺らしていたが、彼女自身はまったく動じた様子もなく、いつもどおりの直立で真と対峙していた。

「神崎さんを外へ出してください」

淡々とそう言って、もう一步、真へと近付く。

「神村さん……」

すぐにわかった。

彼女は真を殺すつもりだ。

すぐに行動に出なかったのは、歩に対するせめてもの配慮だったのだろう。

それは歩にも伝わったらしい。

「……沙夜さん、やめて！」

「歩！」

「お兄ちゃん！？ 離して！」

「……」

俺は無言で首を横に振った。

……こうなってしまうえば俺にでもわかる。今の真はすでに、俺たちが戦ってきた連中と同じ状態になっていた。

このまま放っておけば、真はいつか人を殺めてしまう。

「……」

神村さんがチラッと俺を見た。

さらに真に歩み寄る。

その右手が小さな輝きを放った。

「沙夜さん……やめて！」

それを見た歩の表情に絶望の色が宿る。

神村さんは応えない。

右手の光が収束し、それが彼女の手の中で刀の形を成した。

（あれは　　）

強い力。

「浄化します」

光の中から現れた刀を構える。

真　　いや、風魔も彼女の気配に本能的に危険を悟ったらしい。

それまで部屋全体に張り巡らせていたすべての力を神村さんへと向けた。

荒れ狂う風が彼女の体に圧力をかける。

神村さんは動じない。

力の差はおそらく歴然としているのだが、

「……………」

神村さんは刀を構えたまま、そこから動かなかった。

風に押されて動けないわけじゃない。その証拠に彼女の髪はすでに揺れてすらいなかった。彼女の手にした光り輝く刀が風の魔力を完璧に相殺しているのだ。

だったら、何故

そう思ったとき、神村さんがこっちを見る。

そして俺は、その原因を悟った。

「歩、お前」

歩の瞳が神村さんを捉えていた。

……………念動力で、彼女の体を縛っていたのだ。

「沙夜さん、お願い……………」

歩が震える声で言葉を紡ぐ。

「真くんは悲しいだけなの。お母さんを亡くして、それが悲しくて

……………別に誰かを傷つけないわけじゃない」

「……………」

神村さんは無表情に歩を見据えている。

「きつと元に戻るよ……………ううん。私が戻してみせ」

「無理です」

懇願する歩に対し、神村さんはきつぱりとそう断言した。

「あなたの力でどうにかなる問題ではありません。……………不知火さん早く神崎さんを外へ。その体で無理をすればどうなるかわかりません」

そう言い放ち、風魔へ向き直る。

「あ、ああ……………」

「お兄ちゃん……………！」

歩が俺の服の袖を強く引っ張る。

(……く!)
迷いが生まれた。

……俺にだって歩の気持ちわかる。たった一日、ほんの数時間一緒にいただけの 同じような暴走悪魔を何人も退治してきた俺でさえ、未だにこの現実を納得したわけじゃないのだ。

だったら、一ヶ月近くも一緒に過ごしてきた歩が、はいそうですか、と納得できるはずもない。だけ。

どうしようもない。

たぶん、それが現実で

……でも。

「神村さん!」

気付くと、俺は神村さんに向かって叫んでいた。

「……なんでしよう」

神村さんは一応そう聞き返してきたが、こちらを向くことはなかった。

おそらく俺が何を言い出すかは想像できていたのだろう。

だが、それでも俺は言った。

「なんとかならないのか! このまま放っておけないのはわかってる! けど、まだ……まだどうにかする方法があるんじゃないのか!?!」

俺にはそのための知識がない。けど、暴走を始めて、それに染まりきってしまったのならまだしも、真はおそらくついさっきまで普通の少年だったのだ。

それなら、まだ。

「何か可能性は……ないのかッ!?!」

「沙夜さん……」

歩が苦しそうな声で呼びかける。

怪我をしているわけではないが、かなり消耗しているようだ。その力は未だ神村さんの体を縛っているようだったが、この様子だと

それも長くは保たないだろう。

「……」

神村さんはそんな歩を一瞥すると、

「」

その口が小さく、何事が呟く。

直後、

「あ……ッ！」

歩が声を上げる。

神村さんの体が動いた。

……たぶん彼女にとって、歩の呪縛を破ることは最初から容易いことだったのだろう。

刀がまばゆい光を放つ。

「やめて……やめて……ッ」

力ない歩の絶叫。

神村さんの動きは止まらない。

「」

また何事が呟いて。

そして一閃。

「ッ……！」

風魔が声にならない声をあげ、ベッドの上に崩れ落ちた。

風が止む。

一瞬の静寂。

「あ」

ため息のような歩の呟きがこぼれる。

それだけだ。

歩はそれだけ口にして、あとは呆然とベッドの上を見つめていた。その目には困惑の色さえ浮かんでいるように見える。

(……なんだ?)

俺もすぐにその異変に気が付いた。

(殺してない……のか?)

斬られたはずの風魔の体は、傷一つついていないように見えたのだ。

「神村さん……?」

「斬ってはいません。気絶させただけです」

神村さんの右手にあった刀が、空気の中に溶け込むように消滅する。

「どういうことだ?」

「神崎さん」

神村さんは俺の問いかけには答えずに歩を見た。

「暴走を起こした人間が元に戻った例が過去に一度だけあります。

“ある方法”を用いて」

「え……?」

歩が神村さんを見上げる。

その表情は、何か信じがたいものを見たような顔だった。

……つまり歩も頭の中ではわかってはいたのだ。ああなってしまった人間が元に戻ることは不可能なのだ。

「本当なのか?」

尋ねると、神村さんは俺を一瞥して。……そして頷いた。

「……」

俺は口を噤む。

「沙夜さん、それって……」

「神崎さん」

逸る歩を押しとどめるようにして神村さんは続けた。

「可能性は低いですが、その事例もこの少年のように暴走を始めた直後のことだったと聞いています。ですから望みはゼロではないでしょう。その方法を彼に試してみます。その代わりに」

「いったん言葉を切って、」

「神崎さんには二つの条件を飲んでもらいます。……いえ、これは不知火さんにもですが」

「条件?」

神村さんは小さく頷いて、ベッドの上に倒れて動かない風魔真を見る。

「一つ目は、もしもその方法が成功しなかった場合、私たちは今度こそこの少年を殺さなければなりません。それを理解していただくこと」

「っ……………」

歩が息を飲む。

だが、それを拒絶する選択肢はない。

「……………はい」

数秒の空白の後、歩は頷いた。

神村さんが確認するように俺を見たが、この場合、歩の承諾は俺の承諾でもある。神村さんもそれはわかっていたようで、俺が頷くのを確認する前に再び歩へと向き直ると、

「二つ目は、この方法が成功しようと失敗しようと、二度とこの少年の前に姿を現さないこと、です」

「え……………」

歩が驚いた顔をする。

おそらくはその意図が理解できなかったのだろう。

ただ、俺にはわかった。

(……………そういうことか)

おそらくこっちの条件が本命なのだ。

結果を歩には知らせないということ。それによって、真実がどうであろうと歩は信じていることができる。

真がどこかで生き延びているはずだ、と。

「……………」

俺は神村さんの顔を見た。

その“方法”とは、彼女が言ったように極端に成功率の低いものか。あるいはそもそも存在しないものなのかもしれない。それはおそらく、彼女が歩のことを思うがゆえにとっさに考え出した苦肉の策なのだ。

だが、たとえそれが嘘だったとしても、歩にとっては希望になる。神村さんは表情をまったく変えないまま続けた。

「この少年には親戚がいます。成功した場合はそちらに引き取ってもらふことになるでしょう。連絡先は教えられませんが、探すようなこともしないでください。それが二つ目の条件です」

「……………」
歩はそんな神村さんの意図に気付いたのか気付かなかったのか。ただ、数秒間沈黙した後、何も言わずに黙って頷いたのだった。

「……………ねえ、お兄ちゃん」

病院で検査を受けた結果、歩は軽い打撲に足の捻挫と診断された。

「なんだ？」

オレンジの光の中、長く伸びる影。

俺はその影を見つめながら背負った歩にそう聞き返した。

僅かな沈黙。

「真くん、きつと大丈夫だよね？」

「ああ」

予想していた質問を、用意していた言葉で返す。

小さな息。

「沙夜さん、嘘なんてつかないよ。真くんも強い子だから」

「ああ、そうだな」

「大きくなっても、私のこと覚えててくれるかな」

「お前みたいにドジな姉ちゃんのこと、忘れるわけないだろ」

「ひどい……………」

歩は笑った。

「……………」

それから、しばらく沈黙。

中央公園の前を通ると、幼稚園児ぐらいの子供と母親の声が聞こ

えてきた。

ちよつど友達と遊んで帰宅するところなのだろう。

駅前通りのほうからは部活帰りと思われる学生たちの騒ぐ声。

自動車の排気音。

「私、悪かったのかな……？」

ポツリ、と、歩がそう呟いた。

「何も悪くないだろ」

「じゃあ、誰が悪かったんだろ……」

歩はそう言つて、俺の背中に額を押し付ける。

「あの男の人だつて……きつと真くんのことを心配して駆けつけてくれたんだよ。車の事故だつて、ちよつと不運が重なっただけだったのに……」

「……誰も悪くなんかない」

「じゃあ……！」

服を掴む歩の指に力が入った。

「じゃあ、どうして？ どうして真くんが……！ 誰も悪くないのに、どうして……ッ!？」

「歩」

俺は軽く唇を噛み、平坦を装った声を返す。

「泣きたいなら我慢しなくていいぞ。別に笑つたりしない」

「ッ……!」

喉が震えて、歩はさらに強く、顔を俺の背中に押し付けた。

たぶん、気付いている。

神村さんの言葉の、本当の意味に。

……でも、泣かなかつた。

さっきのような状況の中で、一度たりとも。

「お前は偉いよ、歩。……けど、俺の前では、別に無理をしなくていいんだぞ？ 俺はお前の保護者なんだから。だから泣きたきゃ泣けばいいんだ」

「ッ……」

それでも歩は声を上げることなく、押し殺して泣いた。

(……家族なんだから)

微かにぼやける夕日を見上げる。

(お前は、お前が思ってる以上に、みんなに必要とされているんだからさ……)

心の中でそつと。

歩が俺の心に触れていたかどうかはわからないが、どちらでも別に構わない。

それは俺の正直な気持ちで。

結局、歩は家に着くまでの間、俺の背中ですつと泣き続けていた。

1年目2月その1

憂鬱だった。

一年の中で嫌な日を五つ挙げると言われれば、俺は間違いなくこの日をそのうちの一つとして挙げることになるだろう。

二月十四日、バレンタインデー。

改めて説明するまでもないと思うが、今日は何者かの陰謀に操られた女子たちが体裁を取り繕うために大して好きでもない男どもにチョコレートを配って回り、それをもらった一部の男子たちがぬか喜びをしてしまうという、喜劇に彩られた聖人の殉教日なのである。さて。

そんなバレンタインデーに、俺は毎年、最低でも四つのチョコをもらっている。といっても色気のある話などではなく、雪と由香、それに梓さん（由香の母親）と桜さん（直斗の母親）からもらう、いわばお歳暮みたいな性質のチョコレートである。

これに加え、歩が昨日の夜、台所で何やらゴソゴソやっていたようなので、どうやらさらに一個増えそうな気配だった。

……憂鬱だ。

そう。

問題はそのチョコレートなのだ。

もともと俺は甘い食べ物あまり食べない。嫌いなわけじゃないが、甘いのが口の中に残ってる状態がどうにも苦手で、そもそもあまり量を食べないし、食べたあとは必ずしょっぱいものか、最低でも茶か水で口直しをする。

そしてこの、嫌いなわけじゃない、ってところが最大の問題だ。

そもそも食べられないのであれば、いくらバレンタインデーとはいえわざわざチョコを持ってくるやつはいない。しかし、別に嫌いでもないし食べられないわけでもないから、あいつらはやはりセオ

リーダーにチョコを持ってくるのである。

それに加えて、俺の周りには本命でもないチョコを配りたがるヤツらが非常に多く、結果として、毎年俺のもとには致死量を遙かに越える量のチョコが集まってしまっただけである。

と、まあ、そんなわけで。

「今日、あいつの誕生日だなあ」

「うん。そうだね」

ダム、ダム、という音が体育館に響き渡っている。

鳩尾の辺りから昼休みを待望する声が上がりつつある四時間目。

体育の授業でバスケの試合の順番待ちをしながら、俺は隣の直斗と雑談をしていた。

「お前、プレゼントとかも買ったのか？」

「うん。今朝のうちにもう渡したよ。優希はまだ？」

さも当然と言わんばかりの顔をする直斗。

前段のバレンタインとはまったく関係のない話だが、本日二月十日は我らが幼なじみ、水月由香の十六回目の誕生日である。

自分の誕生日でありながらバレンタインのチョコを配って歩かなきゃならないというのはなんとも不憫な話だが、あいつらしいといえばあいつらしいという気もする。

(プレゼント、どうすっかなあ)

去年の誕生日には、俺がバレンタインにもらったチョコを全部綺麗にラッピングしてプレゼントしてみたのだが、全然喜んでもらえなかった。……というか、受け取りを拒否された上に雪のヤツにこっぴどく叱られてしまった。

なかなか合理的で全員がハッピーになれる画期的な発想だと思ったのだが、あいつらには理解してもらえなかったようである。

「……あえて言うなら本人のチョコまで入れてしまったのがまずかったか」

「うん。そういう問題じゃないね」

キュッ、キュッ、というシューズ音が響く。

今日の体育はウチのクラス（一組）と二組の男子の合同で行われており、女子は教室で保健の授業を受けている。授業は試合形式で、それぞれのクラスで三組ずつチームを作り、五点先取の勝ち抜き戦だ。コートを二面使っているので回りはかなり速い。

俺と直斗は同じチームで今は審判係をやっている。

ちなみに、

「あーあ。早く終わんねえかなあ」

得点ボードの裏でやる気なさそうに呟いている将太も、俺たちと同じチームである。

「あん？ お前、球技は結構好きなんじゃなかったか？」

「そういう問題じゃねえっつの」

将太はチツチツと呟きながら、立てた人差し指を横に振ってみせて、

「お前、今日が何の日かちゃんと心得てるか？ 言ってみろ」

「一年でもっとも、お前の登下校時のテンションに差のある日だろ？」

将太は眉間に皺を寄せて、痛いところを、とうなだれたが、

「……いい、いやまあこれまでは確かにそうだったかもしれないが、今年はずうぞー！」

「俺の見る限り、去年と違う要素が一つも見当たらんが」

あえて言うなら高校生になったことぐらいだろうか。

「馬鹿だなあ、お前。いいか？ 俺たちは今どこにいる？」

「体育館」

「だろ！？」

将太は勢いよく叫んでずっと迫ってくると、

「女子は男子のいない教室で保健の授業だ！ つまりこれは、机の中にチヨコをこっそり入れておく絶好の機会！」

ぺっぺっと唾が飛んでくる。

「……うぜえ」

「将太。赤にスリーポイント入ったよ」

「へ？ お、おう、すまん」

直斗に言われて真面目に得点ボードをめくる将太。

「……つまりだ、優希よ。今年のこのシチュエーションは、これまで恥ずかしがってチヨコを渡すことをためらっていた女の子たちにとって、またとないチャンスというわけだ」

「渡す気がそもそもなかった、に一票投じる」

「くっ……これが勝者の余裕ってやつか。眩しいぜ、くそつたれが」
「なんだそりゃ？」

「お前はどうぞせ今年も由香ちゃんや雪ちゃんからももらえるんだろーが」

「そりゃ、恒例行事だしな。羨ましいのか？」

「羨ましいに決まってるんだろ！」

「百パー義理でもか？」

しかも片方は妹だ。

「義理チヨコももらえない男がこの世にはごまんといえるんだよ、ちくしょう！ バーカバーカあ！」

「……」

子供のようにあっかんべーしている将太が、珍しく可哀相に思えてきてしまった。

なにより哀れなのは、教室に戻ったところで非情な現実気付かされてしまうことが完全に目に見えていることである。

「あー、なんだ、その……アレじゃないか？ 由香のやつなら頼めばチヨコくれるんじゃないか、きつと」

「……おお！ その手があったか！」

なかば適当に言った俺の慰めの言葉に、将太はパツと顔を輝かせた。

どうやらこいつはそんなチヨコにでも何らかの価値を見出せているらしい。それはそれで意外と幸せなのかもしれない。

(……ただの定例行事なんだがなあ)
試合が終わり、順番が回ってくる。

……勝ち抜きすぎて、授業が終わる頃にはヘトヘトになっていた。

「直斗、お前、張り切りすぎだろ……」

「何事にも手を抜かない主義だからね、僕は」

平気な顔でそう言っただけのける元バスケット部エース。

と言いつつ、実際のところ直斗はそれほど全力でやっていたわけじゃない。それでも俺たちのチームが勝ちまくったのは、他にも優秀な面子が偶然集まりすぎていたせいである。

「いやあ、ホント、ずいぶん張り切ってくれたもんだねえ」

直斗とは逆隣を歩いてきたクラスメイトがそう言った。

この頭にバンダナを巻いた背の高い男は仲田と違って、俺と比較的仲の良いクラスメイトの一人だ。見た目は明らかに不良で校則に違反した格好ばかりしているが、生活指導の先生以外にはあまり迷惑をかけることのない、まあ見た目よりは多少気のいいやつである。「お前も人のこと言えんだろ。つかお前、タバコの吸いすぎで体力落ちたとか言っただけか?」

「あ、禁煙始めたんよ、俺」

ダボツとしたTシャツの裾を手と一緒にポケットに突っ込みながら、仲田は真面目な顔でそう言った。

「それ聞くの、今年に入ってから三度目だよ」

直斗が突っ込むと、仲田はすまし顔で、

「三度目の正直って言葉があんでしょ」

「通算で十回は越えてると思うけどね」

「相変わらず痛いところ突くね、神薙は」

笑う。

「しかし、今日は藤井も谷も浮かれちゃってんね。ま、帰りにはがっかりになってるのは目に見えてっけど」

と、仲田の口からもバレンタインデーの話題が出る。

ちなみに谷つてのはこいつとよく一緒にいるクラスメイトで、これに佐久間つてのを加えた三人で一つの仲良しグループだ。役割的には俺、直斗、将太の三人と若干似ていて、谷つてのはいわゆる将太ポジションである。

「谷のやつはどうか知らんが、将太のは毎年の恒例だからな」

「ご苦労なことだね、彼も」

「まったくだ」

実際、俺にとってのバレンタインはその程度だった。どちらかといえば由香の誕生日というイメージのほうが強い。

「お、じゃあオイラは学食寄ってくわ」

と、仲田が教室に戻る生徒の列から離脱していく。

「おう。またあとでな」

「じゃあね」

軽く手を上げて、俺と直斗はそのまま教室へと戻った。

余談だが、やはりこの日、将太の机の中からチョココレートが発見されることはなかったらしい。

学校帰りに直斗に付き合ってもらって由香の誕生日プレゼントを買い、家まで渡しに行つて、上がつていけとしきりに要求する梓さんを由香の協力を得ながらどうにか振り切り、直斗と別れて自宅へ戻ってきた頃にはもう辺りは暗くなっていた。

家の門をくぐろうとしたところで、二階のトイレの電球が切れ掛かっていたことを思い出したが、今からUターンして買いに行くのも面倒だったので、とりあえず後回しにしよう　と、そんなことを考えながら、

「ただいまー……」

玄関のドアを開けた、その瞬間だった。

「ハッピー、ばれんたいーんっ！」

「……うおっ」

いきなり飛び込んできたソプラノの声に、俺はドアノブを掴んだままの体勢で仰け反ってしまった。

眼前にはヤケクソのように大量のハートマークがちりばめられたラッピングの箱。

「な……」

箱の陰から、歩の満面の笑顔がひょこつと出てきた。

「びつくりした？」

「……別に」

実はかなり驚いたが、認めたくない。

「本当かなあ？ ……じゃあ、はい」

と、歩はニコニコとその箱を差し出してくる。

俺は眉をひそめて、

「なんだ、この不審物は」

「なにつて、もちろんバレンタインのチョコだよ」

「……チョコレートボム？」

「なんでそんな物騒なもの連想しちゃうの!？」

「いや、だって……なあ？」

一応、受け取ってみた。

「言っておくが、カカオ百パーセントに塩を混ぜても甘さは引き立たないぞ？」

「うう、心の傷を抉るのはやめてください……」

胸の辺りを押さえて大げさに青い顔を試みせる。

どうやら中身は塩チョコレートではなさそうだ。

「ま、いいか。もらっとく。あんがとな、歩」

「どういたしまして……。あ、ちゃんと胃薬も入ってるからね」

「……」

「わっ！ 冗談だよ！ 捨てようとししないでー！」

箱を床に叩きつけようとした俺の右腕に、歩が必死にしがみついてくる。

と、そこへ、

「……なにやってんの」

部活帰りの瑞希が現れて、そんな俺たちの様子に呆れ顔をした。

「いや、なについて、これからこの爆弾の処理を……」

「ひどい！ 心を込めて作ったのにー！」

「そんな予防線はいらん！ 俺が欲しいのは生命の保障だけだ！」

「味の保障ですらないとはー……」

がつくりとうなだれる歩。

「ホント、仲いいわね……」

瑞希の言葉には明らかに皮肉めいた調子が含まれていたが、歩はそんなことに気付いた様子もなく、俺の右腕にぶら下がったままで「それはもう。お兄ちゃんは私のお兄ちゃんなのでー」

ニコニコしながらそう言った。

なんかもう毎日こんな感じのダッコちゃん状態で、こここのところますますスキンシップが強烈になってきた気がする。

瑞希が呆れ顔をするのもわからなくはない。

「ほら、歩。わかったからそろそろ離れれ。このままじゃ靴も脱げ

ん

「はーい」

トン、と床の上に下りる歩。

話し声を聞きつけたのか、リビングに続くドアが開いて雪が顔を出した。

「どうしたの？ あ、二人とも帰ってたんだ」

「おう」

「あら？ この匂い……」

瑞希が靴を脱ぎながらリビングの中へと目を向ける。

台所のほうから何やら甘い匂いが漂ってきていた。

「今、ブラウニーを焼いてるの。クルミをたくさん入れて、それと

優ちゃん用に甘さ控えめで、ね。もちろんみんなの分もあるから、
晩ご飯の後に一緒に食べよう？ …… 歩ちゃん。晩ご飯の支度手伝っ
てくれるかな」

「了解」

元気よく返事をした歩と雪が連れ立って台所のほうへと消えてい
く。

ふう、と息を吐いて、俺は床に置いてあったカバンを手を取った。
「女三人寄ればかしましいとか言うが、あいつは一人でも充分だな
……………」

「…………… あの子があんなにはしゃぐのはあんたの前だけでしょ」

「んあ？」

「ほら」

と、瑞希が俺の眼前に小さなラッピングの箱を突きつけてくる。

「…………… へ？」

「バレンタイン。一緒に住んでるんだし一応ね。…………… 言っとくけど
歩や雪ちゃんみたいな手作りじゃないから」

「お、おう。サンキュな」

意外な出来事に、憎まれ口を叩くのも忘れてしまう。

「どういたしまして」

素っ気無くそう言って瑞希は階段を上っていった。

部屋に戻って二人からもらった包みを開けてみると、歩のは一口
サイズのチョコケーキ。瑞希のは市販のクッキーだった。

敢えてチョコレートじゃないのはアイツらしいというか。

ベッドに転がって歩のチョコケーキを一つ口の中に放り込む。見
た目は若干いびつだったが、味はごくごく普通だった。

「…………… 六十点。まだまだ成長の余地ありってところか」

独り言を呟いてミニコンポのリモコンを手取る。部屋の外では

瑞希が階段を下りていく足音が聞こえた。

電源を入れて、最近ずっと聞き続けている一枚目のディスクを選択する。

曲が流れてくると同時にベッドに仰向けになると、体育の時間に頑張りすぎたせいか急激に眠気が襲ってきた。

ゆっくりと目を閉じる。

……瞼の裏に映った、少年の笑顔。

歩は立ち直ったような素振りを見せている。

神村さんは最善を尽くした結果だと言った。

ただ。

(本当にそうなのか……)

俺の中にはモヤモヤしたものが残っている。

何故だろう　と、そう考えて、すぐに答えがわかった。

(……結局、俺って何も知らないんだよな)

俺が知っていることといえば、血の暴走という現象そのものと、それを起こしたものが二度と元に戻らないということだけ。それを起こす人間にどういった兆候が出るのかとか、どの段階から手遅れになるのかとか、これまでにどういったケースがあったのかとか。

実際に戦ってきてそれなりにわかっているつもりでいたが、実際にはほとんど知らないのと同じだった。

手遅れだと言った神村さんの言葉がおそらく正しいと判断したのだった、それは彼女自身を信用していたからで、彼女の言葉の本身に納得したからではないのだ。

……血の暴走に関することだけじゃない。

悪魔のこと。悪魔狩りのこと。

楓のこと。

いつかは確認しなきゃと考えていながら、日常側に重心を置くことに固執して、結局先延ばしにしていたからで、このこと。

もう、この猶予期間を抜け出さなきゃならない時期に来ているのかもしれない。

……ふう、と、大きく息を吐いて、ミニコンポの電源を切る。

階下から聞こえてくる楽しそうな家族たちの声。

夕食まであと三十分といったところか。

……どうしたものか。

ぼんやりとモヤのかかった頭でこれからのことを色々と考えながら、俺はゆっくりと夢の世界へと落ちていったのだった。

1年目2月その2

短い二月も下旬に差し掛かったとある放課後のこと。

相変わらずの長い長い階段を息を切らしながら上りきると、夕日に包まれた目的地にはいつもの光景がある。

寂寥とした境内の中、箒を手にたたずんでいる神村さんは、足もとまで伸びた影で来訪者の存在に気付いたのか、声をかける前にこちらに視線を向けてきた。

「不知火さん。なにか？」

いつもどおりの巫女服姿を見て、わざわざ掃除の前に着替えてきたのだろうかとか、もしかして家の中でも常時あの格好なのだろうかとか、そんなどうでもいいことを考えつつ、

「ちよつと神村さんに話があつてな」

「話？」

怪訝そう、というよりは不審そうな顔でこちらを見つめる神村さん。

俺は頷いて、

「俺も楓のやつみたいに神村さんに協力させてほしいんだ」

ピタリ、と、箒を動かす神村さんの手が止まる。

……それが俺の出した結論だった。

悪魔や悪魔狩りのことを詳しく知りたいなら、その空気が一番濃いとこで過ごすのが一番手っ取り早い。とはいえ、当然のことながら悪魔狩りに就職するつもりなどはなく、そこで思い出したのが、どうやら組織に属さずに神村さんの手伝いをしているらしい楓のことだった。

本当はその楓に直接話を持ちかけようと思ったのだが、あいつからは去年の夏、瑞希がさらわれた事件以降連絡がなく、こちらから連絡する手段もなかったのここに来るしかなかったのである。

「必要ありません」

神村さんは箸を動かす手を再開させながらきっぱりとそう答えた。

「……清々しい拒絶っぷりだな」

しかし、それは予測の範囲内だ。楓からは“とにかく大人しくしている”というようなことを言われていたし、神村さんもあいつと同じ見解だとすれば、俺の申し出をすんなり受け入れるはずはない。そこで俺は手持ちのカードを一枚切ることにした。

「楓のやつが言ってたぜ。人手、足りてないんだろ？」

再び神村さんの手が止まる。

そしてゆつくりとこちらを見た。

「楓さんが、そんなお話を不知火さんに？」

「いや、カマをかけてみただけだ。けど、その様子だとホントっばいか？」

「……」

注意して見ていなければ気付けない程度に、神村さんの眉間に皺が寄った。

……カマをかけた、といっても完全に当てずっぽうだったわけじゃない。神村さんが所属する“御門”とかいう悪魔狩りは、組織のトップが代わると同時に組織の要職に就いていた人間が立て続けにいなくなり、内部が悪魔許容派と悪魔排除派に分かれてゴタゴタしているらしい。というところまでは、去年の夏、瑞希の一件のときに楓から聞いた情報だ。

それに加え、図書館で昔の新聞なんかを少し調べてみたところ、この町周辺では二、三年ぐらい前から未解決の失踪、殺人事件などが急激に増えていることがわかった。一般的に悪魔の存在が認知されていないことから、この未解決事件のうち少なくとも何割かはそれ絡みの事件だと推測できる。

あとは想像になるが、悪魔狩りの内部がゴタゴタし始めたのがその二、三年前のことで、そのせいで悪魔退治に手が回らなくなりつつあるんじゃないか、というのは、それなりに筋の通ったストーリー

「だろう。」

それに加え、ちょうどその頃から活動を始めていた俺と雪の存在に彼らが長く気付けなかったことにも理由が立つ。

そして今の神村さんの反応。

おそらく凶星だろう。

「理由を、聞かせてください」

神村さんがこちらへと向き直り、真っ直ぐに見つめてきた。

その視線は相変わらず揺らぎが少ない。悪く言えば冷たく、良く言えば純粹。何か後ろめたい気持ちはこちらにあれば思わず目を背けてしまっただろうし、彼女に対して悪意を持つものが見れば、まるで鏡のように反射して敵意を感じさせられてしまっかもしれない。

ただ、俺はこれまで見てきた彼女の行動の数々から、そんな視線をかなり好意的に受け止めることができていた。

「この町を守りたい　だとかつこよすぎるか。夕子の悪い連中をやっつけることで、知り合いがわけのわからん事件に巻き込まれる確率を下げたいってのが一つ」

これは、以前から雪と一緒にやってきた悪魔退治と同じ動機だ。

俺は続ける。

「あんたらと通じることで俺や妹の身の安全を確保したいってのが二つ目」

「それについては危険が増える可能性も考えられます」

即座にそう返してきた。

「わかってる。けど、色々総合的に考えればそっちのほうがいいと判断したんだ。神村さんやあの　緑刃さん、だっけ？　あの人みたいに話を通じる人もいるみたいだしな」

「そうですか」

「最後の一つは、歩のことだ」

「神崎さんですか？」

神村さんは聞き返してきたが、その言葉に不思議そうな響きはない。

「どうやらとぼけるつもりもないようだ。」

「歩のやつも、あんたら悪魔狩りとなにか関係あるんだろ？ 神村さんがあいつのこと詳しくそうだったのもそうだし、あいつが昔入院して今も通っているのが悪魔狩りの管理する病院だったってのも偶然にしちゃできすぎてる。あいつが持っている超能力のことも」

「はい。神村さんのご両親は御門の優秀な悪魔狩りでした」

「あっさりと神村さんは肯定した。」

「……やっぱりか。そのこと、歩は知ってるのか？」

「彼女を悪魔狩りとしては育てないというご両親の方針で、はつきりとは伝えていなかったと聞いています。ただ、最低限の知識は与えられていたようなので察してはいると思います」

「じゃあ、歩の両親が二年前に死んだって言ってたのは？ 事故とかじゃないのか？」

「三年前の秋に悪魔との戦いで命を落としています」

「また、その時期の話だ。」

「俺は一つ息を吐いて、」

「そういうこともっと知っておきたいんだ。何かあったときのために」

「だから私に協力する、と、そういうことですか？」

「ああ」

「そうですね」

「神村さんは一つ頷くと、やはりそれほど考えた様子もなく言った。」

「わかりました。では協力してもらうことにします」

「え？」

「拍子抜けするほどあっさりとした反応だった。」

「……いいのか？」

「はい。不知火さんの立場はまだ微妙なところなのですが」

「微妙？ ……つまり敵か味方かわからん、ってことか？」

「はつきりと組織に属しているほんの一部を除き、悪魔はすべて黒か灰色です。私たちにとって」

神村さんは俺から視線をはずし、すつと横を向く。

釣られて俺も彼女の視線を追うと、腰ぐらいまでの高さの柵の向こうには夕日に染まった町の景色が広がっていた。

「もちろん不知火さんに限りません。妹さんもそうですし、楓さんもそうです」

「……………なら、どうして承諾したんだ？」

神村さんの視線が戻ってくる。

僅かな沈黙。

「不知火さんが信用できる人だと判断したからです」

そのためらいは理由を探していたのか、それともその言葉を口にすることを迷っていたのか。

ただ、俺は少し驚いて、

「灰色じゃなかったのか？」

「悪魔狩りにとってはそうですが、私にとってはそうではありません。ん。……………楓さんもそうです」

「ああ……………」

そういう意味か。

「あくまで私個人の思いです」

神村さんは淡々と念を押すようにそう言ったが、俺にとってはもちろんそれで充分だった。

「オーケー。神村さんに信用してもらえりゃそれでいいんだ。別に悪魔狩りの一員になろうってわけじゃないからな。……………けど、意外だな。信用を得られるようなことをやった覚えはないんだが」

「何度か手伝っていたきました」

先日のことや、昨年の直斗の毒入り弁当事件のことだろうか。

いずれも俺の周りの人間に関係のある事件だったので、俺としては手伝ったというよりは手伝ってもらったという認識だった。

「それに」

「ん？」

「神崎さんが、不知火さんに相当懐いているようですし……………」

「…………え？」

びつくりしたのはその台詞ではない。

こちらを見つめる神村さんが 注視していなければわからない程度ではあったが そこに微笑を浮かべていたのだ。

「だから信用できる人だと思いました」

冗談なのか、本気なのか。

神村さんはその答えを口にするのではなく、

「では、私は掃除がありますので。…………何かあるときには私のほうからご連絡します。くれぐれも勝手な行動は慎むようにしてください」

その言葉に、一瞬見とれていた俺は急に我に返った。

「…………ああ、わかってる、何かあったら必ず相談するよ」

「お願いします」

と、神村さんは掃除に戻っていく。

いや。

戻っていかうとしたのだが、

「おや？」

境内に響いた第三者の声。

俺と神村さんが同時に振り返ったその先、神社の奥へと続く道から、厚手のジャケットに身を包んだ男がタバコを口にくわえた格好で歩いてくる。

見覚えのある顔だった。

「珍しいじゃないか。嬢ちゃんが楓以外の男を連れてくるなんて」

「青刃さん」

神村さんはチラッと男を見て呟くようにそう言った。

(…………ああ。あの初詣のときの)

青刃。

俺に妙な質問をしてきた悪魔狩りの男だ。

「よう。優希くん、だったかな」

相変わらず軽い口調で手を上げる青刃。

「どうも」

俺は短く言葉を返す。

「いいやつとか悪いやつとかそういう印象は特にないのだが、どうも相性の悪そうな相手だった。」

「青刃さん、なにか御用ですか？」

と、神村さんが口を挟む。

その口調は少し怪訝そうではあったが、咎めるようなものではなかった。もしかするとそれなりに親しい間柄なのかもしれない。

青刃は笑って、

「いや、単なる野次馬さ。俺にとつちや珍しい組み合わせに見えたんでね」

俺と神村さんを交互に見ると、

「で、二人でいったいなんの相談だい？ 俺の仕事が減るような内容だと大いに助かるんだがね」

「……」

ただの当てずっぽうなのか、俺たちの会話を陰で聞いていたのか。いずれにしても、俺たちの会話の中身は聞かなくてもわかっていくようだった。

(……やつぱ苦手だ、こいつ)

だが、神村さんはこの青刃という男のそういう態度に慣れているのか、いつもどおりの淡々とした口調で、

「青刃さんのご想像のとおりです。ですが、不知火さんはあくまで私のお手伝いをしてくださるだけです」

「組織の一員になるわけじゃないってことね。オッケーオッケー」

青刃は少しおどけた口調で、

「じゃあ紫喉のおっさんには黙っていたほうがいいのかな」

「それは青刃さんにお任せします」

「ま、元から言う気もないが」

笑う青刃に、俺は尋ねてみた。

「なんだ？ 悪魔狩りの中にもやつぱうるさい上司みたいのがいる

のか？」

「ああ、いるいる。とびつきりうるさい年寄りかな。いや、一番偉いやつは俺より若くて控えめなんだが、その一つ下のがうるさいわけさ」

青刃は嬉々として上司の悪口を始める。

「もう五十歳も過ぎてんだから、あとは若いもんに任しときゃいいのに、ああだこうだとうるさくてよオ」

「青刃さん」

神村さんがたしなめるように呼んだが、青刃はまったく気に留めた様子もなく、

「しかも組織のトップ ああ“光刃”っていうんだが、そいつがまだ二十歳にもなってないもんだからさ。そのおっさんが後見人面して色々取り仕切ってた。それに」

一瞬。

真面目な顔になった。

「いつだったか、あんたの妹を殺させようとしたのもそいつだぜ」

「青刃さん……！」

神村さんがかなり強い声を出した。

「……おっと。調子に乗りすぎたかにやつと笑う。

反省の色は見えない。

「……」

神村さんはしばらく黙って青刃を見つめていたが、やがて俺のほうに向き直ると、

「不知火さん。今日はそろそろ帰ってください。私もまだ仕事が終わっていませんから」

背中を向け、境内の中央のほうへと戻って行ってしまった。

「……あら。怒らせたかな」

と、青刃は仕方なさそうに笑いながら頭を掻く。

「すまん、優希くん。話の邪魔をしちまって」

「ああ、いや」

「俺も退散するよ。今後ともよろしくな。……いろいろと」

青刃は軽く手を上げ、さっさと神社の奥へ引っ込んでいった。

(……なに考えてるんだ、あいつ)

その背中を見送りながら困惑する。

前に会ったときもそうだ。あの男は組織の内部のことを僅かながらに俺に暴露してみせている。

(……どういう意図なのだろう。

神村さんとの会話を聞く限り　これは青刃本人も言っていたが

俺たちの敵、つまり悪魔排除派ではないようだが。

(……わからん)

頭を振る。

今の時点では考えても答えは出ないだろう。

俺は境内の中央辺りを見たが、神村さんはもう話をする気はないようだった。

なら、ここにいても仕方ない。

そして、俺はそのまま神社を立ち去った。

……少々すつきりしない気持ちを胸に残したままで。

1年目3月その1

- - - -

ああ、またこの夢か。

薄っすらと開いた眼でその光景を見た瞬間、嫌気が差した。

夢であることを自覚できる夢を明晰夢というらしいが、こつ毎度毎度同じ内容だといささかありがたみがなくなってきたな、と、夢の中の俺はため息を吐いた。つもりになった。

実際には夢の中の俺は少し息を切らしていて、ため息など吐く余裕もないらしい。

しかし 何度同じ夢を見るのだろうか。

昨日も、一昨日も、その前も。

その前もその前もその前も。

もう何度見たのか忘れてしまった。

狭い部屋。

ひんやりとした明け方の空気。

風に揺れるレースのカーテン。

俺は手にしていたものをフローリングの床に放り投げ、クローゼットの前に立った。ここは三階だが、上下左右いずれも無人なのでうるさいと苦情を言ってくる隣人もいない。

クローゼットを開けると中には同じデザインの服がずらりと並んでいる。

我ながら悪趣味な服ばかりだなと苦笑しながら、新しい服をその一番隅っこにかけた。クローゼットの中はぎゅうぎゅうになってそろそろ入る隙間がなくなってきた。新しいクローゼットを買うことも考えたが、この部屋は玄関の入り口が小さいので大きな家具

を入れるのは一苦勞だ。それなら古い服を処分することをいい加減考えたほうがいいのかもしれない。

なにを馬鹿な。

そこで俺はこれが夢であることを思い出す。

夢なのにクローゼットの整頓を気にするなんて馬鹿げた話だ。どうせ次に同じ夢を見るときはまた一着分のスペースができていないのだから。

ただ、どうやら夢の中の俺は真剣にクローゼットのことを悩んでいるようだった。

馬鹿馬鹿しい。

毎晩見る夢がこんな地味なことで真剣に悩んでいるだけというのは、本当につまらない。どうせ毎晩見るのなら競馬で万馬券を当てるとか、どこかの女子大との合コンに参加する夢とか、そういう楽しい夢にして欲しいものだ。

ああ、腹が減った。

これは夢の中の俺だろうか。

現実の俺だろうか。

時計を見ると、四時四十二分だった。なんとも現実味のある時間だ。

「腹が減った……」

喋った。

つまり腹を空かせていたのは夢の中の俺だったのだ。あるいは現実の俺が腹を空かせているから、夢の中の俺がそれに引っ張られたのだろうか。

そう考えると、現実の俺と夢の中の俺にはそれほど大きな違いはないような気がしてくる。

パタン、とクローゼットの扉を閉めた。

ぐらりと視界が斜めになって、頭の中にノイズが走る。

窓を閉めよう。

コン、と何かを蹴飛ばしてしまったが、なに、どうせ夢の中だから気にする必要はない。

窓は閉まっていた。

冷たい風が入ってきていたと思ったのは気のせいだったらしい。

それとも気付かないうちに窓を閉めていたのか。

ああ、いや。

きつと今閉めたのだ。

だから鍵をかけよう。

カラスが鳴いている。スズメだったかもしれないが、まあどっちでもいい。

朝が近付いているのだ。

そろそろ寝て起きなきゃならない。

夢の俺から、現実の俺に。

……腹が減った。

きいい、とドアが軋んで。

ばたん、と閉じる。

夢の中の俺は、

-
-
-
-

「……優希くん、どうしたの!？」

玄関のドアを開けた瞬間、由香がびっくりした様子でそう言った。
木曜日。

現在、時刻は午前七時五十五分。

いつもここから十分以上待たされるのに、俺がすでに登校準備をきっちり終えていたから驚いた　というわけではなさそうで、

「あー……ちよつと夢見が悪くてな」

どうやら俺の顔色を見てびっくりしたようだった。

顔色が悪い　というのは、起こしに来た歩と、玄関ですれ違った瑞希と、台所で出迎えた雪の全員からも指摘されていたことで、その後に鏡を見たので自覚もある。

今日の俺はそのぐらいひどかった。

「大丈夫？　風邪？　直斗くんのが移っちゃったのかな……」

「ああ、いや、そんなんじゃない　って、あれ。直斗はどうした？」

いつも隣にいるはずの直斗の姿がそこになかった。

「今朝になつて熱が上がっちゃったみたい。今日はお休みだった」
そう答えた由香の言葉に、昨日マスクをして辛そうにしていた直斗の姿を思い出す。

ただ、それと俺の体調とはおそらく関係ない。

(……変な夢見ちゃったなあ)

と、改めて思い出す。

本当に支離滅裂な夢だった。

夢の中の自分が現実とイコールであるとは限らないが、それでも普通はどこかに自分らしさが残っているものだ。夢の中とはいえ意識の主体は自分自身なのだからそれは当然である。

しかし。

今朝の夢は、とてもそうは思えなかった。だいたい、夢の中の俺はしきりに“また同じ夢か”みたいなことを独白していたが、こん

な夢を見るのは初めてのことだ。

それだけじゃない。

明け方の薄暗い、見覚えのない部屋。

クローゼットの中を見てデザイン云々言っていたが、俺にそんなこだわりはない。

そして、起きたときも別に腹は減っていなかった。というかむしろ吐き気を催していたくらいである。

これらの状況からわかるように、今朝の夢の中の俺は、現実の自分との共通点を見つけるのが大変なほどで、まるで夢の中にいる別の自分に一時的に意識を乗っ取られてしまったかのような気持ちの悪さだけが残っていた。

ああ、いや。

夢ごときで何を馬鹿なことを考えているんだろうか。

夢は夢だ。

夢の中の自分に体を乗っ取られるとか、夢の中に引きずり込まれるとか、そんなことは絶対はない。夢ってのは結局、俺の脳みその中のフィルムが意識の銀幕に映し出されただけのもので、ホラー映画よろしく登場人物がそこから飛び出してくるなんてことはあり得ないのだ。

「もうすぐ二年生だね」

「……あー？ なんだって？」

考え事をしていて、隣を歩く由香の話を完全に聞き漏らしていた。それでもさすがは幼なじみ、そんな俺の反応も慣れっこという感じ、

「今年一年、どうだった？ って」

「別にいつもと」

春日和の空を見上げる。

夢見が悪かったおかげで今日は登校にも余裕があった。

「……そんなこともねーか」

よく思い返してみれば、この一年はむしろ色々ありすぎたくらい

だろう。悪魔狩りや神村さんのこと、楓との再会、雪や瑞希、直斗が狙われた事件。そして歩との出会い。

どれか一つとっても大事件である。

「逆にいろいろありすぎて一つ一つのインパクトが薄まっちゃった気がするな」

「そんなにいろいろあったの？」

「まあな」

その非日常的な出来事のすべてに関わっていない由香にしてみれば、そんな俺の言葉に不思議そうな顔をするのも当然のことだろう。だが、いいのだ、それで。

こいつが悪魔だの悪魔狩りだの、退治するだの殺すだの、そんなことに関わっている姿は微塵も想像もできないし、関わらせちゃいけないとも思う。もちろんそれは本来、雪を含めた他の連中についても同じことなのだが、こいつの場合は特にそう思うのだ。

こいつは俺にとっての“日常のシンボル”みたいなものなのである。

「いかにも平凡な日常、って顔してるもんな」

「……え？」

きよとんとした顔を見て苦笑すると、由香はますます困惑の表情を見せた。

一年生最後の定期テストが先週で終わり、残りの二週間ほどはいわば消化試合である。予定のカリキュラムをすべて終えて余談的な内容になっている授業も多い。

そんな中、一時間目の英語、二時間目の数学については残念ながらいつもと変わらない難解な内容で、三時間目の古典の授業に差し掛かる頃には、今朝からの調子の悪さも手伝って俺の意識は朦朧とし始めていた。

古典の岩上先生（このクラスの担任でもある）の低くマイペースな声を聞いていると、頭が自然と舟を漕ぎ始める。

（昼休みは食欲より睡眠欲だな、こりゃ……）

よく頑張った。

むしろここまで起きていた自分は誉められるべきだろう。

……とまあ。

そんな甘えたことを考えながら、俺が夢の世界の入り口へと差し掛かった頃だった。

コン、コンと教室のドアがノックされて、岩上先生の眠くなる声が途切れる。

俺も一瞬覚醒してそちらへ視線を向けた。

「どうぞ」

生徒たちの視線が注目する中、教室に入ってきたのは白衣姿の女性 養護教諭の山咲先生だった。

入ってきた直後、チラツとこちらを見た山咲先生と一瞬目が合ったが、先生はそのまま何も言わず教壇へと歩み寄っていく。

女性にしてはかなり背の高い山咲先生と、定年間際でそれほど大柄ではない岩上先生では十センチ近い身長差があつて、少し身を低くして何事か耳打ちしている姿はちよつと滑稽だった。

「水月」

顔を上げた岩上先生が、相変わらずののんびりとした口調で呼ぶ。

「え？ はい」

由香はびつくりした様子だった。

教室内の視線がすべて彼女に集まる。

「自宅から電話だ。ちよつと山咲先生に付いて行ってこい」

「あ、はい」

少しざわついた。

どうとということでもないのだが、授業中にこつこつと呼び出されるのはまあそこそこ珍しいことだ。

（……自宅ってことは梓さんからか）

竹を割ったような性格の由香の母親のことを頭に思い浮かべつつ、あの人が授業中に呼び出すってことはそこそこ大事な用件なんじゃないだろうか、なんてことを直感的に感じた。

「どうやらその予感には当たっていたらしく。」

由香は結局教室には戻ってこなかった。

そして、昼休み。

「ちわー」

保健室のドアを開けると、その部屋の主はまるで俺が訪れることをわかっていたかのように、

「ようこそ。不知火くん」

「あれ？ 保健室は休憩所じゃないって言わないんですか？」

「休憩しにきたわけではないでしょう？」

見透かしたかのような山咲先生。

眼鏡の白衣姿と右手の指にかけたコーヒーカップが相変わらずの知的オーラを放っていた。

何も答えず後ろ手にドアを閉めて、チラッと部屋の奥のベッドへ目を向けると、

「今は誰もいませんよ。仮病の生徒が一人いましたが、先ほど追い出しました」

「仮病とか決め付けは良くないっす」

「エキスパートは言うことが違いますね。……コーヒーでもどうぞです？」

珍しく歓迎してくれるようだ。

二人がけソファに座ると同時にコーヒーが出てくる。

「インスタントですか」

「質よりも量を重視するほうです。キミもどうせそうでしょう？」

「どうせって、失礼な。俺は両立の夢を追い求める派です」

「ああ。だからキミは可愛い子ばかり選んで周りに侍らしているん

ですね」

「人聞きの悪いこと言わんでください！」

選んだつもりも侍らしたつもりも つもりというか、そもそもそんな事実はない。」

山咲先生は微笑しながらコッソ、と、人差し指で机を軽く叩いて、「ま、いいでしょう。キミが聞きたいのはその中の一人のこと、でしょう?」

「だから ああ、もういいや。……つか、先生が呼んだんでしょ。あのときの視線、明らかにあとでここに来い、って言ってましたよ」

そう言うと山咲先生は知りません、と、とぼけた。

「まあ、どっちでもいいっすけどね」

いずれにしてもたぶん俺はここに来ただろうから。

出されたコーヒーによろやく口をつけると、口の中を焼くような熱さと濃厚な香り、舌の付け根辺りには独特の苦味が広がった。

「三時間目の呼び出し、ただ事じゃないでしょ。あいつ、カバンも置きっぱなしでしたよ」

と、持ってきた由香のカバンをテーブルの上に出す。ぶら下げられたストラップがテーブルにぶつかってカチャリと音を立てた。

「ただごとじゃない……まあ、そうですね。正確にはただ事じゃなくなりかけました」

コポコポ、と、自分のカップにコーヒーを注ぐ山咲先生。

「なにがあつたんです?」

尋ねると、山咲先生はほんの少し間を置いて言った。

「鉄也さんが職務中に大怪我をして救急車で運ばれたそうです」

「おじさんが?」

鉄也 水月鉄也さんは由香の父親だ。刑事をやっていて、梓さんとは二十歳以上も離れている。その職業の割には(少なくとも普段は)温厚な人で、俺や直斗も小さい頃は色々おもちゃを買ってもらったり遊びに連れていってもらったりしたものだ。

だから山咲先生のその言葉は　多少予想していたとはいえ
少なからず俺を動揺させた。

「それで、大丈夫なのか？　大怪我、って言い方するってことは、
命には別状ないってことなんだろう？」

「と、つい先ほど梓から連絡がありました。ただ、頭蓋骨を含め全
身数箇所の骨折で、全治は二ヶ月から三ヶ月ほどになりそうとの
とです」

「……そうか」

ホッと胸を撫で下ろす。

心配であることに変わりはないが、命に別状がないというこ
とならそう慌てることもない。

一息。

「……ちなみに原因は？」

「はつきりとは聞いていません。ただ……」

山咲先生はコーヒークップの上に視線を落とす。

「彼が最近、殺人事件の容疑者を追っていてなかなか家に帰ってこ
ないという話は、梓から聞いていました」

「殺人事件か……」

すると、その容疑者に襲われたのだろうか。

「一緒にいた同僚の刑事二人も重体のようです」

「刑事三人で？」

驚いた。

容疑者は複数なのだろうか。

「……いや。それとも。」

つい最近調べた町の未解決事件のことが頭をよぎる。

そのうちの何割かは“あちら側”の存在が関わっている可能性が
ある。

まさか。

いや、わからない。

わからないが

「……………」
俺が考え事をしている間、山咲先生は何も言わずに外を眺めていた。

……まずは神村さんに確認してみるべきだろう。
時計を見る。

神村さんを屋上に呼び出して話を聞くぐらいの時間はありそうだった。

「不知火くん」

俺が無言でソファから立ち上がると、山咲先生はチラリとこちらを見て、

「入院先は隣町の公立病院です。学校が終わったら、カバン届けてあげてください。梓も多少動揺していたようです。あなたの顔を見れば少しは安心するでしょう。二人のことをお願いします」

山咲先生は梓さんの幼なじみだ。表情こそ変えないがやはり心配なのだろう。

「……相変わらず人使い荒いっすね」

憎まれ口を返して、俺は由香のカバンを手に取る。

もちろん言われなくてもそのつもりだった。

そうして保健室を出ようと、ドアの取っ手に手をかける　と。

ドアは勝手に開いた。

「え……………」

目の前にはお下げの少女が無表情に立っていて、

「不知火さん」

いつもよりほんの少し、ほんの僅かに早い口調で神村さんは言った。

「協力をお願いします。楓さんの身に危険が迫っています」

「え……………」

高校一年終了間際の三月中旬。

どうやら俺は、すんなりと二年生には上がれない運命のようだった。

た

。

「俺を殺しに来たってわけじゃなさそうだな」

「そりゃそうさ」

青刃は軽く肩をすくめ、トレイに乗っていたパンを一切れ手にとつてかじりついた。

「お前を殺すつもりなら俺一人じゃ役者不足だ」

「そんなことはわかってる。だから外に誰かいるんじゃないかと思つたのさ」

「いずれ殺されると思ってるのか？」

「紫喉のヤツはそのつもりだろ？」

「にもかかわらず大人しく捕まっている」

「お前らに殺されるなんて毛ほども思っていない。ここを出るのはお前らの悲壮な間抜け面を拜んでからでも遅くはないさ」

「ギリギリまで様子を見てもらえるってことか。そいつはありがたい」

青刃は軽薄な笑みを口元にこぼした。

「けど、お前のその自信、いつか命取りになるんじゃないかと思ってるぜ、俺は」

「取ってみろよ」

楓の威圧に、青刃は苦笑を返す。

「そう敵意をむき出しにするなよ。俺はどっちかつーとお前の味方なんだぜ？」

フン、と、楓は鼻を鳴らし、興味を失って視線を横にそらした。

そして考える。

……今日の未明、隣町のとある民家で三人の青年が殺された。その三人はいずれも二十歳前後の若い ニュースではフリーターと報じられたが、実際にはこの御門の悪魔狩りだった。

楓にかけられたのは、その三人の殺害容疑だ。

根拠は二つ。

その三人が悪魔排除を進めようとする若手グループのリーダー格の男たちだったこと。

そしてもう一つは

「闇の力を操る妖魔族は数自体が圧倒的に少ない。だからまあ、お前が疑われたのも仕方ないさ」

と、青刃は言った。

そう。

楓が操るのと同じ闇の力　その力の痕跡が現場に残されていたことだ。

そして楓は今日、日の出と同時ぐらいにその身柄を拘束された。もちろん直接的な証拠はない。

が、楓自身のアリバイを証明するものもない。

この状況。

一定期間、次の事件が起こらなければ、おそらく紫喉は楓が犯人だったと決め付けて処断する腹づもりだろう。やろうと思えば、その間に何か違う状況証拠をでっち上げることだってできるはずだ。

いや、この事件自体でっち上げという可能性も

(……いや)

楓は考え直す。

紫喉は昨年、似たような手口で一度失敗しており、それ以降、内部でも監視の目は強くなっているはずだった。

あれ以降、もう一方の盾　緑刃がそうだった行為に対して目を光らせている。彼女は必ずしも楓の味方ではなかったが、少なくとも公平な存在ではある。それらの監視の目がある中で、ただでさえ珍しい妖魔族の事件をでっち上げるとは、いくら組織のナンバー二である紫喉といえども難しいはずだった。

とすると、事件そのものは実際にあつて、本物の妖魔族か、あるいはその血を持つ人間が暴走して起こしたもの。紫喉は偶然起こったその事件を利用して楓を抹殺しようと考えている、というのがもつともらしいシナリオだろうか。

そうだとすれば、真犯人が捕まった時点で楓の容疑は自動的に晴れるということになるが、問題は紫喉とその手の者が、次の事件を

起こす前に犯人を密かに排除し、楓に冤罪を押し付けたままにしようとする可能性も高い、ということだ。

となると、時間はない。

紫喉たちよりも先に真犯人を突き止め、表に引きずり出してくる必要がある。

が

楓はこのとおり身動きが取れない状況だった。

「嬢ちゃん、早速動いたみたいだぞ」

トレイの上の晩飯は半分になっていた。

「どうやら最初から青刃自身の分も含まれていたらしい。

「おそらく不知火優希に助けを求めたんだろう。……俺にじゃない、
って辺りがちよっぴり嫉妬しちまうね」

「……」

楓は言葉を返さず、ごろりとベッドに転がる。

そういうことなら。

せめて、その結果を待ってみてやるか　と、そう思った。

- - -

リノリウムの床が夕日のオレンジを反射して寂しげな輝きを放っている。

最近、妙に病院に縁があるな　と思いながらエレベータを下り、
受付で聞いた番号の病室へと向かった。

静かだ。一般の面会時間はもう終わっているのだろうか。

左右に分かれた廊下を左に曲がる。

病室はその突き当たりであった。

水月鉄也。間違いない。名前が一つしかないところを見ると個室なのだろうか。

入り口の扉は開きっぱなしだった。

人の気配があったのでそのまま顔を覗かせると、

「ユウくん？」

中の人物は声をかける前に俺の存在に気付き、振り返って歩み寄ってきた。

「ども、梓さん」

俺が入り口でかしまって挨拶すると、梓さんは軽く片手を上げて、

「よっ。どうしたのよ、急に。ここ、誰に聞いた？」

赤い太文字でロゴの入ったシャツにジーパンというラフな格好。

まるで子供のように活発そうな顔立ちのおかげでその格好にも違和感がない。

もう三十歳になったはずだが、どう見ても大学生にしか見えなかった。

「って、知ってるのは晃しかないか。あいつ、ユウくんに話したんだ？」

「ええ、まあ。なんか梓さんがへこんでいるみたいだから慰めてやってくれって」

「冗談でしょ。ユウくんに心配されるほど落ちぶれちゃいないわよ、あたし」

梓さんは母娘で揃いのポニーテイルを揺らしてニヤツと笑った。

「ま、あの人も結局たいしたことなかったしね。鎖骨とアバラと手首が折れたのと、あと頭がちよつと割れちゃっただけみたい」

「……大したことありまくりなんすけど、それ」

「そう？」

梓さんはケラケラと笑って、

「あの人、よく骨折るのよねえ。あたしも木刀であの人の腕折ったことあるし」

「……」

ちなみにこの人は昔かなりのワルだったそうで、いつも今のよう
な武勇伝を冗談交じりに語ってくれるのだが、冗談に思えたことは
ただの一度もない。

「あ、そうそう。これ、由香のカバンです。なんか慌てて忘れてっ
たみたいで」

「あら。あの子ったら……」

梓さんは一瞬母親の顔になって、

「ありがと。……できるだけ大げさにならないように伝えただけ
ど、あの子には逆効果だったみたいね」

「ま、由香ですからね。そんなもんでしょ」

母親の前で言うにはやや失礼な発言だったが、梓さんはいつも俺
の言葉の意味と意図を正確に理解してくれている。

「そういうドジなところも愛らしくてついついお嫁さんにしたくな
っちゃうってこと？」

「いや、そんな意図はこれっぽっちも」

即座に否定したが、

「まあまあ、照れなさんなって。……でも困ったわね。あたし、ユ
ウくんもナオくんもどっちも好きなのよ」

「はあ。それは光栄です」

改まって言われると妙に照れる、なんてことも梓さん相手だ
と特になく。

「将来的にはどっちもあたしの義理の息子にしてやろうと画策して
るんだけど。……まあ片方はあの子がどうにかしてくれるとして

」

「ちょっとちょっと、梓さん。あんま無茶な期待かけないでやって
くださいよ。それにどうやったって両方は無理ですってば」

「いざとなればもう一人女の子を産む覚悟があるわ」

そりゃ年齢的には充分可能だろうけど。

「それだと最低でも十七歳の年の差になりますが……」

「あら。ユウくんはオジサンになってから若い娘と結婚するのが夢なんじゃなかった？」

「何故知ってる……」

「勘よ、勘」

にんまりと笑う梓さん。

俺の周りにはエスパーが多すぎる。

これ以上この話題を続けてもロクなことがなさそうだったので、俺は話題を変えることにした。

「ところで……おじさんは？」

奥のベッドはまだ無人だ。

「こっちに移って来るのは夜になりそうね。先に着替えとか必要なものを用意してたところよ」

「夜ですか」

とすると、話を聞くのは無理かもしれない。

「由香はどこ行ったんです？」

「さっき待合室でウトウトしてたわ。死ぬことはないとわかって安心しちゃったみたいね」

「そうですね」

そう言った梓さんの顔も少し疲れているように見えた。

豪放を絵に描いたような人だが、その反面愛情の深い人だ。大怪我をした夫のことが心配でなかったはずはない。

ただ、それを口に出すと即座にチキンウィングゲームロックをかけられそんな気配だったので、とりあえず言うのはやめておくことにしよう。

「……んー？」

「へ？」

気付くと、梓さんの顔が十センチぐらいの距離にあって俺は思わすのけぞった。

「ユウくん、なんか生意気なこと考えてない？」

「滅相もございませんー！」

反射的に直立不動の形を取る。

……俺と直斗の小さい頃つてのは、梓さんと一緒にいた時間がかなり長かった。俺の伯母さん（瑞希の母さん）はいつも一緒にいられたわけじゃなかったし、直斗は両親が共働きだったから、基本的に専業主婦だった梓さんに面倒を見てもらうことが少なくなかったのである。

そういう意味で、目の前にいるこの人は俺の人生においておそらくは五本の指に入る恩人の一人であり、これから先を含めておそらく一生頭の上がない人でもあった。

「ま、いいか」

さすがの梓さんも、謎の直感だけで俺にフロントフェイスロックをかけるのは思いとどまってくれたらしい。

……正直なところ、梓さんが昔から折檻プラス悪戯用に使用していたこれらの関節技については、この歳になると痛みよりも恥ずかしさのほうがツライのだが、梓さんはそんなのお構いなしで未だにこれらの技を仕掛けてくる。あの直斗でさえ、梓さんにはいつも圧倒されっぱなしなのだから、まあこの人の無敵っぷりがどの程度のものかはわかっていただけだろう。

「そうだ、ユウくん。今日はちょっと遅くなりそうだから、悪いんだけどあの子を家まで送っててもらえないかしら？」

「ええ。まあそのつもりでした」

梓さんはここに泊まるつもりなのかもしれない。

「じゃあ任せた」

平手で思いつきり背中を叩かれ、一瞬息が詰まった。

……華奢な体格からは想像できない馬鹿力だ。

「明日、ちゃんと学校に行くようにって伝えといてね」

「……りょーかい」

軽く咳き込みながら、俺はちよつと涙目でそう答えたのだった。

病室を出ると窓から射し込む光はだいぶ弱くなっていた。

由香がウトウトしているという待合室の場所がわからずにウロウロしてしまっただが、結局、おじさんの病室のすぐ裏側辺りにあることがわかって来た道を戻り始める。

とんだ無駄足だ。

途中で寄った売店でジュースを二本購入して待合室へ向かうと、部屋の奥の小上がりの畳の上では、制服姿のままの由香がすやすやと寝息を立てていた。

「……自宅じゃねーんだぞ、おい」

どこか安心し切ったその寝顔に呆れつつ、まあ父親が大怪我をしたと聞かされた後じゃ仕方ないか　などと一人納得しながら、

「起きろ。おい、由香」

手の甲でペチペチとほっぺを叩いてやる。

「う……ん」

声が漏れる。覚醒はしなかったが、この様子だと無理に起こさなくともすぐに目を覚ましそうだ。

俺はとりあえず息をつくことに決めて、由香のすぐ横に腰を下ろし、ペットボトルのお茶の口を開けた。

……さて、どうしたものか。

そうしながら　昼休みに神村さんから聞いた話を思い出す。

その内容は簡単に言えばこうだった。

楓に悪魔狩り殺しの容疑がかけられていること。

現場には楓が使う闇の力の痕跡が残っていて、それが疑いの根拠となっていること。

真犯人は楓と同じ妖魔か、その血を持っていて暴走を起こした悪魔で、それを見つけ出さないと、楓が悪魔狩りに処刑されてしまうかもしれないこと。

だから犯人探しを手伝って欲しい、ということ。

……どうしたものか、というのは、もちろん手伝うか手伝わないかの話ではなく、どうやって犯人を探すべきかという悩みである。

（鉄也おじさんの追っていた犯人が　なんて可能性もあるかと思

ったが)

ただ、神村さんにそのことを尋ねてみたところ、否定はできない可能性は低いとのことだった。

おじさんの追っている殺人事件の情報については悪魔狩りたちも収集していたそうだが、犯行に悪魔の力を使っている痕跡がまるでないらしい。

とはいえ。

完全に無関係だと断定できるわけでもないとのことだったので、今日、もし会えればダメ元でおじさんからその話を聞いてみるつもりだった。

おじさんが職務上のことを俺に話してくれるかどうかはわからなかったが

いずれにしても今日は無理だ。

となれば、繋がっている可能性が低い情報に固執するわけにはいかないし、それとは別の切り口も考えなきゃならない。

(“同調” さえできればな)

イレギュラーとしての俺の特殊能力の一つ。

“同調”

その発動条件は あくまで経験から得た推測に過ぎないが

“悪魔の力”と“精神不安定”と“精神集中”、それに“距離”と

“タイミング”の五つだ。

最初の二つは相手側の条件。

悪魔の力が発動可能であって、かつ精神状態が不安定であること。これは相手が暴走悪魔であれば条件に合致する場合が多い。

三つ目の精神集中は俺の条件。

つまり俺が明鏡止水のごとく精神を統一した“能力の開放状態”

でなければならぬということ。

最後の二つは俺と相手の関係。

それなりに距離が近いこと　これは経験上、長くとも半径十キロから十五キロ程度が限度のようだ　と、最後にタイミング。相手の精神を捕まえるタイミングはどうやら間隔の長い波のようなものらしく、すべての条件を満たしてもすぐに同調できるわけではない。が、逆にいえば最初の四条件さえ満たした状態であれば、いずれ同調できるということでもある。

一度同調すれば、条件を満たさなくなるまでその状態は続く。その間、俺は五感のすべてを相手と共有することができるが、相手の行動や思考に影響を与えることはどうやらできない。

見せられているだけだ。

なお、こちら側の五感完全に遮断されるわけではないが、かなり薄れてしまったため、能力発動中は顔に落書きなんかされてもたぶん気付けない状態となる。

(とはいえ、まあ……)

目を閉じ、精神を集中。

視覚が遮断され、聴覚が研ぎ澄まされる。

瞼の裏のオレンジの残り火が次第に色を失い、すう、すう、という由香の寝息が大きくなった。

さらに集中。

今度は研ぎ澄まされた聴覚がその機能を弱め、由香の寝息がほとんど聞こえなくなる。

訪れた静寂はやがて、意識が肉体の枠を越えて広がっていくような感覚が続いていく。

幽体離脱するのはこんな感じなのだろうか。

これが“発動状態”だ。

同調できる相手がいれば、ほぼ空っぽの五感に相手側のノイズ入りのイメージが伝わってくる。

それを捕まえてやれば同調完了だ。

が

「……ふう」

集中を切る。

この状態を維持できるのは長くて十分といったところだ。もちろん同調できる相手は見つからなかった。

適当にやって偶然同調できるなんてことはほとんどない。もう一つの特殊能力である　まったくアテにならないながらも危険予知っぽい能力の　“耳鳴り”と合わせて、それでようやく数十回に一回見つかるかどうかという精度なのだ。

もちろん暴走悪魔をすべて網羅できるわけではなく、仮に今回の事件の犯人が暴走悪魔だったとしても、結局は運任せに過ぎないのである。

（けど、まあ……現状ではそれに賭けるしかないか）

普段はスルーするような小さな“耳鳴り”でも、その都度“同調”の能力を開放する。

それで少しは確率があがる。

（あとは　　）

やれることは思いつく限りやっておきたい。

が、

（……まずはこいつを家に送り届けてから、か）

横に向けた視線の先。

「ん……優希、くん……？」

由香がようやく寝ぼけ眼を俺に向けてきたところだった。

1年目3月その3

由香を家まで送り届け、俺が自宅に帰ったのは夜の七時頃だった。

「ただいま」

「……あ、帰ってきた！ おかえりー」

リビングではもう夕食が始まっていたが、俺が顔を出すと、歩はわざわざ箸をいったん置いて近寄ってきた。

「おかえりなさい、優ちゃん。どこ行ってたの？」

「ああ、ちよつとな」

雪の様子を見る限り、鉄也おじさんのことはまだ何も伝わっていないようだ。

子犬のように意味もなくまとわり付いてくる歩を適当にあしらいながら、カバンをソファの上に放り投げて台所へ向かう。

冷蔵庫を開けると紙パックのオレンジジュースがあったので、それをコップに注いでリビングへと戻った。

「……なにかあった？」

俺の態度に感じるものがあったのか、雪が少し表情を曇らせてそう尋ねてくる。

「ああ」

頷いて、俺はその場で鉄也おじさんの話をした。

一同が揃って眉根を寄せる。

「その事件、たぶん夕刊に載ってたやつね」

瑞希が席を立てて電話台の下から今日の夕刊を持ってきた。

「ほら。これのことじゃない？」

テーブルに広げられた新聞の記事に目を落とす。

かなり大きな記事だった。

まず、隣町にある賃貸マンションの一室で四人の死体が発見され

た、と書いてある。少し細かく内容を見ていくと、部屋の借主は若い男性で、それらしき人物が捜査で訪れた刑事三人に怪我を負わせて逃走しており、警察がその行方を追っている、というような内容だった。

発見された死体は男三人、女一人。うち一人はつい一ヶ月ほど前に行方不明になった三十代の会社員男性。他の三人はまだ身元不明ながら年齢はバラバラで、死亡からかなり時間が経過しているものもあるとのことだ。また、部屋の中からは凶器らしき刃物が見つかっており、去年の夏頃にその近隣で起きた別の殺人事件と状況が酷似しているところがあって、その関連性についても調べている、とも書いてある。

負傷した刑事の名前は書かれていないが、発生場所は鉄也おじさんが入院している公立病院にかなり近い。刑事が三人、鉄也おじさんがかねてから捜査していた殺人事件、という符合から見てもおそらくこの事件に間違いはないだろう。

「その件で今日は部活も中止になったの。あんたが帰ってこないからみんな心配してたのよ」

「悪い。連絡しとけば良かったな」

新聞を戻してテーブルにつく。

……かなり猟奇臭のする事件だが、この記事を見る限りだと、やはり神村さんの言ったとおり普通の殺人事件のようにも見える。

そうだとすれば、いくら猟奇的であつても警察の仕事だ。

「瑞希。お前、部活はしばらく休みなのか？」

「おそらくそうなるでしょうね」

殺人犯がうるついでにいるかもしれないとなると、もちろんそんならだろう。

俺は歩がよそつてくれたご飯茶碗を受け取り、雪に視線を向ける。

「じゃあ、しばらくは二人ともちゃんと一緒に帰って来いよ。歩、

お前は俺たちと一緒に」

ウチに住んでいることがばれないよう、カムフラージュで別々に、

なんて場合ではなさそうだ。

三人がそれぞれ頷いたのを見て、俺は箸を進める。

「……そういえば、優希お兄ちゃん」

歩が思い出したように言った。

「ん？」

「さつき、沙夜さんから電話があったよ」

「神村さんから？」

「うん。帰ったら連絡が欲しいって」

「……そっか。わかった」

このタイミングでの用件となると一つしかない。

俺は始めかけていた食事を中断して電話台へと向かった。

「……いや。」

「そっぴや制服のままだったな。ついでにちよつと着替えてくるわ」

「え？」

歩たちがきよんとんとしているのを尻目に、俺はソファの上に放った力バンを取り、リビングを出て階段を上った。

階段の廊下に置いてある子機を持って自分の部屋へ。

（……あ、しまった）

そこまで来て、神村さんの家の電話番号がわからないことに気付く。歩が聞いているかもしれないと思ったが、あの場に戻ってまた不審な顔をされるのも嫌だったので、俺は押入れにある中学の卒業アルバムを引きずり出してくることにした。

（三年のときは確か同じクラスだったよな……）

アルバムの最終ページには電話番号が載っているはずだ。載せるかどうかは任意なので載っていない可能性もあったが、幸い神村さんの家はちゃんと記載されていた。

番号をプッシュしてすぐにコール音が鳴る。

一、二、三……四回目の呼び出しの途中で向こうと繋がった。

「はい！ 神村です！」

「あ、神村さ」

若い女性の声に俺は思わずそう呼びかけようとしたが、すぐにその相手が神村さんではないことに気付く。

「もしもし？ どちら様ですか？」

受話器の向こうから聞こえてくる声のトーンは明らかに彼女とは違っていた。

彼女の家族だろうか と、思い、

「あ、えっと、俺、神村さ 沙夜さんの同級生で不知火といいま
す」

「不知火さん？ ああ、はいはい。不知火優希さんですね？ 沙夜
姉様に代わりますので少々お待ちください」

軽い調子の声に続いて保留のメロディが流れ出した。

(……姉様？ 神村さんの妹か？)

初耳だった。俺は勝手に彼女のことを一人っ子だと思い込んでいたのだが、まあ妹がいてもおかしいことはない。

それほど待たされることはなく、

「お電話代わりました。不知火さんですね？」

聞き慣れたトーンの声が受話器の向こうから聞こえてくる。

俺はその声にちょっと安心して、

「ああ、神村さん。今電話に出たのって」

「妹の美^{みのり}矩さんです」

「やっぱ妹か って、妹に“さん”付け？」

「そんなことより不知火さん」

俺の疑問にはまったく取り合わずに神村さんは続けた。

「昼に不知火さんのおっしゃっていた事件、詳細がわかりました」

昼間言っていた事件 つまり先ほどまで下で話題になっていた

事件のことだ。

楓の一件と関係がある可能性は薄いと言っていたのだが

「調べてくれたのか」

「はい。夕刊の記事はご覧になりましたか？」

「ああ。ついさっき読んだ」

「では、そこに載っていない情報をお話しします。身元不明だった三人のうちの二人はすでに身元が判明しています。いずれも隣の住人、かねてより捜索願いの出されていた人たちで、先に身元が判明していた一人と合わせ、お互いの面識はない模様です。死因は失血、あるいは出血性ショック死。凶器には鋭利な刃物のようなものが用いられていて、これは現場から発見されています。なお、昼にもお話ししたとおり」

神村さんは一呼吸置いて、

「悪魔の力の痕跡はありませんでした。少なくとも犯人が殺害の際に悪魔の力を使用した事実はありません」

「……なるほど」

一気に聞かされた事柄を一つ一つ噛み砕いて頭の中に吸収し、そして俺は言った。

「つまり猟奇的な事件ではあるが、悪魔が関わっている証拠は一つとして出てきていない、ということか」

「そうなります」

先ほど下で出たのと同じ結論ということになる。

「神村さんは楓の一件との関係、どう考える？」

「普通に考えれば無関係だと思います。私たちの仲間が殺されたとき、犯人は闇の力を使用しています。同一人物であれば、片方の事件で力を一切使っていないのは不自然です」

「四人の死体が見つかったのは隣のマンションだっけ書いてたけど、悪魔狩りの人たちが襲われたのは別の場所なのか？」

「はい。現場は隣ではなくこちらの町　不知火さんのご自宅からもそれほど離れていない一軒家です」

「じゃあ、たとえば……マンションの件に関しては、自分の部屋では力を使いたくなかった、とか。あるいは基本的に使うつもりはなかったけど、悪魔狩りが相手だったから使わざるを得なかったとか」

「思いつく可能性を続けて言ってみたが、神村さんは否定的だった。可能性そのものは否定しません。ただ、その可能性が別人の犯行

であることと比べて優位にあるとも思えません」

「まあ、そうだよ……」

俺はただ、たまたま俺の身近に同時に起こった事件だという理由で、それを無理やり関連付けようとしているだけなのかもしれないけど

何故だろうか。

神村さんの話を聞いても、俺はその可能性をどうしても捨て切れなかった。

……と。

神村さんはそんな俺の心の動きを受話器の向こうで察したのか、

「途中になりましたが、事件のお話、続けてもいいですか？」

「ん。まだあるのか？」

「死体が発見されたマンションと、発見されたときの状況についてです」

もちろん聞くことにした。

「今日の午前九時過ぎ、昨年の夏に起きた殺人事件の捜査でそのマンションを訪問した刑事が三人、何者かによって重傷を負わされました。この人物が部屋の借主で、なおかつ事件の犯人でもある可能性が高いと考えられています」

これについては、新聞にも載っていたことだ。

「意識のあった刑事の一人が警察と救急車を呼び、駆けつけた警察がその部屋に踏み込みました。四人の死体が発見されたのはマンション三階の2LDK。リビングの他に二つある部屋のうち東側の部屋で、備え付けのクローゼットの中からそれぞれ鍵がかかる旅行用のトランクにビニール袋と一緒に詰め込まれた状態で発見されています」

「旅行用のトランク……？」

そんなところにビニール袋に入れた死体を詰め込んでいたというのか。

想像して、少し気分が悪くなった。

「部屋の中からは血の付いた刃渡り二十センチほどの短刀が発見され、浴槽からはルミノール反応が出たそうです。ここが殺害現場となった可能性が高いとのことでした。……以上です」

「……サンキユ、神村さん」

肩で小さく息を吐く。

結局、その内容は事件の生々しさがより色濃く伝わってきただけで、もちろん悪魔が関わっているという事実が浮かんでくるようなものではなかった。

つまり、状況としては何一つ

「……いや」

その瞬間。

脳裏の奥にあった記憶が刺激される。

「神村さん……今の話って、正確か？」

「え？」

意表を突かれたような声。

俺は重ねて、

「正確な話なのか？」

「……はい。確かです」

神村さんの返事を聞きながら、俺はさらに記憶を掘り起す。

マンションの三階。

クローゼット。

それは いや。

これだけではまだ偶然かもしれない。

俺はたった今神村さんから聞いた話と、俺の中にある記憶の風景とを照らし合わせながら、

「神村さん。その事件があったマンションの部屋、上下左右に人が住んでいるかどうかを確認できるか？ それと……部屋の借主の年齢は？ 馬券を買うえる歳か？ 大学生だったりしないか？」

「不知火さん？ なにを」

戸惑う神村さんに、俺は答えた。

「その事件、もしかしたら悪魔の仕業だって証明できるかもしれない」

「……」

僅かな沈黙の後、

「……美矩さん」

少し受話器の音が遠くなって、神村さんが先ほどの妹　美矩とかいう子に何事か頼んでいるのが聞こえてきた。

「不知火さん」

声が戻ってくる。

「もしそれが証明できるようであれば、そちらを優先的に当たるところにしましょう。根拠を聞かせていただけますか？」

「ああ」

俺は自分の“同調”という能力のこと　そして今朝見たあの気持悪い夢と今回の事件との間にいくつかの共通点があることを神村さんに話した。

「それは、確かに気になる符合ですが……寝ている間に無意識に他人と、その“同調”というのをしてしまうというのは有り得ることなのですか？」

「なんとも言えない。けど、寝ている俺の意識が、起きて能力開放しているときと同じ状態になることがあるのだとすれば、理屈的には充分有り得ると思う」

「今までにそういった体験は？」

「それもわからない。あつたとしてもただの夢だと思って忘れちゃってるかもしれない。……ああ、思い出した。もう一つ符号がある。

夢の中の“俺”は確か寝ようとして部屋を移動してた。つまり少なくとも二部屋以上ある場所だ。現場は確か、2LDKだったよな？　少しの間。

「“同調”は、悪魔の力を持っている相手でなければ不可能、なのですね？」

「ああ。それはたぶん間違いない」

「わかりました。……その夢を見たタイミングからしても、可能性として追求するには充分だと思います」

受話器の向こうで神村さんが頷いたのがわかった。

「先ほどの質問、二時間もあれば結果がわかります。その時間、こちらからご連絡しても大丈夫ですか？」

時計を見る。

七時半。

二時間後なら問題ないだろう。

ただ

「一回コールしてから切ってくれ。こちらからかけ直す。……神村さんから立て続けに電話があったなんてことになる之不審がられそうだ」

「雪さんですか？」

「他の二人もな」

「わかりました」

神村さんがそう言って電話は切れた。

さて。

子機をベッドの上に放り投げ、考える。

……今の仮説が合っていたとして。

それでもすぐに事件が解決するわけじゃない。

事件の犯人は鉄也おじさんたちに重傷を負わせた後、姿を眩ませている。遠くへ逃げたか、近くで身を潜めているのか。

いずれにしてもその居場所を突き止める必要がある。

そしてその悪魔が闇の力 妖魔族の力を行使できると証明しなければ、楓の身柄が解放されることはない。

それを、どう実現するか。

昼間聞いた神村さんの話だと 俺に協力を求めてきたぐらいだから予測はできるのだが 悪魔狩りたちの助力はあまり期待できそうにない。紫喉とかいう組織の実力者が楓を犯人だと決め付けていて、別の犯人を捜すことには消極的らしいのだ。

限られた人数で、どこかへ逃げた犯人を捜し出す方法。

……策はあった。

時計を見る。

今の時間は、午後七時三十七分。

ただ 俺の網膜にはもう一つ、違う時間が焼きついている。

“午前四時四十二分”

夢の中の俺が見ていた時間だ。

(その時間に能力を解放すれば、あるいは……)

再び“同調”し、居場所のヒントを掴むことができるかもしれな

い

- - - -

「光刃様」

緑刃が悪魔狩り“御門”の当主の部屋を訪れたのは、その日の午後十一時過ぎのことだった。

「なにか？」

中からの返事を確認し、緑刃は部屋の前に立てひざをついて襖を横に引いた。

小さく開いた隙間から顔を覗かせる。

「まだお休みになられないのですか？」

部屋の中央には布団が敷いてあったが、中の人物はまだ寝間着姿ではなかった。

「楓のことが気になっておられるのですか？」

「はい」

光刃は小さく頷いてみせた。

「紫喉様のおっしゃることも理解はできませんが、それは今回の事件の犯人が妖魔であるというだけのこと、彼が犯人であるという理由には一つも繋がっていないと思います。……緑刃さんはどうお考えですか？」

その声には少し疲労の色が浮かんでいるように思えた。

無理もない と、緑刃は思う。

「私は光刃様と同じ考えです。青刃のやつもおそらく同じでしょう。ただ」

口を濁した。

「事実がどうであれ、楓の身柄は手際よく拘束されて現在軟禁状態にあります。妖魔の操る闇の力が希少なものであり、事実がはつきりしていない以上、ひとまずあいつの身柄を拘束した上で捜査を進めるというのは必ずしも誤ったやり方ではありません。末端の悪魔狩りたちはそれが我々上層部の総意だと信じているでしょうし、それを光刃様や私たちが表立って批判するのは求心力の低下を招き、組織を混乱させることに繋がります。……もちろん」

緑刃は少し口調を緩めて、

「光刃様はそれがわかっておられるからこそ、美矩を行かせ、あの少年の力を借りることにしたのでしょう？」

「……私には、紫喉様の意思に背いて大勢の悪魔狩りたちを動かすだけの力はありません。あなたや青刃さんに助けていただかなければ」

「問題ないでしょう。あの少年とは二度ほど会っただけですが、良い顔をしていました。信頼に値すると思います」

この緑刃は、どこか理屈っぽい相方の青刃と違い、どちらかという直感を信じるタイプだった。

彼女がそれで大きく失敗したことは今のところない。

「ただ、相手が妖魔族の端くれだとすると、こちらも戦力を整えなければ返り討ちにあう危険があります。あの少年と美矩だけではかなり力不足かと。私と青刃がお手伝いできれば良いのですが、私は

光刃様の身边を離れるなど命じられておりますし、青刃は楓のそばに貼り付いているようにと言われているようですから」

「その件で、緑刃さんをお願いしようと思っていました」

「は……？」

襖の奥から、光刃の真っ直ぐな瞳が緑刃を捉えていた。

少し、嫌な予感がした。

1年目3月その4

またこの夢か。

いったいこれで何回目になるだろうか。
薄暗い部屋。

ひんやりとした空気。

揺れるカーテン。

同じ服の詰まったクローゼット。

そこには今日も“一分”の空きがある。

ああ、面倒くさい。

そう思いながらも俺は、その隙間に新しい服を詰め込んでいく。
ぎゅーぎゅーになって夢の中の俺はようやく満足した。

さあ、窓を閉めて寝よう。

腹が減った。

時間は四時四十二分。

いつもどおりだ。

窓を閉めて。

部屋を出る。

と。

マンションの呼び鈴が鳴って。

俺は覚醒した。

- - - - -

「っ……！」

四度目の“同調”が途切れる。

「不知火さん……」

脂汗を浮かべる俺に近寄ってこようとしたり神村さんを制し、俺は詰めていた息をゆっくりと、深く吐き出した。

時計を見る。

五時十七分。

途中で一、二分ほどのインターバルを挟んでいたとはいえ、一時間近い同調能力の連続開放はかなりキツかった。

が どうやらその甲斐はあったようだ。

「神村さん……地図を持ってきてくれ」

地図を受け取り、テーブルの上に広げてその上に視線を落とす。

覚醒した後の犯人が見ていた景色。

朝靄の中に薄っすらと浮かんだデパートの看板には見覚えがあった。事件のあった隣町ではない。犯人はこっちの町、しかも俺が今いる神村さんの家 神社からそう遠くない場所にいる。

それと

記憶を掘り起こす。

微かに顔を覗かせた朝陽が左手から差し込んでいたところを見ると、窓の向きは南、あるいは南東。デパートからの看板が目線より下に見えていたところからすると高さは五階、あるいは六階ぐらいか。そこから考えると一軒家ではなくアパートかマンションだろう。看板までの距離を考慮し、可能性のありそうな場所に赤ペンで印

をつけていく。

その作業がひとしきり終わった後、

「これで ええっと。君、名前、なんだっけ」

と、その場にいたもう一人の少女に声をかけた。

「あ、自己紹介まだでしたっけ」

俺よりも一つ、二つぐらい年下に見えるその少女は、容姿、態度ともに神村さんとはちつとも似ておらず、コスプレなのかなんなのか、まるで時代劇に出てくる女忍者のような格好をしていた。

「沙夜姉様の妹の美矩です。今後ともヨロシクー」

言いたいことは色々あったが、残念ながら今はそれに突っ込んでいる状況でもないので、

「ああ、美矩ね。それで」

「ちなみに職業は隠密です。将来の夢は歌って踊れる隠密になることですよ！」

「聞いてねーし！ 今はそういうノリ求めてねえっつもの！」

結局突っ込む羽目になってしまった。

美矩は口を尖らせて、

「む、意外と堅い人なんですね、優希兄様は。せつかく着替えたのにちつとも突っ込んでくれないし……まあいいです。さあどうぞ、何なりとお尋ねください」

ちよつと投げやりだった。真面目なんだか不真面目なんだかわからないが、チラッと神村さんを見ると特にいつもと変わった様子はない。

ということとは、これが普段のテンションなのだろうか。

俺は気を取り直して、

「この印をつけたところで、五階以上ある建物、わかるか？」

「五階以上でいいんですか？」

「デパートの看板が下に見えていたんだ。だからおそらくそのぐらいの高さはある」

俺がそう言っていると、美矩はチラッと地図を見て、

「ヒノキの木は見えませんでした？」

「ヒノキ？」

俺は記憶を掘り起こして、

「……そういえば看板にかぶるように何か細長い木の影が見えてた気がするな」

「じゃあたぶん二階か三階です。この」

美矩は地図の上、俺がつけた赤い印に近い辺りに青いマーカーで色を塗った。

「このエリアには最近になってヒノキの木が植樹されています。高さは二階半ぐらいのはずです。少し小高くなつたところに建っている家も多いので、デパートの看板が下に見えたのはそのせいだと思います。で、優希お兄様が印をつけたこの範囲でヒノキの木がデパートの看板に被るように見える建物というところ」

と、俺が赤でつけた印に次々とバツを書き込んでいく。

「おそらくはここか、ここ。あるいはここ。いずれもマンションではなく一軒家ですね」

「一軒家ですか」

神村さんの呟きに俺は嫌なものを感じた。

「そこに人が住んでいるかどうかってのはわかるか？」

美矩にそう尋ねると、

「本当の直近の状況はわかりませんが、無人ではなかったと思いますよ。もし犯人がこの一軒家を占拠したのだとすると、多少でも頭を働かせたのならここですね」

と、地図上を指す。

「他の二軒は子供のいる家で、学校を休めばすぐ不審に思われます。ただ、この家は確か老夫婦が住んでいるだけで、数日姿を見せなくても騒ぎになりにくいです。当面の潜伏先としてはベストかと」

「……そうか」

頷いて、俺はひとまず嫌な予感を振り払った。そこが犯人の実家で、そこに逃げ込んだだけという可能性もないわけじゃない。

神村さんが立ち上がった、

「いずれにしても当たってみましょう。不知火さん、ありがとうございます」

「すぐ行くのか？」

「はい。不知火さんの能力を信用しないわけではありませんが、それでもその人物が件の妖魔であると確定したわけではありません。時間は有限ですから」

「どうやら急いでいる。」

それが彼女のいつものスタンスなのか、それとも楓の命がかかっているからなのかはわからない。

しかし

(……今日は一割強つてどこか)

右手に軽く炎を灯して軽く舌打ちする。

極端に悪いわけではないが、決して良いとはいえない。

俺は立ち上がった神村さんを見上げて、

「神村さん。その敵が仮に例の妖魔だったとして、俺たちだけで勝てる相手なのか？」

闇の力というと、俺の中には昨年見せられた楓の力のイメージが強く焼きついている。

あるとき楓にいともたやすくかき消された俺の魔力は、今日の俺の軽く四倍以上はあったはずだ。

もし相手が楓並みの力の持ち主だとすれば、俺はあまり役に立たないかもしれない。と、そう思ったがゆえの質問だったが、

「純血であれ暴走であれ、妖魔族は総じて手強い相手です。ただ、不知火さんが楓さんのことをイメージしているのであれば、そこまでのものではないでしょう」

楓さんの中でも特別です、と、神村さんは言いながら袖を縛っていく。彼女が着ているのはいつもの巫女服と似たデザインのものだったが、赤ではなく黒がベースとなっていて、特に袴の部分はかなり動きやすそうな作りになっていた。

そういえばいつだったか、緑刃さんも同じものを着ていた。とすると、これは女性の悪魔狩りの仕事着なのかもしれない。

「不知火さんはどうしますか？」

「え？」

その問いの意味がわからずに聞き返すと、

「今回の件は私の独断で組織のバックアップはありません。手に余る相手だった場合、死の危険があります」

死の危険。

つまり 強要するつもりはない、ということか。

俺はため息を吐いて、

「馬鹿言うなつての」

立ち上がり、怪訝そうな彼女を正面から見下ろす。

こうして近くで見ると、神村さんは思った以上に小柄で華奢だった。

「その覚悟はとっくに済んでる。じゃなきゃ最初から協力を申し出たり、ボランティアで悪魔退治やったりしてねーって」

神村さんは下から真っ直ぐに俺を見上げてきて、

「今回の敵は、不知火さんがこれまで接してきた中でもっとも危険な相手の可能性もあります」

「だったら神村さんにとっても危険ってことだろ。なおさら一人じや行かせらんねえ」

おー、という感心したような声を上げたのは美矩だ。……少々茶化すような色が含まれていたように思えたのはおそらく気のせいではないだろう。

「わかりました」

神村さんは小さく頷き、美矩へと視線を向けて、

「美矩さんは戦闘になったら結界の維持に努めてください。住宅地なので強い結界が必要になります」

「はい、準備はできてます。……でも、沙夜姉様、本当にこのメンバーで大丈夫ですか？ もう一人ぐらい手伝いが必要じゃないです

？」

「心当たりがあるのか？」

そりや味方は多ければ多いに越したことはない。

が、美矩はあっけらかんと、

「私はないです。そりや、この情報を組織に流していいなら集められるかもしれませんが、いやーな連中に先を越されて取り返しの付かないことにもなりかねませんし」

「……お前な」

だったら言わないで欲しいものだ。

と。

そう続けようとすると、

「でも、優希兄様にはもしかしてあるんじゃないですか？ 心当たり」

雪のことを言っているのだろうか。

「いや」

確かにあいつの力は戦力にはなるだろう。

ただ、巻き込みたくない。

いまさら、だが。

もともとあまり戦いに向いてない性格だ。

できることなら

「美矩さん。車の手配をお願いします。近くまではそれで移動します」

神村さんが口を挟んだ。

「不知火さん。戦闘になったときは私が前に出ます。不知火さんはサポートをメインにお願いします」

おそらくは空気を察したのであろう神村さんの言葉に俺は感謝しながら頷いて、

「ああ、わかった」

「りょーかいです！ ま、お二人なら大丈夫だと思いますけどね！」
美矩はそう言って軽快に部屋を出て行った。

美矩の運転する車で 免許とかどうなってるのかわからないが
おそらく大丈夫なのだろう 目的地の付近に到着した頃、朝日は
その姿を半分以上現していた。

時間はちょうど六時。

多くの人々が目覚め、一日が始まるうとする時間。

しかし、その時間になってもその家の中では人の動く気配が
なかった。

二階建て、築年数は少なく見積もっても三十年は建っているだろ
う。かなり広い庭には小さな家庭菜園があり、大きな木が 梅の
木だろうか 白い花をまばらに咲かせている。庭から家の中へと
続く大きなガラス戸の内側は厚めの茶色いカーテンが引かれていて
中の様子はまったくわからない。

二階はあとから増築したのだろうか。壁の色が違っていて、そこ
だけ少し新しく見えた。

振り返ってみると、少し小高いその場所からは町が大きく見渡せ
る。

眼前にはヒノキの木と、その奥にデパートの看板。

もう一度、家のほうへ視線を戻す。

二階の窓を見ると、カーテンが開いていた。

……間違いない。

“同調”している最中に見たのは、あの窓からの景色だ。

目配せすると、神村さんは頷いた。

「二階に人の気配はありません。外に出ていないのであれば、おそ
らくは一階に下りてきているはずです」

「どうするんだ？」

「美矩さんが結界を張ったら、不知火さんは正面から呼び鈴を鳴ら
してください。素直に出てくることはないと思いますが、念のため

警戒をお願いします。それに気を取られている隙に、私が裏口から中に侵入します。敵を確認したら不知火さんをお呼びします。どのような方法でも構いません。中に突入してください」

「了解。気をつけることは？」

「音と光を完全遮断する結果をあのお敷地一杯に張ります。外に対しては結界を張った時点での風景がそのまま映り続けますので、戦い方について遠慮をする必要はありません。ただ 外へ出ようとする者を閉じ込めるだけの力はありませんので、戦闘になったらとにかく逃げられることのないように、それだけ注意してください」

「わかった」

チチチ、というスズメの鳴き声。

目の前の道路を軽自動車走り抜けていく。

ゴミ出しで朝の挨拶を交わす主婦たち。

それがひどく遠い世界の出来事に思えてしまう 緊張感。

よく考えてみれば、太陽の下で戦闘を行うのは いつぞやの間抜けな幻魔を除けば これが初めてだったかもしれない。

今まではずっと夜の闇、日常の風景が見えにくい中でやってきた。しかし、今回は違う。

結界を挟むとはいえ、隣の家でトーストとベーコンエッグの朝食が並んでいる、そんな状況で命を懸けて戦うのだ。

もちろんその程度のことにはためらいがあるわけじゃない。

が、やはり今までと同じではない 何かが変わる、というような感覚はあった。

「不知火さん？」

「いや。……いつでもいいぜ」

神村さんはきつとそんなことは考えていないのだろう。

きつと、ずっと前からこんなことをやってきたのだろうから。

「では。美矩さん」

「はいはい」

相変わらずの軽い調子で美矩がその家に近付いていく。

無造作。

風景の中に溶け込んだまま、美矩が家の塀の要所要所に赤いチョークのようなもので何かを書き込んでいく。

「あの赤い印が一瞬輝いたら、それが結界の発動した証です。不知火さんはゆっくりと正面玄関に向かってください。私はこのまま裏に回ります。結界が発動したらどのタイミングでも構いません。呼び鈴を鳴らしてください」

「わかった」

「お気をつけて」

足音も立てずに神村さんが俺のそばから離れていく。

(……六時、か。七時過ぎには家に戻らねーとな……)

誰かが俺を起こすため、無人の俺の俺の部屋にやってきてしまう。

俺は 今日も学校があるのだ。

(……行くか)

ほんの一瞬だけ、決意を固めるのに時間を要して。

俺はゆっくりと物陰から身を出した。

1年目3月その5

「不知火さん！」

その声を聞いた瞬間、腹の辺りに渦巻いていた熱が全身を駆け巡り、髪の色が一瞬にして変貌する。

炎の悪魔の証 真紅の髪へと。

拳に魔力を込めて玄関のドアを思いつきり殴ると、古くなっていた錠はいとも容易く弾け飛んだ。

「神村さん ！」

開けた視界に映ったのは、生活の色を失った薄暗い玄関。

二階に続く階段の下には、老人が倒れている。首がおかしな角度に曲がっていて、一目で息をしていないのがわかった。

「っ……」

一瞬こみ上げた吐き気が、胸の中で煮えたぎる怒りに変わる。

（神村さんは ）

左右を見回すと、居間に続く曇りガラスの向こうからまばゆい閃光が迸るのが見えた。

迷わず居間へと突入する。

いた。

右斜め前方、おそらくは裏口に続いている台所の入り口付近に、神村さんが光り輝く刀を構えて立っている。

そして正面。

リビングの中央辺りには金髪で、悪魔の証である大きく尖った耳を持つ男がいた。

歳はおそらく二十歳前後。

その目は

（やっぱ暴走してるのか……！）

「う……うう……」

意味のないうめき声のようなものをあげて、妖魔がこちらに視線を向けてくる。

虚ろな目は明らかに正気の色を失っていた。

突然現れた二つの敵意に対し、どのように対処すべきか考えているのだろうか。

少し迷う。

敵の出口を見るか。

こちらから仕掛けるべきか。

待つ理由はない。

すぐに結論を出すと、俺は右の手の平に力を集めた。

そこに野球ボールサイズの炎の塊が産まれる。

小細工はない。

それを敵目掛けて一直線に撃ち出す。

俺の遠距離攻撃としては敵に到達する速度がもっとも速い、文字通りの“炎の直球”だ。

(くらえ　ッ！)

心の中で引き金を絞る。

ドン、という音。

強烈な反動。

右腕から放たれた炎弾がオレンジ色の軌跡を残して一直線に飛ぶ。それは妖魔の体を捕らえ　なかつた。

「!?」

考えられないような反応速度で妖魔の体が横に動き、その軌道から姿を消す。

標的を失った炎弾はその背後にあったタンスを破壊した。

(速い！　しかも　)

ギリリ、と、金色の瞳が俺の体を捉える。

「っ　！」

背筋にゾクリと悪寒が走った。

(こいつ！)

身に纏う魔力、その雰囲気　　今まで相手してきた暴走悪魔とは明らかに違う。

妖魔の両足が縮みこみ、バネのように反発して床を蹴った。

床が軋む。

(まずい！)

標的はもちろん俺だ。

意識を防御に回す。

速い。

約六メートルの距離は百分の数秒で半分にまで縮まった。

(受けられるか　)

凶器らしきものは持っていない。

拳か。

脚か。

そんな一厘の秒の世界に“光”が侵入してくる。

「神村さん！」

俺との距離を半分まで縮めた妖魔の側面に、神村さんがピタリと張り付いていた。

その勢いのまま、刀を逆袈裟に斬り上げる。

だが

「！」

鈍い音。

妖魔は足を止め、左手で神村さんの攻撃を止めていた。

短い呼吸音。

神村さんが続けて斬撃を繰り返す。

ニイ……と、妖魔の口元が残虐な笑みを浮かべた。

妖魔が下がる。

神村さんが踏み込む。

薙ぎ、体を捌き、振り下ろす。

宙に踊る光のエフェクト。

断続的に聞こえる、木刀で大木を殴りつけたような鈍い音。しかし

「っ……」

神村さんが唇を固く結ぶのが見えたような気がした。

予想よりも手強い。

それはそんな表情に思えた。

俺はこの立ち合いで勝負が決することはないだろうと察し、再び“炎の直球”を、今度は両手に準備する。

神村さんの刀に宿っているのはかなり上質な光の力だ。その攻撃を素手で止めているところを見ると、あの妖魔の魔力はかなり強い。

それほどの相手だと、今日の俺の調子で仕留めることは難しいだろう。

なら と、俺は逆に考える。

綺麗にヒットさせようと考える必要はないのだ。どんな形でもいいから、敵の動きを止め、あるいは鈍らせることができればいい。神村さんが敵とあれだけくっついてしていると横から手を出すのは難しいから、二人の距離が少し開いたところが援護射撃のタイミングだろう。

その二人の立ち合いは、神村さんが一方的に攻撃を繰り返していた。が、その攻撃が妖魔の体を捉えることは一度もなく、そして俺の耳は次第に荒くなってくる神村さんの呼吸音を聞いていた。

そろそろか と、そう思った瞬間。

「……神村さん、危ねえッ！」

「！」

突如、妖魔が反撃に転じた。

絶妙なタイミング。

接近戦での立ち合いの技術はおそらく神村さんが上だった。だが、妖魔は彼我的持久力の差を敏感に察して、それが技術の差を埋める時を待っていたのだ。

暴走しても失われていない、いや、あるいは本能が前面に出ることによって戦闘勘がより研ぎ澄まされていたのか。

神村さんが引く。

妖魔が追う。

俺は迷うことなく右手の炎弾を放った。　　が、間に合わない。

妖魔の左手が神村さんの刀を振り払い、右拳がその脇腹に吸い込まれる。

「っ　　！！！」

うめき声。

車に撥ね飛ばされたかのように神村さんの体は軽々と宙を舞い、襖を突き破って隣の和室まで吹っ飛んでいった。

「神村さん　　ッ！　　てめえッ！！！」

一撃目の炎弾は避けられていた。　　いや、厳密には“避けた”ではなく“当たり前には行かなかった”という表現が正しい。

俺の攻撃は妖魔の追撃を阻止するため、もともとその移動ルート目掛けて放ったもの。

妖魔は足を止めていた。

だから当たりようがなかったのだ。

追撃する気が最初からなかったのか、あるいは俺の炎弾に気付いて留まったのか。

いずれにしても。

熱くなりそうな頭を必死に冷やす。

……神村さんの状態を確認したい。

……目の前の敵をぶっ飛ばしたい。

それらの欲求をすべて押しとどめて考える。

(……強い。どうする……)

闇雲に食って掛かっても、まともに敵う相手でないことは確かだ。隣室で人の動く気配。

ピクリと妖魔が反応したのを見て、牽制のため、その鼻先に向けて左手の炎弾を放った。

妖魔が飛び退る。

当然、炎弾は妖魔に命中することなく、壁にかかっていた時計を破壊しただけだった。

「神村さん……無事か？」

「……平気です」

隣室から神村さんが姿を現す。

「……そうか」

まずいな　と、思った。

妖魔から目を離せないので正確な状態を確認できるわけじゃないが、声と呼吸音に微かな苦痛の色が混じっている。

体のどこかに無視できないダメージを負ったのだろう。

……いや。あの勢いで飛ばされてそれだけで済んでいるのはむしろ僥倖といえるべきか。普通の人間なら内臓破裂に全身骨折でもおかしくない状況だ。

だが、いずれにせよ。

こうなってくると、サポートに徹するなんて悠長なこととは言っていられない。

(……やれるか?)

今日の俺の調子だと、放出系の攻撃ではあの魔力に相殺されるのがオチだろう。

とすれば。

直接叩き込む近接攻撃しかない。

(……っても、やるしかないか)

右拳に力を込めた。

腹から産まれた熱が全身を駆け巡り、やがて右の拳に収束する。

“太陽の拳”

熱の塊となった俺の拳を見て、妖魔がうなり声を上げた。

だが、

「……不知火さんはサポートに徹してください」

神村さんが一歩前が出る。

「無茶言うなよ。その体で」

「無茶なのはあなたのほうです。……その妖魔は普通の暴走悪魔ではありません」

「普通じゃない？　どういう意味だ？」

「人間の時点でおそらく何らかの格闘術を修めていたのでしょう。

それが、悪魔の身体能力を得たことで昇華している。なんの技術も持たないあなたが接近すれば、数秒で殺されてしまいます」

「……」

それがさつき神村さんが見せたあの表情　“予想外”の正体か。

確かに、俺は瑞希のように格闘術を習っているわけじゃない。喧嘩はそこそこできるほうだが、悪魔の力を使わずプロボクサーに勝てるわけでもない。

そして悪魔の身体能力の優位性も、この場では失われている。

魔力も、敵を倒すには心もとない。

「私がやります」

神村さんが一歩、前に出る。

俺の“太陽の拳”に向いていた妖魔の注意が、彼女のほうへも向けられた。

「私がやる、つつつたつて」

最初より状況は悪化している。

「平気です」

平気なはずがない。

「……どうする。」

二人で同時に接近戦を挑むには、俺と神村さんは共闘経験が少なすぎる。俺の存在が神村さんの太刀を鈍らせることにもなりかねないし、即興で息を合わせて戦う自信はない。

俺単独で仕掛ければ、神村さんいわく秒殺だそうだ。

かといって神村さんに任せても、俺はただ傍観するしかない。

結果はおそらく先ほどの二の舞　いや、おそらくそれよりも悪い結末だろう。

そうならないようにサポートするとしても、先ほども言ったように、あれだけ接近されると打ち合っている最中に手を出すのは至難の業だ。

万が一できたとしても、今日の俺の力では敵の魔力に容易く相殺されてしまうのがオチだろう。

今日の俺にとっては、ほぼ全力と言ってもいい“炎の直球”だつて

「……………」
ふ、と。

俺は妙な違和感に襲われ、神村さんの持つ刀に視線を向けた。

…………… 光輝く刀。物理的な質感はなく、すべてが光の魔力で形成されたものだろう。

強い力だ。今日の俺の魔力など及びも付かない。

視線を左右に動かした。

壊れたタンス。

焦げ跡のついた壁。

砕け散った壁時計。

…………… もしかすると

(試してみるか……………)

右手に宿した“太陽の拳”を解除する。

ピクリ、と、妖魔が反応した。

それを視界の端に見ながら、再び魔力をめぐらせる。

脳裏に浮かべるのは 花火のイメージ。

全身を巡った熱が、両手十本の指の先に分散して顕現する。

「不知火さん……………」

神村さんが怪訝な声を出したのも当然。

指先に宿ったその力は、先ほど放った炎弾の十分の一にも満たない微々たるものだったのだから。

だが、それでいいのだ。

これは花火 “誘導花火” なのだから。

(くらえ)

ぐ、と拳を握り締め、両腕を交差させて振り払うと、シユルルル、と、十本の炎の筋が変則的な動きで妖魔を目掛け飛んだ。

「！」

妖魔が飛び退る。

パン！ パン！

まるで小さな花火のように炎が弾け、火の粉が妖魔の周囲に飛び散った。が、妖魔は超人的な反応速度と体の捌きで、十本の“誘導花火”をことごとく避けていく。

最強の悪魔と呼ばれる妖魔族の力か、それとも神村さんの言う、人間の時点で修めたという格闘術の恩恵なのか。

確かにその妖魔の動きは、俺がこれまで見てきた暴走悪魔とは次元の違う動きだ。

しかし

十本の“誘導花火”を避け切り、金色の瞳を怒り色に染めて俺を睨みつけてくる妖魔。

どうやら……間違いなさそうだ。

「……不知火さん。まさか」

神村さんも気付いた。

俺は黙って頷く。

……不自然なのだ。“炎の直球”にせよ“誘導花火”にせよ、そこに宿る魔力は神村さんの持つ刀の魔力には遥かに劣っている。

にもかかわらず。

妖魔は神村さんの刀を素手の拳で受け止めておきながら、俺の攻撃はことごとく相殺せずに避けていた。

つまり

(……火を怖がっている)

ピタリ、と、神村さんの体が俺の隣に密着した。

「……もう一度仕掛けます。私と妖魔が打ち合いになったら、今の攻撃をお願いします」

囁く声で、神村さんがそう言った。

「打ち合いになってから？　けど、それじゃ神村さんも巻き込むぞ？」

「私の体はこの刀の加護を受けています。あの程度の攻撃なら巻き込まれても問題はありません」

それよりも　と、神村さんが妖魔を見据える。

敵の気を逸らす効果のほうがかげにデカい、ということか。

「妖魔が火を怖がる理由はわかりませんが、中途半端に追い詰めると克服してしまう可能性があります。……次で決めます」

刀が輝きを増す。

乱れた呼吸。

……神村さんのダメージは想像よりも大きそうだった。

「わかった」

どうやら悠長なことは言っていない。

俺は再び、両手に十本の“誘導花火”を準備した。

「行きます」

神村さんが床を蹴る。

「……！」

その後姿　今まで見えなかった彼女の背中が、血で真っ赤に染まっていた。……おそらくは先ほど吹き飛ばされたときに負ったものだろう。

ドクン、と、心臓が大きな鼓動を鳴らす。

しくじるわけにはいかない。

下手に力を込めすぎないように、さっきと同じ量に魔力を調整する。
前後左右。

妖魔の意識を最大限に逸らせるよう、方角、時間差　十本の花
火の軌道を頭の中に思い描いた。

短い呼吸音。

神村さんの刀が、妖魔に向けて振り下ろされた。
余裕の笑みでそれを受け止める妖魔。

直後に、放つ。
リビングいっぱい広がった“誘導花火”。

その効果は想像以上だった。

「ああ ツ!？」

神村さんの刀を受け止めた妖魔の耳元で“誘導花火”が炸裂した瞬間、明らかに尋常ではない叫び声が上がった。

まるで悲鳴だ。

続けて炸裂する。

左右で二、三発目、背後で四、五発目、頭上で六、七発目。

「ああああ ツ!！」

ダメージ自体はまったく通っていない。だが、妖魔の表情から余裕は一瞬で消え失せ、明らかに混乱を来し始めていた。

神村さんはその好機を逃さない。

「ふ ツ!」

短く、鋭い呼吸。

火の粉は神村さんの体にも降り注いでいたが、言葉どおり彼女はまるで怯むことなく、それどころかさらに鋭さを増した斬撃を繰り返していき。

やがて、その一撃が妖魔の右肩を捉えた。

「っ
」!

妖魔の体を包んでいた闇の力が弾けるように四散する。

直後。

パン、パンッ!

足もとで二発の“誘導花火”が炸裂し、右肩を押さえた妖魔はそれを嫌って後ろに飛んだ。

だが。

「 神村さんッ！」

その動きを完璧に読んでいたのか、神村さんは妖魔とほぼ同時、同じ速度で同じ方向に飛んでいた。

彼我の距離は、神村さんにとって絶好の間合いのまま

神村さんの刀がさらなる輝きを放つ。

追い立てられて飛んだ妖魔は、迎撃の体勢にない。

「 浄化します 」

剣の軌跡が弧を描いた。

左肩。

右足、左足。

目にも留まらぬ速さで三つ、まるで四肢を切断するかのよう打ち込む。

見た目、妖魔の体からは血が吹き出ることなく、何も起きていないように見えたが

「 啊啊あああ ！！！」

妖魔は花火が炸裂したとき以上の悲鳴を上げた。

以前、真に相対したときも、神村さんの刀は体そのものには一つも傷を付けていなかった。おそらくは物理的な攻撃ではないのだろう。

ただ、妖魔の体を包んでいた強力な闇の力が、その太刀を受けるごとに小さくしぼんでいくのがわかった。

あと一押し。

切り下ろした神村さんの刀の刃が返る。

返した刃が狙ったのは、人体の急所中の急所。

首だ。

(いける)

そして最後の一発の“誘導花火”が、飛び退った妖魔の背後で破裂する。

それは妖魔が外に逃げ出すことを懸念して保険に放った一発だった。

た。

が

「!?!」

その瞬間、妖魔は予想外の行動に出た。

「な」

床に足を付くなり、妖魔は正面　つまり神村さんのほうに向かって突進したのだ。

神村さんの攻撃はすでに放たれている。
自殺行為だった。

だが

「く　ッ!」

急に距離が詰まったせいか、切り上げた神村さんの刀は妖魔の首には届かず、その左脇腹の辺りに入った。

「があああああ　ッ!」

苦痛の叫び。

だが、妖魔はそれも意に介さず、完全に錯乱した様子でそのまま神村さんに体当たりする。

「……ッ!」

神村さんの体が横に弾き飛ばされる。受けていたダメージのせいだろうか、神村さんの体はまったく踏ん張りが利かず、そのまま床に倒れこんだ。

「神村さんッ!」

俺は用意していた次の“誘導花火”を放つ準備をする。

それはもちろん、妖魔による神村さんへの追撃を防ぐための牽制のつもりだった。

が

「な……!?!」

妖魔はすぐ近くで倒れこんだ神村さんには目も向けず、正面に向かって突進した。

つまりは　俺のほうへと。

憤怒の瞳。

斬り付けた神村さんより、花火を撒き散らした俺のほうが憎いというのか。

これは予想外の行動だった。

「ち！」

俺はバックステップを踏みながら、手の中に用意してあった十本の“誘導花火”を妖魔に向けて放つ。

が、

「ぐがああああああ　　ッ！」

「っ……こいつ　　！」

止まらない。

妖魔は完全に正気を失っているのか、まるでマタドールに突進する闘牛のように、炸裂する花火に悲鳴を上げながらも一直線に突っ込んでくる。

一瞬の思考停止。

「不知火さん！　逃げてッ！！」

聞いたこともない、悲鳴のような神村さんの声が聞こえた。

（逃げるっ たつて　　）

後ろは壁。

神村さんの攻撃を受けてかなり鈍っているとはいえ、突進してくる妖魔の動きはまだ十分に速く、逃げられるような距離じゃない。

“数秒で殺される”　そんな神村さんの言葉が頭を過ぎり、背筋に氷の束を突っ込まれたような悪寒が全身を駆け巡った。

が、

「　儘よッ！」

俺はその場で戦闘態勢を取り、右手に“太陽の拳”を宿す。

……迎え撃つしかない。

神村さんが背後から加勢してくれるまで、おそらく数秒。

その数秒を生き延びれば済む話だ。

瞳孔の開ききった金色の瞳。

闇色の拳。

時間の流れが急に遅くなったように思えた。

コンマ数秒が、まるで数分のようにも感じられる。

(数秒って……何時間だっけかな……)

頭の奥では、冷静なようでちつとも冷静じゃない自分がそんな意味不明なことを考えていた。

「不知火さん ツ！」

立ち上がって妖魔の後を追う神村さん。

殺意の瞳で闇の力に包まれた拳を伸ばしてくる妖魔。

全身を巡る戦慄。

さらに遅くなる時間の流れ。

そして次の瞬間。

周囲の時は完全に止まっていた。

1年目3月その6

止まった世界の色は、銀色だった。

周囲を踊るキラキラしたものは氷の粒か。

張り詰めた空気は、少し動けば肌が裂けてしまうのではないかと
思うほどだ。

一面の銀世界。

本当に時間が停止してしまっただのではないか 俺は一瞬そんな
錯覚に囚われてしまっていたが、もちろんそうではない。

俺は動けた。

止まったのは、俺に襲い掛かるうとした妖魔だけだった。

「が……？」

妖魔が自らの足元に視線を落とす。

その両足は床の中に埋まっていた。

いや、違う。

床と同化 でもない。

(これは)

凍っていた。

妖魔の両足は凍りつき、床にピッタリと張り付いていたのだ。

「……がああああッ!!」

咆哮を上げ、足元の氷を砕いて妖魔が動き出す。

だが

「動かないで」

無駄な足掻きだった。

「がッ!!」

四方八方から突き出した刺又のような氷の棒が再び妖魔の全身を拘束する。

「ぐ……が……？」

何が起きたのか理解できない表情で妖魔がかろうじて動く首を左右に動かした。

その視線が元凶を探し当てる。

「たくさん人を殺したんだね」

庭に続くガラス戸　ガラスはすでに砕け散って枠だけになっていたが　その向こうに小柄な少女が立っていた

風に揺れる銀色の髪。

氷のように凍て付いた瞳。

それはまるで昔話から飛び出してきた妖怪、雪女のような　　なんて。

そんな感想をうつかり口に出せば、きっと今日の俺の夕飯は抜きになってしまうだろう。

つまり

「優ちゃん……無事でよかった」

氷のような瞳が、僅かに安堵の色を浮かべた。

「雪。お前どうして」

俺は突然現れた彼女に驚き、動きと思考を止めてしまっていたが、俺たちが互いに視線を交わしていられたのはほんの一瞬。

「……がああああ　　ツ……！」

「……！」

もがいていた妖魔の全身から魔力が迸り、拘束が砕け散る。

（！　こいつ、まだ　　）

神村さんの攻撃を受けてだいぶ弱っているにもかかわらず、妖魔はまだ戦えるだけの力を充分に残しているようだった。

その怒りの矛先は新たに現れた敵へと向けられる。

だが、雪は怯むことなく、す　と、その細い指先を妖魔へ向けた。

再び空気が張り詰める。

だが、

「……」

何かに気付いた顔をして、雪がその手を下ろした。

俺は、すぐにその理由に気付く。

「ふ　ッ！」

短い呼吸音。

神村さんが妖魔のすぐ背後まで迫っていた。

気配を察して振り返る妖魔。首を狙った太刀を寸でのところで右手で受け止める。

満身創痍のはずなのに、恐るべき反射速度だ。

だが

雪と神村さんが作ってくれたこの機会を逃すほど、俺はお間抜けではない。

妖魔が神村さんに気を取られた瞬間には、すでに動き出していた。

神村さんと視線が交錯する。

彼女も俺の意図を察していて、第二撃を放つつもりはないようだった。

そのまま俺は、がら空きになった妖魔の懐に潜り込む。

右手に宿るのは、天空に君臨する炎。

灼熱を上げる“太陽の拳”。

「くらいやがれえええええ　ッ！！」

「！！」

妖魔が俺の存在に気付く。

が、いくら超人的な反応速度を持っていても、雪、そして神村さんに崩された体勢は、俺の攻撃を受け止められる状況にはない。

ゴリッ、という鈍い感触

「が……ッ」

拳骨から前腕を伝い、肘、肩へと跳ね返ってくる衝撃。

それは俺の拳が妖魔の肉体を確実に捉えた証だった。

ぐっ、と、押し込む。

肉と骨が軋む。

アドレナリンがあふれ出した。

「おおおお ツー！」

全霊を込めて咆哮を上げると、妖魔の全身は一瞬にして炎に包まれ、声を上げる間もなくまるでバネ仕掛けのオモチャのように壁まで吹っ飛んでいった。

激突したタンスが粉々に砕け散る。

家の梁がギシギシと音を立てる。

埃が宙を舞う

……充分すぎる手応え。

カラ、と、タンスだったものの破片が瓦礫に埋まった妖魔の額に落ちる。が、妖魔はピクリとも動かなかった。

神村さんが刀を手にしたままで近付いていく。油断なくその全身を見下ろし、そして完全に動かなくなっていることを確認すると、神村さんは懐から取り出した不思議な刻印のついた手錠のようなものを素早く妖魔の両手首に嵌めた。

そんな彼女の行動を見て、俺は詰めていた息をゆっくりと時間をかけて吐き出した。

どうやら、これで本当に終わりのようだ。

体の緊張が解けていく。

「美矩さん」

と、神村さんが呼びかけた。

「連絡をお願いします。件の妖魔を拘束したと」

「連絡済みです、沙夜姉様」

美矩は台所の陰からパツと姿を現した。

ずっとそこに隠れていたのか、戦いが終わったことを察して裏口から素早く入ってきたのか。

いずれにしても気付かなかった。隠密を自称するだけのことはある。

「それよりも沙夜姉様。怪我の手当てを」と、美矩が神村さんに近付いていく。

そんな二人を眺めながら俺はもう一度深く息を吐き出し、落ち着いたところで辺りを見回した。

リビングは丸ごと洗濯機でかき回したようなめちゃくちゃな状態だ。これで外から何の反応もないのだから、美矩の張った結界とやらは正常に働いているのだろう。

(そういえば)

ふと、階段の下で事切れていた老人のことを思い出し、俺はそこからへ足を向ける。

が、

「不知火さん。住人の遺体についてはこちらで対処します。手を触れないでください」

「ああ……そうか」

仕方なく俺は玄関に向かって軽く手を合わせるだけにとどめ、リビングへと戻ってきた。

そして、

「あ　　っと」

ようやく。

本来ここにいるはずのない人物へ声をかける。

「雪。お前　　」

「うん？」

そこにいたのは銀髪の凍りついた瞳の少女　　ではなく、いつもの雪だった。

それを見て、俺もようやく魔力の解放を止め、人間の姿へと戻る。そうしながら問いかけた。

「どうしてここがわかった？」

もしかして俺の動きに気付いて後を付けていたのだろうか、と思

つたが、そんなはずはない。この場所が判明したのは神村さんの家で“同調”をやってからだし、そこからは車で移動している。まさかそこからタクシーを拾って俺たちを追跡したわけじゃないだろうし、仮にそうだったとしても車の少ない時間帯だ。そんなことをすれば俺や神村さんが気付かないはずはない。

すると、美矩が手を上げて言った。

「あ、それ、私が連絡しました」

「お前かよ！」

あまりにもあっけらかんと言われたので、怒るよりも先に突っ込んでしまった。

「あ、こっち向かないでくださいね。沙夜姉様、今セミヌードですから」

「うおうツ!？」

「あはは、思ったより純な反応ですね。今ので好感度が三ポイントほど上がりましたよ」

「……誰の好感度だよ」

「もちろん私のです。ちなみに沙夜姉様は背中を晒しているだけなので厳密にはヌードではありません。振り返っても大丈夫ですよ」
きつと背中に負った怪我の手当をしているのだろう。

振り返る気にはなれなかった。
すると、

「美矩さん」

神村さんのたしなめるような声。

「茶化さず、きちんと事情を説明してください」

「……すみません」

と、美矩は少し殊勝な声を出した。

その口調からして、どうやら雪を呼んだのは神村さんも知らないことだったらしい。

「連絡したのは、お二人だけではどうしても心配だったからです。相手の力が未知数でしたから、万が一があってはと思い保険を打た

せてもらいました。……勝手にやったのはきつと反対されるだろう
と思ったからです。ごめんなさい」

「……」
確かに作戦を練っている時点で、雪も参戦させよう　と美矩に
提案されていれば、おそらく俺は反対していただろう。そして、雪
が来なければこの戦いがどうなっていたかはわからないから、結果
的にそれは正しい判断だったのかもしれない。

が。

すんなりと、じゃあいいか　、という気持ちにはなれなかった。

「美矩ちゃんは悪くないよ」

「わかつてる」

雪の言葉にぶっきらぼうな言葉を返す。

美矩の行動が、神村さんの身を案じた結果であることはわかって
いた。

ただ

「……黙ってたこと、怒らないのか？」

俺は逆に雪にそう尋ねる。

てつきり秘密にしていたことを怒って、拳骨が平手打ちの一つで
も飛んでくるかと思った。

だが、雪はあっさりと首を横に振って、

「怒らないよ。……言ったでしょ。優ちゃんの声、聞こえてるって
近付いてくると、俺の頬に手を伸ばしてきた。

チクリ、とした痛み。

気付かなかったが、どうやら飛び散った破片かなにかで頬を傷つ
けていたようだ。

顔をしかめていると、雪はポケットの中から絆創膏を取り出して、
「どうして黙ってたのか知ってるもの。だから怒らない。でも」
ピタッと頬に貼る。

「こんな危険なこと、次も黙ってたら今度は怒るよ。すごく怒る」
ぎゅっと、絆創膏を強く押し付けてきた。

「いてて……いてえって、おい」

「……」

怒っていないと言いながら、俺を見上げる顔はやけに不満そうだった。

こいつがこんなにもわかりやすい表情をするのは珍しいことだ。

(……仕方ないだろ)

心の中で言い訳する。

俺はもう、自分の無力のせいでこいつが命の危険に晒されるなんて場面には遭遇したくないのだ。

だったらそもそもこんなことに首を突っ込まなければいいのだが、俺の性分と周りの状況はそれを許してくれそうにない。

だからせめて。

この件に関してはこいつを巻き込みたくない、そう思っただけのことだ。

「私だつて」

雪はパツと頬から手を離し。

こいつは本当に俺の心の声が聞こえているのだろうか。

そつ、と、俺の胸の中心に右の手の平を当ててきた。

「朝起きて、優ちゃんが二度と帰ってこないなんてことになってたら、何も知らなかった自分を一生許せなくなっちゃうよ。だから、

ね」

「……」

くつついた箇所から、声が直接脳に響いてくる。そこに熱のようなもの生まれ、金縛りにあつたように体が動かなくなった。

「次はちゃんと教えて。……だつて私は怖くない。優ちゃんが信じることのためだったら、戦うのが怖いなんてこれっぽっちも思わないよ」

「……」

雪のその主張は至極まっとうなもので。

俺が逆の立場だったら同じことを思うはずで。

「……あー」

結局のところ、俺は自分が嫌な思いをしたくないという、手前勝手な都合のみで動いてしまっただけのことか。

こいつが足手まといになるというのならまだしも。

そうでないことは今の戦いを見ても明らかだ。

反論の余地はなかった。

「……わかったよ」

すまん、と、続けようとしたが、その言葉は出てこない。

いつも余計なことまで悟っているのだから、そのぐらいは察してくれ、と　俺はまた自分勝手なことを考えていて。

ただ、

「……うん」

それが伝わったかどうかはわからないが、雪はようやくいつもの笑顔を浮かべてくれた。

「　というわけで、お前はまもなく無罪放免だ。いい友達を持つたな」

朝日を逆光にしてたたずむその男を、楓は不審な目で見つめていた。

時刻は六時三十分。

たった今、楓が聞かされた話がすべて正しいと仮定すると、戦いが始まったのが六時過ぎ。終わったのが今から約十分ほど前のこと。

「まるで自分で見てきたかのような口ぶりだな、青刃」

「見てきたさ」

青刃は当然のようにそう言っただけで笑う。

「妖魔相手にあの二人だけで行かせられるはずがない。陰ながら見守ってきたよ。結局出番はなかったがね」

「俺の見張りを言いつけられているんじゃないのか？」

「たまのエスケープをフォローしてくれる友人ぐらいはいるさ。今回のことをアンフェアだと思ってるやつらも少しはいるしな」

事も無げに言い放った青刃に対し、楓はフンと鼻を鳴らして、

「あいつの企みは今に始まったことじゃないし、俺もそれを知ってるんだからアンフェアもクソもねえだろ。頭の固い老人らしくひねりがないワンパターンだが」

命拾いしたのはむしろあのジジイのほうさ と、笑う。

青刃は入り口の壁に背中を預け、そんな楓を横目でチラッと見ると、

「しかし嬢ちゃんもここに来て頼もしい仲間を得たもんだな。あの兄貴はまだ未知数だがセンスは悪くない。鍛えて場数を踏めばもっと戦えるようになるだろうし、妹のほうは」

「少しだけ天井を見上げ、楽しそうに言った。

「あつちは完全に“お化け”だ。おそらく“四人の女皇”にも匹敵する」

「なんだ？」

怪訝そうな楓を青刃は再び横目で見て、

「“四人の女皇”のことか？ ……直近でこの御門を滅ぼしかけた悪魔たちのことさ。お前が産まれる前の話だから知らないのも無理ないか」

俺も直接は知らんしな、と、青刃は軽く両手を広げた。

「なんにしる、あの二人。今は実際より過小評価されているが、実態が知れば紫喉のおっさんはますます警戒するだろう。今回の件の詳細が耳に入ればそうなるのも時間の問題だ。……さて、どうしたもんな」

そう言いながら、青刃はくるりと踵を返す。

「けどま、去年の雑魚悪魔どもと違って今回の相手は妖魔族だ。悪魔狩りとしては“善意の協力者”に感謝状の一つも出してやらなきゃならんだろう。それも光刃様直々にな」

「白々しいな、青刃。最初から“そのつもり”だったんだろ」

演技じみたその物言いに、楓は不快そうにそう言った。……戦いの場にいた青刃が敢えて手を出さなかった理由は、それ以外には考えられなかったのだ。

「そのつもり？ なんのことだ？」

「……ふん」

優希たちが悪魔狩りの味方であると組織内に知らしめるには、何らかの大きな実績を手土産としたほうが説得力がある。

今回の妖魔退治はその材料としてはおそらく打ってつけだったのだろう。

「そのやり方に不満はねえが、それで紫喉が手を出しづらくなるとでも？ 俺のこの状況はどう説明するつもりだ？」

「お前のそれは普段の素行の賜物じゃないか。あの二人はお前ほどやんちゃではなさそうだし、ま、大丈夫だろう」

「どうだかな」

特に兄貴の方は、と、楓は軽く毒づいたが、青刃は気にした様子もなく、

「なににせよ“俺たちの”戦力が增えるに越したことはないさ。こんな状況だからな。俺の仕事が少しでも減るなら悪魔だろうが犯罪者だろうが大歓迎だ」

そう言っつて青刃は去っていく。

ドアの向こうに消えていくその後姿を最後まで見送って、楓は朝日の射し込む窓に視線を向けた。

「……どうやらこれで、あいつらも本格的に巻き込まれることになりそうだな」

誰もいない部屋の中、独白する。

もちろん返事はない。

だが、

「ああ、そうだな」

楓はそう呟いてベッドから立ち上がり、まもなく来る解放の時間に備えて身支度を整えることにした。

1年目3月その7

薄く鼻腔をくすぐるのは左右に並んだ襖の糊の匂いだろうか。長く続く木張りの廊下の向こうからは、十二単を着込んだ奥方が腰元を引き連れて今にも歩いてきそうな気さえする。

時代劇の中に飛び込んでしまったかのような、そんな感じだった。悪魔狩り“御門”の総本部。

想像どおりといえばそうなのだが、この敵かな雰囲気は俺にはどうも居心地が悪かった。

そんな俺のすぐ目の前を一人の女性が歩いている。女性なのに俺と同じか少し高いぐらいの身長で、ピンと背筋を伸ばして歩く後姿はなんと凛々しい。

顔見知りの悪魔狩り、緑刃さんである。

そして俺の後ろには二つの足音。こちらは見知らぬ二人の男たちで、おそらくはどちらも悪魔狩りだろう。

そんな三人の悪魔狩りに挟まれるようにして、俺は彼らの本拠地の廊下を歩いていた。

傍目に見れば悪いことをして連行されているようにも見えるが、もちろんそうではない。

今日の俺はどうやら彼らの“客人”らしかった。

美矩から電話があったのは妖魔との戦いの翌日、土曜日の夜のことだった。

『今回の件、光刃様から感謝のお言葉があるそうですよ。暇だったら明日の昼、神社まで来てください』

相変わらぬ軽いノリで突然そんなことを言い出した彼女に、暇じゃなかったら行かなくていいのか 一応尋ねてみたところ、じゃあよろしく、とだけ言って一方的に電話を切られてしまった。

どうやら強制イベントだ。

感謝するのに相手を呼び出す（しかも半強制的に）ってのはどう
いう見なのかと思っただが、まあ偉いヤツには色々面倒くさい事情
があるんだろうと勝手に納得し、また悪魔狩りのトップってのがど
んな人間なのかということにも少なからず興味があったので、その
翌日の日曜日　つまりは今日、俺はこうしてノコノコと神社まで
やってきたというわけである。

「……そっぴや美矩のヤツはいないのか？」

周りを見回しながらそう聞いてみると、緑刃さんは視線だけでこ
ちらを振り返った。

「いないよ。あの子はもともとそういう役目じゃない」
相変わらずの男言葉がサマになっている。

「なら神村さんは？」

「ん。沙夜なら」

緑刃さんは少し考えて、

「この先でお前を待っている」

「そっか」

特に深く考えずに俺は頷いた。

長い廊下の突き当たりを左に曲がり、少し歩いたところに大きな
襖。

緑刃さんがその前で足を止める。客間のような場所なのだろうか。
襖にはテレビか何かで見たような立派な絵が描かれていた。

どうやらこの中で、光刃とかいう偉い人間が俺を待っているらし
い。

「あーっと……」

そこまで来て俺は柄にもなく少し緊張してしまった。

「俺はどうすりゃいいんだ？　自慢じゃないが、偉い人間に対する
作法とかはよくわからないんだが……」

襖の前で立ち止まった緑刃さんにそう尋ねてみると、

「今日はそんなことを気にしなくとも良い」と、少し頬を緩めた。

「中には光刃様と護衛の青刃、それに若い悪魔狩りが何人かいるだけで、他の偉い方々はみな欠席だ」

「欠席？ でも一番偉いのがいるんだろ？」

「ああ。だが いや、中に入ればわかるさ。……光刃様。不知火優希をお連れしました」

緑刃さんの言葉に、一拍置いて襖の向こうから返事があった。

「どうぞ」

「……あれ？」

聞こえてきたその声に俺が疑問を口にするより早く、緑刃さんが襖を開く。

開かれたその向こう。

想像していたよりも狭い部屋だった。といってもそれは時代劇の殿様がいるような部屋を想像していたからで、実際にはそこその広さがある。長方形の部屋の左右には合計十二名の男たち いや、二名ほど女性が混じっていた が座っていて、襖が開かれると同時に一斉に頭を垂れた。

そして正面。

見覚えのある顔が座布団の上に正座していた。

神村さんだ。

緑刃さんと同じくピンと背筋を伸ばしているが、もともとが小柄なせいだろうか。緑刃さんのように凛々しいというよりは、行儀良くたたずむお人形さんのような印象を受けてしまう。

さらにその後ろ。

やはり見覚えのある男、青刃が彼女の斜め後ろに座っていた。

「どうした？ 中に入るといい」

「どうした、って」

もう一度部屋の中を見回す。

左右に控える悪魔狩りらしき十二人。

正面に鎮座する神村さん。その後ろにいる青刃。
……何度見ても、中にいるのはそれだけだった。
「からかっているのか？」

そしてこの構図。
誰がどう見ても

「どうぞ不知火さん。中へお入りください」

と、正面の神村さんが言った。

「……」

仕方なく中に入って中央に用意されていた座布団のところまで歩いていく。

襖を閉じた緑刃さんがぐるっと回りこんで青刃の隣　つまりは神村さんの斜め後ろに腰を下ろした。

「どうしました？」

俺がマジマジと見つめていることに気付いたのだろう。神村さんが少し怪訝そうな顔をする。

「……あーっと」

先ほどまで感じていた緊張は一気にどこかへ吹き飛んでしまっていた。

この構図の中心にいるのはどう見ても神村さんだ。
それが何を意味するのか、もちろんわからないはずはない。
が、一応確認してみることにした。

「俺は確か、光刃とかいうヤツに呼ばれてここに来たはずだったんだが……」

「はい。……？」

神村さんはそこで何事か気付いた顔をする。

「もしかして美矩さんから何も聞いていないのですか？」

その反応で、ああ、やっぱりそういうことなのか　と、俺はようやく確信するに至った。

「たぶん、な」

言い忘れたわけではなく、わざと言わなかったのだろう。先日初

めて会ったばかりだが、俺はあの美矩という少女の性格をなんとなく掴みかけていた。

下手すれば、どこか物陰で今の俺の反応を見て喜んでいるかもしれない。

「すみません。それでは改めてお話ししなければなりませんね」

神村さんは小さく頭を下げ、それから相変わらずの淡々とした口調で説明する。

「不知火さんをお呼びした“光刃”というのは私のことです。私がこの悪魔狩り“御門”の現当主です」

そのときの俺の心境は、びっくりしたというよりは拍子抜けしたという感じだった。

もちろん驚きがなかったわけではないが、このトップであるということがどれほどすごいことなのかいまいちピンと来ていなかったのだ。

それに 目の前の神村さんはいつもと何か違っていているわけではない。

相変わらずの無表情で、相変わらずのツンデレだ。

「だから意味がわかりません」

そして相変わらず心の眩きに見事に突っ込んでくる。

……… そんないつもどおりの彼女だったから、彼女が実は偉い人間だったと聞かされてもそれほど驚いたり気後れしたりせずに済んだのだ。

ただ 色々と疑問は沸いてくる。

「……… なあ、神村さん。ん？ こういう場じゃ光刃さんとか呼んだほうがいいのか？」

そう言いながらチラッと左右に控える男たちや緑刃さん、青刃の表情の動きを観察する。が、どうやらタメ口を咎められるようなこととはなさそうだった。

緑刃さんの言ったとおり、そういったことは本当に気にしなくていいらしい。

「いつもどおりでお願いします。不知火さんはこの御門の一員というわけでもありませんから」

「じゃあ神村さん。質問いいか？」

「なんでしよう？」

真つ直ぐ見つめてくる神村さんに対し、俺は頭の中に浮かんだ疑問をぶつけた。

「そんな偉いのに、なんで毎日神社の掃除を？」

「……それはここでする質問か？」

呆れ顔で口を挟んできたのは後ろの緑刃さんだ。

まあ、確かに。

「いや、聞きたいことがありますすぎて混乱した」

俺が正直にそう言うと、

「ま、仕方ないさ。いきなりのことと驚いているだろうしな」

そう言つて軽く手を広げたのは、緑刃さんの隣の青刃だ。

「ちなみに聞きたいことつてのが胸のサイズのことなら、沙夜は八十四のDらしいが」

「聞いてねーし、聞くつもりもねーよ！」

俺が突つ込むと同時に、緑刃さんの無言の拳が青刃の後頭部にヒツトした。

「つて……」

前のめりになった青刃は顔をしかめて、

「待ってくれ、緑刃。今のは彼の緊張をほぐすための軽い冗談じゃないか」

「貴様の冗談には品がなさすぎるッ！」

「いまどきの高校生ならこのぐらい平気で話題にしてるぜ……なあ、優希くん」

「……俺に同意を求めんな」

心なしか、左右にいる悪魔狩りのうち、女性の二人から厳しい目が向けられているような　いや、たぶん気のせいだとは思うのだが。

しかし

気を取り直してあらためて周りの悪魔狩りたちを見てみると、どうやらみんな若い。若いというより幼いというべきか。さつきから“女性の悪魔狩り”なんて言っているが、正確には二人とも俺とそう変わらない、どちらかといえば少女というような年齢だろう。その他も大半がおそらくは十代。中には青刃と緑刃さんのやり取りを見て密かに笑っているような者もいて、俺の中にあつた堅苦しい悪魔狩りのイメージとはだいぶ違う、どことなくフレンドリーな雰囲気漂っていた。

昨年 of 雪の事件で対峙した悪魔狩りはいずれももつと年上だったから、組織内の年長者が極端に少ないというわけではないだろう。にもかかわらず、この場に集められたのが若い悪魔狩りばかりであることには何か意味があるのだろうか。

に、しても。

(八十四のDって意外と……)

その数値の詳しい意味まではよくわからないが、それが本当だとすると神村さんは結構着やせするタイプ

「……不知火さん」

「べ、別にやましいこととか考えてねーよ!？」

「？」

「……あ」

やってしまった。

無言の緑刃さんが座った目でこつちを見ている。

隣の青刃は声を殺して笑っていた。

……なんだろう、この敗北感。

ただ、そんな状況の中でも、神村さんだけは相変わらずマイペースで、

「それは家の仕事です。悪魔狩りでの立場とは関係ありません」

「え?」

一瞬何のことかわからなかったが、どうやら神社の掃除の話らし

い。

相変わらず律儀な人である。

「それと色々のご説明する前に」

そう言って神村さんはいったん言葉を切った。

すると。

(……なんだ?)

場の空気が変わったような気がした。

周囲から聞こえていた微かな衣擦れの音がいつせいにピタリと止まり、緩かった空気はピンと張り詰めて。

すべての視線が俺と、そして正面にいる神村さんへ集まっているようだった。

誰かが小さく喉を鳴らす。

「まずは今回の件“御門”の当主、光刃として御礼申し上げます」
小さく頭を下げる神村さん。

「危険であることも顧みず、人々を脅かす悪魔の殲滅に御協力いただきましたこと、悪魔狩りを束ねる者として感謝の念に堪えません。今後ともどうか宜しくお願い致します」

いつもよりも堅苦しい言葉遣いだった。

数秒の沈黙。

どこかから安堵の息のようなものが漏れて、

「……と、いうわけで」

最初に口を開いたのは青刃だった。

その軽い口調に、再び空気が緩む。

「君と妹の　雪くん、だったか。君ら二人は“正式に”我々に協力してくれた者として、今後は丁重に取り扱わせてもらうことになった。もちろん今後も協力してもらえると非常にありがたい」

こちらに向けられた青刃の視線はどこか得意げだった。

……そういうことか、と、ようやく今の空気の意味に気付く。

今日のこれは、ただ先日の礼を言うために設けられた場などではなく。俺たちの存在を“組織として”認めるためのある種の儀式だ

ったのだ。

悪魔狩りには悪魔容認派と悪魔排除派がいて、組織のナンバー二が強硬な排除派であることから、組織内の主流が後者であるという話は俺も聞いている。

とすると

左右にチラツと視線を送る。

若い悪魔狩りたちも皆、まるで先生の目を出し抜いて学校を抜け出した学生のような、してやったりという顔をしていた。

つまり彼らは非主流、いわゆる容認派の悪魔狩りたちなのだろう。そして、先ほどの緊張とこの安堵の空気は あるいは今日のこのイベント自体、主流である排除派の目を盗んで催されたものなのかもしれない。そう考えると、昨晚の美矩からの連絡が急だったことにも納得がいく。

…… まあ、その辺りは想像の域を出ないが。
いずれにせよ。

「ああ、まあ」

この場にいる彼らが俺たちの存在を受け入れてくれるというのはありがたい話だったが、かといって悪魔狩りの派閥争いにまで首を突っ込むつもりは俺にはなく、

「個人的には、これからも協力させてもらうつもりだ。神村さんの友達としてな」

そう返すと、青刃はニヤリと笑みを浮かべ、緑刃さんは小さく頷いて。

神村さんは

「よろしく願います。不知火さん」

と、先ほどよりもさらに、深く、深く頭を下げたのだった。

「と、いうわけさ」

悪魔狩り“御門”は全国に数箇所の支部を持っている。その中でも総本部に次ぐ、いわば副本部とでもいうべき支部が、光刃たちがいる総本部から西に数百キロ、人のまったく寄り付かない山中にあった。

主に各支部をまとめる役目を担うこの副本部“見崎^{みさき}”を統括するのは、現在の組織のナンバー三、光刃を影でサポートする存在としてその名を与えられた“影刃”である。

その影刃は今、見崎の建物を出て鳥居をくぐり、本部と同じような長い階段を下りたところの大きな石の上に座っていた。

片足を地面に下ろし、もう片方の足はあぐらを掻くように石の上に置いて、ボロっつい作務衣の長い袖の中に手を入れたまま、顎を上げ、目の前に立つ少年 楓の顔を見上げている。

「それで、紫喉の反応は？」

「さあな。取り巻き連中は相当頭に来てたらしいが」

影刃の質問にそう答え、楓は愉快そうに喉の奥で笑った。

「連絡は行ってるのに本人の耳には入っていない。どうやったのかは知らんが、排除派の取り巻き全員にそんな状況を作ったんだとさ。身内の恥をさらすようで、聞いてなかったから無効だ、とは言えなかつたらしい」

影刃は小さくため息を吐いて、

「お歳を召された方々は余計な情報が耳に入ってくるのを嫌う方が多くてなあ。組織の一員としてはその態度に危機感を覚えなくもないがね。……ま、青刃のやつもなかなかやるようになったというところか」

「そのずる賢さはお前譲りじゃないのか？」

楓がそう言くと、影刃の頬の皺が深くなる。

「あの軟弱者に譲ってやれる物なんぞ一つもないわ。……しかし、これで紫喉もあの二人には簡単に手を出せまいな。光刃様にとつても……ま、頼りになるかどうかはわからんが、仲間が増えることは良いことだ」

「良かったのか？」

「なにがだ？」

「優希と雪のことさ。お前の望みに反して、もう半身ほど“こつち側”に浸かっちゃまってようだが」

「仕方なかるう。本人があれば突っ込みたがっているのでは、他人がどう言つたところで止められるものではない」

私はとつくに諦めてるよ、と、影刃は笑った。

「ふん。ま、俺はどつちでも構わんがな」

「それに」

「……なんだ？」

影刃が視線を上げ、遠くを見つめていた。

夕暮れにカラスの鳴き声が響く。

「先代やお前の父が死んだあの襲撃事件から二年半になる。紫喉は犯人をあぶり出そうと必死になっているがいまだ成果は得られていない。……そろそろ、なにかあるのではないかと思つてな」

楓が目を細める。

「今度は沙夜のヤツが狙われるってことか？」

「連中の狙いが光刃様 いや、御門にある国内最大の“門”であるならば、な。そういう意味でも戦力は多いほうがいい」

それに、あの二人とてまったく無関係ではないしな、と、少しだけ不本意そうに呟いて、影刃はそつとため息を吐いたのだった。

そんな彼の悪い予感を裏付けるかのよう。

その頃、優希たちの住む町には、彼らを過酷な戦いへと引きずり込む“四つの影”が迫りつつあったのである。

登場人物紹介 1年目のネタバレ等含みます

2年目開始時点の紹介となります。

1年目のネタバレと若干の誇張表現を含む可能性があります。
また、1年目を読んでいないと意味不明な単語等が出てきます。
充分ご注意の上、先にお進みください。

- - -

・主要登場人物

不知火 優希 しらぬい ゆうき 男 175cm 12月生まれ(16歳)

主人公。風見学園高等部1年 2年。

自称『無愛想で第一印象の悪い男』だが、周りの人間からは『無愛想の意味を辞書で調べて来い』と密かに思われている。悪そうな目付きをしているので第一印象が悪いのは本当。

シスコンとからかわれると問答無用で暴力を振るう。誰がどう見ても(略)

状況次第でツッコミもボケもこなすオールラウンダー。

バトル面においては、上級氷魔族の子であるが、突然変異種のため炎を操る。ただし日替わりで能力値が変動するので使い勝手が悪いという、レアなのにデメリットのほうが大きい可愛そうな子。

戦闘時は赤髪になる。

不知火 雪 しらぬい ゆき 女 158cm 12月生まれ（16歳）

優希の双子の妹。同居人その1。桜花女子学園1年 2年。人を惹きつける容姿と雰囲気を持っており、中等部時代にはファンクラブがあつたほどの人気者だが、周囲にブラコンとからかわれずとも動じないどころか全力で肯定してしまう残念な仕様。

なお、彼女の各種言動が本気か冗談かは誰も知らない。性格は基本的に穏やかで天然（養殖？）

純血の上級氷魔族で、かなり規格外の力を持っている模様。兄貴の立場……。

戦闘時は銀髪になる。

牧原 瑞希 まきはら みずき 女 171cm 7月生まれ（16歳）

優希の同い年の従姉（実際の血縁はない）。同居人その2。桜花女子学園1年 2年。

モデル並みのスタイルとルックスを持っており、家事もやるうと思えば全般こなすという完璧女子だが、格闘技（観戦ではなく習得）に興味の大半を奪われてしまっている残念仕様。

きついように見える性格は対優希専用装備であり、普段は至って真面目な常識人。

雪が傷つけられるといきなりぶち切れることがあるが、たぶんそういうアレではない。

現在のところ、悪魔にダメージを与えた唯一の一般人。

神崎 歩 かみざき あゆみ 女 148cm 1月生まれ（13歳）

1年目10月から不知火家で生活するようになった少女。同居人その3。風見学園高等部1年 2年（飛び級）

上述のとおり飛び級で高等部に入ってきた超天才少女だが、『天

才とドジっ子は紙一重』のことわざを見事に体現してしまっている、
やっぱり残念な仕様。

性格は人懐っこくて素直。病弱だが、夜更かし好きで微妙に偏食
気味と体にいいことはあまりしていない。

天才的な発想で非常に独創的な料理を作ったりする。
人間だが、微弱な念動力サイコキネシスと精神感応力テレパスを操る。

神薙 かんなぎ 直斗 なおと 男 162cm 4月生まれ(16歳)

優希の幼なじみその1。風見学園高等部1年 2年。

優希の近くにいた時間は一番長いはずなのに、それを感じさせない
程度に影が薄い。いわば有能秘書タイプ。

女性的な顔立ちで背も低く、過去、男にナンパされたことがトラ
ウマになっていることから、私服は男っぽいラフなスタイルを好む
ただし、それは女に間違われたんじゃないかと、そもそもそういうア
リだったんじゃないかという説もある。

物腰は穏やかで運動神経抜群。中等部時代はバスケット部のエース。
時折思い出したように毒を吐く。

水月 みなづき 由香 ゆか 女 160cm 2月生まれ(16歳)

優希の幼なじみその2。風見学園高等部1年 2年。

典型的な今時じゃない女子高生。カラオケで童謡ばかり歌って周
囲をドン引きさせたという武勇伝がある。無駄に上手かったため、
周りの人間は勝手に『将来は保育所の先生か歌のお姉さん』と決め
付けている。

ポニーテイルで一見活発そうにも見えるが、実際にはかなり控え
めな性格。ただ基本的には話好きで、色々と気配りできる性格から
女友達は非常に多い。

優希にとっての“日常の象徴”。

神村 沙夜 かみむら さよ 女 154cm 3月生まれ(16歳)

風見学園高等部1年 2年。

無表情と淡々とした口調であらゆるボケを無効化^{スルー}する鉄面皮の少女。

神社の娘で、朝と夕方に神社まで行くとかなりの確率で会うことができる。

左右にぶら下げた三つ編みのお下げと巫女装束がトレードマーク。その正体は悪魔狩り“御門^{みかど}”の当主“光刃^{こうは}”で、悪魔退治用の光輝く刀を持っている。

楓 かえで 男

優希の幼なじみその3。

悪者ぶっているが、幼なじみを助けるために裏で暗躍したり、その状況を遠方までこまめに報告しにいたり、どこからどう見ても(略)

最強の悪魔と謳われる妖魔族の少年で、本人曰く『悪魔狩りを職滅できる』実力がある。

空中に向かって話しかけるクセがある。

・その他の人々

藤井 将太 ふじい しょうた 男 16歳

優希のクラスメイト。ムードメーカー男。

藍原 美弥 あいはら みち 男 16歳

優希のクラスメイト。ムードメーカー女。

山咲 晃やまたき ひかる 女 31歳

風見学園の養護教諭。

牧原 雅司まきはら まさし 男 41歳

優希の伯父で瑞希の父。

牧原 宮乃まきはら みやの 女 34歳

優希の伯母で瑞希の母。

神薙 桜かんなぎ 桜 女 36歳

直斗の母。

水月 鉄也みなづき てつや 男 54歳

由香の父。刑事。

水月 梓みなづき あずさ 女 31歳

由香の母。

・悪魔狩りの人々

光刃 光ひかりば 女 16歳

悪魔狩り“御門”の当主。|| 神村沙夜

紫喉 紫むらし 男 50歳前後

悪魔狩り“御門”のナンバー2。悪魔排除派のトップ。

影刃^{えいは} 男 40歳前後

悪魔狩り“御門^{みかど}”のナンバー3。

青刃^{せいば} 男 20代半ば

光刃の護衛その1。

緑刃^{りょくば} 女 20代半ば

光刃の護衛その2。

美矩^{みのり} 女 10代半ば

自称隠密。

2年目4月その1

「なんだと　!？」

圧倒的優位にあつた男の表情が驚愕に歪む。

目の前にいるのは、姿こそ悪魔の形をしてはいたが、せいぜい十歳そこそこの少女。

対する男は十代半ばからすでに二十年近くも悪魔狩りとして一線を戦い続け、“当主を影で支える者”の称号を得た組織のナンバー二だ。年齢による体力の微妙な衰えが見え始めていたとはいえ、悪魔狩りとしての力はいまだ組織内でも指折り。

しかもこの場にいるのは彼一人ではない。

「まさか、こんな子が……」

後ろには二十代半ばほどの女性。当主の護衛を主な任務とする、

やはり組織内でも指折りの実力者　“緑刃”がいる。

そんな二人が、気圧されていた。

まだ年端も行かない、十代前半の雷魔の少女に。

「　なにを勘違いしていたの？」

悪魔とはいえ子供は子供。できれば殺さずに済ませたい　そう考えていた彼の心中をあざ笑うかのよう。

「お前たちは私を追い詰めたつもりだったのかもしれないけど、でもそれは違うわ」

少女は目を見開き、その幼さを残した口元に歪な笑みを浮かべた。それはおおよそ子供とは思えない、見ただけで死を意識させるほど負に塗れた、死神の微笑。

「私は遊んであげてたの。お前たちに、恥辱と、恐怖と、そして気が遠くなるほどの数え切れぬ後悔を与えるために。お前たちが地獄の苦しみの中で悶え、喘ぎながら死んでいけるように」
ほとばしる雷光が、二人の足をその場に釘付けにした。
痙攣する空気。

唸りをあげる地響き。

動けない。

これまで感じたこともないほどの圧倒的な魔力の顕現を目の当たりにして、二人はそこから一步も動くことができなかった。

「……絢女^{あやめ}。お前は撤退しろ」

齒を食いしばり、引きつる頬を強引に動かして影刃はそう告げる。「ここは死へと向かう戦場になる。……それが悪魔狩りの宿命とはいえ、あの娘が最初の誕生日も迎えぬまま母親を失ってしまうのは、あまりにも忍びない」

「……影刃様」

しかし緑刃は動揺を隠して答えた。

「私は悪魔狩りです。娘に会うために敵前逃亡したとあっては、長く御門に仕えてきた神楽の名が泣きましよう。夫もそれは覚悟の上。私は、あの雷魔が御門の今後の脅威とならぬよう全力を尽くすのみです」

「しかし、絢女」

「緑刃です。私は光刃様をお守りする盾の片割れ。……影刃様。どうか最後まで私の使命をまっとうさせてください」

影刃が一瞬言葉に詰まる。

「……すまない」

「お祈りは 済んだかしら？」

白い稲妻が二人の足元を撃った。

「喜ばなさい。お前たちはゆっくりと地獄に送ってあげるわ。ポンプで空気を送り込むように、ゆっくり、ゆっくりと。……あの裏切りの夜を、お前たちはいつたいたいどんな気持ちで過ごしていたのかし

ら？ ねえ？」

それまで淡々としていた少女の声色が、やがて憎しみの音を刻み始める。

「あの日を境に、私の太陽は決して途切れることのない厚い雲の中に隠れてしまったわ。……すべて。すべてお前たちのせい」

少女が見据えた先で、二人の悪魔狩りが身構える。

「だから私は許さない。……絶対に。私は、お前たちを絶対に許さない ツ！」

周囲を埋め尽くす、閃光のごとき雷^{いかずち}。

二人の悪魔狩りを襲う、戦慄。

その出来事より後、少女は周辺の悪魔狩りの中にその名を轟かせることとなり、悪魔狩りは少女のことを畏怖を込めてこう呼ぶようになった。

雷^{いかずち}を統べる者、すなわち“雷皇^{らいおう}”と。

-
-
-
-

和らいだ朝の風を首筋に感じながらアスファルトをリズムカルに蹴りつけていく。

眠気が残っているのか、あるいは酸素が不足しているせい、頭の中は少しボーっとしていて、はっ、はっ、ふっ、ふっ、という自分の呼吸音以外はほとんど耳に入っていない。

長めの髪がこめかみに張り付いて不快だ。髪を長めにしているのは床屋にあまり行きたくないからだだったが、こうなってくると少し

短くすることも考えたほうがいかもしれない。

緩く長い坂道を登りきって大きく息を吐き、ペースを落としながら軽く脇腹をさする。

ここまでくればゴールまであと少しだ。

しかし、苦しい。

喉がカラカラだ。

足が重い。

肺の中がズキズキと痛む。

すぐにでもやめたい。

たいていのスポーツは走り込みが基本だというし、陸上なんかは走ることそのものが目的だったりするものも多いが、どうやら俺にそういったアスリートの資質はなさそうだ。

昨晚の雨が残っていた水たまりを避け、長く続く塀が途切れたところを右へ曲がる。

あと数百メートル。

自宅の屋根が視界の奥に見えてくる。

ラストスパート。

最後の力を振り絞ってペースを上げると、自宅のシルエットがみるみるうちに近付いてきた。

最近気付いたのだが、人間の体つてのはゴールが見えるところから力がわき上がってくるように作られているらしい。ゴールがわからないうちは燃料切れにならないよう無意識に力をセーブしていたりするものなのだろうか。

鈍った思考の中でそんなことを考えつつ

「あっ」

自宅の前には、ちょうど新聞を取りに出てきた妹の姿があった

「お帰りなさい、優ちゃん」

「ただ……い、ま……」

そんな呼びかけにまともに返す体力も残っていなかった俺は、崩れ落ちるように門の前へたり込んでしまったのだった。

短い春休みもあつという間に最終日。明日は風見学園の入学式と始業式があつて、俺たちはもちろん全員が進級して二年生となる。

この一年間、個人的には色々なことがあつたものの、学生生活という点においてはさほど大きな変化が訪れることもなく

「なあ、由香……」

「どうしたの？」

由香は頭の上にハテナマークを浮かべて俺の顔を見た。

俺から見て斜め後ろ、約一メートル。特に意識することはないのだが、一緒に歩いていると大抵そのぐらいの位置にいる。どうやらそこがこいつの指定席らしかった。

俺はそんな彼女からいったん視線を外し、廊下の窓からやや夕焼けに染まりつつあつた校庭を眺めつつ、

「おかしいと思わないか？ 春休みの最終日に、どうして俺らだけ学校に出てこなきゃならんのだ？」

「え？ それは明日の入学式の予行演習で……」

「そりゃわかつてる。俺が納得いかんのは、どうして俺らがその予行演習とやらをやらなきゃならんのかつてことだ」

何をどう間違つたのか、俺と由香は入学式で、二年生代表として挨拶をやらされることになってしまったのである。

しかも

「これがくじ引きとかじゃんけんで決めたとかならまだいい。けど、突然だぜ？ 突然担任から名指しで俺ら二人。……おかしくね？」

そう。突然だったのである。

別にそのとき揃つてお喋りをしていたわけではないし、学校を休んでいたというわけでもない。終業式の日我突然、担任の岩上先生からポンポンと名指しされ、春休みの最終日に学校に来るように言

われて、それつきりだ。

「ど、どうだろ……でも、ほら。男子と女子一人ずつだから、どうせだったら仲の良い人同士にしたほうが……って、考えてくれたんじゃないかな？」

「どうだかな。そもそも岩上のヤツ、俺らが仲いいこと知ってるのか？」

正直、あの担任とは一年間付き合ってきたが、定年間際でポケ始めているのかいつも飄々としているし、そもそも生徒にあまり関心がありそうには見えない。

特別悪い先生というわけでもないのだが

「仮にそれを知ってたとしても、俺より直斗のがよっぽど適任だろうに」

「そ、そこまでは私にもわかんないよ……」

「ま、いいんだけどさ。……とつとと帰るか」

由香が困った顔になったので、話題を切り上げることにした。まあ、あの先生のことだ。結局のところは大した理由もなくて、ただ単に運が悪かったただけなのだろう。

階段を下りて一階へ。

今日は二階の元いた教室を使ったが、明日からは三階の教室になる。

「そついやクラス発表見たか？」

新しいクラス割りは昨日から一階の掲示板で発表されているはずだった。

「え？ ううん。帰りに見ていこうかと思って。また同じクラスだといいいね」

「あー、でもたぶん違うクラスになるんじゃないかね？」

「どうして？」

「お前と二年連続で同じクラスだったことなんてあったっけ」

「あつたよ。小学校のとき」

「あ、そうだったか」

よく覚えているもんだ。

感心していると、由香はニコニコしながら、

「三年はクラス替えないし、今回一緒だったら初の三年連続だね」
「んー」

正直、同じクラスであることのメリットはあまりない。クラスが変わったところで毎朝顔を合わせることに変わりはないし、クラスが一緒だと忘れ物をしたときに借りられないというデメリットも大きい。

仲のいいやつは一人ぐらい他のクラスに行ってくれたほうがむしろ都合が良いのである。

まあ、五クラスもあるのだから、知り合いが全員同じクラスに集まるなんてことはないと思うが

「……あれ？」

と、そこで、急に由香が不思議そうな声をあげた。

「なんだ？」

振り返って尋ねると、由香は俺よりも先の廊下を見つめて、

「あの人……」

「ん？」

正面に向き直ると、そこには一人の男子生徒が立っていた。

それだけなら別におかしなことはないが、問題はその生徒の着ている制服だ。

「ああ。下見か」

その制服は風見学園高等部の制服ではなく、中等部のものとも形が違っている。

おそらく余所の学校からやって来た新生生のだろう。

「でもキョロキョロしてる。もしかして迷ったんじゃないかな？」

と、由香は少し心配そうな顔をした。

さすがは俺的ランキング（おせっかい部門）の第一位である。

「まさか。玄関まで戻れば案内図があるだろ」

「玄関がわからなくなったとか……」

「相当の方向音痴だぞ、そりゃ」

さすがにそんなやつはいないだろう　と、俺は笑い飛ばしたのだが、

「あ、こっち来る」

由香が反射的に俺の後ろに隠れた。

こいつは見知らぬ男子に対しては、ちょっとだけ人見知りするのである。

その男子生徒は相変わらずキョロキョロしながら、やがて俺たちの存在に気付いたらしく、

「あの」

そう言いながら駆け寄ってきた。

近くで見るとかなり背が高い。俺よりも五センチ程度、おそらく百八十センチぐらいはあるだろう。ただ顔立ちは幼く、なかなかの美形だ。テレビでよく見るアイドルグループの誰かに似ているような気がした。

(……………って、まさか)

男子生徒が困ったような顔をしているのを見て、俺は思わず心の中で呟く。

そのまさかだった。

「……………あの、すみません。正面玄関ってどっちのほうですか　？」

「木村です。木村栄二といいます」

「えっと……………水月です。今月から二年生になります」

「みなづき？　水の無い月ですか？」

「あ、違います。水の月で水月です」

「へー、珍しいですね。あ、下の名前聞いてもいいですか？」

「え？　あ、えっと……………由香、です」

「いい名前ですねー。じゃあ由香先輩でいいですか？」

「あ、えつと」

由香が困った顔でチラツとこちらを見る。

「ああ、ごめんなさい。ちょっと馴れ馴れしかったですね。遠くから来て知り合いがないもんで。これも何かの縁ですし、今後とも親しくさせてもらえたら有難いな」と

「え、あ、ええつと……」

木村栄二と名乗ったその男子生徒はどうやら帰る方向が俺たちと一緒にだつたらしく、学校を出てからずっと、将太を彷彿とさせるマシガントークを由香の隣で繰り広げていた。

本人の言うとおり初対面にしてはかなり馴れ馴れしく、別に悪い印象を受けたわけではなかったが、疲れているときに関わりたいタイプでもなかったので、俺は二人の後ろで高みの見物を決め込んでいる。

幸いにして、彼も俺のほうにはそれほど関心がないようだった。

「じゃあ木村くんは今年の新生なんだね」

由香はたまに困った顔で俺の方にチラチラ視線を送ってきていたが、とりあえず無視。

もとはといえばこいつがお節介を焼こうとしたのが原因なのだから、最後まで責任を取ってもらうことにしよう。

「あ、そうです。で、僕ってばめちゃくちゃ方向音痴で」

木村はそう言って頭を掻きながら、

「でもおかげで水月先輩に出会えましたし、むしろラッキーでしたね」

「え……」

後姿しか見えないが、由香の困っている顔が目には浮かんだ。

「ところで」

木村がこつちを振り返る。

「先輩の名前も、聞いていいですか？」

「ん？」

俺はあらぬ方向に向けていた視線を戻して、

「不知火。ちなみに、珍しい、って感想はかなり聞き飽きてる」

「先に言われちゃいましたか。でも本当に珍しいですね」

木村は笑った。

それ以上の会話は続かない。

別に意識して無愛想にしているわけじゃなかったが、どうせこころで別れたらそうそう会うこともないのだろうし、無理して愛想を振りまく理由も思いつかなかった。

「ところで」

そんな風に他人事を決め込んでいた俺と由香を交互に見て、木村は言った。

「お二人は付き合ってたりますか？」

「え？」

「しない」

困惑した由香と素早く返した俺との差は、その問いかけを事前に予想していたかどうかだろう。

「あ、うん。違うよ」

少し遅れて由香が相槌を打つ。

すると木村はわざとらしいぐらいにパツと表情を輝かせて、

「やっぱり！ そうじゃないかと思ってたんですよー。僕がずっと

水月先輩と話していても、不知火先輩は全然顔色変えませんでしたしー！」

「……なかなか鋭いな」

そんな無邪気な反応を見る限り、少しお調子者の気はあるものの、正直者というか、そんなに悪いヤツではなさそうだ。

「じゃあこれから付き合う予定があったりとかは？」

「予定？」

その問いに、今度は俺の反応が少し遅れ、先に由香が答えた。

「そ、そんな予定立ててる人いないよ……でも、先のこととはわからない、よね？」

途中で自信なさげに俺に同意を求めてくる。

俺は苦笑して、

「ま、そうだな。まかり間違っただけそうなる可能性もないとは言いきれない」

「でも、今現在はそういう予定はないんですよね？　じゃあ僕が立候補してもいいですか？」

「……は？」

「立候補って？」

俺は呆気にとられて木村の顔を凝視したが、由香のほうは何のこじやらさっぱりわかっていなくなったらしく、きよとんとしていた。

そんな俺たちに対し、木村が付け加える。

「水月先輩の彼氏に、です。僕、柄にもなく一目ぼれしちゃったみたいで」

「……」

あまりにも唐突な告白に、さしもの由香も慌てふためくことすらできなかつたらしく

「え？」

俺たちは思わず顔を見合わせてしまったのだった。

2年目4月その2

その日は清々しくなるほどの晴天だった。

校庭の桜はちょうど満開になっていて、新品の制服に身を包んだ
新入生たちが花びらを運ぶ風とともに校門をくぐり、次々と学校の
中へ入ってくる。

俺も一年前はあの中にいたのだと考えると、何やら懐かしい気分
だ。

入学式。

この日をもって俺たちは二年生となった。

式は始業式も兼ねている。

体育館にはこの風見学園の全校生徒が集結しており、新一年生は
ステージ側、俺たち上級生はその後ろに並んだ。

ステージではちょうど校長先生の話が始まったところである。：
：新入生たちが静まり返って校長の話聞くのは、おそらく今日が
最初で最後になることだろう。

「可愛い子いねえかな……」

俺のすぐ目の前でキョロキョロと新入生の集団を眺め回している
将太は、残念ながら今年も俺と同じクラスになった。

そんな俺たちから少し前方。

直斗と由香の後姿がある。

驚いたことに、この二人も揃って同じクラス　二年一組になっ
ていた。

昨日由香が話していたとおり、三年に上がるときはクラス替えが
ないので、誰かが留年か退学にでもならない限り、三年連続で同じ
クラスになることが確定したわけである。

まあ、高校を出ればこの三人が同じ学校に通うなんてことは二度とないのだろうし、これは神様の粋な計らいというやつなのかもしれない。

ちなみに他の面々であるが
歩も俺たちと同じ一組になった。

あいつは同じクラスになったことを純粹に喜んでいたようだが、俺としてはクラス内の学力順位が確実に一つ下がることになるのであまり嬉しくはない。

……まあ、一つ下がったところでどうということもないのだが。
喜ばしい情報としては、あのうるさい藍原が僻地の五組まで左遷となった。これでクラス内の騒音が三割ほどカットされることになるだろう。

他に知ってるやつといえば 斉藤が一組、谷が二組、佐久間と仲田、それにどうでもいいけど竜二のヤツが四組。

ああ、忘れてた。
神村さんも一組だ。

……こうして改めて整理すると、かなりの数の知り合いが一組に固まったことがわかる。

(ま、偶然なんだろうけど……)
ただ、確率的にはかなりすごいことになってそうである。

「ちゅーっす」

始業式が終わって教室に戻る途中、正面から鞆を手にした顔見知りの同級生 バンダナがトレードマークの仲田が歩いてきた。

俺は眉をひそめて、

「始業式に遅刻とはいいい身分だな、お前」

「昨日は夜中までバイトだったんよ。眠くて眠くて」

と、大きなあくびをする仲田。目を擦りながら頭のバンダナをいっただん外し、長い髪を掻きあげて天井を見上げた。

「あー……ねむ」

「つかお前、普段だつて一時間目からいること滅多にねーし。バイトとか関係ないだろ」

「ん。ま、細かいことは気にしない」

笑いながらバンドナを締めなおした仲田は、小さく周りを見回して言った。

「で、俺のクラス何組？」

「……知るか」

さすがの俺もこいつほど適当には生きていけない。

「よお、相変わらずだな」

ちょうどそこへ四組の波がやってきて、そこから秀才面した小悪党の佐久間が顔を出す。その一見真面目そうな眼鏡の奥には、相変わらずの悪戯っぽい光が宿っていた。

「仲田。お前、四組だよ。俺と同じクラスさ」

「あらら。またお前と一緒にかい」

仲田はポリポリと頭を搔いて、

「んで。他の連中はどうなったん？」

「谷のヤツは二組だぜ」

俺がそう答えると、

「アレはどうでもいいけどね。神薙と水月は？」

「直斗と由香？」

こいつが何故そんなことを気にするのだろうかと、疑問に感じていると、

「ああ、そうそう。あの二人は何組になったんだっけ？」

佐久間までもが同じことを聞いてくる。

「……どうしたんだ、お前ら。直斗はともかく、由香のヤツとはほんとど話したこともねーだろ」

「あー、実は俺ら、ちよいと賭けをしとるのよ」

「賭け？」

佐久間が頷いて、

「あの二人が今年も同じクラスになるかどうか、ってな」

「……暇だな、お前ら」

「暇なのさ」

佐久間は自嘲するようにそう言って、

「とりあえず水月が一組だったのはわかったけどさ。斉藤の表情が
明るかったから」

「で、結果はどうだったん？」

と、仲田が聞いてくる。

「ああ、それなら」

俺が答えようとしたところへ、今度は一組の波がやってきた。

話題の直斗と由香がちょうど近くを通りかかる。

「神薙。おいっす」

「仲田くん？ 優希に佐久間くんも……どうしたの？」

直斗が足を止める。

そのすぐそばを歩いていた由香もチラッと俺たちを見たが、あまり親しくない仲田たちがいるのを見て遠慮したのか、そのまま何も言わずに素通りしていった。隣にいた歩もまた何も言わず、ただ俺に向かつて小さく手を振って行く。

そんな光景を見て、仲田が残念そうに、

「あら。やっぱり同じクラスになったんかい」

「賭けは俺の勝ちだな」

佐久間がニヤリとする。

「なんの話？」

困惑顔の直斗。

俺は答える。

「お前と由香が同じクラスになるかどうか賭けてたんだと」

「ああ……」

俺の言葉に直斗が苦笑する。

「確率的には絶対有利だと思ったんだけどねえ……」

何を賭けていたのかは知らないが、ガツクリと頂垂れた仲田には
正直同情せざるを得ない。

これでこいつら二人が同じクラスになるのは何年連続だったか。覚えていないが、とにかく確率に直せばかなりの数字になることは間違いないかった。

こいつらにはきつと、確率を越えた神がかり的な力が働いているに違いないのである。

「あ、優希さん」

教室に戻ると、俺の姿を目ざとく発見した歩が窓際の席から手を振ってきた。

室内の視線がいくつか集まるのを感じて少し苦々しく思ったが、まあ家にいるときのようにお兄ちゃん呼ばわりしなただけまだマシだろう（それについてはもちろんきつく言い含めてある）。

そんな歩の後ろ。

神村さんもチラッとこっちを見た。

（……ミスマッチだな、あの二人）

ただ、あの神村さんが迷惑そうな様子を見せていないところからして、あんな二人でもそこそこ会話は成立しているらしい。

俺は二人に向かって軽く手を上げてみせ、そのまま自分の席へと向かった。

クラス内には初めて見る顔もそこそこいるが、やはり見知った顔のほうが圧倒的に多い。

そして、

「……終わり。帰っていいぞ」

教室に入ってくるなり、数枚のプリントを配ってさっさと教室を出て行ってしまった岩上先生もそのうちの一人であろう。

相変わらず適当といつかなんというか。やる気の欠片も感じられない先生だが、まあ正直なところそんなに嫌いではない。

「優希。帰ろうか」

「ん？」

顔を上げると直斗が鞆を手に立っていて、その後ろには由香と歩の姿もあった。

「どこに？」

「土に還りたいなら止めないよ」

「……止めるよ」

というか、笑顔でそのセリフはちょっと怖い。

「優希さんも直斗さんには敵わないよねー」

可笑しそうに笑う歩。

「……うつせえ」

身の程知らずな小娘には、あとでこめかみグリグリを刑を与えてやることにしよう。

そんなこんなで、俺たち四人は揃って教室を出る。

「そつえば」

玄関に向かう途中、由香が急に思い出したように言った。

「こうして歩ちゃんと話すようになったのって、去年の九月ぐらいからだっただよね？」

「はい。保健室に皆さんが遊びに来てくださったのが最初でしたー」

「まだ半年なんだよね。なんだかもっと長く一緒にいる気がするよ」

「ホントですか？ そうなら嬉しいですー」

歩が本当に嬉しそうに笑う。

まあ、確かに。

こいつはかなりあっさりとその風景に溶け込んでしまった。

直斗も由香も、それに歩自身もあまり人見知りする性格じゃないというのはもちろん大きいのだろうが、もともとの相性が良かったというのもあるのだろう。

二階、一階と階段を下り、帰宅する生徒でざわついている玄関へと向かっていく。

と。

「ん？」

廊下の先、こっちに向かって歩いてくる二つの人影が目にとまった。

うち一人は見覚えのある顔だった。

「あっ」

その人影に一番最初に反応したのは由香。

「あ」

次に向こうから歩いてきた男子生徒。

長身に、アイドルのような整った童顔。

名前は、確か

「水月先輩。こんにちは」

「あ、えつと……こんにちは。木村くん」

戸惑ったような由香の声。

(そうそう。木村だ。木村、栄二だったか)

それは昨日、突然由香に一目ぼれしたとか言い出した妙な新入生だった。

「？ 由香、知り合い？」

怪訝そうな直斗。

後ろの歩も不思議そうな顔で木村を見ている。

そんな二人の反応に気付いた木村が、

「水月先輩のお友達の方ですか？ はじめまして、僕、木村栄二と

いいます」

「木村、栄二くん？」

そこまでは型どおりの反応だったのだが、

「もしかして、桜中の木村くん？」

直斗が意外な反応をした。

「え？」

木村が驚いたような顔をして直斗を見る。

そして、

「あ、神雑……直斗さん、ですか？ 風見学園って そういやここの中等部でしたっけ！ うわ！ ぜんぜん気付いてませんでした

！」

「え？ 直斗くんの知り合い？」

今度は由香がそのセリフを口にするようになった。

そんな彼女に直斗は頷いて、

「知り合いというか、中学のバスケット部のときにね。木村くんがいる桜中のバスケット部と県大会の決勝で試合をしたことがあるんだよ」

「直斗さんが三年のときで、確かあれが最後の大会だったんでしたっけ」

「そうそう」

「……偶然の大安売りだな」

俺がそう言うと直斗は首を横に振って、

「ウチは中等部も高等部もバスケット強いから。中学の強豪チームのプレイヤーが高等部からウチに入ってくるのは珍しいことじゃないんだよ」

「へー」

というか、ウチのバスケット部がそんなに有名だったことすら俺は知らなかった。

しかしまあ、言われてみれば毎年のように県大会の上位だの、全国大会だのに行っていたような気がする。

「でも水月先輩と直斗さんがお知り合いだったというのは、僕にとつちや驚きの偶然です」

目をまん丸にしている木村に、俺は言ってやった。

「知り合いっつーか、もつと深い仲だぞ、こいつら」

「誤解されそうな言い方だね」

直斗が苦笑する。

「だが、間違っちゃいない」

「間違つてないけど。……由香とは家が近所の幼なじみでね。そういう木村くんこそ」

「あ、僕は昨日初めて会ったばかりでして。その場で一目ぼれしてしまった仲です」

「き、木村くん」

由香がちよつと慌てた声を出す。

あっけらかんとしているというか、こつこつことをあっさり口に出来てしまうのは性格だろう。

「一目ぼれ？ 由香に？ ……ああ、なるほど」

直斗はチラツと由香を見て、別に驚くこともなく納得してしまつた。

「へえ、由香さんってモテるんですねー」

これまた無邪気にそう言った歩に、由香は顔を真っ赤にして黙り込んでしまつた。

「そうですかー。そうすると直斗さんも僕のライバルってわけですね」

と、木村は少し難しい顔になった。

“直斗さんも” ってことは、おそらく俺もまだそこに数えられているのだろう。

「別に俺も直斗もライバルじゃないと思うが……」

俺がそう言うと、直斗もそれに同調して、

「だね。ただの昔馴染みだし、別に付き合ってるわけでもないよ」

「そうなんですか？」

木村が俺たちと由香を見比べる。

「な？ だからよ」

「でも」

と、直斗は俺の言葉を遮って、

「ライバルじゃないけど、由香は君には渡せないな」

「……は？」

その言葉に驚いたのは、信じられないことに俺だけのようだった。由香は困った顔で状況を見守っているだけだし、歩はよくわからない様子で意味もなくニコニコしている。

木村は少し表情を引き締めていた。

「由香と付き合いたいなら、まずは僕と優希を倒してからにしても

らわなくつちや」

「おいおい……」

僅かに笑顔の直斗の言葉は、どこまでが本気でどこまでが冗談なのかわからない。

ただ、木村はかなり本気で受け取ってしまったらしく、

「……まいったなあ。でも、直斗さんと不知火先輩を倒せば望みはあるってことですよね？」

「うん」

「だから俺の名前を勝手に入れるなって……」

そんな俺の抗議に反応はなかった。

というか誰も聞いていない。

木村はしばらく直斗の顔を見つめていたが、

「じゃあとりあえず今日はこの辺で退散します。不知火先輩と水月先輩も、また」

「うん。またね」

ニツコリと返答する直斗に笑顔を返し、それまで黙って様子を見ていた連れらしい男子生徒と一緒に木村は立ち去っていった。

「おい。直斗」

「なに？」

「どういうつもりだ？」

「なにが？」

とぼけた顔の直斗。

学校を出ての帰路。由香と歩の二人は俺たちより少し先を歩いている。

「さっきの木村とかいうヤツのことだよ。……そりゃ俺だって、いきなり一目ぼれとか変なヤツだと思わなくもないが、他人の恋路を意図的に邪魔しようとかお前らしくもないじゃないか」

「そういう優希こそ、らしくないじゃない。そんなまともなこと言っなんて」

「お前な……」

冗談だよ　と直斗は笑って、

「昨日つて、木村くんの告白を断ったんでしょ？」

「ん……いやまあ、断ったというか断りきれてなかったというか」
アイツの性格と今日の木村の態度を見れば、まあだいたい想像がつくだろう。意思表示をしたことはしたのだが、やっぱり断りたかったのか色々余計な理屈を付けてしまい、かえって望みがあると思わせてしまったという一番悪いパターンだった。

「なんとなくわかるよ。だからさ」

「アイツに代わって諦めさせようってのか？」

それはいくらなんでも過保護というか余計なお節介すぎやしないかと思っただが、直斗のほうはそうは思っていないようで、

「僕はいつでも由香の味方だからね。……ま、深く考えなくてもいいじゃない。優希だって由香の作るお弁当が無くなったら困るでしょ？」

「む……」

結構痛いところを突かれた。

確かに、由香のヤツに彼氏が出来て誰が困るって、俺が　というか、俺の胃袋が一番困るのだ。

「……それは切実な問題だ」

趣向を凝らしたアイツの手作り弁当に慣れてしまった俺には、もはや学食アンド購買の貧しい昼食など考えられない。

「僕にもそれと似たような理由があるってことだよ」

直斗はすではぐらかしモードに入っているようだった。

「なんか納得できねーけど。ま、いいか」

とにかく弁当が大事だ。……というか、まさかあの新入生が本当に俺たちを倒そうとして殴りかかってくるわけでもないだろうし。

直斗の言うように、別に深く考えることでもないのかもしれない。

と、そう思っていたのだが

もちろんこのときはまだ、あの木村が本当に俺たちを倒そうと画策しているなどとは、知る由も無かったのである。

2年目4月その3

「どうだった？」

昼休み、購買のパンを二つ手にした直斗が俺の席までやってきてそう聞いてきた。

俺は顔を上げて、

「どつって、別になんも。そんなことで一喜一憂する歳でもねーしな」

「七十五だっけ？」

「弱が強になっただくらいだ」

「じゃあサバを読まなくてもよくなったんだね」

と、直斗が空席だった前の席に腰を下ろし、メロンパンの袋を開ける。

そんな直斗に俺は抗議して、

「四捨五入で七十五だったんだから別にサバ読んでたわけじゃねーだろ。そういうお前はどつだったんだ？」

「残念ながら僕も頭打ちみたい。由香よりはかるうじて上だったけどね」

と、直斗は笑った。

「つてことは六十か」

「六十二だよ。六十は由香」

「俺からすりゃ大して変わらん」

そう言いながら俺は弁当箱の蓋を開ける。

……と。

まあ勘違いする人間はいないと思うが、これは別にテストの点数の話ではなく、本日行われた身体測定、身長の話である。

ちなみに俺の百七十五センチってのはクラスの二十三名の男子で五番目に高く、直斗の百六十二センチが一番小さい。

「いつからこんなに差がついたんだっけ」

さすがの直斗も身長のこととはそこそこ気にしているらしく、身体測定の後はいつも決まって恨み節だった。

「中学のときだろ。お前、急に伸びた時期ってのが無かったし」

「やっぱ母さんの血なのかなあ」

パンをほおばりながらため息を吐く直斗。

おそらくはこいつの言うとおりだろう。直斗の母親である桜さんは、俺が近くで普通に立っていると視界に入らないぐらいにちっちゃい。実質中学二年生で同年代と比べて大きいわけでもない歩にすでに追い越されているぐらいだから、そのちみっこさは容易に想像できるだろう。

ついでにいうとコイツの女顔も、今でも三十代半ばとは思えない童顔をキープしているあの人からの遺伝によるものに違いない。

「そっぴや今日の帰り、球技大会の種目決めだったよね」

メロンパンを食べ終わった直斗が話題を変えてきた。

「球技大会？ ああ、そうだったっけ」

そっぴや今朝のホームルームで岩上先生がそんなことを言っていたような気がする。

「優希は今年もバスケ？」

「去年と種目変わんないんだろ？ だったら他に出たいものもないしなあ」

“球技大会” 正確にいうと“春の体育祭”は、男子の種目がバレー、バスケ、サッカー。女子の種目がバレー、バスケ、卓球で、例によって学年に関係なく全校クラス対抗の形で、五月の中旬頃に行われる。

「僕も今年はバスケにしようかと思って」

言いながらアンパンの袋を開ける直斗。

「お前は今年こそバスケじゃねーと、クラスの全員からブーイングの嵐だろ」

この球技大会には“部活に所属している生徒はその種目に参加す

ることができない”というルールがある。中等部時代にバスケット部のエースだった直斗は、今年の球技大会、ルールに反するわけではなかったものの、数ヶ月前までやっていたという理由でバスケを回避していた。

「まあね。サッカーもやってみたかったんだけど」

「ま、個人的にやそれでもいいと思うけどな」

コイツは基本的にスポーツ万能なのだ。見た目に似合わず小学一年から中学三年まで（部活と平行して）空手なんかやっていたから基礎体力は高いし、学力の高さもスポーツ的な頭脳プレーにしっかりと活かされているようで、何をやってもハズレはないのである。

俺みたいなグータラとは雲泥の差だ。

「嘘言わないでよ。優希は僕よりよっぽど運動神経いいでしょうに」と、直斗は謙遜する。

「謙遜してないよ」

「……だから心の声に突っ込むのはやめろって」

「心の声？ なに言ってるの？」

直斗は少し首をかしげてみせたものの、俺のこういう発言に慣れているためか、すぐに何事もなかったかのようにアンパンに口をつけた。

そして、

「まあ、でもちようど良かったよ」

「なるほど。それは良かった」

「まだなにも言っていないけど」

さらっと流して、

「実はさっき、木村くんが僕のところに来てね」

「木村というと、小五のとき喫煙がばれて親を呼び出された」

「それも木村くんだったけど。……その話、広げたい？」

「……いや、いい」

というか、そっちの木村のことは正直あんま覚えてなかった。

直斗は一つ頷いて、

「木村くんが勝負したいんだって」

「勝負？」

「球技大会で」

「誰と？」

「僕と優希と」

「……おいおい」

俺はオーバーに両手を広げて、

「お前らはともかく俺はバスケット部でも何でもねえぞ。最初から勝負にならないだろ」

「バスケで、とは言ってなかったけど。それでさつき、種目を何にするつもりかって聞いたわけ」

「いや。それを先に言えよ。……っていうか、なんなんだ、その勝負ってのは」

直斗は人差し指を立てて、

「この前、言ったでしょ。由香と付き合うつもりなら僕と優希を倒してからにして、って。アレ、かなり本気で取られちゃったみたい」「取られちゃったみたい……って」

俺は直斗をジト目で見て、

「お前、わかってたんじゃないだろうな。こつなること」

直斗はちよつと笑って、

「わかってたわけじゃないけど、なるかも、とは思ってたかな。彼、ちよつとそういうヒロイツクなところがあるからね。この場合、僕と君はヒロインの前に立ちふさがる障害物ってことになるのかな」

「……なんだそりゃ」

俺は心底あきれ返って、

「由香のやつは確かに俺の暇つぶしのためのオモチャではあるが、別に所有してるわけじゃないぞ」

「それじゃ由香が可哀相だよ」

と、直斗は苦笑する。

そのまま続けて、

「でもこうなつた以上は絶対に勝たなきゃなんないよねえ」

「別に。馬鹿馬鹿しくてやってられっかよ」

「なんでさ！ 不知火、それでも由香の幼なじみなの！？」

「お前だつて幼なじみじゃねーか」

「あたし？ あたしは違うよ。親友だけど」

「……」

ふと、違和感を覚える。

違和感というか。

完全に違う。

「……おい。お前は どうしてそう、唐突に現れる」

俺の目の前にはいつの間にか、五組に左遷されたはずの藍原がいた。しかもちやつかり俺の弁当箱に手を伸ばして、最後に残っていた鳥のから揚げをつまみ食いしたりしている。

「別に唐突じゃないって。不知火が気付かなかつただけじゃん」

モグモグと口を動かしながら手近な椅子を引っ張ってきて、背もたれを前にし、またぐようにして座った。

「でも、あたしの知らないところで色々と面白そうなことになっているみたいじゃん。それってやつぱりアレ？ 二人はこれから地獄の特訓を繰り返したりしちゃうわけ？」

「するか、アホ」

冷たく突き放し、空になってしまった弁当箱の蓋を閉じる。

「なんでさ！ その勝負に勝たなきゃ由香がそいつのものになっちゃうんだよー！」

「どこの無法地帯だ、そりゃ。……じゃあなにか？ その辺で歩いているカップルに勝負を申し込んで、俺が勝ったらそいつらは別れなきゃならんのか？」

すると藍原はちよつと不満そうに口を尖らせて、

「そんなの今回のとは違うじゃん」

「同じだろ」

「木村くんはね」

と、そこで直斗が口を挟む。

「そういうことじゃなくて、僕らに勝つことで自分が本気だったことを由香にわかってもらいたいんじゃないかな」

「そんなの直接アイツに言やぁいいだろ」

「そういう方法を選んじやうのは彼の性格なんだろうけどね。それに、ほら」

と、直斗はチラツと後ろを振り返る。

その視線の先には由香の席があったが、その主は不在だった。

「由香は一目ぼれとか信じない主義だから」

「そうだったか？」

どちらかというところ、そういうのを信じてそうなタイプに見えるのだが。

しかし考えてみれば　クラスにカッコいい転校生が来て、あいつがいきなりそいつのことを好きになってしまう　なんてのは想像し難い図だった。

「一目ぼれはあるよ、絶対」

と、藍原。

「……ま、真偽はともかく」

そんな藍原を無視して、俺は直斗のほうへと向き直る。

「俺がそんな勝負を受ける義務はないだろ。球技大会だぞ？　俺は適当に楽をして適当に負けて適当に帰りたいんだ」

我ながらだらしのない発言だとは思ったが、所詮は球技大会である。クラスメイトの連中には悪いが、そこまで本気で取り組むつもりはない。

「第一、そんな勝負をしても俺に得がない」

「お弁当がかかっていると見えば？」

「……」

またまた直斗が痛いところを突いてきた。

なんかもう、こいつは俺がこつやって駄々をこねるところまでわかっていて話をしているんじゃないかと思ってしまう。

「確かに得はないけど、負けたら損をするかもしれないよ」

「……」

「なんて、ね」

少し考えた俺の表情を見て、直斗は口元を僅かにほころばせた。

「こんな口実があったほうがやる気になれるでしょ？」

「口実？」

「僕もね。今の関係をもっと続けたいなって思うし」

その言葉にドキリとする。

いつもより深く心を見透かされたような気がした。

「……馬鹿馬鹿しい」

俺は少し不機嫌になってそう答える。

おそらくは凶星だったからだ。

「誰が誰と付き合いおうが、友達は友達だろ」

「でも一般的には恋人以下だよ」

直斗は少しだけ視線を横に泳がせた。……そこに僅かに本心らしきものが覗いたような気がした。

「正直、由香にとっての僕が、木村くん以下になって欲しくはないかな。少なくとも今のところはまだ、ね」

俺は驚いて直斗を見る。

こういう発言は珍しい。

(……けど、確かに、な)

自分が親友だと思っていた人間に、自分よりも親しい友達ができると何となく嫌な気持ちになる。おそらくはそれと似たようなものだ。

それはたぶん嫉妬という醜い感情で、俺ならきつとそれを口に出すことはない。

けど

「そりゃ、お前らは十五年来の付き合いだもんな」

自分の感情を隠して俺がそう言つと、

「そうだね。本当は優希より長い付き合いのはずなんだけど」

「はず、って、実際に長いだろ」

俺が怪訝に思っただけで、

「そう。長いはずなんだけど」

「なんだ？」

「なんだろね」

そう言っただけで、

「ま、優希ぐらいになっただけで僕も文句は言わないよ」

「なんだそりゃ」

「つまり由香と不知火がラブしても、神羅的には許すってことだよ」
「ね」

と、黙っていた藍原が我慢できなくなった様子で口を挟んでくる。
俺はため息を吐いて、

「お前や将太が口を挟むと誰でも恋人同士になっちゃうな」

「そう言っただけで、藍原はニコニコしながら、」

「ああ、わかってるわかってる。由香じゃダメだよ。だって不知火の本命は雪ちゃ」
「」

「ゴッッ！」

「殴るぞ、マジで」

「……だからもう殴ってるってば……」

「そのやり取り、何回繰り返すの？」

直斗が苦笑する。

「優希もいい加減、藍原さんのその冗談に慣れたら？」

「こいつの場合は目が本気だから笑えねーんだよ」

「なにさなにさ。あたしは思ったままを口にしただけのことですよ」
「よ」

「……も、いい」

席を立つ。

「あれれれ？ 怒っちゃった？」

「心配するな。最初から怒ってる」

藍原にそう言い捨てて、教室の出口へと向かう。

「優希。バスケのことはどうするの?」

俺はチラッと直斗を振り返って、

「バスケには出るぜ。勝負がどうこうは興味ないが、わざと負けるつもりはない」

「そう」

直斗は満足そうに頷いた。

「あ、あたしも応援してるよ〜」

手を振る藍原に、俺は露骨に嫌な顔をして、

「そうやって俺のやる気を削ぐ作戦か。さてはお前、五組の間者だな」

「うわ、ひどっ!」

「大丈夫だよ、藍原さん。優希はその程度の妨害でやる気を失くしたりしないから」

「ちよっ……フォローになってないよ、神薙!」

ブーブー言っている藍原と直斗のやり取りを眺めていると、ふと直斗と視線が交わる。

その目は、俺に何かを期待しているときの目だった。

(……やれやれ)

肩をすくめて教室を出る。

なんだか妙なことになってしまったが、まあこういうことはなるようにしかならないもんだ。相手は下手すりゃ全国レベルのプレイヤーだし、まともにやって勝てるわけはないのだが、バスケはチーム戦だ。直斗もいるし、絶望的というわけでもないだろう。

(とりあえず、毎日の弁当のためテキトーに頑張るとしますか)

その昼の話はその日のうちに歩の耳にも入ってしまったようだ。

「いよいよマンガみたいな話になってきたねー」

「歩。そうやって誤魔化しながらピーマン避けるのやめなさい」

と、瑞希が歩の手元を指摘する。

歩はうつ、と言葉に詰まって、

「たはは、見られてましたかー……」

「子供か、お前は」

「子供だよー」

笑いながらピーマンを口に運んで苦い顔をする歩。

少し我慢すれば食えるのにちょっと苦手だとあわよくば残そうとする。

なんとも自堕落なやつである。

「……優希。あんたもよ」

「い、いや、これは生焼けで」

聞こえてきたため息の深さはいつもの二倍だった。

半ば無理矢理食わされたピーマンの苦さに頬を歪めながら、テレビのリモコンを取り電源を入れる。

ちょうど地方版のニュースをやっている時間帯だ。

「そついや隣町に遊園地できるんだっけか。いつオープンだ？」

テレビから流れてきた映像を見ながら、飯を口の中に掻き込む。

「行儀悪いわよ、優希。見るか食べるかどっちかにしたら？」

「お前は俺のカーチャンかよ」

「少なくともあんたの生活習慣を見張るように言われてはいるわ。ママからね」

「……」

宮乃伯母さんの名前を出されちゃ仕方ない。

俺は茶碗をいったんテーブルに置いて、

「結構デカそうだな。へえー、来月の末にオープンか」
すると歩が少しはしゃいだ声を出す。

「私、これ楽しみー。オープンしたらみんなで行こうねー」

「歩、あなたこういう乗り物は大丈夫なの？」

「うん。大好きだよ」

「そつ……」

「瑞希お姉ちゃんは？」

「え？ ああ、もちろん平気だけど」

虚勢を張る瑞希の声に重なるように、テレビから流れてくるキャスターの声のトーンが少し変わった。

事件関係のニュースに切り替わったようで、近場の路上で起きた強盗事件と昨日の落雷のニュースを淡々と伝えている。

地元のニュースが終わると、瑞希は俺の手元にあったりモコンでテレビの電源を切った。

「ちよっ、おい！ 俺はこの後のクイズ番組を見るつもりで」

「食べてからになさい」

「く……」

こんな横暴が許されているのか と、俺と同じくクイズ番組を楽しみにしているはずの歩を見ると、

「ごちそうさまー」

「はやっ！」

「あんたが遅いのよ」

見ると、瑞希もとっくに食べ終えていた。

どうやら俺がテレビに夢中になりすぎていただけのようだ。

「くそ……」

仕方なく、残っていた御飯を掻き込んでいく。

そんな俺の様子を眺めながら、瑞希が言った。

「それにしても由香ちゃんも災難ね。そんなわけのわからない勝負に巻き込まれちゃって」

「ひっほふへほ」

「……話しかけて悪かったわ。終わってから喋りなさい」
呆れ顔の瑞希。

「これ、下げちゃうねー」

と、歩が空いた食器類を持って台所へ消えていく。

ゴクリ、と、俺は口の中のをすべて飲み込んで、

「言っとくけど、その話は俺も巻き込まれ側なんだからな」

「わかってるわよ」

「私は由香さんがちょっと羨ましいな！。男の人に取り合ってもら
う、みたいなのって、女の子にとって憧れみたいなのあるもん」

蛇口をひねって水を出しながら歩がそう言った。

「そうかしら？」

疑問の声を上げた瑞希に、

「瑞希お姉ちゃんは思わないの？」

「本人抜きでそんなことやるなんて、私だったら馬鹿馬鹿しいと
か思わないわ」

実に“らしい”発言だ。

そもそも

「歩。こいつに女の子的な感想を求めること自体間違ってるぞ。体
はともかく中身はほとんど男みたいなものだからな」

「……久々に痛い目に合いたいようね？」

すっ、と、瑞希の目が細くなる。
ぞくつとした。

「いや！ 今のはある意味誉め言葉　そ、そんなことより、そう
だ！ 雪のやつはどこ行った！？ さつきから姿が見えないが！」

思いつきで言った俺の言葉に、膨れ上がった瑞希の鬨気がふつと
和らぐ。

思いつき、といっても雪の姿がずっと見当たらないのは事実だ。

帰ってきたときには台所に気配があったから家に帰ってきているこ
とは間違いない。

「雪ちゃんなら」

と、瑞希は天井を見上げて、

「自分の部屋よ。夕食の支度だけして戻っちゃったわ」

「……なにかあったのか？」

深刻な何かかと思いい、俺は少しドキリとしたが、

「今日、身体測定だったのよ。……それで」

返ってきたのは瑞希の苦笑だった。

「身体測定？ そっぴやウチもそっぴだつたが」
それと雪がこの場にいないことにどういつ関係があるのかと思っ
たが、

「体重が増えてたんだって。……二キロも。それで今日からしばらく夕食我慢するって」

「……アホか、アイツは」

体重計に乗ってショックを受けている妹の姿が脳裏に浮かぶ。

普段のんびりおっとりしているクセに、そういうことにだけは敏感なのである。

「だいたい体重増えたのは晩飯のせいじゃなくて、その後のデザートのせいだろ」

時期だから と、アイツは昨日まで楽しそうに、イチゴのタルトだのミルフィーユだのケーキだのを作っては毎日の晩飯の後に振る舞っていたのである。

食べても太らない体質らしい歩や、食べてもすぐにカロリーを消費してしまう瑞希と違い、アイツの場合はそれが正直に跳ね返ってきてしまったというだけのことだ。

とはいえ。

「女は痩せる必要もないのにダイエットだのなんだのってよく言うよな」

二キロ太ったかどうかなんて、俺の目から見ればまったくわからない話である。

「女の子にとって二キロは重大な問題だよ。そもそもダイエットというのは女の子にとって」

「またもや始まった歩の“女の子論”を適当に聞き流して、俺はガラス戸の外に視線を移した。

その瞬間。

「おっ」

外が白く光った。

「雷？」

瑞希が反応する。

「みたいだな。……けど」

かなり近くの落雷だったように思えたが、外は雨どころか月が見えるほどの晴夜だった。

ガラス戸を開けて外に出てみる。

空には薄っすらと雲がかかっている程度だった。

「青天の霹靂ってやつか？」

ガラス戸を閉じて中に戻ってくると、歩も少し不思議そうに窓から夜空を眺めていて、

「珍しいね。これから雨になるのかな？」

「そんな予報じゃなかったと思うけど……」

と、瑞希も首を傾げている。

（青天の霹靂、か……）

結局その日、雨が降り出すことはなかった。

2年目5月その1

.....

じっとしてられない。

テレビで、新聞で、そういった記事を見るたびに得体の知れない熱が胸を焼く。頭の中を焦がす。

だから私は 今日も家を抜け出した。

「ば、化け物 ツ！」

四十代後半ぐらいと思われるその男は完全に腰を抜かしていた。顔には恐怖の色を浮かべ、私から逃げるように少しずつ後ずさっていく。

「化け物はあなたのほうでしょう？ 醜悪なその心。……殺してあげたいぐらい」

冷たい声。

自分でも信じられなかったが、それは紛れもない私の声だった。細く白い帯が男の足もとを撃つ。

「ッ！」

男が引きつったような声を出した。

ただ、それはただの威嚇でしかない。痴漢程度の男だ。殺す

つもりはなかった。

「今回は見逃してあげるわ。だけど次は殺す。私はいつでも見ているわ」

髪が逆立つ。

私の体は全身が“帯電”していた。

それが进り、もう一度男の足もとに落ちる。

「ひいっ！」

尻餅をついたままの男が必死に後ろに下がっていった。

「死にたくないのなら、これからをどう生きるべきか……考えることね」

男の精神が完全に屈服したのを確認し、私はその場に背を向けた。

(……どうなっているのかしら)

町は夜闇に包まれていた。路肩に佇む街灯はそのほんの一部分を照らしているに過ぎない。

ここはとにかく事件の多い町らしかつた。殺人、強盗といった凶悪事件の多さも異常だが、それに輪をかけて突出しているのが失踪事件の多さである。

だが、この町の不思議なところは、その大半がどうやら誰も知らないうちに“解決”され、誰もがすぐに忘れ去って行くということだ。

何の証拠も証明もなしに、その事件は解決したことになっている。それを疑問に思う者は 少なくとも表面上は おらず、そしてそれはどうやら実際に解決しているらしいのだ。

犯人は誰なのか。誰が、いつ、どこで捕まえたのか。その後、どうなったのか。

ほとんどの場合、それらのことは一切明らかにされない。

(……公開できないような事件が多発してることかしら)

もちろん、誰がどんな目的で隠蔽しているのかまではわからないし、そこまで探ろうというつもりもなかった。

私はただ この町が少しでも平和になればそれで良いのだ。
だから

今夜も青天に霹靂が鳴り響く。

ザアアア と、ぬるま湯が頭のとっぺんから首筋を伝い、タイルの床へと落ちていった。

ベタついた汗が一気に流し落とされて爽快な気分になる。

蛇口をひねってシャワーを止めると、俺はそのまま湯船へと浸かった。

「……ふう」

思わず息がこぼれる。

パンパンに張った太ももに、暖かな湯がまるで染み込んでいくようだった。

首を回しながら、足を軽くマッサージ。

「はぁ……」

もう一度漏れるため息。

まさに至福の時間だった。

と。

「優ちゃん？ お風呂、入ってる？」

曇りガラスの向こう、脱衣所に入ってくる雪の影が見えた。

「おー、入ってるぞー」

声が反響する。

「お疲れ様。着替え、洗濯機の上に置いてくね」

「あー、構わないでくれ。お前、そろそろ学校行く時間だろ」

「まだ大丈夫。……それと歩ちゃん、昨日は夜更かしだったみたいで、今起こしたけど二度寝しちゃうかも。ちゃんと起こしてあげてね？」

「了解ー」

おおかた、深夜の馬鹿っぽいテレフォンショッピングでも見てたのだろう。歩のやつはそうやって寝坊することがたまにある。

湯船から上がって髪を洗い、体を洗ってシャワーで石鹸の泡を流す。

さらにもう一度ゆっくりと湯船に浸かって　五分ほど。

ポーッと風呂場の天井を見上げながら、

(そろそろ時間か……)

おそらくはまもなく七時半を回るぐらいの時間だろう。歩のやつが二度寝しているとすれば、そろそろ起こしに行ってやらなきゃならない。

俺は湯船から上がって最後にもう一度全身にシャワーを浴びた。

キュツと蛇口をひねってシャワーを止め、そのまま反転して風呂場のガラス戸を開ける。

と

「わわッ、寝坊寝坊　！」

「お……」

目と目が合う。

一瞬の空白。

「きゃわあああああッ！！」

叫び声を上げて歩のヤツは脱衣所から飛び出していった。

「……妙な叫び声だな」

“きゃあ”と“わあ”が混ざってしまったのだろうか。

俺は冷静にそんなことを考えながら、

(これ、逆だったら瑞希のヤツに半殺しにされてたな……)

なんとという男女不平等社会。

(ま、俺は絶対にそんなへまはしないが)

雪が用意してくれた下着を身に付けたところで、脱衣所のドアを開けて、

「おーい、歩。洗面所使うならもういいぞー」

「ううううめんなさい！　外のドアはちゃんとノックしたんだけど

返事がなかったから誰もいないと思って無警戒にもー！」

テンパっているのか、句読点が一切無くなっていた。

「あー、いいっていいって。一緒に住んでりゃたまにやあるだろ」
シャワーを浴びている最中だと脱衣所のドアのノックは聞こえないことが多い。その上で脱衣所と風呂場のドアを同時に開けてしまったのは、単なるアクシデントだろう。

「うっ……」

ちよこちよここと戻ってきた歩の顔は真っ赤だった。

コイツも一応、そういうことを恥ずかしがる年齢ではあるらしい。

「ほら。急げよ。時間、あんまないぞ」

バスタオルで頭を拭きながら歩の横を通り過ぎ、冷蔵庫を開けて
昨晚作っておいたスポーツドリンクをコップに注ぐ。

それを冷蔵庫に戻したところで、歩が脱衣所からひょっこりと顔
だけ出した。

「お風呂沸かしたの？ まだ入れるかなあ？」

「入れるけど、あんまりのんびりすんなよ」

「はい」

ボタン、と、ドアが閉まる。

さて。

リビングに行くと、二人分の朝食が用意してあった。

テーブルに着いてテレビの電源を入れる。朝のニュースをバック
ミュージックに朝食を片付けていく。

「ふうー。朝のお風呂はやっぱりいいよねー」

歩は十五分ぐらいで出てきた。すでに制服に着替えている。
時間を見ると七時四十五分。

直斗たちが迎えに来るまであと十分ってところだろうか。

「飯、食っちゃえよ」

「うん。お兄ちゃんは？」

「もう食った。着替えてくるわ」

と、俺は二階の自室へ向かう。

直斗たちがやってきたのはそれからピッタリ十分後のことだった。

「はい」

チャイムの音に続き、歩が玄関に出る声が階下から聞こえてくる。俺は制服のボタンをしめ、カバンを手に部屋を出た。すると、

「あつ。どうしたんですか、その足」

（ん？）

玄関から聞こえてきた歩の声。

直斗の返事がそれに続く。

「昨日、ボーっとしてて自転車と衝突しちゃってさ」

「直斗くんにしては珍しい失敗だね」

と、由香の声も聞こえてきた。

（自転車と衝突？ ……足？）

少し嫌な予感がして階段を下りていくと、

「あ、優希くん、おはよう」

由香の挨拶に俺は軽く手をあげて答え、

「怪我したって？ 大丈夫なのか？」

「軽い捻挫だよ」

捲り上げたズボンの下から、テーピングした右足首が覗いていた。その状態でここまで来れたということは、歩くことはできるのだろう。どうやら大したことはないようだ。

が、しかし

「でも……球技大会には出られそうにないかな」

球技大会の各試合はサッカー八人、バスケ五人、バレー六人の形式で行われる。

各クラスの男子生徒の数は二十三、四人なので、余るのは四、五人だ。各種目最低一人は補欠を作ることになってるので、それに従って振り分けると結局のところ余りはほとんど出ない。

そしていったんメンバーが決定してしまうと、よほどのことがない限り変更は認められていなかった。

「絶対無理」

そんなわけで俺たちバスケット組は今朝方、一回戦での敗退がほぼ確定してしまっただけである。

ウチのクラスでバスケットに振り分けられたのは補欠一人を含めた六人。しかも補欠はどのクラスにでもいる運動がまるでダメなヤツだった。

他のメンバーは俺と直斗に、サッカー部の斉藤、残りの二人は一応できるかなという程度の実力。

もことから直斗のワンマンチームのようなもので、その直斗が抜けてしまうのだから被害の大きさは想像できるだろう。

「けど、その一年二組には絶対負けられないんだろ？」

昼休み、廊下で俺と作戦会議をしているのはメンバーの一人である斉藤だ。中等部時代から由香に片思いを続けているコイツには例の事情をすでに話してあった。

もちろん斉藤は、全面的な協力を二つ返事で申し出てくれていたのだが

「無理だろ。下級生だったって一人は中学の全国レベルのプレイヤーだけ。直斗がいるならともかく、こっちの余り物みたいなメンバーで勝てるわけないって」

バスケットはチーム戦とはいえ、個人技によるところも大きい競技だ。実際、一年二組と当たるまで勝ち抜くのも難しいだろう。

俺は軽く肩をすくめてみせて、

「ま、直接当たんなきゃ勝負もクソもないわけだしな。こうなった以上、適当にやるときゃいいさ」

すると斉藤はビククリしたような顔になって、

「あれ？ お前知らないのか？」

「ん？」

「俺らの初戦、その一年二組だぞ？」

「……うえ」

そんな馬鹿なと思ったが、どうやら冗談ではないらしく、

「今朝、トーナメント表が体育館の入り口に張り出されてた。嘘だと思っなら見てきてみるよ」

「マジかよ……」

一年から三年まで十五クラス、初戦で特定のクラスに当たる確率は十四分の一……まあ絶対はないという確率ではないが、

（裏で面白がって操作してるやつがいるんじゃないだろうな……）
そんなことを疑ってしまったのも仕方あるまい。

「どっちにしろ」

齊藤は真面目な顔で、

「俺は負けるつもりはないぞ。別に勝った負けたでどうなるとも思わないけど、言ってみればこれは気持ちの勝負なわけだからな」

「いや、気持ちより実力の勝負だろ……」

「いや、スポーツは最終的には気持ちだ！」

ググツと拳を握る齊藤。

……そういやこいつは、熱血と根性でできた世界の住人だったか。今回は由香のことが絡んでいるから、なおさら気合が入ってしまった。ているようだった。

「それにバスケットはチーム戦だ。いくら一人が上手くたってこっちが上手に回せば勝機はある」

「けど、サッカーよりは影響デカいんじゃないか。人数的に」

実力が拮抗した上での戦いならチームプレイが鍵になるかもしれないが、実力差がすぎれば話は別だろう。

極端な話、五人がかりで一人を止められないようであれば話にもならない。

そう言つと、齊藤はどこまでも前向きで、

「その辺は練習でカバーしようぜ。あまり時間もないけど放課後にみんなで集まってさ」

「俺たちの事情に他の三人を巻き込むのはどうかと思うがなあ」

もともとバスケット組は俺と斉藤と直斗の三人でどうにかする計画だったのだ。もちろん放課後に練習するプランなどなかったし、他の連中もそんなことは考えてもいないだろう。

「それは俺が説得する。三人とも知らない連中じゃないしな」

「事情を話すのは無しだぜ。変な噂が広まったら可哀相だからな」

「わかってるよ。水月さんに迷惑かけるようなこと、俺がするはずないだろ？」

「まあ」

それはもちろんなのだが、こいつの場合は気持ちが入りすぎて周りが見えなくなることがあるから不安だ。

「俺は何もしないで負けるなんて嫌だからな」

と、斉藤はあくまで真面目な顔で言う。

俺は頷いて、

「……ま、俺だって負けるよりは勝つほうがいいけどよ」

ただ、こいつほど真剣になれないのは確かだった。

キュツ、キュツ、と上履きが体育館の床を鳴らす。それに、ダムツ、ダムツ、というバスケットボールの床を叩く音が重なっていた。

「不知火！ 走れ！」

相手のボールをカットした斉藤が叫ぶ。

「わかってらあ！」

その言葉より早く俺の足は前へ進んでいた。

斜め後ろから飛んできたパスをどうにか零さずに両手でキャッチすると、

「止める！」

相手チームの一人がそう叫ぶ。

俺の前には誰もいない。

後ろから追いかけてくる足音も、もう間に合う距離じゃなかった。見事なカウンター！

ゴールの二歩手前でボールを抱え、飛ぶ。ふわっと体が浮遊してゴールの少し下でボールが俺の手を離れ

パスツ、という乾いた音。

ネットが軽く揺れ、俺が着地してから少し遅れてボールが床を叩いた。

「……なんだ。充分強いじゃねーか、お前ら」

ここは公立体育館。

放課後、俺と斉藤、直斗、そして球技大会と一緒に出場するほかの三人のメンバーは練習のためにこの体育館へとやってきていた。

俺たちと試合をしていたのは斉藤の所属するサッカー部の先輩と、そのクラス 三年三組のバスケットメンバーである。

「でもやっぱ先輩たちには敵わないですね」

と、斉藤。

球技大会と同じく十分ずつの前後半を戦って二十八対二十五。

俺たちの負けだった。

それでも相手は三年の中でもかなり強いメンバーだと聞いているから、この点差ならかなりの健闘だろう。

俺は上級生と話している斉藤を置いて、壁際で試合を見学していた直斗のもとへと向かった。

「お疲れ様」

と、直斗がスポーツタオルを軽く放つてよこす。

「ああ」

まずは顔と首筋の汗を拭き、そのままタオルを頭にかぶってその場に腰を落とす。

「疲れた……」

そのまま背中から壁にもたれ、天井を見上げた。

先ほども言ったようにこの結果は上々だろうと思う。先輩たちには申し訳ないが、直斗が入っていれば間違いなく勝っていた試合だった。

斉藤以外の三人も意外に、と言っちゃ悪いが、それなりに役に立ってくれている。運動が苦手だったヤツもあまり動けはしないものの、たまにいい位置でパスカットなんか繰り出してくれてまったく役に立たないというわけでもなく。

実際、彼のアシストで入った点も四点あった。

「で？ どう思う？」

息が少し整ってきたところで直斗を見上げる。

「うーん、どうだろ。木村さんのチームのことはよくわからないし、そもそも僕が木村さんと戦ったのだってもう一年半も前の話だからね。でも、普通に考えれば充分に強いと思うよ、このチームは」

「相手が異常じゃないことを祈れってことか」

まあ、俺も直斗と同じ感想だ。

まともなら半分よりは上に行ける気がする。

「ただ、木村くんを止めるなら優希と斉藤くんの二人がかりじゃないと厳しいかな。他の三人だと足が付いていけないと思う」

「それで止められりゃ御の字だろ」

「……だね」

運動神経自体にそう差がなくとも、やはり技術の差つてのは大きい。それは直斗と何回もやりあった俺には良くわかってる。

しかも直斗と違い、木村のやつは俺や斉藤よりデカい。完璧に止めるのは不可能だろう。

「……あいつに決められるのはある程度仕方ないとして、問題はこっちがどうやって確実に決めていくか、だな。……なんだ？」

ブツブツ呟いていた俺を、直斗は何やら生温い眼差しで見つめていた。

「ううん。ただ、なんだかんだ言ってちゃんとやるんだな、って」

「そりゃま、負けるよりは勝つほうが気分がいいからな」
「そ」

直斗は納得顔で頷き、その視線を正面に向ける。
と。

「あれ？ 木村くんじゃない？」
「ん？」

体育館の入り口を見ると、確かに見覚えのある長身がちょうど入ってくるころだった。

「向こうも練習かな。……後ろの二人、バスケのメンバーかもね」
直斗の言葉どおり、木村の後ろには同じく一年生と思われる男子生徒が二人くつついていた。

片方は坊ちゃん刈りに近い髪型で丸顔の無邪気そうな印象の少年、もう片方は男にしてはなで肩の、顔の造りも含めて全体的になよつとした雰囲気（きずな）の少年だった。

身長はいずれも俺より低く、百七十センチ前後といったところか。
「あ」

そんな分析をしているうちに、木村が俺たちの存在に気付き、二人を引き連れて近付いてくる。

「お久しぶりです。先輩たちも練習ですか」

「おー」

俺は視線を向けず、を軽く手を上げて木村に応える。

直斗が尋ねた。

「後ろの二人は、木村くんのチームメイト？」

「ええ。こつちが」

木村は坊ちゃん刈りの少年を見て、

「田辺京介（たなへ けいすけ）といます。で、こつちが香月唯依（かつき ゆい）です」

と、なよなよした雰囲気（きずな）の少年を示す。

名は体を表すというが、後者は名前も女みたいだった。

「よろしく」

直斗がそう言うと、後ろの二人はよろしくお願いします、とだけ

言って、それ以上は一言も喋らなかつた。

どうやら少し気後れしているようだ。

(……意外と普通だな)

もっとバリバリの面子を集めているのかと思つたが、そんなこともないらしい。

もちろん見た目だけで判断はできないが

「それにしても残念です。直斗さんとの久々の勝負、楽しみにしてたんですけど……」

と、木村は言った。

どうやら直斗の怪我のことはすでに知っていたらしい。

「ごめん。でもほら。僕の分も彼がやってくれるから」

「不知火先輩もバスケやってたんですか？」

「やってないけど優希は強いよ。本気さえ出せば木村くんより強いかもね」

「……おい。無茶振りすんな」

「へえ」

木村がマジマジと俺の顔を見つめてくる。

そんなことあるはずない　と、馬鹿にしているのかと思いきや、木村の目は興味津々といった様子だった。

「楽しみです。不知火先輩。ぜひ、本気で僕とやってください」

「あのなあ……」

どうやらこいつも斉藤と同じ世界の住人だったようだ。

俺はタオルを頭にかぶつたまま木村を見上げて、

「手加減する余裕なんかねえつての。見るよこのザマ。中学、高校と帰宅部だった俺に何を期待してんだよ」

よしんば俺にバスケの才能があったのだとしても。才能ってのは努力や積み重ねをブーストするための燃料に過ぎない。

最初から努力していない俺にとっちや腐るのをただ待つだけの無用の長物だ。

ただ、木村はそんな俺の言葉を簡単には信じなかつたようで、

「その真偽は本番に持ち越してことで。それとも今から前哨戦で
もします？ 三対三で」

「いや、やめとく」

五対五でも怪しいのに、三対三なんてこいつの独り舞台になるに
決まっている。

「そうですか」

木村は少しだけ残念そうに、それじゃあ、と言って、二人のチー
ムメイトを連れてコートの方へと歩いていった。

それからしばらく。

俺たちは木村たちの練習を黙って眺めることになった。

「……………どう？ 勝てそう？」

「やってみなきゃな」

「そっか」

小さく頷く直斗に、俺はふと尋ねてみる。

「お前、何か企んでないか？」

「ん？ うん、まあね」

と、直斗は意外にもあっさり頷いて、

「君が由香のためにどこまで頑張ってくれるのか知りたくて」

「……………なんだそりゃ」

意味不明だった。

「まあいいじゃない。とにかく勝ってよ。木村くんのためにも、そ
のほうがいいと思うし」

「……………」

結局、何を考えているのかまったくわからなかった。

まさかとは思うが 本気で俺と由香をくっつけようとも考え
ているのか。そういうことなら、俺をけしかけて木村と勝負させよ
うとするのも、まあそれなりには納得できる。

が

(らしくない、よな)

直斗らしくない。

万が一、俺が由香を、あるいは由香が俺のことを異性として好きだったとしても、いくら付き合いが長いとはいえ、直斗がそれを知っているはずはないのだ。いくら互いのことを知り尽くしているといっても、心の中のことは言葉にしなければ伝わらないのだから。

言葉にしなれば

(言葉にしていれば か)

ふと、ある仮定が頭をよぎったが、俺はその瞬間に考えることを放棄した。

別に難しいことを考える必要はないのだ。弁当がどうのという話だって、実際、負けたところで今と何かが変わるわけでもないだろう。

たいたい当事者である由香は、この一件には一切関与していないのだ。

それで何か変化が起こるはずもない。

まあ、この試合に勝つことによって、あの木村がさらに本格的にアプローチを開始する程度のことはあるのかもしれないが。

けど、それだって、じゃあ負けたら完全に諦めるのかと思ったらそういうわけでもないだろう。

だったら、結局のところどうでもいいのだ、バスケの試合なんて。

(……ちえっ)

それがわかっているにもかかわらず、こうして余計なことまで考えてしまうのは、きっと直斗のヤツが珍しくこだわっているからだ。いずれにしても

俺の態度は決まっている。

試合では最善を尽くす。けど、それ以上の無茶はしない。

それが球技大会ってものだろう。

そしてふと、

(平和、だよな……)

と、そんなことを感じた。

こんなことで悩めるのは平穩であることの証なのだろう。

先々月の妖魔の一件以来、あつち側の事件は何も起きていない。

昨年は雪のこととか悪魔狩りのこととか色々あったから、こういう平穏な時間がよりいっそう大切なもののように思っていた。

(……嵐の前の静けさって言葉もあるかと。

冗談で思い浮かべたその言葉が、現状をこれ以上ないほど正確に表していたことなど、このときの俺には知る由もなかったのである。

2年目5月その2

前半終了の笛が鳴る。

「はあっ……」

額と首筋から汗が滴り落ちた。

いったんその場で息を整えてから、手にしていたボールを審判に渡して待機場所へ戻る。

「お疲れ様」

直斗がそんな俺たちを出迎えた。

「ここまで、なかなかいい感じじゃない？」

「……」

俺はその手からスポーツタオルを受け取って、その場に座り込むと、

「……負けてるけどな」

タオルで口元の汗を拭い、スコアボードへと視線を移した。

二十一、対、十六。

五点差でこちらが負けている。

相手の一年三組　木村はさすが全国大会でレギュラー張るだけのことではあった。前半は俺や斉藤ではなく、他の二人でマークに付いてもらう作戦だったが、相手が二人だろうと三人だろうと関係なく、アイツにボールが渡った時点でほぼ得点確定だった。

このままだと、後半に入ってもおそらく同じ展開になるだろう。

（後半は俺と斉藤の二人でマークに付くか……）

ただ、木村が一人突出しているとはいえ、あっちは他にも二人ほどそこそこいい動きをするやつがいる。それに引き換え、こっちは交代要員がないのが地味に効いてきた。この休憩時間を見てもフルで走り回った連中は斉藤以外喋る元気もないほどに疲れきっているようだし、そのうちの一人はもう、前半の途中から走っているの

か歩いているのかわからないような状態だ。

(さて、どうしたもんか……)

直斗が他の四人にタオルを渡しに行く。

そんな光景を眺めながら俺が今後の作戦について思考を巡らせていると、

「不知火先輩」

「ん？」

顔を上げると、敵陣から木村がバスケットボールを片手にやってきた。

まだ荒い呼吸をしている俺と違い、息はすでに整っていた。

(……そりゃ中学の三年間ずっと部活してたやつと比べてもな)

こっちの体力が劣っているのは当然のことだ。……ただ、向こうにそんなつもりはないのだとしても、余裕を見せられているようであまりいい気分はしなかった。

そんな俺の視線には気付いた様子もなく、木村は少し周りを見渡して、

「水月先輩は応援に来ていないんですか？」

「アイツは今頃卓球の試合中だ」

この学校は体育館とは別に卓球場があり、向こうもちょうど一回戦の真っ最中のはずだった。

「そうですか。残念です」

と、木村は本当に残念そうな顔をした。

「……この際だからはっきりさせておくが」

俺はほだけそうになっていたシューズの紐に手をかけながら、そんな木村の顔を見上げ、

「直斗はどうだか知らんが、俺はとりあえずお前の邪魔をする気なんてないからな」

「え？ あ、水月先輩のことですか？」

「他にないだろ」

木村は怪訝そうに眉を動かす。どうして俺が急にそんなことを言

い出したのかわからないという顔だった。

俺は紐を結び終わると、上半身を起こして壁を背中に預けて、「お前がこの試合に何を賭けてるのか知らんが、俺は正直、それに付き合ってるつもりもない。お前がアイツのことを好きなら勝手にすればいい。……とにかく、今回みたいなことに俺を巻き込まないでくれ」

「関係ないから、ですか？」

「そっだ」

「でしたら」

木村は急に真面目な顔をした。

「この試合、わざと負けてください」

「はあ？」

俺は思わず大きな口を開けてしまった。

「……お前、何にもわかってねーな。だからこの試合がどうだろうと」

だが、木村はそんな俺の言葉を遮って、

「先輩の言うように、僕はこの試合にあるものを賭けています。でも、先輩がこの試合に何も意味を感じていないのなら、わざと負けてくてもいいじゃないですか」

「それとこれとは話が別だろ」

「どうしてです？」

木村は少し強い口調だった。

「いいじゃないですか、球技大会の一試合ぐらい。今だって僕らが勝っていますし、こう言ったら怒られるかもしれませんが、僕らのほうが終始優勢だったと思います。……聞いてますよ。先輩は本来、こういうゲームに本気で取り組むのは好きじゃないらしいじゃないですか。でも、こないだは事前に練習までしてましたよね。それでやる気がないなんて信じられません」

「……」

雄弁な木村に俺が口を閉ざしていると、木村は少し口調を緩めて、

「すみません。別に不知火先輩が水月先輩のことをどう思っているかとか、そんなことを決め付けたりする気はないんです。でも、少なくとも僕の邪魔をするつもりがまったくないっていうのは嘘だと思いません。だったら」

そう言っつて小さく頭を下げる。

「先輩の本心はどうあれ、少しでもそういう気持ちがあるなら最後まで全力でやっってください。お願いします」

「……」

俺は壁に背を預けたまま、じつと木村を見上げた。

額に浮かぶ汗、愛想のよさそうな笑顔の奥に見える真剣な光。

(……わかんねーな)

どうしてそんなにも執着するのだろうか。

ああ、いや。

仕方がないのか。

俺や直斗の存在ってのは端から見れば、事実がどうであれ壁のように思えてしまうのだろう。今回は直斗があんな態度をとってしまったからなおのことだ。

それに、まあ、勝手にしろとは言つものの、そういった連中が気分よくアタックできるようにアイツと距離を置いとこうなんて、そんなつもりも今のところは俺にはない。

(……つまり後には引けないわけか)

不本意とはいえ、こうなつた以上は適当にお茶を濁してさようならというわけにはいかないのだろう。

俺は大きく息を吐くと、

「お前、結構言いたいこと言つやつなのな」

「最初からそういう性格ですよ、僕は」

「……わかつたわかつた」

そういつことなら、俺の流儀に則つてやらせてもらつことにしよう。

「さっきまでも別に手加減してたわけじゃないけどな。そこまで言

うんなら本当に全力で相手する。……後悔すんなよ」

「しませんよ。負けるつもりもないですし」

「生意気な」

木村は笑顔になった。

そんな楽しそうな顔を見ると、いつの間にか目的と手段が逆になっ
ているんじゃないだろうかと思えてくる。……スポーツマン
つてのはみんなこういうもんなのだろうか。

木村が去って、俺は斉藤たちメンバーのもとへ戻った。

「おい、斉藤」

「ん？」

さすがサッカー部だけあって、斉藤は他の三人よりは早く息が整
ったようだ。

俺は言った。

「作戦変更だ。後半は俺が一人で木村のマークにつく。点取りはお
前に任せた」

「お前一人で？ 本気か？」

驚いた顔の斉藤。

チラ、と、直斗が俺の顔を見る。

「冗談言っただって仕方ないだろ。見てな」

ピイイ、と笛が鳴った。

休憩時間が終わり、後半戦が始まる。

「後半はアイツに一点も入れさせない。上級生の威厳を見せ付けて
やろっじゃねーか」

そして 試合は後半戦に入った。

「……くっ！」

ボールがリズムカルに床を叩いている。

木村の顔には焦りが見えてきた。

その手の中にあるボールの動きを目で追いながら、一挙手一投足

に集中する。

前半は思い切りよくどんどん攻撃していた木村も、今は慎重に隙を探そうと油断なく視線を動かしていた。

俺がびつたりとマークにつくようになって、前半だけで十本近く決めていた木村のシュートは、後半終了間際になってもまだ一本も決まっていなかった。逆にこちらは斉藤が攻撃の主導権を握り、得点差はあつという間に詰まって逆転、今は三点差でリードしている。

残り時間は一分程度。

この攻撃を抑えればおそらく勝負は決するだろう。

「っ……先輩、まるで別人ですね……」

「お前がそうしろって言ったんだろ」

木村の息はかなり上がっていた。が、それにずっとくつついていた俺はそれほど苦しくはない。……当然だ。今の俺は人間の姿を保っている範囲で、人間の枠を超えた運動能力を開放しているのだから。

その身体能力の差はどうやら、木村と俺の技術の差を埋めるのに充分だったようだ。

「なんか、先輩は普通じゃない気がしてたんですよ、最初から……」

木村の手の中のバスケットボールが規則正しく床を叩く。

「水月先輩が好きになるのもわかる気がします」

「はあ？」

一瞬、気を取られた。

その瞬間、音のリズムが変わり木村の体が動く。

(こいつ)

わずかに反応が遅れた。

だが、その分を差し引いても、アドバンテージは俺のほうにある。

木村の体が右に流れた。

が、俺の目はそんな木村の動きの不自然さを冷静に捉えている。

(左か……)

フエイントだ。

俺があえて引つかかった振りをして右を抑える素振りを見せると、案の定、木村はすぐに反転して左へ動いた。

(……ん)

それに素早く反応する。
と。

(なるほど)

ダン！ と、ボールは勢いよく俺の股の間を抜けた。
してやったり、という顔をして木村が俺の横を駆け抜けていく。
が

「!?!」

木村の表情が固まった。

完全に抜いたと思ったのだろう。しかし、股の間を抜けたボールは、それを直前に予測し、体をひねって差し出した俺の右手の中にスッポリと収まっていた。

(これで)

駆け出す。

木村も慌てて足を止め、後を追ってきた。

クラスメイトの歓声。

木村の足音が俺に追いついてくることはない。

(……終わりだ)

迫りくるゴール。

あと三歩。

そこで踏み切り、手の中のボールを叩き込めばそれでゲームセットだ。

そこは誰もいない無人の道。

のはずだった。

「!?!」

右手から現れた突然の影。

(……なにっ!?)

木村ではない。

(こいつ　っ!)

咄嗟に名前が浮かばなかったが、それは先日木村と練習に来ていたうちの一人だった。

必死の顔で、俺のボールに手を伸ばしてくる。

「くっ……」

しかし間一髪、俺の右手を離れたボールは斜めに床を叩いて左手へと移動し、伸ばした一年生の手は空を切った。

そのまま床を蹴る。

それだけで俺の体は高く宙を舞い　　歓声。

慌てていて少し強く蹴りすぎたせいか、ゴールは目線と同じ高さだ。

(なら、このまま　)

手の中のボールをゴールに叩き込み、クラスメイトから歓声が上がった。

試合の後。

第二回戦を控えた俺たちが教室で待機していると、すでに敗退が決まって学生服に着替え終えた木村が俺のところに来てきた。

「……ずるいですよ。僕、先輩の引き立て役みたいになっちゃったじゃないですか」

不満そうな顔をして現れた木村に、俺はスポーツドリンクのペットボトルから口を離して、

「だから後悔するなよって言っただろ。……まあ、アレだ。俺は天才だからな」

「あんなに別人みたいになるなんて誰も思いませんよ。結局後半は

「一本も決めさせてもらえませんでしたし」

木村はそれでも妙に満足そうな顔だった。

「だから天才なんだよ」

本当はもつと具体的な理由があるのだが、もちろんそれは言えない。

木村は俺の言葉に笑って、

「だとすると、僕はどうやっても勝てない運命だったんですね」

「……気になってるんだが」

と、俺はそんな木村に何気なく尋ねてみた。

「お前、もしかしてひどい勘違いをしてないか？」

「勘違い、ですか？」

「ああ。……お前さ。さっきの試合中、由香のヤツが俺のことを好きだとか口走っただろ」

「ええ、言いましたけど」

「そもそも、その根拠はなんなんだ？」

俺は単純に、由香と仲の良い男子という理由で標的にされていると思っていたのだが、さっきのその発言からすると、どうやらそれだけではないように思えたのである。

すると木村は首をかしげて、

「だって水月先輩が毎日お弁当を作ってきてるって聞きましたから」

「……ちよつと待て」

そういえばこいつはさつきも、こういうゲームに本気で取り組むのは嫌いなはずだとかなんとか、しゃべってもいない俺の内面に踏み込んだ発言をしていた。

俺は少々疑いの目を向けて、

「どつから聞いたんだ、その話」

「あ、それは僕の友達の従兄が二年にいて、その人から。ほら、この前僕と一緒に体育館に練習に来た田辺の従兄です」

「ああ……」

田辺ってのは確か坊ちゃん刈りだったほうか。

俺は少々嫌な予感がしつつ、

「その従兄つてのは？」

「藤井さんつていうらしいです。知ってますか？」

「……知ってるよ」

嫌な予感は見事に的中していた。

(元凶はすべて将太の野郎か……)

しかし、なるほど。それなら木村が色々勘違いしているらしいことも納得できる。

……だいたいおかしいと思ったのだ。もともと木村に宣戦布告したのは直斗なのに、いつの間にか矛先が俺一人に向けて来ていたのだから。きつと将太のヤツが、あの田辺とかいう従弟を通していらんことを木村に吹き込んだのだろう。

俺はため息を吐きながら、

「いいか。お前が何を聞いたのかは知らんが、そいつの言うことはほとんどがデマだ。俺と由香は単なる昔なじみで、それ以上でも以下でもない。それが真実だ」

「お弁当は？」

「いや……それは本当だが、別に深い意味はない」
すると木村は笑って、

「好きでも相手の弁当をわざわざ作ってくる子はいないでしょ」

「あいつはそういうヤツなんだよ。それにたまに直斗の分だっ作ってくるしな」

「う、うーん……なんだか納得できませんけど。まあ、どちらにしても約束ですから、僕はこれ以上水月先輩に関わらないようにします」

殊勝な木村に、俺は天井を見上げて、

「そんな約束した覚えはないんだけどなあ」

「僕の中でそう決めていたの。……といつても、現時点じゃ脈がなさそうつてのが一番の理由なんですけどね」

そう言うってから、木村はふと思いついたように、

「でも水月先輩が卒業する頃になってもフリーだったら、またチャレンジするかもしれません」

「あー……それって結構ありそうな話だなあ」
思わず苦笑する。

「そうですか？」

「そういうやつだからな。ま、そのときは遠慮なくアタックでもなんでもすりゃいいさ。……ああ、それと」

話が終わって立ち去ろうとしていた木村を呼び止め、俺は尋ねた。
「お前のチームメイトのアイツ、名前、なんてったっけ？」

「田辺ですか？ 京介ですけど」

「じゃなくて。もう一人。さっきのゲームで最後に俺に食い下がってきたヤツだ」

「……ああ、唯依のことですか。香月唯依です」

女みたいな名前でしょ、と、木村は笑った。

「かつき、ゆい、か……」

その名前は先日も一度聞いていて、俺も確かに女みtainな名前だと思ったのだが、そんなことよりも

先ほどのゲームを思い出す。

木村からボールを奪ったとき、そいつは確か俺の記憶が正しければゴールに近い位置でパスを待っていたはずだ。だとすると最後の瞬間、あいつは俺や木村よりも遠い位置にしながら、ギリギリで俺に追いついてきたことになる。

もちろん俺はボールを持ってドリブルしているのだから、追いつかれること自体はありえないことじゃない。

普通の状態、であれば。

「……なあ木村。その香月ってヤツ、陸上かなんかやってたのか？」

「え？ あ、どうでしょう。聞いたことないですね。ただ、そういうキャラではないと思いますけど」

「そっか。……呼び止めて悪かったな」

「いえ、それじゃあ。色々騒がせちゃって申し訳ないです」

「ああ。じゃあまたな」

ペコリと頭を下げて木村が去っていく。

その背中を何気なく追っている、出口の辺りでちょうど戻ってきた由香と鉢合わせてしまったらしいのが見えた。

由香のアタフタした様子から視線を切って、俺は考え込む。

(……香月、唯依か)

その、会話もしたことはない一年のことが俺は少し気になっていて。

それが、俺がその事件のキーとなる後輩のことを認識した最初の瞬間だった。

2年目6月その1

「へえ、不思議だねー」

ソファに仰向けに寝転がって雑誌を読んでいた俺の耳に、ちよつと間延びしたぼやんとした声が聞こえてくる。

視線を向けると、こっちに尻を向け四つんばいになった歩がカーペットの上に新聞を広げていた。

俺は雑誌を脇に置いて上半身を起こす。

六月になってすぐの日曜日の朝。

梅雨に入って最近は何の日も多くなっていたが、今日は久々の青空だった。

俺は歩に問いかける。

「なんだ？ 毎朝のように新聞を広げて悦に浸っている奇妙な女子高生の記事でも載ってたか？」

歩は不思議そうにこちらを振り返って、

「それって私のこと？」

「他に誰がいるんだよ」

アクビをしながら時計を見ると時間は九時半。

今日はこれから 家で適当にダラダラと過ごす予定である。

「つつても、ま、お前は女子高生かどうかも微妙な生き物だが。…

…つか、お前、スカートでその体勢はやめれ」

「え？」

歩は四つんばいになった自分の体勢とスカートの裾の位置を確認して、

「見えてないよね？」

「まあ、そうだが」

ミニスカートじゃないから、そこからいきなりクラウチングスタートの体勢でもとらない限りパンツが見えることはないだろう。が、

「見えるとか見えないとかの問題じゃなくて、はしたないぞ」

「ふうん……？」

「いまいちピンと来ていなかったようだが、それでも歩は素直に腰を下ろしてペタンとカーペットの上に座り込んだ。」

「……あ、そんなことより。さっきの、奇妙な女子高生ってどういう意味ー？」

「そのまんまの意味だろ。毎朝欠かさず新聞に目を通すとか、お前はどこのビジネスマンだ」

すると歩は不満そうな顔をするでもなく、

「ダメだよ、優希お兄ちゃんも新聞ぐらいちゃんと読まないとー」

「番組欄以外興味ねーわ」

「自慢じゃないが俺はスポーツ欄すら滅多に目を通すことはない。」

俺にとつての新聞の価値は番組欄がほぼ十割を占めているのである。

「で？ なにが不思議だつて？」

「あ。あのね、今年の春からこの町の自首件数が急激に増えてるんだつて」

「自首件数？ なんだそりゃ」

「自首する人の数に決まってるよー」

「……俺を馬鹿にしてんのか」

もちろん俺が尋ねたのはそういう意味じゃない。

「お前、こないだの中間テストも全教科満点だったからって調子に乗ってんじゃねーぞ」

たはは、と歩は照れくさそうに笑って、

「違うよ。英語だけ九十九点だったから全部満点じゃ」

「……よし。“うめぼし”の刑だな」

“うめぼし”というのは両拳を相手のこめかみに当ててグリグリやるおしおきのこと、由香の母である梓さん直伝の技である。

「ええ！　なんでッ！？」

「問答無用！」

「わわっ……」

ソファから勢いよく立ち上がった俺に、歩が天敵を見つけた小動物のように逃げ出そうとする。

が、

「逃がすかッ！」

「きやうっ！」

俺はそんな歩の足首を捕らえ、後ろから抱え込むように羽交い絞めにした。

「ふふ、もう逃げられんぞ、この痴れ者が」

「わー！　やめてやめて！　お願いーッ！」

「思い知るがいい！　これが学年順位三桁の劣等性たちの怒りの拳

」

「きやああああっ！」

「……朝っぱらからなにやってんの」

と、そこへ脱衣所から、瑞希がタオルを頭に巻いた姿で現れた。

見るからに風呂上がり。

「毎日優雅に朝風呂とは贅沢なやつだ」

「いの一番に入った人がなに言ってるのよ」

瑞希はそのまま冷蔵庫に向かった。

「雪はまだ入ってるのか？」

「雪ちゃん、長いからね。あと十五分ぐらいかかるんじゃないかしら。歩。待ってても遅くなるから一緒に入ってきたら？」

ウチの風呂は三人となるとさすがに狭い。歩がこの家に来た当初は三人で入ったりもしていたようだが、最近はおっばら二人、あるいは一人ずつである。

「あ、うーん。私、見たいテレビがあるから後にしよっかなー」

「そ。別に急がなくてもいいけどね」

牛乳の入ったコップを片手に瑞希がリビングにやってきて、さっ

きまで俺が座っていたソファに腰を下ろす。

それに気を取られているうちに、歩がいつの間にか俺の腕から抜け出していた。

そしてふと、

「……………ん？」

先ほど歩が読んでいた新聞の記事が目に入る。

「なんだこりゃ」

俺はその場にあぐらをかき、新聞を手元に引き寄せた。

そこに書いてあったのは、先ほど歩が言っていたとおり、この町における犯罪の自首件数が飛躍的に伸びているという内容だ。

ただ、不思議なのは

そんな俺の動きに気付いた歩が、

「ね……………ね？　ちよつと不思議でしょ？」

「不思議っつーか……………万引きって自首とかするようなもんか、普通」

“自首”と聞いて俺は、ある程度凶悪な類の犯罪を想像していたのだが、その記事を見ると、むしろ万引きとか痴漢とか、そういった類の軽犯罪の自首件数が伸びているらしいのだ。

そもそも万引きなんてのは普通、その場で押さえられない限り捕まるようなもんじゃないだろう。

にもかかわらず、自首する人間が急激に増えているというのだ。

「自首するぐらいなら最初からやるなよって話だが……………」

「罪悪感に耐え切れなくなつたとかなのかなー」

歩が無警戒に近付いてきて、一緒に新聞の記事を覗き込む。

「罪悪感ねえ……………」

凶悪犯罪ならそういうのもわからなくはないが、万引き程度でそこまで罪悪感に苛まれたりするものなのだろうか。

なんとも理解しがたい話だった。

と、それはともかく。

「隙アリッ！」

「えっ！　わぁッ！　み、瑞希お姉ちゃん、助けてーッ！」

「……じゃれ合うのもほどほどにね」
と、瑞希はそんな俺たちに呆れ顔をした。

.....

「……遅くなっちゃったね、雪お姉ちゃん」
「そうだね」

その日、時間は夜の七時半を少し回った頃。
雪と歩の二人はデパートでの買い物済ませて家に帰る途中だった。

目当てはもちろん閉店間際に値引きされる生鮮食品類で、両手一杯というほどではなかったが、二人はそれぞれ一つずつ大きな買い物袋を手に入れている。

「優希お兄ちゃん、大丈夫かなあ」

「大丈夫って、なんのこと？」

「出かけ際、瑞希お姉ちゃんとまた口げんかしてたみたいだから」
その“大丈夫かなあ”はもちろん、彼が彼女にコテンパンにやられているんじゃないだろうかという心配である。

雪も当然それはわかっていて、

「瑞希ちゃんに勝てる子はそんなにいないからね。あ、でも腕相撲だったら優ちゃんでも勝てるんじゃないかな？」

「それで負けたらお兄ちゃん可愛そう……だけど」

「負けないとも限らない　　というようなニュアンスを残して、歩は可笑しそうに笑った。

そんな他愛のない話をしながら二人は大通りを外れ、住宅の並ぶ道へと入っていく。最近はかなり日が長くなってきていたが、それでもこのぐらいの時間になるとさすがに日は沈み、辺りもかなり暗くなって人通りもまばらだった。

そんな中、

「…………？」

雪が怪訝そうな顔をして立ち止まったのは、自宅まで五分程度のところまで来たときのことだ。

「どうしたの、お姉ちゃん？」

気付いた歩が不思議そうに振り返ると、

「…………どうしたんだろ」

「え？」

「ん…………うん。ちょっとね。不思議だったから」

「不思議？」

「不思議な感じなの」

「えっ？」

いまいちはずきりしない雪の回答に歩がさらにわからない顔をした、そのときだった。

パチツ。

「！」

彼女たちの視線の先、路地の中で、弾けたような音とともに微かな光が見えた。音も光も一瞬で、注意していなければ気付けなかったかもしれない。

だが、先にその不思議な気配に気付いていた雪はそれを見逃さなかった。

「…………お姉ちゃん」

「どうやら歩も気付いたらしい。」

「いるよ。歩ちゃん」

「悪魔さん？」

「そう。悪魔さん」

その言い方に雪はくすつと笑い、手にしていた買い物袋を歩に差し出して、

「危ないから歩ちゃんは先に帰ってて。私、様子を見てくるから」

「え、でも……」

「重い？」

「あ、ううん。そういうことじゃなくてー」

歩の心配そうな顔に気付いた雪は買物袋を地面の上に置くと、

「わかった。じゃあここで待っててね。……付いてきちゃダメだよ」

「あー」

背中に歩の戸惑ったような声を聞きながら、雪はそのまま路地のほうへ走っていった。

パチツ。

再び光る。

(電気　?)

幸い、その路地の中は周りの家からも死角になっているようだった。

そつと覗いてみると、中にいたのは二十歳ぐらいの青年。青ざめた顔で塀を背中に座り込んでいる。

そしてもう一人。

(……雷魔、かな)

そこに立っていたのは雪と同年ぐらいの少女だった。額には薄っすらと角のようなものが見え、悪魔の一番の特徴である大きく尖った耳も持っていた。

そして、

「死になさい」

「！」

雪はハツとする。

雷魔の少女が冷たい言葉を発するとともに、その手に白い発光体が産まれるのが見えた。

(いけない　！)

雪の髪が銀色に変色していく。

人から、悪魔の姿へと。

そして、

「やめなさい！」

「！」

雷魔の少女がハッと振り返った。怯えていた青年も同時に雪に気付いたが、混乱しているのか腰が抜けて立てないのか、自ら逃げようとする気配はない。

「下がってて」

雪はそう言って青年を庇うようにその前に歩み出た。

そして雷魔の少女を真っ直ぐに見据えると、

「あなたも、抑えが利かないの？」

「……なんの話？」

雷魔の少女は怪訝そうに眉をひそめて雪を見たが、やがてその銀色の髪と尖った耳に視線を止めると、

「あなた……私と同じ？」

少し困惑した表情でそう呟いた。

雪はその時点で、その目の前の少女が今まで相手にしてきた敵暴走悪魔とは少々違って悟る。

(この子、理性がある……?)

いわゆる“血の暴走”を起こした悪魔は、基本的に理性がほとんど残らない。人の言葉を話す者もないわけではないが、そのほとんどが支離滅裂で会話が成立することは稀だった。

だが、目の前の少女はそれらと比較して明らかに理性的だ。

(じゃあ、この子は私たちと同じような普通の悪魔……?)

雪がそんな考えを巡らせている間に、雷魔の少女も最初の驚きから脱したようつで、

「こんなところで私と同じような人に会えるなんて驚きだけ」と、雪の後ろに隠れた青年を睨みつける。

「邪魔をしないで。邪魔するならあなたも怪我をするわよ」

「どうして？」

話を通じる相手だと判断し、雪はいったん身構えるのをやめて口調を和らげた。

「どうしてあなたは人を襲ったりするの？」

「襲う？」

その言葉に、雷魔の少女は心外そうな顔をした。

「人を猛獣かなにかと勘違いしてるのかしら。別に襲っているわけじゃないわ」

「じゃあどうしてこの人を？」

「どうして？ ……悪いことをした人には罰が必要だからよ」

「罰？」

青年を振り返る。

「あ」

青年は何かを言おうとしていたがどうやら声が出せないらしい。ただ、何かを否定するようにブンブンと首を横に振っている。

「あら。反省が足りないみたいね」

パリツと音がして、雷魔の少女の体が再び帯電を始めた。そして細かい白い帯を纏った人差し指を青年に向けてと、

「そいつはね。自転車泥棒の常習犯なのよ」

「……自転車泥棒？」

雪は再び雷魔の少女に視線を戻した。

「そう。学校とか、店の前とか、自転車を盗んでは友達とかに安く売りつけるそうよ。……大したことじゃないと思うでしょうけど、盗まれたほうにしてみれば許せないことよね」

と、少女は嫌悪に満ちた視線を青年に向ける。

「あなたは軽い気持ちだったのかもしれないけど、犯罪は犯罪よ。

……ねえ？ 人の気持ちがわからないこんなクズは生きていても仕方ないと思わない？」

後半の言葉はどうやら雪に向けたものらしい。

雪は無言でもう一度背後の青年を見る。

青年は相変わらず言葉を出せない状態だったが、その態度を見て、
どうやら雷魔の少女の言葉は真実なのだろう　と、雪は思った。
だが

「そうだとしても、それで命を奪おうだなんて極端すぎるよ。命は
そんなに軽いものじゃない」

「……ああ」

雪の言葉に、雷魔の少女は気付いた顔を見ると、

「勘違いしないで。別に本気で殺すつもりだったわけじゃないのよ」
「え？」

「一度目は警告。その男を殺す気はなかったわ。今はまだ、ね」

そう言ってから、厳しい視線で再び青年を睨みつけると、

「ただ、同じことを繰り返すつもりなら次は保証しない　私は、
いつでも見ているわ」

バチンッ！

稲光が走る。

「ッー！」

雪は一瞬身構えたが、雷撃は雪の体を避け、青年の眼前に炸裂し
た。

「ひっー！」

青年がさらに後ずさる。

それを見た雷魔の少女は小さく鼻を鳴らして、

「もついいわ。……目障りだから消えなさい」

青年はビクツとして立ち上がり、足をもつれさせ、荒い息を吐き
ながらようやくその路地から逃げていった。

「……アイツは大丈夫そうね」

そんな青年の後姿を嘲るように見送って、雷魔の少女は満足そう
に雪を見ると、

「どう？　私のやり方、何か間違っているかしら？」

その口調には、自分が絶対に正しいと確信しているかのような響
きがあった。

「……………」
雪は口を閉ざす。

どうやらこの少女は、自らの利益や快樂のためではなく、あくまで社会的な悪を自らの手で裁くためにその力を行使しているようだった。

そのこと自体は、法律的にはともかく道徳的に批判することは少し難しい。

ただ

雪は黙って雷魔の少女を見つめた。

「……………」

戸惑ったような顔をする少女。

「間違つては……………」

雪は目を伏せた。体の力を抜く。魔力が鎮まり、髪が元の色に戻った。

「でも……………」

そうしてもう一度雷魔の少女を見つめると、瞳が揺れ、そこに微かに憂いの色が浮かぶ。

「ちよつと心配、かな」

「……………」

「ん。わからないけど……………」

雪は小さく首を傾げて、

「不安そうだったから」

「……………」

その言葉に、雷魔の少女の頬がピクリと動いた。

雪は続ける。

「それにね。この力は無闇に使っちゃいけないよ。……………」
力を持つってことは相応のリスクも一緒に抱えるってことなの。あなたがそうやって力を使い続けられれば、いつかきつと危険な目にも合うことになる」

「それって脅しのつもり？」

雷魔の少女はそう言って少し声を低くしたが、

「うっん。人生の先輩からのアドバイス」

「……私より年上には見えないけど」

「そう？ 私は年下に見えるよ？」

雪が少し笑って冗談っぽく言うと、雷魔の少女は拍子抜けしたような顔をした。

「……わからないわ。あなたがどういう人間なのか」

「そう、かな？ 自己紹介したほうがいい？」

「……ほんと、変わった子ね」

そんな雪の態度に、雷魔の少女は呆れたように息を吐く。

「とりあえずあなたの言葉は忠告として受け取っておくわ。……あなた自身は少なくとも悪い子じゃなさそうだし……」

「悪い人じゃないよ」

雪が微笑むと、雷魔の少女は初めて笑顔らしきものを浮かべた。

「事実がどうあれ、その笑顔を見ると騙されそうね。……でも」
目を閉じて、一瞬。

その視線は再び先ほどまでの厳しさを取り戻していた。

「私はやめないわよ。いつか、この町の悪人どもが私を恐れて悪さできなくなるまでね」

踵を返した少女の後姿が雪の視界から消えていく。

「……」

雪はそんな少女を黙って見送った。今の彼女にはそれを呼び止めるだけの理由が見つからなかったのだ。

そしてため息一つ。

雪は路地を出た。

すると、

「お姉ちゃん」

路地の入り口には歩が立っていて、両手に買い物袋を抱えていた。

「……ごめんね。待たせちゃって」

雪は彼女の手から買い物袋を一つ受け取ると、

「ずっと見てたの？」

「うん。「ごめんなさい」」

歩は正直にそう答えて、

「私、雪お姉ちゃんあの姿、初めて見た」

「怖かった？」

「うん。綺麗だったよ。なんかいつもよりすごく大人っぽい感じだった」

そんな歩の回答に、雪はくすつと笑って、

「ありがと、歩ちゃん。……じゃあ帰ろうか。優ちゃんも瑞希ちゃんもお腹空かせて待ってるよ、きつと」

「うんー」

空気を読んだのか、歩がその雷魔の少女のことを尋ねてくることはなく

「……」

雪は最後に一度だけその路地を振り返り、その顔に再び憂いの色を浮かべたのだった。

2年目6月その2

俺が神村さんに協力を申し出てからから四ヶ月が過ぎようとして
いる。

その間、彼女からの協力要請があったのは、例の暴走妖魔の事件
のときだけだ。

つい先日、雪が町中で雷魔らしき女と遭遇した件を報告したとき
も“こちらで確認します”といったきり、何の反応もない。

結局のところ、彼女は未だに俺が関わることをあまりよくは思っ
ていないようなのであるが、本当に協力が欲しいときにはまたあの
ときのように向こうから連絡をくれることだろう。

だから今はただ、そのときに備えるだけだ。

と、まあ。

そんなわけで、俺は今日も朝早くに家を出たのだった。

毎日同じ風景というのも少々退屈になってきていたので、今日は
いつも行っている神社方面とは逆方向　隣町のほうに足を向けて
みた。

時間は午前五時半。七時半には家に戻るとして、片道五十分、休
憩十分といったところか。

家の前で軽くストレッチをしてから走り出す。

ランニングは最初の五分ほどが一番苦しい。こんなんで最後まで
走りきれぬのかと毎朝不安になるのだが、これは十分を過ぎるあた
りから急に楽になってくる。

その後の耐久力についてはランニングを繰り返すごとに伸びてい
って、四ヶ月経った今では五十分走り続けてもまだ余裕を感じるほ
どになっていた。

線路沿いに走って約二駅分。

片道を走り終える頃、俺は隣町の一番大きな駅にまでたどり着いていた。

「ふう　　っ」

大きく息を吐き、駅前にある路線バスのベンチに腰を下ろす。

首にかけてタオルで汗を拭い、背を逸らして見上げた空は朝もやの中だった。

（こりゃ、今日も雨かな……）

空の明るさからしてすぐに降り出すことはなさそうだが、午後には雨になりそうな雰囲気だ。学校に行くときには忘れずに傘を持っていくとしよう。

とりあえず

俺は水分補給でもしようかと駅前に設置されている自販機へと向かったが、あいにく二つ並んだ自販機にはどちらも“故障中”の張り紙がしてあった。

しかたなく駅前を離れ、探すことにする。

こんな早い時間にこの辺りを歩くのは久々だった。すでに始発が動いているので無人というわけではなかったが、たまたま遊びに来る夕方の時間帯に比べると人の数はずっと少なく、店はまだどこも開いていない。

自販機はなかなか見つからなかった。

（この辺、確かコンビニがあったはずだが　　）

そうして辺りを見回して、ふと。

「……っしょ」

通り過ぎようとしていたアパートから出てきた、大きな袋を抱えた少年を見て俺は足を止める。

見覚えのある顔だった。

といっても友達とかじゃない。

どこか優しげな、悪く言えば頼りなさそうな雰囲気を全身に纏ったその少年は、両手で持っていた袋をアパート脇のゴミステーションに置いて、

「ふうっ……」

息を吐き、振り返る。

「よう」

「……うわっ」

目の前にいた俺の姿にまさに飛び上がりそうなほど驚いて、一歩、二歩と後ずさった。

「え、あ、あの」

そいつは一瞬、見知らぬ人間を見るような目で俺を見たが、やがて、

「あ、あれ？ あなたは確か」

思い出した顔をする。

俺は言った。

「お前、木村栄二の友達だろ。香月 唯依、だっけ？」

「あ、はい。確か、こないだの球技大会の」

「不知火だ。不知火優希」

「あ、どうも、お久しぶりです」

どうやら向こうも俺のことを覚えていたようだ。

香月唯依。風見学園の一年生で、こないだの球技大会で対戦した一年三組チームの一員だった後輩である。

「お前んち、ここなのか？」

アパートを指差して尋ねると、唯依は頷いて、

「はい、ここの最上階です。不知火先輩もこの辺なんですか？」

「いや、俺は隣町だ。学校から歩いて二十分ぐらいとこだ」

唯依は驚いた顔をして、

「えっ。じゃあどうして」

こんなところにいるのか、と、そう続けようとしたようだ、その後すぐに俺の格好に気付いたらしく、

「もしかしてジョギングですか？ 十キロ以上はありますよね？」

「ちょうど十キロぐらいじゃねーかな」

軽く走って五十分ならそんなもんだらう。

唯依は感心した様子で、

「走るの好きなんですか？」

「んなわけねーだろ」

「えっ」

「まあ、アレだ。有り余る若さの発散ってやつだ」

適当に返すと、唯依は困惑した表情で言葉に詰まってしまふ。

こうしてまともに会話するのは初めてだが、生真面目そうな第一印象だった。どうやら木村と違い、口の達者な性格ではなさそうだ。

俺は会話を切り上げることにして、

「ところでこの辺、どっかに自販機ないか？ 駅前の自販機、故障

しちまつてるみたいでな」

「あ、ええ。それなら」

と。

「唯依」

彼が通りの向こうを指差そうとしたところで、アパートから人が出てくる。

「袋一つ忘れてるわよ。燃やせないゴミは月二回しか収集ないんだから気をつけ あら？」

出てきたのは俺たちと同じ年ぐらいの少女だった。唯依よりは年長に見える。

「あつ。ごめん、亜矢」

「いいわ」

少女は俺たちの横を素通りし、ゴミ袋をゴミステーションに置いてすぐに戻ってくると、俺に向かって小さく頭を下げた。

「おはようございます。先輩」

「ん？先輩？」

「風見学園の一年生だろうか。俺には見覚えがない。」

「どこかで会ったことあったか？」

「少女は顔を上げて、

「初対面だけど知ってます。唯依の試合、見てましたからね」

「あー」

「ってことは唯依のクラスメイトかなにかだろうか。」

「と、思ったら、

「あ、えつと。先輩。彼女、僕の姉です」

「姉？」

「ということは、俺たちのように双子の姉弟ってことだろうか。」

しかし、俺は続いた少女の言葉にさらに混乱することになった。

「では改めて。はじめまして、先輩。――ノ瀬いちのせ亜矢あといます」

「は？」

「名字が

「自販機探しているんですよね？ それならせつかくですしウチに上がっていきませんか？ 麦茶ぐらい出しますよ。……あ、親はいませんので遠慮する必要はないですから」

困惑する俺に、少女 亜矢はそれを見通しているのか、あるいは天然なのか、マイペースにそう続けたのだった。

ほとんど面識のない後輩の家に、こんな平日の早朝に上がりこむってのはなかなか貴重なシチュエーションだった。

「どうぞ」

唯依が持ってきた麦茶を軽く礼を言って受け取り、失礼にならない程度に家の中を見回した。

アパートにしてはかなり広く、リビングの他に部屋が四つ。ただ、先ほど亜矢が言ったようにそのいずれにも人の気配はない。

親は共働きか何かでもう出て行ったのか。あるいは子供を残して旅行や出張に出ているのだろうか。

(……妙な家だな)

妙といえば、もう一つ。

香月に一ノ瀬。彼ら姉弟の名字が違う理由もまだ聞いていないのだが、部屋の前に掛けられた表札はそのどちらでもない“白河”しろかわという名字だった。

正直、意味不明だ。

「なんか……無理に上がってもらってすみません」

唯依は申し訳なさそうな顔で座った。

「いや。百十円浮いて助かった」

もらった麦茶を一気に飲み干して息を吐く。

時間を見ると六時半を少し回っていた。学校があるしあまり長居はできない。

「唯依。制服に着替えてきたら？」

と、リビングにある四つの扉のうちの一つが開いて、そこから風見学園高等部の女子用制服に身を包んだ亜矢が姿を見せた。

「あ、うん。……じゃあ不知火先輩」

「おう」

というか、喉も潤ったことだし俺もそろそろ退散すべきだろう。

そう思っ腰を上げようとすると、亜矢がすぐに、

「あ、麦茶、お代わり出しますよ」

「いや。俺はそろそろ」

「まあまあ、そう言わずに。ゆっくりしてってください」

亜矢は丁寧な、しかし有無を言わさぬ口調で空になったコップを持って台所へ向かう。

「ゆっくりだったって……」

時計を見る。

……あと十分ぐらいなら大丈夫か。

仕方なく、俺は上げかけた腰をじゅうたんの上に下ろした。

亜矢はすぐに戻ってくる。

「ところで先輩、知ってます？」

「ん？」

唐突に切り出されて彼女を見ると、

「先輩、あのバスケの試合以来ウチのクラスでは有名人ですよ。みんな目をキラキラさせながら先輩の話をしています」

「え？ マジか？」

「本当です」

……なんと。知らないところでいつの間にかそんなにも人気者になっただと。俺の下駄箱にラブレターが殺到する日も近いかもしれない。

だとすると、俺の下駄箱にラブレターが殺到する日も近いかもしれない。

なんて、ちょっと浮かれていた俺に、亜矢は意味ありげな笑みを浮かべた。

「キラキラさせてるのはみんな男子ですけどね」

「は？ 男子？」

「女子もごく一部はキヤーキヤー言ってるみたいですよ。主にボーイズラブ的な意味で」

「……おいまて！ どうしてそうなった！」

「あ、少し待ってください」

と、亜矢は脇に置いてあった学生カバンから一枚の紙を取り出す。

「これのせいです」

「なんだ、これ」

A3サイズの紙には一枚のイラストが描かれている。鉛筆画をコピーしたものだろうか。必要以上にキラキラした上半身裸で耽美な雰囲気の方がダンクシュートを決めている構図だった。

正直、男である俺の目から見ると少々　いや、かなり気持ち悪い。

亜矢はカバンを閉じながら、

「それ、球技大会のときの先輩です」

「名誉毀損だろッ！」

イラストをテーブルに叩きつける。少し皺ができてイラストの中の“俺”が気色悪い笑顔を浮かべたみたいになった。

「つか、髪型ぐらいしか共通点ねーよ、これ！」

「ど、どうしたんですか？」

俺の悲鳴を聞きつけたのか、着替え途中の唯依が慌てて部屋から出てくる。

「あ、そのイラストは　」

と、テーブルの上のイラストに視線を止めた。

亜矢が続けて、

「この絵のおかげで、実物見たことないのに先輩の大ファンって子も結構いますよ」

「ちっとも嬉しくねえッ！」

「気持ちわかりますが、仕方ないです」

亜矢は苦笑しながらイラストをクルクル丸めてゴミ箱に入れた。

「だって、直接先輩を見て描いたわけではないですから」

「そりゃな……」

モデルになつた記憶もない。

「というわけです。お願いがあります」

「……お願い？」

亜矢の言葉に、怪訝な顔で聞き返す。

この流れ。

無性に嫌な予感がした。

「私、美術部なんです」

「だから？」

聞き返した俺に、亜矢はまったく悪びれもせず答えた。

「今度は実際にモデルになってください。想像や記憶だけだとしても漫画みたいな絵になってしまつて上手く描けないんです、私」
「描いたのお前かああッ!!!」
「せ、先輩！ すみません、亜矢が失礼なことを　！」

大人しくて生真面目そうな弟と、ちよつとおかしな姉。

俺はまた、奇妙な連中と知り合いになつてしまつたようだったがこの六月の新しい出会いはこれだけでは終わらなかつたのである。

2年目6月その3

「一ノ瀬、亜矢？ ああ、新人生ね。ちょっと待ってな」

その日、最近では珍しく遅刻寸前に登校した俺は、一時間目の休み時間にその男のもとへと向かった。

その男とはもちろん、女生徒の情報を手に入れたときに一瞬だけ輝く男、藤井将太である。この男の存在価値はこの瞬間にのみ凝縮されていると言っても過言ではないだろう。

「ええつと、一ノ瀬、一ノ瀬……」

将太は女生徒の情報がぎゅちり詰まったメモ帳をペラペラやりながら、

「あつたあつた。一ノ瀬亜矢、風見学園高等部一年三組のクラス委員。かなりのしっかり者で責任感が強く、担任からの信頼も厚い」

「……ん？」

「出身中学は県外で美術部に所属。最初の間テストでは学園二十位に入った優等生だ。仲が良いのは同じクラスの」

「あー、ちよつと待った」

「んだよ」

途中で遮られて不服そうな将太に対し、俺は念のため確認することにした。

「一ノ瀬って、あれだぞ？ ポブカットで微妙に吊り目の」

「スレンダーでいかにも知的な感じの子だぜ？」

「……じゃあ間違いないか」

どうやら人違いではないようだ。

しかし

(……しっかり者のクラス委員？)

俺の印象とはだいぶ違っている。

(マイペースな変わり者って感じだったけど……)

あるいは、内と外でキャラが違うタイプなのだろうか。

「続けるぜ？ ……特に仲がいいのはクラスメイトの白河と狩部。

あとは香月って男子とも仲良らしい」

「ん？」

「……なんだよ」

「ああ、いや」

「またもや 今度は二つほど気になった。」

一つは、唯依と亜矢が姉弟だったことを将太が知らないらしいということ。女生徒のこととなれば同じクラスの連中より詳しく調べている男だ。そんなこいつが知らないということは、おそらく一般的にも知られていないのだろう。

まあ名字が違うし、自分から言わなければそうそうわかるものでもない。俺に簡単に明かしたことから考えて、特に隠しているわけじゃないと思うが 一応、俺の口からは言わないでおこう。

そしてもう一つ。

「なあ、将太。その白河って子は？」

その名字。

彼らのアパートの表札に書かれていたのと同じだった。

「白河か？ ええっと」

ページを一枚めくって、

「白河舞以。やっぱ一年三組の子だな。お嬢様系のロングヘアで実際に結構金持ちな家の娘らしい。性格はややマイペース。出身中学は県外で、弓道部所属。こっちも成績はそこそこ優秀」

「……ふうん」

今朝、彼らの家の中で見た四つの部屋が脳裏に蘇る。

俺は続けて尋ねた。

「狩部ってのは？」

「狩部真柚。これも三組で、ムードメーカー的な元気っ子だな。野球部のマネージャをやってて、これも成績優秀。出身中学はやっぱり県外」

「なるほどねえ……」

みな県外、つまりこの中等部から上がってきたわけではないということだ。

「なんだ？」

俺が考え込んでいるのを見て、将太はさすがに不審そうな顔をした。

「よくわからんが、香月って男子のことも教えてやるのか？」

「ん？ ああ、そいつはいいわ」

それに関しては、おそらくこいつより俺のほうが知っている。

「変なやつだな。……もしかしてアレか？ ついに同級生だけじゃ飽き足らず下級生にまで目を付けはじめたのか？」

「人聞き悪いな。そんなわけねーだろ」

将太は疑いの顔をして、

「ホントかあ？ お前、あの球技大会以来、一年の間で人気急上昇してるらしいじゃんか」

「……その話はやめてくれ」

あのイラストを思い出すたび、変な悪寒が背筋を駆け上ってくる。

だが、将太はそんな俺の内心に気付いた様子もなく、

「ま、いつか。うまくいったら俺にも一人ぐらい紹介してくれよな」
「」

と、親指を立ててみせる。

明らかに何か勘違いしたままのようだったが、ムキに否定するの
も馬鹿らしいので、

「うまくいったらな」

適当にあしらって自分の席へ戻ることにした。

六時間目まであっという間に過ぎ去って、帰りのホームルーム。

(しかし)

担任の岩上先生が眠くなりそうな声でどうでもいい連絡事項を淡々と喋っている。

俺は窓の外に目を向けながら考えていた。

(白河に狩部か……)

亜矢と仲が良いという女生徒二人。狩部はともかく、白河のほうはアパートの表札と一致しているなんて偶然にしちゃ出来すぎている。おそらくその女生徒もあの部屋の住人ということで間違いないだろう。

弓道部は早い時間に朝練があるから、俺が行ったときにはすでに登校した後だったということか。

(名字が違う三人、ねえ)

他人の家の事情に首を突っ込もうなんてそんな悪趣味は基本的には持ち合わせていないが、さすがにちょっと気になる話ではあった。(……っても、ウチだって名字三つあったっけか)

そう考えてみると、俺と唯依は似たような境遇だったりするのかもしれない。もし狩部ってのもあの部屋に住んでいるのだとしたら、男一人に女三人ってのも同じだ。

中身はだいぶ違っていきそうだが

ホームルームが終わって教室が騒ぎ出す。

今日は特に予定もないし、真っ直ぐに帰るつもりだったが。

「不知火くーん」

「ああ？」

教室の入り口付近にいたクラスメイトの男子がこっちに手を上げてている。

「一年の子が呼んでるよー」

「……一年？」

やはり嫌な予感がした。

というか、教室の外にすでにその少女の姿が見えている。

亜矢だ。

「こんにちは、不知火先輩」

「なんの用だ？」

背中に将太の視線が突き刺さってくるのを感じながら、俺は亜矢を連れて教室の外に出た。

「なんの用って、決まっているじゃないですか。今朝モデルのお願いしましたよね？　これから美術室に来てください」

「はあ？　いや、引き受けるなんて言ってるねーぞ」

俺がそう言うと、亜矢は足を止めてこちらを振り返る。

「引き受けてくれないんですか？」

「当たり前だろ。なんでそんな面倒っつーか、恥ずかしいことを

」

すると亜矢は困った顔をして、

「引き受けてくれないと、また妄想で描くことになっちゃいますけど……」

「おいッ！　脅迫じゃねーか！」

「いいえ」

と、亜矢は笑みを浮かべる。

「先輩には選択肢があります。これはれっきとした交渉ですよ」

「選択の余地がないのは選択肢じゃねーよ！」

「まあまあ」

憤る俺に、亜矢は軽く人差し指を振ってみせて、

「いいじゃないですか。私のような美少女に放課後誘われるなんて、一部のイケメンかハーレムアニメの主人公にだけ許される特権ですよ？　まあ先輩はどちらでもないですけど」

「……」

言いたいことを言って、誘導するように美術室へ向かう亜矢の後姿に、俺は言葉を返すこともできず

(しっかり者とか優等生ってどういう意味だっけ……)

もしかすると、俺の心の辞書を改訂する必要があるのかもしい。

夕日が射し込んできている。

グラウンドから聞こえてくる運動部の掛け声。

……今、何時だろうか。

時計を見ようとすると、即座に、

「あ、動かないでくださいね。もう少しで下描き終わりますから」
亜矢に制止された。

筆を軽快に動かしながら、俺とキャンバスを交互に睨みつけている。

「……あのよお」

「はい？」

会話はオツケーらしい。

「美術部、他に部員はいないのか？」

「三年生が四人いますよ。でも、あまり来ないですね」

「顧問は？」

「呼んだときだけ来ます。二人きりだからって変なことしようとしたら補導されますよ」

「するか　ッ」

「あ、動かないで！」

「っ……」

ピタリと固まった。……我ながら人のいいことだ。

独特の匂いが鼻をつく。

あんなイラストを描く女だから、モデルといってもまた妙な漫画絵を描くんじゃないかと思っていたが、意外にも油絵。しかも下描きの途中で少し見せてもらったが、今朝のイラストと同じ人間が描いたとは思えない忠実な人物画だった。

それに

「……」

視線だけを動かしてこつそりと亜矢の顔を盗み見ると、キャンバスに向ける目は真剣そのものだ。

オンオフの切り替えが上手い、とでも言えばいいのか。
今の彼女なら、将太のメモ帳の内容にも少しだけ頷くことができる。

やがて

「……よし、っと」

亜矢が満足そうな声を上げて筆を置く。

「先輩。もう動いてもいいですよ」

「ふう っ」

大きく息を吐いて肩を落とす。椅子に座って軽くポーズをとっていただけだが妙に疲れた。

時計を見ると、午後五時半を回っている。

まもなく下校の最終アウンスが流れる時間だ。

「お疲れ様です。なかなか優秀なモデルでしたよ」

「取ってつけたように言われても嬉しくねー」

「あら？先輩はツンデレですか？」

「……お前の頭にやずいぶん優秀な翻訳機能が付いてるらしいな」
「最新型ですし」

言いながら、亜矢は要領よくテキパキと器材を片付けていく。喋りながらも動きに無駄がない。それだけで彼女の頭の回転の速さが窺えた。

「……やれやれ」

手伝おうにも勝手がわからなかったので、俺は何気なく視線を外に向けた。

「どうやら運動部も徐々に引き上げつつあるようだ。」

「お前、電車か？」

「はい。あ、送っていただかなくても結構ですよ」

「言つてねーけど」

「そうですか？ いえ、一人であれば送って欲しいのですが、今日は妹たちと待ち合わせてるんです」

「妹？」

聞き返したところで

バタバタと廊下を走ってくる音。

バン！ と、美術室の扉が開く。

そして、

「亜矢ちゃんの寂しそうな気配を感じて飛んできましたーッ！」

入ってきたのは、頭の後ろに大きなお団子を結った女生徒だった。

「お疲れ、真袖。舞以はどうしたの？」

「えっ」

ドアを開いた体勢のまま、

「あ、あれ？ 亜矢ちゃん、なんかリアクション薄くない？」

どこか物足りなそうな顔をした。

入ってきたその女生徒 背丈こそ亜矢とそれほど変わらないが、顔の造りは彼女よりだいぶ幼く見える。真袖と呼んでいたから、彼女がおそらく将太の話にあった狩部真袖なのだろう。

「今日は別に寂しくないもの。……っっていうか、寂しいなんて言うたことないでしょ」

「えっ。だつていつも一人じゃ」

と、真袖の視線がようやく窓際にいた俺の姿を捉える。

「あれ？」

大きな目をさらに大きく見開いて、キョロキョロと部屋の中を見回した。

やがて、その視線は俺のもとへと戻ってきて、

「あ、こ、こんにちは。えっと、あのー……亜矢ちゃんのお友達ですか」

意外と礼儀正しい子だった。

「友達っつーか……」

「モデルを頼んだのよ。一応先輩だからうわべだけでも敬意を忘れずにね」

「お前の言葉からは敬意の欠片も感じられないんだが？」

「そんなことないですよ」

「棒読みじゃねーか！」

「……なんかよくわかんないけど、先輩で亜矢ちゃんの友達ってことでオーケー？」

真袖が困惑した顔をしている。

「……もうそれでいい」

なんだか疲れた。

これ以上面倒くさい話をしたくない。

と。

「まあ」

早々に退散しようかと思っていたところへ、もう一人現れた。猛烈に嫌な予感しかしない。

「亜矢さん。その方？」

そう言いながら美術室に入ってきたのは、背丈はやはり亜矢や真袖と同じぐらい。だが、見た目の雰囲気はどちらとも違って、どこか上品そうな立ち居振る舞いの　おそらくこれが白河舞以という女生徒なのだろう。

どこからどう見てもまともな女の子

「どこの野良を拾ってきたのです？　ペットが欲しいなら私に言うてくださればすぐにでも」

「……ありえねーよ、その発想ッ！」

騙された。いや、騙されてなかったけど、騙されそうになった。亜矢が冷静に返す。

「ペットじゃないわ、舞以。この人は絵のモデルよ」
「モデルですか？」

と、舞以はまじまじと俺の顔を見て、やがて納得したように頷いた。

「……まあ、よく見るとこの学園の生徒さんですね」

「よく見なくてもわかれよ……」

というか、今までなんだと思ってたんだ、こいつは。

「ところで亜矢さん。唯依さんは」

「唯依なら先に帰って晩御飯の支度を」

やがて、亜矢と舞以の二人は勝手に話を始めてしまった。

ため息を吐く。

ここはもう黙って退散してしまおう。

と。

「……あの」

真袖がちよこちよこことそばまでやってきた。

「なんかごめんなさい。いろいろ巻き込んだじゃったみたいで」

「……あー」

いきなりここに飛び込んできたときは何かと思ったが、どうやら蓋を開けてみるとこの真袖って子が一番まともそうである。

「私、狩部真袖。あなたは？」

「不知火優希。二年だ」

「優希先輩ね。なんだかよくわかんないけど、妹をよろしくお願ひします」

「妹？ ……なあ、さっき亜矢も同じこと言ってたが」

チラツと亜矢と舞以の二人を見る。

聞いていいものかと一瞬迷ったが、あっさり妹だと言っ辺り、やはり隠しているわけでもないのだろうと考えて、

「唯依も含めて四人、どういう関係だ？」

すると、真柚は予想通りためらうこともなく答えた。

「姉弟だよ。私が長女で、亜矢ちゃんが次女。舞以ちゃんが三女。唯依くんは末っ子長男」

「みんな同級生で？」

「あー、それはー……」

真柚はちよつと言いにくそうに苦笑して、

「みんな母親が違うの。なんてゆーか、だらしのない父親だったみたいで。名字はみんな母方だから……」

「……」

なるほど。

それなら全員の名字が違うというのも頷けるが

「だらしないつてレベルじゃねーな、それ……」

「返す言葉もございません……」

真柚がなぜか申し訳なさそうな顔をする。

「不知火先輩」

そこへ亜矢がやってきて、

「今日は本当にありがとうございます。舞以の失礼な発言は許してやってください」

「……お前のは許さなくていいのか？」

「なにがですか？」

「……こいつ。」

その後ろから舞以もやってくる。

「白河舞以と申します。以後、お見知りおきくださいね、不知火さん」

「ああ……」

どうやら俺のことは亜矢から聞いたらしい。

「それと白河家では忠実なペットを募集しておりますので、その気になったらいつでも」

「なんねーよ！ ありえねーよ！」

「残念です」

舞以はクスツと笑う。

どこまで本気なのかさっぱりわからない。

「ほ、ほら、舞以ちゃん、亜矢ちゃん。そろそろ帰らないと先生に怒られるよ」

「そうね。……じゃあ不知火先輩」

と、亜矢がペコリと頭を下げる。

「明日も、よろしくお願いしますね」

「……明日？」

「はい。絵の完成には一週間ぐらいかかると思いますので」

「……」

「では、また」

亜矢、舞以の順で教室を出て行く。

最後に真袖が苦笑しつつも俺に頭を下げて

どうやら俺はもうしばらく、あの奇妙な姉妹に翻弄されなければならぬようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5484w/>

双子兄妹の怠惰な悪魔学園記

2011年12月7日01時46分発行